

大阪大学大学院文学研究科

年報 2022

教育・研究 (2020-2021 年度)

大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

表紙解説

中井竹山筆「懷徳堂定書」

大阪大学懷徳堂文庫蔵

三〇・七×六六・四センチ

享保九年（一七二四）、大坂の有力町人によって創設された学問所懷徳堂は、江戸時代の後半、約百四十年間にわたって、日本近世の学術史と商道德の形成に大きな影響を与えた。大阪大学は、この懷徳堂を精神的源流と位置づけ、現在、文学研究科が（財）懷徳堂記念会と協力して、資料調査や公開講座の開催など、各種の社会教育活動を推進している。

本資料は、その懷徳堂の貴重資料の一つである。懷徳堂内に寄宿していた書生の生活態度について、第四代学主の中井竹山が安永七年（一七七八）に定めた規定である。毎月、五と十の付く休日に、寄宿生を講堂に集め、読み聴かせるのがきまりであったという。「箕踞偃臥」「無益の雑談」「昼寝宵寝」などを禁ずる一方、「手跡・算術・詩作・訳文」「和訳の軍書」「近代の記録物」など広範な学芸領域に関心を持つよう勸奨している。

同じく中井竹山が宝暦八年（一七五八）に掲げた「書生の交わりは貴賤・貧富を論ぜず同輩たるべき事」という開明的な懷徳堂の基本精神を受け継ぎ、総じて、学生相互の自律・自助を勧める内容となっている。

〔釈文〕

定

- 一 書生の面々互に申合せ行儀正敷相守り仮初にも箕踞偃臥等致す間布き事
 - 一 学談雅談の外、無益の雑談相い慎み、場所柄不相応の俗談、堅く停止と為すべき事
 - 一 当病持病等の子細も之が分無く昼寝宵寝は堅く無用と為すべき事
 - 一 本業出精の暇には、手跡・算術・詩作・訳文等、銘々の分相応に心懸け候て、間断之れ有る間布き事
 - 一 休日其の外閑暇の節に、和訳の軍書并に近代の記録物等心懸け読み申すべき事
 - 一 碁象棋謡等は世の交り并に学業退屈の氣を転じ候為に兼ねて差免じ之有り候へども休日の外は昼迄の内右様の雑芸に懸り候儀、無用と為すべき事
 - 一 銘々行届き申さざる事は、同輩の内より互に心を添へ切磋有るべきの事
 - 一 人の切磋を受け、却つて立腹など致し候はば、傍人より早々その段、申し出るべき事
- 以上
- 安永七年戊ノ六月

年報2022

目次

大阪大学大学院文学研究科『年報 2022』の刊行に寄せて	三谷研爾	1
大阪大学大学院文学研究科『年報 2022』発刊の趣旨	評価・広報室	2

第1部 大阪大学大学院文学研究科および文学部における教育・研究活動の概要

1-1	学部・大学院の教育活動	4
1-2	教育・研究の支援体制	8
	研究推進室	8
	評価・広報室	11
	教育支援室	16
	国際連携室	20
1-3	国際交流活動	25
1-4	外部資金の導入	28
1-5	エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）	30
1-6	グローバル・ジャパン・スタディーズ	31
1-7	グローバルヒストリー	34
1-8	「微の上を鳥が飛ぶ」文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム	36
1-9	国際共同研究力向上推進プログラム	40
1-10	教育ゆめ基金調査研究助成制度	41
1-11	懐徳堂研究センターの活動	43
1-12	埋蔵文化財調査室の活動	45
1-13	ハラスメント問題委員会の活動	48

第2部 各専門分野・コースにおける教育・研究活動の概要

2-1	哲学哲学史	53
2-2	現代思想文化学	69
2-3	臨床哲学	79
2-4	中国哲学	90
2-5	インド学・仏教学	99
2-6	日本学	107
2-7	日本史学	122
2-8	東洋史学	147
2-9	西洋史学	161
2-10	考古学	182
2-11	人文地理学	194

2-12	日本文学	204
2-13	比較文学	221
2-14	中国文学	233
2-15	国語学	242
2-16	英米文学	254
2-17	ドイツ文学	266
2-18	フランス文学	274
2-19	英語学	286
2-20	日本語学	295
2-21	美学・文芸学	310
2-22	音楽学・演劇学	323
2-23	美術史学	348
2-24	共生文明論	365
2-25	アート・メディア論	374
2-26	文学環境論	389
2-27	言語生態論	400
2-28	留学生専門教育	408
2-29	国際交流センター	410
	編集後記	416

大阪大学大学院文学研究科 『年報2022』の刊行に寄せて

大阪大学大学院文学研究科として『年報』をお届けするのは、今回が最後となります。2022年4月、文学研究科は言語文化研究科と統合し、あらたに人文学研究科としてスタートを切りました。この組織再編は、学内に分散していた人文学の研究・教育リソースを集約することで、大阪大学における人文・社会科学のプレゼンスをさらに強化することを企図したものです。人文学研究科への移行とともにこの『年報』もまた、新組織での取り組みを伝えるにふさわしいスタイルに生まれ変わる予定です。

本巻は2020年度および21年度の私たちの研究・教育活動を概観するものですが、この2年間は上記の研究科統合の準備期間でもありました。研究科の教職員はみな通常の業務に加えて、かつてない根本的な組織・制度改変の多大な作業に従事することになったのです。他方、2020年初頭から始まった新型コロナウイルス感染症の流行は私たちの教育現場をも直撃し、授業の形態はもちろん、学会や研究集会の開催から海外留学や調査旅行にいたるまで、教員・学生の活動そのものがきわめて大きな制約を受けたことは、言うまでもありません。さらに2022年2月にロシアがウクライナ侵攻して以来、国際的な政治・経済情勢もまたいちじるしく変化しました。戦争終結の糸口が見えないまま緊張した状況がいままも続くなか、人間の存在・社会・文化のありようが、あらためて根底から問われています。このように振り返ると、過去2年にわたって私たちは内外ともに大きな歴史的変動の波に翻弄され、現在まさにその渦中にあると痛感せざるをえません。にもかかわらず、従来とかわらない研究・教育の水準を維持できたことは、私たちの誇りとするところです。

『年報』というかたちで文学研究科の研究・教育活動について公表するようになったのは2002年度からですので、すでに20年以上が経過しました。それは研究室単位になりがちな私たちの活動を、研究科トータルの次元で可視化することで、現状分析と将来展望の基盤データとして共有し、かつ発信する機能を果たしてきたといえます。つまり、研究科として正確な自己理解を得ることを通して、社会にたいする責務をも明確にするという二重の働きを有しているわけです。人文学が学知としての社会的役割を引き受けている以上、スタイルがどのように変化しようとも、その全体像をつねに確かめるための媒体は今後とも不可欠です。

この種の自己評価作業は、ともすれば新規目標の設定とその成果確認という定量的アセスメントにもっぱら目を奪われがちですが、それだけでは基礎学たる人文学の特性を十分にとらえることはできません。むしろ、恒常的活動の定性的アセスメントとその社会的発信こそが必須です。人文学は、まさに自身の存在を証し立てるために、この課題に積極的に取り組んでいかなければなりません。しかし同時に日本社会全体が、基礎学と応用学とともに包摂する長期的な視野から、学知というものをより深く理解し、位置づけていく必要もあります。

オーバープランニングとオーバーアナリシスの弊に陥ることなく、つねに自己のあり方への問いかけを失わないことこそ、人文学が具現するべき姿です。あらたに発足した人文学研究科にあっても、そうした理想的な姿を求めつつ研究・教育に取り組んでいきたいと思えます。

2023年3月

前文学研究科長・文学部長 三谷 研爾

大阪大学大学院文学研究科 『年報2022』 発刊の趣旨

大阪大学大学院文学研究科 評価・広報室

『年報2022』は、2020年度・2021年度の2年間における、大阪大学大学院文学研究科および文学部の研究・教育活動をまとめた冊子である。本書は、研究科と学部における活動実績について、客観的なデータを集めている。そのため点検や評価、また今後の改革にあたっての基礎資料としての意味を持つ。

本書は『年報』としては11冊目、継続的なデータ蓄積の期間としては24～25年目にあたる。また、文学研究科は2022年度から、人文学研究科へと改組されたため、この『年報2022』が、文学研究科単独としては、最後の年報になる。もちろん来年度以降、人文学研究科としても『年報』は作られる予定である。内容の多くも引き継がれる。しかし形式は異なるものになるはずである。

本書の構成は、これまで通り二部構成である。

第1部「大阪大学大学院文学研究科および文学部における教育・研究活動の概要」では、研究科と学部の教育および研究活動の全般に関わる事項を報告している。

第2部「専門分野・コースにおける教育・研究活動の概要」では、より細部にわたって、各専門分野・コースの教育・研究活動について、その特色、所定の項目ごとのデータ、および各専門分野・コースによる自己評価を提示している。

このような資料は、これまでのデータと比較する上で、連続性を保つことが重要である。そのため上記の構成はもとより、データ収集の範囲や方法等についても、基本的には前号以前のを踏襲している。

なお、この年報は『年報2016』以来、冊子体による発行から、電子ファイルによる公開に重心を移している。『年報』のようなデータ集では、必要な個所に限った閲覧や、過去のデータとの比較対照などの面で、電子データ化の利点は大きい。ここ数年における実際の活用にあたっては、冊子体よりも利用の便が良いという感触を得ている。ゆえに『年報』は、冊子体で発行していた時期のものも含めて、全号についてpdfファイル化したものを文学研究科のウェブサイトを通して公開している。過去のデータなども併せてご参照願いたい。

『年報2022』の内容上の大きな特徴は、新型コロナウイルス感染症の流行という、かつてないほどの混乱による影響が、そこかしこに見受けられることである。この影響がいつまで続くのか、現段階で見通すことはできない。また、そのような社会の変容だけでなく、大阪大学全体の方針の改変によって、新たに盛りこむべき項目や、以前ほど重視されなくなった指標も生まれつつある。新しい『年報』では、必要な項目を継続することは当然であるが、部分的には改定したり、整理したりすることになるだろう。本書が、その判断の根拠となる現実認識の機会になることを願っている。忌憚のないご意見をいただければ幸いである。

評価・広報室長 斎藤 理生

第 1 部

大阪大学大学院文学研究科および文学部 における教育・研究活動の概要

* コメントは、原則として2020年度および2021年度のデータに関するものであるが、『年報2020』に掲載されたそれ以前のデータも、参考のため提示しておいた。なお数値は原則として各年度5月1日のものである。

教育活動の基礎的データ

1. 大学院の教育活動

1-1. 大学院博士前期・修士課程入学者

博士前期課程（定員75名）の入学者数は、2014年度に定員割れとなり、2015年度は定員を満たしたが、2016年度から2018年度は再び定員割れとなった。2019年度には持ち直していたが、2020年度には再び定員割れを起し、2021年度にはまた持ち直している。充足率が安定しているとは言いがたいが、ある程度の学生数は確保してきていると思われる。一方、修士課程（定員19名）の入学者数は、2014年度以降一度も定員を満たしてはいない。2022年度からは大学院改組に伴い、修士課程は廃止となる。この改組により、定員充足率の改善が期待される場所である。近年の入試ではあきらかに外国人の志願者に依存する傾向が強まっている。内部進学をうながすとともに、意欲のある留学生および社会人にとっても魅力のあるサポート体制の充実をはかる。

表 1-1-1 大学院(博士前期・修士課程)入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2014	47・8	3・3	12・1	62・12
2015	58・9	5・1	14・1	77・11
2016	43・9	2・1	23・1	68・11
2017	51・8	2・1	11・6	64・15
2018	37・12	1・1	19・2	57・15
2019	60・6	7・2	21・3	88・11
2020	49・14	3・2	18・1	70・17
2021	51・8	3・2	24・3	78・13

1-2. 大学院博士前期・修士課程学生

学生総数は、文化動態論専攻設置2年目の2009年度以降、200名を切ることはなかったが、2015年度は198名となった。2016年度は200名以上へと戻したものの、2017年度から2019年度までは再び200名を切った。その後、2020年度と2021年度は再び200名を超えている。休学者数と留年者数の合計の学生総数に対する割合は、2018年度は博士前期課程21%、修士課程29%、2019年度は同20%、35%、2020年度は博士前期課程14%、修士課程44%、2021年度は同26%、32%となっている。

表 1-1-2 大学院(博士前期・修士課程)の学生数、休学者数、留年者数、修了者数

年度	学生数	休学者数	留年者数	修了者数
2014	164・42	23・7	28・13	72・17
2015	164・34	13・8	26・10	61・13
2016	170・32	18・4	20・5	71・10
2017	158・36	20・6	26・10	70・12

2018	142・37	9・4	22・7	64・15
2019	164・31	12・6	21・5	56・10
2020	170・38	10・7	14・10	61・10
2021	182・40	14・3	34・10	69・16

1-3. 大学院博士後期課程入学者

大学院博士後期課程の入学者（定員 41 名）は、2014 年度・2015 年度は定員を満了したが、その後は定員を割り込んでいる。社会人の入学状況については、ここ 10 年ほどは 3 名前後で安定している。外国人入学者数は、5 名から 11 名の間で推移している。大学教員ポストが減少している昨今、博士後期課程を取り巻く状況は厳しく、今後も絶えず定員割れの危険性がある。本研究科だけの努力では如何ともしがたい部分があるが、これまで以上の努力が必要である。

表 1-1-3 大学院(後期課程)の入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2014	31	1	10	42
2015	28	4	9	41
2016	29	1	5	35
2017	24	4	8	36
2018	17	6	11	34
2019	24	3	9	36
2020	23	4	10	37
2021	17	2	7	26

1-4. 大学院博士後期課程学生

博士後期課程学生数は、減少傾向が認められる。休学者数についてはやや減少傾向が認められるものの、退学者数は増加傾向にある。休学者数は、学生数に対して 2020 年度 25%、2021 年度 23%と高めの水準で推移しており、退学者数は、学生数に対して 2020 年度 18%、2021 年度 17%となっている。2020 年度から 2021 年度にかけても、学生数の減少にともない、学位論文の提出数もまた低調である。人文科学という研究分野の性格を考慮しながら、学生自身の研究能力の向上や教員の指導、研究環境の整備などの要因を探るとともに、課程修了後の身分・行き先の確保という深刻な問題をどのようにするのか、継続的に検討する必要がある。

表 1-1-4 大学院(後期課程)の学生数、休学者数、学位論文提出者数、退学者数

年度	学生数	休学者数	学位論文提出者数*	退学者数
2014	202	66	27(14)	29
2015	198	57	29(17)	25
2016	198	56	29(10)	25
2017	186	49	34(14)	23
2018	176	33	23(8)	25
2019	178	42	24(6)	22
2020	180	46	22(9)	33
2021	173	41	15(3)	30

(注)退学者には単位修得退学者をふくむ。*()内は単位修得退学者の論文提出数で内数。

1-5. 大学院研究生

研究生数は2007年度まで20名以上であったが、2008年度以降、10名台、年によっては10名を割るまでになった。かつては研究生のうちの大半が日本人であったが（2004年度では日本人20名、留学生2名、2005年度では同じく21名、2名）、日本人研究生の減少とともに留学生の比率が上昇し、年によっては日本人研究生を上回るようになり、近年は留学生の方が多くことが常態化している。2019年度以降、研究生の数が減少しているが、コロナの影響などもあって留学生の数が減ったことに起因する。研究生は院生予備軍としての性格が強いが、今後、研究生をどのように教育していくべきか検討する必要がある。

表 1-1-5 大学院研究生数

年度	日本人	留学生	計
2014	8	5	13
2015	3	8	11
2016	3	7	10
2017	3	7	10
2018	6	6	12
2019	2	2	4
2020	2	4	6
2021	1	4	5

2. 学部の教育活動

2-1. 学部入学者

一般入試による入学者の数は、2013年度までは例年定員(前期日程125名、後期日程40名、計165名)を5~10名程度上回る数で推移していたが、2014年度・2015年度は170名を切り、2016年度も同様であった。2017年度は世界適塾AO入試が導入されるとともに後期日程が廃止され、一般入試の定員が135名となった。一般入試の入学者数151名は定員を16名上回っているが、これはAO入試の入学者数が定員30名に対して21名にとどまり、その不足分を補うためであった。その後AO入試の認知度が上がり、以降は定員を充足することができている。一般入試での入学者が2021年度に減少しているが、これはコロナの影響で遠方の合格者が近くの私立大学に進学することを決めて辞退したものが多かったためである。外国人入学者は、2004・2005の両年度は0名であったが、2006年度以降は毎年入学者があり、近年はその数を増しつつある。入試倍率(定員/志願者)で見ると2018年度は3.2倍、2019年度は2.8倍、2020年度は2.9倍、2021年度は3.1倍と、近年は安定して3倍前後となっている。近年また私費留学生志願者が増えており、2016年以降、私費留学性の枠での入学者は10名程度で安定している。

表 1-2-1 学部入学者数

年度	一般	AO	外国人	計
2014	165		7	172
2015	169		4	173
2016	165		9	174
2017	151	21	8	180
2018	134	30	11	175
2019	138	30	10	178
2020	135	30	10	175
2021	130	30	7	167

2-2. 学部学生

学生数・卒業生数は2014年度・2015年度にやや減少したが、2016年度から2020年度にかけてはそれ以前の水準に戻した。2021年度に学生数が減少しているのは、前年に卒業者が増えたことおよび入学者数が少し減った(コロナの影響で入学辞退者が増えた)ことに帰因している。留年者数は減少しつつあるものの、休学者数については依然30名台が続いている。定員管理にもかかわる問題なので、学部生の学習生活面でのサポート体制の強化が必要となっている。

表 1-2-2 学部の学生数、休学者数、留年者数、卒業生数

年度	学生数	休学者数	留年者数	卒業生数
2014	756	36	63	166
2015	768	36	70	165
2016	776	33	69	181
2017	778	30	61	171
2018	772	24	62	171
2019	788	33	74	159
2020	780	34	69	184
2021	754	31	59	181

2-3. 学部研究生

研究生の総数は、20名台で推移していたものの、2016年度から2019年度にかけては減少傾向が見られた。2020年度、2021年度は再び増加しており、以前の水準に戻ってきている。日本人と留学生の比率については、近年留学生の割合が非常に高くなっている。学部研究生の総数は安定しているが、日本人研究生の数は少なく、外国人がほとんどである。これは、研究生であることが、留学生の大学院入試の条件となっているためである。外国人研究生が、日本語講習などあらゆる機会を利用して、大学院入試までに実力を高めて合格できるよう、今後も細やかな情報提供を継続していくことが望ましい。

表 1-2-3 学部研究生数

年度	日本人	留学生	計
2014	5	18	23
2015	5	21	26
2016	2	17	19
2017	2	18	20
2018	1	16	17
2019	3	16	19
2020	1	27	28
2021	2	23	25

(岡田 禎之、データ提供：教務係)

研究推進室

組織・体制

研究推進室は、文学研究科の学生・教員の研究活動を推進するために、さまざまな形で研究環境の整備や研究遂行の支援を行う組織である。室員は文学研究科の教職員からなり、室長、副室長は、総務委員会の議を経て、研究科長が委嘱する。室には部門を置き、室長が委嘱した部門チーフを中心に、それぞれ管掌する業務を実務的に進めた。

2014年度までは科研・共同研究部門、図書管理部門、紀要・論叢部門、懐徳堂部門の4部門が室業務を分掌したが、2015年度、若手研究者支援を強化すべく、あらたに若手支援部門を単独で立ち上げるとともに、図書管理部門、紀要・論叢部門の業務を統合継承する形で図書部門を設けた。この結果、研究推進室の業務は、科研・共同研究部門、若手支援部門、図書部門、懐徳堂部門の4部門が担う体制となった。2020年度、2021年度の室業務も、この体制を受け継ぐ形で行われた。

室の活動は、構成員全員が参加する室会議において、必要事項を協議するとともに、各部門が担当する業務について状況を報告し、室員間の情報共有をはかりながら行った。室会議は、従前までは原則として教授会開催日の午後に対面形式で行っていたが、今期は全学の「新型コロナウイルス感染症拡大防止対応」に基づき、すべてメール審議の形で行わざるを得なかった。室会議前に行う実務会議（正副室長、教務職員、事務補佐員が出席して、室会議の議題整理と室業務執行状況の確認を行う）も基本的にはメールにより行った。このほか、大阪大学教員出版支援制度の推薦論文選考など特命的な事項については、その都度委員会やワーキンググループを設置して対応したが、これらもメール審議かオンライン形式の会議等で行った。なお、上記「新型コロナウイルス感染症拡大防止対応」に関しては、他にも教務職員・事務補佐員の在宅勤務ないし交代勤務、本館1階の研究推進室・学生自習室の閉室ないし利用時間制限などの措置を必要に応じて講じ、感染症拡大防止に務めた。

活動状況

近年、若手研究者支援、競争的資金獲得および研究公正化等にかかわる業務が急増しており、本室としてもさまざまな新規案件への迅速な対応を迫られている。2020～2021年度に各部門が担当した主要な業務及び活動状況は以下の通りである。

<2020・2021年度>

1. 科研・共同研究部門

- 1) 科研費その他の研究助成金等に関する公募情報の収集・提供および応募の支援に関すること
 - ・情報収集を定期的に行い、教員メーリングリスト等を通じて提供するとともに、各種研究助成プログラムが一覧できるリストを作成して文学研究科のHPに掲載した。
 - ・科研費の応募に関するセミナーを開催するとともに、申請書類のチェックを実施し、採択率の向上を図った。採択状況は次表の通り。

年度	新規課題			新規課題+継続課題	
	申請件数	採択件数	採択率(%)	交付件数	交付総額(円)
2020	55	31	56.4	87	130,600,000
2021	42	22	52.4	84	118,000,000

- 2) 教員・研究員の公募情報の収集・提供に関すること
 - ・情報収集を定期的に行い、教員メーリングリスト等を通じて提供した。

3)その他

- ・国際性の醸成と研究力の強化に特化した形で「人文学クラスター」を継承する「国際共同研究力向上推進プログラム」の募集を行った。2020年度の採択は継続1件(2019年度～2020年度)、2021年度の採択は新規1件(～2022年度)。

2. 若手支援部門

1) 独立行政法人日本学術振興会特別研究員の申請書作成等の補助に関すること

- ・日本学術振興会特別研究員の応募にあたって、「若手研究者向けセミナー」を開催するとともに、申請書類のチェックを実施した。2021年度採用(2020年度応募)分は申請者45名、採用者12名、採用率は26.7%、2022年度採用分は申請者42名、採用者9名、採用率は21%であった。

2) 若手研究者等の招へい研究員資格審査に関すること

- ・若手研究者の科研費応募の機会を確保するため、「若手研究者等への招へい研究員資格付与の審査」を、科研研究活動スタート支援応募時を含め、年2回行った。

3) 大学院学生の調査研究、成果発表等の支援に関すること

- ・若手研究者による研究成果の世界的な発信を奨励・支援するために、2020年度は選定した7件、2021年度は4件に対して、「外国語論文発表補助」(外国語による論文や口頭発表原稿のネイティブチェック費用の補助)を行った。
- ・大学院学生を対象として研究科で創設した「教育ゆめ基金調査研究補助」の助成者の選考を行い、2020年度は海外2件(ただし1件の実施は2021年度に変更)、2021年度は国内6件、の補助を実施した。

4)その他

- ・日本学術振興会賞、日本学術振興会育志賞の選考・推薦を行った。

3. 図書部門

1) 文学研究科共同施設「学生自習室」の管理・運営および同室設置図書・機器の充実に関すること

- ・学生自習室と書庫の防カビ・防虫対策として、自習室に除湿器3台、書庫にサーキュレーター2台を設置し、24時間稼働させ、適切な運営に務めた。

2) 文学研究科の図書利用についての附属図書館との連絡・調整に関すること

- ・附属図書館から依頼のあった各種調書の各専門分野・コース等への連絡・調整を行うとともに、研究科内図書業務を遂行し、雑誌・図書の利用を支援した。

3) 文学研究科「貴重資料室」の管理・運営に関すること

- ・収蔵資料の閲覧、特別利用などへの対応を含めて、同室の日常的な管理・運営に務めた。

4) 『大阪大学大学院文学研究科紀要』『待兼山論叢』の編集・発行に関すること

- ・2020年度は『大阪大学大学院文学研究科紀要』第61巻及び『待兼山論叢』第54号、2021年度は『大阪大学大学院文学研究科紀要』第62巻及び『待兼山論叢』第55号を刊行した。

5) 文学研究科の刊行物に関連する諸問題の処理に関すること

- ・定期的に著作権関連の研究会に参加して情報収集を行い、研究科刊行物の編集・発行に際し、助言・アドバイスをを行った。
- ・文学研究科刊行物へのISBNコード付与の手続きを行った。2020年度・2021年度ともにISBNコード付与件数は1件。

4. 懐徳堂部門

1) 文学研究科の附属施設である懐徳堂研究センターの業務に関すること

- ・2020年度は『懐徳堂研究』第12号、2021年度は同第13号を刊行し、研究成果と活動内容を広く公表した。
- ・2020年度、前年度までプログラム、サーバの老朽化により公開を停止していた『WEB懐徳堂』の基幹システムを再構築し、コンテンツ『学校記録類・運営関係文書』の復旧も行って、10月に『WEB懐徳堂』のリニューアル公開を果たした。

- ・2021年度、同じく『WEB懐徳堂』に関し、コンテンツ『懐徳堂文庫電子図書目録』『中井終子日記』の復旧のほか、総合図書館の支援により『懐徳堂考』『学校文書類』『論語問書』『懐徳堂印（中井竹山編・中井履軒編）』の復旧を行った。
 - ・2020年度、大阪大学創立90周年／大阪外国語大学創立100周年記念事業「大学創立周年記念展」（総合学術博物館主催）に、下記資料を展示した。
 - ①「懐徳書院教授」印（竹山 2）、②「天子知名」印（竹山 4）、③「子慶氏」印（竹山 13）、④「水哉」印（履軒 20）、⑤中井履軒印章 18 本（履軒 1～ 18）、⑥上記収納用桐箱・外箱、⑦『懐徳堂印存』（総合図書館所管資料）
 - ・2020年度、2009年以降調査・作成が中断されていた「懐徳堂研究関係論著目録」について作業を再開したほか、宝塚の宮武家より寄託された懐徳堂関係文書の調査を行った（終了後に返却）。
 - ・2021年度、加地伸行名誉教授より寄贈された器物資料の目録を作成し、『加地伸行文庫目録』の刊行に協力した。
 - ・両年度を通じて、センターHPを随時更新するとともに、懐徳堂資料のデジタルコンテンツの作成を進めた。
 - ・両年度を通じて、学内外からの資料見学、調査依頼等に対応した。
- 2) 懐徳堂記念会業務の内、主として文学研究科に関わる業務に関すること
- ・両年度を通じて、古典講座、春季講座、秋季講座、見学会等の企画・運営に協力した。
 - ・2020年度は『懐徳』89号、2021年度は同90号の編集・刊行並びに『加地伸行文庫目録』の刊行に協力した。また、両年度を通じて、『記念会だより』の編集・刊行に協力した。

5. その他

- ・部局運営方針実現取組推進経費を活用して、「女性研究者の集い」「若手研究者フォーラム」を企画した。「女性研究者の集い」については2020年度に開催を予定したものの、新型コロナウイルス感染症拡大防止等のため中止を余儀なくされたが、2021年11月25日（木）にオンラインにて開催、約30名の参加があった。坊農真弓氏の講演（講演タイトル「女性研究者のリアル」）のあと坊農氏と参加者の意見交換も行われた。「若手研究者フォーラム」は、研究発表経験の少ない若手研究者に（大学院博士前期課程・修士課程・研究生を主な対象として）専門外の幅広い分野の人文学研究者を聞き手とする研究発表の機会を提供することを主眼として年2回開催した。要旨集を刊行し、第3回よりISSNを取得した。2020度は、第2回若手研究者フォーラムを9月28日（月）本館大会議室にて（zoom併用）開催。18名の発表があり、3名に優秀若手研究者奨励賞が授与された。第3回は、2021年3月13日（土）zoomオンライン開催。発表者は13名、優秀賞は3名に授与。2021年度は、第4回を9月15日（水）本館大会議室にて（zoom併用）開催。発表者は6名、優秀賞は2名に授与された。第5回は2022年3月26日（土）zoomによるオンライン開催。9名の発表があり、2名に優秀賞が授与された。
- ・豊中地区研究交流会開催に際して、発表者募集等により協力した（2020年度4件、2021年度7件の参加）。
- ・大阪大学教員出版支援制度（大阪大学出版会）推薦論文選考委員会を組織して選考にあたった。
- ・『文学研究科紀要』『待兼山論叢』を中心に、文学研究科刊行物の大阪大学機関リポジトリ（OUKA）での公表を進めた。
- ・教育支援室と協力して、名誉教授・現役教員の教育研究交流を目的とする「教育研究フォーラム」を企画した。

（石井 正彦）

評価・広報室

組織・体制

評価・広報室は、文学研究科・文学部の自己評価・外部評価と広報活動を担っている。本室は、研究評価・教育評価・広報・ネットワークの4部門から構成され、室長・副室長を除く室員全員がそのいずれかに所属している。研究評価部門は教員・大学院生の研究業績をはじめとする各種データの収集や『年報』の刊行など、教育評価部門は、教育関係のアンケートやファカルティ・ディベロップメント(FD)の実施など、広報部門は各種メディアへの広告掲載依頼、オープンキャンパスの開催、高校生の大学見学や高校などへの出張講義への対応、『文学研究科リーフレット』『文学部紹介』の刊行、文学研究科・文学部ホームページの運営など、またネットワーク部門は、部内サーバやネットワークの整備・運営などを担当している。

室長は副室長とともに、室全体の活動を統括するとともに、全学基礎データの収集・外部評価・メディアラボの運営などの他、いずれの部門にも属さない仕事を担当している。各部門には、それぞれ部門チーフが置かれ、部門の活動を統括している。また、事務補佐員2名が配置され、室の事務全般の広範な活動を支えている。

活動状況

1. 評価・広報室全般

1-1. データ収集（年度計画・達成状況と全学基礎データ）

全学規模の取り組みである「全学基礎データ」と「教員基礎データ」については、評価・広報室長の指示のもと事務補佐員が担当し、その収集やデータの整理などを行った。また、教員業績データの収集については、researchmapからの情報の取り込みに移行するという本部からの指示を受けて、所属教員にresearchmapの周知に努めるとともに、個別にも入力状況についてチェックを加えつつ情報収集を促進させた。

全学規模の取り組みである「部局別年度計画達成状況」に関しても、データを教員と研究室から収集・整理して報告した。内容からみて他の室の管掌である項目も含まれるが、データを提供する側と収集する側の双方の効率を鑑み、評価・広報室でまとめて収集整理した後、当該部署へデータを提供する形を踏襲した。

このほか、文学研究科独自の活動として、2020年度および2021年度においても引き続き専門分野・コース別年度目標・達成状況シートを配布し、自己評価およびデータ収集を行った。

1-2. 現況調査表（継続）

大阪大学に対する法人評価のための基礎資料となる部局単位の現況調査表については、すでに2019年度内にはおおむね完成していたが、2020年度の8月頃までは、前評価・広報室長ならびに事務補佐員を中心にして、最終確認に伴う修正や追加の作業を継続し、最終版の提出に至った。

1-3. その他

2020・2021年度については、COVID-19の感染拡大によって、評価・広報室の活動も全面的に旧来の方式を改める必要に迫られた。また、2022年度からの人文学研究科への統合に向けた対策なども求められ、それらの対応のために例年以上に多忙な状態が継続した。オープンキャンパスのリモート開催などの新たな試みは、感染収束後に受け継ぎうる側面であるが、一方で統合に伴う新たな年報やresearchmapの活用などの課題とすべき点について、今後の対策が必要である。

(高橋 照彦)

2. 研究評価部門

2-1. 年報

2020年度に、過去2年間（2018～2019年度）における教育・研究活動の情報を収集・整理した『大阪大学大学院文

学研究科年報 2020』(A4判、446頁。以下、『年報 2020』と略称)をPDFファイル形式で刊行し、各教員および各専門分野、各室、事務局と教育・研究活動に関する情報を共有した(ただし、教員および事務局の責任者には、特別に冊子体にして配布)。基本的な体裁は過去の年報類に従った。第1部には研究科全体としての教育・研究活動に関する記事を、第2部には各専門分野・コース単位の活動をまとめた記事を、それぞれ掲載した。第1部では、継続プログラムその継承・発展としての「徴の上を鳥が飛ぶ」や「国際共同研究力向上推進プログラム」に加えて、あらたに大阪大学社会学共創本部による取り組みとして始まったクラウドファンディングの初年度採択事業として「古墳の価値を未来に」が報告され、専門分野の枠を超えた研究が順調に進展していることがわかる。第2部の各専門分野・コースの記事では、組織・目標・活動の概要のほか、前号に引き続き、過去2年間の「自己点検・自己評価」を掲載することにより、これを作成する作業自体が自己点検の機会となるように考慮している。



2-2. 専門分野・コース別年度目標

前記の『年報 2020』を2020年度に刊行したことを受けて、各専門分野においてその後の改善状況の検証を行うこととした。『年報 2022』の刊行に備え、2020～2021年度の評価用データを収集し、その収集を通じて、さらなる自己点検・評価を行うとともに、改善状況も検討した。また、専門分野・コースごとに、それぞれ年度当初に設定した年度目標に基づき、自己評価を実施した。具体的には、前記の『年報 2022』に関するデータ収集プロセスの中で、各部署・専門分野における教育・研究・社会連携などの項目にわたる目標を示したうえで、それに関する活動の概要を報告し、あわせてさらなる自己評価・自己点検を実施した。

2-3. 教員業績の管理

2020年度に大阪大学の教員基礎データが researchmap から取り込む形に変更されたことに伴い、各教員に researchmap へ過年度の業績を移行し、新たな業績データを登録していくよう要請した。今後、researchmap を活用した評価用データの収集方法を検討することとなる。

(堤 一昭)

3. 教育評価部門

2020～2021年度に教育評価部門が実施した KOAN 授業アンケートおよび卒業時・修了時アンケート、また教育支援室と一年毎に交代で担当して実施している FD 研修会について報告する。

3-1. KOAN 授業アンケート

評価・広報室の教育評価部門では、2014年度より学部生を対象とした授業アンケートを実施し、2018年度から学部・大学院の全授業科目を対象にして行なっている。2020年度は COVID-19 の蔓延拡大、緊急事態宣言の発出により、対面からメディア授業になった。7項目と自由記述からなる従来のアンケートに、メディア授業に関する3項目を追加して、10項目と自由記述からなるアンケートを実施した。2020年度は、春夏学期の授業科目を対象とする第一回目を7月1日から9月15日にかけて実施し、回答率は学部 22.6%、大学院 44.4%であった。秋冬学期の授業科目を対象とする第二回目を12月14日から2月9日にかけて実施し、回答率は学部 17.8%、大学院 28.5%であった。2021年度は、第一回目を7月1日から9月15日にかけて実施し、回答率は学部 27.7%、大学院 42.3%であった。第二回目を12月13日から2月10日にかけて実施し、回答率は学部 15.7%、大学院 32.3%であった。アンケートの実施時期を変更したことにより回答率は第一回目も第二回目も例年よりも伸びている。いずれのアンケートについても教授会室報告において報告を行った。

3-2. 卒業時・修了時アンケート

評価・広報室の教育評価部門では、2014年度より、卒業生・修了生を対象として学習・研究環境全般に関するアンケートを実施している。部門では自由記述を含む7項目の質問からなる用紙を作成し、2020・2021年度において、卒修論

の提出時にアンケートを回収するかたちでアンケートを実施した。2020年度は、卒業時アンケート184枚(98.9%)、修了時アンケート60枚(83.3%)を回収した。2021年度は、卒業時アンケート180枚(98.4%)、修了時アンケート82枚(94.3%)を回収した。

アンケートの結果については教授会懇談会において報告し、討論をおこなった。卒業生・修了生に対しては研究科ホームページにおいて集計結果を報告するとともに、学部・研究科への要望に回答した。

3-3. ファカルティ・ディベロップメント (FD)

2020年度はCOVID-19の蔓延拡大、緊急事態宣言の発出により大学の授業がオンラインとなり、これにともない「オンライン授業」と「学生支援」が緊急の課題となった。「オンライン授業と学生支援」をテーマとして、さらに2020年度春夏学期の授業アンケートの分析も踏まえて岩崎千晶准教授(関西大学)によるFD講演会・研修会を2020年10月8日(木)に開催した。当日は室員だけが対面で受講し、他の教職員はオンラインでの受講とした。

(渡辺 浩司)

4. 広報部門

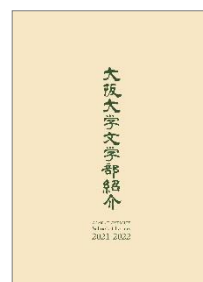
少子化、大学の差異化、情報流通の拡大の進む現在、大学からの情報発信は重要な課題である。広報部門では、冊子メディア、電子メディア、文学部オープンキャンパス、文学部見学会などを通じて、受験生や社会に向けた情報発信に取り組んでいる。

4-1. 冊子メディア

大阪大学文学部に関心を持つ高校生、受験生を対象とした冊子『大阪大学文学部紹介』を毎年発行している。全国各地の高校に送付するとともに、オープンキャンパス、文学部見学会などで配布している。カラー刷り約80ページ、発行部数は2020年5,000部、2021年度はオープンキャンパスがオンライン開催となったため3,500部である。

『大阪大学文学部紹介』は、大阪大学文学部の概要および各専修の教育・研究内容の紹介を中核とし、卒業後の進路に関する情報、在学生や卒業生の声、文学部全教員のメッセージなども掲載する。受験生の進路検討に必要な情報をまとめるとともに文学部での学びの実際が伝わる内容としている。

なお、文学研究科を目指す大学生、社会人に対する広報を目的とした『文学研究科リーフレット』も活用し、大学院説明会などで配布した。また、外国での広報や外国からの訪問者などに対する広報のため、文学研究科、文学部の概要を英文で紹介した『英文リーフレット』を用いた。いずれも今期に新たに発行したものではなく、従来制作のものを引き続き活用した。



4-2. 電子メディア

文学研究科・文学部の公式ホームページ、社会人学生募集のためのページについては各種情報の追加、更新を行った。

4-3. 外部メディア

文学研究科の広報の一環として、大学院受験情報サイトに文学研究科の情報を掲載した。

4-4. オープンキャンパス・各種見学会

大阪大学の実施するオープンキャンパスの一環として、「文学部オープンキャンパス」を毎年夏に開催している。ただし、COVID-19の影響で、2020年度は完全オンラインで実施し、動画撮影や様々なコンテンツを準備(YouTubeチャンネル、オープンキャンパス特設サイト)に対応した。2021年度は前年の内容に加え概要説明会をライブ配信、研究室訪問や留学説明会をオンラインで実施した。いずれも概要説明、模擬授業、在校生のメッセージ等、内容としては従来の対面式と同様であるまた、2021年度の

オンライン研究室訪問は、参加者が教員や学生と交流できる機会となった。また、事務職員や学生による進学、留学、学生生活などに関する各種の相談会もオンラインで開催した。

学部見学会も対面実施が困難な状況のため、オンラインでの出張講義も含め実施した。2020年度は大阪府立北野高校(オンデマンド)、福井県立藤島高等学校・長野県飯田高等学校(オンライン)、行動基準に沿った形で対面実施したのは高津高等学校(研究室訪問)、長野県長野高等学校(出張講義)であった。なお、中止が3件あった。また、2021年度は大手前高等学校(対面)、群馬県立前橋女子高等学校(出張講義)を行った。

(門脇 むつみ)

5. ネットワーク部門

5-1. 文学研究科ウェブサイト

必要十分なかたちで滞りなく運営している。文学研究科のアドミッションポリシーをはじめ、研究教育活動についての英語版コンテンツも順次公開され、世界の研究者ならびに本研究科に留学を希望する全世界の学生に、本研究科の情報がダイレクトに届くようになった。また文学部紹介をはじめとする、本研究科が発行する情報誌の電子版を掲載し、オープンキャンパスにあわせて本研究科の YouTube チャンネルも開設した。阪大への入学を志す高校生や、本研究科での研究に関心をいさぐ大学生にもアピールしうるウェブサイトとなった。

5-2. 文学研究科サーバ管理

本研究科が運営する Web サーバには、文学研究科・文学部のホームページだけでなく、各講座・研究室・各教員のホームページ、教育支援室、研究推進室、国際連携室のホームページ、国際的・社会的連携型人文学研究教育クラスター、人材育成プログラム等のホームページなど、文学研究科・文学部の教育研究活動に関わる多くの情報が収められている。

学内のみならず、社会における IT への依存度が増せば増すほど、各種サーバの安定運用が求められている。ネットワーク部門では、Web サーバやメールサーバが停止することのないように、機器やソフトウェアのメンテナンスを担当している。また外部からのクラッキング、ウィルスメール、無線 LAN の傍受など、インターネットに対する脅威が高まる状況のなかで、定期的に外部機関のチェックも受けながら、セキュリティ維持の作業をおこなっている。ネットワーク部門では、Web サーバ、メールサーバ、ネームサーバソフトウェアのアップデート作業やセキュリティホールを埋めるパッチ作業もまた、日常の業務として担当している。全学で実施されるセキュリティチェックを活用して、本研究科のサーバが安全かつ安定して稼働するよう保守している。このような保守業務と平行して、2021年度には、2022年度に新設される人文学研究科のサーバの構築準備に着手した。

5-3. メールアカウント

文学研究科では who@let.osaka-u.ac.jp のアカウントを発行している(サーバ管理自体はサイバーメディアセンターに委託し、メールアカウントの発行削除をはじめとする諸管理は、引き続いてネットワーク部門が行っている)。教員は全員、また文学研究科雇用の職員等もほぼ全員、この文学研究科のメールサーバを利用している。なお、大学院生・研究生に対しては、教育システムによるメールが使えることから、研究科でのアカウントは発行していない。その結果、メールサーバのリソースを研究科スタッフに割り当てることで、メールサーバの安定した運営をおこなうことができるようになった。一方、メーリングリスト開設の希望は増加している。室・委員会等の運営だけでなく、教育と学生の連絡手段、さらには学生主体の研究会運営においても、メーリングリストはもはや不可欠な連絡ツールとなっている。現行のサーバでは、いままですら簡便なインターフェイスをつかったメーリングリストの管理が可能となっている。

メールの利用が必要不可欠のものとなった以上、安全かつ安定した運用が求められている。ウィルスメールやスパムメール等を一括で排除するようなセキュリティサービスの拡充、ならびにサーバのダウンを回避するバックアップ経路をそなえた運用をおこなっている。

サーバの維持およびバックアップ経路の確保については、前節に述べたとおりで、本部の情報推進部と連携することで実現している。またウィルスメール対策についても、ODINS が提供するウィルス監視システムを活用することによって、

一定の安全性を維持できている。しかし特定の利用者に向けられたフィッシングメールなどを完全に防ぐことはできないため、引き続き、ユーザ端末におけるウイルスチェック、不審なメールが届いた際の安全な対応などの啓発活動を継続的にこなうことになる。2022年度から、大阪大学の新しいメールサービス（ICHOメール）の運営がはじまる。ICHOメールへの移行のアナウンスもおこなった。

5-4. ネットワークの維持

本研究科では、すべての講義室・演習室に無線LANアクセスポイントを整備しており、本研究科の学生がどこにいても必要に応じてネットワークに接続ができるような環境を提供している。その一方で、ネットワークの不具合や不調はなくなることはない。端末がネットワークに繋がらない、あるいは極端に繋がりにくいなどのトラブルの原因としては、端末の不具合、設定の誤り、通信機器やケーブルの不具合、ウイルスの感染等などがあり、その特定は容易ではない。ネットワークトラブルが発生した際には、ネットワーク部門の教員が出向いて、原因の特定および問題解決にあたってきた。専門家ではない教員が、本来の教育・研究のための時間を割いて作業にあたることは、大変非効率的であった。こうした事態を改善するために、保守業者と契約し、ネットワーク部門では対応することができないネットワークのトラブルに対応を依頼する体制を整えている。

近年はネットワークの機械的なトラブルに加えて、不正アクセスやハッキング行為の踏み台として文学研究科の情報コンセント等が悪用されることも問題となっている。ハッキング行為が発生した際、問題となっているサーバやネットワーク機器を迅速に特定することが求められる。ネットワーク部門では、ネットワーク台帳を作成することで、効率的かつ迅速なトラブル対応に備えている。

2020年度からは、新型コロナウイルスの感染防止のために、オンライン授業の配信環境、ならびに学生がオンライン授業を受講するための環境として、無線LANアクセスポイントの増設ならびにリプレースをおこなった。オンライン授業では、zoomが利用されたが、zoomアカウントの管理もネットワーク部門がおこなった。

（吉田 耕太郎）

教育支援室

組織・体制

教育支援室は、2020年度・2021年度も引き続き、(1)教務・学位関連部門・(2)入試関連部門・(3)学習・生活支援部門・(4)キャリア支援部門・(5)共通教育部門の5つの部門（部門チーフおよび室員）に分かれて業務をおこない、室長（1名）および副室長（2名）で全体を統轄した。

教務・学位関連部門ならびに入試関連部門は、教務係と連絡をとりながら、所轄の学事業務を実施した。学習・生活支援部門、キャリア支援部門は、室窓口に配置された事務補佐員2名とともに各種の学習支援サービス業務をおこなった。共通教育部門は、全学教育推進機構との連絡を担当した。

各部門は、教授会開催日に定例会議を開催するほか、教務係、庶務係、会計係とも連携し機動的に日常業務を遂行した。また原則的に月1回、室長、副室長、各部門チーフで構成するチーフ会議を開催し、室全体の円滑な運営に努めた。

室内の学生用スペースでは、事務補佐員2名が窓口を担当し、常時学生からのリクエストや相談を受け付けた。開室時間は、月曜日・金曜日は9時30分～17時、火曜日・水曜日・木曜日は9時30分～19時とした（17時～19時は学生の事務補佐員を配置）。同スペースにはコンピュータ端末8台を設置するほか、キャリア形成関連の新聞・書籍・雑誌などを常備し、求人情報を掲示するなどして、学生のキャリア支援をおこなった。

さらに、事務補佐員により、ミーティングルームの管理、授業用AV機器やノートブック作業に必要なパソコンの貸し出しなどをおこなった。



教育支援室

活動状況

1. 教育支援室全般

教育支援室の活動はルーティン的な学事業務にかかわるものを中心となるが、2020年度・2021年度において、それ以外に教務・学位関連部門でおこなった特筆すべき取り組みは、以下のとおりである。

- ・2020年度早々にコロナ対策を迫られることになり、学生サポートに関係する取り組みや、オンライン授業の実施のための教員のサポートにおいて、新しい状況に対応するために方策を考え、実行した。
- ・2020年度に、室長が座長を務めるAO入試ワーキングを改め、室長を委員長とする文学部入試検討委員会を設立し、入試データにもとづき学部入試における問題点について検討をおこなった。とくに、CHEGAの助言を得ながら、総合型選抜の改革について検討し、2021年度中に、一連の改革案が認められることとなった。2021年には、高校教員への説明会をおこなったり、総合型選抜のちらしを作成したりした。文学部の総合型選抜の志願者は、2020年度には57名に下がったが、2021年には69名まで上がった。
- ・文学部では、1回生のための文学部共通概説という入門科目を設けている。この授業において学生は、全専修の学問の概要について理解し、レポートの書きかたなど学習の基礎について学ぶ。さらにまた、学生生活で直面する問題の対処のしかたや、大学院および留学の機会を知る。最終回には、複数の研究室を訪問する機会をもうけている。2021年はオンデマンドで実施したが、2022年度の文学部共通概説は、対面とオンラインを同時におこなうハイフレックス方式で実施した。
- ・1回生全員が受講する「文学部共通概説」において毎回の授業の小レポートの提出が芳しくない学生には担当者が声をかけて状況の確認をおこなっている。また3年次において著しく単位を取得できていない学生には指導教員が面談をおこない報告書を提出することにしていく。
- ・熱意ある学生の研究意欲をさらに高めて、大学院（人文学研究科）への進学も視野に入るように、学部生たちの自主研究奨励事業への応募をうながしてきた。教員に何度かこの募集について紹介をおこない1回生の「文学部共通概説」でも案内をおこなった結果、2021年度には11名の研究が採択された。文学部では、例年どおり2月に、教員を交え

ての採択者の研究発表会をおこなった。このなかで、全学の発表会に参加する代表を決め、優れた研究は「文学部共通概説」において紹介されることにしており、4候補者を選定した。

- ・2021年9月8日に文学部文学研究科のFD研修会「ブレンディド教育の可能性」を実施した。この講習会それ自体ハイフレックスで実施してオンラインでもグループワークをおこなった。対面9名オンライン54名の参加者があった。
- ・2020年10月29日、2021年7月7日に、大学院入試相談会をおこなった。

(高安 啓介)

2. 教務・学位関連部門

2020年度・2021年度において、教務・学位関連部門では、議題を事前に周知し、共有することで、会議の効率化および議論の充実を図った。2022年度の新研究科発足に対応し、円滑に運営できるよう、事務局と連携しながら教務上想定される問題点の把握に努めた。とりわけ新研究科発足に伴い従来のブロック（哲学、史学、東洋文学、西洋文学、芸術学、日本学）の見直しが必要となるなか、ブロック制を前提としているふたつの科目、文学部共通概説と人文学概説の開講方法に関して、熟議を行った。その結果、従来のブロック制を維持しつつ、廃止となる文化動態論をブロック制に組み込むことで、支障のない移行と運営が可能となった。

他方、学部生にたいする教務上のケアの充実化も図った。単位履修状況が捗々しくない学部生にたいして、各専攻のコースオーガナイザーを中心として助言を与えたり、相談を受けつける体勢を整えた。さらにすべての留学生にたいして、履修上および学生生活に関する調査を行い、留学状況をきめ細かく把握することを可能とした。

(山田 雄三)

3. 入試関連部門

入試関連部門は、教務係と緊密に連携して、この2年間も大学院入試の実施にあたっての、計画・実施・改善にたずさわった。学部入試の実施においても、拡大入試委員会などを開催して本部門で積極的に対応した。2021年度AO入試では、志願者が57名、2022年度AO入試では、志願者が69名となり、両年ともに一次選抜を行い、二次試験ではそれぞれ56名と60名の受験生の面接試験をおこなった。多くの面接担当教員からのフィードバックをえて、面接試験の実施方法についての改善を検討した。加えて、入試結果の分析をおこなったり、広報活動に協力したりした。

① 留学生特別選抜試験、研究生試験のZoom対応

冬期留学生選抜試験および研究生試験において、コロナウィルス蔓延のために入国が制限された受験生のために、Zoom利用の試験実施手順を作成し、教授会に提案して承認をうけた。令和3年度入試からZoomを用いた選抜試験、研究生試験を実施し、両年ともに問題なく適正な選抜を行うことができた。

② 入試ミスへの対応

大学院入試問題の作成において、表記の不統一を改めるとともに、起こりやすいミスを未然に防ぐために、チェックリストおよびチェックの方法をこの2年間においても検討した。一連の試行錯誤のいかもあって、試験開始後にミスが発見されたのは、2年間のうち、一文字だけの誤字訂正が行われた軽微な事案1件のみであった。公開用の問題についてもミスがないか厳密なチェックをおこなった。油断はできないが、一定の成果をあげたものとみられる。

(岡田 禎之)

4. 学習・生活支援部門

学習・生活支援部門は、下記の事項を主な業務とし、随時部門会議を開催するとともに、教務係・庶務係・会計係と連携して業務にあたった。以下、それぞれの業務について報告する。

① 学習・生活相談

2020年度は、評価・広報室との連携により相談フォームの改定を行った。学習・生活相談デスクに寄せられた相談は、2020年度26件、2021年度26件であった。例年に比して相談件数が大幅



学習・生活相談ポスター

増加したため（ただし、相談内容の大半は事務的な手続きに関する問い合わせ）、部門全員による対応体制に変更し、相談教員の名前や所属等を公開することで、体制の透明化を図った。

② TF/TA

教務係・庶務係・ハラスメント問題委員会と連携し、年2回（4月・10月初め）「研修会」を開催した。予算削減に伴うTA・TF採用基準の見直しを行った。TA・TFは大学院生に教育者としての指導能力をトレーニングする機会を提供しており、また将来的に学生のキャリアアップに繋がる点を考慮し、従来の選考基準を維持しながら従事時間を調整し、不足分は講座費で充当する方針で進めることにした。（2022年度より施行）。

③ 奨学金返還免除候補者の選考

毎年10月末または11月初旬に「奨学金返還免除申請のためのガイダンス」を行っており、2020/2021年度もこの時期に開催した。返還免除の推薦に関しては、従来の返還免除推薦に加えて、博士前期・後期課程の学生のなかで成績・業績が優れている者を「内定候補者」（内定候補者には必ず全額または半額免除が保証される）として推薦した。

④ 他大学から来た大学院新入生・社会人院生のためのガイダンス

例年4月初めに開催されているが、COVID-19の影響により、2020年度は開催を中止し当日資料を希望者にPDF配布した。2021年度はオンライン（zoom）で開催し、大学院学生2名によって学習・生活面で必要な事項について詳細な説明がなされた。新型コロナの感染防止のため、文学部内ならびにキャンパスの関連施設の見学は割愛した。

⑤ インターンシップ報告書の発行

文学部・文学研究科で開講した「インターンシップを含む科目」の実施状況を、次年度7月頃に報告書として編集し、冊子体・WEB版で公開、関係機関等に配布した。報告書には、担当教員による実施概要の他、インターンシップに参加した学部生・大学院生による感想等も収められており、大阪大学文学部・文学研究科での他機関連携をアピールする媒体となっている。

⑥ 障がいのある学生への支援

文学部・文学研究科に在籍または入学予定の学生で、障がい等により授業に対する配慮申請があった場合、キャンパスライフ健康支援センター・担当（指導）教員・教務係・学習生活支援部門チーフで構成する「合理的配慮検討委員会」が開催される（その結果を、授業担当教員に「障がいのある学生の授業履修に伴う配慮のお願い」として送付する）。2020/2021年度にあわせて3件の配慮申請（配慮事項の変更を含む）があり、合理的配慮検討委員会を開催し、配慮内容を決定した。

（古後 奈緒子 2020 / 辛 賢 2021）

5. キャリア支援部門

キャリア支援部門では、年に4回実施する「就活サポート講座」を中心として、業界セミナーや社会人学生へのサポートを行っている。

① 就活サポート講座

2020年度はディスコの協力を得て年5回、2021年度はマイナビの協力を得て年3回の「就活サポート講座」を行った。講座の内容は、(i)スタートアップ、インターンシップ対策、(ii)オンライングループディスカッション対策、(iii)エントリーシート対策、実践マナー講座、(iv)模擬面接、(v)OB・OG講演会、および(vi)教員志望者向け対策講座等である。コロナウイルス感染拡大により、オンラインによる就活への対策に注力した。

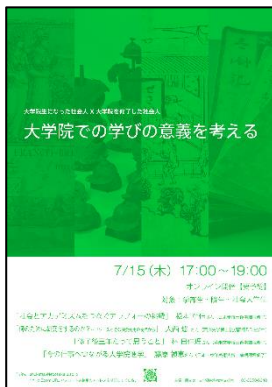
② 社会人学生へのサポート

2016年度以来となる社会人学生教育支援基盤経費の資金を得て、2021年度には「大学院での学びの意義を考える」と題して、大学院を経て社会人となったOB/OG、社会人として大学院生となった大学院生/OB/OGによる講座を開催した。2016年度から始まった、他大学から来た大学院新入生・社会人学生のためのガイダンス（4月）も引き続き実施した（学習・生活支援部門との共催）。

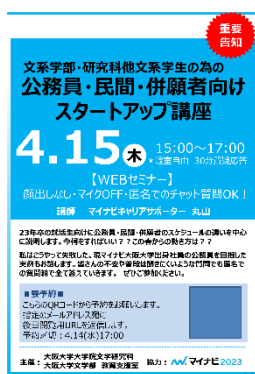
③ 業界セミナー

2015年度より文学部単体主催での合同企業説明会の開催を見合わせているが、文学部と関係の深い、あるいは学生の

関心の高い業種については、単独で業界説明会を複数回開催した。



社会人学生サポート講座



スタートアップサポート講座

(藤岡 穰)

6. 共通教育部門

本部門は、文学研究科の全学教育推進機構兼任教員4名で構成されている。うち1名が全学教育企画開発部に、2名が共通教育実施推進部教養教育部門に、1名が共通教育実施推進部専門基礎教育部門に属し、大学全体の教育の質的向上を図っている。教育支援室における本部門の役割は、文学部に関わる共通教育関係の問題について検討するとともに、教育活動が円滑におこなわれるように尽力することにある。この体制は従来と変更がない。

2019（平成31）年度から新カリキュラム体制が始まり、現在はその評価の段階であり、既存のプログラムを円滑に運営することが今年度の作業であった。開催される会議は、新型コロナの影響でZoomになっており、大幅なカリキュラム変更も議論される状況にはない。ただしシラバスについては充実に向けての準備が行われている。「学問への扉（通称マチカネゼミ）」（春学期2単位）については、学生からおおむね好評を得ていると報告されている。

(藤川 隆男)

7. 博物館実習委員会

博物館実習委員会では、毎年、博物館学として館園実習と学内実習を実施しており、その他にも、学芸員資格取得に必要な科目を開講するために非常勤講師等の任用にかかわる交渉を行っている。館園実習は、2度の事前指導をした後、2020・2021年度は大阪歴史博物館、大阪府立弥生文化博物館、大阪府立近つ飛鳥博物館、兵庫県立美術館、大阪市立自然史博物館、高知市立自由民権記念館、京都服飾文化研究財団などを受入機関として実施した。実習生の数は、2020年度が28名、2021年度が26名であった。学内実習は、大阪大学総合学術博物館の協力を得て実施した。実習生の数は、2020年度が31名、2021年度が38名であった。

(市 大樹)

国際連携室

組織・体制

室長1名、副室長1名、「連携推進部門」、「留学生受入部門」、「留学助成部門」、「エラスムス・ムンドゥス部門」の4部門の室員（各部門にチーフ1名を配置）、国際交流センター助教1名、同事務職員1名で室を構成し、活動を行っている点は、前回の年報報告時と変わらない。室員に関しては、2020年4月の時点で19人、その後、若干の増減はあったが、期間内を通じてほぼこの人数であった。

「連携推進部門」は部局間協定の締結・更新・終結のほか、外国の大学への教員の派遣、外国人招へい研究員の受入等を行い、海外の研究教育機関と交流をはかることを目的としている。ヘキサゴン（日独6大学学長会議）に関する連絡窓口およびISAPプログラムによる教員・学生の交換等についても業務の一部としている。「留学生受入部門」は留学生の受入と学習・生活支援、タンデム学習プロジェクトの運営等を担当している。「留学助成部門」は、学生の海外派遣に関する業務を行っている。これには1年次学生への留学説明会の実施、派遣学生の選考、奨学金受給者の選考、夏期短期英語研修プログラムの運営に関する業務などが含まれる。「エラスムス・ムンドゥス部門」は、人文学研究科が欧州域外フルパートナーとして参加している、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム「ユーロカルチャー」のコンソーシアムに基づく学生・教員の受入と派遣、英語コースの運営、事務局との折衝などを担当している。

国際連携室の日常業務としては、学生の海外派遣と留学生の受入に関わる相談業務、および情報提供、海外からの研究者の受入、海外への研究者の派遣に関する相談業務および情報提供、タンデム学習プロジェクトやエラスムス・ムンドゥス・プログラムの運営補助、協定校との連絡・調整など、高度な実務を担当している。文学部・人文学研究科（人文学専攻・日本学専攻基盤日本学コース・芸術学専攻）の学生の留学の支援のために、留学・語学研修冊子『Let's study abroad』を発行し、国際的な場において英語で研究の成果などを発言できるようにサポートをしている。また、本学の国際化に貢献するように国際セミナーの開催やプロシーディングの刊行を行っている。

国際連携室の傘下に国際交流センター（室長・副室長がセンター長・副センター長を兼務）が設置されており、大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」の英語科目を担当する助教が配置されている。

活動状況

1. 国際連携室全般

各部門の活動については2～5参照。

国際連携室の日常業務については6参照。

なお、海外在住私費外国人留学生特別入試に関して留学生受入部門を中心に国際連携室が主体となり実施している。

2. 連携推進部門

1. 2020年度には、パリ大学（フランス、旧：パリ・ディドロ大学）との部局間協定を更新し、西北大学文化遺産学院（中国）との部局間協定を新規に締結した。2021年度には、グッティンゲン大学社会科学部（ドイツ）、建国大学（韓国）、トリニティカレッジダブリン（アイルランド）、国立台湾師範大学文學院（台湾）との部局間協定を更新し、ヤギェロン大学国際政策学部（ポーランド）、ロンドン大学ゴールドスミス校（イギリス）との部局間協定を新規に締結した。また、2022年4月1日付けで大阪大学大学院言語文化研究科と大学院文学研究科が統合し、大学院人文学研究科が発足したのに伴い、各々の部局間協定校との学術交流に関する協定及び学生交流に関する覚書を新研究科へ継承することに合意する手続きを行った。

2. 外国人招へい研究員として、2020年度10名、2021年度9名の外国人研究者を海外から受け入れた。

3. ハイデルベルク大学日本学研究所がDAADの資金によって実施しているISAPプログラムに協力し、教員や学生の派遣と受入を行っている。派遣教員の確保と日程調整、また受け入れた教員による講演会等の企画・運営を行っているが、2020年度と2021年度はCOVID-19感染拡大の影響で派遣も受入も実際には行われなかった。学生の派遣と受入（COVID-19

感染拡大の影響で一部はオンラインで実施)は、2020年度は学生6名(各1 Semester)を受け入れ、また、3名(各1名/ Semester)を派遣した。2021年度は学生5名(各1名/ Semester)を受け入れた(派遣は0名)。派遣学生の決定に関して面接を行った。

3. 留学生受入部門

1. 従来どおり、正規外国人学部生及び大学院留学生(国費・私費)、外国人研究生、部局間協定と大学間協定による iExpo、OUSSEP、Maple の各プログラムにおける特別聴講学生および特別研究学生の受入関連業務を行った。2020年度は23の国・地域からの180名、2021年度は25の国・地域からの210名の留学生が在籍した。
2. 在学中の留学生向けの業務として、短期留学生の受入教員の選定、各種奨学金推薦者および学会発表旅費・日本語添削費用補助の選考、入学後1年以内の留学生を対象としたチューター制度の運用を行った。
3. オリエンテーションの際に、事故や病気、生活上のトラブルが発生した場合に24時間体制で相談に応じる「インバウンド緊急対応支援サービス」を周知し、利用を呼びかけている。また不慮の事故に備えて学生教育研究災害傷害保険への全員加入を義務付け、留学生保険への加入も促している。
4. 異なる言語を母語とする2人がパートナーとなり、互いの得意な言語を学び合うタンデム学習プログラムを引き続き運営した。この制度の運用のため、リサーチ・アシスタント(RA)とアルバイトを雇用し、スチューデント・スタッフとして活用した点もこれまでどおりである。2020年度は、延べ20組、2021年度は延べ25組のペアリングを行った。学期末に行っているアンケート調査では、回答者の満足度は高いと判断できる。

4. 留学助成部門

1. 引き続き協定校への派遣の募集・選考に関わる業務を行った。2020年度は7名、2021年度は19名が協定校に滞在した。
2. 留学プログラム一覧を掲載したパンフレット『Let's Study Abroad』を、留学体験記も含めて作成、配布した。また、新入大学院生を対象としたガイダンスに加えて、学部1年生を対象とした共通概説の授業において留学に関する情報を提供するとともに、部局間協定派遣の説明会を別途、開催した。
3. 引き続きリスク・マネジメントの一環として、海外に派遣した学生の緊急時に対応する緊急連絡網を維持・更新した。また上述の通り、派遣留学生危機管理サービス(略称 OSSMA)への加入、海外留学保険について情報提供を行った。
4. JASSOの海外留学支援制度(協定派遣)により、部局間協定校に派遣される学生(2020年度は0名、2021年度は1名)に奨学金を給付した。
5. 文学部・人文学研究科に在籍している正規課程の学生を対象とした「グローバル人文学教育促進プログラム」を継続した。
6. 研究科独自の基金「教育ゆめ基金」によって運営する、協定校への派遣学生に給付する奨学金の受給者(2020年度は0名、2021年度は2名)の選考を行った。また、「教育ゆめ基金」をオンライン留学のためにも使えるようにした。
7. 部局間協定校への派遣学生が COVID-19 感染蔓延国から帰国するに際して、国際連携室助教および事務スタッフ及び同室長と連携して対応に当たった。

5. エラスムス・ムンドゥス部門

1. コンソーシアムから2020年度、2021年度における学生の受入は、COVID-19感染拡大の影響で中止となった。
2. 大阪大学の学生のユーロカルチャー・マスター・プログラムへの派遣(推薦)について、学内で説明会を実施し、応募者の選考を行った。2020年度は0名、2021年度は派遣奨学生候補者を1名推薦した(ユーロカルチャー・マスター・プログラムの奨学金に採択される)。
3. 2020年度、2021年度 COVID-19感染拡大の影響により教員の受入は中止。大阪大学からコンソーシアム内の大学へ

の教員の派遣についても、2020年度はCOVID-19感染拡大の影響により中止。また、2021年度は教員1名（高安啓介教授）が採択された（但し、派遣実施は翌年度、2022年4月30日～5月15日に延期された）。

4. 2020年度、コンソーシアム校の担当者が集まって行われるマネージメント・ミーティング（グローニンゲン大学からオンライン配信）に関して、ユーロカルチャー・コンソーシアム全体会議に本研究科から教員2名（橋本教授、モインウッディン助教）が参加し、運営上の問題や今後の方針に関する協議に参加した。

6. 国際連携室の日常業務

国際連携室は、オリエンテーション、親睦パーティーといった各種行事の実施、エラスムス・ムンドゥス・プログラムやISAPプログラムの運営補助、教務係や庶務係と連携して留学生および招へい研究員の受入サポートなど、国際交流に関する様々な業務を担当している。また、留学生からの学習・研究、生活などについての様々な質問や相談の窓口となるほか、協定校をはじめとする海外の大学への留学についての情報を提供している。留学生専門教育講師は、論文作成法と実践専門日本語の授業を開講するほか、必要に応じて個人指導も行っている。

(1) 留学生相談・留学相談

国際連携室は、①留学生の学習・研究や生活についての質問・相談、②留学に関する質問・相談などに対応している。相談・質問等での訪問回数は、2020年度は333回、2021年度は334回であった。

①留学生の学習・研究に関する相談・質問は留学生の種別によって異なる。交換留学生においては、授業登録や単位の取得、成績についての質問が多く、研究生や正規生では、大学院入試、奨学金の応募情報、授業料免除、チューター活動、学内外の経済的支援などについての一般的なことから、研究の方法や学位論文について、研究室の同輩・先輩に尋ねるべき専門分野・コースに関するものまでより幅広い質問・相談が寄せられる。長期にわたって在籍する正規生に特徴的な、休学・退学・転学といった修学制度については、教務係と連携のうえ対応している。また、例年特定の時期に寄せられる生活上の問い合わせとしては、在留資格の延長・変更手続きといった手続き、あるいは、生活用品の入手・処分方法や引越しに関する問い合わせがある。ときおり寄せられるのが医療機関の受診についての問い合わせである。質問・相談内容によって即答・即決がむずかしい場合は、1. 必要な情報の収集と提供を行う、2. 状況に応じて指導教員や学内外の専門の相談窓口と連携を図りながら対処する、3. 「大阪大学留学生支援フロントスタッフネットワーク」（留学交流に携わる学内の教職員で組織、年4回定例ミーティングを開催）を活用して適切な対処の方法を探る、といった仕方で対応している。

②2020年度から2021年度にかけては部局間協定校の新規締結・更新が8件あった。また、2022年4月1日付けで新研究科設置に伴い、全部局間協定校で名義変更に関する覚書を継承することに合意する手続きを行った。コロナ禍であったにもかかわらず、協定校への留学に関する質問・相談も増加傾向にある。教務係を通じて本部事務局から提供される留学関係情報の周知を図り、それぞれの相談・質問内容に応じて本部事務局や協定校などと連絡を取りつつ対応している。質問・相談内容は、留学先の選び方、申請時期等のスケジュール、オンライン留学、交換留学等で利用・申請可能な奨学金、留学先の大学に提出すべき書類（申請書や推薦書）、ビザ申請・取得手続などについてである。

(2) その他の支援活動

①新規入学の留学生には在籍する研究室の学生がチューターとして配置されている。留学生が日本での、とりわけ、文学部・人文学研究科人文学専攻、日本学専攻基盤日本学コース、芸術学専攻での学生生活になじむためにサポートができるよう、チューターの新規採用者を対象に説明会を実施している。また、学位論文執筆者は、日本語の添削を目的とする「論文添削アルバイト」の制度を利用することが出来る。

②国際教育交流センターや本部事務局で企画・実施される日本語や英語でのプログラム、ホストファミリープログラム、地域の学校の国際理解プログラム、留学生を対象とした学内外のイベントや課外活動、奨学金、寮に関する情報を提供し、必要に応じて申込み手続等を補助した。

③EU（欧州連合）が運営するエラスムス・ムンドゥス・プログラム、ハイデルベルク大学 ISAP（Internationalen

Studien- und Ausbildungspartnerschaft) プログラムといった研究科レベルで運営するプログラムについても、関係部門や事務部と連携しつつ、プログラムの運営をサポートした。

④学生派遣については、交換留学や短期語学研修、学内で実施されているプログラムをはじめ、海外の研究・教育機関への留学を希望する学生に関連情報を提供した。海外留学オリエンテーションや各種プログラムへの参加者を募るとともに、必要に応じて応募書類の作成補助などを支援した。また、交換留学に参加する学部学生が対象の留学支援「ゆめ基金」において、学生への募集案内から留学助成金の支給までをサポートをした。

⑤海外の教育研究機関関係者の訪問に当たり、本学教職員との交流などを行った。

⑥英語能力試験 (IELTS, TOEFL など) の準備のために参考図書の貸し出しを行った。

(3)年間行事 (オンラインも含む)

留学生受入に関連して、以下の行事を実施した。

- ・新入留学生向けのオリエンテーション (各年 4 月・10 月)
- ・タンデム学習 (各年前期・後期)
- ・チューター説明会 (各年 4 月・10 月)
- ・大学院留学生による学会発表について補助するために、「学会発表補助 (①旅費・②添削)」募集案内 (各年 7 月・12 月)
- ・留学生が卒論、修論、予備論、博論を作成する折に、添削補助を年一回行っている。

留学生派遣に関連しては以下の行事を実施した。

- ・留学支援として留学説明会 (通常は 5 月だが、COVID-19 感染拡大の影響で 2020 年度は 8 月、2021 年度は 6 月に実施)
- ・Erasmus Mundus Euroculture 奨学候補生説明会 (各年 10 月)
- ・留学助成金「ゆめ基金」募集案内 (各年 5 月・1 月)
- ・オープンキャンパスで留学説明会を実施 (2021 年度)
- ・共通概説で「海外留学について」説明 (2021 年度)
- ・GI 機構企画オンライン留学フェアで文学部・文学研究科についてプレゼンテーション (2021 年度)
- ・COVID-19 感染拡大の影響で 2020 年度と 2021 年度は、浴衣教室・着物体験教室やランチタイム交流会は中止になった。

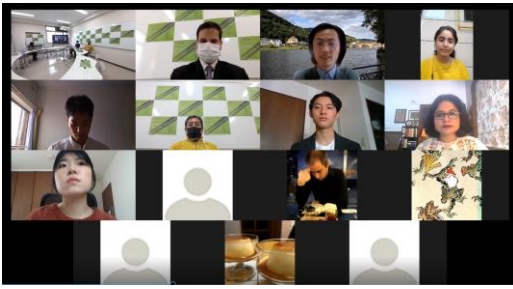
(4)コロナ禍での対応

・特別支援 外国語論文添削補助 (国際学会口頭発表)

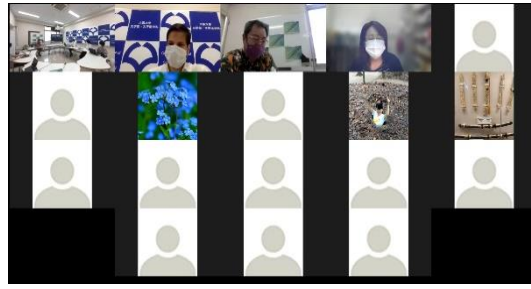
新型コロナウイルス感染拡大による渡航制限のため、海外へ赴いて国際学会に参加、発表することが困難な状況の下、文学部・文学研究科の学生がオンラインで開催される国際会議やセミナー・研究会等に参加、発表するために執筆する論文 (母語以外の言語で発表するための原稿等) の校閲に要する費用を補助した (2020 年度と 2021 年度)。

・国際セミナーの開催

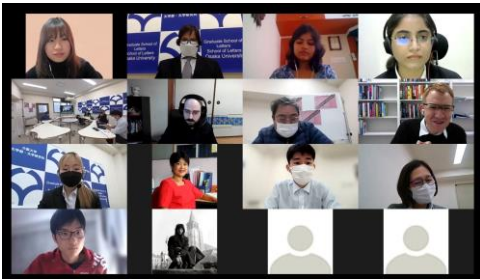
新型コロナウイルス感染症が流行し始め、海外への移動をほぼ中断せざるを得なくなった状況においても国際的な学术交流と学生交流を維持する目的で、国際連携室主催の国際セミナーを開催した。2020 年～2021 年度において 3 回実施した。このセミナーでは、文学部・文学研究科の日本人学生や留学生だけではなく海外の大学の学生や教育者も参加し、口頭発表のみならず、質疑応答・教育研究者によるコメント等も英語で行った。また、海外からの参加者と自由に意見交換や議論が行える環境を提供した。1 回目は 2021 年 3 月 15 日 (文学部学生 5 名による口頭発表)、2 回目は 2021 年 8 月 18 日 (文学部学生 3 名による口頭発表)、3 回目は 2022 年 2 月 18 日 (文学部学生 3 名による口頭発表) に開催した。文学部・文学研究科の学生の口頭発表の準備にあたって、国際連携室では英語の発表方法等について指導・助言した。本セミナーは、文学部学生が海外の教育研究者や学生と交流するだけでなく、語学研修にもなったと言える。



国際セミナー2021年3月15日



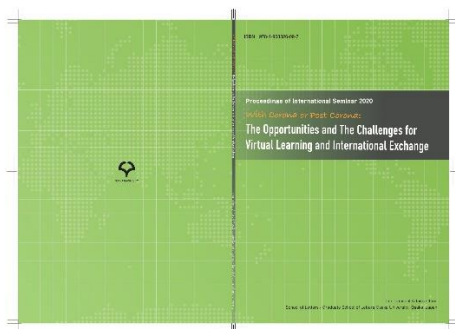
国際セミナー2021年8月18日



国際セミナー2022年2月18日

・ ISBN 付けプロシーディングの刊行

2021年3月15日の国際セミナーで報告されたペーパーを論文として2021年8月に刊行した。



(5) 広報活動

文学部・文学研究科で実施する国際交流活動の記録・広報を目的に、『国際交流 Newsletter』を年1回刊行した(11号、12号)。また、文学部・文学研究科の学生が申請・利用できる留学・研修についての情報をまとめた冊子『Let's study abroad』を年1回(2021-22、2022-23)発行した。

(望月 太郎)

客員研究員の受入れと本研究科教員の海外における研究活動

1. 外国人招へい研究員

出身国	2020年度		2021年度	
	人数	受け入れ講座	人数	受け入れ講座
中国	6	日本学1、国文学・東洋文学4 世界史1	4	日本学1、国文学・東洋文学2 文学環境論1
韓国	2	哲学1、国文学・東洋文学1	3	哲学1、国文学・東洋文学2
台湾	1	日本学1		
アメリカ	1	芸術史1	1	芸術史1
ポーランド			1	国文学・東洋文学1
合計	10		9	

2. 教員の海外研究活動

	外国出張		海外研修	
	2020年度	2021年度	2020年度	2021年度
	0	4ヶ国・地域 延べ6名 (6件)	0	0
韓国		1		
タイ		2		
アメリカ		2		
ドイツ		1		

留学状況および留学生の受入れ状況

1. 留学状況

学生派遣

2020年度 留学等による派遣は2名。(2021年2月1日付け、休学事由「留学」を含む)

2021年度 留学等による派遣は16名。(2022年2月1日付け、休学事由「留学」を含む)

課程	研究科						
	博士後期課程			博士前期課程		修士課程	
学年	3年	2年	1年	2年	1年	2年	1年
2020年	0	0	0	0	0	0	0
2021年	1	1	0	1	2	0	0
学部							
学年	4年	3年	2年				
2020年	0	1	1				
2021年	1	4	6				

渡航先	件数	
	2020年	2021年
ドイツ	1	2
中国	0	1
フランス	0	1
アメリカ	0	1
イギリス	0	7
イタリア	0	1
オランダ	1	1
台湾	0	1
デンマーク	0	1
合計	2	16

大学で実施されている語学研修等参加者

	グローニンゲン		その他		合計	
	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部
2020年	0	6	0	4	0	10
2021年	0	0	3	6	3	6

2. 留学生の受入れ状況

留学生受入れ

課程	研究科						
	博士後期課程			博士前期課程		修士課程	
	3年	2年	1年	2年	1年	2年	1年
2020年	20	10	10	19	20	3	4
2021年	21	11	7	24	27	4	4

学年	学部			
	4年	3年	2年	1年
	2020年	12	8	10
2021年	14	10	10	26

		研究科			学部	
		研究生	特別研究学生	特別聴講学生	研究生	特別聴講学生
2020年	合計	2	1	4	16	8
	部局間	0	1	3	0	0
	大学間	0	0	0	0	0
	協定外	2	0	1	16	8
2021年	合計	3	2	5	10	19
	部局間	0	1	3	0	3
	大学間	0	0	0	0	1
	協定外	3	1	2	10	15

OUSSEP, Maple 学生の受入れ

	プログラム	OUSSEP		Maple	
		研究科	学部	研究科	学部
2020年	合計	0	4	0	3
	部局間	0	0	0	0
	大学間	0	4	0	3
2021年	合計	1	3	0	2
	部局間	0	0	0	0
	大学間	1	3	0	2

留学生の出身国・地域（OUSSEP, Maple を除く）

	2020 年度	2021 年度
	出身国・地域 23	出身国・地域 25
中国	101	136
香港	3	2
韓国	42	38
台湾	6	5
インド	1	1
アメリカ	3	3
カナダ	1	1
イギリス	2	1
フランス	2	2
ドイツ	3	0
イタリア	0	1
スイス	1	1
オランダ	1	1
ポーランド	1	0
スウェーデン	1	1
ベラルーシ	1	1
イラン	1	0
ロシア	2	3
ギリシャ	1	0
ブラジル	3	2
ブルガリア	1	2
デンマーク	1	1
トルコ	1	2
ルクセンブルク	1	1
ハンガリー	0	1
キプロス	0	1
ベルギー	0	1
ウクライナ	0	1
スロバキア	0	1
合計	180	210

留学生の博士学位取得

留学生（元留学生）の博士号取得

専門分野	2020 年度	2021 年度
日本文学	1	3
比較文学	1	1
国語学	1	2
日本語学	3	1
日本史学	0	0
音楽学・演劇学	0	0
合計	6	7

(Mohammad Moinuddin)

ここ数年大幅に運営費交付金が減らされているため教育・研究活動における外部資金の役割はますます大きくなっている。外部資金は種々のかたち、様々な機関のものが導入されており、その全容の把握は難しい。研究代表者となっている場合だけでなく、研究分担者となっている場合でもかなりの件数と金額が導入されていると考えられる。逆に研究代表者となっている場合でも、金額のすべてが文学研究科で支出されているわけではなく、他大学・他機関の研究分担者への配分金の存在もある。したがって、ここでは件数や金額が把握しやすい、文学研究科の構成員が代表者となって取得している外部資金についての概要を紹介しておきたい。なお、文学研究科の教員だけでなく、大学院生が獲得している外部資金も考慮に入れることとする。

1. 科学研究費助成事業

科学研究費助成事業（以下「科研費」という。）の取得について件数、金額（直接経費のみ）の増減をまずみておくことにしたい。ここには、日本学術振興会の特別研究員奨励費も含まれる。

表 1-4-1 取得された科研費の件数と金額変化およびその科研費予算総額との比較

年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
件数	122	114	124	121	115	112	109
増減	0.96	0.93	1.09	0.98	0.95	0.97	0.97
金額(千円)	193,400	169,255	166,304	151,021	148,041	153,470	139,960
増減	0.97	0.88	0.98	0.91	0.98	1.04	0.91
科研費予算総額 (億円)	2,273	2,273	2,284	2,336	2,372	2,374	2,487
増減	1.00	1.00	1.00	1.02	1.02	1.00	1.05

科研費の取得件数は、2017年度をピークに減少傾向にある。また、2011年度に科研費の一部が基金化されたため一時的に全体の予算総額が大幅に拡大するも、近年はほぼ横ばいである。

表 1-4-2 取得された科研費の内訳

年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
基盤研究(A)	8	7	7	7	5	6	5
同金額(千円)	64,400	42,900	41,100	38,395	33,800	37,620	31,800
基盤研究(B)	13	10	12	12	10	10	12
同金額(千円)	37,100	30,000	34,500	33,400	32,700	29,600	34,300
基盤研究(C)	40	31	37	37	37	37	36
同金額(千円)	39,900	30,093	34,300	32,968	31,635	27,300	25,000

基盤研究(A)は、2010年度までの取得数は4、5件ほどであったが、2011年度から8件に倍増し高い水準を維持し、2019年度より減少傾向にある。また、基盤研究(B)は、2015年度以降は件数を維持している。このほか、基盤研究(C)については、2015年度まで上昇し、近年は再びやや減少している。

2. その他の外部資金

科研費以外の外部資金も極めて重要である。2013 年度から文化庁の文化芸術振興費補助金（大学を活用した文化芸術推進事業）を取得し、劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業を3年間行った。その後、2019 年度から再び同事業（「微の上を鳥が飛ぶ」）を実施している。また、2015 年度以降、国立大学改革強化推進補助金（優れた若手研究者採用拡大支援）を受け、優れた若手研究者を4名採用することができた。また、同年始めて民間等との共同研究が始まった。なお、大学院生が獲得した助成金については、会計担当部署が資金獲得者の自己申告により把握している数値に過ぎず、すべてを把握できているわけではない。

種類	件数と金額	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度	2020 年度	2021 年度
国立大学改革強化推進補助金(優れた若手研究者採用拡大支援)	件数	3	3	2	2	—	—	—
	金額(千円)	34,171	18,440	14,194	12,356	—	—	—
文化芸術振興費補助金(大学を活用した文化芸術推進事業)	件数	1	—	—	—	1	1	1
	金額(千円)	21,792	—	—	—	18,000	15,400	20,000
各種財団などからの研究助成金	件数	8	8	5	5	9	3	4
	金額(千円)	7,651	12,091	3,386	2,544	4,768	1,788	567
大学院生の獲得している研究助成金	件数	42	47	46	35	58		
	金額(千円)	26,522 (283,220 ハンガリー フォロント)	24,324	24,126	23,833	23,430	16,649	
預かり個人交付補助金(国文学研究資料館共同研究)	件数	1	1	1	—	—	—	—
	金額(千円)	1,800	450	150	—	—	—	—
受託研究	件数	2	1	1	1	1	1	2
	金額(千円)	3,154	1,430	10,348	6,240	5,382	357	540
共同研究	件数	1	1	1	1	1	1	2
	金額(千円)	1,000	1,000	300	300	200	0	0

エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム 「ユーロカルチャー」

2008年4月よりエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム「ユーロカルチャー」の圏外協定校としての活動を始めたが、2011年10月からはヨーロッパ圏外のフル・パートナーとして、他の3つの圏外協定校（メキシコ国立自治大学、インド・プーネ大学、米国・インディアナ＝パーデュ大学インディアナポリス）とともにプログラムの運営により深く関わることとなった。同プログラムは、欧州における高等教育機関同士の連携を強めるとともに相互間の流動性を高め、大学教育を国際化することを目的としており、英語を共通使用言語としている。ヨーロッパの大学のみならず、ヨーロッパ圏外の大学もパートナー校として参加しており、世界的な規模で展開されている最先端の教育プログラムであるといえる。本研究科は人文学分野における日本初めての同プログラム協定校となった。

国際連携室は、同室に設置されたエラスムス・ムンドゥス部門（EM部門）、RAとともに、同プログラム運営を担当している（受け入れる学生および教員の宿舎の手配、ビザ申請、各種書類作成、シラバス作成、リーディング・テキストの選定・購入、本学からの派遣留学生の募集説明会開催と面接選考実施、本学からの教員派遣等）。例年10月～12月の3ヶ月間、同コンソーシアムの学生最大5名を「特別聴講学生」として受け入れ、「世界の中の現代日本」をテーマとした英語による授業5科目を10回にわたって開講し、25ECTS（10単位相当）を認定している。授業にはコンソーシアム所属学生以外の留学生や日本人学生も参加している。授業を行う際には双方向性を重視しており、各授業内においてフィールドトリップも実施している。また、毎年ユーロカルチャー・コンソーシアム大学の教員1～2名を受け入れ、適宜助言を得て、改善に努めている。さらには日本語教育の専門家および大学院生の協力を得て、日本語学習の機会を提供することにより、短期間にもかかわらず高い教育効果をあげている。本研究科は、同プログラムの4校の圏外協定校の中でも常に高い評価を得ており、これまでのところ、欧州側での派遣留学先として希望する学生が最多である。

2020年度は、コンソーシアムの大学から5名の学生を受け入れる予定だったが、COVID-19のため、時に当該学生も含めてのメールやオンライン会議でのやりとりの後、残念ながら中止ということとなった。例年の本学からの派遣留学生の募集説明会開催も、オンラインで行った。6月にはグローニンゲン大学が主宰するオンラインで開催されたユーロカルチャー・コンソーシアム全体会議に、本研究科教員2名（橋本教授、モインウッディン助教）が参加し、同プログラム実施の課題について意見交換を行った。

2021年度は、コンソーシアム大学から8名（内3名は2020年度）の学生を受け入れる予定だったが、COVID-19の影響で、のメールやオンライン会議でのやりとりの後、2021年度も中止とせざるを得なくなった。例年の本学からの派遣留学生の募集説明会をZoomで開催した後、対面の面接選考を部門で実施し、その結果、1名を推薦し、当学生はEM本部から奨学金を受けた。本研究科からは1名の教員（高安啓介教授）の派遣が決定した（延期の後、2022年4月30日～5月15日に滞りなく派遣は実施された）。

（橋本 順光）

文学研究科は、2017年度から、全学に対し、大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」の提供を始めた。プログラムの詳細は下記の通りである。なお、本プログラムの英語科目の担当者はニコラス・ランブレクト助教である

2021年度版プログラム提案書

プログラム名	グローバル・ジャパン・スタディーズ	
幹事部局	文学研究科	
実施責任者	文学研究科・教授・宇野田尚哉	
連携部局	言語文化研究科，国際公共政策研究科，人間科学研究科，法学研究科，経済学研究科	
履修対象者	修士・博士	
修了要件	10単位以上	下記①のうち1科目2単位を選択必修とします。 下記②のうち1科目2単位を選択必修とします。 下記③の6つの分野の3つから1科目2単位ずつ履修するものとします。 以上の条件を満たして10単位以上修得していることを修了要件とします。
趣旨・概要	研究/教育のグローバル化にともなって、日本には海外からますます強い関心が寄せられています。そのような関心に有効に応えるためには、学問分野ごとに深められてきた日本研究の成果を総合し、全体像を把握しやすいかたちで提示する必要があります。また、日本研究の成果を英語で発信する能力を高めることも不可欠です。本プログラムは、そのようなグローバル化時代の要請に応える新たな日本研究プログラムとして設置されました。	
到達目標(修了時に身に付く能力)	本プログラムでの学習を通して、以下の能力を備えた方に修了認定証を授与します。 (1)複数の分野の日本研究の最新の成果を理解している。 (2)海外の日本研究の最新の動向を踏まえて議論することができる。 (3)日本研究の成果を英語で発信するための基礎的なスキルを身につけている。	
カリキュラムの構成	上記(1)～(3)の到達目標を達成するため、3つの科目群(下記①～③)を設け、さらにそのうちの1つは6つに下位区分して、系統的かつ効果的な学修を促します。 (1)下記③のうち、異なる分野(1～6)の授業を3科目6単位履修するものとして、日本についての多面的・総合的理解を促します。 (2)下記②の授業を選択必修とし、海外の日本研究の動向を踏まえて議論する能力を高めます。 (3)下記①の授業を選択必修とし、日本研究の成果を英語で発信するための基礎的なスキルを身につけます。	
履修資格・条件	グローバルな観点から日本を研究し、その成果を積極的に発信したいという意欲を持つ学生を歓迎します。	
前提知識の目安	日本研究のいずれかの分野で学部レベルの知識を身につけていることが望ましい。	
特記事項	本プログラムは、2年間のプログラムとします。	

構成科目							
時間割 コード	授業科目名	単位数			開講学期 (4学期制)	開講部局(課程)	備考
		必修	選必	選択			
204771	Academic Skills for Humanities 1		2		春～夏学期	文学研究科 (博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
204750	Academic Skills for Humanities 1		2		春～夏学期	文学研究科 (博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
204772	Academic Skills for Humanities 1		2		秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
204767	Academic Skills for Humanities 1		2		秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
204768	Academic Skills for Humanities 2		2		春～夏学期	文学研究科 (博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
204751	Academic Skills for Humanities 2		2		秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
204773	Issues in Contemporary Japanese Studies 1		2		春～夏学期	文学研究科 (博士前期)	②英語による講義
204752	Issues in Contemporary Japanese Studies 1		2		春～夏学期	文学研究科 (博士前期)	②英語による講義
204774	Issues in Contemporary Japanese Studies 1		2		秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	②英語による講義
204769	Issues in Contemporary Japanese Studies 1		2		秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	②英語による講義
204770	Issues in Contemporary Japanese Studies 2		2		春～夏学期	文学研究科 (博士前期)	②英語による講義
204753	Issues in Contemporary Japanese Studies 2		2		秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	②英語による講義
204754	世界のなかの日本史 I			2	春～夏学期	文学研究科 (博士前期)	③- 1 歴史
204755	世界のなかの日本史 II			2	秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	③- 1 歴史
204756	世界文学のなかの日本文学 I			2	春～夏学期	文学研究科 (博士前期)	③- 2 文学
204757	世界文学のなかの日本文学 II			2	秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	③- 2 文学

306000	日本語学研究総論			2	春～夏学期	言語文化研究科（博士前期）	③- 3 言語
306100	日本語教育学研究総論			2	春～夏学期	言語文化研究科（博士前期）	③- 3 言語
204758	日本語の歴史			2	秋～冬学期	文学研究科（博士前期）	③- 3 言語
204766	現代日本語の諸相			2	春～夏学期	文学研究科（博士前期）	③- 3 言語
204760	世界のなかの日本美術			2	春～夏学期	文学研究科（博士前期）	③- 4 芸術
204761	世界のなかの日本演劇			2	秋～冬学期	文学研究科（博士前期）	③- 4 芸術
204762	現代日本のポピュラー音楽			2	秋～冬学期	文学研究科（博士前期）	③- 4 芸術
306200	日本文化学研究総論			2	秋～冬学期	言語文化研究科（博士前期）	③- 5 文化・社会
204763	日本の民俗と宗教			2	春～夏学期	文学研究科（博士前期）	③- 5 文化・社会
204764	日本の社会と思想			2	夏学期(集中)	文学研究科（博士前期）	③- 5 文化・社会
204765	異文化交流のなかの日本			2	秋～冬学期	文学研究科（博士前期）	③- 5 文化・社会
211632	コンフリクトの人文科学特講Ⅱ			2	秋～冬学期	人間科学研究科（博士前期）	③- 5 文化・社会
220434	日本法総合演習			2	春～夏学期	法学研究科（博士前期）	③- 6 法・政治・経済
220435	日本政治総合演習			2	春～夏学期	法学研究科（博士前期）	③- 6 法・政治・経済
230130	日本経済史Ⅰ			2	春～夏学期	経済学研究科（博士前期）	③- 6 法・政治・経済
230131	日本経済史Ⅱ			2	秋～冬学期	経済学研究科（博士前期）	③- 6 法・政治・経済
231198	経済学特論(日本経済史Ⅰ)			2	春～夏学期	経済学研究科（博士前期）	③- 6 法・政治・経済
231199	経済学特論(日本経済史Ⅱ)			2	秋～冬学期	経済学研究科（博士前期）	③- 6 法・政治・経済
230134	グローバル経営史Ⅰ			2	春～夏学期	経済学研究科（博士前期）	③- 6 法・政治・経済
230135	グローバル経営史Ⅱ			2	秋～冬学期	経済学研究科（博士前期）	③- 6 法・政治・経済
311484	特殊講義（日本とアジアの国際政治）			2	春～夏学期	国際公共政策研究科（博士前期）	③- 6 法・政治・経済

(宇野田 尚哉)

概要

世界中の学界で注目されているグローバルヒストリー研究の国際的ネットワークを、世界主要地域の拠点大学と協力して構築し、大阪大学文学研究科をその中心に位置づけることで、日本からの研究面での情報発信と、若手研究者（院生・ポスドクを含む）の活躍の場を創出する。大阪大学における世界史研究に関係した研究者が部局横断的に結集し、研究セミナー・ワークショップや、外国人研究者を招聘した国際会議等を通じて、アジア太平洋地域における研究・教育のハブとして活動することを目標としている。

組織・体制

2014年に開設された全学的研究組織・先導的学際研究機構(The Institute for Open and Transdisciplinary Research Initiatives: OTRI <http://otri.osaka-u.ac.jp/>)「グローバルヒストリー研究部門」(25名で構成する各研究科横断の研究機構)のメンバーと協力して活動している。

文学研究科世界史講座では、従来から、グローバルヒストリーに関して具体的な研究課題を設定し、世界的に注目される業績を蓄積してきた。すなわち、①中央ユーラシア史研究：古代・中世のユーラシア遊牧民・商人の活動を、モンゴル帝国に代表されるアジアの諸帝国の興亡と関連付けて考察する、②海域アジア史研究：中近世から近代初頭の、日本を含む国家間の交渉・相互認識と、商人・通商ネットワークの関係を考察する、③アジア国際経済秩序研究：近代以降のアジア独自の国際経済秩序の形成・発展を、世界システム論の見直しを通じて考察する、以上の三点である。大阪大学は、古代から現代まで一貫して、通時的な世界史研究を行っており、近世世界や近現代史の研究に特化した欧米の他の研究拠点とは異なる長期の時間軸を持ち、日本を含むアジアの観点から、第一次史料に基づいて実証的な研究を展開してきた点で、独自性を有している。我々は、この三群の研究成果をさらに緊密に結びつけて、アジアから見たトータルな独自の世界史像を構築することを目指しており、その際に、旧大阪外大が蓄積してきたアジア地域研究の成果も取りこんでいる。

同時に、「社会学連携」による研究成果の広範な情報発信を通じて、大阪大学における文系部局の研究成果を広めることも重視している。具体的には、毎月一回開催している「大阪大学歴史教育研究会」を舞台に、全国の中等教育の歴史教員、マスコミや教科書会社の関係者等との討議・情報交換・共同企画を通じて、歴史認識・歴史教育に関する問題提起を行っている。

こうしたグローバルヒストリー研究は、歴史学だけでなく、「日本学」(Global Japanese Studies)を含めたアジア地域研究、国際関係論、比較文明論、世界システム論、現代経済論など、多岐にわたる隣接諸領域の研究ともリンクしてくる。このような分野横断的で学際的な性格と、高度な国際的コミュニケーション能力が求められることから、既存の分野や領域を超えて国際的に活躍できる若手研究者の育成も可能になる。

活動状況

2020-21年度は、Covid-19のパンデミックにより、国際交流活動が大きな制約を受けるなかで、オンラインを最大限活用して大阪からの情報発信を続けてきた。

活動の中心に置いたのは、三つの国際共同研究である。第一の協同・連携は、アジア太平洋地域におけるグローバルヒストリー研究のハブ・ゲートウェイとして、2008年に結成されたアジア世界史学会(The Asian Association of World Historians: AAWH、本部事務局は2022年10月まで大阪大学文学研究科)との連携強化である。AAWHは、3年に一度の国際会議(2009年：大阪大学、2012年：韓国・梨花女子大学、2015年：シンガポール・南洋理工大学、2019年：大阪大学)を開催しているが、我々はAAWHを結節点として、アジアで世界史・グローバルヒストリーを研究する学者との連携・交流を強化するなかで、我々が目指す「アジア発の世界史研究」の充実を目指している。

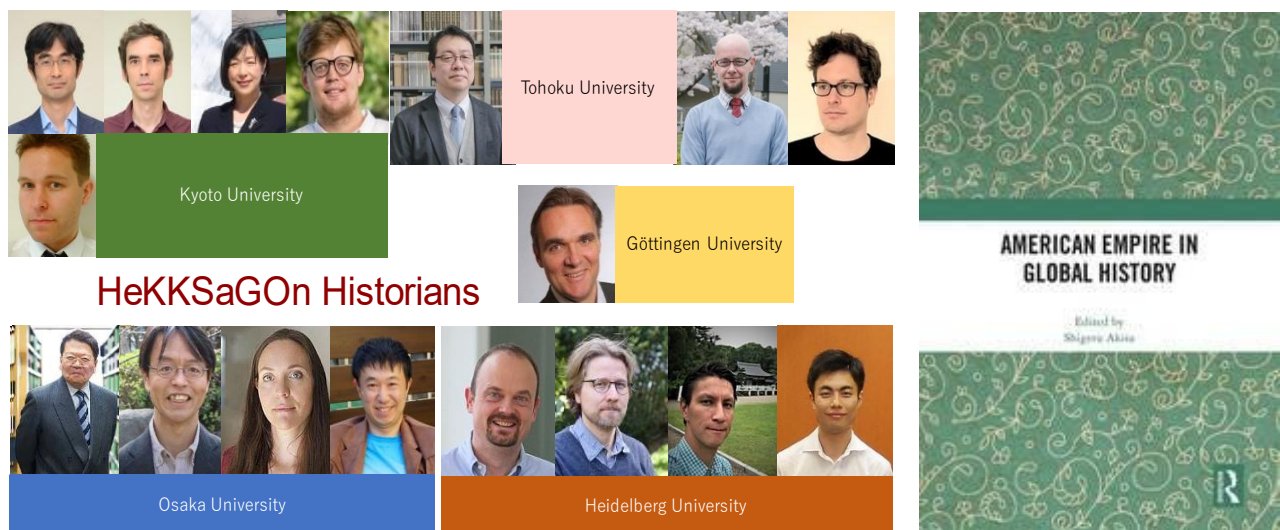
本来なら2020-21年度は、2021年10月にインド・ネルー大学での開催が予定されていた、第五回大会の準備作業を行

うはずであった。だが、大会の開催が2022年10月に1年間延期されたため、会議のメインテーマである *Asia and the Globe: Connecting the Past with the Present* および7つのサブテーマに関する報告予定者の確保に努めた。

第二の国際共同研究が、日独6大学の国際連携組織である日独六大学学長会議 (HeKKSaGOn) との連携で、2023年9月にゲッティンゲン大学で開催される第8回会議に向けて、4年計画のグローバル歴史共同研究プロジェクトを立ち上げた。ハイデルベルク大学、ゲッティンゲン大学、京都大学、東北大学の研究者と共に、2021年9月1-3日に第一回 ZOOM Workshop “*From Empires to Decolonization in the Indo-Pacific World*” を実施した。2022年3月29-30日には、第二回 ZOOM Workshop “*Transwar and Transimperial History in the Asia-Pacific---Decolonization, Development and Resources*” を開催した。現在、次回の HeKKSaGOn 会議に合わせた英語論文集の刊行のため最終の準備を進めている。

第三の国際共同研究が、2021年5月に大阪大学で開催された日本西洋史学会の企画と連動した「アメリカ帝国」論に関する共同研究である。阪大での西洋史学会は、本来は1年前の2020年5月に開催予定で、それに合わせて国際シンポジウム *Round Table: “American Empire” in the context of Global History* を開催する予定であった。Covid-19 パンデミックのため、シンポジウム自体を ZOOM Workshop に切り替えざるをえなくなり、キイノート報告者の Tony Hopkins 教授の招聘 (日本学術振興会) も延期せざるをえなくなった。そのため代替措置として、2020-21年度に合計6回のオンラインによる Zoom Workshop を開催した。この成果は、学界を代表する英文国際ジャーナル *The Journal of Imperial and Commonwealth History*, Vol.49 Number 3 (June 2021: ISSN: 0308-6534) の特集号 ‘Special Issue: American Empire in Global History’ として刊行される共に、Routledge 社から同名の英語論文集として刊行された。

以上に加えて定期的に、Osaka University Global History Seminar (研究会) と、京都産業大学・フィンランド/ユヴァスカラ大学との共催で Global History Lecture Series (ZOOM 講演会) を開催している。講師としては、世界の主要大学でグローバル歴史研究を展開する研究者を招聘して、英語・日本語で討議を行い、若手の積極的な参加・発言を促してきた。2020年度は11回、21年度は9回のセミナーを、2020年9月から開始した Global History Lectures は两年度で7回開催した。詳細については、<http://www.globalhistoryonline.com/> (日英二か国語で掲載) を参照していただきたい。



本グループが力を入れているもう一つの柱である社会貢献活動としての「歴史教育と歴史学」に関しては、大阪大学歴史教育研究会と協力して、年間9回の月例研究会で、高等学校で第一線の教育者としてご活躍の先生方をお招きして議論を重ねている (<https://sites.google.com/site/ourekikyo/>)。2021年度は、特集「岩波新書「シリーズ中国の歴史」から考える新しい中国史」を企画し、院生・若手研究者の主体的な学習を促している。成果は、『大阪大学歴史教育研究会活動報告シリーズ』No.18, 19として刊行した。

文学研究科を中心とするグローバル歴史研究は、今後とも、アジア太平洋地域における新たな世界史、グローバル歴史研究のハブとしての役割を果たしていきたい。

(秋田 茂)

「微しの上を鳥が飛ぶⅡ・Ⅲ」 文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム

目的と概要

本プログラムは、大阪大学大学院文学研究科を主な舞台として、大阪大学社会学部、大阪大学総合学術博物館と共同し、近隣地域の劇場・音楽堂・美術館等と連携して、主として社会人のためのアートマネジメント人材育成プログラムを推進することを目的として、開催してきた。

今日のアートに求められているものは、共同体や社会の中で自己実現を果たすための媒介としての役割、人々の繋がりを強固にする紐帯、忘れられがちな記憶を鮮明にし価値を変換する装置としての役割など多岐に渡る。それらを実現し推進していくアートマネジメント人材には、アートを展開する場や共同体の特性に応じて、臨機応変に対

応していく実践的な能力（「アート・プラクシス」の力）が求められる。さらに、アートには、近隣の地域社会からグローバルな社会、アーティストと一般市民が集い多様な生を実現していく、といった現代的な課題解決方法も求められている。そのためアートやアートマネージャーには、アート・プラクシス能力（アートを展開する場の特性に応じて、臨機応変に対応していく能力）を発揮できる人材が必要とされている。本プログラムでは、人文学的な知見を活用しつつ、アート・プラクシス能力を発揮できる人材を育成することをねらいとして、令和2年度および令和3年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」に申請し、採択された。本プログラムは、3年計画のもので、2019年度を準備期間、2年度目は発展期間、3年度目は実践期間と位置づけ開催した。なお、2年度目からは、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、オンラインでの実施も導入した。特に「微しの上を鳥が飛ぶⅡ」はほとんどのプログラムをオンラインにて行った。

この事業は、大阪大学大学院文学研究科が主催し、大阪大学総合学術博物館と共催して推進したプログラムである。文学研究科芸術系ブロックと総合学術博物館の教員が中心になり、兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）、大阪中之島美術館、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール、公益財団法人吹田市文化振興事業団（メイシアター）、浄るりシアター、豊中市都市活力部文化芸術課、公益財団法人メイプル文化財団といった芸術諸機関と連携して実施した。また、3年目には、大阪アーツカウンシル 大阪市立東洋陶磁美術館 京都コンサートホール（公益財団法人 京都市音楽芸術文化振興財団）の協力も得た。また、それらの芸術諸機関からアドバイザーを迎え、事業担当者とともに「文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム協議会」を組織し、プログラム全体を監督し、評価に努めた。

「文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム協議会」は、会議にて、アドバイザーから具体的で専門的な助言をうけた。

本プログラムでは、アート・プラクシス人材育成のために、基礎的セミナーやインタビュー的学習、作品制作（Ⅱ）、受講生企画（Ⅲ）の実践などを通して学習機会を設けた。

Ⅱでは、プログラムを基礎から応用まで階層的に学べるよう1年を3期にわけ、[第1期]基礎レクチャー、[第2期]アートの事前・事後双方の扱いを学ぶ「インタビュー」、[第3期]作品を巡ってアーティストとセッションを行う作品制作、とした。なお、Ⅲでは、3期制を解体、発展させ、A～Bの3つのフェーズを用意し、[フェーズA]基礎レクチャーとディスカッション、[フェーズB]インタビュー、[フェーズC]受講生企画、として実施した。「受講生企画」では、企画立案、広報、運営、記録等のアートイベントにおける一切を（事業担当者がサポートしつつ）受講生が担い、実践的にアートイベント運営方法を学び、実施した。

いずれにおいても、基礎レクチャーでは、アートマネジメントや文化政策についてのレクチャーを提供した。インター



「微しの上を鳥が飛ぶⅡ」ポスター（左）
「微しの上を鳥が飛ぶⅢ」ポスター（右）

ウィークでは、1) 対立と調停、2) アイデンティティの揺れ、3) 物語の領分、の3つのテーマについて、ダンス・演劇、音楽、美術といった様々なジャンルのアート作品を通し、アーティストと対話しつつ理解を深めた。滞在制作では、「作品制作」のプログラムで学んだことを具体化しつつ作品公開を進めた。同時に、アート実践を地域社会に深く根付かせていくために、事後の「ポスト・プロダクション」も学んだ。また「受講生企画」では3年間の知見や経験を活かし、アートイベントを実際に実施した。このように、「アート・プラクシス」の力を養った、今日的で未来的なアートマネジメント人材を、文学研究科における研究基盤との接合により、新しく生み出していくことを目標とした。研修の受講者は、芸術系諸機関で働く人々や働くことを希望する社会人などを中心にして広く公募し、29名(Ⅱ)、28名(Ⅲ)を受講生として受け入れた。受講生が受講した研修科目は、以下の通り。

〈徴しの上を鳥が飛ぶⅡ〉

- ・活動①「〈徴しの上を鳥が飛ぶⅡ〉 オープニング・セミナー」
オリエンテーションを開催し、アートの可能性と意義と問題を学ぶとともに、本事業の理念(「アート・プラクシス」能力のある人材育成と人文学の研究成果を活かす「ポスト・プロダクション」の新たな可能性の探究)を共有した。
- ・活動②「〈徴しの上を鳥が飛ぶⅡ〉 連続レクチャー」
アートマネジメント基礎講座として、「アートマネジメントの実際」、「アート研究の現在」、「アートとデザイン」の3カテゴリーについて、ゲスト講師による講演を行った。
- ・活動③-1「〔対立と調停〕 森村泰昌との対話2」
森村泰昌本人との対話を通し、現代社会や現代アートにおける問題に向き合っている作家や作品への理解を深めた。また、ガイドのもと、アートの拠点が生息する北加賀谷地域を散策した。
- ・活動③-2「〔対立と調停〕 バックステージ・セミナー2」
箏曲の歴史は、単に日本伝統音楽の歴史であるだけでなく、西洋の音楽語法との「対立と調停」の歴史でもあった。演奏会とその前後の対話によって、音楽を中心にアートを取り巻く現代の実情を学ぶ。
- ・活動③-3「〔対立と調停〕 工芸の魅力を伝える」
陶磁器の貴重なコレクションを有し、工芸美術の意欲的な展示も行う東洋陶磁美術館の展覧会とセッションを通して、美術館の展覧会へのサポートや来館者への配慮のあり方などについて考察した。
- ・活動④-1「〔アイデンティティの揺れ〕 現代における芸能の所在」
神楽の実態から、様々な地域の持つ魅力と地域が抱える課題について学んだ。
- ・活動④-2「〔アイデンティティの揺れ〕 アート・リング～アートのエコシステムへのいざない～」
アート従事者にも経済や科学などを含む分野横断的知識と視野を学んだ。
- ・活動④-3「〔アイデンティティの揺れ〕 水都大阪エコミュージアムプロジェクト」(橋爪節也)
水際からという乗船による新たな視点から水都大阪を眺め、体感することで、「エコミュージアム」の実際を学んだ。
- ・活動⑤-1「〔物語の領分〕 伝統演劇の現代的表現をめぐって」
伝統と現代の接点を模索している現代劇団の作品に接することで、現代的課題を解決する方法を考えた。演劇そのものが持つ魅力を知るだけでなく、演劇が抱える課題解決の方法論を知ることができる。
- ・活動⑤-2「〔物語の領分〕 バックステージセミナー1」(伊東信宏)
現代の音楽界の最前線について直接演奏家から話を聞き、知見を得た。広報や新しい音楽活動の展開について演奏家と共に考えることで、音楽を通じた社会との対話の方法について考える素地を養った。
- ・活動⑥「作品制作とセッション」
オーストラリアで移民の問題を扱う作品を作る金森マユの作品を通して、アーティストとの交流や対話も経験し、一

般社会へアート作品を発信できる力を蓄えた。

・活動⑦「食のつながり：神山町のフード・ハブ・プロジェクト」

アーティスト・イン・レジデンスを行っている徳島県の神山町におけるシェフ・イン・レジデンスを視察し、アートと別業種とのコラボレーションやネットワーク構築などについて重点的に学ぶ。

〈徴しの上を鳥が飛ぶⅢ〉

・活動①「〈徴しの上を鳥が飛ぶⅢ〉 オープニング・セミナー」

オリエンテーションによって、アートが社会に成し得る可能性と今日的な意義と問題を学ぶとともに、本事業の理念（「アート・プラクシス」能力のある人材育成と人文学の研究成果を活かす「ポスト・プロダクション」の新たな可能性の探究）を共有した。

・活動②「空間の生産と場所の詩学」

アートスペースと空間について考えるシンポジウムと参加型のワークショップを行い、人が集まるアートスペースを維持する意義は何なのかを学び、芸術と公共空間の結びつきについて考える機会とした。

・活動③「〔対立と調停〕 パフォーミング・エコロジー」

極東退屈道場の林慎一郎による、公衆電話を使ったパフォーマンスによって地域社会の持つ環境の問題を理解した。

・活動④「〔対立と調停〕 工芸の魅力を伝える」

陶磁器の貴重なコレクションを有し、工芸美術の意欲的な展示も行う東洋陶磁美術館の展覧会とセッションを通して、美術館の展覧会へのサポートや来館者への配慮のあり方などについて考察した。

・活動⑤「〔対立と調停〕 ジオ・パソロジーを超えて」

シドニー在住の写真家・映像作家 金森マユの写真展覧会と映像の上映会を行い、オーストラリア日系移民についての理解や作品の理解を深め、展覧会や上映会の実施を通して実践的に学んだ。

・活動⑥「〔アイデンティティの揺れ〕 展覧会 路上芸人の時間」

デンマーク出身のジャーナリスト、ケント・ダールの視点による、ちんどん屋を中心とした世界各地の路上芸人や大道芸人の展覧会を実施した。作家とも交流し、路上芸人についてその現実を学んだ。

・活動⑦「〔アイデンティティの揺れ〕 ミュージアム・オオサカを紹介する」

社会に開いた新しいミュージアム・オオサカの探究として、「地域全体をミュージアム」と見なす「エコミュージアム」としての水都大阪（ミュージアム・オオサカ）を、レクチャーを通して学んだ受講生が案内した。

・活動⑧「〔アイデンティティの揺れ〕 アート・リング～アートのエコシステムへのいざない～」

デジタルアートを通して有識者との交流を通し、次世代の文化創生について考えた。

・活動⑨「〔物語の領分〕 油谷さんのコレクション探訪 一秋田の伝説的民具収集家と語りあう」

古い生活用品などを 60 年以上かけて収集している油谷満夫の「油谷これくしょん」を軸に、民芸運動に関心をもつアーティスト中村裕太とともに、道具をめぐるイメージの世界を体験した。

・活動⑩「〔物語の領分〕「陶埴」の制作・演奏・パフォーマンス」

京丹後市・ヒカリ美術館の協力を得、「陶埴」の制作と演奏を行うサウンドアーティスト鈴木昭男と土笛の制作と演奏を行い、地方でのパフォーマンス活動に取り組み、アートの場を作る行為を体験する。

・活動⑪「〔物語の領分〕 バックステージツアー「ラヴェルが幻視したウィンナ・ワルツを辿る」」

京都コンサートホールで計画されているコンサートについて、その企画から実現にいたるプロセスを辿り、公演にも参加することで、演奏会のバックグラウンド/バックステージを体験することを目指す。

・活動⑫「〔受講生企画〕 アーツ・プラクシス」

受講生が主体となって、様々なジャンルのアートイベントを3つ実施した。企画の立案、作家の選定、イベント運営、

記録作成等、アートイベントの実施に必要な様々を受講生が携わった。事業担当者は知見や経験を活かし、受講生をサポートした。

・活動⑬「〈徴しの上を鳥が飛ぶⅢ〉 クロージング・シンポジウム」

事業全体を振り返るシンポジウムにおいて、受講生が発表することで、一般社会へアート作品を発信できる力を蓄えた。また、ディスカッションを通して、本事業の意義や課題等を考察した。

成果と将来

受講生は、全体を統括するセミナーや、各事業担当者が推進する実践的な活動に参加するとともに、3年目には自ら企画を立ち上げ、運営し、プログラム履修を進め、年度末にレポートを提出した。活動への貢献度、出席率、レポートを総合的に判断し「Ⅱ」では25名、「Ⅲ」では23名の受講生に修了証を授与し、アートマネジメント人材を育成した。

アートマネジメント人材育成の目標として、「アート・プラクシスの力」を養い、作品やアーティストへの理解を深めるインタビュー、人文的な知を活用したアートによる課題解決などを設定した。本プログラムでは、約8割の受講生に修了証を授与することができた。3年計画で実施してきたこの事業では、レクチャーやアーティストとの対話、ワークショップなどを通して十分学ぶことができた。2年目からは新型コロナウイルス感染症の影響もあったが、遠隔で、あるいはオンラインでプログラムを実施する手法も取得できた。「受講生企画」においては3つの企画を受講生自らが企画運営し、展覧会や上映を行い、ウェブサイトや記録冊子の作成などポスト・プロダクションを含む実践を実現し、有意義な成果を発揮した。育成事業としても、成果のみならず、多方面の様々な人々とのネットワークが形成でき、実り多いものとなった。

3年間の事業終了後は、これまでの経験を土台として、アート・プラクシス人材育成の教育的経験をさらに大学の研究・教育に活かしていくために、人文学研究科や総合学術博物館の芸術政策論関連の授業や公開講座に組み込んでいけるよう計画している。2022年度からも、引き続き人文学研究科が総合学術博物館と共同で主催して、文化庁「大学における文化芸術推進事業」に申請した「中之島に馳を放つ—大学博物館と共創するアート人材育成プログラム」を実施している。また、社会人と学生とが共に学ぶ新しい形式を探求すべく、大阪大学の芸術・アートを活用した社学連携の拠点とする計画である「中之島アートセンター案」がある。中之島センター内の芸術エンターにおいて、芸術の研究・教育の拠点を置き、研究や教育プログラムとして展開を計画している。これらの事業により、社学連携的な芸術文化事業を展開していく。

(永田 靖・山崎 達哉)

本プログラムの趣旨は、次の通りである。募集要項の「趣旨」の項目から引用する。「2014年度より5年にわたり実施中であった「国際的連携型人文学研究教育クラスター（略称：人文学クラスター）」Global Linkage Clusters for Humanities (GLinCH)を、国際性の醸成と研究力の強化に特化した形で継承し、国際共同研究力向上推進プログラムを実施する。プログラムの目的は、すでに実績のある国際共同研究を基盤として、独創的かつ先駆的であり文学研究科を代表する研究活動を格段に発展させ、実り豊かな研究成果をグローバルに発信し可視化することにある。また、女性研究者及び若手研究者が国際的に研究活動できる場を確保するべく、これらの研究者の参画を申請の要件とする」。要するに、2018年度までの人文学クラスターに代わるものとして準備されたのが、このプログラムである。

このプログラムでは、国際共同研究グループにつき、次のような要件が設けられていた。募集要項から引用する。「国際共同研究グループは、文学研究科専任教員を研究代表者とし、海外の研究機関等に所属する外国人研究者、研究代表者とは所属専門分野もしくはコースを異にする文学研究科教員、文学研究科に所属する女性研究者及び若手研究者を、それぞれ少なくとも1名ずつ含むこととする」。

人文学クラスターのうち、2018年度まで「グローバル日本研究クラスター」として活動してきたグループが、上記の条件を満たすかたちで2019年度から国際共同研究グループ「越境文化研究イニシアティブ」を組織し、研究活動を継続した。研究代表者は宇野田尚哉文学研究科教授である。

この国際共同研究の軸になっているのは、北米の日本研究者（とりわけ、被爆体験の表象、戦後のサークル文化運動、在日文学などに関心を持っている研究者）との連携、および、ハイデルベルク大学日本研究所との連携であり、2019年度中の活動履歴は、前号の年報の該当箇所に掲載されている。

最終年度の2020年度には、2019年度の活動実績を踏まえ、国際シンポジウム等の開催を計画していたが、COVID19パンデミックの影響で移動が不可能となって従来のやり方での共同研究の継続が難しくなる一方、プロジェクト構成員がそれぞれの職場で新たな事態への対応に忙殺されたため、成果をまとめる方向での活動ができなかった。

しかし、新たな事態への対応の一環としてオンラインでの研究活動が一般化するなか、本プロジェクトも年度の後半には試行的にオンラインでの研究会等を開催した。2021年度以降は、経費のかからないオンラインでのコミュニケーションを基盤としつつ、あらためて研究成果の発信強化に取り組んでいくこととした。

(宇野田 尚哉)

教育ゆめ基金調査研究助成制度

「教育ゆめ基金」は、文学部創立 60 周年の 2008 年に文学部・文学研究科の教育活動の支援を目的として創設された。卒業生・修了生をはじめ、文学研究科・文学部を応援して下さる方々からのご寄付を原資として運用されており、文学研究科・文学部における教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、大学院生の調査補助、障がいを持つ学生の支援など、学生たちの修学支援に幅広く活用され、教育の活性化に大いに寄与している。

当初は文学部・文学研究科同窓会の協力を得て、同窓会ニューズレター送付の際に「教育ゆめ基金」の案内を同封していたが、2013 年からは全学の「未来基金」（2009 年創設）と窓口が統合されたのを機に、全学的な「未来基金」の案内に同梱して低コストで文学研究科・文学部の卒業生・修了生のほぼ全員に「教育ゆめ基金」の案内が送付できるようになり、寄付件数も飛躍的に増えた。しかし、2018 年度からこの方式が不可能になったことから、ふたたび同窓会ニューズレター送付の際に案内を同封する方式に戻すこととした。ニューズレターの送付先は卒業生・修了生のうち同窓会員に限られるため、周知の範囲が狭まり、結果として 2019 年度の寄付件数が大幅に減少したと思われる。

2020 年春、新型コロナウイルスの世界的流行が始まり、同年度は海外との交流がいちじるしく制限されたため、本助成制度を活用する機会も大きく減少した。そのため 2021 年度は、大学院生海外調査助成を柔軟に運用し、国内調査・研究データベース利用補助に活用して、院生の教育研究活動の支援充実を図った。

2022 年度から文学研究科と言語文化研究科が統合して人文学研究科に移行したことにともない、本助成制度の対象をあらためて明確化し、その内容と趣旨を卒業生・修了生ならびに在籍学生保護者に広く理解いただいたうえでご協力をお願いする、あらたな広報活動が不可欠となっている。

年度	収入額	支出額	残額	備考
2008 年度	2,187,900 (66 件)	0	2,187,900	本部管理等経費 1% (平成 24 年度まで同じ)
2009 年度	297,000 (9 件)	288,000	2,196,900	支出：留学生奨学金 288,000
2010 年度	1,004,850 (46 件)	300,264	2,901,486	支出：留学生奨学金 144,000 留学生宿舍費補助 90,000 留学生用インターネット補助 66,264
2011 年度	514,800 (24 件)	351,180	3,065,106	支出：留学生奨学金 288,000 留学生用インターネット補助 63,180
2012 年度	834,570 (35 件)	64,842	3,834,834	支出：留学生用インターネット補助 64,842
2013 年度	1,829,700 (53 件)	480,000	4,281,084	本年度より大阪大学未来基金と窓口統合（本部管理等経費 5%，以下同じ） 支出：文学部海外留学支援制度奨学金 480,000
2014 年度	1,377,975 (84 件)	560,000	6,002,509	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 360,000 調査研究助成 200,000
2015 年度	2,644,800 (111 件)	782,565	7,864,744	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 480,000 大学院生海外調査等助成 278,565 障がいのある学生のための支援補助 24,000

2016年度	1,890,500 (57件)	836,960	8,918,284	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 250,000 大学院生海外調査等助成 298,960 エラスムス・ムンドゥス留学生奨学金 288,000
2017年度	3,243,007 (142件)	1,028,000	11,133,291	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 360,000 大学院生海外調査等助成 380,000 エラスムス・ムンドゥス留学生奨学金 288,000
2018年度	1,589,645 (100件)	288,000	12,434,936	支出：エラスムス・ムンドゥス留学生奨学金 288,000
2019年度	394,250 (37件)	1,302,174	11,527,012	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 540,000 大学院生海外調査等助成 762,174
2020年度	854,000 (12件)	230,000	12,108,312	支出：大学院生海外調査等助成 230,000
2021年度	440,000 (10件)	1,020,000	11,506,312	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 360,000 大学院生海外調査等助成 524,350 大学院生研究活動支援 135,650

(三谷 研爾)

1. 懐徳堂研究センターの目的と意義

1999年に大阪大学文学部の附属施設として「懐徳堂センター」が開設され、2009年5月には同センターを改組して新たに「懐徳堂研究センター」が発足した。

懐徳堂研究センターは、「文学研究科の教育研究理念に沿って、懐徳堂に関わる調査・研究・広報の拠点としての役割を果たし、これを通じて本研究科の発展に寄与することを目的」とし、その目的達成のために以下の業務を行うこととされている。

- (1) 懐徳堂に関わる調査・研究、資料の収集・作成（デジタルコンテンツを含む）
- (2) 『懐徳堂研究』（年一回定期）、パンフレット、ニューズレター（不定期）等の広報媒体の編集・刊行
- (3) 懐徳堂研究の総合サイト「WEB 懐徳堂 (<http://kaitokudo.jp/>)」の管理運営
- (4) 学内外における懐徳堂資料の展示、講演会などの開催
- (5) 懐徳堂記念会の事業に関わる資料調査等の協力
- (6) 本学附属図書館および総合学術博物館の業務に関わる懐徳堂関係資料の調査等の協力

2. 諸活動

- (1) 「WEB 懐徳堂」の復旧（リニューアル公開）

1999年から始まった懐徳堂資料のデジタルコンテンツ化事業は、2001年の大阪大学創立70周年記念事業でその一部を公開した後、2004年2月からは「WEB 懐徳堂」として主に懐徳堂文庫の貴重資料データベースとデジタルコンテンツをインターネット上で広く公開してきた。

しかし、「WEB 懐徳堂」は、2019年度末の時点で、プログラム、サーバの老朽化により公開を停止しており、これを再開するために、ウェブサイトの基幹システムを再構築し、その上で、すべてのコンテンツを基幹システムに適合する形に復旧していく事業を開始した。

2020年度は、その初年度として基幹システムの再構築およびコンテンツ『学校記録類・運営関係文書』の復旧を行い、10月に『WEB 懐徳堂』のリニューアル公開を果たした。

2021年度は、コンテンツ『懐徳堂文庫電子図書目録』『中井終子日記』の復旧のほか、総合図書館の支援により『懐徳堂考』『学校文書類』『論語聞書』『懐徳堂印（中井竹山編・中井履軒編）』の復旧を行った。

- (2) 刊行物の発刊

2020年度は『懐徳堂研究』第12号、2021年度は同第13号を刊行した。

なお、『懐徳堂研究』とニューズレターのバックナンバー（刊行後1年を経過したもの）は、懐徳堂研究センターHPからPDFファイルとしてダウンロードできるように設定している。

- (3) ホームページの更新

両年度を通じて、センターHPを随時更新してセンターの諸活動を分かりやすく紹介するほか、懐徳堂研究関係資料を公開し、またセンター刊行物のバックナンバーをPDFファイルで提供するなどの活動を行った

(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitoku-c/>)。

- (4) 懐徳堂関連資料の展示

大阪大学創立90周年／大阪外国語大学創立100周年記念事業「大学創立周年記念展」（総合学術博物館主催）に、以

下の資料を展示した。

①「懷徳書院教授」印（竹山 2）、②「天子知名」印（竹山 4）、③「子慶氏」印（竹山 13）、④「水哉」印（履軒 20）、⑤中井履軒印章 18 本（履軒 1～ 18）、⑥上記収納用桐箱・外箱、⑦『懷徳堂印存』（総合図書館所管資料）

（5）各種資料調査

2009 年以降調査・作成が中断されていた「懷徳堂研究関係論著目録」について作業を再開した。このほか、2020 年度には、宝塚の宮武家より寄託された懷徳堂関係文書の調査を行った（終了後に返却）。2021 年度には、加地伸行名誉教授より寄贈された器物資料の目録を作成し、『加地伸行文庫目録』の刊行に協力した。

（6）その他

外部からの問い合わせ、所蔵資料の利用申請等に随時対応した。

3. 運営上の課題

この期間、新型コロナウイルスの蔓延による世界的混乱により、国内外の研究者の移動が制限される中で、当センターが所蔵する貴重資料のデジタル公開は従来に増してその必要性を高めている。その意味で、2020 年度に「WEB 懷徳堂」のリニューアル公開を実現し、あわせて公開コンテンツの復旧事業を開始したことはきわめて意義深いものと言える。ただし、コンテンツの復旧には少なからぬ費用を要するため、研究科予算も限られる中で、この事業の意義を確認し、継続していくことが大きな課題となる。

また、本センターの実務は、2009 年 5 月の発足以来、センター長・研究員・職員が担当してきたが、研究員を兼務していた文学研究科教員の転出を受け、2019 年度より、センター長と職員による体制となった。文学研究科予算の減少に対応し、刊行物『懷徳堂研究』の WEB 化を果たしたが、なお真に重要な業務に各種リソースを集中すべく、業務の見直しを続けてゆく必要がある。

（石井 正彦）

活動の概要とその特色

2020年度・2021年度の専任スタッフは上田直弥助教の1名である。2020年度・2021年度は三谷研爾文学研究科長が室長となり、兼任として文学研究科福永伸哉教授、同高橋照彦教授が業務を担った。

大阪大学構内には多くの遺跡が存在しており、特に豊中キャンパスはその全域が待兼山遺跡として国の遺跡台帳に登録されている。また2009年度には吹田キャンパスにおいて遺物の出土があり、あらたに山田丘遺跡として遺跡台帳に登録されることとなった。また、大阪大学中之島センターでは、江戸時代の久留米藩蔵屋敷の発掘調査を実施した。こうした遺跡や遺跡から出土した遺物は、1950年に施行された文化財保護法の規定により国民共有の財産・文化財として保護・活用をはかる対象とされている。大阪大学では、文化財保護法の規定に基づき、キャンパス内の遺跡の保全と建物計画などの調整を行うために、全学委員会として埋蔵文化財調査委員会を設置しており、その委員会の指導の下、埋蔵文化財調査室が構内遺跡の調査にあっている。

2020年度・2021年度は、吹田・豊中キャンパスを中心に建物の改修および耐震補強・新設工事等が引き続き多く実施された。その対応として、発掘調査、工事着手前の試掘および立会調査は以下に報告した件数を実施している。また、調査で発見された出土品については、洗浄、接合、実測等の整理作業をすすめ、2021年度には成果報告として『埋蔵文化財調査室年報6』を刊行した。さらに大阪大学総合学術博物館修学館3階にて公開している出土品の解説動画の作製、大阪大学21世紀懐徳堂が主催するアウトリーチ活動にも力を注ぐなど、コロナ禍の中でも精力的な活動を実施している。

現在の組織

教授 2(兼任2) 助教 1

教授：福永 伸哉(兼任)、高橋 照彦(兼任)

助教：上田 直弥

組織の活動

1. 発掘調査

2020・2021年度は、以下の埋蔵文化財調査を実施した。

【2020年度】

・吹田地区

- 7月22日 調整池上部立体駐車場新営その他工事に係る埋蔵文化財調査
- 8月28日 さくら環状通り等環境整備（植栽等）工事に係る埋蔵文化財調査
- 9月30日 学生支援スペース新営その他工事に係る埋蔵文化財調査
- 1月18日 医学動物実験施設改修その他工事に係る埋蔵文化財調査
- 1月29日～2月8日 医学部附属病院統合診療棟屋外雨水排水管取設その他外構工事に係る埋蔵文化財調査
- 3月5日 さくら環状通り等環境整備（植栽等）工事に係る埋蔵文化財調査
- 3月31日 大阪大学（吹田地区）薬学部新棟新営工事に係る埋蔵文化財調査

・豊中地区

- 4月15日 豊中学生交流棟北側広場芝生整備工事に係る埋蔵文化財調査
- 4月21日 グラウンド北東バックネット増設工事に係る埋蔵文化財調査
- 6月8日 豊中体育館北側排水工事に係る埋蔵文化財調査
- 6月10日 豊中RI棟新営工事に係る埋蔵文化財調査（西半）

- 6月16日 豊中RI 棟新営工事に係る埋蔵文化財調査（西半）
- 8月8日 豊中RI 棟新営関連配管工事に係る埋蔵文化財調査
- 9月29日 豊中RI 棟新営関連配管工事に係る埋蔵文化財調査
- 10月6日 給排水管更新工事に係る埋蔵文化財調査（1、待兼山4号墳付近地点①）
- 10月16日 給排水管更新工事に係る埋蔵文化財調査（2、待兼山4号墳付近地点②）
- 10月20日 給排水管更新工事に係る埋蔵文化財調査（3、待兼山4号墳付近地点③）
- 10月28日 給排水管更新工事に係る埋蔵文化財調査（4、待兼山南麓地点①）
- 11月4日 給排水管更新工事に係る埋蔵文化財調査（5、中山池北岸地点）
- 11月12日 給排水管更新工事に係る埋蔵文化財調査（6、上山池跡地北岸窠跡付近地点①）
- 11月16日～20日 豊中RI 棟新営工事に係る埋蔵文化財調査（東半）
- 12月8日 給排水管更新工事に係る埋蔵文化財調査（7、待兼山南麓地点②）
- 12月10日 給排水管更新工事に係る埋蔵文化財調査（8、上山池跡地北岸窠跡付近地点②）
- 12月23日 給排水管更新工事に係る埋蔵文化財調査（9、待兼山南麓地点③）
- 1月7日～14日 豊中第一テニスコート改修工事に係る埋蔵文化財調査
- 1月20日 給排水管更新工事に係る埋蔵文化財調査（10、修学館横火葬墓分布地点①）
- 2月16日 給排水管更新工事に係る埋蔵文化財調査（11、修学館横火葬墓分布地点②）
- 3月1日 豊中グラウンド散水栓移設工事に係る埋蔵文化財調査
- 3月11日 豊中RI 棟新営関連配管工事（追加分）に係る埋蔵文化財調査
- 3月19日 豊中グラウンド給水管漏水による緊急補修工事に係る埋蔵文化財調査

【2021年度】

・吹田地区

- 5月6日 薬学研究科教育研究棟新営（杏の杜プロジェクト）工事に係る埋蔵文化財調査
- 6月15日 医学部附属病院多用途型トリアージ施設新営その他工事に係る埋蔵文化財調査
- 9月4日 薬学研究科教育研究棟新営その他工事に係る埋蔵文化財調査
- 1月12日 備蓄庫新営工事に係る埋蔵文化財調査
- 2月1日 工学U6 棟新営その他工事に係る埋蔵文化財調査
- 2月21日 共同溝蓋改修工事に係る埋蔵文化財調査
- 3月5日 備蓄庫新営その他工事に係る埋蔵文化財調査

・豊中地区

- 7月14日 理学部バンデグラフ実験棟前モニュメント移設工事に係る埋蔵文化財調査
- 7月30日 大高の杜タイムカプセル発掘作業に係る埋蔵文化財調査
- 1月17日 豊中埋設井水配管漏水配管漏水補修工事に係る埋蔵文化財調査
- 1月27日 豊中共同溝蓋改修工事に係る埋蔵文化財調査

2. 広報・埋蔵文化財の公開

【2020年度】

大阪大学構内出土資料のいちょう祭における展示・解説

大阪府立北野高等学校出張授業 講師

大阪府立北野高等学校六稜同窓会講演会 講師

大阪・京都文化講座オンライン『大阪・京都考古学最前線 2021』 講師

【2021 年度】

大阪大学構内出土資料のいちよう祭における展示・解説

令和3年度懐徳堂古典講座 『日本書紀』を読む 講師

大阪府立北野高等学校出張授業 講師

豊中歴史同好会 9 月度例会 講師

NPO 法人 大阪府北部コミュニティカレッジ「ONCC 総合文化を学ぶ科」 講師

『埋蔵文化財調査室ニュースレター 第 12 号』の発行

『大阪大学埋蔵文化財調査室年報 6』の刊行

今後の課題

大阪大学構内における開発と埋蔵文化財の保護の両立をめざし、施設部をはじめとする関係部局と密接に連絡をとり、円滑な運営を目指す。しかしながら、開発件数の増加により 2020 年度・2021 年度におこなわれた埋蔵文化財調査は 41 件を数えるなど依然として多く、そのすべての調査や事前の調整業務、調査後の遺物整理や報告書刊行を専任教員 1 名で対応することには困難が生じつつある。調査量の増大に効率良く対応できる体制をつくることが急務である。

待兼山遺跡は近年の調査成果により、これまで知られていた弥生時代から古墳時代のみならず、古代、中世、近世各時代の遺構・遺物の様相が判明しつつある。また定期的に行っているキャンパス内の表面調査では、極限科学研究棟（豊中キャンパス）付近における埴輪片のほか、修学館の裏手で新たに良好に残存する須恵器片を確認するなど、埋蔵文化財の散布が確認されており、引き続き工事に際しては細心の注意が必要である。発見された膨大な出土品の歴史的意義についてはいまだ不明な点が多く、今後の調査や整理作業では、こうした資料の意義を学術的に解明することを通じて、地域の歴史復元への貢献を果たして行きたい。

吹田キャンパスに所在する山田丘遺跡に関しては、継続的な調査の実施により、キャンパス造成以前の旧地形および地層の堆積状況を把握しつつある。今後も調査を継続することにより、キャンパス内における埋蔵文化財包蔵の状況を正確に把握し、文化財保護法と施設マネジメントの円滑な調整が図れるよう努めたい。

近年、大阪府百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録などの影響もあり、大阪大学埋蔵文化財調査室への市民講座、出張授業などの依頼が増加している。キャンパスに眠る文化財の価値を地域に発信するためにも、大阪大学 21 世紀懐徳堂や総合学術博物館をはじめ、近畿地域を中心とした文化財関係機関と密接に連携し、学校教育、市民講座の場を活用してアウトリーチ活動をさらに進めていく予定である。

(上田 直弥)



組織・体制

前身の性差別問題委員会を改組・改称し、2010年11月に設置。2011年4月より、本格的に活動を開始。性差別問題委員会同様、研究科長直属の委員会として組織されている。委員は、委員長1名・副委員長1名を含む全員が相談員を兼ね、学生・教職員からのセクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメント問題にかかわる相談、ならびに解決に当たる。

2020年度：委員会メンバー14名(女性6名、男性8名)。

2021年度：委員会メンバー14名(女性5名、男性9名)。

活動状況**2020年度実績**

1. 文学部新入生オリエンテーションで、委員長から委員会の活動について説明(題目:「ハラスメントに出会ったら」)。パンフレット「やめよう・とめよう ハラスメント」を新入生に配布。(4月)
2. 文学研究科新入生オリエンテーションで、パンフレット「やめよう・とめよう ハラスメント」を新入生に配布。ハラスメント防止対策講演会については、コロナ対策の一環としてガイダンスを短縮したために、中止した。
3. 各専修・専門分野・コースでのガイダンス時に、ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットを学生に配布。(4月)
4. TA研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(4月)
5. キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク第26回全国集会(Zoom開催)に、委員1名が参加。(8月)
6. TA研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(10月)
7. 文学研究科・文学部ハラスメント防止に関する教職員研修会を下記の通り開催。(11月12日)
講演:「大学でのハラスメントを考える—現状と対策—」、講師:濱田綾氏(大阪大学ハラスメント相談室助教・専門相談員)
8. パンフレット「やめよう・とめようハラスメント」を作成。(3月)
9. 年間相談・対処件数は5件(1件は昨年度から継続)。

(岡田 禎之)

2021年度実績

1. 文学部新入生オリエンテーションで、委員長から委員会の活動について説明(題目:「ハラスメントに出会ったら」)。パンフレット「やめよう・とめよう ハラスメント」を新入生に配布。(4月)
2. 文学研究科新入生オリエンテーションで、パンフレット「やめよう・とめよう ハラスメント」を新入生に配布。ハラスメント防止対策講演会については、コロナ対策の一環としてガイダンスを短縮したために、中止した。
3. 各専修・専門分野・コースでのガイダンス時に、ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットを学生に配布。(4月)
4. TA研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(4月)
5. 委員のメンバー全員に対して、全学相談員対応マニュアルと部局相談員相談ガイドブック等をデータ配布。(4月)
6. キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク第27回全国集会(Zoom開催)に、委員1名が参加。(8月)

7. TA 研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(10 月)
8. 文学研究科・文学部ハラスメント防止研修会を Zoom で開催。(10 月 14 日)
講演：「コロナ禍での学生への対応について」、講師：根岸和政氏（工学研究科コンプライアンス室レジリエンス教育
部門講師）
9. 2022 年度文学部新入生オリエンテーション用配布資料を作成。(3 月)
10. 年間相談・対処件数は 3 件。

(岸本 恵実)

第 2 部

各専門分野・コースにおける

教育・研究活動の概要

【凡 例】

- I. 組織については、教員は2022年3月末日、在學生は2021年5月1日を基準とし、この時点での教員および在學生の現員を示す。また修了生・卒業生については、2020年度(2021年3月修了・卒業)および2021年度(2022年3月修了・卒業)について記す。

- II. 大学院生の研究業績、受賞等は、2020年度～2021年度に在籍した者が、その在籍期間中に発表あるいは授与されたものについて記す。また2020年度～2021年度におこなわれた学位授与について、課程博士と論文博士にわけて記載する。

- III. 教員の研究活動については、原則として2020年度～2021年度に各専門分野・コースに在職した者のデータを示す。研究業績については2020年度～2021年度の在籍期間中に発表されたものを記載する。2020年度～2021年度中に、本研究科大学院生であったものが本研究科教員になった場合には、その大学院生時代に発表した研究業績をあわせて記入する(この場合には大学院生の研究業績の欄にも同じ業績が示される)。なお受賞については2020年度～2021年度にかぎらず記載する。

2-1 哲学 哲学史

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 1 准教授 1 講師 1 助教 1

教授：舟場 保之

准教授：嘉目 道人

講師：三木那由他

助教：西條 玲奈

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
26	9	6	0	0	1	1	0

* うち留学生 4名、社会人学生 1名

** 哲学・思想文化学専修として

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	7	2	2	2
2021	8	3	0	1
計	15	5	2	3

* 哲学・思想文化学専修として

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

学部と大学院でそれぞれ以下の具体的な目標を掲げた。【学部】哲学の基本文献読解のための演習を学部生向けに開講し、基礎学力を養成する。/卒業論文を提出する予定の学生に対しては、研究発表を行わせ、論文を仕上げられるように指導する。/分属が決定された1年生に対してプレゼミナールを開催する。【大学院】修士・博士論文作成のための十分な個別指導を行う。/研究テーマに関連した論文紹介などを含む研究発表を行わせる。/『メタフィシカ』及びその他の学術誌への投稿に向けた指導を行う。/外国語力向上のために、英語による授業を開講する。また、院生及び学生の哲学に対

する関心をいっそう深化させるためのワークショップを開催する。

2. 研究

現代思想文化学専門分野との共同で、欧文学術誌として *Philosophia OSAKA* 第 16 号、第 17 号を刊行し、Web 上に公開する。/現代思想文化学専門分野及び臨床哲学専門分野との共同で、論文集『メタフュシカ』第 51 号、第 52 号を刊行し、Web 上に公開する。/現代思想文化学専門分野との共催で、研究会 *handai metaphysica* の研究例会もしくは特別講演会を年度内に 2 回程度行う。/スタッフが国際共同研究会で研究発表を行う。

3. 社会連携

現代思想文化学専門分野との共同で、YouTube により、さまざまな情報を発信する。/現代思想文化学専門分野との共同で、世界哲学の日に記念イベントを実施する。/海外で国際連携に努める。

Ⅲ. 活動の概要(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

各種論文作成のためのさまざまな個別指導を行い、卒業論文及び修士論文の題目を公開した。/学部生と大学院生が学問的な交流をもてるように、共通の演習及び講義を行うとともに、大学院生の論文作成演習への学部生の参加を促した。/分属が決定された 1 年生に対して 2020 年度は 6 回（1 回 120 分）、2021 年度は 3 回（1 回 120 分）プレゼминаールを開催した。/英語による授業を開講し、学生たちの英語によるディスカッション能力の向上を図った。/哲学ワークショップを開催し、院生及び学生の哲学に対する関心を深化させた。目標は達成されたと考える。

2. 研究

現代思想文化学専門分野との共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* 第 16 号、第 17 号を刊行し、海外主要大学及び国内主要大学に送付した。また、現代思想文化学専門分野及び臨床哲学専門分野との共同で論文集『メタフュシカ』第 51 号、第 52 号を発刊し、国内主要大学に送付した。これらはどちらも、Web 上での公開も行っている。2020 年度、2021 年度に、それぞれ大阪哲学ゼミナールを 2 回ずつ、*handai metaphysica* 研究例会を 1 回ずつ、哲学ワークショップを 1 回ずつ開催した。スタッフが国際共同研究会で発表し、欧文論文を発表した。目標は達成されたと考える。

3. 社会連携

YouTube により、哲学ワークショップ等を発信した。現代思想文化学専門分野との共同で、世界哲学の日記念企画を実施した。各種プログラムによって研究交流及び教育活動を行い、国際連携を図った。目標は達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、博士論文・修士論文・卒業論文いずれでも、比較的水準の高い成果がでた。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。在学中の学生に関しても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

外国及び国内での学会発表、及び欧文誌と和文誌による研究成果の国内外への発信という目標はほぼ達成された。また研究会の積極的な開催に関しても、目標はほぼ達成された。

3. 社会連携

前記の活動を踏まえて自己評価すれば、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士及び論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	2	0	2
2021	1	0	1
計	3	0	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

仲宗根勝仁 「意味論的内在主義の検討」 2020/10

主査：嘉目道人 副査：入江幸男、舟場保之、須藤訓任

立花達也 「スピノザのメレオロジー 「自然の一部」概念の統一的解釈の試み」 2021/3

主査：嘉目道人 副査：舟場保之、須藤訓任、上野 修

天野恵美理 「ベルクソン記憶論における再認の問題」 2022/3

主査：舟場保之 副査：山上浩嗣、上野修、須藤訓任

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	0(0)	1(0)	5(0)	0(0)	3(3)	9(3)
2021	0(0)	7(0)	2(0)	0(0)	0(0)	9(0)
計	0(0)	8(0)	7(0)	0(0)	3(3)	18(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	1	3	10	0	1	15
2021	0	4	13	0	2	19
計	1	7	23	0	3	34

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2020 年度】

〔博士前期〕

岩本智孝「カッシーラーとフォスラー—その哲学的立場の相違について—」『メタフュシカ』第 51 号, pp.55-65, 査読無, 2020/12/24

志水凜「ハンナ・アーレント著『暴力について』」『メタフュシカ』第 51 号, pp.67-72, 査読無, 2020/12/24

志水凜「活動」からみる評議会制と政党制」『第 3 回若手研究者フォーラム要旨集』, pp.10-13, 査読有, 2021/2/22

三富雄介「キャサリン・ウォレス著『ネットワーク・セルフ 関係、プロセス、人の同一性』」『メタフュシカ』第 51 号, pp.73-79, 査読無, 2020/12/24

三富雄介「私についての言明における自己意識と指示—アンスコム の洞察と誤り—」『第 3 回若手研究者フォーラム要旨集』, pp.6-9, 査読有, 2021/2/22

〔博士後期〕

佐々木 尽「『理性の事実』はいかなる問いへの答えだったのか?—カントの『演繹』概念に定位して」『メタフュシカ』第 51 号, pp.27-39, 査読無, 2020/12/24

澤邊 興平「数とは?」『メタフュシカ』第 51 号, pp.41-54, 査読無, 2020/12/24

末田 圭果「終末期患者に対する安楽死・尊厳死拒否と、ケアのプログラム規定—ショーペンハウアー「意志の否定」から見た終末期」『第 2 回若手研究者フォーラム要旨集』, pp.6-9, 査読有, 2020/9

三輪泰之「『仮象の論理』から普遍性に関する論理—『純粹理性の批判』を「推論する能力」としての理性から再考する—」『待兼山論叢』第 54 号, pp.43-59, 査読無, 2020/12/25

【2021 年度】

〔学部〕

澤井優花「宗教思想から記号論 Significs へ: ビクトリア・ウェルビーの言語哲学」『メタフュシカ』第 52 号, pp.85-96, 査読無, 2021/12/24

〔博士前期〕

大西健太「文献紹介・ロバート・ブランダム著『信頼の精神: ヘーゲル『精神現象学』を読む』」第 6 章 「力」と悟性 対象から概念へ ~理論的実体とそれらを暗に規定する諸法則の存在論的ステータス~」『メタフュシカ』第 52 号, pp.107-113, 査読無, 2021/12/24

大西健太「ヘーゲル『大論理学』有論における「当為 (Sollen)」の理論」『第 4 回若手研究者フォーラム要旨集』, pp.7-10, 査読無, 2021/9/6

志水 凜「アーレントの法論—ノモス・レクス・憲法」『メタフュシカ』第 52 号, pp.97-105, 査読無, 2021/12/24

成田玲央奈「文献紹介・ジュディス・バトラー『触発する言葉』」『メタフュシカ』第 52 号, pp.115-121, 査読無, 2021/12/24

三富雄介「共同行為に対する賞賛としての証言による知識」『メタフュシカ』第 52 号, pp.59-70, 査読無, 2021/12/24

〔博士後期〕

岩本智孝「芸術と歴史—カッシーラーにおける人間形成のための二つのオルガノンとその系譜—」『待兼山論叢』第 55 号, pp.19-38, 査読無, 2021/12

佐々木 尽「コミュニケーションか良心か: ヒューム・スミス・カントから」『待兼山論叢』第 55 号, pp.39-56, 査読無, 2021/12

溝越 大秦「『哲学探究』が「覚えがき」である理由」『メタフュシカ』第 52 号, pp.71-83, 査読無, 2021/12/24

(2)口頭発表

【2020 年度】

〔学部〕

澤井優花「19 世紀イギリスの哲学者 Welby による significs の概念について」, 学部学生による自主研究奨励事業研究

発表会, オンライン, 2021/2/19

平田智子「Examining Ways to Improve Virtual Learning」, With Corona or Post Corona: The Opportunities and Challenges for the Virtual Learning and International Exchange, 大阪大学、リサーチコモンズ、ハイブリッド, 2021/3/15

[博士前期]

岩本智孝「カッシーラーはどのような観念論者か—『シンボル形式の哲学』を中心に—」, 日本カント協会第45回学会, オンライン, 2020/11/14

岩本智孝「カッシーラーとフォスラー—その哲学的立場の相違について—」, 第22回 handai metaphysica 研究例会, オンライン, 2021/3/25

志水凜「行為 (action) の場としての公的領域の拡張可能性」, 第19回哲学ワークショップ, オンライン, 2021/2/20

志水凜「活動」からみる評議会制と政党制」, 第3回若手研究者フォーラム, オンライン, 2021/3/13

志水凜「ハンナ・アーレント著『暴力について』」, 第22回 handai metaphysica 研究例会, オンライン, 2021/3/25

三富雄介「現代認識論とウィトゲンシュタインにおける確実性概念の相違—「理性」に注目して—」, 第19回哲学ワークショップ, オンライン, 2021/2/20

三富雄介「私についての言明における自己意識と指示—アンスコムへの洞察と誤り—」, 第3回若手研究者フォーラム, オンライン, 2021/3/13

三富雄介「キャサリン・ウォレス著『ネットワーク・セルフ 関係、プロセス、人の同一性』」, 第22回 handai metaphysica 研究例会, オンライン, 2021/3/25

[博士後期]

佐々木 尽「『理性の事実』と『遂行的矛盾』」, 第8回大阪哲学ゼミナール, オンライン, 2021/8/17

佐々木 尽「『理性の事実』はいかなる問いへの答えだったのか?—カントの『演繹』概念に定位して」, 第22回 handai metaphysica 研究例会, オンライン, 2021/3/25

末田 圭果「終末期患者に対する安楽死・尊厳死拒否と、ケアのプログラム規定—ショーペンハウアー「意志の否定」から見た終末期」, 第2回若手研究者フォーラム, オンライン, 2020/9/28

末田 圭果「自己肯定としての意志の否定—ショーペンハウアー哲学における苦悩のアイデアと認識の転換を契機として」, 関西倫理学会 2020 年度大会, オンライン, 2020/11/7

三輪泰之「『純粋理性の批判』における理念の仮象とその有用性について」, 関西哲学会第73回大会, オンライン, 2020/10-11

【2021 年度】

[学部]

澤井 優花「宗教思想から記号論 Significs へ: ビクトリア・ウェルビーの言語哲学」, 第23回 handai metaphysica 研究例会, オンライン, 2022/3/2

森本 悠悟「キューバの DIY 的实践から「技術の政治哲学」を考える」, 第20回哲学ワークショップ, オンライン, 2022/2/26

[博士前期]

大西 健太「ロバート・ブランダム著『信頼の精神: ヘーゲル『精神現象学』を読む』第6章 「力」と悟性 対象から概念へ ~理論的実体とそれらを暗に規定する諸法則の存在論的ステータス~」, 第23回 handai metaphysica 研究例会, オンライン, 2022/3/2

大西 健太「ヘーゲル『大論理学』「本質論」における二種類の「法則」の区別について」, 第11回大阪哲学ゼミナール, オンライン, 2022/1/14

志水 凜「アーレントの法論—ノモス・レクス・憲法」, 第23回 handai metaphysica 研究例会, オンライン, 2022/3/2

志水 凜「アーレントと法—古代の法論と合衆国憲法—」, 第11回大阪哲学ゼミナール, オンライン, 2022/1/15

成田 玲央奈「ジュディス・バトラー著『触発する言葉——言語・権力・行為体』」, 第 23 回 handai metaphysica 研究例会, オンライン, 2022/3/2

成田 玲央奈「発語媒介行為の観点から捉える憎悪発話——ジュディス・バトラー『触発する言葉』の考察」, 共同討議「発語媒介効果について」第 11 回大阪哲学ゼミナール, オンライン, 2022/1/16

三富 雄介「共同行為に対する賞賛としての証言による知識」, 第 23 回 handai metaphysica 研究例会, オンライン, 2022/3/2

姚 曉彤「全体主義下の罪と責任について——ハンナ・アーレントの責任論への考察」, 第 10 回大阪哲学ゼミナール, オンライン, 2021/ 8/17

[博士後期]

岩本 智孝「カール・フォスラーの思想とそのアクチュアリティ——啓蒙主義とロマン主義を再考するために——」, 第 20 回哲学ワークショップ, オンライン, 2022/ 2/26

岩本 智孝「カッシーラーにとって学問の危機とはなんだったのか」, 第 11 回大阪哲学ゼミナール, オンライン, 2022/1/14

溝越 大奈「『哲学探究』が「覚えがき」である理由」, 第 23 回 handai metaphysica 研究例会, オンライン, 3/2/2022

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020 年度】

[博士前期] なし

[博士後期] なし

【2021 年度】

[博士前期] なし

[博士後期] なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注)3 年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

2021 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020 年度 学部 : 1 名 大学院 : 0 名 (計 1 名)

2021 年度 学部 : 0 名 大学院 : 1 名 (計 1 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020 年度～2021 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020年度～2021年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者及び学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4名

2020年度：4名 2021年度：0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 1名 中・高等学校の教員 0名
その他 3名

*学部卒業者については現代思想文化学との合計で記載。

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度：0名 2021年度：0名

9. 刊行物

2020年度 『メタフュシカ』第51号、*Philosophia OSAKA*, No. 16

2021年度 『メタフュシカ』第52号、*Philosophia OSAKA*, No. 17

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

【2020年度】

第8回大阪哲学ゼミナール (Zoomのミーティング機能を用いたオンライン形式)

2020年8月17日～19日 テーマ：「カント法論のすべて」

8月17日(月) 10:00-13:00 石田京子「カント法論のすべて」I

14:00-16:00 <最新哲学研究> I

高畑菜子(新潟大学大学院博士後期課程)

「カント良心論における帰責の問題」

16:15-18:15 <最新哲学研究> II

佐々木尽(大阪大学大学院博士後期課程)

「「理性の事実」と「遂行的矛盾」

18日(火) 10:00-13:00 石田京子「カント法論のすべて」II

14:00-16:00 <最新哲学研究> III

舟場保之(大阪大学大学院教授)

「くうまくトラブルを起こすこと>とはなにか」

19日(水) 10:00-13:00 石田京子「カント法論のすべて」III

参加者 のべ83名。

2020「世界哲学の日」記念討論会

2020年11月19日14時-17時、Zoomのミーティング機能を用いたオンライン討論会

討論会タイトル：「現代哲学における脱超越論化の行方」

討論者：入江幸男大阪大学名誉教授、須藤訓任現代思想文化学教授、舟場保之哲学哲学史教授

司会：嘉目道人哲学哲学史准教授

参加者18名。

第9回大阪哲学ゼミナール（Zoomのミーティング機能を用いたオンライン形式）

2021年1月15日～17日

テーマ：「アーレントにおける「思考」の諸問題」

1月15日（金） 10:00-13:00 宮崎裕助「アーレントの「思考」の諸問題」I

「政治的判断力と歴史的判断力」

14:00-17:00 共同討議「カントにおける法と倫理の関係」

石田京子（慶應義塾大学准教授）

斎藤拓也（北海道大学大学院准教授）

1月16日（土） 10:00-13:00 宮崎裕助「アーレントの「思考」の諸問題」II

「アイヒマン問題を考える」

14:00-17:00 <最新哲学研究> I

金 慧（千葉大学准教授）「ヘイトスピーチと権威：従属化の条件をめぐる考察」

1月17日（日） 10:00-13:00 宮崎裕助「アーレントの「思考」の諸問題」III

「赦し—アーレントとデリダ」

参加者のべ72名。

第19回哲学ワークショップ

2021年2月20日（土） 13:00～16:40、Zoomのミーティング機能を用いたオンライン方式

プログラム：

13:00 開会

13:10～14:10 個人研究発表1

三角成彦

「近代批判の後と先：今村仁司、栗本慎一郎再読」

14:20～15:20 個人研究発表2

志水凜（哲学哲学史博士前期課程）

「行為（action）の場としての公的領域の拡張可能性」

15:30～16:30 個人研究発表3

三富雄介（哲学哲学史博士前期課程）

「現代認識論とウィトゲンシュタインにおける確実性概念の相違——「理性」に注目して——」

16:40 閉会

参加者14名。

第22回 *handai metaphysica* 研究例会

2021年3月25日、Zoomのミーティング機能を用いたオンライン方式

志水凜（哲学哲学史博士前期課程）

ハンナ・アーレント著『暴力について』

三富雄介（哲学哲学史博士前期課程）

キャサリン・ウォレス著『ネットワーク・セルフ 関係、プロセス、人の同一性』

岩本智孝（哲学哲学史博士前期課程）

カッシーラーとフォスラー ——その哲学的立場の相違について——

佐々木尽（哲学哲学史博士後期課程）

「理性の事実」はいかなる問いへの答えだったのか？

——カントの「演繹」概念に定位して——

参加者 10名。

【2021年度】

第10回大阪哲学ゼミナール（Zoomのミーティング機能を用いたオンライン形式）

2021年8月17日～19日

テーマ：「ハーバーマスとホネット」

8月17日（火） 10:00-13:00 永井 彰（東北大学教授）

「社会理論としてのハーバーマス理論」

14:00-15:30 姚 晓彤（大阪大学博士前期課程）

「全体主義下の罪と責任について——ハンナ・アーレントの責任論への考察」

8月18日（水） 10:00-13:00 日暮雅夫（立命館大学教授）

「承認をめぐる闘争の発展——ホネット社会理論の展開」

14:00-15:30 米田 恵（大阪大学博士後期課程）

「定言命法の適用における二重基準の問題について」

8月19日（木） 10:00-13:00 共同討議「尊厳概念をめぐる」

平出喜代恵（関西大学助教）

「人間の尊厳を人間性に基づける意義——法概念としての「人間の尊厳」保障をめぐる解釈の変遷を手がかりにして——」

櫻井真文（同志社大学特別研究員）

「フィヒテの『人間の尊厳について』（1794年）における能動的な尊厳論——近年のカント尊厳論論争へのポストカント的アプローチ——」

参加者 のべ85名。

2021「世界哲学の日」記念イベント：入江幸男『問答の言語哲学』合評会

2021年11月23日14時-16時、Zoomのミーティング機能を用いたオンライン合評会

著者：入江幸男（大阪大学名誉教授）

質問者(1)：朱喜哲（大阪大学招へい教員）

質問者(2)：三木那由他（哲学哲学史専門分野講師）

司会：嘉目道人（哲学哲学史専門分野准教授）

参加者 22名。

第11回大阪哲学ゼミナール（Zoomのミーティング機能を用いたオンライン方式）

日程：2022年1月14日～16日

1月14日（金） 10:00-13:00 大河内泰樹（京都大学教授）

「ヘーゲル社会哲学の諸相1：義務と愛」

14:00-15:00 大西健太（大阪大学博士前期課程）

「ヘーゲル『大論理学』「本質論」における二種類の「法則」の区別について」

15:10-16:10 岩本智孝（大阪大学博士後期課程）

「カッシーラーにとって学問の危機とはなんだったのか」

1月15日（土） 10:00-13:00 大河内泰樹（京都大学教授）

「ヘーゲル社会哲学の諸相2：人倫と承認」

14:00-15:30 志水凜（大阪大学博士前期課程）

「アーレントと法——古代の法論と合衆国憲法——」

1月16日（日）10:00-13:00 大河内泰樹（京都大学教授）

「ヘーゲル社会哲学の諸相3：資本主義と国家」

14:00 共同討議「発語媒介効果について」

嘉目道人（大阪大学准教授）

「発語媒介効果の不可逆性について」

成田玲央奈（大阪大学博士前期課程）

「発語媒介行為の観点から捉える憎悪発話

——ジュディス・バトラー『触発する言葉』の考察」

参加者 のべ101名。

第20回哲学ワークショップ

2022年2月26日（土）、Zoomのミーティング機能を用いたオンライン方式

13:00 開会

13:05～14:05 個人研究発表1

森本 悠悟（哲学・思想文化学専修）

「キューバのDIY的实践から「技術の政治哲学」を考える」

14:15～15:15 個人研究発表2

岩本智孝（哲学哲学史博士後期課程）

「カール・フォスラーの思想とそのアクチュアリティ ——啓蒙主義とロマン主義を再考するために——」

15:25～16:25 個人研究発表3

蔣 藝林（人間科学研究科博士前期課程）

「心の自然化：一階フレーゲ的表象主義の可能性に基づく考察」

16:30 閉会

参加者 10名。

第23回 *handai metaphysica* 研究例会

2022年3月2日、Zoomのミーティング機能を用いたオンライン方式

大西健太（哲学哲学史博士前期課程）

ロバート・ブランダム著『信頼の精神：ヘーゲル『精神現象学』を読む』「第6章 「力」と悟性 対象から概念へ ～理論的実体とそれらを暗に規定する諸法則の存在論的ステータス～」

成田玲央奈（哲学哲学史博士前期課程）

ジュディス・バトラー著『触発する言葉——言語・権力・行為体』

志水凜（哲学哲学史博士前期課程）

アーレントの法論——ノモス・レクス・憲法

澤井優花（哲学・思想文化学）

宗教思想から記号論 Significs へ：ビクトリア・ウェルビーの言語哲学

溝越大秦（哲学哲学史博士後期課程）

『哲学探究』が「覚えがき」である理由

三富雄介（哲学哲学史博士後期課程）

共同行為に対する賞賛としての証言による知識

参加者 11名。

12. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 舟場 保之 教授

1962年生。1992年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。立命館大学嘱託講師、大阪大学准教授を経て、2017年4月から現職。専攻：ドイツの近代・現代哲学

1-1. 論文

舟場保之 “Zu den zwei Richtungen in Bezug auf Normenbegründung” *Philosophia OSAKA*, 17, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 39-48, 2022/3

Funaba, Yasuyuki, “Wie sollen Einwände erhoben werden? Vorbemerkungen zur Theorie der Verantwortung” *Philosophia OSAKA*, 16, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 39-46, 2021/3

舟場保之 「フェミニズム 「攻撃されている事柄」による抵抗」『アーレント読本』(日本アーレント研究会), 法政大学出版局, pp. 280-288, 2020/7

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

舟場保之 “Zu den zwei Richtungen in Bezug auf Normenbegründung”, 1. Supranationales Philosophie Kolloquium, オンライン, 2021/9

舟場保之 「現代哲学における脱超越論化の行方 ハーバーマスの場合」2020「世界哲学の日」記念討論会, handai metaphysica, 大阪大学(オンライン), 2020/11

Funaba, Yasuyuki, “Kant: Zum ewigen Frieden, Zweiter Zusatz”, 14. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium, Duisburg-Essen Universität(オンライン), 2020/9

Funaba, Yasuyuki, “Wie sollen Einwände erhoben werden? Vorbemerkungen zur Theorie der Verantwortung”, 14. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium, Duisburg-Essen Universität(オンライン), 2020/9

舟場保之 「うまくトラブルを起こすこととはなにか」第8回大阪哲学ゼミナール, 大阪哲学ゼミナール, 大阪大学(オンライン), 2020/8

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

舟場保之 大阪大学共通教育賞(2005年度前期), 大阪大学共通教育推進機構, 2005/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2017年度～2020年度、基盤研究(C) 一般、代表者:舟場保之

課題番号:17K02168

研究題目:カントの平和論を現代の議論に接続し新たな提言を行うための理論的研究

研究経費:2020年度 直接経費 833,541円 間接経費 0円

研究の目的:

カントは永遠平和を実現する体制として「諸国家連合」を提唱したが、これが後の国際連盟および国際連合の定礎となったことは非常によく知られている。本研究は、カントが『理論と実践』においては「国際国家」ないし「世界共和国」を積極的に評価していたにもかかわらず、『永遠平和のために』において「諸国家連合」を選択せざるを得なかった理論的前提を明確にし、この理論的前提をハーバーマースやルツツ＝バウマンらの現代の平和論に接続することを通じて、カントの議論にはいまなお有効な側面があることを明らかにする。それと同時に、現代的な視点を踏まえて、この理論的前提に必要な修正を加え、逆に現代の平和論によってまだ答えられていない問題に対して解決案を提示する。それは、「諸国家連合」か「国際国家」ないし「世界共和国」か、という二者択一を超えて第三の選択肢を示し、かつこの選択肢の現代における有効性を明らかにすることでもある。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フイヒテ協会・委員, 2013年3月～現在に至る

日本カント協会・常任委員, 2012年4月～現在に至る

日本カント協会・委員, 2007年4月～現在に至る

2. 嘉目 道人 准教授

1979年生。2015年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、近畿大学非常勤講師、2017年11月より大阪大学文学研究科 特任講師（常勤）を経て、2019年4月より現職。専攻：超越論哲学、コミュニケーションの哲学・倫理学

2-1. 論文

嘉目道人 “Limiting the Communication Community : A Transcendental-Pragmatic View on the Harm of Discriminatory Utterances (1)” *Philosophia Osaka*, 17, Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 29-37, 2022/3

Yoshime, Michihito, “Fichte’s Empirical Realism : A Preliminary Study to Explore the Connection with his Doctrine of the Bild” *Philosophia OSAKA*, 16, Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 47-56, 2021/3

Yoshime, Michihito, “Racist Utterances as Quasi-fictional: Rethinking Habermas’s Theory of Strategic and Dramaturgical Actions” *Memoirs of the Graduate School of Letters, Osaka University*, 60, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 1-21, 2021/3

嘉目道人 「発語媒介効果の不可逆性とフィクションの倫理的責任」『待兼山論叢 哲学篇』54, 大阪大学大学院文学研究科／大阪大学文学会, pp. 1-18, 2020/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

嘉目道人 「発語媒介効果の不可逆性について」第11回大阪哲学ゼミナール, 大阪哲学ゼミナール運営事務局, オンライン,

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2019年度～2021年度、若手研究、代表者:嘉目道人

課題番号:19K12923

研究題目:アーペルの討議理論における虚構的言説の位置価とその射程

研究経費:2020年度 直接経費 500,000円 間接経費 0円

2021年度 直接経費 300,000円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究は、ドイツにおける哲学の言語論的転回および語用論的転回を主導した、カール-オットー・アーペルの討議理論を再検討することを目的とする。従来、アーペルの討議理論は論証的討議を重視する半面、虚構的(フィクション的)言説を等閑視する傾向があった。しかし、現代社会において、言語芸術に限らず「フェイク」も含めた虚構的言説の影響力は増す一方であるように思われる。それゆえ、本研究は、アーペルの討議理論の修正・拡張を通じて、より適切な形で虚構的言説を扱うことを目指す。同時に、文学および美学・文芸学における関連する議論にも目を配り、芸術と社会の関係を問い直すことをも目指す。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フヒテ協会・委員, 2019年3月～現在に至る

3. 三木 那由他 講師

1985年生まれ。京都大学大学院博士課程修了。博士(文学)。2010年度より日本学術振興会特別研究員(DC1)、2013年度より同特別研究員(PD)を務める。2018～2019年度に本学で助教を務めたのち、2020年10月より現職。

3-1. 論文

三木那由他 “Transgender Experience and Gender as an Aristotelian Essence” *Philosophia OSAKA*, 17, pp. 19–28, 2022/3

三木那由他 「地上のロゴス:概念分析と偏見」『待兼山論叢哲学篇』55, 2022/3

三木那由他 「取り消し可能性と言ひ抜け可能性」『大学院文学研究科紀要』62, 2022/3

三木那由他 「会話の格率の三つの破りかた:行為の理論としての会話的推意の理論」『科学基礎論研究』49-1, pp. 33–48, 2021/10

三木那由他 “On the Infinite Regress of a Speaker’s Intentions (既刊論文英訳)” *Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, 29, pp. 41–56, 2020/11

3-2. 著書

三木那由他 『グライス 理性の哲学』勁草書房, 344p., 2022/3

三木那由他, 加藤隆文, 朱喜哲他(共訳) 『プラグマティズムはどこから来て、どこへ行くのか(上・下)(翻訳)』勁草書房(上 103–154、下 93–150), 2020/10

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 三木那由他(記事内コメント)「高圧的に説教する男性、それって…女性を見下す「マンスプレイニング」とは」『東京新聞』東京新聞, 2022/3
- 三木那由他「自らが語る現場へ」『短歌ムック ねむらない樹』8, pp. 176-176, 2022/2
- 三木那由他「クワイなみんな、魔法の時間だ！『Ikenfell』は居場所のなかった私たちが待ち望んだ RPG」『IGN Japan』ウェブ記事, 2022/2
- 三木那由他「ブラックホールと扉(『言葉の展望台』第12回)」『群像』2022年4月号, pp. 411-416, 2022/3
- 三木那由他「謝罪の懐疑論(『言葉の展望台』第11回)」『群像』2022年3月号, pp. 480-486, 2022/2
- 三木那由他「大きな傘の下で会いましょう(『言葉の展望台』第10回)」『群像』2022年2月号, pp. 444-450, 2022/1
- 三木那由他「心のない言葉(『言葉の展望台』第九回)」『群像』2022年1月号, pp. 424-429, 2021/12
- 三木那由他「「私」のいない言葉(『言葉の展望台』第八回)」『群像』2021年12月号, pp. 504-508, 2021/11
- 三木那由他(ウェブ記事)「内輪向けでない哲学のために」『じんぶん堂』2021/11
- 三木那由他「会話の引き出し(『言葉の展望台』第七回)」『群像』2021年11月号, pp. 398-404, 2021/10
- 三木那由他「『オーラの発表会』における逸れ続けるコミュニケーションの尊さ」『ユリイカ』2021年11月号, pp. 99-104, 2021/10
- 三木那由他「哲学と私のあいだで(『言葉の展望台』第六回)」『群像』2021年10月号, pp. 449-454, 2021/9
- 三木那由他「すだちかレモンか(『言葉の展望台』第五回)」『群像』2021年9月号, pp. 522-527, 2021/8
- 三木那由他「言葉の空白地帯(『言葉の展望台』第四回)」『群像』2021年8月号, pp. 466-470, 2021/7
- 三木那由他「張り紙の駆け引き、そしてマンスプレイニング(『言葉の展望台』第三回)」『群像』2021年7月号, pp. 476-480, 2021/6
- 三木那由他「ちょっとした言葉に透けて見えるもの(『言葉の展望台』第二回)」『群像』2021年6月号, pp. 527-531, 2021/5
- 三木那由他「陰謀論はコミュニケーションに何をもらすのか」『現代思想』2021年5月号, pp. 192-201, 2021/4
- 三木那由他「フィルカルリーディングズ 2020」『フィルカル』6-1, pp. 72-73, 2021/4
- 三木那由他「そういうわけなので、呼ばなくて構いません(『言葉の展望台』第一回)」『群像』2021年5月号, pp. 328-333, 2021/4
- 三木那由他「コミュニケーション的暴力としての、意味の占有」『群像』1月号 pp. 296-303, 2021/1
- 三木那由他「「フラットな対話」と称するコミュニケーションに隠された「暴力」を考える」『現代ビジネス(オンライン)』2020/10
- 三木那由他「異質な共同体が現れるとき——解釈不能な有意味性」『ユリイカ』10月臨時増刊号 pp. 70-78, 2020/9
- 三木那由他「2019 フィルカルリーディングズ」『フィルカル』5-1, pp. 36-37, 2020/4

3-4. 口頭発表

- 三木那由他「「意味する」とはいかなる行為か」ワークショップ「発話行為の言語学と言語哲学」, 神戸大学(オンライン), 2022/3
- 三木那由他(招待講演)「推意・意味・意図: グライス哲学における推意」日本語用論学会第24回大会, 日本語用論学会, オンライン, 2021/12
- 三木那由他「譲歩的共同行為」日本科学哲学会第54回大会, 日本科学哲学会, オンライン, 2021/11
- 三木那由他「『話し手の意味の心理性と公共性』で語ったこと」三木那由他『話し手の意味の心理性と公共性』書評会, 東京都立大学, 2021/3
- 三木那由他「地上のロゴス: 概念分析と偏見」日本大学文理学部人文学研究所第16回哲学ワークショップ, 日本大学文理学部人文学研究所, 日本大学, 2021/3
- 三木那由他「トークイベント三木那由他『話し手の意味の心理性と公共性』」哲学オンラインセミナー, 哲学オンラインセミナー, 2020/10
- 三木那由他「『話し手の意味の心理性と公共性』合評会」推論主義研究会, 推論主義研究会, 2020/9
- 三木那由他「Ad-lib Joint Action」The 12th Biennial Collective Intentionality Conference, International Social Ontology Society, the University of Neuchatel, 2020/7

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2018年度～2021年度、若手研究、代表者:三木那由他

課題番号:18K12182

研究題目:話し手の意味の共同的プラグマティズム

研究経費:2020年度 直接経費 400,000円 間接経費 120,000円

2021年度 直接経費 400,000円 間接経費 120,000円

研究の目的:

本研究は、話し手の意味に関する共同主義的プラグマティズムというアプローチの構築を目指す。これは話し手の意味についての標準的見解となっている意図基盤意味論に代わる枠組みであり、話し手が何かを意味し、聞き手がそれを理解したときに成立する事態を話し手と聞き手の共同志向性から特徴づけ、さらにそうした事態と話し手の発話行為とを話し手の行為に暗黙の裡に含まれるコミットメントという概念から結びつける立場である。共同主義的プラグマティズムの観点から話し手の意味の必要十分条件を提案し、今後のさらなる理論的洗練のための出発点を与えるのが、本研究の目標である。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本哲学会・編集委員, 2021年7月～現在に至る

日本哲学会・評議員, 2021年4月～現在に至る

日本哲学会・大会企画委員, 2020年10月～現在に至る

応用哲学会・学会誌編集委員, 2020年10月～現在に至る

『フィルカル』編集委員, 2020年4月～現在に至る

4. 西條 玲奈 助教

2013年北海道大学大学院文学研究科思想文化学博士後期課程単位修得退学。博士(文学)(北海道大学、2014年)。2015年北海道大学専門研究員。2016年京都大学文学部教務補佐員。2020年4月より大阪大学大学院文学研究科(哲学哲学史)助教(2022年3月退職)。専攻:哲学/倫理学

4-1. 論文

西條玲奈「シス特権とトランス嫌悪言説の分析—ジェンダー帰属の通時的固定性とジェンダー規範批判」『メタフェシカ』51, pp. 1-11, 2020/12

4-2. 著書

西條玲奈, 赤阪辰太郎, 朝倉三枝他(共著)『クリティカル・ワード ファッションスタディーズ 私と社会と衣服の関係』, 蘆田裕史, 藤嶋陽子, 宮脇千絵編著, 担当範囲:第1部 6「ジェンダー」, フィルムアート社, 2022/3

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

西條玲奈『フェミニスト現象学入門』へのフェミニスト的批判—ジェンダーアイデンティティとジェンダー規範を区別する必要性について』『現象学年報』37, pp. 129-132, 2021/11

西條玲奈「N.グッドマンの贋作論と芸術家のスタイル」, *Art Research Online*, 2021/2

西條玲奈(詩と批評)「ロボットとぬいぐるみの距離感から考える人と物の関係性」『ユリイカ』769-53, 青土社, 2020/12

西條玲奈(ウェブメディア)「『ひろがるジェンダーレス』の「いつまで炎上する? AIにジェンダーは必要か。背景に「ステレオタイプ」の黙認」#5 ジェンダーと商品開発」『ニュースイッチ』, 日刊工業新聞社, 2020/10

4-4. 口頭発表

西條玲奈「ファンダム作品研究の倫理」応用哲学会十三回年次研究大会, 2021/5

西條玲奈「わたしたちはなぜ自分を女性とみなすのか:分析フェミニズムが論じるジェンダー化の概念」WOMEN: WOVEN No. 1, 2021/3

西條玲奈「多数派が得をしていることはなんだろうか?:シスジェンダーの特権にきづくために」ダイバーシティ・カフェ19 大阪大学COデザインセンター(ダイバーシティ&インクルージョン・プロジェクト), 大阪大学COデザインセンター, 2020/10

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

4-7-1. 2019年度～2021年度, 6: 研究助成, 助成金獲得者:西條玲奈

助成金名:2018年「先端技術と共創する新たな人間社会」

研究題目:ケアの倫理から見る人とソーシャルエージェントの関係性とその社会的含意

助成団体名:公益財団法人トヨタ財団

助成金額:研究の目的:

本企画では、AI やロボットでも人に情緒的なつながりを喚起させるソーシャルエージェントを対象に、人との可能な関係性とそのよりよいあり方を検討する。近年、性別や人種などの属性に対する人の社会的な認知バイアスが AI の判断に反映された問題や、ロボットの存在が人に攻撃的な発言や行動を引き起こしたという報告など、人とソーシャルエージェントの関係における価値判断に関して看過しがたい事態が生じている。こうした事態を反映してか、既存の議論は、依存のリスクや人間同士の関係を阻害する懸念など、危害防止の観点に立つものが主流だった。だが、ソーシャルエージェントと人の関係性の問題点を踏まえて、さらにその積極的な意義を問うこともできるだろう。そこで第一に、ケアの倫理の観点から人とエージェントのパーソナルな関係をとらえ直し、倫理的な問題点と同時に両者の相互作用に見出せる固有の価値があることを検討する。第二に、社会とエージェントの関係性の観点から、社会的属性が付与された場合に生じる問題やその意義を検討する。この二点のテーマを通じて、どのようにソーシャルエージェントを設計すべきか、その指針の提案を目指す。

4-8. 外部役員等の引き受け状況

科学基礎論学会・評議員, 2020年4月～現在に至る

文部科学省科学技術・学術政策研究所・科学技術予測センター 専門調査員, 2020年4月～2021年3月

2-2 現代思想文化学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 1 教授 1(兼任) 講師 0 助教 0

教授：望月 太郎、中村 征樹(全学教育推進機構所属・兼任)

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
26	2	2	0	0	0	0	0

*うち留学生 0名、社会人学生 1名

**哲学・思想文化学専修として

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	7	2	3	2
2021	8	1	0	0
計	15	3	3	2

*哲学・思想文化学専修として

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

学部と大学院でそれぞれ以下の具体的な目標を掲げた。【学部】哲学の基本文献読解のための演習を学部生向けに開講し、基礎学力を養成する。卒業論文を提出する予定の学生に対しては研究発表を行わせ、論文を仕上げられるように指導する。【大学院】修士・博士論文作成のための十分な個別指導を行う。卒業論文および修士論文の題目をHP上にアップし公開する。博士後期課程の学生には、『メタフシカ』およびその他の学術誌への投稿に向けた指導を行う。院生および学生の哲学・現代思想文化に対する関心をいっそう深化させるためのワークショップを開催する。

2. 研究

哲学哲学史専門分野との共同で、欧文学術誌として *Philosophia OSAKA* 第16号・第17号を刊行し、Web上に公開する。哲学哲学史専門分野および臨床哲学専門分野との共同で、論文集『メタフシカ』第51号・第52号を刊行し、Web上に公開する。哲学哲学史専門分野との共催で、研究会 *handai metaphysica* の研究例会および特別講演会を年度内に

2回程度行う。スタッフが海外で研究発表（オンラインを含む）を行う。

3. 社会連携

哲学哲学史専門分野との共同で、世界哲学の日に記念イベントを実施する。海外で国際連携に努める。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

各種論文作成のためのさまざまな個別指導を、オンラインによる指導を含めて行った。卒業論文および修士論文の題目をHP上にアップし公開した。学部生と大学院生が学問的な交流をもてるよう共通の演習および講義を行うとともに、大学院生の論文作成演習への学部生の参加を促した。哲学ワークショップをオンラインで開催し、院生および学生の哲学に対する関心を深化させた。目標は、ほぼ達成されたと考える。

2. 研究

哲学哲学史専門分野との共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* 第16号を刊行し、海外主要大学および国内主要大学に送付した。また、哲学哲学史専門分野および臨床哲学専門分野との共同で論文集『メタフシカ』第51号を発刊し、国内主要大学に送付した。これらはどちらもWeb上での公開も行っている。哲学哲学史専門分野と共同で2020「世界哲学の日」記念討論会（2020年11月19日）をオンラインで開催し、「現代哲学における脱超越論化の行方」のテーマの下、司会：嘉目道人准教授（哲学哲学史）の司会により、須藤訓任教授が入江幸男名誉教授（哲学哲学史）および舟場保之教授（哲学哲学史）と共同で討論を行った。また、大阪大学国際共同研究促進プログラム（タイプB）に採択されている研究が昨年度に引き続き行われ、「日本-ASEAN グローバル哲学研究交流ラボラトリー」を通して共同研究が行われた。その成果の一部を欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* 第16号に掲載した。ラボの相手方であるチュラロンコン大学文学部哲学科からオンラインで教員と共同で学内外の研究者を交えて Asia Centre の企画した国際会議「5th INTERNATIONAL CONFERENCE on Hate Speech in Asia: Challenges and Solutions」（当初は2020年7月にバンコクで開催予定であったが、COVID-19感染拡大のためオンサイト/オンライン参加のハイブリッド方式に変更して10月8-10日実施）に参画し、共催でパネルディスカッション「Philosophical Perspectives of Hate Speech in/for Asia」を行った。また続く年も同様に国際会議「6th INTERNATIONAL CONFERENCE on The COVID-19 Crisis」（オンサイト/オンラインのハイブリッド方式で2021年9月9日実施）に参画し、共催でパネルディスカッション「The Use of Metaphors in The COVID-19 Crisis: A Comparison of East and West」を行った。目標は、ほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

哲学哲学史専門分野との共同で、世界哲学の日記念企画（上述）をオンラインで実施した。各種プログラムによって研究交流及び教育活動を行い、国際ジョイントラボの設置により国際連携を勧めている。以上の催しには学外から市民も参加した。目標は達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

前記の活動の結果、修士論文・卒業論文いずれでも、比較的水準の高い成果がでた。これらの点から、所期の目標はほぼ達成できたと考えている。在学中の学生に関しても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

国内での学会発表や海外の国際会議へのオンラインでの参加があり、また欧文誌と和文誌発行による研究成果の国内

外への発信という点で目標はおおむね達成された。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、COVID-19 パンデミックの困難な状況下、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	1	0	1
2021	0	0	0
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

入江祐加 「反省から客観性へーディルタイの精神科学における「心理学」の展開ー」

主査:須藤訓任 副査:望月太郎、舟場保之 2021/3

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2021	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	0	0	1	0	1	2
2021	0	0	0	0	0	0
計	0	0	1	0	1	2

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020 年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕

大久保歩「訳書・ロドルフ・ガシエ『地理哲学—ドゥルーズ&ガタリ『哲学とは何か』について』(大久保歩訳、月曜社)」,
2021年3月29日刊行予定

大久保歩「訳書・リチャード・J・バーンスタイン『暴力—手すりなき思考』(斎藤元紀監訳・共役、梅田孝太／大久保歩
／大森一三／川口 茂雄／渡邊和典訳、法政大学出版局)」, 2020/12/18

【2021 年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕 なし

(2) 口頭発表

【2020 年度】

〔学部〕

新尋開理「Virtual space for 'Mobile Lives', With Corona or Post Corona: The Opportunities and Challenges for
the Virtual Learning and International Exchange, 大阪大学豊中キャンパス、文法経講義棟リサーチコモンズ、Zoom
によるオンライン開催, ハイブリッド, 2021/3/15

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕

大久保歩「暴力と暴力のトラウマについての哲学的再検討」, R・J・バーンスタイン 『暴力』オンライン公開研究会, 甲
南大学、Zoom によるオンライン開催, 2021/2/12

【2021 年度】

〔博士前期〕

岸川 丈流「ELSI でみる風力発電施設立地問題～徳島県における事例研究～」科学技術社会論学会 第 20 回年次研究大
会・総会, 査読なし, 2021/12/5

〔博士後期〕

西川晃弘「戦後日本の工業製品の品質向上における生活者の役割—『暮らしの手帖』の商品テスト活動を例に—」科学技術
社会論学会 第 20 回年次研究大会・総会, 査読なし, 2021/12/5

(3) その他(書評・翻訳など)

【2020 年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕 なし

【2021 年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕 なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD : 0名 DC2 : 0名 DC1 : 0名 (計0名)

2021年度 PD : 0名 DC2 : 0名 DC1 : 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部 : 0名 大学院 : 0名 (計0名)

2021年度 学部 : 0名 大学院 : 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2020年度～2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020年度～2021年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2020年度 : 0名 2021年度 : 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

* 学部卒業者は哲学哲学史との合計で記載。

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度 : 0名 2021年度 : 0名

9. 刊行物

2020年度 『メタフュシカ』第51号、*Philosophia OSAKA*, No. 16

2021年度 『メタフュシカ』第52号、*Philosophia OSAKA*, No. 17

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

Panel Discussion, 'Philosophical Perspectives of Hate Speech in/for Asia', **Asia Centre's** 5th International Conference on Hate Speech in Asia: Challenges and Solutions, 8-10 October, 2020, Bangkok, Thailand. (共催、ハイブリッド方式オンライン参加)

Panel Discussion, 'The Use of Metaphors in The COVID-19 Crisis: A Comparison of East and West', **Asia Centre's** 6th International Conference on COVID-19 in Asia: Communication, Nationalism, and Technology, 8-10 September, 2021, Bangkok, Thailand (共催、ハイブリッド方式オンライン参加)

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

2020「世界哲学の日」記念討論会(2020年11月19日、オンライン開催)

タイトル:「現代哲学における脱超越論化の行方」

講演者:須藤訓任 教授、入江幸男 名誉教授(哲学哲学史)、舟場保之 教授(哲学哲学史)

12. 教員の研究活動(2020 年度～2021 年度の過去 2 年間)

1. 須藤 訓任 教授

1955 年生。1983 年京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。文学博士(京都大学)。大谷大学助教授、同教授を経て、2004 年 10 月より現職。(2021 年 3 月定年退職) 専攻: 西洋近現代哲学

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

須藤訓任 『『存在と時間』第2篇評釈—本来性と時間制』岩波書店, 560p., 2020/5

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

須藤訓任, 井西弘樹, 西村知紘(対談) 「研究教育に関するインタビュー」『まちのラジオ 大阪大学社会学連携』タッキー816みのおエフエム, 2021/1

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西哲学会・委員, 2007 年 11 月～現在に至る

2. 望月 太郎 教授

1962 年生。1991 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程哲学哲学史専攻中退。博士(文学)(大阪大学 1997 年)。徳島大学、東海大学を経て、1998 年 4 月、大阪大学大学院文学研究科助教授。2004 年 4 月、大阪大学大学教育実践センター助教授、2006 年 11 月同教授、2012 年 4 月より大阪大学大学院文学研究科教授。2014 年 4 月～2017 年 4 月、大阪大学海外拠点本部教授・ASEAN センター(バンコクオフィス)センター長(学内派遣)。専攻: フランス哲学、現代思想、社会思想、高等教育論。

2-1. 論文

望月太郎 “A History and Tradition of Philosophical Practice in Japan”『認知科学(英文版)Journal of Human Cognition』5-2, pp. 36-45, 2021/12

望月太郎 「哲学プラクティスを通じた開発途上国との国際協力」『現代思想』49-1, 青土社, pp. 185-196, 2021/1

望月太郎 “Quality Indicators for Philosophical Practice: Self-reflection as Sign for the Depth of a Dialogue” *Philosophical Practice and Counselling*, 10, The Korean Society of Philosophical Practice, pp. 141-159, 2020/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

望月太郎(ウェブコンテンツ)「発展途上国における教育開発のための哲学プラクティス」特定非営利活動法人 ratik, 2020/8

2-4. 口頭発表

望月太郎 “A Japanese Philosopher’s View of SEA during the WWII Time: The Philippines Through the Eyes of Kiyoshi Miki (1897-1945)” *Philosophy in Southeast Asia, PiSeAS2, Persatuan Pendidikan Falsafah dan Pemikiran Malaysia, PPFPM, Universiti Malaysia Sabah (オンライン)*, 2021/12

望月太郎 “The Use of Metaphors in The COVID-19 Crisis: A Comparison of East and West” 6th International Conference COVID-19 in Asia: Communication, Nationalism, and Technology, Asia Centre, Asia Centre, Bangkok, Thailand (ハイブリッド), 2021/10

望月太郎 “Southeast Asian Philosophy as Arena of World Philosophy” *Philosophy of Religion in Southeast Asia, Persatuan Pendidikan Falsafah dan Pemikiran Malaysia, PPFPM, Universiti Malaysia Sabah (オンライン)*, 2021/4

望月太郎 “Virtual Learning and Cross-cultural Experiences” *The Opportunities and The Challenges for Virtual Learning and International Exchange, International Affairs Office, Graduate School of Letters, Osaka University, 大阪大学大学院文学研究科 (ハイブリッド)*, 2021/3

望月太郎 “‘War’ Against COVID-19, Is it a Metaphor or Reality?” *The 3rd Japan and ASEAN Round Table: ASEAN-Japan Relations: The Impact of The COVID-19 Pandemic, Asia Centre, Japan Foundation, Asia Centre, Bangkok (ハイブリッド)*, 2020/11

望月太郎 “Philosophical Perspectives of Hate Speech in/for Asia” *5th INTERNATIONAL CONFERENCE on Hate Speech in Asia: Challenges and Solutions, Asia Centre, Thammasat University, Bangkok (ハイブリッド)*, 2020/10

望月太郎 “Reimagining Transnational Student Mobility in the Post-COVID-19 Era” *AAS-in-Asia 2020, Asia at the Crossroads: Solidarity through Scholarship, Special Panel, Association for Asian Studies, 神戸大学 (オンライン)*, 2020/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2018年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:望月太郎

課題番号:18K00041

研究題目:発展途上国における教育開発のための哲学プラクティス

研究経費:2020年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2021年度 直接経費 683,710円 間接経費 0円

研究の目的:

途上国で各種の哲学プラクティス(哲学カフェ、子どものための哲学等)を実践、普及すると同時に、現地でファシリテーターを要請

し、現地化を試みる。またこの活動により、哲学プラクティスを通じた国際教育のあり方を探る。(2021 年度については、COVID-19 の感染拡大のせいで調査研究活動が滞ったため、前年度から予算を延長している。)

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

Journal of Humanities Therapy, Humanities Institute, Kangwon National University, Korea・編集委員, 2014 年 4 月～現在に至る

3. 中村 征樹 教授

1974 年生。2005 年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(博士(学術))。東京大学大学院工学系研究科助手、文部科学省科学技術政策研究所研究官、大阪大学大学教育実践センター准教授を経て、2012 年 4 月より大阪大学全学教育推進機構准教授。2007 年 11 月より大阪大学大学院文学研究科准教授を経て 2021 年 10 月より現職。専攻：科学技術社会論、科学技術コミュニケーション、科学技術倫理、科学技術史。

3-1. 論文

中村文彦, 市田秀樹, 中村征樹, 「共同研究で何に留意すべきか : 国内の研究不正事案からの検討」, 『RI : Research Integrity Reports』, 5, pp. 41-57, 2021/9

市田秀樹, 中村征樹, 「対話型・参加型教育を促す研究公正教材の国際動向 : 「Path2Integrity」「Dilemma Game」を題材に」, 『RI : Research Integrity Reports』, 5, pp. 20-40, 2021/9

高橋良和, 塩尻かおり, 駒井章治郎, 中村征樹, 半場祐子, 「単純化しすぎた世界: 科学のプロフェッショナルリズムがもたらす期待と驚異」, 『対話型学術誌 といとうとい』, 0, pp. 33-41, 2021/7

中村征樹, 「科学技術基本法改正と人文・社会科学」, 『学術の動向』, 26-5, pp. 36-41, 2021/5

中村征樹, 「シチズンサイエンスの普及にむけて」, 『学術の動向』, 25-4, pp. 38-41, 2020/4

3-2. 著書

中村征樹, 川野英二編(分担執筆), 『阪神都市圏の研究』ナカニシヤ出版, 「第 13 章 高度経済成長と西宮一石油コンビナート誘致問題をめぐって」, pp. 335-361, 2022/3

中村征樹, (共著) 『未来へひろがるサイエンス1・2・3 (文部科学省検定済教科書 中学校理科用)』新興出版社啓林館, 2021/2

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中村征樹 KBC 九州朝日放送「発見!九州スピリット「九州最後の炭鉱島・池島炭鉱」」監修, 2021/9

中村征樹 「NHK 土曜ドラマと今ここにある大学の危機について」, 『論座』, 2021/5/21

中村征樹 「研究公正(日本科学史学会編)『科学史事典』, 丸善出版, pp. 364-365, 2021/5

中村征樹 NHK 土曜ドラマ「今ここにある危機とぼくの好感度について」研究不正調査考証, NHK, 2021/4- 2021/5

3-4. 口頭発表

中村征樹 「研究倫理教育から考える中核的人材のあり方について」, 研究公正シンポジウム「研究公正における中核的人材の育成について考える」, 日本医療研究開発機構, 大手町三井ホール, 2022/3/9

中村征樹 「科学技術政策の展開—人文科学包摂の意味」, コロキウム「科学技術政策の展開と学術体制」, 民主主義科学者協会法律部会 2021 年度学術総会, オンライン開催, 2021/12/4

中村征樹 「意図せぬ研究不正を防ぐ」, テクニカルセッション「基礎研究の進め方～研究の基本倫理と発展的な解析手法」, 第 8

回 JCR ベーシックリサーチカンファレンス, 日本リウマチ学会, アキバプラザ, 2021/11/12

中村征樹 「科学技術基本法「改正」と人文・社会科学」, 公開シンポジウム「学術研究と科学技術基本法—その科学史技術史的検討」, 日本学術会議史学委員会の科学・技術の歴史的理論的社会的検討分科会, オンライン開催, 2020/7/26

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

中村征樹 大阪大学賞(大学運営部門), 2021/11

中村征樹 大阪大学総長奨励賞(研究部門), 2015/7

中村征樹 大阪大学総長顕彰(教育部門), 2014/7

中村征樹 大阪大学総長奨励賞(教育部門), 2012/8

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2019 年度～2021 年度, 日本医療研究開発機構平成 31 年度研究公正高度化モデル開発支援事業, 代表者: 中村征樹

研究題目: 研究公正の推進に資する質問紙調査の活用に関する研究

研究経費: 2020 年度 直接経費 7,700,000 円 間接経費 2,300,000 円

2021 年度 直接経費 7,700,000 円 間接経費 2,300,000 円

研究の目的:

研究公正を推進するにあたって、オンライン教材を用いた研究倫理教育の実施や研究データの管理の関するルール策定等にとどまらず、研究機関や研究コミュニティが実効性のある取組を能動的に実施していくことが重要である。研究機関等が「研究活動の公正性のモニタリング」と「研究環境の公正性のモニタリング」を実施するのに有効な質問紙調査を開発、実施するとともに、本調査で作成した質問紙および調査によってえられたデータについて、研究機関や研究倫理教育等で活用するための方策についても検討する。

3-7-2. 2021 年度～2025 年度, 国立研究開発法人科学技術振興機構: 科学技術イノベーション政策のための科学, 代表者: 中村征樹

研究題目: 研究分野の多様性を踏まえた研究公正規範の明確化と共有

研究経費: 2021 年度 直接経費 4,000,000 円 間接経費 1,200,000 円

研究目的:

この間、わが国の研究機関において、研究公正を確保するための体制が整備されてきた。しかし、近年問題となることの増えてきた二重投稿や不適切なオーサーシップ等について、研究公正規範は一般論としては共通しているものの、どのような行為を二重投稿や不適切なオーサーシップとみなすか等、研究公正規範が具体的事例に適用される次元で分野によって対応が異なることが少なくない。その具体的な指針が、学協会等によって明示されていないことも多い。不適切な行為と公正な研究活動の境目が明確でない状況は、当事者の自覚がないまま研究不正等の問題が発生する背景ともなっている。

本プロジェクトでは、研究公正の具体的な規範を研究分野の多様性を踏まえて明確化するとともに、そこで明確化した研究公正規範について研究倫理教育や研修等を通してその共有を図る仕組みを構築することを目指す。

3-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪地方裁判所委員会委員, 2021 年 10 月～現在に至る

大阪大学教職員組合・中央執行委員, 2021 年 8 月～現在に至る

IDE 大学協会近畿支部・理事, 2021 年 7 月～現在に至る

新興出版社啓林館・令和 7 年度用中学理科教科書編集委員, 2021 年 5 月～現在に至る

大阪大学出版会・出版委員会委員, 2021年4月～現在に至る
日本学術振興会・研究公正アドバイザー, 2018年7月～現在に至る
日本学術会議・連携会員, 2017年10月～現在に至る
大阪成蹊大学・大阪成蹊短期大学・運営諮問委員, 2016年8月～現在に至る
大阪大学生生活協同組合・理事, 2016年6月～現在に至る
一般財団法人公正研究推進協会・理事, 2016年4月～現在に至る
文部科学省公正な研究活動の推進に関する有識者会議・委員, 2015年4月～現在に至る
化学史学会評議員, 2011年1月～現在に至る

2-3 臨床哲学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 1 教授 1(兼任) 准教授 1 助教 0

教授：堀江 剛

教授：ほんまなほ(兼任)

准教授：小西真理子

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
28	6	5	0	0	0	0	1

*うち留学生3名、社会人学生2名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	6	1	1	0
2021	9	1	4	0
計	15	2	5	0

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

当分野は、現代社会における様々な問題（例えば、科学技術、医療、看護、介護、福祉、教育、アート、ジェンダー／セクシュアリティなど）について考えるために、(1)西洋の倫理思想・道徳理論や現代の社会哲学・文化理論を学びながら、問題の定式化・分析を行うための方法論の探究、(2)当事者・関係者とともに、それぞれのおかれた具体的な文脈に即して問題を掘り起こし、考察するための哲学的対話法やコミュニケーション方法の調査・開発、また、(3)学内外のさまざまな研究者・実践家と連携しつつ、社会で現実に機能し得る研究活動プランの作成と遂行、および共同研究プロジェクトの推進、この3点を基本姿勢としている。

上記の基本姿勢に基づき、次の目標を設定した。学部2・3年生には「倫理学講義(春夏水2)」「倫理学演習(秋冬火2)」等の授業により倫理学の基礎知識と考え方を吸収させるよう努める。学部3・4年生には、研究発表を中心とした「倫理学演習(水3)」等の授業により、自主的な研究課題の設定とより良い卒業論文に向けた準備を促す。大学院生には「臨床

哲学論文作成演習（水4）」を軸に、「臨床哲学講義／演習」「社会哲学講義／演習」等の授業により、臨床哲学の考え方や実践方法を身につけさせる。学部生・大学院生に共通する目標としては、授業外で自由に企画・参加できる「アセンブリ・アワー」を設け、対話に基づく学生の自主的な思考力促進に努めること、読書会として古典テキストや外国語（英語・フランス語）の読解能力を組織的に養成すること、などがある。さらに、研究室主催のイベント「臨床哲学フォーラム」を実施し、社会人学生教育支援基盤経費を活用して、学外の研究者や関係者との情報交換や交流、学生の「臨床哲学」活動に関わるモチベーションを高めることを目標とした。

2. 研究

研究については、教育と同様の基本姿勢に基づきつつ、文献研究および哲学的対話の実践に向けた多彩な研究活動を行うことを目標とした。そこには、任意団体 Café Philo、「患者のウェルリビングを考える会」（神戸）、「くケア」を考える会（岡山・京都）などと連携して定期的に講演および哲学対話を開催すること、CO デザインセンターと連携して哲学的対話の文化を社会に浸透させること、などが含まれる。そのような研究活動に学生も積極的に参加させることでインターンシップにもつながる経験が積めることも目標とした。

3. 社会連携

社会連携については、当分野の活動全般が現代社会での事象を対象とすることを基本姿勢としていることから、教育・研究両分野において社会との連携を充実させることを目標とした。大学外の様々な職業や立場の市民との協力によって研究活動を実施すると同時に、そういった研究活動に学生を従事させ、かつ部分的にはあるがイニシアティブをとって学生に研究を遂行させる。その教育的な意義も視野に入れた形で、社会連携につながる活動を行う。また、そうした研究活動の成果を報告書や研究室 WEB 雑誌、HP（ブログ）など様々な媒体を用いて発信することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

2020～2021 年度において、上記目標に掲げた全ての授業を実施した。研究発表を中心とした「倫理学演習（水3）」では、グループワークによる各自の研究課題の掘り起こしを行い、適切な論文作成と研究課題への接続を促進するようにした。「臨床哲学論文作成演習（水4）」では、各自の研究発表に加えて「読みたい論文勉強会」と臨床哲学フォーラムに向けた事前の「合同勉強会」の時間を設けた。これによって、「論文を丁寧に読む」という文献研究の基本的なスキル、また臨床哲学の共同研究に向けた（自らの研究テーマ以外への）視野の拡張を目指した。また 2021 年度からは、新たに「社会哲学演習：ソクラテック・ダイアログ」（集中）を開講し、哲学対話に関する知見を深めることに努めた。

2. 研究

2020 年度より、臨床哲学研究室創設当初に発行していた『臨床哲学ニューズレター』を WEB 雑誌として（第 3 号）から復刊させ、在学院生・修了生によるエッセイ（特集 1）、ここ 2 年での研究室主催のワークショップ報告（特集 2,3）、臨床哲学フォーラム報告（特集 4,5）を掲載した。2021 年度も第 4 号を刊行し、臨床哲学フォーラム報告（特集 1,2）、日本倫理学会ワークショップ報告（特集 3）などを掲載した。また、教員が以下の論文・研究発表等を行なった。

堀江は、2020 年度の論文・研究報告として「The Application of Artificial Intelligence (AI) to the Medical Field: Report of a Qualitative Investigation」（Eubios Journal of Asian and International Bioethics (EJAIB), 30 (5), p. 230-233, 2020/6, 共著者：Taketoshi Okita, Atsushi Asai, Seiji Bito）、「ソクラテック・ダイアログ：理想とは何か」（『臨床哲学ニューズレター』第 3 号、2021/3）、「生の欲と規範」（『臨床哲学ニューズレター』第 3 号、2021/3）を発表した。2021 年度には、共著『学際研究からみた医療・福祉イノベーション経営』（新々江章友編、日本評論社、2022/3、執筆担当：第 4 章「哲学対話から見えてくる「組織」」、65-88 頁）を刊行した。研究発表として「スピノザと哲学カウンセリング」（慶北大学（韓国）哲学科招待講演、2021/10/23、Zoom）、「病院組織と倫理問題：システム論の視点から」（組織学会年

次大会、2021/10/31、Zoom、共同発表者：服部俊子)、「意思の「不確定性」に向き合う：日本における透析中止事件から」(第3回東アジア臨床哲学会議、2021/11/27、Zoom)、ワークショップとして「医療現場の「話し合い」と哲学プラクティス」(日本哲学プラクティス第3回大会、2021/9/5、Zoom、共同企画者：服部俊子)を行なった。

小西は、2020年度の論文として「はじまりの場所：臨床哲学との出会いをつうじて」(『臨床哲学ニューズレター』第3号、2021/3)、「支配する技術・欲望される支配：SMをめぐるトラウマ研究に向けての試論」(『臨床哲学ニューズレター』第3号、2021/3)を発表した。2021年度には、論文「研究者による当事者加害の「その後」を考える：緊縛シンポをきっかけとした研究倫理〈再考〉の断片」(大阪大学臨床哲学研究室『臨床哲学ニューズレター』vol.4、2022/3)、「毒親概念の倫理—自らをアダルトチルドレンと「認める」ことの困難性に着目して」[共著者：高倉久有](大阪大学臨床哲学研究室『臨床哲学ニューズレター』vol.4、2022/3)、「私は被害者ではない—問題含みな親の『加害性』への反応をめぐって」(青土社『現代思想』vol.50(9))を発表し、研究発表「『現場』に関わる研究者の倫理：『役に立つ』ってどういうこと？」(オンライン(大阪大学)、第3回日本哲学プラクティス学会、シンポジウム：哲学プラクティス連絡会・哲学プラクティス学会共同企画「哲学プラクティスの倫理」、2021/9/5)、「研究者による当事者加害の『その後』を考える」(オンライン、第72回日本倫理学会ワークショップ「(応用)することの倫理—緊縛シンポ、ブルーフィルム、ジェンダー」、2021/10/1)、「“Psychologically Pathological” Voices Missed by In a Different Voice: Reevaluating the Conventional Self in Carol Gilligan’s Ethic of Care,” Emotions, Actions, Meditations and Visions in Korean Philosophy : (Online: Korea, Kyungpook National University BK FOUR21 Project Team to Educate Philosophical Specialists for Conflict Resolution, Kyungpook National University Innovation Support Project (Department of Philosophy), International Society of Korean Philosophy, 12/11/2021)、『臨床』哲学講義とケアの倫理」(オンライン：中山大學(中国)、第3回東アジア臨床哲学会議、2021/11/27、28)を行なった。

3. 社会連携

2020年度、研究室主催の研究・社会連携活動として「臨床哲学フォーラム」を3回開催した。第1回：ふるいにかけてられた声を聴く、テーマ「非人間・暴力・対話：関係性をめぐって」(2020/7/1)、第2回：規範の外の生と知恵、テーマ「BDSMを取り巻く生の営み：ケアとは何か？」(2020/11/14)、第3回：ふるいにかけてられた声を聴く、テーマ「書くことと、考えること、行動すること」(2021/2/10)。その他、任意団体Café Philoとの連携活動として「哲学カフェアラカルト vol.2：距離」(進行役：堀江、2021/2/14)、「SD：豊かな交流とは何か」(進行役：堀江、2020/3/27)を実施した。また、堀江が代表を務める科研「組織における価値の働きに関する臨床哲学的研究」の一環として「SD：組織とは何か」を大阪市立大学大学院都市経営研究科の関係者を対象に実施(2021/3/27-28)するとともに、「患者のウェルリビングを考える会」とともに2019年度に行った活動を報告書「在宅でのアドバンス・ケア・プランニングにおけるオープン・ダイアログの可能性」としてまとめた(2021/3)。さらに、小西が代表を務める科研「嗜癖の関係性と家族の「病理」をめぐる臨床哲学的研究」の一環として、京都・岡山を中心に活動する「(ケア)を考える会」において講演「『共依存の倫理』第6章：共依存と回復論②」(合同オンライン会、2020/7/5、山科)を行った。

2021年度にも「臨床哲学フォーラム」を3回開催した。第4回：組織と対話、テーマ「組織に関わる悩み・違和感」(2021/6/23)、第5回：あたらしい倫理学、テーマ「人の生と研究をめぐる倫理」(2021/12/8)、第6回：『受容と回復のアート』を読む(2022/1/12)。また、韓国慶北大学哲学科第4段階BK21事業葛藤解決哲学専門家養成教育研究チームとの共催による国際共同シンポジウムを開催した(2022/2/14-15)。その他、堀江は「テツドク：スピノザ『エチカ』：どうして「神=自然」の倫理学なのか」(カフェフィロ、2021/9/20、Zoom)、「葛藤とは何か」(臨床哲学・哲学プラクティス国際共同ワークショップ、2022/2/14、Zoom)を行ない、小西は、トークイベント：「人間の『過剰さ』を再考する」(立命館大学大学院先端総合学術研究科トークイベント(大学院ウィーク)、2021/11/16)に参加した。

IV. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

2020・2021年度ともに、学部においては「倫理学」に関連する授業の改良、大学院では「臨床哲学」の理解と同時にその明確化の過程に積極的に関与することを教育目標としたが、目標は達成されたと考えている。

2. 研究

2020・2021年度ともに、学内外と連携した諸々の研究、研究成果の社会への発信という点では、研究室の新たな活動「臨床哲学フォーラム」をそれぞれ3回開催し、その模様もWEB雑誌『臨床哲学ニューズレター』に掲載することができた。さらに2021年度には、東アジア臨床哲学会議にもすべての教員が研究発表を行った。目標は達成されたものと考えている。

3. 社会連携

上記の教育・研究に関する記述と同じく、社会との連携に関する目標も十分に達成されたものとする。2021年度においては、韓国慶北大学との連携による国際共同シンポジウムが開催できた。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	0	0	0
2021	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	1(1)	0(0)	5(1)	0(0)	0(0)	6(2)
2021	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
計	2(2)	0(0)	5(1)	0(0)	0(0)	7(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等講演会	その他	計
2020	0	2	0	0	0	2
2021	0	0	0	0	3	3
計	0	2	0	0	3	5

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2020年度】

〔博士前期〕

徐彬原「『野生の声を聴く』を読む：声を聴くことに関する思考」『臨床哲学ニューズレター』vol.3, 2021/3/31

鈴木萌花「当事者の哲学における『当事者』と『わたし』の距離」『臨床哲学ニューズレター』vol.3, 2021/3/31

〔博士後期〕

小川長「信頼研究序論」『メタフュシカ』51号, pp.13-26, 査読有, 2020/12/24

小川長「中小企業の戦略としての信頼」『経営経済』56号, pp.147-166, 査読有, 2021/1/20

桂ノ口結衣「『当事者の哲学』をさくことと哲学すること」『臨床哲学ニューズレター』vol.3, 2021/3/31

桂ノ口結衣「2019年度哲学対話ワークショップ報告」『臨床哲学ニューズレター』vol.3, 2021/3/31

【2021年度】

〔学部〕

見城佑衣「震災を題材としたICTを用いた探究学習プログラムの開発と実践」『日本教育工学会論文誌』第45巻第3号, pp.305-317, 査読有, 2021/8/24

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

(2)口頭発表

【2020年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

桂ノ口結衣「哲学プラクティスの学びかた：哲学プラクティショナーの『熟達』って？」, 哲学プラクティス連絡会第6回大会, 2020/9/5。

小川長「戦略としての信頼」, 経営戦略学会第20回大会, 2020/12/26

【2021年度】

〔博士前期〕

徐彬原「医療現場における暴力事件の視点から医学的ヒューマニスティックケアを考える」, 2022 慶北大学・大阪大学国際共同シンポジウム, 2022/2/15

鈴木萌花「認知症高齢者のギクシャクした身体」, 2022 慶北大学・大阪大学国際共同シンポジウム, 2022/2/15

〔博士後期〕

松本渚「困難な状況を生き抜くための自己表現」, 2022 慶北大学・大阪大学国際共同シンポジウム, 2022/2/15

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

【2021年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

桂ノ口結衣, 第13回未来を強くする子育てプロジェクト(スミセイ女性研究者奨励賞), 2020年度

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2021年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2021年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020年度～2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020年度～2021年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2020年度: 0名 2021年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度: 0名 2021年度: 0名

9. 刊行物

2020年度『臨床哲学ニューズレター』第3号(2021/3/31)

2021年度『臨床哲学ニューズレター』第4号(2022/3/1)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

- 第1回臨床哲学フォーラム（ふるいにかけられた声を聴く）「非人間・暴力・対話：関係性をめぐって」2020/7/1
第2回臨床哲学フォーラム（規範の規範の外の生と知恵）「BDSMを取り巻く生の営み：ケアとは何か？」2020/11/14
第3回臨床哲学フォーラム（ふるいにかけられた声を聴く）「書くことと、考えること、行動すること」2021/2/10
第4回臨床哲学フォーラム（組織と対話）「組織に関わる悩み・違和感」2021/6/23
第5回臨床哲学フォーラム（あたらしい倫理学）「人の生と研究をめぐる倫理」2021/12/8
第6回臨床哲学フォーラム『受容と回復のアート』を読む』2022/1/12

12. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 堀江剛教授

1961年生。2001年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（臨床哲学専攻）単位取得退学。博士（文学）（大阪大学、2003年）。2004年、広島大学総合科学部助教授。2007年、同准教授。2011年、同教授。2016年4月より現職。専攻：哲学／倫理学／臨床哲学

1-1. 論文

- 堀江剛 「ソクラテック・ダイアログ:理想とは何か」『臨床哲学ニューズレター』3, 大阪大学臨床哲学研究室, pp. 35-37, 2021/3
堀江剛 「生の欲と規範」『臨床哲学ニューズレター』3, 大阪大学臨床哲学研究室, pp. 199-201, 2021/3
Taketoshi Okita, Atsushi Asai, Horie, Tsuyoshi 他(共著), “The Application of Artificial Intelligence (AI) to the Medical Field: Report of a Qualitative Investigation” (共著) *Eubios Journal of Asian and International Bioethics (EJAIB)*, 30-5, Eubios Journal of Asian and International Bioethics (EJAIB), pp. 230-233, 2020/6

1-2. 著書

- 堀江剛, 新々江章友, 川村尚也他(共著) 『学祭研究からみた医療・福祉イノベーション経営』pp. 65-88, 2022/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

- 堀江剛 「意思の「不確定性」に向き合う:日本における透析中止事件から」第3回東アジア臨床哲学会議, 広州大学(中国), 広州大学(中国)(オンライン), 2021/11
堀江剛 「スピノザと哲学カウンセリング」慶北大学講演会, 慶北大学(韓国)哲学科, 慶北大学(韓国)哲学科(オンライン), 2021/10
堀江剛 「病院組織と倫理問題:システム論の視点から」2022年度年次大会, 組織学会, 神戸大学(ハイブリッド), 2021/10

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

- 1-6-1. 2017年度～2021年度、挑戦的(開拓・萌芽)研究、代表者:堀江剛

課題番号:17K18462

研究題目:組織における価値の働きに関する臨床哲学的研究

研究経費:2020年度 直接経費 91,633円 間接経費 0円

2021年度 直接経費 213,309円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究の目的は、組織、特にヒューマンサービス組織において「価値がどのように働いているか」を、理論的には哲学・倫理学と組織論における分野横断的な交流を通して、方法的には哲学対話(ソクラテック・ダイアログ)を用いた独自の研究調査方法によって、解明することである。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. ほんま なほ 教授

1970年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科哲学講座助手、同講師を経て、2005年4月に大阪大学コミュニケーションデザイン・センター講師に着任し、現在まで文学研究科を兼任。2006年4月同センター准教授、2020年8月よりCOデザインセンター教授。専攻:哲学/倫理学/臨床哲学

2-1. 論文

ほんま なほ 「フェミニズム臨床哲学とクリエイティブ・ライティング」『臨床哲学ニューズレター』(臨床哲学研究室), 4 pp.181-195, 2022/3

高橋 綾、ほんま なほ 「組織と対話についての不都合な真実:なぜ生協理事会は組織に関わる人の違和感をスルーしなかったのか?」, 『臨床哲学ニューズレター』(臨床哲学研究室), 4, pp.44-53, 2022/3

沼田 里衣、ほんま なほ 「音とことばによる対話に関する臨床音楽学研究:「おとあそび工房」における試みから」『アートミーツケア』, 13, pp.01-16, 2022/3

ほんまなほ、松本 渚、小泉 朝未、高橋 綾 「カマは燃えている:「総合術」プロジェクト:「ココ(ボール)ルームでになりたい自分になる」をかんがえる」『Co*Design』, 11, pp.101-120,2022/2

ほんま なほ 「臨床哲学からフィロソフィへ」『臨床哲学ニューズレター』(臨床哲学研究室), 3, 文学研究科臨床哲学, pp. 38-48, 2021/3

ほんま なほ 「女装フォビア、性的指向、ジェンダー・アイデンティティ」『臨床哲学ニューズレター』(臨床哲学研究室), 3, 文学研究科臨床哲学, pp. 172-181, 2021/3

ほんま なほ、高橋綾、山森裕毅「当事者どうしの対話活動を学ぶ:横断術「社会と臨床」授業実践報告」『Co*Design』, 8, pp.99-110,2020/8

2-2. 著書

ほんま なほ 『受容と回復のアート:魂の描く旅の風景』(アートミーツケア叢書第3巻), 生活書院, 2021/6.

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

ほんま なほ 「制度としての臨床哲学をかんがえる」臨床哲学フォーラム「人の生と研究をめぐる倫理」, 2021/12

ほんま なほ 「「臨床」を脱構築する: 臨床と人文学の制度をめぐる」第3回東アジア臨床哲学国際シンポジウム, 2021/11

ほんま なほ 「女装フォビア、性的指向、ジェンダー・アイデンティティ」臨床哲学フォーラム, 大阪大学臨床哲学研究室, 2020/11

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本哲学プラクティス学会・運営委員, 2018年8月～現在に至る

アートミーツケア学会・理事, 2006年10月～現在に至る

3. 小西 真理子 准教授

1984年生。2014年、立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程修了。博士(学術)(立命館大学、2014年)。

日本学術振興会特別研究員 PD、RPD、大阪大学大学院文学研究科講師を経て、2021年4月より現職。専攻：倫理学／臨床哲学

3-1. 論文

小西真理子 「研究者による当事者加害の「その後」を考える: 緊縛シンポをきっかけとした研究倫理(再考)の断片」『臨床哲学ニュースレター』4, pp. 85-96, 2022/3

小西真理子 「「毒親」概念の倫理——自らをアダルトチルドレンと「認める」ことの困難性に着目して」『臨床哲学ニュースレター』4, pp. 126-180, 2022/3

小西真理子 「【対談】京大・緊縛シンポジウムを考える」『フィルカル』6-2, pp. 208-229, 2021/8

小西真理子 「はじまりの場所: 臨床哲学との出会いをつづじて」『臨床哲学ニュースレター』3, 大阪大学大学院臨床哲学研究室, pp. 49-56, 2021/3

小西真理子 「支配する技術・支配への欲望: SMをめぐるトラウマ研究のための試論」『臨床哲学ニュースレター』3, 大阪大学大学院臨床哲学研究室, pp. 118-147, 2021/3

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

小西真理子 「京大で緊縛シンポ、ネット配信後の「謝罪」に議論 問われた学問の在り方とは」『京都新聞(デジタル)』京都新聞, 2021/1

小西真理子 「京大「緊縛シンポ」研究者見解」『京都新聞(朝刊)』京都新聞, 2020/12

3-4. 口頭発表

小西真理子 「“Psychologically Pathological” Voices Missed by In a Different Voice: Reevaluating the Conventional Self in Carol Gilligan’s Ethic of Care」Emotions, Actions, Meditations and Visions in Korean Philosophy, Kyungpook National University BK FOUR21 Project Team to Educate Philosophical Specialists for Conflict Resolution, Kyungpook National University Innovation Support Project (Department of Philosophy), International Society of Korean Philosophy, Kyungpook National University (オンライン), 2021/11

小西真理子 「人間の「過剰さ」を再考する」立命館大学大学院先端総合学術研究科トークイベント(大学院ウィーク), 立命館大学大学院先端総合学術研究科, 立命館大学(オンライン), 2021/11

小西真理子 「「臨床」哲学講義とケアの倫理」第3回東アジア臨床哲学会議, 中山大學(オンライン), 中山大學, 2021/11

小西真理子 「研究者による当事者加害の「その後」を考える」第72回日本倫理学会ワークショップ「〈応用〉することの倫理——緊縛シンポ、ブルーフィルム、ジェンダー」, 日本倫理学会, 京都大学(オンライン), 2021/10

小西真理子 「「現場」に関わる研究者の倫理:「役に立つ」ってどういうこと?」第3回日本哲学プラクティス学会、シンポジウム:哲学プラクティス連絡会・哲学プラクティス学会共同企画「哲学プラクティスの倫理」, 日本哲学プラクティス学会, 大阪大学(オンライン), 2021/9

小西真理子 「女性サディストの技術とフェミニストなマゾヒスト」第2回臨床哲学フォーラム, 大阪大学臨床哲学研究室, 大阪大学(ハイブリッド), 2020/11

小西真理子 「『共依存の倫理』第6章「共依存と回復論」第2節「回復論の倫理観」+まとめ」第3回〈ケア〉を考える会(京都・岡山)合同オンライン会, 〈ケア〉を考える会(京都・岡山), オンライン, 2020/7

小西真理子 「「依存しあう人たち」～共依存への気づきと事例を通して支援を考えませんか!～」一般社団法人京都社会福祉士会イベント, 一般社団法人京都社会福祉士会, 亀岡(コロナ対応により学会中止), 2020/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

小西真理子 第十回社会倫理研究奨励賞審査員賞, 南山大学社会倫理研究所, 2021/3

小西真理子 大阪大学賞(若手教員部門), 大阪大学, 2019/11

小西真理子 第四回生存学奨励賞, 立命館大学生存学研究センター, 2018/12

小西真理子 第十回社会倫理研究奨励賞審査員賞, 南山大学社会倫理研究所, 2017/3

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2019年度～2023年度、若手研究、代表者:小西真理子

課題番号:19K12922

研究題目:嗜癖の関係性と家族の「病理」をめぐる臨床哲学的研究

研究経費:2020年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2021年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究では、まず、異性愛・近代家族を肯定するフェミニズム理論が前提としている現代の「正常」な家族像がいかなるものであるかを検討し、この観点からケア論、正義論、家族論を位置づける。次に、嗜癖には当事者が感じずにはいられないような肯定性が内在することを考慮したうえで、家族における嗜癖的「病理」に介入する正当性と介入されない権利について検討する。最後に、嗜癖的関係性を受容・考慮するケアの倫理を確立し、それがいかに諸問題の現場・実践と関係しているかを検討する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

関西倫理学会・委員, 2019年11月～現在に至る

関西倫理学会・編集委員, 2019年11月～現在に至る

2-4 中国哲学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 1 准教授 0 講師 1 助教 0

教授：湯浅 邦弘
講師：辛 賢

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
4	0	2	0	0	1	0	0

*うち留学生0名、社会人学生0名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	0	0	0	1
2021	2	0	0	0
計	2	0	0	1

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

学部生については、①中国哲学の基礎知識と思想史全般の流れを理解するよう指導する。②文献資料を読むために必要な技術など、基礎的な調査能力について指導する。大学院生については、①各研究主題に関する専門知識及び資料分析の方法を習得できるよう指導する。②国内外の学会での積極的な研究発表（口頭発表・論文の投稿）を奨励する。学部生・大学院生共通の教育目標としては、①論文作成に備え、随時個別指導を行う。②修了（卒業）後の進路について随時相談を行い、それぞれの希望に応じた柔軟な対策・指導を行う。③研究室 HP の更新に努めるなど、学生に対する教育・研究情報の公開を進める。

2. 研究

本研究室は、全国でも数少ない中国哲学研究の拠点として定評を得ている。特に、新出土文献の研究と懐徳堂の研究は、本研究室の研究活動の両輪となっている。そこで、①中国出土文献研究会の事務局として、新出土文献の研究を推進し、海外学術調査を進めるとともに、その成果を国内外の学会で発表する。②大阪大学中国学会の事務局として、『中国研究

集刊』を刊行する。③懐徳堂研究会の事務局として、懐徳堂文庫資料の調査研究を進め、その成果を報告書にまとめて刊行する、などを目標として掲げた。

3. 社会連携

社会連携の一環として、国際学術交流を推進し、また、一般財団法人懐徳堂記念会の事業に協力することを目標として掲げた。具体的には、①中国や台湾の大学と共催して国際学会・シンポジウム、または講演会を開催する。②懐徳堂の復興に尽力した西村天因について、その故郷である種子島在住の子孫が保管してきた貴重資料の整理・研究を進め、その成果を公開する。③懐徳堂記念会の各種講座について、企画・運営に協力する、などである。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

【2020年度】

大学院・学部ともにそれぞれの必要な知識や研究方法について習得するよう、指導を行った。大学院生に関しては、国内外の研究交流会および学会において、口頭発表や論文の投稿を行えるよう指導した。一方、学部指導においては、資料の解読に必要な基本知識・調査技術などについて指導を行った。なお、本年度は、新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑み、適宜オンラインでの指導を行った。

【2021年度】

基本的には2020年度と同様であるが、学生指導の成果の一つとして、学部3年生の五十嵐妃桜さんが、大阪大学の「学部学生による自主研究奨励事業」に採択されて自主研究を進めた。

2. 研究

【2020年度】

新型コロナウイルス感染拡大を受けて、研究活動は困難を極め、特に、海外での資料調査や国際学会出席はできなかった。しかし、教員・院生とも着実な研究成果をあげ、オンライン研究会で発表したり、学術雑誌に論文を投稿したりした。

【2021年度】

基本的には2020年度と同様であるが、特に方法として確立しつつあるオンライン研究会については、教員・学生とも積極的に参加し、それぞれに業績をあげた。

3. 社会連携

【2020年度】

主に一般財団法人懐徳堂記念会と連携して、西村天因関係資料の調査や講演活動を行った。

【2021年度】

一般財団法人懐徳堂記念会と連携して、西村天因関係資料の調査や講演活動を行ったほか、NPO 法人大阪府北部コミュニティカレッジからの依頼により、講師を派遣するなど生涯教育活動に貢献した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

目標に沿って着実な教育がなされていると自己評価できる。具体的には、(1)竹簡・帛書など新出土資料を精力的に取り上げたこと、(2)中国古代思想を中心に、近世および日本漢学に至る幅広い時代を対象としたこと、(3)「懐徳堂文庫」や西村天因旧蔵資料の整理・調査を行ったこと、などである。また、学部生、院生とも、学内外で積極的に研究発表等を行ったことは、教育について一定の成果があったと評価できる。

2. 研究

新型コロナウイルス感染拡大により、設定した研究目標の達成にはやや及ばなかったが、そうした困難な中でも着実に研究が進められたと自己評価できる。特に、新出土文献の研究と懐徳堂の調査・研究は、全国的に見ても本研究室の特色として認知されるに至っている。

なお、湯浅教授が編著者を務め、菊池孝太郎・六車楓院生が共著者として執筆に参加した『儒教の名句：四書句辨を読み解く』上下巻（汲古書院、上巻 2020 年 12 月・下巻 2021 年 11 月）が 2021 年 11 月に、一般社団法人中央政策研究所の「学術貢献賞」を受賞した。

3. 社会連携

国際学術交流は、新型コロナウイルス感染拡大によりほとんどできなかったが、懐徳堂事業については積極的な関わりができており、研究室の組織的な社会貢献が充分になされていると自己評価できる。

さらに、大阪大学文学研究科と鹿児島県西之表市との共同研究「西村天囚関係資料の研究」が締結され、代表者を務めた湯浅教授は、その成果の一つとして、『西村天囚『論語集釈』』を刊行した。地方自治体との研究連携の成果として自己評価できる。

V. 基本情報(2020 年度～2021 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	1	0	1
2021	0	0	0
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

鳥羽加寿也、楚簡資料による戦国期楚方言音の研究、湯浅邦弘（主査）、浅見洋二（副査）、鈴木慎吾（副査）

【論文博士】

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	4(2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	4(2)
2021	2(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	3(2)
計	6(4)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	7(4)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	1	1	2	0	1	5
2021	0	0	0	0	0	0
計	1	1	2	0	1	5

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

菊池孝太郎「中国古代の楚地における鬼神観の考察—上博楚簡『鬼神之明』『凡物流形』を手がかりにして—」『中国研究集刊』第66号, pp.27-56, 査読有, 2020/8/1

菊池孝太郎「上博楚簡『凡物流形』における「鬼神」」『待兼山論叢』第54号, pp.1-18, 査読無, 2020/12/25

六車楓「敦煌医書『明堂五藏論』積読補訂」『中国研究集刊』第66号, pp.57-70, 査読有, 2020/8/1

鳥羽加寿也「安大簡『詩経』を読むために—『詩経』関連文献提要(一)」『中国研究集刊』第66号, pp.78-87, 査読無, 2020/8/1

【2021年度】

〔学部〕

五十嵐妃桜「『菜根譚』における三教の考察：日本で『菜根譚』はどのように読まれてきたのか」『令和3(2021)年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書』, pp.1-7, 査読, 2021/2

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

六車楓「清華簡『行称』『病方』から見る術数と方技の関係」『中国研究集刊』第67巻, pp.28-49, 査読有, 2021/8/1

六車楓「清華簡『病方』積読：中国医学思想史の再検討」『待兼山論叢』第55巻, pp.1-17, 査読無, 2021/12/25

(2)口頭発表

【2020年度】

〔学部〕

五十嵐妃桜「受講生から見たオンライン授業の問題点」, 第29回懐徳堂研究会「オンライン時代の教育研究を考えるオンライン会議」, オンライン, 2021/12/27

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

六車楓「敦煌医書『明堂五藏論』とアーユルヴェーダの関わり」, 第2回若手研究者フォーラム, 大阪大学文法経本館2階大会議室, ハイブリッド, 2020/9/28

六車楓「論敦煌醫書《明堂五藏論》在中國醫學史上的位置」, 国立台湾師範大学国際与社会科学学院第三届研究生跨領域論壇, 台湾師範大学国際与社会科学学院, ハイブリッド, 2020/5/17

鳥羽加寿也「「食」の読音の変遷について」, 日本中国語学会2020年度全国大会, オンライン, 2020/11/7

鳥羽加寿也「日本人学習者の漢字認識と中国語学習」, 在日中国語教育の再考, オンライン, 2021/2/14

【2021 年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕 なし

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020 年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕 なし

【2021 年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕

六車楓「中国古典に見える「健康」」(大阪府北部コミュニティカレッジ総合文化を学ぶ科、2022年2月15日、於：豊中市立文化芸術センター多目的室)

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

湯浅邦弘(代表受賞者)「学術貢献賞」、一般社団法人中央政策研究所、2021年11月

※『儒教の名句：四書句辨を読み解く』上下巻(汲古書院、上巻2020年12月・下巻2021年11月)に対する賞。上下巻共に大学院生の菊池孝太郎・六車楓が共著者。

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注)3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:1名 (計2名)

2021年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:1名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2021年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2020年度～2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

黒田秀教, 博士後期課程修了, 明石工業高等専門学校, 助教(常勤), 2020/9

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020年度～2021年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2020年度:0名 2021年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度：0名 2021年度：0名

9. 刊行物

2020年度 『中国研究集刊』第66号 刊行

2021年度 『中国研究集刊』第67号 刊行

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

懐徳堂研究会(研究会、研究会開催・事務局引受) 2000年～現在に至る

中国出土文献研究会(2010年10月、戦国楚簡研究会を改称。研究会、研究会開催・事務局引受) 1998年～現在に至る

大阪大学中国学会(学会、事務局引受) 1984年～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第29回懐徳堂研究会「オンライン時代の教育研究を考えるオンライン会議」(オンライン会議) 2020年12月27日

第30回懐徳堂研究会(オンライン会議) 2021年3月20日

第73回中国出土文献研究会(オンライン会議) 2021年3月26日

第74回中国出土文献研究会(オンライン会議) 2022年2月19・20日

12. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 湯浅 邦弘 教授

1957年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。博士(文学、大阪大学、1997年)。北海道教育大学講師、島根大学助教授、大阪大学助教授を経て、2000年4月現職。2011年7月、大阪大学功績賞(社会・国際貢献部門)受賞。2013年7月、中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会「優秀学術論文賞」受賞。専攻：中国哲学／中国思想史／懐徳堂研究

1-1. 論文

湯浅邦弘「大阪文化の力—懐徳堂の歴史と意義—」『懐徳』(懐徳堂記念会), 90, 懐徳堂記念会, pp. 26-32, 2022/1

湯浅邦弘「『詩経』形成史における安徽大学蔵戦国竹簡の意義」『中国研究集刊』67, 大阪大学文学部中国哲学研究室, pp. 1-17, 2021/8

湯浅邦弘「西村天囚『欧米遊覧記』と御船綱手「欧山米水帖」—明治四十三年「世界一周会」の真実—」『大阪大学文学研究科紀要』(大阪大学文学研究科), 61, 大阪大学文学研究科, pp. 1-45, 2021/3

湯浅邦弘「小宇宙に込めた天囚の思い—種子島西村家所蔵西村天囚旧蔵印について—」『懐徳堂研究』(大阪大学文学研究科懐徳堂研究センター), 12, 大阪大学文学研究科懐徳堂研究センター, pp. 3-23, 2021/2

Yuasa, Kunihiko, "On Stanzaic Inversion in the Qin feng 秦風 Ode "Sitie" 騶騶 (Iron-Black Horses) in the Anhui University Bamboo Manuscript of the Shi jing 詩經(Classic of Odes)" *bamboo and silk*, (武漢大学簡帛研究中心), 4, 武漢大学簡帛研究中心, pp. 147-169, 2021/1

湯浅邦弘「懐徳堂の復興と西村天囚—「世界一周会」の歴史的意義—」『懐徳』(懐徳堂記念会), 89, 懐徳堂記念会, pp. 14-37, 2021/1

1-2. 著書

- 湯浅邦弘『世界は縮まれり—西村天因『欧米遊覧記』を読む—』KADOKAWA, 507p., 2022/2
- 湯浅邦弘, 有馬卓也, 佐野大介他『よくわかる中国思想』ミネルヴァ書房, 193p., 2022/2
- 湯浅邦弘, 佐野大介, 六車楓他『儒教の名句—『四書句辨』を読み解く—下巻』汲古書院, 417p., 2021/11
- 湯浅邦弘『西村天因『論語集釈』』大阪大学文学研究科(鹿児島県西之表市との共同研究の成果), 330p., 2021/11
- 湯浅邦弘, 六車楓, 菊池孝太郎他『儒教の名句—『四書句辨』を読み解く—上巻』汲古書院, 334p., 2020/12
- 湯浅邦弘『懷徳堂研究』四川大学出版社, 184p., 2020/5
- 湯浅邦弘『人生に効く『菜根譚』』KADOKAWA, 163p., 2020/5

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 湯浅邦弘 大阪大学総長表彰, 大阪大学, 2013/10
- 湯浅邦弘 2013 年中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会「優秀学術論文賞」, 中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会, 2013/7
- 湯浅邦弘 大阪大学功績賞(社会・国際貢献部門), 大阪大学, 2011/7
- 湯浅邦弘 大阪大学共通教育賞(2003 年度前期), 大阪大学共通機構, 2003/12

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2019 年度～2022 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:湯浅邦弘

課題番号:19H01193

研究題目:戦国秦漢簡牘の総合的研究—安大簡・清華簡・上博簡・北大簡を中心として—

研究経費:2020 年度 直接経費 2,500,000 円 間接経費 750,000 円

2021 年度 直接経費 2,200,000 円 間接経費 660,000 円

研究の目的:

本研究は、現在、中国学の研究分野で世界的に注目を集めている新出土文献(新出簡牘)の解読を進め、中国古代思想史、特に戦国期から漢代に至る思想の形成と展開、および中国古文字の変遷過程を明らかにすることを目的とする。具体的には、本年末から刊行が開始される安徽大学竹簡(安大簡)、ならびに現在順次刊行が進められている『上海博物館蔵戦国楚竹書』(上博簡)、『清華大学蔵戦国竹簡』(清華簡)、『北京大学蔵西漢竹書』(北大簡)等に基づいて、それぞれの新出土文献を、思想史・文字学の専門家からなる共同研究によって解読し、また、中国・台湾などで活発な活動を続けている出土文献関係の学会・研究会と学術交流を進め、さらには、上海博物館・清華大学・北京大学・安徽大学などにおいて出土文献の実見調査を行って、上記の解読作業を補完する。最終的には、これらの新出土文献の研究を通じて得られた新知見をもとに、新たな中国古代思想史・古文字学史の記述を目指したい。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2019 年度～2020 年度、6 : 研究助成、助成金獲得者:湯浅邦弘

助成金名:三菱財団研究助成

研究題目:「天声人語」の名づけ親西村天因の見た近代日本

助成団体名:公益財団法人三菱財団

助成金額:2020年度 直接経費 500,000円
2021年度 直接経費 220,000円

研究の目的:

西村天囚は、明治・大正期の漢学者で朝日新聞の記者を務め、「天声人語」の名付け親として知られる。その旧蔵書三千点は現在大阪大学懐徳堂文庫の一部となっているが、最近、郷里の種子島・西村家に関係資料約二千点が残されていることが明らかになった。そこで本研究では、これらの資料を現地調査することによって、明治維新时期に一時衰退したとされる漢学が明治・大正時代に復興して近代漢学へと展開した軌跡の一端を明らかにする。また、日本の近代漢学・東洋学の形成過程とジャーナリズムの関係や日清・日露戦争期における、民間外交員としての天囚の役割などについて解明する。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本論語教育学会・副理事長, 2018年4月～現在に至る
日本儒教学会・評議員, 2016年4月～現在に至る
日本中国学会・評議員, 2013年4月～現在に至る
中国出土文献研究会・会長, 2012年4月～現在に至る
東方学会・学術委員(東方学査読委員), 2011年7月～現在に至る
全国漢文教育学会・理事, 2005年4月～現在に至る
日本道教学会・理事, 2004年4月～現在に至る
懐徳堂研究会・代表, 2000年4月～現在に至る
中国出土資料学会・理事, 1989年4月～現在に至る

2. 辛賢講師

1967年、韓国ソウル生。2002年、筑波大学大学院哲学・思想研究科博士課程修了。博士(文学)。日本学術振興会外国人特別研究員(筑波大学)を経て、2004年4月現職。専攻:中国哲学、漢代易学

2-1. 論文

辛賢「劉牧易の諸問題一河図洛書との関わりから」『大阪大学大学院文学研究科紀要』62, 大阪大学大学院文学研究科, 2022/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

辛賢 日本中国学会賞, 日本中国学会, 2001/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2020年度～2022年度、基盤研究(C)、代表者:辛賢

課題番号:20K00052

研究題目:宋学形成における象数学の位置—南宋易学を中心に—

研究経費:2020年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

2021年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

宋代は二程・朱子を中心とする義理易の発展とともに、王弼以来、衰退した象数易が邵雍によって新たな展開をなした時代である。宋代において象数は論理展開の技術・手段に止まらず、それ自体が思索の対象として形而上的存在論に展開し、象数学は宋学形成に大きな影響を与えたものと推察される。本研究では、とりわけ義理と象数の融合が図られる南宋の易学を取りあげ、朱子の理学形成における象数学の思想史的な位置について考察する。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本道教学会・理事, 2012年1月～現在に至る

三国志学会・評議員, 2006年7月～現在に至る

2-5 インド学・仏教学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 1 准教授 0 講師 1 助教 0

教授：堂山英次郎

講師：名和 隆乾

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
4	3	3	0	0	2	0	0

*うち留学生0名、社会人学生1名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	2	0	0	0
2021	1	1	0	0
計	3	1	0	0

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

学部生と大学院生の学問的な相互交流を促進できるような授業形態をとること、またインド学・仏教学関係の学会・研究会等の情報を収集して学生に周知し、研究意欲の高揚をはかることに力点を置き、以下の目標を設定した：学部では2年次生向けの専門語学と講義の授業を開講し、基礎的な知識や学力の充実を、また3年次以上の学生に向けては原典輪読の授業を開講し、研究資料の読解やその利用法のスキルアップを目標とした。4年次生には、卒業論文作成のための論文作成指導の授業を設定した。大学院では、修士論文及び博士論文の作成演習の授業を開講し、資料の解読と論文作成の指導に重点を置くとともに、学会での口頭発表や学術誌への投稿論文作成の奨励と指導を目標とした。また、各種研究助成に関する情報の入手につとめ、研究の経済的基盤の獲得を支援することも目標として掲げた。

2. 研究

教員・大学院生ともに、学内・学外の研究会には積極的に参加すること、また国内外の研究機関及び研究者との交流・協力を教員が主導して促進することを目標とした。

3. 社会連携

教員は積極的に一般向けの講演や著作を行うこと、及び学会等において役員等の責務を果たすことを目標として掲げた。

Ⅲ. 活動の概要(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

設定した目標に向けて講義・演習を行ない、学部生の二次文献も含めた読解力の向上のため、授業・授業外での指導に多くの時間をかけた。また学問的な相互交流を促進するために、論文作成演習の授業を有効に使い、教員、大学院生、学部生の垣根を超えた全員参加型の議論・情報交換の場を、より一層充実させた。2020 年度以降は、学部一年生向けに行なっている共通教育科目の内容を更に専門化した講義科目を新設し、それをマルチリンガル・エキスパート養成プログラムに紐付けることによって、広く専門内外の学生が分野横断的な視座から議論できる場を提供した。

2. 研究

学内外の研究会・学会へは、教員及び学生の多くが積極的に参加し、また国内外の研究者・学術機関との交流も活発に行なった。教員は、積極的に学会発表及び学術雑誌への投稿を行った。学生については、論文作成演習の授業（上記 1. 教育）の中で予備発表・予備議論を行なうことで、論文の質を大きく高めることに成功した。その他特記すべき活動として以下のものがある。教員 1 名は 2020 年度より 5 年間の予定で、古代インドの英雄神インドラに関する総合的研究を行うための科学研究費補助金（基盤 C）を研究代表者として獲得した。別の教員 1 名は、2020 年度より、インド初期仏教における経典読誦の具体像を解明する科学研究費補助金（基盤 C）の研究分担者を、また 2021 年度より、ジャイナ教における「身体放捨行」と呼ばれる瞑想法の解明を目指す科学研究費補助金（基盤 C）の研究分担者を務めている。

3. 社会連携

教員 1 名は「日本印度学仏教学会」評議員・理事、「日本歴史言語学会」理事・事務局長等、複数の役員職を遂行している。同教員はまた、2021 年度に一般向けのヴェーダ語に関する Web コラムを 12 回に分けて連載し、ヴェーダ語や古代インドの文化・社会について広く情報発信を行った。また別の教員 1 名は、寺院、病院などに直接出向き、本専門分野の知識を提供・共有したり、地域の公的機関の開催する講演会等でも積極的な情報発信を行なっている。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、学部生の原典及び二次文献の読解力に向上が見られ、多彩かつ風通しのよい演習授業を行なった結果、幅広い視点や掘り下げた議論が活発に行われた。前期課程の学生 1 名が奈良女子大学史学会第 65 回大会において発表を行い、質の高い修士論文を完成させて後期課程に進学したことや、後期課程の学生 1 名が『よくわかる中国思想』において項目執筆を行い、『懐徳』において書評を発表したこと、そして別の博士後期課程の学生 1 名が新「ブラフマニズムとヒンドゥイズム」研究会第 10 回およびインド思想史学会第 28 回学術大会において口頭発表を行い、また仏教サロン京都において一般向けの講演を行うなど精力的な活動を行っていることは、当研究室が設定した教育目標が継続的に機能し実を結んだひとつの証拠であって、客観的に見て評価できることであろう。当該年度における大学院生の学会発表等の数は当研究室に在籍する学生の数に起因するところが大きく、直ちに教育効果の問題に帰せられるわけではない。今後、新たに進学してくる学生たちが同様の教育を受けることで、これまで在籍した学生以上の成果を彼らが発信していく

ことが大いに期待できよう。当分野における教育の中心はサンスクリットなどで書かれた各種古典文献群の読解が中心となるため、長期にわたる粘り強い訓練を必要とすると同時に、学生個々人のレベルアップやその速度にも当然ながら個人差がある。しかし、学生1人1人に合った指導が行き届くように目配りをした結果が、如上の結果につながったと考えられる。目標の達成とともに、上記の方針を継続すべきものとして確認できたことも評価できよう。

2. 研究

各教員がそれぞれ、国内外の学会への出席、研究者・学術機関との交流に努め、また学会発表や学術誌への投稿も積極的に行なっており、全体として目標を達成したと考えられる。また外部資金（科学研究費補助金）は、教員2名のうち1名が研究代表者として、また別の1名が研究分担者（2件）として獲得している。国際学会への参与は、コロナウイルス感染症の影響により国際学会が延期や中止になったことで、若干低下気味である。こうした状況に終わりが見えない中、オンラインでの国際活動にもより力を入れるべきであろう。一方、外国語による論文の執筆や海外ジャーナルへの投稿については、教員は一定の成果を出してはいるが、今後はより積極的に行ない、特に大学院生にも促していくことが必要であると考えられる。

3. 社会連携

一般向けの講演や著作については、一定の成果が見られる。そのうち、教員1名によるWeb連載は特筆すべきであろう。特に、連載の主題である「ヴェーダ語」については、現在、当連載が必ず検索の上位5以内に入っており、知名度の無いこの言語についての大きな情報発信と分野の宣伝につながっていると評価される。今後は、研究室主催による各種講座・イベントの開催も含め、研究成果の社会への還元や情報発信において更なる積極的役割を担うことが必要である。学会等における役員の責務遂行においては、目標は達成されたと言える。ただし、複数の役員等を兼務しているような場合、それらの仕事が本務の教育・研究に影響しないよう気をつける必要がある。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	0	0	0
2021	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

なし

【論文博士】

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	1(1)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)
2021	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	0(0)	1(1)
計	1(1)	1(1)	0(0)	1(1)	0(0)	3(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	0	2	0	0	1	3
2021	0	1	1	1	0	3
計	0	3	1	1	1	6

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2020年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕

坪田さより「Vādhūla-Śrautasūtra 新写本に見るヴァーージャペーヤ祭の特徴について-戦車競走を中心に」『印度学仏教学研究』(日本印度学仏教学会), 第69巻第2号, pp. 978-975, 査読有, 2021/03

坪田さより「ヴァーージャペーヤ祭における戦車競走儀礼の諸相-Vādhūla-Śrautasūtra 新写本に基づいて-」『待兼山論叢(哲学篇)』(大阪大学大学院文学研究科), 第54号, pp.75-92, 査読有, 2020/12

【2021年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕

野口真戒「インド仏教の伝来」『よくわかる中国思想』, pp.168-171, 査読有, 2022/2/28

(2)口頭発表

【2020年度】

〔博士前期〕

都築みのり「ヴェーダ語における mitrá- の語義と語法についての一考察」, 奈良女子大学史学会第65回大会, 奈良女子大学, 対面, 2020/11/23

〔博士後期〕

坪田さより「Vādhūla-Śrautasūtra 新写本に見るヴァーージャペーヤ祭の特徴について-戦車競走を中心に」, 日本印度学仏教学会第71回学術大会, 創価大学, オンライン, 2020/7/5

坪田さより「古代インドの祭式-『ヴァードゥーラ・シュラウタースートラ』におけるヴァーージャペーヤ祭の研究-」, 第2回若手研究者フォーラム, 大阪大学, ハイブリッド, 2020/9/28

【2021年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

坪田さより「Vādhūla-Śrautasūtra 2.3.1.38-54 輪読」, 新「ブラフマニズムとヒンドゥイズム」研究会第10回, オンライン, 2021/5/29

坪田さより「Pratyavarohaṇīya「戻り降りの儀礼」について-Vādhūla-Śrautasūtra 第9章の記述を中心に-」, インド思想史学会第28回学術大会, オンライン, 2021/12/25

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

野口真戒「書評: 森和也著『神道・儒教・仏教—江戸思想史のなかの三教』『懐徳』(懐徳堂記念会), 第89号, pp. 59-64, 2021/01

【2021年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

坪田さより「ヴェーダ時代のホーマを徹底検証: 護摩の起源に迫る」, 仏教サロン京都オンライン講座, オンライン, 2022/3/12

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2021年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2021年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020年度～2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020年度～2021年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2020年度: 0名 2021年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度：0名 2021年度：0名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 堂山 英次郎 教授

1972年生。大阪外国語大学外国語学部卒、東北大学大学院文学研究科博士後期3年の課程単位取得退学。文学修士（東北大学）、博士（文学、東北大学）。京都大学人文科学研究所助手を経て、2004年4月大阪大学大学院文学研究科講師、2014年9月同研究科准教授、2019年4月より現職。2007年日本南アジア学会第1回学会賞受賞、2008年第50回日本印度学仏教学会賞受賞。

1-1. 論文

堂山英次郎 「ジャムシードの悲劇性について —インド・イラン的視点から見たイマおよびヤマ:イマ編」『イラン研究』18, pp. 31-49, 2022/3

Dōyama, Eijirō “The Vedic subjunctive prescribed in A. 3.4.7” In: Peter M. Scharf (ed.) *Śabdānugamaḥ: Indian linguistic studies in honor of George Cardona*, Volume I: Vyākaraṇa and Śabdabodha, The Sanskrit Library: pp. 323-373, Providence, 2021/12

堂山英次郎 「ヴェーダ(サンスクリット)語の名詞と体言化構造 ——体言化理論からの視点——」, 鄭聖汝・柴谷方良(編)『体言化理論と言語分析』大阪大学出版会, pp. 1-58, 2021/2

Dōyama, Eijirō, “Reflections on YH 40,1 from the perspective of Indo-Iranian culture” In: C. Redard, J. Ferrer-Losilla, H. Moein, & Ph. Swennen (eds.) *Aux sources des liturgies indo-iraniennes*, Liège, Presses universitaires de Liège: pp. 175-194, 2020/10

1-2. 著書

Peter M. Scharf (ed.), Dōyama, Eijirō, et al. (共著) *Śabdānugamaḥ: Indian linguistic studies in honor of George Cardona*, Volume I: Vyākaraṇa and Śabdabodha, Providence, The Sanskrit Library: pp. 323-373, 2021/12

鄭聖汝, 柴谷方良他 (編), 堂山英次郎 他(共著), 『体言化理論と言語分析』, 大阪大学出版会, pp. 1-58(第一章), 2021/2

C. Redard, J. Ferrer-Losilla, H. Moein, & Ph. Swennen (eds.) Dōyama, Eijirō, et al. (共著), *Aux sources des liturgies indo-iraniennes*, Liège, Presses universitaires de Liège: pp. 175-194, 2020/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

堂山英次郎, 「サンスクリット語のむこう側 ——ヴェーダ語の世界」(株)教養検定会議主催 Web ページ「リベラルアーツ検定ク

イズ」内 kotoba news 連載:2022 年 1 月～3 月(計 12 回)

1-4. 口頭発表

堂山英次郎 「日本佛教学会第 90 回(2021 年度)学術大会第一セッションコメント」日本佛教学会第 90 回(2021 年度)学術大会, 日本佛教学会, 大正大学(オンライン), 2021/9

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堂山英次郎 平成 20 年度国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 大阪大学, 2009/2

堂山英次郎 第 50 回日本印度学仏教学会賞, 日本印度学仏教学会, 2008/9

堂山英次郎 日本南アジア学会第 1 回学会賞, 日本南アジア学会, 2007/10

堂山英次郎 印度学宗教学会第 3 回学会賞, 印度学宗教学会, 2006/6

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2020 年度～2024 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:堂山英次郎

課題番号:20K00051

研究題目:インドラとは何者か? ——古代インドの英雄神に関する総合的研究——

研究経費:2020 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

2021 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

古代インドの英雄神インドラは、古い時代には大蛇退治など多くの偉業の担い手として讃えられ、絶大な人気を誇った。しかし時代とともにその絶対性と人気は失われ、他の神々の活躍の中に埋没してしまう。またインドラは、他の神々に比類なきほど多彩な特徴や神話を有する。インドラとは一体何者なのか? 本研究は、1)ヴェーダ文献から叙事詩・ブラーナに至る広範囲のサンスクリット語文献群に見える神話や記述に基き、インドラの行為・性質・人物像を時代ごとに回収・整理した上で、2)各時代の宗教、社会、世界観等におけるその位置づけや役割を多角的に考察し、3)この神の通時的変遷のダイナミズムを描き出すことを、主要目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

印度学宗教学会・理事, 2020 年 4 月～現在に至る

日本歴史言語学会・事務局長, 2020 年 1 月～現在に至る

インド思想史学会・理事, 2019 年 4 月～現在に至る

日本佛教学会・理事, 2019 年 4 月～現在に至る

日本歴史言語学会・理事, 2016 年 1 月～現在に至る

日本印度学仏教学会・評議員, 2004 年 7 月～現在に至る

印度学宗教学会・評議員, 2004 年 6 月～現在に至る

2. 名和 隆乾 講師

1984 年生。大阪大学文学部卒、文学修士(大阪大学)。博士(文学, 大阪大学)。2013 年度日本学術振興会特別研究員、2016 年 4 月大阪大学文学研究科助教、2018 年 10 月同特任講師(常勤)をへて 2020 年 4 月より現職。専攻: インド初期仏教文献学。

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

Nawa, Ryuken. Review: "Marcus Bingenheimer et al. (tr.). *The Madhyama Āgama (Middle-length Discourses)*. vol. I: 2013; vol. 2: 2020. Berkeley, Calif.: Bukkyo Dendo Kyokai America." *Mahāpīṭaka* 27, pp. 4-6, 2020

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2018年度～2020年度、若手研究、代表者:名和隆乾

課題番号:18K12198

研究題目:初期仏教における十二支縁起説成立史研究の再構築

研究経費:2020年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

仏陀や仏弟子の言行を伝えるインド初期仏典中(4～5 B. C.), 12 因(支)に基づき苦の生成を説く十二支縁起説は中核的位置を占める。本研究課題では、多数の研究が存在しつつ 未だ定説の無い十二支縁起説成立史の一端を、これと関連して古くから難解とされてきた問題と共に、インド初期仏典中、唯一フルセットで現存するパーリ聖典を主資料とし、情報処理技術と印欧語比較言語学の知見を導入した文献学的手法を用い、従来に無かった視点の導入により、解明する。具体的には、後の縁起説解釈の中心典拠「分別経」(『サンユッタニ カーヤ』第12章第2経)中の十二支縁起説が、五支縁起説を部分的に改変して取り込んでいる事を明らかにする。またその改変理由が、「分別経」の十二支縁起説が、単に一生涯でなく生死を繰り返す輪廻の苦を説明する為であった事をも明らかにする。そして上記結果を出した上で、成立史研究の従来の手法が崩れて研究が停滞する中、新たな研究方法を提案する。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-6 日本学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 1 准教授 3 講師 0 助教 1

教授：宇野田尚哉

准教授：北村 毅、安岡 健一、中嶋 泉

助教：西井麻里奈

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
50	9	8	0	0	0	2	0

*うち留学生5名、社会人学生3名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	9	2	0	4
2021	15	6	2	0
計	24	8	2	4

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

教育について掲げた目標は、以下の6点である。①卒業論文・修士論文・博士論文作成について、日本学教員全員によって指導に取り組み、無理なく論文を完成させることができるようにシステムを充実させる(論文完成までのシステム充実)。②個別学術論文の作成について、テーマに応じて他大学の研究者も含めて議論する場を更に組織する(他大学との連携)。③大学関係者以外の場における議論の場を設け、異領域とのコミュニケーション能力の向上を図る(大学外との連携)。④海外の大学や機関と連携して発表・交流の機会を創出し研究室として支援する(海外の大学・機関との連携)。⑤学部生・院生による自発的な研究会活動を進めるための指導をおこなう(自主的活動の推進)。⑥自発的なパンフレットや情報発信を促進するための指導を更に強化する(メディアの創造)。総じて他機関との交流やコミュニケーションにかかわる環境の整備、ならびに能力の開発が目標となった。

2. 研究

研究について掲げた目標は、以下の3点である。①大小さまざまなシンポジウムや公開の研究会を組織し、その成果を『日本学報』において発信する(『日本学報』の活用とその内容の充実)。②個々の論文作成に当たり、日本学の中で議論を共有すべく討議の機会を設ける(研究に関わる討議空間の創出)。③他大学、大学以外の研究機関、個人などとの研究上の連携を更に強化する(研究ネットワークの強化)。総じて、個々の研究テーマに即した形で柔軟に研究環境が構築できる体制を目指し、課題牽引型の研究形態とそのための環境整備を重点的に行った。

3. 社会連携

社会連携について掲げた目標は、以下の2点である。①研究会を非専門家や市民とともにおこなう。その際、共通の課題を設定する。②学生・大学院生の活動の評価において、社会における活動を重視する。社会連携については、恒常的な研究会、あるいはシンポジウム等のイベントの計画過程に市民の参加を求めた点にある。またその際、公立ミュージアムや、NPO、NGOをはじめとする学外組織や、在野の研究グループとの密接な連携がポイントになった。またこうした連携は上記の研究形態とも密接に関わる。以上の情報発信の拠点として、今後、研究室のホームページの充実化を図っていく予定である。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、2020年4月～5月の緊急事態下において、学生の通信環境の整備を含め、オンライン授業のための教育環境を整えることが先決となった。その結果、対面での講義や演習の実施が難しい中で、卒業論文・修士論文・博士論文の作成についての指導を順当に行うことができた。さらには、オンラインでの複数の演習を通じて論文作成をバックアップする体制が一層強化された。また、非常勤講師の招へいは、学生が学外の講師とコミュニケーションを深める貴重な機会となった。2020年度は、例年のように、講演会・シンポジウム・ワークショップなどの「学生企画」や大学院生の学会旅費に対する経済的な支援を行うことはできなかったが、オンラインでの教育に対応するための機器やシステムを導入し、教育資源の拡充を図ることができた。以上を鑑み、目標はおおむね達成されたと考えるが、今後もさらなる教育体制の充実をはかり、オンラインの利点を活かしたカリキュラムの改革に取り組む。2021年度は、上記に加え、オンラインのメリットも活かしつつ安全な対面授業の実施が模索された。

2. 研究

2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大の中でオンラインを中心とした交流に留まったとはいえ、国際日本文化研究センター、京都大学、神戸大学、同志社大学、天理大学などの関西圏の研究機関との連携も一層深まりつつある。また、国内外の博物館、ミュージアム、大学・研究所などの研究機関に所属している修了生との交流は、在学生在を交えた情報交換のための貴重な機会となっている。研究会はオンラインでの開催が中心となったが、他大学、他研究機関のハブとして日本学の間が機能しつつあることをあらためて確認した。

2021年度には、『日本学報』も合併号として刊行し、各種の研究交流も継続された。大阪大学におけるグローバル日本学の拠点形成プロジェクトも発足した。

以上を鑑み、おおむね目標は達成されたと考える。

3. 社会連携

近年、研究者以外に多くの市民が開催する研究会やシンポジウムを開催し、大阪で活動するNPOやNGOのグループとの連携も深まり、恒常的な人的交流が行ってきた。例年の原田神社秋季例大祭への参加は、地域貢献として、地元でも評価されていたが、いずれもコロナ禍で実施できなかった。とはいえ、2021年度に実施する社会連携事業に関して、行

政の担当者と打ち合わせを重ね、次年度の事業実施への道筋を付けたことの成果は大きい。以上を鑑み、目標はおおむね達成されたと考える。

2021年度には、上記の社会連携事業において、地元自治体と学部生・大学院生との連携が着実に深まった。

IV. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

教育に関わる上記の活動により、卒業論文・修士論文・博士論文において、高い水準の維持と創造的なテーマ設定の深化がすすんだ。大学院ゼミの運営方式はより良い研究・教育の推進のため見直しをすすめた。また、教育の場での調査結果発表を外部に公開し、新聞記事として掲載されるなど、コロナ禍であっても工夫を試みた。学部生も含めて、複数の自主的な研究会組織が生まれるなかで育まれた議論のスキルや問題設定能力は、研究関係職のみならず多様な職種においても評価されている。以上から、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

研究に関わる上記の活動により、大学院生による学会発表や学会誌論文の掲載がすすんだ。大学院生は学外の様々な研究者や市民とつながり、新たな創発を実践している。2017年9月には、国際日本文化研究センターを拠点として阪大文学研究科も加盟する「国際日本研究コンソーシアム」が発足したほか、本学におけるグローバル日本学の拠点形成プロジェクトも、日本学研究室所属教員が貢献し、国際的日本研究の連携体制の基盤づくりが進んでいる。本研究室で学位を取得した研究者の学術書刊行もみられており、おおむね研究についても目標は達成されたと自己評価できる。

3. 社会連携

社会連携に関わる上記の活動により、大阪で活動するNPOやNGOや在野の研究グループ、ならびに、行政との恒常的な連携を進めている。依然としてコロナ禍が続き、地域活動が十分に行えないなか、地元自治体との連携は継続されている。また、他の社会教育機関との連携も探られており、こうした社会連携が、教育活動や研究活動とも有機的に関連している。以上より、社会連携の目標についてもおおむね達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	4	0	4
2021	0	0	0
計	4	0	4

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

ファクンド・ガラシーノ「日本とラテンアメリカの国民形成に関する移民史研究—ブラジルとアルゼンチンにおける日本移民を中心に（1884-1951）」

徐潤雅「画家・富山妙子の美術／運動—1970年代から1980年代初頭までを中心に—」

中西美穂「現代日本における女たちの美術実践空間の研究—展覧会・ツアー・会報・家・テント村を中心に—」

松本章伸「占領期日本のラジオドキュメンタリー音声と番組制作工程から読み解く」

【論文博士】

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	2(2)	0(0)	0(0)	1(0)	0(0)	3(2)
2021	3(3)	0(0)	0(0)	1(0)	3(1)	7(4)
計	5(5)	0(0)	0(0)	2(0)	3(1)	10(6)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	1	2	2	0	1	6
2021	0	5	0	0	1	6
計	1	7	2	0	2	12

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

村中大樹「占領期（1945～52年）におけるブラジル日本人移民二世の帰国支援運動—高知県における「ブラジル二世クラブ」の結成と展開—」『移民研究年報』第26号, pp.88-97, 査読有, 2020/6/15

牧野良成「書評 浅倉むつ子・萩原久美子・井上久美枝・連合総合生活開発研究所編著『労働運動を切り拓く—女性たちによる闘いの軌跡』（旬報社 2018）」『社会運動史研究』第2号, pp.213-219, 査読無, 2020/4/20

牧野良成「フェミニズムの歴史化における〈波〉区分を問いなおす—日本語圏ではなんのために、どんなふうに使われたか」『女性学年報』第41号, pp.41-62, 査読有, 2020/12/19

【2021年度】

〔博士前期〕

座間味希呼「戦後沖縄の製糖工場技術者の経歴に見る日本帝国下糖業の痕跡—糖業復興期の分蜜糖工場技術者の事例から—」『農業史研究』第56号, pp.69-81, 査読有, 2022/3/1

平尾漱太「真山青果「玄朴と長英」論—関東大震災後に「蚕社の獄」はどう描かれたか—」『待兼山論叢 日本学篇』第55号, 査読有, 2022/3/1

〔博士後期〕

山本潤子「『認罪』としての中国人遺骨送還運動—福島県『中国人殉難烈士慰霊碑』と『満洲国軍』日系軍官大槻市郎の経験を事例として—」『人民の歴史学』第巻第 231 号, pp.1-13, 査読有, 2022/3/1

濱恵介「ふるさと納税制度に関する史的考察」『MFE 多焦点拡張』第巻第 2 号, pp.82-90, 査読無, 2022/3/1

濱恵介「広島流川教会の思い出とその秘話」『原爆文学研究』第 20 号, pp.236-237, 査読無, 2022/3/1

濱恵介「統一感のある群舞と圧巻のコーラス、阪大みーあキャット『ウィキッド』」講演『アイデアニュース <https://ideanews.jp/archives/120844>』, 査読無, 2021/11/17

陣内 恵梨「神功皇后画像の再検証：ジェンダーの視点から見た、韓国併合後/戦後における画像の変容」『ジェンダー史学』第 17 号, pp.49-57, 査読有, 2022/1/31

(2) 口頭発表

【2020 年度】

[博士前期]

座間味希呼「戦後沖縄の製糖工場労働者の就業履歴に見る技術者の移動」, 日本農業史学会研究報告会, 京都大学農学部 総合館生物資源経済学専攻第 1 会議室, ハイブリッド, 2021/3/29

平尾漱太「真山青果の史劇にみる江戸開城のメタヒストリー」, 第 3 回若手研究者フォーラム, 大阪大学豊中キャンパス, オンライン, 2021/3/13

[博士後期]

GINNAN ALEXANDER KOJI 「The Uses and Meanings of Ekkyō in the Age of the Anthropocene (コロナにより中止)」, 23rd Biennial Conference of the Asian Studies Association of Australia, University of Melbourne, その他, 2020/7/8

山本潤子「『認罪』実践としての中国人遺骨送還運動—福島県「中国人殉難烈士慰霊碑」と「満洲国軍」日系軍官大槻市郎の経験を事例として—」, 「満洲の記憶」研究会 2020 年度秋季大会, 一橋大学, オンライン, 2020/3/24

陣内恵梨「神功皇后画像の再検証—イメージで見る女帝の零落—」, 日本学研究会第 2 回研究会, 東北大学, オンライン, 2020/8/2

陣内恵梨「神功皇后画像の再検証—韓国併合後/戦後、戦う女神はどう変化したのか—」, ジェンダー史学会第 17 回年次大会, オンライン, 2020/12/13

【2021 年度】

[博士前期]

小田視希「アダルトビデオに見る異性愛男性のセクシュアリティ—日本におけるマネー・ショットの変遷を中心に—」, 日本ジェンダー学会第 25 回大会シンポジウム, オンライン, 2021/9/26

[博士後期]

山本潤子「長野県の中国人遺骨送還運動にみる人権意識—『在日殉難中国烈士慰霊碑』と中国における日本人遺骨を中心として—」, 日本平和学会 2021 年度秋季研究集会自由論題報告, オンライン, 2021/11/6

牧野良成「『日本労働組合総評議会大阪地方評議会における地区共闘組織の通時的検討』」, 同時代史学会 2021 年度大会, オンライン, 2021/12/11

濱恵介「『ミュージカル『エリザベート』の社会・政治的背景』」, 大阪大学みーあキャット, 大阪大学, オンライン, 2022/1/15

陣内 恵梨「神功皇后画像の再検証—1880-90 年代の女権運動における神功皇后の読み替え—」, ジェンダー史学会 第 18 回年次大会自由論題報告, 同志社大学, オンライン, 2021/12/12

村中 大樹「戦前期サンパウロ市近郊における日本人集団地および協同組合の形成とトランスローカルな移民社会—斉藤広志、半田知雄、中野順夫の研究を手がかりに—」, 第 6 回日本移民学会冬季研究大会自由論題報告, オンライン, 2021/12/11

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

【2021年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD : 0名 DC2 : 0名 DC1 : 0名 (計0名)

2021年度 PD : 1名 DC2 : 1名 DC1 : 0名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部 : 0名 大学院 : 0名 (計0名)

2021年度 学部 : 0名 大学院 : 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020年度～2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

西井麻里奈、博士後期課程修了、大阪大学、2020/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020年度～2021年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2020年度 : 1名 (ジャーナリスト 1名)

2021年度 : 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2020年度 : 1名 2021年度 : 0名

9. 刊行物

2020年度 『同時代史研究』 3

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際日本学研究会・事務局

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2020 年度～2021 年度の過去 2 年間)

1. 平田 由美 教授

1956 年生。大阪外国語大学外国語学研究科修士課程日本語学専攻修了。博士（文学）（京都大学）。京都大学人文科学研究所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教授（2021 年 3 月定年退職）。専攻：日本文学・文化研究／ジェンダー研究

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平田由美 女性史青山なを賞，東京女子大学女性学研究所，2000/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 北原 恵 教授

1956 年生。大阪大学経済学部卒業。同志社大学大学院文学研究科（美學及び芸術學）修了、東京大学大学院総合文化研

究科博士課程（表象文化論）満期退学、学術博士（東京大学）。2001年甲南大学文学部助教授、2004年同教授、2008年大阪大学大学院文学研究科准教授、2012年より現職（2021年3月定年退職）。専攻：表象文化論／ジェンダー研究

2-1. 論文

北原恵 「新井光子(八島光)研究(1)——昭和初期、プロレタリア美術運動に参加した女性画家」『待兼山論叢(日本学篇)』54号、大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-30, 2021/3

北原恵 「美術界のハラスメントとフェミニストの連動 ——「ゲリラ・ガールズ展」(岡山)と「カナリアがさえずりを止めるとき展」(広島)」『ピープルズ・プラン』91, ピープルズ・プラン研究所, pp. 177-181, 2021/2

北原恵 「高橋健太郎の「A Red Hat 赤い帽子」展——治安維持法下の「生活図画事件」」『ピープルズ・プラン』90, ピープルズ・プラン研究所, pp. 170-173, 2020/11

Kitahara, Megumi, ““Transcending Borders” in the work of Fumie Taniguchi (1910-2001): Japanese women painters living in Japan/USA” *Asian Diasporic Visual Cultures and the Americas*, Brill, pp. 92-109, 2020/7

北原恵 「天皇制」『美術手帖』72号, 美術出版社, pp. 108-109, 2020/4

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

北原恵 「アート・アクティヴィズム:戦時下を生きた 3人の女性画家」北原恵退官記念最終講義(招待講演), 北原恵退官記念講演会実行委員会, 大阪大学, 2021/3

北原恵 「新井光子研究(1)——昭和初期、プロレタリア美術運動に参加した女性画家」新井光子研究会, 新井光子研究会, 大阪大学(Zoom開催), 2020/11(『待兼山論叢』54号, pp. 1-30, 2021/3) 以下のYouTubeで動画公開

<https://www.youtube.com/watch?v=LLiD9mCNCDA>, <https://www.youtube.com/watch?v=VYJeCInUMLI>

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2017年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:北原恵

課題番号:17KO2359

研究題目:「戦争画」概念を問い直すーアジア太平洋地域の比較調査から

研究経費:2020年度(繰り越し) 直接経費 0円 間接経費 0円

研究の目的:

本プロジェクトの目的は、アジア太平洋地域の戦争画研究とそれに関する作品を調査することによって、軍事主義やポストコロニアルの視点から日本の「戦争画」研究そのものを捉え直すことにある。具体的には、①アジア太平洋地域における戦争画研究と作品調査、②戦争を経験し複数の土地に移動した日系美術家の調査、③「戦争」をテーマにした現代作品の調査・聞き取り、④戦後の「戦争画」言説と分析概念の検証(「戦争画」「前線/銃後」等)。以上を踏まえて⑤「戦争画」研究の問題点を明らかにし、理論的組替えを試みる。戦争画研究はこの20年間で急速に発展・多様化し、実証的研究と図像分析は精緻化しているが、対象へのアプローチなど視点が固定化し語りの定型化が見られる。過渡期にあると言える現在、具体的作品の分析を通して理論化をはかる。

2-6-2. 2020年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:北原恵

課題番号:20K00127

研究題目:美術における「移動」の表現と思想

研究経費:2020年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

本プロジェクトの目的は、近現代の東アジアで展開された美術活動を「移動」とジェンダーの視点からとらえ直すことである。具体的には、①「人の移動」を扱った美術作品や作家の調査、②在日コリアンだけでなく他の外国人のアート活動の聞き取り調査、③グローバル化社会における「移動」研究の成果を美術研究に取り入れ、定住者の営為を正常とし、「移民の美術」を非日常化・周縁化する美術概念を批判的に考察し、新たな理論的枠組みを提起する。同時に調査によって収集した記録や資料等を体系的に整理してアーカイヴを構築し、新しい研究ネットワークを形成して調査研究の成果を次世代に受け渡す。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

表象文化論学会・ハラスメント対策委員会・委員長, 2020年8月～現在に至る

お茶の水女子大学・ジェンダー研究所『ジェンダー研究』・編集委員(外部委員), 2020年8月～現在に至る

韓国、高麗大学グローバル日本研究院、学術誌『日本研究』・海外編集委員, 2016年1月～現在に至る

イメージ&ジェンダー研究会・事務局, 2008年4月～現在に至る

3. 宇野田 尚哉 教授

1967年生。1993年大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了、1996年同後期課程単位修得退学。博士(文学)。2000年神戸大学国際文化学部講師、2001年同助教授、2007年同大学大学院国際文化学研究科准教授。2010年より大阪大学大学院文学研究科准教授、2017年より同教授。専攻:日本思想史

3-1. 論文

なし

3-2. 著書

宇野田尚哉, 坪井秀人(編著), 『対抗文化史』大阪大学出版会, (370p.), 2021/10

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2019年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:宇野田尚哉

課題番号:19K00295

研究題目:戦後大阪の夕刊紙・華僑メディアと文学サークル・在日文学

研究経費:2020年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

2021年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

敗戦後の日本においては、都市部では朝刊紙とは別に夕刊紙が叢生し、多様な文化的営みの発火点となった。本研究では、この時期に大阪で創刊された夕刊紙のなかでもとりわけ特色のある『夕刊新大阪』と『国際新聞』に着目し、それらに触発されるかたちで展開された無名の書き手たちによる文学的営みの射程を明らかにする。前者は戦後大阪のサークル詩運動の起源の1つとなり、華僑メディアとしての後者は華僑の文化的営みの基盤となるだけでなく、在日コリアンの文学が展開されるメディアともなった。本研究では、在日華僑・在日コリアンを含むそのような文化的営みの総体を明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本思想史学会・総務委員, 2017年10月～2020年10月

4. 北村 毅 准教授

1973年生。2006年早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士(人間科学)。2007年早稲田大学高等研究所助教、2009年同准教授。2010年早稲田大学琉球・沖縄研究所客員准教授。2015年より現職。専攻:文化人類学・民俗学、オーラルヒストリー

4-1. 論文

北村毅 「戦死者の「憑依」を解きほぐす——「シャーマニズム」と「心霊」という二つの文脈から」『日本オーラル・ヒストリー研究』(日本オーラル・ヒストリー学会), 16, pp. 75-90, 2020/12

4-2. 著書

北村毅他(共著)『帝国と国民国家:人・記憶・移動』学古房, 2021/4

北村毅他(共著)『戦争と平和を考えるNHKドキュメンタリー』法律文化社, pp. 90-93, 2020/10

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

北村毅 「「あいまいな喪失」遺族心痛」『沖縄タイムス』沖縄タイムス, 2021/3

北村毅 「論壇「各自核論:家族にも苦しみの連鎖」」『北海道新聞』北海道新聞, 2020/6

北村毅 「こちら特報部」『東京新聞』東京新聞, 2020/6

4-4. 口頭発表

北村毅 「指定発言」日本における第二次世界大戦の長期的影響に関する学際シンポジウム「第四回第二次世界大戦の長期的影響」, 日本における第二次世界大戦の長期的影響に関する学際シンポジウム実行委員会・一般社団法人全国精神保健福祉連絡協議会, オンライン, 2021/10

北村毅 「沖縄のガマにおける集団憑依現象へのアプローチ」国立民族学博物館共同研究会, オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究, オンライン, 2020/6

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

北村毅 第38回澁澤賞, 澁澤民俗学振興基金, 2011/12

北村毅 第33回沖縄文化協会賞(比嘉春潮賞), 沖縄文化協会, 2011/11

北村毅 第30回沖縄タイムス出版文化賞正賞, 沖縄タイムス社, 2009/12

北村毅 第5回櫻井徳太郎賞大賞, 東京都板橋区, 2007/1

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2019年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:北村毅

課題番号:19K01224

研究題目:軍事環境下の子どもの医療人類学的研究—沖縄戦から連なる暴力的状況に着目して

研究経費:2020年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

2021年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

第一に、沖縄戦で子どもが置かれた状況に注目しながら、「子ども」という視点から戦争の証言を整理し、子どもの戦争体験の特質について検討する。第二に、沖縄戦中から米軍が沖縄各地に設置した孤児院ならびに米軍野戦病院の精神科に関する公文書などの分析に加え、戦争孤児への聞き取りによって、精神保健・福祉の観点から子どもやコミュニティに対する戦争の影響を検証する。第三に、沖縄において虐待の問題に直面した個人の生活史と家族史を詳細に聞き取り、数世代にわたる家族の歴史を丹念に読み解いていくことで、沖縄戦から連なる暴力的体験や軍事環境が人びとの心身に与えてきた影響について考察する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

上方文化芸能協会・運営委員, 2016年6月～現在に至る

国際日本学研究会・編集委員長, 2016年4月～現在に至る

5. 安岡 健一 准教授

1979年生。2009年京都大学大学院農学研究科博士課程卒業、2011年農学博士(京都大学)取得。日本学術振興会特別研究員、飯田市歴史研究所研究員を経て、2015年に大阪大学へ。2017年4月から現職。専攻:日本近現代史

5-1. 論文

安岡健一「趣旨解題 現代農業史資料の保存と活用」『農業史研究』56, 2022/3

安岡健一「忘却を伴う統合／継承を伴う包摂」『歴史学研究』1015, pp. 11-19, 2022/1

安岡健一, 松永健聖(共著)「コロナ禍の声を聞く」『日本オーラル・ヒストリー研究』17, pp. 21-33, 2021/11

安岡健一「社会運動史にとつての「地域」」『歴史科学』246, pp. 23-31, 2021/8

安岡健一「コメント2:太平洋世界における近代糖業と帝国:移植」『農業史研究』55, pp. 59-61, 2021/3

安岡健一「ビジュアル資料と研究文化」『日本オーラル・ヒストリー研究』16, pp. 53-57, 2020/12

安岡健一「地域における「多文化共生」の源流:1970-80年代の大阪府豊中市における在日朝鮮人教育を事例に」『理論と動態』13, pp. 12-30, 2020/11

5-2. 著書

安岡健一「共に生きる「仲間」を目指して」高谷幸編『多文化共生の実験室:大阪から考える』青弓社 2022年3月 28

日、pp. 63-83

安岡健一「解説編 戦後日本史と生命を支えた人びとの経験」『Oral history3 生存の地域史を語る』飯田市歴史研究所、2022年3月25日、pp. 293-306

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

安岡健一(書評)「蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴編『なぜ戦争体験を継承するのか:ポスト体験時代の歴史実践』」『日本オーラル・ヒストリー研究』17, pp. 167-174, 2021/11

安岡健一(書評)「加藤聖文著『海外引揚の研究:忘却された「大日本帝国」』」『日本史研究』713, pp. 83-91, 2021/10

5-4. 口頭発表

安岡健一「共同報告「同意書」」研究実践交流会, 日本オーラル・ヒストリー学会, オンライン, 2022/3

安岡健一「大阪の多文化共生の歴史と現在」『多文化共生の実験室—大阪から考える』出版記念シンポジウム, 実践と政策のダイナミクスによる多文化共生研究会, オンライン, 2022/3

安岡健一「「自分史」を書くということ」, 第12回 多世代・地域交流の図書館プロジェクト Web フォーラム, オンライン, 2021/11

安岡健一「オーラルヒストリーのアーカイブ化の必要性」, 日本移民学会第30/31回大会ラウンドテーブル, オンライン, 2021/6

安岡健一「忘却を伴う統合/継承を伴う包摂」歴史学研究会大会全体会, 歴史学研究会, オンライン, 2021/5

安岡健一「コメント 加藤聖文『海外引揚の研究—忘却された「大日本帝国」—』岩波書店、2020年」, 加藤聖文『海外引揚の研究』刊行記念シンポジウム, オンライン, 2021/5

安岡健一「Facing Aging」Virtual AAS2021 annual conference, Association for Asian Studies, オンライン, 2021/3

安岡健一, 松永健聖「「緊急事態」の声を聞く」研究実践交流会, 日本オーラル・ヒストリー学会, オンライン, 2020/9

安岡健一「「国際化」時代の地域社会の変容」政治経済学・経済史学会春季総合研究会, 政治経済学・経済史学会, オンライン, 2020/6

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

安岡健一 大阪大学賞(若手教員部門), 大阪大学, 2018/10

安岡健一 日本村落研究学会研究奨励賞, 日本村落研究学会, 2015/11

安岡健一 日本農業史学会賞(学会賞), 日本農業史学会, 2015/3

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2020年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:安岡健一

課題番号: 20K00936

研究題目:戦後日本における「自分史」の展開に関する研究

研究経費:2020年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2021年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

日本における「自分史」という歴史叙述の展開を、個性的な取り組みが生じた地域の事例を実証的に解明することによって研究する。これまで学術的とされていなかった営みも、人びとの切実な要求に根差した歴史探求である。個人と公との関係を問い直し、歴史研究の領域を拡張することが本研究の課題である。あわせて国際的な視野から同時代に展開した普通の人びとの歴史研究と比較することによって戦後日本の個性を明らかにする。学術的探求だけでなく、現代において自分史を書く人びとと関わることによって、何を明らかにするべきかを再定義し更新し続ける。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本オーラルヒストリー学会・研究活動担当理事, 2019年9月～現在に至る

飯田市歴史研究所・調査研究員, 2015年10月～2022年3月

6. 中嶋 泉 准教授

国際基督教大学教養学部卒。リーズ大学大学院修士課程、カリフォルニア大学バークレー校客員研究員を経て、一橋大学大学院言語社会研究科博士課程単位取得満期退学。博士(学術)(一橋大学)。広島市立大学芸術学部准教授、東京都立大学人文科学研究科准教授を経て、2020年10月より現職。専攻: 日本学

6-1. 論文

中嶋泉 「日本の前衛と女性」『美術手帖』73(1089), pp. 62-67, 2021/8

中嶋泉 「福島秀子「描く」から「捺す」へ 人間主義と身体表現の批判的実践」『美術手帖』73(1089), pp.28-33 2021/8

中嶋泉 「「具体展」の今とこれから」『アートランブル』70, pp. 4-5, 2021/3

中嶋泉 「阿部展也ーあくなき越境者」『美術ひろしま 31』, pp. 44-45, 2021/1

中嶋泉 「岸本清子 メッセンジャー」『REAR』, pp.206-207, 2020/3

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中嶋泉, 沢田泰子 「大学 多様性推進へ挑戦(大阪大学のダイバーシティ活動についてコメント)」『読売新聞』, 2021/3

中嶋泉, 清水有香 (自著についてコメント) 「「男たち」の美術史に一石」『毎日新聞』, pp. 4-4, 2021/2

6-4. 口頭発表

小田原のどか×中嶋泉(対談)「ジェンダー化された歴史に抗う」『群像』76(12), pp.290-303, 2021/12

中嶋泉 (グリゼルダ・ポロック インタビュー) 「美術史におけるフェミニストの介入という思考実践はなぜ必要なのか?」『美術手帖』73(1089), pp.144-151, 2021/8

中嶋泉 X 長島有里枝 (トークイベント) 「女性たちの美術史」『美術手帖』8月号「女性たちの美術史」特集発売記念, オンライン開催, 2021/8

中嶋泉 「女が描くこと、フェミニストが書くこと」2020年度第35回「女性史青山なを賞」公開講座, 女性学研究所, 東京女子大学(オンライン配信), 2021/1

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

中嶋泉 女性史青山なを賞, 東京女子大学女性学研究所, 2021/1

中嶋泉 サントリー学芸賞, サントリー文化財団, 2020/12

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2019年度～2021年度、若手研究、代表者: 中嶋泉

課題番号: 19K20582

研究題目: 「女流画家」のジェンダー的言説分析ー占領期・ポスト占領期の女性運動の一側面として

研究経費: 2020年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

2021年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

当初は、終戦直後から1960年代半ばの言説を調査対象に「女流画家」が戦後のイデオロギー的变化のなかで担った役割の内実を明らかにすることであったが、国外での資料収集が困難な状況となったことを鑑み、1960年代から1990年代までの女性美術家の資料収集と研究へと主題を変更した(2021年3月)

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

文化庁アートプラットフォーム翻訳ワーキンググループ・選書チームメンバー, 2020年7月～現在に至る

7. 西井 麻里奈 助教

2020年4月より大阪大学大学院文学研究科 日本学研究室 助教。(2022年3月退職) 専攻:現代史、都市史

7-1. 論文

なし

7-2. 著書

若尾祐司, 西井麻里奈, 高橋優子他(共訳)『ラン・ツヴァイゲンバーク『ヒロシマ グローバルな記憶文化の形成』』名古屋大学出版会, pp. 70-101, 2020/7

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

西井麻里奈 「広島復興のなかの〈不在の存在〉—都市の境界侵犯／画定を読む—」日本建築学会・若手部会「昭和期市街地形成史研究会」, 日本建築学会, 関西学院大学, 2021/12

西井麻里奈 「「復興」はいかに描かれてきたか—広島・戦災復興をめぐる歴史と語り—」共在の場を考える研究会, 共在の場を考える研究会, 同志社大学(オンライン), 2021/11

西井麻里奈 「「広島復興」はいかに記述されてきたか—「復興」をめぐる歴史認識の内破のために—」東アジア日本研究者協議会 第5回国際学術大会, 東アジア日本研究者協議会, オンライン, 2021/11

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2020年度～2021年度、研究活動スタート支援、代表者:西井麻里奈

課題番号:20K22019

研究題目: 戦災復興期の都市における住宅政策と住民の経験・記憶に関する文化史的研究

研究経費:2020年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2021年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究は、戦災都市復興期の住宅問題の実相について、広島事例から明らかにするものである。戦災者援護、復興をめぐる集合的な記憶の形成、復興をめぐる個人の記憶と経験、という3つの小課題を通じ、戦後住宅政策の課題と戦災者の経験・記憶との関係を検討する。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

同時代史学会関西研究会・委員, 2016年8月～現在に至る

2-7 日本史学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 3 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：飯塚 一幸、川合 康、市 大樹

准教授：伴瀬 明美、野村 玄

助教：北泊謙太郎

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
51	28	21	0	0	4	2	0

*うち留学生4名、社会人学生4名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	16	2	0	3
2021	20	8	3	0
計	36	10	3	3

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

大学院においては、①授業としての修士・博士論文作成演習に加え、学会報告や投稿論文作成のための個別指導をすること、②講義・演習によって史料の分析能力を養うとともに、史料調査等を積極的に実施することによって、史料の調査・収集・整理・分析能力を育成すること、③フィールドワーク・研究室旅行の実施、自治体史編纂事業への協力を通じて、実践的な史料調査能力の養成を期すこと、④個別指導をおこなって留学生の研究能力の養成につとめること、などを目標とした。学部においては、①講義・演習を通して、論文・史料の読解能力の養成をはかるとともに、課題追究能力を涵養すること、②卒業論文では、史料および先行研究等の情報収集とその整理、的確な課題設定と論理の展開能力を実践的に鍛えること、③フィールドワーク・研究室旅行の実施、自治体史編纂事業への協力を通じて、実践的な史料調査能力の養成を期すこと、などを目標とした。

2. 研究

①上記の教育活動と連動させながら、個々人の研究能力を高めることに加えて、②学会活動にも積極的に参加すること、③国内外の共同研究を推進すること、などを目標とした。

3. 社会連携

①歴史学が抱える諸問題、歴史学に期待される諸課題（文化遺産保存問題、教科書・教育問題など）に的確に応じる努力をすること、②自治体史や教科書の編纂等に協力すること、などを目標に掲げた。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

- (1) 各時代（古代・中世・近世・近代）で開講されている講義によって、日本史研究の基礎的知識の伝授に努めた。また卒論演習・大学院演習・修士論文作成演習・博士論文作成演習などの場におけるきめ細かな指導により、論文作成能力の向上を図った。オンライン形式ではあったが、7月に院生報告会、10月に卒論・修論中間発表会を開催し、4年生・院生等が日本史研究室構成員全員の前で研究発表をする機会を設けた。1月には、京都大学名誉教授の横田冬彦氏を招き、対面形式で研究室例会を実施した。また、歴史学方法論講義において、日本史・西洋史・東洋史などの枠を超えて最新の歴史学の方法論に触れる機会を設け、歴史教育論演習では高校の現職教員とともに歴史教育のあり方を探求した。
- (2) 各時代で開講されている史料講読演習によって、史料解釈能力や古文書解読能力の育成に努めた。また多数開講した演習を通じて、先行研究への批判的態度や史資料を徹底して収集する姿勢を培うとともに、プレゼンテーション能力を養った。
- (3) 春の新入生歓迎小旅行、秋の研究室旅行については、新型コロナウイルス感染症への対策の観点から中止とせざるを得なかった。また自治体史編纂事業への協力についても、新型コロナウイルス感染症への対策の必要から、現地調査・史料整理の実践的能力の養成に影響が生じた。近世の学外における古文書調査については、公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会との間での教育活動に関する協力関係に基づき、感染対策の観点から少人数とすることで実施した。
- (4) 増加しつつある留学生の研究能力のレベルアップに努めた。

2. 研究

- (1) 日本史学専門分野の構成員は、それぞれの分野で各自の研究を進めるかたわら、学界の共有財産の蓄積や基礎的研究の充実のための諸活動に、積極的に参画した。また、多くが高校日本史の教科書を執筆し、歴史教育にも寄与した。さらに、本専門分野が所蔵または借用している旧摂津国住吉郡平野郷町含翠堂（土橋家）文書、旧河内国古市郡駒ヶ谷村西應寺文書の整理・研究をおこなった。具体的には、ハイブリッド形式による古文書演習の実施により、これら古文書の目録作成や内容分析を進めた。しかし、その成果の一端を大学行事である「いちょう祭」において披瀝する予定であったところ、準備の場でもある演習の開講形式が依然として感染対策の観点から規制されていたことから、「いちょう祭」での成果の披瀝を見合わせた。加えて、泉大津市に寄託されている横山家文書を借用し、大学院演習において整理・研究をおこなった。
- (2) 学会活動については、日本史研究会、大阪歴史学会、歴史科学協議会、大阪歴史科学協議会、史学研究会、史学会、続日本紀研究会、条里制・古代都市研究会などの学会・研究会の委員等を担うなど、学会運営に積極的に関わり、日本史学界の研究の推進に大きく寄与している。また、上記のうち、大阪歴史科学協議会・続日本紀研究会の事務局を本専門分野で引き受けている。
- (3) つぎに国内での学際的な共同研究は、以下のとおりである。飯塚一幸教授は、大阪大学歴史教育研究会（共同代表秋田茂・堤一昭・飯塚一幸）、「戦前期大阪における花街の総合的研究：芸能を媒介とする社会関係の形成を視点とし

て」（科研、金沢大学、代表笠井純一）、「巨大塩田地主野崎家史料の総合的研究」（科研、大阪大学、代表飯塚一幸）に参加した。川合康教授は、「戦国軍記・合戦図の史料学的研究」（科研、共立女子大学、代表堀新）、「「女人高野」日本遺産の調査研究」（神戸女学院大学、代表栗山圭子）、「貴族とは何か、武士とは何か」（国際日本文化研究センター）に参加した。市大樹教授は、「日本古代の都市造営をめぐる土木技術史研究」（科研、三重大学、代表小澤毅）、「双方向ネットワーク環境を活用したオンラインによる日本墨書土器データベースの構築」（科研、明治大学、代表吉村武彦）、「古代隠岐の形成と特質」（島根県古代文化センター）に参加した。伴瀬明美准教授は、「東アジア諸王室における「后位」儀礼比較史の協業的研究」（科研、大阪大学、代表伴瀬明美）、「データ繋留型編纂支援・資源化システム構築と歴史情報データベースの次世代展開」（科研、東京大学、代表山口英男）、「統合史資料画像データの生成と駆動方式の確立による人文科学研究基盤の創出」（科研、東京大学、代表山田太造）に参加した。野村玄准教授は、「比較のなかの「東アジア」の「近世」—新しい世界史の認識と構想のために—」（国際日本文化研究センター）に参加した。

3. 社会連携

- (1) 文化遺産保存問題や博物館問題など、歴史学が直面する諸問題に、誠実に取り組んだ。また、講演活動などを通じて、研究成果を社会に還元する活動に精力的に取り組んだ。このほか、町おこしグループと連携して、河内長野市に所在する天野山金剛寺の中世文書群を調査・撮影して、河内長野市立図書館で公開する事業を進め、河内長野市の「日本遺産」関連事業にも協力した。なお、例年行ってきた堺市中区兒山家文書の調査・整理は、新型コロナウイルス感染症の影響で、今年度は中止せざるを得なかった。『続日本紀』を読む会のボランティア講師、史跡古市古墳群整備検討委員会委員、二子塚古墳保存整備検討委員会委員、大阪狭山市狭山池総合学術調査委員会調査員などを務めた。
- (2) 『摂津市史』『茨木市史』『枚方市史』『八尾市史』『福岡市史』などの自治体史編纂事業に協力し、地域社会に新しい歴史像を提示しつつある。
- (3) 日本史研究室では、旧河内国古市郡駒ヶ谷村西應寺文書の整理・研究を行った。また、2021年度から、公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会との間での教育活動に関する協力関係に基づき、同会所蔵の水木コレクションの調査・整理を行っている。

IV. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

日本史学専門分野のスタッフは、古代から近代まで日本史の全時代をカバーしており、学生・院生に対して、行き届いた教育をおこなうことができた。非常勤講師による講義も1つ開講した。また西洋史・東洋史の教員や高等学校の現職教員と連携して、幅広く歴史教育のあり方を考える機会を設けた。こうした正規の授業以外にも、博士論文準備報告会、卒論・修論発表会を実施した。これらの教育活動に力を入れた結果、卒業論文・修士論文いずれにおいても、個人差はあるものの比較的水準の高い成果をあげることができた。このほか、オンライン形式と対面形式とを併用したハイブリッド形式による古文書の整理・調査などにも力を入れ、新型コロナウイルスの感染拡大の影響下にありながらも可能な限り実践的な能力の育成に努めた。本研究室の卒業生・修了生は、博物館・資料館の学芸員、自治体史の調査員などの仕事に従事する者が少なくなく、即戦力として通用する能力は各方面から高く評価されている。以上の点を総合的に判断して、所期の目標は達成できたと考える。

2. 研究

科学研究費などの外部資金を獲得して個人研究を進めるかわら、学界共有財産の蓄積に関わる仕事や、学際的な共同研究に積極的に参画することによって、それぞれの分野で着実な成果をあげることができた。また上記の教育活動と連動させながら、日本史学専門分野が保管している古文書の研究を進め、基礎的な研究成果をあげることができた。さらに、本専門分野の構成員は、教員はもちろんのこと、院生も学会の委員として積極的に参加することによって、日本における

学術・研究活動の推進に大きく寄与することができた。日本学術振興会研究員の採択率を上げることなどの課題は残ったものの、以上の点を総合的に判断して、全体的な目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

上記のような学会活動などに参加することによって、歴史学が直面する諸問題に誠実に取り組み、日本史研究者としての責務を果たすことができた。また研究成果を学会内部に留めるのではなく、講演や執筆活動を通じて市民に広く発信することができた。さらに歴史資料の調査・整理をおこなうにあたり、町おこしグループと連携することによって、研究成果を共有することに一定の成果をあげることができた。また教員や多くの院生が自治体史の編纂事業に協力し、新たな地域社会像の構築に向けて努力した。その他、自治体と協定を結んで当該自治体の行政区内の古文書の調査・整理を行ったことは、社会連携活動として新しい試みである。これらの活動を総合的に判断して、社会連携の目標についても十分に達成されたと考える。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	3	0	3
2021	0	0	0
計	3	0	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

[2020年度]

増成 一倫「日本律令地方財政制度の研究」2021/3

主査：市 大樹 副査：川合 康、飯塚一幸

田邊 旬「鎌倉幕府をめぐる歴史意識の研究」2021/3

主査：川合 康 副査：市 大樹、飯塚一幸

伊藤 大貴「室町期山名氏の政治史的研究」2021/3

主査：川合 康 副査：市 大樹、野村 玄

[2021年度]

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	11(10)	2(1)	1(0)	1(0)	9(0)	24(11)

2021	6(6)	1(0)	0(0)	1(0)	7(0)	15 (6)
計	17(16)	3(1)	1(0)	2(0)	16(0)	39(17)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	0	28	18	0	1	47
2021	0	35	33	2	3	73
計	0	63	51	2	4	120

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2020年度】

〔学部生〕

横井裕人「『続日本紀』編纂の原史料と天文異変記事」『続日本紀研究』第420号, pp.1-23, 査読有, 2020/6/15

福岡水亜「九世紀における祥瑞の変化とその歴史的背景」『続日本紀研究』第421号, pp.18-41, 査読有, 2020/9/1

〔博士前期〕

北山 航「室町幕府奉行人家の存在形態——族・被官の活動から——」『日本史研究』第701号, pp.1-31, 査読有, 2021/1/20

北山 航「近代医療から見る、病における社会的弱者—コロナパンデミックと関連して—（※伊藤光葉・菊池康貴・野口駿之介・平野裕大氏との共著）」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第18号, pp.1-24, 査読無, 2021/3/31

富谷竜一郎「明治初年における華族の経済活動—鉄道払下げを請願した華族組合を事例に—」, 大阪大学大学院文学研究科『第3回若手フォーラム要旨集』, pp.14-17, 査読無, 2021/3/13

平野裕大「近代医療から見る、病における社会的弱者—コロナパンデミックと関連して—（※伊藤光葉・菊池康貴・北山航・野口駿之介氏との共著）」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第18号, pp.1-24, 査読無, 2021/3/31

藤井滉良「信長の政治的地位の変遷 —「上様」号の使用例の分析を通じて—」, 大阪大学大学院文学研究科『第3回若手フォーラム要旨集』, pp.18-21, 査読無, 2021/3/13

向井健悟「「御食つ国」研究の現状と課題」, 大阪大学大学院文学研究科『第2回若手フォーラム要旨集』, pp.18-21, 査読無, 2020/9/28

〔博士後期〕

伊藤大貴「山名教豊・是豊兄弟の政治的位置」『年報中世史研究』第45号, pp.155-178, 査読有, 2020/5/22

伊藤大貴「石見銀山周辺の浄土宗寺院と毛利氏」『島根史学会会報』第58号, pp.17-29, 査読無, 2020/7/1

伊藤大貴「金皇寺文書所収の中世文書について」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』第11号, pp.1-10, 査読無, 2021/3/1

糸川風太「江戸期の圓珠院—無祿・無旦寺院の運営—」『和歌山地方史研究』第80号, pp.19-30, 査読有, 2020/12/1

植村優恵「上西門院統子論」『総合女性史研究』第38号, pp.10-31, 査読有, 2021/3/31

大上幹広「弓削島庄の研究史」, 愛媛県越智郡上島町教育委員会編『愛媛県越智郡上島町弓削島庄総合調査報告書』, pp.191-198, 査読無, 2020/12/28

大上幹広「「東寺百合文書」と弓削島庄」, 愛媛県越智郡上島町教育委員会編『愛媛県越智郡上島町弓削島庄総合調査報告書』, pp.198-220, 査読無, 2020/12/28

岡田康佑「八世紀の賑給対象者の数量的考察」『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』2020年度, pp.46-51, 査読無, 2021/3/31

- 菊池康貴「近代医療から見る、病における社会的弱者—コロナパンデミックと関連して—（※伊藤光葉・北山航・野口駿之介・平野裕大氏との共著）」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第18号, pp.1-24, 査読無, 2021/3/31
- 車谷 航「明応の政変後における政治情勢の展開と越前朝倉氏—義材派としての位置づけを超えて—」『リサーチ福井』第3号, pp.1-10, 査読無, 2021.3
- 高岡 萌「大正期における民間育英事業の再編—佐賀育英会創立過程を事例に—」『日本教育史学会紀要』第11号, pp.1-23, 査読有, 2020/3/25
- 田辺 旬「承久の乱」, 高橋典幸編『中世史講義【戦乱篇】』筑摩書房, pp.55-70, 査読無, 2020/4/6
- 田辺 旬「北条「九代」考」『年報中世史研究』第45号, pp.133-153, 査読有, 2020/5/22
- 濱田恭幸「明治前期における士族授産事業と旧藩社会—石川県を事例に—」『待兼山論叢〈史学篇〉』第54号, pp.1-25, 査読有, 2020/12/25
- 増成一倫「救急料の展開と用途」『續日本紀研究』第422号, pp.1-23, 査読有, 2020/12/1
- 望月みわ「日清・日露戦間期の対韓政策と逋信省—在外郵便電信局を中心に—」『日本史研究』第699号, pp.1-30, 査読有, 2020/11/20

【2021年度】

〔博士前期〕

- 小野遼樹「岩波新書『中国の歴史』の内容を踏まえた教科書記述への提言—古典国制と都城制を題材に—（※栗山恵輔氏・真木康彦氏・松本捷氏との共著）」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第19号, pp.1-32, 査読無, 2022/3/31
- 栗山恵輔「岩波新書『中国の歴史』の内容を踏まえた教科書記述への提言—古典国制と都城制を題材に—（※小野遼樹氏・真木康彦氏・松本捷氏との共著）」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第19号, pp.1-32, 査読無, 2022/3/31
- 下野航太「近代世界における清朝の「あがき」と変容—軍制比較の視点から—（※井上健太郎氏・小祿隆司氏・川西寿弥氏・平尾悠氏との共著）」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第19号, pp.33-63, 査読無, 2022/3/31
- 鷺見涼太「鐘匱の制からみる令制以前の文書行政」『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム 成果報告書（2021年度大学院学内 GP<他大学大学院との研究交流プログラム>）』, pp.48-54, 査読無, 2022/3/31
- 平尾 悠「近代世界における清朝の「あがき」と変容—軍制比較の視点から—（※井上健太郎氏・小祿隆司氏・川西寿弥氏・平尾悠氏との共著）」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第19号, pp.33-63, 査読無, 2022/3/31
- 横井裕人「9世紀における陰陽寮の活動について」『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム 成果報告書（2021年度大学院学内 GP<他大学大学院との研究交流プログラム>）』, pp.63-69, 査読無, 2022/3/31

〔博士後期〕

- 大上幹広「難波船軍図を読み解く—描かれた第一次木津川口合戦と軍記物語—」『伊予史談』第401号, pp.15-28, 査読無, 2021/4/1
- 大上幹広「天文年間の能島村上氏の内訌と大内氏—十六世紀半ばの転換—」『四国中世史研究』第16号, pp.57-76, 査読有, 2021/8/9
- 佐藤一希「近世天皇家の葬制の変容と泉涌寺：女院・皇子女死去時の対応を中心に」『日本史研究』第704号, pp.1-33, 査読有, 2021/4/20
- 佐藤一希「近世天皇葬送儀礼の歴史的変遷」『ヒストリア』第287号, pp.1-29, 査読有, 2021/8/20
- 佐藤一希「文政～弘化期の朝廷における新清和院の地位—仁孝天皇との関係を中心に—」『史林』第105巻第2号, pp.36-74, 査読有, 2022/3/31
- 高岡 萌「鹿島鍋島家と鎔造館—旧藩主家主導の中等教育の研究—」『公益財団法人鍋島報効会研究助成研究報告書』第10号, pp.83-97, 査読無, 2021/12/20
- 永野弘明「平安～鎌倉初期黒田庄官考」『年報中世史研究』第46号, pp.1-29, 査読有, 2021/5/1

濱田恭幸「旧両替商長田家の処分と小西家—「長田事件」を中心に—」『飯塚一幸編『近代移行期の酒造業と地域社会—伊丹の酒造家小西家—』(吉川弘文館)』, pp.157-183, 査読無, 2021/11/20

望月みわ「日露戦争以前における朝鮮半島内日本電信網の構築と運用」『ヒストリア』第 290 号, pp.1-27, 査読有, 2022/3/20

(2)口頭発表

【2020 年度】

[学部生]

高橋 玄「大正・昭和初期における郡農会の実態—京都府熊野郡を中心として—」, 第 15 回地域史卒論報告会, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2021/3/7

[博士前期]

池田寛斗「都市平安京における救済と聖—10・11 世紀を中心として—」, 続日本紀研究会・日本史研究会古代史部会合同卒業論文大報告会, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/12/20

岩城大行「論評: 古琉球をめぐる冊封関係と海域交流」, 第 37 回歴史学入門講座実行委員会勉強会, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2021/3/18

北山 航「室町期社会構造における幕府奉行人」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告会, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/12/11

北山 航「近代医療から見る、病における社会的弱者—コロナパンデミックと関連して—(※伊藤光葉・菊池康貴・野口駿之介・平野裕大氏との共同報告)」, 大阪大学歴史教育研究会第 131 回例会, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/12/19

北山 航「大会共同研究報告者 酒匂由紀子氏業績検討会」, 日本史研究会中世史部会, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2021/3/28

田中 融「平安末・鎌倉初期における東大寺再建の展開と政治的背景」, 中世仏教の会, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/7/19

田中 融「鎌倉幕府と東大寺再建」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告会, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/12/11

富谷竜一郎「明治初年における華族の経済活動—鉄道払下げを請願した華族組合を事例に—」, 大阪大学大学院文学研究科第 3 回若手研究者フォーラム, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2021/3/13

富谷竜一郎「明治初年における華族の経済活動—華族組合を事例に—」, 大阪歴史学会近代史部会, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2021/3/26

平野裕大「近代日本における地域意識と地方意識の変容—山形県庄内地方における陸羽横断鉄道計画による地方意識の可視化—」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告会, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/12/11

平野裕大「陸羽横断鉄道と「地域意識」の変遷—明治後期から大正期における庄内酒田の自地域意識—」, 大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会・日本史研究会三学会合同卒論報告会, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/12/13

平野裕大「近代医療から見る、病における社会的弱者—コロナパンデミックと関連して—(※伊藤光葉・北山航・菊池康貴・野口駿之介氏との共同報告)」, 大阪大学歴史教育研究会第 131 回例会, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/12/19

藤井滉良「信長の政治的地位の変遷 —「上様」号の使用例の分析を通じて—」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告会, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/12/11

藤井滉良「信長の政治的地位の変遷 —「上様」号の使用例の分析を通じて—」, 大阪大学大学院文学研究科第 3 回若手研究者フォーラム, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2021/3/13

水谷光希「業績検討: 村井章介「倭寇とはだれか」」, 第 37 回歴史学入門講座実行委員会勉強会, Web 会議システム「Zoom」, オンライン, 2021/1/15

向井健悟「『御食つ国』研究の現状と課題」, 大阪大学大学院文学研究科第2回若手研究者フォーラム, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市・Web会議システム「Zoom」, ハイブリッド, 2020/9/28

向井健悟「日本古代の贅と衛府」, 続日本紀研究会10月例会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/10/30

渡辺知行「『大殿』藤原忠実の国政関与から見る鳥羽院政」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/12/11

渡辺知行「論評: 村井章介「外浜と鬼界島—中世国家の境界(同『日本中世境界史論』、岩波書店、2013年)」」, 第37回歴史学入門講座勉強会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2021/2/25

渡辺知行「撰関・院政期朝廷政務への関与から見る撰関家大殿論」, 大阪歴史学会中世史部会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2021/3/20

[博士後期]

安東 峻「平安初期における蝦夷政策の特質—移配蝦夷を中心として—」, 国史学会, オンライン, 2021/1/23

糸川風太「近世中期における御城米廻船御用の特質—年季請負制から廻船御用達制へ—」, 日本史研究会近世史部会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2021/2/17

岡田康佑「八世紀の賑給対象者の数量的考察」, 大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2021/1/9

菊池康貴「近代医療から見る、病における社会的弱者—コロナパンデミックと関連して—(※伊藤光葉・北山航・野口駿之介・平野裕大氏との共同報告)」, 大阪大学歴史教育研究会第131回例会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/12/19

佐藤一希「若松正志氏の業績について」, 日本史研究会2020年度大会シンポジウム業績検討会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/6/13

佐藤一希「近世天皇葬送儀礼と天台宗寺門派門跡—「宝龕御用」をめぐる—」, 畿内近国史研究会6月例会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/6/21

佐藤一希「仁孝天皇在位期における新清和院の地位・権能—皇位継承・天皇母をめぐる問題を中心に—」, 近世史フォーラム9月例会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/9/18

網澤広貴「木土博成氏の業績について(大会共同研究報告業績検討会)」, 日本史研究会近世史部会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/4/11

網澤広貴「18世紀後期津山松平藩における所務方機構の再編—武家奉公人・大庄屋・中庄屋に着目して—」, 大阪歴史学会近世史部会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/12/4

網澤広貴「近世後期美作国津山藩における下級家臣編成と地方支配機構」, 大阪歴史科学協議会前近代史研究部会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2021/2/15

高岡 萌「鹿島鍋島家と鎔造館—旧藩主家主導の中等教育の研究—」, 公益財団法人鍋島報効会, 徴古館2階ホール/佐賀県佐賀市, 対面, 2020/5/30

高岡 萌「鎔造館の公立中学校移管と鹿島鍋島家—明治期における教育機関と旧藩主家—」, 明治維新史学会9月例会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/9/12

高岡 萌「鹿島鍋島家と鎔造館—旧藩主家主導の中等教育の研究—」, 公益財団法人鍋島報効会, 佐賀商工ビル7階大会議室/佐賀県佐賀市, ハイブリッド, 2020/12/19

高岡 萌「『南越雑話』輪読会」, 福井県郷土誌懇談会, Web会議システム「Microsoft Teams」, オンライン, 2021/1/26

永野弘明「備後国大田庄の立荘と人的諸関係」, 大阪歴史科学協議会前近代史研究部会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/9/14

永野弘明「鎌倉期の荘園制を考える—前田英之「鎌倉期の荘園制と複合的荘域」をもとに—」, 日本史研究会中世史部会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2020/11/17

永山 愛「康正二年造内裏段銭并国役引付」について」, 段銭研究会, Web会議システム「Zoom」, オンライン, 2021/3/20

濱田恭幸「高柳友彦氏業績検討(2020年度日本史研究会大会近現代史部会共同研究報告)」, 日本史研究会近現代史部会,

Web 会議システム「Zoom」、オンライン、2020/5/30

濱田恭幸「明治中後期における府県統廃合計画と地方政治—福井県若狭を事例に一」、大阪歴史学会近代史部会、Web 会議システム「Zoom」、オンライン、2020/10/31

平田良行「村田路入氏の近世治水史研究について」、大阪歴史科学協議会大会準備報告会、Web 会議システム「Zoom」、オンライン、2020/8/23

平田良行「幕領支配における代官の独自性をめぐって—近世後期山城国久世郡宇治郷を事例に一」、大阪歴史学会近世史部会、Web 会議システム「Zoom」、オンライン、2020/11/7

平田良行「近世後期畿内幕府領における村方立直し仕法—信楽代官役所を事例に一」、畿内近国史研究会 12 月例会、Web 会議システム「Zoom」、オンライン、2020/12/26

平田良行「近世後期信楽代官役所の金融機能—公金貸附政策に関わって—」、日本史研究会近世史部会、Web 会議システム「Zoom」、オンライン、2021/3/24

増成一倫「公廩稲制度の展開と国司（第 1 回大会報告準備会）」、続日本紀研究会 1 月例会、Web 会議システム「Zoom」、オンライン、2021/1/29

増成一倫「公廩稲制度の展開と国司（第 2 回大会報告準備会）」、続日本紀研究会 3 月例会、Web 会議システム「Zoom」、オンライン、2021/3/26

望月みわ「日露戦争以前における朝鮮半島内日本電信網の構築と運用—現地通信官僚の動向を中心に—」、近現代史研究会、オンライン、2020/10/17

【2021 年度】

〔学部生〕

稲垣慶一「近代における軍港都市呉の形成と発展—市街電車の敷設を通して—（※竹内舜典氏・中村加奈子氏・西莉沙氏との共同報告）」、令和 3 年度学部学生による自主研究奨励事業研究発表会、令和 3 年度学部学生による自主研究奨励事業研究発表会、オンライン、2022/2/18

竹内舜典「近代における軍港都市呉の形成と発展—市街電車の敷設を通して—（※稲垣慶一氏・中村加奈子氏・西莉沙氏との共同報告）」、令和 3 年度学部学生による自主研究奨励事業研究発表会、令和 3 年度学部学生による自主研究奨励事業研究発表会、オンライン、2022/2/1

中村加奈子「近代における軍港都市呉の形成と発展—市街電車の敷設を通して—（※稲垣慶一氏・竹内舜典氏・西莉沙氏との共同報告）」、令和 3 年度学部学生による自主研究奨励事業研究発表会、令和 3 年度学部学生による自主研究奨励事業研究発表会、オンライン、2022/2/18

西 莉沙「近代における軍港都市呉の形成と発展—市街電車の敷設を通して—（※稲垣慶一氏・竹内舜典氏・中村加奈子氏との共同報告）」、令和 3 年度学部学生による自主研究奨励事業研究発表会、令和 3 年度学部学生による自主研究奨励事業研究発表会、オンライン、2022/2/18

〔博士前期〕

青山耕平「寛喜の飢饉と御家人制の展開について—京都大番役の立法を中心に—」、日本史研究会中世史部会卒業論文報告会、オンライン、2021/8/1

青山耕平「鎌倉幕府御家人制の変容とその要因について」、大阪歴史科学協議会若手委員関心報告、オンライン、2021/9/25

Andersen, Emil Malthe「日本古代史：渡来系氏族の同化」、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・「国際日本研究」コンソーシアム共催オンライン・ワークショップ「マイグレーション研究とデジタル・アーカイヴ」、オンライン、2021/8/1

池田寛斗「都市平安京における救済の形態」、続日本紀研究会例会、オンライン、2021/10/29

伊藤友弥「南北朝期地方寺社について—卒論要約と今後の展望—」、大阪歴史科学協議会若手委員関心報告、オンライン、2021/9/25

伊藤友弥「地方寺院としての和泉国久米田寺と南北朝内乱」、日本史研究会中世史部会卒業論文報告会、オンライン、

2021/11/28

- 小野遼樹「岩波新書『中国の歴史』の内容を踏まえた教科書記述への提言—古典国制と都城制を題材に—（※栗山恵輔氏・真木康彦氏・松本捷氏との共同報告）」、大阪大学歴史教育研究会第139回例会、オンライン、2021/12/18
- 小野遼樹「研究紹介：文禄・慶長期における豊臣家と撰家・清華家の関係性」、東京学芸大学「江戸・藩」研究会第15回報告会、オンライン、2021/9/23
- 北山 航「室町幕府訴訟処理の変容と奉行人」、大阪歴史学会中世史部会、オンライン、2021/12/10
- 北山 航「室町幕府奉行人と応仁・文明の乱」、奈良歴史研究会3月例会、オンライン、2022/3/25
- 栗山恵輔「六国史に見える臨時奉幣・奉獻」、続日本紀研究会・日本史研究会古代史部会合同卒業論文大報告会、オンライン、2021/6/6
- 栗山恵輔「岩波新書『中国の歴史』の内容を踏まえた教科書記述への提言—古典国制と都城制を題材に—（※小野遼樹氏・真木康彦氏・松本捷氏との共同報告）」、大阪大学歴史教育研究会第139回例会、オンライン、2021/12/18
- 佐藤駿也「南北朝・室町期の国人所領安堵—越後国阿賀北国人を中心に—」、日本史研究会中世史部会卒業論文報告会、オンライン、2021/11/28
- 下野航太「原敬内閣期の政友会の党勢拡張と地域利害—勢江鉄道敷設運動を事例に—」、日本史研究会近現代史部会・大阪歴史学会近代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会合同第1回卒論報告会、オンライン、2021/7/31
- 下野航太「原敬内閣期の政友会の党勢拡張と地域利害—勢江鉄道敷設運動を事例に—」、大阪歴史科学協議会若手委員關心報告、オンライン、2021/9/25
- 下野航太「近代世界における清朝の「あがき」と変容—軍制比較の視点から—（※井上健太郎氏・小祿隆司氏・川西寿弥氏・平尾悠氏との共同報告）」、大阪大学歴史教育研究会第139回例会、オンライン、2021/12/18
- 鷺見涼太「古代東アジアにおける日本の文書・文書行政」、大阪歴史科学協議会若手委員關心報告、オンライン、2021/9/25
- 鷺見涼太「鐘匱の制からみる令制以前の文書行政」、大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム、大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市、対面、2022/1/9
- 鷺見涼太「令制以前における文書の実相—孝徳朝を中心に—」、大阪歴史科学協議会前近代史研究部会、オンライン、2022/2/28
- 田中 融「平安末・鎌倉初期興福寺再建の政治的意義」、中世仏教の会、オンライン、2021/7/31
- 田中 融「興福寺再建と政治権力—「南都焼き討ち」その後—」、中世仏教の会、オンライン、2021/11/14
- 平尾 悠「第十一師団設置による善通寺とその周辺地域の変容」、日本史研究会近現代史部会・大阪歴史学会近代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会合同第1回卒論報告会、オンライン、2021/7/31
- 平尾 悠「近代世界における清朝の「あがき」と変容—軍制比較の視点から—（※井上健太郎氏・小祿隆司氏・川西寿弥氏・下野航太氏との共同報告）」、大阪大学歴史教育研究会第139回例会、オンライン、2021/12/18
- 向井健悟「四衛府小鮒日次御贄の成立」、続日本紀研究会11月例会、オンライン、2021/11/26
- 山村陽仁「近世の世襲親王家と天皇—世襲親王家子女の門跡寺院相続を手がかりに—」、大阪歴史科学協議会若手委員關心報告、オンライン、2021/9/25
- 山村陽仁「近世の天皇と宮家—宮家王子女の門跡相続を題材に—」、近世・幕末維新期の海洋国家と異国研究会、オンライン、2021/9/26
- 山村陽仁「元禄期の世襲親王家をめぐる諸問題と皇位—有栖川宮家の動向から—」、畿内近国史研究会例会、オンライン、2022/3/20
- 横井裕人「9世紀における陰陽寮の活動について」、大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム、大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市、対面、2022/1/9
- 脇山 遥「論評：高野信治「武家夫婦の日記と病氣記録—広島藩儒者頼春水・静子の〈障害〉認識を考える—」、第38回歴史学入門講座勉強会、オンライン、2022/3/28
- 渡辺知行「院政期村上源氏と撰関家」、日本史研究会中世史部会、オンライン、2022/3/1

〔博士後期〕

- 安東 峻「日本古代における桜に関する一考察」, 続日本紀研究会例会, オンライン, 2021/9/24
- 安東 峻「にしのみやミュージアム活性化事業 教員向けワークショップ報告」, 【オンラインシンポジウム】にしのみやの博物館と学校連携, オンライン, 2022/3/21
- 糸川風太「近世後期幕府廻船事業の諸問題—廻船御用達を対象に—」近世史フォーラム 5月例会, オンライン, 2021/5/28
- 糸川風太「近世中後期浦触廻達体制の特質—触の廻達方法をめぐって—」, ふとで会 7月報告, オンライン, 2021/7/17
- 糸川風太「近世前期幕府海上御用の特質—小堀政一と讃岐国塩飽年寄衆を対象として—」, 第 60 回近世史サマーセミナー分科会, オンライン, 2021/8/7
- 糸川風太「近世後期幕府廻船事業の諸問題—廻船御用達史料『苫屋・飯田家文書』の検討から—」, 交通史学会 2021 年度第 2 回例会, オンライン, 2021/10/30
- 糸川風太「近世幕府海運体制の特質と諸問題—御城米輸送を対象として—」, 大阪歴史学会近世史部会 2022 年度大会準備報告会, オンライン, 2022/3/21
- 植村優恵「宣陽門院親子内親王とその周辺」, 大阪歴史学会中世史部会, オンライン, 2022/3/25
- 岡田康佑「「出雲国大税賑給歴名帳」からみた古代豪族」, 日本史研究会古代史部会, オンライン, 2021/4/5
- 岡田康佑「半布里戸籍における被賑給者の検討—出雲国大税賑給歴名帳との比較の視点から—」, 新古代史の会(戸籍ミニシンポジウム), オンライン, 2021/10/23
- 梶尾良太「太平洋戦争前半期における日本の戦争指導・作戦指導と船舶問題—船舶の配分をめぐる問題を中心に—」, 日本史研究会近現代史部会, オンライン, 2021/6/20
- 梶尾良太「太平洋戦争期における日本の戦時海運政策の成立と展開—相対的海運政策を中心に—」, 第 119 回史学会大会, オンライン, 2021/11/14
- 菊池康貴「日本史教育における人権教育—歴史を受け継ぐ主体として—」, 大阪私立学校人権教育研究会第 1 部会例会, 対面, 2021/4/21
- 菊池康貴「自ら選択する力をのばす アクティブラーナーの育て方」, 認定 NPO 法人カタリバ 7 月研究会, 対面, 2021/7/29
- 菊池康貴「となりの学校 ICT 活用、探究学習、アクティブラーニングなににしてる?—BYOD、グローバル、未来の教室、高大連携など—」, 第 6 回関西教育 ICT 展, インテックス大阪/オンライン, 2021/8/6
- 菊池康貴「日本史教育における人権教育—歴史を受け継ぐ主体として—」, 関西学院人権教育研究室指定研究「関西学院と人権教育」第 3 回研究報告会, オンライン, 2022/1/25
- 菊池康貴「クロスオーバーミーティング—文化芸術×教育—」, 不易アカデミー京都, AKIKAN/京都市下京区, 2022/2/11
- 佐藤一希「近世天皇家追善仏事の基礎的考察」, 大阪歴史科学協議会前近代史部会, オンライン, 2021/7/12
- 佐藤一希「研究紹介:近世天皇家の葬制・仏事と皇位継承」, 大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・「国際日本研究」コンソーシアム共催オンライン・ワークショップ「神・仏・天皇:聖なるものの系譜」, オンライン, 2021/8/1
- 佐藤一希「近世天皇家の追善仏事と泉涌寺・般舟院」, 朝暮研究会例会, オンライン, 2021/10/4
- 佐藤一希「近世天皇家の宮中法会と寺院・門跡」, 日本史研究会近世史部会, オンライン, 2021/12/15
- 佐藤一希「江戸時代の皇位継承問題と御霊信仰—上御霊神社相殿に祀られた怨霊—」, 畿内近国史研究会例会, オンライン, 2022/3/20
- 高岡 萌「田中智子氏の業績検討」, 日本史研究会近現代史部会 2021 年度大会業績検討会, オンライン, 2021/4/25
- 高岡 萌「福井県立こども歴史文化館所蔵の電気蓄音機に関する調査~これき蓄音機コレクションの教育活用について~」, 日本技術史教育史学会, サレジオ高専/東京都町田市, 対面, 2021/6/12
- 高岡 萌「明治前期から中期における佐賀県会の中学校政策の展開」, 教育史フォーラム・京都, オンライン, 2021/9/10
- 高岡 萌「学生と就職活動—昭和の"就活"から平成の"シューカツ"へ—」, 福井県立大学公開講座, オンライン, 2021/11/6 (※國崎大恩氏 [福井県立大学] との共催)
- 田村 亨「隠岐における歴史顕彰と観光—1930 年代の動向から—」, 島根県古代文化センターテーマ研究「近世近代の

- 交通と地域社会経済」第5回検討会，島根県埋蔵文化財調査センター／島根県松江市，対面，2021/9/16
- 田村 亨「戦国～織豊期における山陰地域の戦争」，島根県古代文化センターテーマ研究「中世山陰の戦争と地域社会」第1回検討会，島根県職員会館／島根県松江市，対面，2021/10/2
- 田村 亨「富田城周辺の城館・戦争をめぐる基礎的考察」，島根県古代文化センターテーマ研究「中世山陰の戦争と地域社会」第2回検討会，島根県埋蔵文化財調査センター／島根県松江市，対面，2022/3/7
- 網澤広貴「近世中後期津山藩における地方支配機構の変容—武家奉公人の取り立てを中心に—」，岡山地方史研究会7月例会，岡山市障害学習センター／岡山県岡山市，対面，2021/7/10
- 永野弘明「鎌倉前中期の河内国金剛寺と寺辺領」，第5回金剛寺文書研究会，オンライン，2021/5/8
- 永山 愛「康正二年造内裏段銭の収納機関—国立国会図書館本「造内裏段銭并国役引付」の検討から—」，段銭研究会，オンライン，2021/7/25
- 永山 愛「金剛寺文書の成巻・整理・利用について」，金剛寺文書研究会，河内長野荘／大阪府河内長野市，対面，2021/9/11
- 永山 愛「元弘没収地返付令」再考」，室町期研究会例会，オンライン，2021/10/22
- 永山 愛「建武政権期における没官について」，日本史研究会中世史部会，オンライン，2022/2/8
- 濱田恭幸「明治前期における旧藩社会と鉄道敷設事業の展開—旧加賀藩を事例に—」，鉄道史学会7月例会，オンライン，2021/7/10
- 濱田恭幸「近代移行期における水利費負担と地方行財政—旧加賀藩領を事例に—」，大阪歴史学会近代史部会2022年度大会第1回準備報告会，オンライン，2022/3/21
- 望月みわ「日清戦後経営期における在清日本郵便局の展開」，日本史研究会近現代史部会，オンライン，2021/5/8
- 望月みわ「日清・日露戦争期における軍事郵便制度とその実態—通信官吏の動向を中心に—」，交通史学会2021年度第2回例会，オンライン，2021/10/30

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020年度】

〔学部生〕

山田雄翔『室町殿日記』にみえる安見氏と私部城『交野市文化財だより』第32号，交野市教育委員会社会教育課・交野市立教育文化会館（歴史民俗資料展示室），pp.47-54，2021/3（※真鍋成史氏との共著）

〔博士前期〕

石垣萌香「部会ニュース(近現代史部会)：2019年7月近現代史部会報告「昭和七年陸軍特別大演習と都市大阪」要旨」『日本史研究』第695号，日本史研究会，pp.83-84，2020/7/20

石垣萌香「部会ニュース(近現代史部会)：2019年7月近現代史部会井ノ元ほのか報告討論要旨」『日本史研究』第695号，日本史研究会，p.85，2020/7/20

石垣萌香「旧真田山陸軍墓地フィールドワーク」に参加して『歴史科学』第242号，大阪歴史科学協議会，pp.30-32，2020/8 ※小川莉菜氏との共著

池田寛斗「歴史学の課題と可能性—歴史学入門講座参加記—」『歴史科学』第241号，大阪歴史科学協議会，pp.38-39，2020/5

小川莉菜「部会ニュース(近現代史部会)：2019年7月近現代史部会報告「第五回内国勸業博覧会と大阪市の都市改造」要旨」『日本史研究』第695号，日本史研究会，pp.82-83，2020/7/20

小川莉菜「部会ニュース(近現代史部会)：2019年7月近現代史部会中村凌太郎報告討論要旨」『日本史研究』第695号，日本史研究会，pp.87-88，2020/7/20

小川莉菜「旧真田山陸軍墓地フィールドワーク」に参加して『歴史科学』第242号，大阪歴史科学協議会，pp.30-32，2020/8 ※石垣萌香氏との共著

北山 航「大阪歴史科学協議会委員会記録（2020年6月・7月）」『歴史科学』第243号，大阪歴史科学協議会，p.54，2020/11 ※森川太貴氏・北泊謙太郎氏との共同執筆

- 北山 航「大阪歴史科学協議会委員会記録（2020年9月・10月・11月）」『歴史科学』第244号，大阪歴史科学協議会，pp.56-67，2021/2 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 田中 融「〔古文書調査報告・史料紹介〕機物神社所蔵資料の調査報告」『交野市文化財だより』第32号，交野市教育委員会社会教育課・交野市立教育文化会館（歴史民俗資料展示室），pp.71-77，2021/3
- 富谷竜一郎「部会ニュース(近現代史部会)：2019年6月近現代史部会卒業論文報告会報告「明治初年の華族の結集と岩倉具視—華族会館建設に至るまで—」要旨」『日本史研究』第694号，日本史研究会，pp.71-72，2020/6/20
- 富谷竜一郎「部会ニュース(近現代史部会)：2019年6月近現代史部会卒業論文報告会下箱石響報告討論要旨」『日本史研究』第694号，日本史研究会，pp.74-75，2020/6/20
- 向井健悟「新刊紹介：佐々木度一・武廣亮平・森田喜久男編『日本古代の輸送と道路』」『ヒストリア』第279号，大阪歴史学会，pp.94-96，2020/4/20
- 向井健悟「部会ニュース(古代史部会)：2020年1月古代史部会村上孟謙報告討論要旨」『日本史研究』第695号，日本史研究会，pp.77-78，2020/7/20
- 森川太貴「大阪歴史科学協議会委員会記録（2019年12月、2020年1月・2月）」『歴史科学』第241号，大阪歴史科学協議会，pp.64-65，2020/5 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 森川太貴「大阪歴史科学協議会委員会記録（2020年3月・4月・5月）」『歴史科学』第242号，大阪歴史科学協議会，pp.49-50，2020/8 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 森川太貴「大阪歴史科学協議会委員会記録（2020年6月・7月）」『歴史科学』第243号，大阪歴史科学協議会，p.54，2020/11 ※北山航氏・北泊謙太郎氏との共同執筆
- 森川太貴「光通寺所蔵「三月廿二日付前田利長書状」」『交野市文化財だより』第32号，交野市教育委員会社会教育課・交野市立教育文化会館（歴史民俗資料展示室），pp.78-79，2021/3
- 森川太貴「無量光寺文書の調査」『交野市文化財だより』第32号，交野市教育委員会社会教育課・交野市立教育文化会館（歴史民俗資料展示室），pp.79-80，2021/3
- 〔博士後期〕
- 安東 峻「新刊紹介：遠藤慶太・河内春人・関根淳・細井浩志編『日本書紀の誕生—編纂と受容の歴史—』」『ヒストリア』第282号，大阪歴史学会，pp.71-73，2020/10/20
- 糸川風太「書評 水本邦彦著『海辺を行き交うお触れ書き 浦触の語る徳川情報網』」『洛北史学』第22号，洛北史学会，pp.68-74，2020/7
- 大上幹広「第12回四国地域史研究連絡協議会大会・高知県立歴史民俗資料館シンポジウム「豊臣政権下の四国」参加記—さらなる「四国はひとつ」のために—」『地方史研究』第404号，地方史研究協議会，pp.80-83頁，2020/4
- 佐藤一希「部会ニュース(近世史部会)：2020年3月近世史部会山田淳平報告討論要旨」『日本史研究』第701号，日本史研究会，pp.67-68，2021/1/20
- 佐藤一希「女帝・女系をめぐる皇位継承論の成果と課題—歴研シンポジウム「皇位継承再論：女帝・女系の可能性と皇太子」参加記にかえて—」『歴史学研究月報』第733号，歴史学研究会，pp.4-5，2021/1
- 佐藤一希「2020年度日本史研究会大会全体会シンポジウム討論要旨」『日本史研究』第702号，日本史研究会，pp.66-69，2021/2/20（※若松正志氏との共著）
- 高岡 萌「寄稿文：大正期の旧制高等学校と地域社会—誘致運動の激化と教育制度・政策の相関—」『日本教育史往来』第245号，日本教育史研究会，pp.1-3，2020/4/30
- 永山 愛「菜種の生産・油屋への売却とその把握—私部村庄屋文書調査成果速報—」『交野市文化財だより』第32号，交野市教育委員会社会教育課・交野市立教育文化会館（歴史民俗資料展示室），pp.31-34，2021/3
- 永山 愛「南北朝内乱期における交野の人々と大交野庄」『交野市文化財だより』第32号，交野市教育委員会社会教育課・交野市立教育文化会館（歴史民俗資料展示室），pp.41-46，2021/3
- 濱田恭幸「部会ニュース(近現代史部会)：2019年11月近現代史部会中川未来報告討論要旨」『日本史研究』第700号，日本史研究会，p.172，2020/12/20

- 濱田恭幸「2020年度日本史研究会大会近現代史部会共同研究報告「資源利用から問う近代日本の環境と経済」趣旨」『日本史研究』第703号, 日本史研究会, pp.125-127, 2021/3/20 (※林和樹・富山仁貴氏との共著)
- 濱田恭幸「2020年度日本史研究会大会近現代史部会共同研究報告〈討論と反省〉」『日本史研究』第703号, 日本史研究会, pp.195-198, 2021/3/20
- 平田良行「これからの史料ネット活動に向けての私の思い」『史料ネット News Letter』第95号, 歴史資料ネットワーク, p.2, 2021/3/15
- 古林小百合「その他の古文書調査について」『交野市文化財だより』第32号, 交野市教育委員会社会教育課・交野市立教育文化会館(歴史民俗資料展示室), p.80, 2021/3
- 望月みわ「書評 佐々木雄一著『帝国日本の外交 1894-1922: なぜ版図は拡大したのか』」『東アジア近代史』第24号, 東アジア近代史学会, pp.186-189, 2020/6/30
- 望月みわ「部会ニュース(近現代史部会): 2019年4月近現代史部会修士論文報告会報告「日清・日露戦間期と対韓政策と通信省—在外郵便電信局を中心に—」要旨」『日本史研究』第693号, 日本史研究会, pp.82-83, 2020/5/20
- 望月みわ「部会ニュース(近現代史部会): 2019年4月近現代史部会修士論文報告会跡部史浩報告討論要旨」『日本史研究』第693号, 日本史研究会, pp.83-84, 2020/5/20
- 望月みわ「部会ニュース(近現代史部会): 2019年12月近現代史部会池田さなえ報告討論要旨」『日本史研究』第700号, 日本史研究会, pp.173-174, 2020/12/20

【2021年度】

[学部生]

- 高橋 玄「地域史のすすめ」『史料ネット News Letter』第96号, 歴史資料ネットワーク, p.12, 2021/11/15
- [博士前期]
- 青山耕平「大阪歴史科学協議会委員会記録(2021年9月・10月・11月)」『歴史科学』第248号, 大阪歴史科学協議会, pp.61-62, 2022/11 ※鷺見涼太氏・北泊謙太郎氏との共同執筆
- 池田寛斗「部会ニュース(古代史部会): 2020年12月古代史部会卒業論文報告会報告「都市平安京における救済と聖—10・11世紀を中心として—」要旨」『日本史研究』第706号, 日本史研究会, pp.102-103, 2021/6/20
- 池田寛斗「部会ニュース(古代史部会): 2020年12月古代史部会卒業論文報告会報告原大樹報告討論要旨」『日本史研究』第706号, 日本史研究会, p.107, 2021/6/20
- 小野遼樹「細谷篤志報告「実務レベルからの近世朝廷研究の可能性—口向役人を素材に—」討論要旨(第60回近世史セミナーの記録)」『ヒストリア』第290号, 大阪歴史学会, pp.97-98, 2022/2/20
- 北山 航「大阪歴史科学協議会委員会記録(2020年12月、2021年1月・2月)」『歴史科学』第245号, 大阪歴史科学協議会, pp.58-59, 2021/5 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 北山 航「大阪歴史科学協議会委員会記録(2021年3月・4月・5月・6月臨時)」『歴史科学』第246号, 大阪歴史科学協議会, pp.64-65, 2021/8 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 北山 航「部会ニュース(中世史部会): 2021年1月中世史部会田中誠報告討論要旨」『日本史研究』第708号, 日本史研究会, p.127, 2021/8/20
- 北山 航「2021年度「第37回歴史学入門講座」の記録」『ヒストリア』第288号, 大阪歴史学会, pp.99-101, 2021/10/20
- 鷺見涼太「大阪歴史科学協議会委員会記録(2021年6月・7月)」『歴史科学』第247号, 大阪歴史科学協議会, p.67, 2021/10 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 鷺見涼太「大阪歴史科学協議会委員会記録(2021年9月・10月・11月)」『歴史科学』第248号, 大阪歴史科学協議会, pp.61-62, 2022/11 ※青山耕平氏・北泊謙太郎氏との共同執筆
- 平野裕大「部会ニュース(近現代史部会): 2020年12月近現代史部会卒業論文報告会報告「陸羽横断鉄道と「地域意識」の変遷—明治後期から大正期における庄内酒田の地域意識—」要旨」『日本史研究』第708号, 日本史研究会, pp.129-130, 2021/8/20

- 北山 航「部会ニュース（近現代史部会）：2020年12月近現代史部会卒業論文報告会立澤めぐみ報告討論要旨」『日本史研究』第708号，日本史研究会，p.134，2021/8/20
- 藤井滉良「2021年1月例会討論要旨」『歴史科学』第248号，大阪歴史科学協議会，pp.37-38，2022/1
- 藤井滉良「部会ニュース（近世史部会）：2021年3月近世史部会平田良行報告討論要旨」『日本史研究』第713号，日本史研究会，pp.104-105，2022/1/20
- 藤井滉良「飯場大輔報告「近世鷹場における鶴の飼付」討論要旨（第60回近世史サマーセミナーの記録）」『ヒストリア』第290号，大阪歴史学会，pp.86-87，2022/2/20
- 森川太貴「2020年1月例会討論要旨」『歴史科学』第245号，大阪歴史科学協議会，pp.44-45，2021/5
- 山村陽仁「部会ニュース（近世史部会）：2021年4月近世史部会栗原正東報告討論要旨」『日本史研究』第714号，日本史研究会，pp.243-244，2022/2/20
- 山村陽仁「栗原正東報告「近世中後期における入峯行為と地域的対応—葛城修験在地別当の動向を中心に—」討論要旨（第60回近世史サマーセミナーの記録）」『ヒストリア』第290号，大阪歴史学会，pp.94-95，2022/2/20
〔博士後期〕
- 糸川風太「書評 藤本清二郎『和歌の浦・玉津島の歴史 その景観・文化と政治』」『歴史科学』第246号，歴史科学協議会，pp.34-40，2021/8
- 糸川風太「部会ニュース（近世史部会）：2021年2月近世史部会報告「近世中期における御城米廻船御用の特質—一年季請負制から廻船御用達制へ—」要旨」『日本史研究』第710号，日本史研究会，pp.68-69，2021/10/20
- 糸川風太「同「近世前期幕府海上御用の特質—小堀政一と讃岐国塩飽年寄衆を対象として」報告要旨（第60回近世史サマーセミナーの記録）」『ヒストリア』第290号，大阪歴史学会，pp.90-91，2022/2/20
- 岡田康佑「部会ニュース（古代史部会）：2021年4月古代史部会報告「出雲国大税賑給歴名帳」からみた古代豪族」要旨」『日本史研究』第713号，日本史研究会，pp.101-102，2022/1/20
- 梶尾良太「部会ニュース（近現代史部会）：2021年6月近現代史部会報告「太平洋戦争前半期における日本の戦争指導・作戦指導と船舶問題—船舶の配分をめぐる問題を中心に—」要旨」『日本史研究』第714号，日本史研究会，pp.117-118，2022/3/20
- 菊池康貴「部会ニュース（中世史部会）：2020年12月中世史部会兒玉良平報告討論要旨」『日本史研究』第707号，日本史研究会，pp.83-84，2021/7/20
- 佐藤一希「例会ニュース：2021年8月例会「近世武家文化と牢人」討論要旨」『日本史研究』第714号，日本史研究会，pp.238-240，2022/2/20
- 高岡 萌「「南越雑話」（八）—翻刻と現代語訳—」『若越郷土研究』第66巻1号，福井県郷土誌懇談会，pp.51-63，2021/7
（※「南越雑話」輪読会としての分担執筆）
- 高岡 萌「福井県立こども歴史文化館所蔵の電気蓄音機に関する調査～これき蓄音機コレクションの教育活用について～」『日本技術史教育学会 2021年度総会 研究発表講演論文集』，日本技術史教育史学会，pp.34-36，2021/6/12
- 田村 亨「承久の乱（新聞コラム）」『山陰中央新報』，2021/6/13
- 田村 亨「戦国山陰の物資調達（新聞コラム）」『山陰中央新報』，2021/8/29
- 田村 亨「第I部第5章 時政の失脚と義時の「執権就任」」，樋口州男・田辺旬・錦昭江・野口華世編『『吾妻鏡』でたどる北条義時の生涯』，小径社，pp.67-79，2021/12/13
- 田村 亨「解説 執権と得宗」，樋口州男・田辺旬・錦昭江・野口華世編『『吾妻鏡』でたどる北条義時の生涯』，小径社，pp.80-85，2021/12/13
- 田村 亨「第II部 北条義時必携 ⑦伊賀の方」，樋口州男・田辺旬・錦昭江・野口華世編『『吾妻鏡』でたどる北条義時の生涯』，小径社，pp.195-199，2021/12/13
- 田村 亨「佐々木一族の躍進（新聞コラム）」『山陰中央新報』，2022/1/9
- 網澤広貴「2020年度大会討論要旨」『歴史科学』第245号，大阪歴史科学協議会，pp.14-15，2021/5
- 網澤広貴「部会ニュース（近世史部会）：2020年12月近世史部会安永寛報告討論要旨」『日本史研究』第708号，日本史

- 研究会, pp.128-129, 2021/8/20
- 網澤広貴「はじめに (第 60 回近世史サマーセミナーの記録)」『ヒストリア』第 290 号, 大阪歴史学会, p.85, 2022/2/20
- 永野弘明「書評 鈴木哲雄著『日本中世の村と百姓』」『ヒストリア』第 290 号, 大阪歴史学会, pp.65-73, 2022/2/20
- 永野弘明「文献史料調査について」, 『日本遺産 (中世に出逢えるまち) 調査研究報告書』, 河内長野市日本遺産推進協議会, pp.7-25, 2022/3
- 永野弘明「摂津のヤマモモの木」, 摂津市史編さん委員会編『新修摂津市史 第 1 巻 自然地理 先史・古代 中世』, 摂津市, pp.652-653, 2022/3
- 永野弘明「中世における淀川治水と摂津の人々」, 摂津市史編さん委員会編『新修摂津市史 第 1 巻 自然地理 先史・古代 中世』, 摂津市, pp.754-755, 2022/3
- 永山 愛「【幕府の軍事編成】室町殿は、どのように軍事指揮を執っていたのか?」, 久水俊和編・日本史史料研究会監修『「室町殿」の時代 安定期室町幕府研究の最前線』, 山川出版社, pp.187-202, 2021/12
- 濱田恭幸「部会ニュース (近現代史部会): 2020 年 2 月近現代史部会津田荘章報告討論要旨」『日本史研究』第 704 号, 日本史研究会, p.92, 2021/4/20
- 濱田恭幸「部会ニュース (近現代史部会): 2020 年 12 月近現代史部会小野功裕報告討論要旨」『日本史研究』第 707 号, 日本史研究会, pp.85-86, 2021/7/20
- 濱田恭幸「部会ニュース (近現代史部会): 2021 年 2 月近現代史部会中原雅人報告討論要旨」『日本史研究』第 711 号, 日本史研究会, pp.99-100, 2021/11/20
- 濱田恭幸「部会ニュース (近現代史部会): 2021 年 4 月近現代史部会中井悠貴報告討論要旨」『日本史研究』第 712 号, 日本史研究会, pp.134-135, 2021/12/20
- 濱田恭幸「2021 年度日本史研究会近現代史部会大会共同研究報告「近代日本における医療システムと地域社会」趣旨」『日本史研究』第 714 号, 日本史研究会, pp.128-130, 2022/2/20 (※富山仁貴・藤井崇史氏との共同執筆)
- 濱田恭幸「部会ニュース (近現代史部会): 2021 年 6 月近現代史部会梶尾良太報告討論要旨」『日本史研究』第 714 号, 日本史研究会, p.118, 2022/3/20
- 濱田恭幸「「人とのつながり」の大切さを感じて—「コロナ禍」での一学会委員の雑感— (特別企画: コロナ渦での近況報告)」『北陸史学会会報』第 57 号, 北陸史学会, 2022/3
- 平田良行「部会ニュース (近世史部会): 2021 年 3 月近世史部会報告「近世後期信楽代官役所の金融機能—公金貸付政策に関わって—」要旨」『日本史研究』第 713 号, 日本史研究会, pp.103-104, 2022/1/20
- 古林小百合編著『交野市史研究紀要第 27 輯 河内国交野郡森村庄屋文書 河内国交野郡私部村無量光寺文書 その一』, 交野市教育委員会, pp.1-93, 2022/3 (※編者は交野市教育委員会)
- 古林小百合「古文書調査について」『交野市文化財だより』第 33 号, 交野市教育委員会, pp.7-10, 2022/3
- 望月みわ「新刊紹介: 熊本史雄著『史料で読み解く日本史③ 近代日本の外交史料を読む』」『日本史研究』第 707 号, 日本史研究会, pp.79-80, 2021/7/20
- 望月みわ「部会ニュース (近現代史部会): 2021 年 1 月近現代史部会修士論文報告会胡安美報告討論要旨」『日本史研究』第 710 号, 日本史研究会, pp.72-73, 2021/10/20
- 望月みわ「部会ニュース (近現代史部会): 2021 年 5 月近現代史部会報告「日清戦後経営期における在清日本郵便局の展開」要旨」『日本史研究』第 713 号, 日本史研究会, pp.105-106, 2022/1/20

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

向井健悟: 第 2 回若手研究者フォーラム優秀賞, 大阪大学大学院文学研究科, 受賞年月: 2020/9/28

濱田恭幸: 第 12 回鉄道史学会住田奨励賞 (論文の部), 鉄道史学会, 受賞年月: 2021/11

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD: 0名 DC2: 3名 DC1: 1名 (計4名)

2021年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 1名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2021年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020年度～2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

高木 純一 博士後期課程、滋賀県立大学、専任講師、2020/4

久野 洋 博士後期課程、ノートルダム清心女子大学、専任講師、2020/4

溝口 優樹 日本学術振興会特別研究員、中京大学、専任講師、2020/4

康 昊 博士後期課程、上海師範大学、専任講師、2020/4

尾崎 真理 博士後期課程、大阪大学、特任助教、2020/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020年度～2021年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 6名

2020年度: 0名 2021年度: 6名

<内訳>中・高等学校の教員 4名、その他 2名 (博物館学芸員・文化財専門職員)

<内訳>2021年度 中・高等学校の教員 4名 (岡山龍谷高等学校、和洋国府台女子中学校・高等学校、大阪青陵中学校・高等学校、愛媛県立松山中央高等学校)

博物館学芸員 1名 (岡山県立博物館) 文化財専門職員 1名 (福山市文化振興課)

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度: 0名 2021年度: 0名

9. 刊行物

2020年度 『史友会会報』第35号 (待兼山史友会編、同、2021年3月)

2021年度 『史友会会報』第36号 (待兼山史友会編、同、2021年12月)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

「大阪歴史科学協議会」(学会、事務局引き受け) 2014年6月～2022年7月

「続日本紀研究会」(学会、事務局引き受け) 2019年4月～2022年6月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

研究室例会（1998年度～）

- ・2020年度：テーマ「コロナ禍における古文書の教育・調査・整理」

野村 玄氏（日本史学准教授）「オンライン形式による演習開講の経緯と西應寺文書の整理状況」

糸川風太氏（日本史学 TA）「オンライン形式による演習の実際と課題」

平田良行氏（日本史学 RA）「コロナ禍における西應寺文書の調査・整理と今後の課題」

2021年3月18日（Web会議システム「Zoom」によるオンライン開催）

- ・2021年度

横田冬彦氏（京都大学名誉教授）「近世の出産—社会史研究の可能性—」

2022年1月17日（於：文法経研究講義棟法42講義室）

12. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 飯塚 一幸 教授

1958年生。1988年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学博士（大阪大学、2018年）。舞鶴工業高等専門学校専任講師、佐賀大学助教授、大阪大学准教授を経て、2010年1月より現職。専攻：日本近代史

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

飯塚一幸, 藤井鹿男, 山本長次他(共編著)『佐賀近代史年表大正編』大正7年1月～大正7年12月, 佐賀大学地域学歴史文化研究センター, pp. 1-193, 2022/3

飯塚一幸, 玉川寛治, 山本太郎『近代岡山殖産に挑んだ人々2』公益財団法人山陽放送学術文化・スポーツ振興財団, pp. 108-112, 138-175, 2022/2

飯塚一幸, 高槻泰郎, 東野将伸他(共著)『近代移行期の酒造業と地域社会—伊丹の酒造家小西家—』吉川弘文館, pp. 1-14, 226-275, 2021/11

菅真城, 高橋明男, 飯塚一幸他(共著)『アーカイブズとアーキビスト』大阪大学出版会, 225p., pp. 133-157, 2021/3

飯塚一幸, 廣田誠, 河島真(共著)『新修八尾市史 近代・現代史料編』八尾市, 746p., pp. 2-11, 18-24, 44-305, 392-506, 2021/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

飯塚一幸(書評), 「前田亮介著『全国政治の始動—帝国議会開設後の明治国家—』」『日本史研究』707, 日本史研究会, pp. 68-75, 2021/7

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2019年度～2022年度、基盤研究(B) 一般、代表者:飯塚一幸

課題番号:19H01309

研究題目:巨大塩田地主野崎家史料の総合的研究

研究経費:2020年度 直接経費 2,300,000円 間接経費 690,000円

2021年度 直接経費 2,600,000円 間接経費 780,000円

研究の目的:

岡山県倉敷市児島の野崎家は、近世～近代の日本を代表する巨大塩田地主である。本研究は、野崎家塩業歴史館所蔵の野崎家史料を対象として、(1)野崎家史料の目録化を図り全容を公開する、(2)「野崎家史料研究会」を立ち上げ、野崎家史料から得られた新たな知見をもとに、岡山・瀬戸内の有力者から出発した野崎家が、どのように日本の近代化を担い帝国化に対応していったのかについて、学際的研究を行う、(3)(2)を通して、『巨大塩田地主野崎家の総合的研究(仮)』を刊行することを目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

公益財団法人竜王会館・理事, 2020年6月～現在に至る

京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究・委員, 2018年4月～2022年3月

大阪府公文書館運営懇談会・委員, 2018年4月～現在に至る

歴史科学協議会・理事, 2016年11月～現在に至る

大阪歴史科学協議会・委員長, 2016年6月～2021年6月

史学研究会・評議員, 2013年6月～現在に至る

八尾市史編集委員会・編集委員, 2011年4月～現在に至る

摂津市史編さん委員会・編さん委員, 2011年4月～現在に至る

枚方市史編纂委員会・編纂委員, 2011年4月～現在に至る

2. 川合 康 教授

1958年生。1987年、神戸大学大学院文化学研究科博士課程単位修得退学。文学博士(神戸大学、1994年)。樟蔭女子短期大学助教授、東京都立大学准教授、日本大学教授を経て、2012年4月より現職。専攻:日本中世史

2-1. 論文

川合康 「鹿ヶ谷事件」再考』『待兼山論叢』史学篇』55, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-26, 2021/12

川合康 「山内首藤氏の「討死」と『平治物語』『平治物語絵巻』『平治合戦図屏風』『アジア遊学』262, 勉誠出版, pp. 102-123, 2021/10

川合康 「源頼朝と流鏝馬行事」『うまゆみ』(日本騎射協会), 2, 日本騎射協会, pp. 2-6, 2020/12

2-2. 著書

川合康 『源頼朝 すでに朝の大將軍たるなり』ミネルヴァ書房, 390p., 2021/6

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

川合康(新聞記事) 「北条義時の実像 公と武の関係 対立か協調か」『朝日新聞 読書欄「ひもとく」』朝日新聞, 2022/1

2-4. 口頭発表

川合康 「神泉苑・仁和寺系統の『保元・平治合戦図屏風』に関する一考察」第47回中世政治史研究会，中世政治史研究会，オンライン，2022/3

川合康 「仁和寺蔵『保元・平治合戦図屏風』をめぐる二、三の論点」第14回「戦国軍記・合戦図の史料学的研究」オンライン研究会，科学研究費基盤研究(A)「戦国軍記・合戦図の史料学的研究」(研究代表者 堀新)，オンライン，2021/11

川合康 「治承・寿永の内乱と「源平」合戦」国際日本文化研究センター共同研究会「貴族とは何か、武士とは何か」，国際日本文化研究センター，オンライン，2021/7

川合康 「日本における中世国家の特質—武家政権の成立をめぐる—」上海師範大学人文学院世界史系主催入門講座「東アジア史学前沿」，上海師範大学人文学院世界史系，オンライン，2021/7

川合康 「鹿ヶ谷事件」再考」第44回中世政治史研究会，中世政治史研究会，オンライン，2021/6

川合康 「河内長野の発展と金剛寺の成立」第1回女人高野研究会，「日本遺産 女性とともに今に息づく女人高野」受託研究，河内長野市市民交流センター，2021/2

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2019年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:川合康

課題番号:19K00952

研究題目:河内国金剛寺文書に基づく中世地域社会史の研究

研究経費:2020年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2021年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

本研究の目的は、平安時代末期に草創され、地方有力寺院として発展した河内国金剛寺に伝わる約350点にのぼる中世文書を、Ⅰ平安時代末期～鎌倉時代中期、Ⅱ鎌倉時代後期～南北朝内乱期前半、Ⅲ南北朝内乱期後半～戦国時代、Ⅳ寺内法と武家権力、Ⅴ金剛寺院主職と貴族社会という5つの視角から詳細に分析し、中世の地域社会の実態を解明しようとするものである。また、金剛寺文書の高精密カラーデジタル撮影を行い、研究期間終了後には、今後の研究推進に資するため、関係機関と協議のうえ河内長野市立図書館において画像を公開する。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

神戸市・大学発アーバンイノベーション神戸交付内定者選考委員，2020年7月～2021年3月

独立行政法人日本学術振興会特別研究員等審査会・専門委員，2019年7月～2021年6月

3. 市大樹 教授

1971年生まれ。2000年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学、2001年)。奈良文化財研究所研究員、同主任研究員、2009年4月大阪大学文学研究科准教授を経て、2020年4月より現職。日本学術振興会賞(2012年)、日本学士院学術奨励賞(2012年)、濱田青陵賞(2013年)、古代歴史文化賞大賞(2014年)。専攻:日本古代史

3-1. 論文

- 市大樹 「外国使節の来朝と駅家」『島根県古代文化センター調査研究報告書』27, 島根県古代文化センター, pp. 233-280, 2022/3
- 市大樹 「日本の7世紀木簡と韓国木簡」『考古学ジャーナル』759, ニュー・サイエンス社, pp. 6-10, 2021/10
- 市大樹 「天平の疫病大流行—交通の視点から—」『国際交通安全学会誌』46-2, 公益財団法人 国際交通安全学会, pp. 96-104, 2021/10
- 市大樹 「門の呼称からみた日本古代王宮の特質と展開」『日本古代の政治と制度』同成社, pp. 72-93, 2021/3
- 市大樹 「門籍制と門榜制をめぐる日唐比較試論」『日本古代律令制と中国文明』(史学会), 山川出版社, pp. 5-35, 2020/11
- 市大樹 「衛禁律からみた日唐王宮の空間構成」『古代史論聚』岩田書院, pp. 15-27, 2020/8
- 市大樹 「難波長柄豊碕宮の革新性」『難波宮と古代都城』同成社, pp. 69-79, 2020/6
- 市大樹 「飛鳥時代の木簡と歴史教育」『歴史地理教育』(歴史教育者協議会), 908, 歴史教育者協議会, pp. 10-15, 2020/4

3-2. 著書

- 市大樹, 野田泰三他(共著)『新修 撰津市史1 自然地理 先史・古代 中世』撰津市, pp.231-518, 553-587, 2022/3
- 市大樹, 毛利正守, 三浦佑之他(共著)『神話の源流をたどる』KADOKAWA, pp. 79-109, 2022/2
- 市大樹, 松村恵司他(共著)『飛鳥池遺跡発掘調査報告 本文編〔I〕』奈良文化財研究所, pp.485-516, 541-576, 581-584, 698-724, 741-743, 2021/12

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 市大樹(大会報告批判)「2020年度歴史学研究会大会報告批判・古代史部会」『歴史学研究』(歴史学研究会), 1009, 歴史学研究会, pp.30-32, 2021/5
- 市大樹(書評)「河内祥輔、小口雅史、M・メルジオヴスキ、E・ヴィダー編『儀礼・象徴・意思決定—日欧の古代・中世書字文化—』—日本史の側から—」『国際日本学』(法政大学国際日本学研究所), 19, 法政大学国際日本学研究所, pp. 127-141, 2021/2
- 市大樹(書評)「榎英一著『律令交通の制度と実態—正税帳を中心に—』」『史学雑誌』(史学会), 130-2, 史学会, pp. 58-66, 2021/2
- 市大樹(書評)「大阪市立大学・難波宮研究会編『日本史研究叢刊 36 難波宮と大化改新』」『古代文化』(古代学協会), 72-3, 古代学協会, pp. 148-150, 2020/12
- 市大樹(書評)「佐々木虔一・武廣亮平・森田喜久男編著『日本古代の輸送と道路』」『歴史評論』(歴史科学協議会), 843, 歴史科学協議会, pp. 70-74, 2020/7

3-4. 口頭発表

- 市大樹 「隠岐国の荷札木簡とその周辺」「古代隠岐の形成と特質」検討会, 島根県古代文化センター, 島根県埋蔵文化財調査センター, ハイブリッド, 2022/3
- 市大樹 「日本古代史の立場から」日本西洋史学会小シンポジウム I :「古代地中海世界におけるメディア・コミュニケーション・間テキスト性」, 日本西洋史学会, 大阪大学大学院文学研究科、オンライン, 2020/12
- 市大樹 「木簡からみた古代日本」〈阪大史学の挑戦〉一次史料からみる最新の研究成果, 高大連携歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科、オンライン, 2020/7

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 市大樹 古代歴史文化賞大賞, 島根県, 2014/10
- 市大樹 濱田青陵賞, 岸和田市・朝日新聞社, 2013/9
- 市大樹 大阪大学総長奨励賞(研究部門), 大阪大学, 2012/7
- 市大樹 日本学士院学術奨励賞, 日本学士院, 2012/2

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2017年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:市大樹

課題番号:17K03065

研究題目:日本古代木簡の源流と特質

研究経費:2020年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2021年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

本研究では、(1)東アジアという視点から「日本古代木簡の源流と特質」を探ることを最大の目標としている。中国・韓国の木簡研究にも正面から向き合うことによって、その方法論を学ぶとともに、日本古代木簡の研究で培われた方法論の発信につとめ、その相乗効果によって日本古代木簡研究の飛躍を図りたい。関連して、(2)木簡研究から導き出される〈文書機能論〉の観点から、従来の〈文書様式論〉に依拠した古文書学の再検討をおこない、新たな史料学に向けた提言をする。さらに、(3)木簡研究の成果を日本古代国家成立論のなかに反映させることも狙う。(2)(3)によって、木簡研究の有効性を示したい。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

福岡市史古代史部会・専門委員, 2006年4月～現在に至る

続日本紀研究会・編集委員, 2006年6月～2019年2月

条里制・古代都市研究会・集会委員, 2006年4月～現在に至る

古代文化刊行委員会・編集参与, 2010年4月～現在に至る

新修摂津市史編さん委員会・編集委員, 2011年7月～現在に至る

太子町国史跡二子塚古墳整備検討委員会・委員, 2016年4月～現在に至る

史跡古市古墳群整備検討委員会・委員, 2016年4月～現在に至る

続日本紀研究会・代表・事務局長, 2019年3月～現在に至る

大阪市文化財保護審議会・委員, 2019年4月～現在に至る

木簡学会・委員, 2019年4月～現在に至る

4. 伴瀬 明美 准教授

1967年生。1997年3月、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。大阪大学博士(文学)。東京大学史料編纂所助教、同准教授を経て、2021年4月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:日本中世史

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

伴瀬明美 「京都御所東山御文庫本『樗囊抄 年中行事上』翻刻, 東京大学史料編纂所研究成果報告 2021-14『平安時代典籍・

記録の史料学的再検討』, pp.177-240, 2022/3

伴瀬明美 「史料翻刻『院号定部類記』『坊門院』『春華門院』『陰明門院』『藻壁門院』『式乾門院』『宣仁門院』」, 東京大学史料編纂所研究成果報告 2021-17『院号定部類記』に関する研究』, pp.42-43, pp.47-51, pp.64, pp.66, 2022/3

伴瀬明美 (書評と紹介)「岩田真由子著『日本古代の親子関係 孝養・相続・追善』」881, 日本歴史, pp. 82-84, 2021/10

4-4. 口頭発表

伴瀬明美 「藤原琮子について—『愚昧記』にみる「女御殿」」第 72 回女院研究会, 女院研究会, オンライン, 2022/2

伴瀬明美 「中世天皇家研究の「はじまり」と展開 付、女院と中世天皇家」大阪大学歴史教育研究会第 138 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学(オンライン), 2021/10

伴瀬明美 「Exploring the Nyoin Institution and its Significance」Gendering Transformations: Feminist Knowledge Production and Trans/national Activist Engagement Conference, 国家図書館(台湾)/Nordic Institute of Asian Studies,Denmark/Taiwanese Feminist Scholars Assosiation,Taiwan, 国家図書館(台湾)オンライン, 2021/10

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2018 年度～2021 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:伴瀬明美

課題番号:18H00700

研究題目:東アジア諸王室における「后位」儀礼比較史の協業的研究

研究経費:2021 年度 直接経費 2,000,000 円 間接経費 600,000 円

研究の目的:

東アジア地域の諸王室には、共通して「后位」(皇后、王后等)という身位がみられる。これは中国礼制の影響を示すものだが、その后位の在り方は諸王室によって実に様々である。これら東アジア諸王室における后位について、諸王室の後位関連儀礼の相互比較・分析によって、そこに表れる中国礼制受容の具体的様相を解明すること、とくに諸王室における独自の発展、さらに中国礼制からの〈逸脱〉の側面を重視して解明することは、そのような発展や逸脱をもたらした東アジア諸王室自体の特質を明らかにすることでもある。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

4-7-1. 2020 年度～2021 年度、6: 研究助成、助成金獲得者:伴瀬明美

助成金名:公益財団法人平和中島財団 アジア地域重点学術研究助成

研究題目:東北アジア諸王室における礼的(逸脱)の諸相—「后位」関連儀礼を中心に—

助成団体名:公益財団法人平和中島財団

助成金額:2021 年度 1,500,000 円

研究の目的:

日本や朝鮮半島など東北アジア地域の諸王室には、共通して「后位」(皇后、王后等)という身位がみられる。これは中国礼制の影響を示すものだが、その后位の在り方は諸王室によって非常に多様である。これは北魏・金のような北方系民族を主体とする国家の王室においても同様であり、中国礼制からみれば独自性を超えて〈逸脱〉というべき側面を多分に含んでいる。本研究では、金・高麗・日本を具体的な対象として、礼典等をはじめとする后位関連儀礼史料を綿密に解読し、中国礼典と比較・分析することで、〈逸脱〉の具体的様相を析出し、〈逸脱〉をもたらした背景を歴史学的手法により解明する。

4-8. 外部役員等の引き受け状況

5. 野村 玄 准教授

1976年生まれ。2004年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）（大阪大学）。大阪青山短期大学専任講師、防衛大学校講師、同准教授を経て、2016年4月より現職。専攻：日本近世史

5-1. 論文

野村玄 「天明六年の無行幸新嘗祭と光格天皇―後桜町上皇による大嘗会・新嘗祭挙行延引の背景と影響―」『大阪大学大学院文学研究科紀要』62, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 29-66, 2022/3

野村玄 「元禄十六年十二月の七社七寺祈祷・内侍所御神楽と徳川綱吉―天皇と将軍に「宗教的機能」とその相剋は存在したのか―」伊東貴之編『東アジアの王権と秩序―思想・宗教・儀礼を中心として』汲古書院, pp. 79-94, 2021/10

野村玄 「関ヶ原・山中合戦と脇坂安治父子」たつの市立龍野歴史文化資料館『たつの市立龍野歴史文化資料館図録 53 特別展 武士の心得―脇坂家中に伝わった宝物―』たつの市立龍野歴史文化資料館, pp. 105-109, 2021/10

野村玄 「徳川家康の神格化過程に関する追加的検討」『大日光』90, 日光東照宮, pp. 78-93, 2021/7

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

インタビュー 「日光東照宮外伝 家康公の墓所 遺体はどこにもう一つの遺言」『産経ニュース無料会員記事・産経新聞(栃木)』産経新聞, pp. 25-25, 2021/10

出演 「世界遺産・京都「二条城」後編」『新美の巨人たち』テレビ東京系列・BS テレビ東京, 2020/4

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

野村玄 研究奨励賞, 財団法人防衛大学校学術・教育振興会, 2009/3

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

5-7-1. 2020年度～2022年度、6：研究助成、助成金獲得者：野村玄

助成金名：2020年（令和2年）度学術研究助成金

研究題目：天明期から寛政期における新嘗祭・大嘗祭に関する研究

助成団体名：一般財団法人伊藤忠兵衛基金

助成金額：2020年度 直接経費 500,000円

2021年度 直接経費 0円

研究の目的：

従来、日本近世史において新嘗祭と大嘗祭は、再興されたこと自体が重視、評価されてきた。大嘗祭の再興は朝儀復興路線の最たるものと理解され、近世中期以降の朝廷の政治的位置と力量が浮上したことの証左ともされてきた。しかし、光格天皇の即

位後、その再興されたはずの新嘗祭と大嘗祭は、本来のあり方からすれば変則的な挙行形態をとっており、再興の事実のみを評価する理解では不十分であることは明らかである。

光格天皇によって取り組まれた、天明期から寛政期における新嘗祭・大嘗祭の実態解明を通じ、近世における新嘗祭と大嘗祭について理解を深めることは、日本近世史における天皇・朝廷の位置づけや、さらにはのちの近現代における新嘗祭と大嘗祭をめぐる理解を新たにすることにつながるだろう。

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本史研究会・編集委員, 2019年10月～2021年10月

摂津市・市史執筆委員, 2019年6月～現在に至る

6. 北泊 謙太郎 助教

1971年生。1995年、大阪大学文学部史学科国史学専攻卒業、1997年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(史学専攻、日本史学専門分野)修了、2001年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(文化形態論専攻、日本史学専門分野)単位修得退学。修士(文学、大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科ティーチング・アシスタント(1997年6月～1998年2月)。2001年より現職。専攻：日本史学／日本近現代史

6-1. 論文

北泊謙太郎 「官僚組織としての日本海軍—組織的利害(セクショナル・インタレスト)・同調圧力・無責任」日本平和学会(編)『戦争と平和を考えるNHKドキュメンタリー』法律文化社, pp. 66-71, 2020/10

6-2. 著書

北泊謙太郎 『戦争と平和を考えるNHKドキュメンタリー』日本平和学会編, 法律文化社, pp. 66-71, 2020/10

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

北泊謙太郎(書評) 「小田康徳編著『旧真田山陸軍墓地、墓標との対話』『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 243, 大阪歴史科学協議会, pp. 47-53, 2020/11

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪歴史科学協議会・庶務委員長, 2014年6月～現在に至る

歴史科学協議会・全国委員, 2012年6月～現在に至る

2-8 東洋史学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：松井 太、田口宏二郎

准教授：河上麻由子

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
22	2	2	1	0	0	4	0

*うち留学生5名、社会人学生0名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	6	3	0	2
2021	3	1	0	0
計	9	4	0	2

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

大学院の教育においては以下の6項目を目標とする。①修士・博士論文作成演習を行い、教員および院生相互の批評を糧にして学位論文の水準を向上させる。2020年度は博士論文2本、修士論文3本を、2021年度は修士論文1本を提出させる。②東洋史学研究分野独特の伝統として、全教員・院生・学部生が参加する合同演習と通称する演習の場において、博士後期課程の院生には学部生向けに数種類の東洋史入門講義を数年サイクルで交互に担当させ、教育者として独立する際の訓練を行う。③本研究分野の教員が主催する国内学会の企画・実施、また中心メンバーとして開催している研究会の運営、あるいは雑誌の編集に院生を積極的に関わらせることによって、研究者として就職する際の有利な条件作りをする。④教員が科研費などによって実施する海外現地調査ないし文書調査に、できるだけ多くの博士後期課程の院生を帯同して訓練する。⑤学内外で開催される各種関連学会や研究会のいずれかにおいて、毎年1回は発表するようにする。

また学部の教育においては、以下の4項目を目標とする。①2年次生向けの漢文演習を2種類開講し、卒業論文執筆のための基礎となる漢文史料読解能力の充実をはかる。3年次生、4年次生についてもしかるべき漢文の授業を開講する。

②中央アジア史・中国史・東南アジア史の3分野別に学部生向けの英語論文を読む演習を開講し、外国語を含む先行研究論文の批判的かつ精密な読み方の訓練を行うと共に、卒業論文作成に向けての能力を涵養する。③東洋史専修独特の伝統として、全教員・院生・学部生が参加する合同演習と通称する演習の場において、学部生に積極的に質問させるようなシステムの構築を行い、それを実行する。さらにこの合同演習を通じて、他大学には見られない学部生と大学院生との学問的連携体制を構築する。④学内外で開催される関連学会や研究会に積極的に参加する習慣をつけさせる。

2. 研究

教員は、研究活動の成果として、各人が年度平均で1本以上の単著論文ないし同等の著作を刊行することを目標とする。博士後期課程の院生では2年に1本の単著論文ないし研究動向・書評の投稿を目標とする。また教員全員が新規ないし継続中の科学研究費に関わる海外現地調査ないし文書調査、ならびにそれと連動する研究を行う。研究代表者になっていない教員の場合は、新たに科学研究費・財団研究助成を申請する。このほか国際学会・国内学会のオルガナイザーないし発表者として活動するとともに、専門雑誌の編纂に携わり、関係分野の日本優位に尽力することも目標とする。

3. 社会連携

全国の高校歴史教員と協力して運営している大阪大学歴史教育研究会の活動をさらに発展させ、世界史教育のさらなる改善をはかるとともに、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることを目標とする。また自らの研究成果を社会に還元できる機会である、社会人向けの講演・講義を積極的に引き受けることも目標とする。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

2020～2021年度を通じて、合同演習および中国史・東アジア史・東南アジア史・中央アジア史の各種ゼミにおいて、学部生・院生の教育が当初の予定に沿って着実に進められた。

2020年度には博士論文2本、修士論文3本、卒業論文7本を提出させることができた。院生の発表した研究論文は計3点、国内外の学会・研究会における口頭発表は計5件である。2021年度には修士論文1本、卒業論文3本を提出させることができた。院生の発表した研究論文は計3点、国内外の学会・研究会における口頭発表は計5件である

提出された学位論文はいずれも水準が高く、また院生の学会報告も、教員の指導のもとに十分な成果をあげた。

2020年初頭以来の新型コロナウイルスの世界的な流行の影響により、学生の研究活動（特に海外調査や国際学会での研究発表）は例年に比して規模を縮小せざるを得なかったが、本学の研究資源およびオンライン研究指導環境の整備を進めることで、所期の目標はおおむね達成できたと判断できる。

2. 研究

【2020年度】

桃木至朗（2021年3月退職）は、ジェンダー史科研でベトナム近世を中心に研究を行い、初期の成果と問題提起を10月の比較家族史学会シンポなどで公表した。歴史教育の方も、高大連携歴史教育研究会などに所属する各地の研究者・教員と入試改革や地域連携を中心とする共同研究を進め、高大連携歴史教育研究会会長として7月の第6回大会の企画運営にあたったほか、6月に同会と東南アジア学会（桃木は教育・社会連携担当理事）の共催で東南アジア史教育に関する研究集会をコーディネートした。その他、9月の七隈史学会（近世東アジアの時代区分）、10月の日本学術会議（入試改革）、比較家族史学会（中近世ベトナムの家族）、11月の東洋史研究会（中世ベトナム国家）、12月の日本西洋史学会（高校歴史教育）などで研究発表を行った（参加を予定していた中国・広州で計画されていたベトナム史の国際シンポは翌年に延期）。また、海域アジア史研究会（計7回）の運営を主導し、学会の活性化に貢献した。

松井は、中国国家社会科学基金研究プロジェクト「吐魯番藏傳佛教遺存調査與研究」（18BZJ025）による国際共同研究

論文を海外査読誌に、またモンゴル帝国時代のペルシア語・テュルク語古文書資料に関する国際共同研究論文をペルシア語で公刊した。その他、新規採択の科研費（基盤研究B）により、モンゴル帝国時代の古文書史料を言語横断的に分析する共同研究を進めるとともに、ドイツ・ハンブルク大学で開催された石窟題記資料に関する国際学会にオンライン参加して研究報告を行なった（参加を予定していたドイツ・ベルリンでの国際学会2件は延期）。また、学術雑誌『内陸アジア言語の研究』を主宰して第35号を刊行し、国際的な水準を保つ研究成果の発信に貢献した。

田口は、約8万字の日本語論文を執筆し、京大人文研の論集に掲載し、小川道大（東大東文研）・神田さやか（慶応大）ら国内のインド史研究者と、何度かZOOMを通じた研究会をもった（報告を予定していた社会経済史学会大会は延期）。

【2021年度】

松井は、科研費（基盤研究B）による活動の一環として、中央アジア出土古代トルコ語行政文書の校訂史料集を英文で準備し、出版母体における査読を受けている。また、古代トルコ語社会経済文書と仏教石窟題記銘文に関する研究論文3本（英語・トルコ語）、モンゴル帝国史に関する和文・英文研究書の書評2本を発表した。また、ドイツ・ベルリン科学アカデミー主催の国際学会、ロシア科学アカデミー・サンクトペテルブルク東方文献研究所主催の国際学会に、いずれもオンラインで参加して研究報告を行なった他、北京大学の招待によりオンライン講演を行なった。また、学術雑誌『内陸アジア言語の研究』を主宰して第36号を刊行し、国際的な水準を保つ研究成果の発信に貢献した。

田口は、神戸大学主催の社会経済史学会大会（オンライン開催）での報告を行うとともに、研究分担者となっている科研費研究会において、複数回の研究報告を行い（日本語・英語）、来夏にパリで開催される世界経済史学会に向け、準備を重ねている。また、イスラム法制史研究者との共同研究の成果として出版された論文集に、日本語論考を一篇寄稿した。また、東洋史学入門書の項目執筆も担当している。

2021年4月に着任した河上は、科研費（基盤研究C）により、アジアにおける文化の拡大、政治変動に伴う文化再編について研究を進め、日本・唐・百済の仏教的な交流を分析した論文2本を発表した。また、東方学会秋季学術大会および韓国・公州大聖徳文化研究所主催の国際学会にいずれもオンラインで参加して研究報告を行なった。さらに、年来の研究成果が高い評価を受け、第33回濱田青陵賞を受賞した。これに関連して、東アジア古代史・日中文化交流史に関するシンポジウムで招待講演を2回行なった。

2021年4月に助教に着任した齊藤茂雄（同年10月に帝京大学に転出）は、5月にオンラインで開催された第65回国際東方学会会議で研究報告を行った。

3. 社会連携

【2020年度】

桃木は、大阪大学歴史教育研究会で8回の月例会などの活動を進め、高大連携歴史教育研究会でも会長（8月からは副会長）として運営に尽力した。特に近畿地区や神奈川県の高校教員組織、それに堺市博物館（中高生の発表セミナー「日本と世界が会おうまち・堺」プロジェクトをコロナ下でオンライン開催）などとの協力で成果が上がり、高校教員間での新課程に向けた教材共有も進んだ。そのほか日本学術会議（中高大連携歴史教育分科会など）、東方学会（理事）、東南アジア学会（理事）その他でも、歴史研究と教育の双方にまたがる活動を展開した。

松井は東方学会（学術委員・編集委員）・内陸アジア史学会（理事・編集委員）の運営に参画した。

【2021年度】

松井は東方学会（学術委員・編集委員・国際東方学会会議運営委員）・内陸アジア史学会（常任理事）の運営に参画した。

田口は、史学研究会の運営に評議員として参与している。

河上は、正倉院文書研究会の委員として運営に参画した。また、奈良県王子町・藤井寺市・大阪ロータリークラブ・大阪京都文化講座などで公開講演を行ない、研究成果の発信に努めた。

齊藤は、唐代史研究会の運営に幹事として参画した。

IV. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

2020～2021年度を通じて、教育目標として掲げた諸項目については、おおむね順調に行われた。とくに教育の中心となる合同演習による学部生・院生の教育は当初の予定に沿って着実に進められ、中央アジア史・中国史・東南アジア史の3分野に分かれての各種ゼミでも目標通りの進歩が見られ、卒業論文・修士論文・博士論文の提出に結びつけることができた。提出論文は何れも高いレベルで作成されている。また院生の査読付き全国学会誌を中心とする論文発表および、国際学会を含む学会・研究会における口頭報告も、教員の指導のもとに十分な成果をあげた。

新型コロナウイルスの世界的な流行に伴い、学生の研究活動（特に海外での資料調査や国際学会での研究発表）は例年に比して規模を縮小せざるを得なかったが、本学の研究資源およびオンラインによる指導環境の整備に注力し、所期の目標はおおむね達成できたと判断できる。

2. 研究

前記の活動を総括して自己評価すれば、2020～2021年度を通じて、教員・大学院生による著書・論文の執筆および学会発表その他の研究活動については、おおむね当初の目標を達成したと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動を総括して自己評価すれば、2020～2021年度を通じて、社会連携の目標について、おおむね当初の目標を達成したと考えられる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	2	0	2
2021	0	0	0
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

遠藤総史（博士後期課程）「宋代の冊封・朝貢の理念と実態」

主査：桃木至朗 副査：田口宏二郎、古松崇志（京都大学准教授）

猪原達生（大阪大学特任研究員）「唐代宦官史研究：官僚制・側近集団・ジェンダー」

主査：桃木至朗 副査：田口宏二郎、荒川正晴（大阪大学名誉教授）

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
----	-----	----	------------	------------	-----	---

2020	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	3(2)
2021	3(3)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(3)
計	5(5)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	6(5)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等講演会	その他	計
2020	0	2	2	0	1	5
2021	1	3	1	0	0	5
計	1	5	3	0	1	10

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2020年度】

〔博士前期〕

岡田悠希 「「無業の貧民」から「地域エリート」へ」『第3回若手研究者フォーラム要旨集』, pp.22-25, 査読無, 2021/3/1

〔博士後期〕

趙浩衍 「응우옌 왕조 자롱·민망 연간(1802~1840) 편찬의 자파(家譜, gia phả)에 대한 연구」『대동문화연구』第 113号, pp.541-596, 査読有, 2021/3/31

遠藤総史 「宋代の朝貢と翻訳：南の海域世界との関係を中心に」『東方学』第 141号, pp.85-101, 査読有, 2021/1/31

【2021年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

趙浩衍 「19세기 베트남 자파(gia phả, 家譜)의 양계적 친족의식에 대한 일고 (19세기 베트남家譜の兩系的親族意識に関する一考)」『베트남연구 (ベトナム研究)』第 19卷第 2号, pp.255-285, 査読有, 2021/12/31

趙浩衍 「17~19세기 북부 베트남 흐우 타인 오아이 (Hữu Thanh Oai, 右清威) 사(xã, 社) 도안 족(Đoàn tộc, 段族)의 출세전략 (17~19세기北部베트남右清威社段族의出世戰略)」『숭실사학 (崇実史学)』第 47号, pp.331-360, 査読有, 2021/12/31

趙浩衍 「十九世紀베트남家譜に見る風水思想 —ハノイ近郊青威郡周舍村段族の『段族譜』を中心に—」『東洋學報』第 103卷第 4号, pp.63-94, 査読有, 2022年3月末

(2)口頭発表

【2020年度】

〔博士前期〕

岡田悠希 「清代四川省移住民社会と糖業：南溪県を中心として」, 清代档案史料研究会, オンライン, 2020/9/27

岡田悠希 「「無業の貧民」から「地域エリート」へ：糖業を通して見る清代四川省移住民社会の諸相」, 第4回若手ユーラシア史研究会, オンライン, 2021/1/30

岡田悠希 「「無業の貧民」から「地域エリート」へ：糖業を通して見る清代四川省移住民社会の諸相」, 第3回若手研究者フォーラム, オンライン, 2021/3/13

〔博士後期〕

趙浩衍「19 世期中葉ベトナムの家譜における祖先中心と子孫中心の系譜観念の併存とその意味」, 東南アジア学会関西例会, オンライン, 2020/4/25

趙浩衍「19 世期ベトナムの家譜における「祖先中心」と「子孫中心」の系譜観念の併存とその意味」, 東南アジア学会第 102 回研究大会, オンライン, 2020/12/19

【2021 年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

趙浩衍「1611 年濟州島における殺害事件の再検討：日越関係史のまなざしから」, 若手研究者フォーラム, 大阪大学・ハイブリッド(両方), 2021/9/6

趙浩衍「19 세기 베트남 자파(gia phả, 家譜)의 친족의식에 대한 일고 (19 世紀ベトナム家譜の親族意識に関する一考)」, 2021 年学術大会, 釜山外国語大学, 対面, 2021/10/2

趙浩衍「1687 年濟州島民の安南漂流事件における〈安南太子殺害譚〉の再考」, 2021 年大会, オンライン, 2021/10/3

趙浩衍「1687 년 제주도민의 안남표류사건과 '안남태자살해담'의 재고 (1687 年濟州島民の安南漂流事件における〈安南太子殺害譚〉の再考)」, 第 11 回全国海洋文化学者大会, 仁川・仁荷大学校, ハイブリッド(両方), 2021/10/3

伊藤 崇展「大元ウルス中葉期におけるモンゴル高原向け軍糧調達方策の運用実態」, 第 119 回史学会大会, 東京大学, オンライン, 2021/11/14

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020 年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

【2021 年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3 年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2021 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2021 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020 年度～2021 年度に大学・短大・高専の常

勤職員として就職が決まった者について)

吉川和希 博士後期課程修了 関西大学文学部 助教 2020/4
早川尚志 博士後期課程修了 名古屋大学宇宙地球環境研究所 特任助教 2020/4
齊藤茂雄 博士後期課程修了 帝京大学文化財研究所 講師 2021/10

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020 年度～2021 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2020 年度：0 名 2021 年度：0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

2020 年度：1 名 2021 年度：0 名

※招へい研究員 趙従勝

9. 刊行物

【2020 年度】

・『内陸アジア言語の研究』35 号，2020 年 10 月，122 pp. (論文 3 本 [英語 1 本・中国語 2 本]・批評 1 本・追悼文 1 本)

【2021 年度】

・『内陸アジア言語の研究』36 号，2021 年 10 月，131 pp. (論文 4 本 [中国語 2 本・英語 1 本・日本語 1 本]・批評 1 本・追悼文 2 本)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

・海域アジア史研究会

参加人数は毎回 10 名～40 名，参加者の所属機関は延べ約 30

2020 年度 7 月 12 日、10 月 31 日、11 月 13 日、2 月 6 日

・大阪大学歴史教育研究会

参加人数は毎回 25～40 名。参加者の所属機関は延べ約 50

2020 年度 4 月 18 日、5 月 16 日、6 月 20 日、7 月 18 日、10 月 17 日、12 月 19 日、1 月 16 日、3 月 13 日

・中央ユーラシア学研究会 (刊行物『内陸アジア言語の研究』) 事務局

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2020 年度～2021 年度の過去 2 年間)

1. 桃木 至朗 教授

1955 年生。京都大学文学部卒、同大学院文学研究科単位取得退学。論文博士 (文学、広島大学)。大阪外国語大学専任講師 (ベトナム語)、大阪大学教養部助教授、同文学部助教授 (いずれも東洋史学) などを経て 2001 年から現職 (2010～12 年度はコミュニケーションデザイン・センターと兼任)。(2021 年 3 月定年退職) 現在、日本学術会議連携会員。専

攻：東南アジア史／海域アジア史／歴史教育

1-1. 論文

桃木至朗 「東・東南アジアの時代区分論に二〇二〇年をどう位置づけるか—「長い近世」論を中心として—」『七隈史学』23, pp. 1-13, 2021/3

桃木至朗 「日本史と統合された東南アジア史・海域アジア史・世界史教育を目指して」『日本史研究』700, pp. 82-96, 2020/12

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

桃木至朗 「これからの入試の話をしよう: 手間をかけずに良問を作って採点できる『コロンブスの卵』を探して」シンポジウム歴史教育の未来を拓く V コロナ下の「新常态」とアクティブラーニング, 日本大学文理学部人文科学研究センター総合研究「20 世紀の歴史における他者認識と自己認識の諸相」主催、日本大学史学会・高大連携歴史教育研究会共催、日本大学, 2021/3

桃木至朗 (基調講演)「「世界史」大幅縮小の瀬戸際で」第 70 回大会小シンポジウム VII「歴史教育改革のゆくえ—高校・大学の教育現場の現状と課題、そして展望」, 日本西洋史学会, 大阪大学, 2020/12

桃木至朗 「大阪大学歴史教育研究会の成果と課題」地域から考える歴史教育——静岡歴史教育研究会 10 周年, 静岡歴史教育研究会, 静岡大学, 2020/12

桃木至朗 「憲章時代(10~14 世紀)大越=安南国家の中華世界への自己定位」東洋史研究会大会, 東洋史研究会(京都大学), 京都大学, 2020/11

桃木至朗 「提言付録を活かす道」シンポジウム「大学入試改革と歴史系科目の課題」, 日本歴史学協会・日本学術会議, 一橋大学, 2020/9

桃木至朗 「東・東南アジアの時代区分論に二〇二〇年をどう位置づけるか—「長い近世」論を中心として—」七隈史学会大会講演, 七隈史学会(福岡大学), 福岡大学, 2020/9

桃木至朗 「勤労革命から過労死・少子高齢化へ—世界史の転換点としての東アジア近世化を再考する」第 6 回大会パネル①「家族・少子化・女性天皇—ジェンダーから見た日本の家の歴史—」, 高大連携歴史教育研究会, 大阪大学, 2020/7

桃木至朗 「学術会議提言付録を活かす道」第 6 回大会特設パネル「高校歴史教育改革と歴史系科目のあり方」, 高大連携歴史教育研究会, 大阪大学, 2020/7

桃木至朗 「大学の教養(入門)講義で東南アジア通史をどう教えるか」研究集会「高大接続改革の中の東南アジア史」「セッション 3 総合大学の東南アジア史概論」, 東南アジア学会主催、高大連携歴史教育研究会共催, 東京外国語大学, 2020/6

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

高大連携歴史教育研究会・副会長, 2020年7月～2022年7月
東方学会・理事, 2017年7月～現在に至る
東洋史研究会・評議員, 2017年4月～現在に至る
東南アジア学会・理事(教育・社会連携担当), 2017年1月～2020年
東洋史研究会・評議員, 2016年11月～現在に至る
日本学術会議・連携会員, 2011年10月～現在に至る
文化遺産国際協力コンソーシアム・東南アジア分科会専門委員, 2006年12月～現在に至る
アジア太平洋フォーラム・淡路会議事務局・アジア太平洋研究賞審査委員, 2004年4月～現在に至る
史学研究会・評議員, 2000年4月～現在に至る

2. 松井太教授

1969年生。1999年、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)(大阪大学)。2001年弘前大学人文学部講師、2004年同助教授、2007年同准教授、2010年同教授。2015年4月、大阪大学文学研究科准教授。2017年10月より現職。(財)東洋文庫客員研究員。

2-1. 論文

- Matsui, Dai, “Bir Eski Uygur duvar metnine göre Koço Uygur krallığında Budist manastırların himayesi”, *Prof. Ceval Kaya armağanı*, pp. 335–345, 2022/3
- Matsui, Dai, “*Borun and Borun-luq in the Old Uigur Legal Documents*”, *Beşbalıklı Şingko Şeli Tutung ansısına Uluslararası Eski Uygurca Çalıştayı bildirileri*, pp. 145-164, 2022/1
- Matsui, Dai, “Two Remarks on the Toyoq Caves and Abita Qur ‘Abita Cave’”, *Письменные памятники Востока*, 18-3, pp. 37-50, 2021/9
- 松井太, 陳愛峰, 陳玉珍, 「大桃兒溝第9窟八十四大成就者圖像補考」『敦煌研究』2020-5, pp. 63-76, 2020/10
- Matsui, Dai, “Shish muhr-i dahr-i hukm-i amir Chūpān dar sāl-i 726 q. / 1326 m.”, *Justārḥā’ī dar bāra sanadshināsī’i dawra-yi Mughūl*, pp. 75-84, 2020/9
- Matsui, Dai, Ryoko Watabe, “Mubāya’atnāma-yi zamīnī ba zabānhā’ī Fārsī wa Turkī dar sāl-i 660 q. / 1261 m.”, *Justārḥā’ī dar bāra sanadshināsī’i dawra-yi Mughūl*, pp. 85-100, 2020/9
- Matsui, Dai, Ryoko Watabe, Hiroshi Ono, “Hukm-i Turkī-Fārsī’i Mīrānshāh Tīmūrī dar sāl-i 800 q. / 1398 m.”, *Justārḥā’ī dar bāra sanadshināsī’i dawra-yi Mughūl*, pp. 101-138, 2020/9

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 松井太(批評)「宮紀子『モンゴル時代の知の東西』を読む(三)」『内陸アジア言語の研究』36, pp. 69-128, 2021/10
- Matsui, Dai, “Book Review: VÉR, Márton (2019), *Old Uyghur Documents Concerning the Postal System of the Mongol Empire [Berliner Turfantexte XLIII]*”, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 74-1, pp. 163-169, 2021/4
- 松井太(批評)「宮紀子『モンゴル時代の知の東西』を読む(二)」『内陸アジア言語の研究』35, pp. 53-111, 2020/10

2-4. 口頭発表

Matsui, Dai, “An Old Uighur Wall Inscription by Discontented Monks of Qoço”, The Second International Codicological Conference:

Oriental Manuscripts: Scriptoria, Monastic Libraries and Book Workshops in the East in the Middle Ages, Institute of Oriental Manuscripts, Russian Academy of Science, Institute of Oriental Manuscripts, Russian Academy of Science (ハイブリッド), 2021/11

Matsui, Dai, “Old Uigur Administrative Orders and the Turfan Uigur Society”, 北京大学歴史学系邀請海外專家演講, 北京大学歴史学系, 北京大学(ハイブリッド), 2021/10

Matsui, Dai, “Old Uigur Administrative Orders and Taxation Practice in Turfan”, Everyday life on the Silk Road, Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften (ハイブリッド), 2021/9

Matsui, Dai, “Graffiti by Old Uigur Pilgrims in Dunhuang and Eastern Eurasia”, Scratched, Scrawled, Sprayed: Towards a Cross-Cultural Research on Graffiti, Session 2: Graffitiing in Medieval and Early Modern Cultures, The Centre for the Study of Manuscript Cultures, Hamburg University, Hamburg University (オンライン), 2021/3

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

松井太 第12回立命館白川静記念東洋文字文化賞優秀賞, 立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所, 2018/5

松井太 第23回東方学会賞, 東方学会, 2004/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2017年度～2021年度、基盤研究(B) 一般、代表者:松井太

課題番号:17H02401

研究題目:古代・中世中央ユーラシア世界の交通・交易・交流

研究経費:2020年度 直接経費 279,000円 間接経費 83,700円

2021年度 直接経費 271,520円 間接経費 32,582円

研究の目的:

古代・中世(西暦6世紀-14世紀)の中央ユーラシア世界(とくに現在の中国新疆ウイグル自治区から甘粛・内モンゴルに跨る地域)で展開された交易活動や文化交流の諸相,ならびにそれらを支えた交通システムを,現地出土の文献資料と現地調査によりつつ実証的に再構成する。その成果を総合して,前近代のユーラシア世界の文化圏が中央ユーラシア地域を媒介として広く連動していたことをより実態的に解明し「ユーラシア世界史」の理解の深化に資することを目的とする。

2-6-2. 2020年度～2023年度、基盤研究(B) 一般、代表者:松井太

課題番号:20H01324

研究題目:古文書資料の言語横断的総合分析に基づくモンゴル帝国の支配システムの解明

研究経費:2020年度 直接経費 3,650,000円 間接経費 1,095,000円

2021年度 直接経費 3,600,000円 間接経費 1,080,000円

研究の目的:

モンゴル帝国支配下の多言語資料を,同時代資料としての古文書を軸として総合的に分析することで,言語文献学・歴史学双方の知見を学際的に架橋すると同時に,言語・地域分業を超えて総体的な視角からモンゴル帝国支配下のユーラシア世界史を理解することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・国際東方学者会議運営委員, 2021年7月～現在に至る

内陸アジア史学会・常任理事, 2021年4月～現在に至る

東方学会・編集委員, 2019年4月～現在に至る
中央ユーラシア学研究会・責任編集, 2017年7月～現在に至る
内陸アジア史学会・理事・編集委員, 2016年4月～2021年3月
東方学会・学術委員, 2015年7月～現在に至る

3. 田口 宏二郎 教授

1971年生。1999年、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）（大阪大学）。2003年大阪大学文学研究科助手、2004年追手門学院大学文学部講師、2008年追手門学院大学国際教養学部准教授を経て、2012年4月大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2018年4月より現職。専攻：中国近世・近代史

3-1. 論文

田口宏二郎 「南京の英国人—中華民国期の都市不動産と法の多元性」磯貝真澄・磯貝健一(編)『帝国ロシアとムスリムの法』昭和堂, pp. 185-212, 2022/2

田口宏二郎 「明清時代の農業」吉澤誠一郎(他編)『論点・東洋史学』ミネルヴァ書房, pp. 196-197, 2022/1

田口宏二郎 「登記の時代(2):劇場の中の近代化」村上衛(編)『転換期中国における社会経済制度』京都大学人文科学研究所, pp. 105-171, 2021/1

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

小川道大, 田口宏二郎 「空間・分配・秩序:土地制度をめぐる中印比較(小川道大と共同発表)」社会経済史学会大会, 社会経済史学会, 神戸大学(ハイブリッド), 2021/5

Taguchi, Kojiro, "Per-capita GDP of early modern China: Reexamination of post-Maddison statistics", The 22nd Academic Exchange Seminar Between Shanghai Jiaotong University and Osaka University, Osaka Univ., Shanghai Jiaotong Univ. (ハイブリッド、報告言語は英語および中国語), 2020/11

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2019年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:田口宏二郎
課題番号: 19K01018

研究題目: 中華民国南京国民政府期における土地登記事業の制度分析

研究経費: 2020年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2021年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

中国都市土地制度史に関する研究の蓄積は希薄である。本研究は、登記制度——不動産を支配・用益する権限の範囲を物理的・法的に定義、標準化された様式を以て公示することで、不動産市場や抵当を媒介とした「資本主義型」金融市場の整備を実現

するための仕組み——に焦点を絞り、これが土地取引ならびに産権保護制度全体にいかなる刻印を与えたか、民国期の南京や上海など都市の事例から解明する試みである。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

4. 河上 麻由子 准教授

1980年生。2008年九州大学大学院博士後期課程単位取得退学。2010年2月に博士(文学)(九州大学)。2012年9月に奈良女子大学助教、2014年6月に同大学准教授を経て、2021年4月に現職。専攻:東アジア古代・中世史

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

河上麻由子他『古代日本対外交流史事典(分担執筆, 範囲:「仏教伝来」「遣隋使」)』八木書店, 2021/11

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

河上麻由子「第33回濱田青陵賞受賞による記念シンポジウム「使者の海・僧侶の海・商人の海」の紹介」朝日新聞, 2021/12

河上麻由子「BSフジ 全国百線鉄道の旅」フジテレビ, 2021/11

河上麻由子「ひと」朝日新聞, 2021/9

河上麻由子「聖徳太子と遣隋使」産経新聞, 2021/8

河上麻由子「ソフィア 京都新聞文化会議」京都新聞, 2021/7

4-4. 口頭発表

河上麻由子「古代日本仏教と東アジア」藤井寺市市民文化財講座, 藤井寺市生涯学習センター, 対面, 2022/3

河上麻由子「則天武后と多元性」東方学会, 東方学会, オンライン, 2021/11

河上麻由子(講演)「平城京から長安へ—天平時代の日中交流—」奈良県×陝西省 交流の軌跡, 奈良県コンベンションセンター 天平ホール, 対面, 2021/11

河上麻由子「白鳳～天平文化の『唐風』—国風文化の前史として—」第33回 濱田青陵賞受賞シンポジウム, 岸和田市まどかホール, オンライン, 2021/11

河上麻由子(講座)「遣隋使・遣唐使の通った道」大阪・京都文化講座, オンライン, 2021/11

河上麻由子「5～6世紀の東アジア仏教と大通寺」“更以強國”1,500周年 国際 學術會議, 公州大 學校百濟文化研究所, ハイブリッド, 2021/10

河上麻由子(講演)「日出ずる処の聖徳太子」歴史リレー講座「大和の古都はじめ, 王寺町やわらぎ会館, 対面, 2021/5

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

河上麻由子 濱田青陵賞, 岸和田市・朝日新聞社, 2021/11

河上麻由子 楡文賞, 北海道大学文学部同窓会, 2021/3

河上麻由子 第7回古代歴史文化賞, 古代歴史文化普及協議会, 2019/11

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2021年度～2025年度、基盤研究(C) 一般、代表者:河上麻由子

課題番号:21K00808

研究題目:アジアの中の国風文化

研究経費:2021年度 直接経費 400,000円 間接経費 120,000円

研究の目的:

国風文化は、遣唐使の中止を契機に誕生した日本独自の文化様式と理解されてきた。しかし近年は、唐物の消費を国風文化の特徴とする研究が有力になってきた。重要な視点であるが、唐物を熱狂的に消費したのは平安期日本には限られない。国風文化を理解しようとするならば、同時代アジアにおける他国の文化や日本の他時代における文化といかなる点において異なるのか、またなぜそのような差異が生じたのかを問う必要がある。

本研究は、第一に、アジアの文化と比較することで国風文化の特徴を描き出す。第二に、国風文化を他の文化と隔絶させる特徴が生じた背景について、文化史・アジア史・女性史の視点から明らかにすることを試みる。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

鴻臚館跡整備検討委員会委員, 2021年1月1日～現在に至る

佐賀県吉野ヶ里遺跡古代調査指導委員, 2018年1月4日～2022年3月31日

正倉院文書研究会委員, 2016年4月～現在に至る

5. 齊藤 茂雄 助教

2021年4月より大阪大学大学院文学研究科(東洋史学)助教。(2021年9月退職) 専攻:内陸アジア史、古代トルコ遊牧民族史

5-1. 論文

なし

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

齊藤茂雄「突厥第二可汗国の遺民集団と安史の乱」第65回国際東方学者会議, 東方学会, オンライン, 2021/5

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

唐代史研究会・幹事, 2019年10月～現在に至る

2-9 西洋史学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 4 准教授 1 講師 1 助教 1

教授：秋田 茂、藤川 隆男、栗原 麻子、ナディン・ヘー

准教授：中谷 惣

講師：見瀬 悠

助教：高垣 里衣

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
44	9	10	0	0	6	0	0

*うち留学生2名、社会人学生1名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	20	4	1	1
2021	12	2	0	0
計	32	6	1	1

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

今日の西洋史学では、「世界史」を視野に入れた西洋文明のインパクトとレスポンスを相互的過程として考察することが求められている。そのためには、特定の地域や時代を超えた多様な世界の歴史を知り、また他の人文・社会諸科学の成果を活用できなくてはならない。学部と大学院の教育では、そうした広範な研究領域の中に、個々の学習と研究を適切に位置づけられるように講義・演習を構成する。また同時に、卒業・修了後、専門職業人として活躍できる基礎的な実務能力を身に付けられるように、特に、高度の論理力・分析力と、高い外国語能力の養成を重視する。具体的には、学部においては、①ディベート演習、リサーチ演習によって、英語の活用能力や口頭発表・論文執筆能力を向上させること、②パワーポイントを使ったプレゼンテーションを実践させること、大学院においては、①論文作成に向けてのモデル・タイムスケジュールを提案する等、修士、博士論文の効率的な作成指導を徹底すること、②文学研究科内外の他

専修との共同授業、「歴史学のフロンティア」を実施し、学際的かつ領域横断的な思考を涵養すること、③研究ジャーナルの刊行を通して、出版事業の編集・渉外等の実務を習得させることを目標とした。

2. 研究

西洋史学研究室は、学会の運営や定期刊行物の発行、さらには各種共同研究の結節点となって、日本の西洋史研究の中核を担うことを目指している。教員は個人として積極的に単著論文を刊行するだけでなく、世界史・各国史、歴史事典類の編集、執筆など、学界の共有財産の形成や基礎的研究の充実のために尽し、あわせて研究室の主催・協賛による国際研究集会の企画・運営をとおした研究の国際化に寄与することを目標とした。また、大学院生には外部の研究資金への応募や海外での研究機会の活用を勧奨するとともに、査読つき学術雑誌への投稿、学会での口頭報告を数多く行えるように支援することとした。

3. 社会連携

西洋史学研究室は、研究成果を社会一般、とりわけ高等学校での世界史教育に広く還元することをめざしている。具体的には、①高校世界史教科書の執筆、②高等学校への出張授業、③大阪大学歴史教育研究会の共催（東洋史学専修、日本史学専修、共生文明論コースとの共催）、④世界史副読本の編集、⑤海外での講義の実施、⑥個人および研究室のホームページの充実を目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

演習をディベート、リサーチ等に分化することによって、大学院、学部における論文作成指導などのシステムを効率的に運用した。また、パワーポイントを用いたプレゼンテーションや英語での演習を積極的に実施した。また、大学院では、他学部、他専修との共同授業「歴史学のフロンティア」の充実をはかり、加えて、研究ジャーナル『パブリック・ヒストリー』の刊行を通じた出版実務の習得、雑誌編集業務の実習も順調に進めた。

2. 研究

西洋史学研究室は、雑誌『西洋史学』、『パブリック・ヒストリー』の編集やワークショップ西洋史・大阪を恒常的に主催するだけでなく、学会や研究会などの事務局や代表者を提供することで、西洋史学や他分野との共同研究の発展に貢献してきた。そのうえ、グローバルヒストリー・セミナーなど、海外からの招聘研究者との学術集会を恒常的に開催し、研究の国際化にも尽力した。教員個人も専門学術誌・研究書への寄稿、国際学会での報告など、活発に研究活動を行った。さらに、日本学術振興会科学研究費補助金をはじめとする競争的外部資金の代表者として、外部資金の獲得も順調であった。大学院生等は、計10篇の学術論文、計29回の学会報告を公表した。

3. 社会連携

高等学校での世界史教育との連携に関しては、高校世界史の執筆に関わるとともに、高等学校への出張講義を実施した。また、東洋史学専修、日本史学専修、共生文明論コースと協力して、高校の世界史教員をまじえた大阪大学歴史教育研究会を2年間で18回共催した。さらに、海外での講義など、海外への発信も行った。加えて、高等学校への出張講義やサイエンスカフェの開催、それに研究室ホームページの充実など社会一般への発信も積極的に行った。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

上記の活動をとおして、論文作成指導の体制は充実している。卒業論文、修士論文ともに質が向上した。さらに教職を中心に計1名の高度職業人を輩出しており、これらの点から目標はおおむね達成されたと言える。

2. 研究

研究の項に掲げられた目標は達成された。教員、院生による学術論文の刊行、学会発表はいずれも十分な成果をあげることができた。また、グローバルヒストリー・セミナーなど国際学会議の継続的な開催は、日本での西洋史研究の国際化に一定の貢献をなすものであった。加えて、西洋史学研究室が、枢要な学会、研究会の事務局を運営し、共同研究機関のような機能を果たしたことは、外部の研究者からの高い評価に裏打ちされたものとする。

3. 社会連携

上記の活動をとおして、社会連携の項に掲げた目標は、十分に達成されたと自己評価できる。とりわけ高校世界史教育との連携には、東洋史学専修・日本史学専修・共生文明論コースとの協力体制を構築した上で、充実した成果が得られたと考えられる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	1	0	1
2021	0	1	1
計	1	1	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

高垣 里衣「18世紀後半～19世紀初頭の大西洋におけるビルバオ商人の商業ネットワークと展開」

審査教員：秋田茂、藤川隆男、中谷惣、深沢克己

山田 篤美「真珠と16世紀ヨーロッパの対外拡張—真珠のコモディティ・チェーンからの考察—」

審査教員：秋田茂、藤川隆男、中谷惣、桃木至朗

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	5(5)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	5(5)
2021	7(6)	1(1)	0(0)	0(0)	2(2)	10(9)
計	12(11)	1(1)	0(0)	0(0)	2(2)	15(14)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	0	3	15	0	0	18
2021	2	12	8	0	2	24
計	2	15	23	0	2	42

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2020年度】

〔博士前期〕

畔勝俊弥「ニュートン主義と18世紀のアメリカ：初期アメリカの知的世界における自然哲学と神学」『パブリック・ヒストリー』第18号, pp.1-14, 査読有, 2021/2/28

〔博士後期〕

森井一真「学会動向 パブリック・ミーティングをめぐる研究動向—アメリカ・カナダを中心に」『パブリック・ヒストリー』第18号, pp.39-47, 査読有, 2021/2/28

高垣 里衣「七年戦争期におけるビルバオ商人の商業ネットワーク—港湾徴税史料からみるガルドキ家の北大西洋貿易—」『西洋史学』第270号, pp.21-39, 査読有, 2020/12/1

嶽麻美「〈研究ノート〉岩倉使節団研究史ノート—『特命全權大使米欧回覧実記』(五)「帰航日程」再考察にむけて—」『パブリック・ヒストリー』第18号, pp.15-38, 査読有, 2021/2/28

山内瑞貴「〈研究ノート〉19世紀末チベットへのインド茶輸出計画：その失敗の要因に関する考察」『アジア太平洋論叢』第23号, pp.63-86, 査読有, 2021/3/1

【2021年度】

〔博士前期〕

小銭杏士郎「Relic Translations by Pope Paul I in the Eighth-Century City of Rome」『パブリック・ヒストリー』第19号, pp.41-54, 査読有, 2022/2/28

金田彩「書評 (Lucy Riall, *Risorgimento: The History of Italy from Napoleon to Nation State.*)」『パブリック・ヒストリー』第19号, pp.55-59, 査読有, 2022/2/28

藤崎香奈子「書評 (J. Block, *Citizenship in Classical Athens*)」『パブリック・ヒストリー』第19号, pp.59-63, 査読有, 2022/2/28

松本捷「書評 (栗原久定『ドイツ植民地研究—西南アフリカ・トーゴ・カメルーン・東アフリカ・太平洋・膠州湾』)」『パブリック・ヒストリー』第19号, pp.63-66, 査読有, 2022/2/28

真野有里子「書評 (David A. Wilson(ed.) *Irish Nationalism in Canada*)」『パブリック・ヒストリー』第19号, pp.66-68, 査読有, 2022/2/28

谷香里奈「15世紀におけるキリスト教世界の首都ローマ—都市の再建活動に着目して—」『第4回若手研究者フォーラム要旨集』, pp.15-18, 査読有, 2021/9/6

〔博士後期〕

小禄隆司「琉球国の「対欧米発給文書」の基礎的考察：残存形態、作成・発給、様式、発給主体に着目して」『琉球沖繩歴史』第3号, pp.1-18, 査読有, 2021/8/15

- 森井一真「〈書評〉 布留川正博『イギリスにおける奴隷貿易と奴隷制の廃止—環大西洋世界のなかで』(有斐閣、2020年)」
『ヴィクトリア朝文化研究』第19巻, pp.242-246, 査読無, 2021/11/1
- 森井一真「19世紀初頭イギリス議会におけるスコットランド選出議員ネットワークの広がり—奴隷貿易廃止期における
ヘンリー・ダンダスの影響力に着目して」『大阪大学文学研究科博士予備論文』, 査読有, 2021/11/30
- 山内瑞貴「19世紀後半におけるインド茶の中央アジア・チベットへの進出—近代中央アジアの商業コミュニティに関する
—考察—」『大阪大学文学研究科博士予備論文』, 査読有, 2021/11/30

(2)口頭発表

【2020年度】

〔博士前期〕

- 谷香里奈「15世紀における都市ローマと教皇庁—Elizabeth McCahill, Reviving the Eternal City: Rome and the Papal
Court, 1420-1447に基づいて—」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第66回例会, 大阪大学, オンライン, 2020/7/31
- 谷香里奈「教皇庁と都市ローマのルネサンス—道路管理局からみる—」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第70回例会, 大
阪大学, オンライン, 2020/12/9
- 伊藤光葉「「戦時」と「戦後」のはざま—第二次世界大戦後西ドイツにおける帰還者同盟の自助活動—」, 第71回大阪大
学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学, オンライン, 2020/12/18
- 伊藤光葉・菊池康貴・北山航・野口駿之介・平野裕大「近代医療から見る、病における社会的弱者—コロナパンデミック
と関連して—」, 大阪大学歴史教育研究会第131回例会, 大阪大学, オンライン, 2020/12/19
- 伊藤光葉「戦後西ドイツの退役軍人団体における社会適応政策—帰還者同盟の医療・福祉政策の検討を中心に—」, 第1回
関西西洋史若手研究者コロキウム, , オンライン, 2021/2/21
- 伊藤光葉「戦後社会の兵士たち—西ドイツの退役軍人組織から見る戦争のトラウマ、1945~1960年—」, 第3回若手研究
者フォーラム, 大阪大学, オンライン, 2020/3/13
- 伊藤光葉「西ドイツにおける戦争捕虜団体の成立と展開—」, ドイツ現代史研究会3月例会, , オンライン, 2021/3/27
- 野口駿之介「20世紀ブラジル・サンパウロ州におけるコーヒー生産—Mauricio A. Font, Coffee and Transformation in
São Paulo, Brazilに基づいて—」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第65回例会, 大阪大学, オンライン, 2020/7/17
- 野口駿之介「1920年代のブラジルコーヒー産業—コミサリオへの着目—」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第69回例
会, 大阪大学, オンライン, 2020/12/8
- 福永耕人「1950~60年代のドイツ連邦軍における「抵抗」の受容—」, 第2回若手研究者フォーラム, 大阪大学, オンラ
イン, 2020/9/28
- 福永耕人「ヴォルフ・グラーフ・フォン・バウディッシンの軍事思想—ドイツ連邦軍の「制服を着た市民」理念成立の背
景—」, 近現代ドイツ史研究会例会, オンライン, 2020/10/18
- 福永耕人「1950~60年代におけるドイツ連邦軍の新たな軍隊像の形成—ヴォルフ・グラーフ・フォン・バウディッシ
ンの軍事思想から—」, 第1回関西西洋史若手研究者コロキウム, オンライン, 2020/2/21
- 谷垣美有「第一次大戦前後のフランスにおける軍事年金政策の植民地適用—」, 第1回関西西洋史若手研究者コロキウム,
オンライン, 2020/2/21
- 畔勝俊弥「18世紀アメリカにおける教会と国家：公定教会から信教の自由へ?—」, 第1回関西西洋史若手研究者コロキ
ウム, オンライン, 2020/2/21
- 〔博士後期〕
- 森井一真「アメリカ・カナダにおけるパブリック・ミーティング研究の動向—デジタル時代の先行研究収集の方法に着目
して—」, 第67回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学, オンライン, 2020/9/18
- 森井一真「パブリック・ミーティングをめぐる研究動向—合衆国・カナダを中心に—」, 第70回日本西洋史学会大会, 大阪
大学, オンライン, 2020/12/12
- 高垣里衣「アメリカ独立戦争期におけるビルバオ商業に関する数量的分析—港湾史料と書簡史料から—」, スペイン史学

会夏期研究, オンライン, 2020/9/26

高垣里衣「大西洋革命期におけるビルバオ商人の貿易—対北米貿易とアメリカ・アジア製品の流通—」, 第70回日本西洋史学会大会, 大阪大学, オンライン, 2020/12/12

【2021年度】

〔博士前期〕

谷香里奈「15世紀におけるキリスト教世界の首都ローマ—都市の再建活動に着目して—」, 若手研究者フォーラム, 大阪大学, ハイブリッド(両方), 2021/9/15

小銭杏士郎「8世紀都市ローマにおけるパウルス1世による聖遺物移葬—先行研究の整理と考察—」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学, オンライン, 2021/7/28

小銭杏士郎「8世紀都市ローマにおける聖遺物移葬と「転換」」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学, オンライン, 2021/12/17

金田彩「18-19世紀転換期イタリアにおけるリソルジメント研究の可能性 — Lucy Riall, *Risorgimento: The History of Italy from Napoleon to Nation State* — に基づいて」, 大阪大学西洋史学会 若手セミナー第75回例会, 大阪大学, オンライン, 2021/9/1

金田彩「リソルジメント期ピエモンテのアソシエーション — カミッロ・カヴールと農業協会 —」, 大阪大学西洋史学会 若手セミナー第77回例会, 大阪大学, オンライン, 2021/12/17

常震宇「カスティリャ王国における騎士団組織から見る王国と騎士団—領域支配を中心に—」, 大阪大学西洋史学会 若手セミナー第78回例会, 大阪大学, オンライン, 2021/12/10

真野有里子「フィニアニズムとカナダ社会におけるアイルランド系カトリックのナショナリズム」, 大阪大学西洋史学会 若手セミナー第77回例会, 大阪大学, オンライン, 2021/12/17

藤崎香奈子「アテナイ宗教史と女性史の発展—Matthew Dillon, *Girls and Women in Classical Greek Religion* から J. Blok, *Citizenship in Classical Athens* へ—」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学, オンライン, 2021/8/24

藤崎香奈子「古代ギリシアの宗教的領域で活動した女性の家庭的側面」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学, オンライン, 2021/12/10

松本捷「ドイツ第二帝国期の植民地政策・統治・実情—栗原久定『ドイツ植民地研究』にもとづいて—」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学, オンライン, 2021/9/1

松本捷「膠州湾・青島植民地と東洋艦隊」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学, オンライン, 2021/12/10

〔博士後期〕

福永耕人「1950～70年代のドイツ連邦軍における新たな軍隊像の形成」, 大阪大学西洋史学会 若手セミナー第78回例会, 大阪大学, オンライン, 2022/2/18

福永耕人「1950～70年代のドイツ連邦軍における新たな軍隊像の形成—ヴォルフ・グラーフ・フォン・パウディッソンの軍事思想を中心に—」, ドイツ現代史研究会 2月例会, オンライン, 2022/2/20

福永耕人「1950～70年代のドイツ連邦軍における新たな軍隊像の形成—ヴォルフ・グラーフ・フォン・パウディッソンの軍事思想を中心に—」, 草津の会 2月例会, オンライン, 2022/3/17

谷垣美有「戦間期フランスにおける植民地兵年金」, 関西フランス史研究会第191回例会, オンライン, 2021/10/2

玉村 紳「戦間期の日印ガラス工業の競争と協調—インド関税委員会ガラス工業報告書からみる1930年代日印の二重構造—」, 第90回社会経済史学会全国大会, 神戸大学, オンライン, 2021/5/16

玉村 紳「戦間期日印ガラス工業の競争と協調—インド関税委員会ガラス工業報告書から見る1930年代日印の二重構造—」, 若手セミナー第72回例会, 大阪大学, オンライン, 2021/5/12

嶽麻美「「岩倉使節団」再考 — 「帰航日程」における貿易に関する記述を中心に —」, 九州史学会2021年度大会・西洋史部会, 九州大学, オンライン, 2021/12/12

小祿隆司「琉球国那覇地方官に関する基礎的考察—登場とシステムの確立を中心に—」, 学生報告会, 沖縄県立芸術大学,

オンライン, 2021/3/27

小祿隆司「琉球国の「対欧米発給文書」の諸問題」, 第1回研究会, 京都府立大学, オンライン, 2021/5/28

小祿隆司「琉球国の「対欧米発給文書」について」, 11月例会, 沖縄県立芸術大学, オンライン, 2021/11/27

小祿隆司「1797年から1876年の琉球諸島におけるイギリス船の海難事故—その全体像の把握と乗組員の送還形態の分析を中心に—」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学, オンライン, 2022/2/18

井上健太郎, 小祿隆司, 川西寿弥, 下野航太, 平尾悠「近代世界における清朝の「あがき」と変容—軍制比較の視点から—」, 第139回例会, 大阪大学, オンライン, 2021/12/18

小祿隆司「1797年から1876年の琉球諸島におけるイギリス船の海難事故—その全体像の把握と乗組員の送還形態の分類を中心に—」, 第78回若手セミナー, 大阪大学, オンライン, 2022/2/18

森井一真「19世紀初頭イギリス領西インドにおける在地地主の政治参加—奴隷貿易廃止期の議論を中心に」, 第25回ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学, オンライン, 2021/6/12

森井一真「A Resistance against the Abolition of the Slave Trade: Scottish MPs' Networks in the Age of Abolition」, Edinburgh Centre for Global History Graduate Workshops, the University of Edinburgh, オンライン, 2022/2/23

山内瑞貴「The Distribution of Indian Tea - the Failure of the Export of Indian Tea to Tibet in the 19th Century」, ENIUGH Congress 2021, Leipzig Univ., オンライン, 2021/6/15

山内瑞貴「19世紀後半における中央アジアへのインド茶の流通」, 広島史学会 西洋史部会, 広島大学, オンライン, 2021/10/31

Raphael Studer 「„Jä“ oder „iie“? Der Basler Bourgeois Paul Ritter als Schweizer Diplomat in Meiji-Japan (1892-1909) 」, Swiss-Japanese Society, オンライン, 2021/4/24

Raphael Studer 「 „A Swiss Perspective on Japanese Business Ethics in the Past and its Lessons for Today” 」, SJCC Webinar, Swiss-Japanese Chamber of Commerce, オンライン, 2021/8/26

(3) その他(書評・翻訳など)

【2020年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

【2021年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計1名)

2021年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 2名 (計3名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2021年度 学部: 2名 大学院: 1名 (計3名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020 年度～2021 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

高垣里衣 (博士後期課程・助教), 2021/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020 年度～2021 年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2020 年度 : 0 名 2021 年度 : 0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2020 年度 : 0 名 2021 年度 : 0 名

9. 刊行物

2020 年度 『西洋史学』 269-270 号 学術誌 (日本西洋史学会)
『パブリック・ヒストリー』 第 18 号 学術誌 (大阪大学西洋史学会)
2021 年度 『西洋史学』 271-272 号 学術誌 (日本西洋史学会)
『パブリック・ヒストリー』 第 19 号 学術誌 (大阪大学西洋史学会)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

グローバルヒストリー・セミナー	2008 年度～現在に至る
日本西洋史学会『西洋史学』編集部	2008 年度～現在に至る
大阪大学西洋史学会	2008 年度～現在に至る
関西アメリカ史研究会	2008 年度～現在に至る
東アジアブリテン史学会 (E A A B H) 事務局	2011 年 3 月～現在に至る
関西西洋史若手研究者コロキウム	2021 年 2 月～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

日本西洋史学会大会

第 70 回 高垣里衣「大西洋革命期におけるビルバオ商人の貿易—対北米貿易とアメリカ・アジア製品の流通—」
(2020/12/12)

大阪大学西洋史学会若手セミナー 学内

第 65 回 野口駿之介「20 世紀ブラジル・サンパウロ州におけるコーヒー生産—Mauricio A. Font, Coffee and Transformation in São Paulo, Brazil に基づいて—」(2020/7/17)

第 66 回 谷香里奈「15 世紀における都市ローマと教皇庁—Elizabeth McCahill, Reviving the Eternal City: Rome and the Papal Court, 1420-1447 に基づいて—」(2020/7/31)

第 67 回 森井一真「アメリカ・カナダにおけるパブリック・ミーティング研究の動向—デジタル時代の先行研究収集の方法に着目して—」(2020/9/18)

- 第 69 回 野口駿之介「1920 年代のブラジルコーヒー産業—コミサリオへの着目—」(2020/12/8)
- 第 70 回 谷香里奈「教皇庁と都市ローマのルネサンス—道路管理局からみる」(2020/12/9)
- 第 71 回 伊藤光葉「「戦時」と「戦後」のはざままで—第二次世界大戦後西ドイツにおける帰還者同盟の自助活動」(2020/12/18)
- 第 72 回 玉村紳「戦間期日印ガラス工業の競争と協調—インド関税委員会ガラス工業報告書から見る 1930 年代日印の二重構造—」(2021/5/21)
- 第 73 回 小銭杏士郎「8 世紀都市ローマにおけるパウルス 1 世による聖遺物移葬—先行研究の整理と考察—」(2021/7/28)
- 第 74 回 藤崎香奈子「アテナイ宗教史と女性史の発展—Matthew Dillon, Girls and Women in Classical Greek Religion から J. Blok, Citizenship in Classical Athens へ」(2021/8/24)
- 第 75 回 金田彩「18-19 世紀転換期イタリアにおけるリソルジメント研究の可能性—Lucy Riall, Risorgimento: The History of Italy from Nappoleon to Nation State に基づいて」(2021/9/1)
松本捷「ドイツ第二帝国期の植民地政策・統治・実情—栗原久定『ドイツ植民地研究』にもとづいて」(2021/9/1)
- 第 76 回 松本捷「膠州湾・青島植民地と東洋艦隊」(2021/12/10)
藤崎香奈子「古代ギリシアの宗教的領域で活動した女性の家庭的側面」(2021/12/10)
常震宇「カスティリャ王国における騎士団組織から見る王国と騎士団—領域支配を中心に—」(2021/12/10)
- 第 77 回 真野有里子「フィニアニズムとカナダ社会におけるアイルランド系カトリックのナショナリズム」(2021/12/17)
小銭杏士郎「8 世紀都市ローマにおける聖遺物移葬と「転換」」(2021/12/17)
金田彩「リソルジメント期ピエモンテのアソシエーション—カミッロ・カヴァールと農業協会」(2021/12/17)
- 第 78 回 福永耕人「1950～70 年代のドイツ連邦軍における新たな軍隊像の形成」(2022/2/18)
小禄隆司「1797 年から 1876 年の琉球諸島におけるイギリス船の海難事故—その全体像の把握と乗組員の送還形態の分析を中心に—」(2022/2/18)

大阪大学グローバルヒストリー・セミナー 学内

- 第 87 回 “Paper and the British Empire: The Quest for Imperial Raw Materials, 1861 to 1960” (2020/4/24)
講師 Timo Särkkä (フィンランド・ユバスカラ大学 歴史・民俗学部講師)
- 第 88 回 「世界史的共通体験としての奴隷廃止：解放されない人びと」 (2020/5/22)
講師 鈴木英明 (国立民族学博物館)
- 第 89 回 "The Colombo Plan towards the Indo-Pacific: exploratory diplomacy of the long 1950s "(2020/6/26)
講師 David Lowe (Chair in Contemporary History School of Humanities and Social Sciences Faculty of Arts and Education Deakin University)
- 第 90 回 “Cholera and Meiji Japan: Medical Knowledge, International Relations and the Quarantine System” (2020/10/2)
講師 Harald Fuess (Professor of History, Heidelberg University. Heidelberg Center for Transcultural Studies, Faculty of Philosophy)
- 第 91 回 “Franco-Danish trade relations in the Indian Ocean in the 18th century "(2020/10/16)
講師 Pierrick Pourchasse (フランス・ブレスト西ブルターニュ大学)
- 第 92 回 「長安から北京へ—ユーラシア交通網の転換—」 (2020/11/6)
講師 妹尾達彦 (中央大学文学部教授)
- 第 93 回 "Philippine Asianist thought and Southeast Asian Pan-Asianist action in the "periphery" of Asia at the turn of the twentieth century " (2020/11/20)

- 講師 Dr. Nicole CuUnjieng Aboitiz
- 第 94 回 「冷戦変容期における米中人民外交の展開」 (2020/12/4)
講師 南和志李 (大阪大学国際公共政策研究科准教授)
- 第 95 回 「大阪財界と戦時—大東亜共栄圏への道」 (2020/12/18)
講師 瀧口剛 (大阪大学法学研究科教授)
- 第 96 回 「『水の領地』から『水平線の彼方』—地先権、無主地そしてグローバル世界—」 (2021/1/22)
講師 鶴島博和 (熊本大学名誉教授)
- 第 97 回 “The British Empire after A. G. Hopkins’ American Empire” (2021/3/19)
講師 Jay Sexton (Kinder Institute, University of Missouri)
- 第 98 回 “Japanese Silver and the Namban Trade in 16th Century Japan” (2021/4/23)
講師 岡美穂子 (東京大学大学院 情報学環・学際情報学府 准教授)
- 第 99 回 “Japanese Americanists' visions of the Asia-Pacific order: From the prewar to the postwar years” (2021/5/28)
講師 中嶋啓雄 (大阪大学大学院国際公共政策研究科・教授)
- 第 100 回 “The United States after 1783: an American or a British Empire?” (2021/6/25)
講師 A.G. Hopkins (Emeritus Professor, University of Cambridge, UK)
- 第 101 回 “Transpacific Visions: Connected Histories of the Pacific Across North and South” (2021/7/30)
講師 小林ハッサル柔子 (立命館大学グローバル教養学部・准教授)
- 第 102 回 “The Limits of Westernization: American and East Asian Intellectuals Create Modernity, 1860-1960” (2021/10/21)
講師 Jon Davidann (Professor of History Hawai'i Pacific University)
- 第 103 回 “Japan's Last Colonial Frontier: Settler Migration, Development and Expansionism in the Brazilian Amazon” (2021/11/19)
講師 Facundo GARASINO (Research Fellow, JICA Ogata Sadako Research Institute for Peace and Development)
- 第 104 回 “The Berlin –Rome –Tokyo Axis. From a Transnational to a Transimperial Perspective” (2021/12/17)
講師 Daniel Hedinger (LMU MÜNCHEN)
- 第 105 回 “Indian guinée cloth, West Africa, and the French colonial empire 1826–1925: Colonialism and imperialism as agents of globalization” (2022/1/28)
講師 正木 響 (金沢大学)
- 第 106 回 「ユーラシア東部のなかの中華世界の再編」 (2022/3/31)
講師 荒川正晴 (大阪大学・名誉教授 放送大学島根学習センター・客員教授)

大阪大学グローバルヒストリー・ワークショップ

12. 教員の研究活動(2020 年度～2021 年度の過去 2 年間)

1. 秋田 茂 教授

1958 年生。1985 年、広島大学大学院文学研究科博士課程中退。博士 (文学) (大阪大学) 2003 年。大阪外国語大学外国語学部助手、同講師、同助教授を経て、2003 年 10 月より現職。先導的学際研究機構(OTRI)グローバルヒストリー研究部門長、アジア世界史学会(AAWH)会長。専攻：イギリス帝国史・グローバルヒストリー

1-1. 論文

秋田茂 “American Empire in Global History”, *The Journal of Imperial and Commonwealth History*, 49-3, pp. 401-413, 2021/6

1-2. 著書

秋田茂, Patrick Griffin, Max M. Edling 他(共著) *American Empire in Global History*, London and New York: Routledge, pp. 3-15, 2021/12

秋田茂, Hong Liu, Shiro Momoki 他(共著) *Changing Dynamics and Mechanisms of Maritime Asia in Comparative Perspectives*, Singapore: Palgrave Macmillan, pp. 1-14, 2021/9

秋田茂, 細川道久(共著) 『駒形丸事件—インド太平洋世界とイギリス帝国』筑摩書房, pp. 1-53, 100-108, 175-241, 2021/1

秋田茂 『極簡英帝国史 来自亜洲の思考』中国出版集团東方出版中心, 245p., 2020/12

秋田茂, 脇村孝平, 木下太志他(共著) 『人口と健康の世界史』(MINERVA 世界史叢書8) 『ミネルヴァ書房, pp. 1-18, 2020/8

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

秋田茂(書評) 「中村哲著『東アジア資本主義形成史論』汲古書院、2019年」『歴史学研究』1014, pp. 56-58, 2021/10

秋田茂(紹介) 「グローバル・ヒストリー」『河合塾 Guideline』河合塾, pp. 48-49, 2021/7

秋田茂(Book Review) “Kiyonori Kanasaka, *Isabella Bord and Japan: A Reassessment*, Trans. Nicholas Petwee. Folkestone, UK: Renaissance Books, 2017; Kiyonori Kanasaka, *Unbeaten Tracks in Japan: Revisiting Isabella Bird*. New Abridged Edition with Notes and Commentaries. Trans. Nicholas Petwee. Folkestone, UK: Renaissance Books, 2020”, *Asian Review of World Histories*, 9-2, DOI:10.1163/22879811-12340096, pp. 293-296, 2021/7

秋田茂(書評) 「島田竜登編『1789年 自由を求める時代』山川出版社、2018年」『西洋史学』271, 日本西洋史学会, pp. 88-90, 2021/6

秋田茂(事典項目) 「グローバル・ヒストリー」社会経済史学会『社会経済史学事典』丸善出版, pp. 30-31, 2021/6

秋田茂(事典項目) 「植民地帝国と植民地経営」社会経済史学会『社会経済史学事典』丸善出版, pp. 632-633, 2021/6

秋田茂(書評) 「杉原薫著『世界史のなかの東アジアの奇跡』名古屋大学出版会、2020年」『世界史の眼』15, 世界史研究所、<https://riwh.jp/2021/06/01/>, 2021/6

秋田茂(解説) 「世界市場の形成』の魅力」松井透著『世界市場の形成』ちくま学芸文庫, pp. 473-481, 2021/3

秋田茂(書評) 「スニール・アムリス著(秋山勝訳)『水の大陸 アジア—ヒマラヤ水系・大河・海洋・モンスーンとアジアの近現代』草思社 2021年」『日本経済新聞』, 2021/3

秋田茂 「インド太平洋の歴史をつなぐ」『ちくま』599, 筑摩書房, pp. 10-11, 2021/1

秋田茂, 川村朋貴, 中村武司他(共訳)(翻訳) 「第一章 オリエンテーション ジョン・ダーウィン著『ティムール以後 世界帝国の興亡 1400-2000年 上』」国書刊行会, pp. 23-84, 2020/11

Akita, Shigeru(Website), “How do we situate this moment within the history of internationalism and international order in Asia?”, *Toynbee Prize Foundation HP*, Toynbee Prize Foundation, 2020/6

秋田茂 「インタビュー 世界同時「鎖国」*The Asahi Shimbun Globe*, 朝日新聞, pp. 7-7, 2020/5

秋田茂 「脱・中国依存」と「自国ファースト」 コロナ後の世界を占う」『*The Asahi Shimbun Globe*, 電子版』朝日新聞, 2020/5

1-4. 口頭発表

秋田茂 “General Introduction and “Green Revolution” in India, the World Bank and the Oil Crises in the 1970s: Focusing on Chemical Fertilizer Problems’]International Workshop: ‘The Oil Crises and Transformation of International Economic Order of Asia in the 1970s’, Osaka University Global History Society and OTRI, Global History Division, Sigur Center for Asian Studies, at the Elliot School of International Affairs, George Washington University, Washington D.C. (Hybrid), 2022/3

秋田茂 “Historical Origins of ‘the East Asian Miracle’—A Global perspective on the International Order of Asia from the 1930s to the 1950s]HeKKSaGOn Global History from Asian Perspectives Joint Research Project Second Workshop, HeKKSaGOn

Global History Group and Osaka University, ZOOM 開催, 2022/3

秋田茂 「近現代への歩み—パクス・ブリタニカの世界⑤: 現代イギリスと世界」大阪府高齢者大学校「世界史から学ぶ科」, 大阪府高齢者大学校, 2022/2

秋田茂 「イギリス帝国と現代世界」NPO 法人大阪府北部コミュニティカレッジ(ONCC)・総合文化を学ぶ科, 豊中市文化芸術センター, 2021/12

秋田茂 「司会と論点整理 第 II 編・近代世界システム像の再構築を読む—「長期の19世紀」再考」拡大書評会・杉原薫著『世界史のなかの東アジアの奇跡』秋田科研 2021 年度特別例会, ZOOM 開催, 2021/12

秋田茂 「司会と論点整理—第二次石油危機とインド—1979-1982 年—」秋田科研 2021 年度定例第 3 回研究会, ZOOM 開催, 2021/12

秋田茂 “Introduction: Aims of Research Project; and “Green Revolution” in India, the World Bank and the Oil Crises: Focusing on Chemical Fertilizer Problems”, International Workshop: ‘The Oil Crises and Transformation of International Economic Order of Asia in the 1970s’, Osaka University Global History Society and OTRI, Global History Division, at Heidelberg Center for Transcultural Studies, University of Heidelberg (Hybrid), 2021/11

秋田茂 「討論: 部会 15 グローバル・ヒストリーとしての石油危機」日本国際政治学会・2021 年度研究大会, 日本国際政治学会, ZOOM 開催, 2021/10

秋田茂 “Historical Origins of the ‘East Asian Miracle’—A Global Historical Perspective on International Order of Asia in the 1930s and 1950s”, HeKKSaGOn Global History from Asian Perspectives Joint Research Project Workshop, HeKKSaGOn, Tohoku University, ZOOM 開催, 2021/9

秋田茂 “Working Group 8: Transwar and Transimperial History in the Asia-Pacific: Development, Environment and Decolonization”, Plenary Session of the HeKKSaGOn, HeKKSaGOn, Tohoku University, ZOOM 開催, 2021/9

秋田茂 「「司会と論点整理」「第二次石油危機とインド—1979-1982 年—」2021/9/25(13:00-18:30), 9/26(10:00-17:30)」秋田科研 2021 年度定例第2回研究会, ZOOM 開催, 2021/9

秋田茂 “Report and presentation, Panel 1: South Asia, East Asia and the Pacific”, IHR Global Birthday Event, Institute of Historical Research, University of London, ZOOM 開催, 2021/7

秋田茂 「コメント: 木村昌人、民間(経済)外交の効果と限界—渋沢栄一を中心として」オンライン国連史コロキウム第31回, 国連史コロキウム, ZOOM 開催, 2021/6

秋田茂 “Chair and presentation, ‘Creating Global History from Asian Perspectives—Challenges from Osaka’, Panel 54: Creating Global/World History from Asian Perspectives—Activities of the Asian Association of World Historians (AAWH) (2009-2020)”, 6th ENIUGH (European Network in Universal and Global history) Conference, ZOOM 開催, 2021/6

秋田茂 「司会と論点整理」秋田科研 2021 年度定例第1回研究会, ZOOM 開催, 2021/6

秋田茂 「駒形丸事件—グローバルヒストリー研究の文脈で—」琉球沖縄歴史学会2021年4月例会, ZOOM 開催, 2021/4

秋田茂 「パクス・ブリタニカの世界④: コロンボ・プランと開発主義」世界史から学ぶ科, 大阪府高齢者大学校, 2021/3

秋田茂 「司会と論点整理」秋田科研2020年度定例第3回研究会, 大阪大学,ZOOM 開催, 2021/3

秋田茂 「歴史における関係性と世界システム論の変容」シンポジウム「社会と知のエコシステム—生体 x 歴史 x 人工物」, 大阪大学国際共創大学院学位プログラム推進機構・大学院工学研究科,ZOOM 開催, 2020/12

秋田茂 「司会と論点整理」秋田科研2020年度定例第2回研究会, 大阪大学ZOOM 開催, 2020/12

Akita, Shigeru, “Chair and Comments on American Empire in Global History”, Round Table 3-4 : “American Empire” in the context of Global History, Osaka University,ZOOM 開催, 2020/11

秋田茂 「「インドの『緑の革命』、世界銀行と石油危機—化学肥料問題をを中心に—」2020 年度政治経済学・経済史学会 秋季学術大会: 「石油危機」の衝撃と 1970 年代アジア国際経済秩序の変容」政治経済学・経済史学会, 専修大学,ZOOM 開催, 2020/10

Akita, Shigeru, “Chair and Presentations, ‘Introduction’ and ‘“Green Revolution” in India, the World Bank and the Oil Crises: Focusing on Chemical Fertilizer Problems’”, The Oil Crises and Transformation of International Economic Order of Asia in the

1970s , Osaka University,ZOOM 開催, 2020/8-9

秋田茂 「国際秩序の変化や大衆化と「私たち」—「歴史総合」の見方・考え方」第 68 回愛知県世界史教育研究会, 愛知大学,ZOOM 開催, 2020/8

Akita, Shigeru, “Chair and Comments on American Empire in Global History”, Round Table 2 : “American Empire” in the context of Global History, Osaka University,ZOOM 開催, 2020/7

秋田茂 「司会と論点整理」秋田科研2020年度定例第1回研究会, 大阪大学,ZOOM 開催, 2020/6

Akita, Shigeru, “Chair and Comments on American Empire in Global History”, Round Table 1 : “American Empire” in the context of Global History, Osaka University,ZOOM 開催, 2020/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

秋田茂 大阪大学総長顕彰・研究部門, 大阪大学, 2014/7

秋田茂 第 14 回読賣・吉野作造賞, 読賣新聞社、中央公論新社, 2013/7

秋田茂 第 20 回大平正芳記念賞, 大平正芳記念財団, 2004/6

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2017 年度～2021 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:秋田茂

課題番号:17H00933

研究題目:世界システムの転換点としての 1970 年代—石油危機の衝撃

研究経費:2020 年度 直接経費 6,300,000 円 間接経費 1,890,000 円

2021 年度 直接経費 6,500,000 円 間接経費 1,950,000 円

研究の目的:

1970 年代の二回の石油危機によって、近代世界システム・世界経済はいかに変容し、21 世紀現代世界の原型が形成されたのか。「広義の東アジア地域」の経済成長(東アジアの奇跡)はなぜ可能になり、南アジアの農業開発「緑の革命」は成果をあげる一方で、アフリカの経済開発政策はなぜ失敗して「南南問題」が生まれたのか。経済援助(ODA)、民間投資の動向と関連づけて分析する。さらに、石油危機を通じて国際金融は、ブレトン＝ウッズ体制から「民営化された国際通貨システム」へといかに変容したのか、オイルマネーの行方に着目して考察する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

社会経済史学会・評議員, 2017 年 5 月～現在に至る

East Asian Society of British History-Japan・President (会長), 2018 年 8 月～現在に至る

Asian Association of World Historians (AAWH)・President (会長), 2015 年 5 月～現在に至る

北海道大学スラブ研究センター・共同研究員, 2011 年 4 月～現在に至る

日本学術会議・連携会員(史学), 2006 年 10 月～現在に至る

The Royal Historical Society (United Kingdom)・Fellow, 2002 年 10 月～現在に至る

2. 藤川 隆男 教授

1959 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(大阪大学)、MA (ANU)。帝塚山大学教養学部講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻:西洋史、とくにオーストラリアの歴史

2-1. 論文

-
- 藤川隆男「オーストラリアン・ルールズ・フットボール:グローバルな世界戦略とローカル・スポーツ」『スポーツ史学会第 34 回大会発表抄集』(スポーツ史学会), 1, スポーツ史学会, pp. 33-35, 2020/11
- 藤川隆男「公共圏の歴史的構造」*Clio*, 34, 東大クリオの会, pp. 126-132, 2020/7
- 藤川隆男「Digital History Insights」『西洋史学』(日本西洋史学会), 269, 日本西洋史学会, pp. 76-77, 2020/6

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

-
- 藤川隆男(書評)「関根政美・塩原良和・栗田梨津子・藤田智子編著『オーストラリア多文化社会論』」『オーストラリア研究』34, pp. 89-91, 2021/3

2-4. 口頭発表

-
- 藤川隆男「オーストラリアン・ルールズ・フットボール:グローバルな世界戦略とローカル・スポーツ」スポーツ史学会第 34 回大会: スポーツ史学会, スポーツ史学会, 龍谷大学(オンライン), 2020/12

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2019 年度～2022 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:藤川隆男

課題番号:19H01330

研究題目:オーストラリアの世論形成の歴史的解明:自然言語処理による公開集会データの分析

研究経費:2020 年度 直接経費 4,800,000 円 間接経費 1,440,000 円

2021 年度 直接経費 3,300,000 円 間接経費 990,000 円

研究の目的:

公開集会は、19 世紀西欧の世論形成の支柱であるとされたが、歴史的構造としての分析は十分になされてこなかった。本研究はこのテーマを、オーストラリアの新聞データベースに掲載されるすべての公開集会の資料を用いて追及する。情報系研究者との連携により、情報技術を駆使してデータを集積・分類・分析し、19 世紀前半から 20 世紀半ばまでの公開集会による世論形成の構造を、オーストラリア全国に関して長期的に解明する研究である。本研究はデジタル・ヒストリーの最先端に立ち、この研究手法を応用すれば、検証できる資料の量(ビッグデータ)を幾何級数的に増大できる。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西洋史学会・代表, 2016 年 3 月～現在に至る

日本歴史学協会・委員, 2015 年 9 月～現在に至る

日本西洋史学会・理事, 2015 年 5 月～現在に至る

大阪大学西洋史学会・理事, 2003 年 6 月～現在に至る

パブリック・ヒストリー・編集委員, 2003 年 6 月～現在に至る

西洋史学・編集委員, 1996 年 4 月～現在に至る

3. 中野 耕太郎 教授

1967年生。1994年、京都大学文学研究科博士後期課程（西洋史学専攻現代史学）中退。博士(文学)（京都大学）。日本学術振興会特別研究員、大阪市立大学助手、同講師、同助教授、大阪大学准教授を経て、2016年4月より現職。（2021年8月退職）専攻：アメリカ現代史

3-1. 論文

中野耕太郎「コメント 歴史のなかの分断・分極化——2020年のアメリカを考える」『アメリカ太平洋研究』21, 東京大学アメリカ太平洋地域研究センター, pp. 43-53, 2021/3

3-2. 著書

中野耕太郎, 金澤周作他(共著)『論点・西洋史学』ミネルヴァ書房, (担当:分担執筆, 範囲:「移民史論」、「ナショナリズム論(南北アメリカ・西欧からのアプローチ)」、「革新主義とニューディール」), 2020/4

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中野耕太郎「黒人男性暴行死 抗議デモ拡大—格差是正 米政策の転換期(インタビュー記事)」『読売新聞』読売新聞, pp. 2-2, 2020/7

3-4. 口頭発表

中野耕太郎「コメント」グローバル化の進行と地域研究の未来 FDシンポジウム:グローバル化の進行と地域研究の未来, 南山大学国際地域文化研究科, 南山大学(オンライン), 2021/1

中野耕太郎「コメント」分断のアメリカを展望する 公開シンポジウム:分断のアメリカを展望する 公開シンポジウム, 東京大学アメリカ太平洋地域研究センター, 東京大学(オンライン), 2020/10

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

中野耕太郎 第2回齋藤眞賞, アメリカ学会, 2012/6

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2020年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:中野耕太郎

課題番号:20K01058

研究題目:現代アメリカにおける国家・市民関係の史的転換—1960～70年代の変容を中心に

研究経費:2020年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2021年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

本研究は、1960-70年代のアメリカではじまった福祉国家の衰退と「小さな政府」論の台頭に注目し、この間進行した国家・市民関係の変化を実証的に分析するものである。具体的には、①冷戦と国内救済の関係が70年代の展開を視野に入れて考察するとともに、この時期あらわとなる、②アメリカ国内の治安・拘禁政策の史的転換と、③徴兵停止(募兵の市場化)にともなう市民の軍事奉仕の変容を検証し、ポスト福祉国家へと向かうアメリカ史のダイナミズムを明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

アメリカ学会・理事, 2016年6月～現在に至る

史学研究会・評議員, 2014年6月～現在に至る
パブリック・ヒストリー・編集委員, 2008年6月～現在に至る
大阪大学西洋史学会・理事, 2008年6月～現在に至る
二十世紀研究・編集委員, 2008年4月～現在に至る
日本西洋史学会・編集委員, 2003年4月～現在に至る
アメリカ史評論・編集委員, 1995年11月～現在に至る

4. 栗原 麻子 教授

1968年生。1995年、京都大学大学院文学研究科博士課程（西洋史学専攻）指導認定のうえ退学。博士（文学）（京都大学、1998年）。日本学術振興会特別研究員、奈良大学講師を経て、2004年10月より大阪大学文学研究科助教授、同准教授を経て2017年4月より現職。専攻：古代ギリシア史

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

Asako KURIHARA, Andreas Markantonatos, Vasileios Liotsakis (et. als), “Witnesses and Evidence in Ancient Greek Literature”
De Gryuter, pp. 39-57, Part1, Chapter2を担当, 2022/1

栗原麻子, 南川高志, 井上文則他(共著)『生き方と感情の歴史学：古代ギリシア・ローマ世界の深層を求めて』山川出版社, 2021/4

栗原麻子, 高田京比子, 三成美保他(共著)『母を問う一母の比較文化史一』神戸大学出版会, pp. 180-206, 2021/1

栗原麻子『互酬性と古代民主制 アテナイ民衆法廷における「友愛」と「敵意」』京都大学学術出版会, 654p., 2020/4

栗原麻子, 金澤周作, 藤井崇他(共著)『論点 西洋史学』ネルヴァ書房, pp. 14-15, 2020/4

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

栗原麻子「自著を語る」『地中海学会月報』441, p. 7, 2021/7

栗原麻子(書評)「伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留編『世界哲学史1 古代1 知恵から愛知へ』(筑摩書房、2020年)、
『世界哲学史2 古代2 世界哲学の成立』(筑摩書房、2020年)」、世界史研究所ウェブサイト (<https://riwh.jp/2021/05/01/>),
2021/5

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2017年度～2020年度、基盤研究(C) 一般、代表者:栗原麻子

課題番号:17K0173

研究題目:互酬性と民主制—前4世紀アテナイにおける公私関係の変容

研究経費:2020年度 直接経費 10,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

本研究は前4世紀アテナイにおける共同体的なるもの(コイノニア)の変容と連続性を問い直す試みである。とりわけ、私的領域と公的領域のあいだに位置する共同体的な領域を重視し、市民や外国人の恩恵・施与行為にたいする顕彰、前4世紀後半の墓碑によって提示される家族の情愛といった世紀後半の事象を法廷弁論とつきあわせ、政治史偏重の時代区分ではなく社会史的にヘレニズムへむけてのアテナイの変容を捉え、続くヘレニズム時代のギリシア世界と比較することを目的とする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西洋古典学会・委員、書評委員, 2013年6月～現在に至る

同・常任委員, 2016年6月～現在に至る

同・編集委員, 2014年6月～2020年6月

古代学協会・編集参与, 2009年4月～現在に至る

日本西洋史学会・編集委員、運営委員、編集幹事, 2004年10月～現在に至る

5. Nadin Hee 教授

1977年生。チューリッヒ大学でMA、ベルリン自由大学でPh.D(歴史)2010年。ベルリン自由大学、フンボルト大学、マックスプランク研究所で准教授、2021年7月より大阪大学大学院文学研究科 現職。専攻:グローバル・ヒストリー、環境史 帝国史 科学技術史

5-1. 論文

NADIN HEE 「Transimperial Opportunities? Transcending the Nation in Imperial Formations」*Comparativ*, 31-43590, pp. 631-638, 2021

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

NADIN HEE イアデ賞, イアデ財団, 2013

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 中谷 惣 准教授

1979年生。大阪市立大学大学院文学研究科修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、信州大学助教を経て、2018年4月より現職。

6-1. 論文

中谷惣 「Credit Networks between City and Countryside in Late Medieval Lucca」 in Stephan Nicolussi-Köhler (ed.) *Change and Transformation of Premodern Credit Markets. The Importance of Small-Scale Credits (Heidelberg, 2021)*, HeiBOOKS, pp. 133-156, 2021/

6-2. 著書

Maria Giuseppina Muzzarelli, 中谷惣, Giuliano Milani(共著) 『Riferire all' autorità. Denuncia e delazione tra Medioevo ed Età Moderna』Viella, pp. 79-95, 2020/

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

中谷惣 日本学術振興会賞(第14回), 日本学術振興会, 2018/3

中谷惣 日本学士院学術奨励賞(第14回), 日本学士院, 2018/3

中谷惣 フォスコ・マライーニ賞(第3回), イタリア政府機関イタリア文化会館, 2017/12

中谷惣 天野和夫賞(第15回), 立命館大学, 2017/11

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2021年度～2025年度、基盤研究(C) 一般、代表者:中谷惣

課題番号:21K00923

研究題目:イタリア中世都市の市民概念に関する動態的研究——周縁者から見る

研究経費:2021年度 直接経費 300,000円 間接経費 90,000円

研究の目的:

本研究は、共同体メンバーの淵で、市民と非市民とを行き来する外国人、高利貸し、追放者らの諸権利の享受と剥奪の実態について、ルッカ文書館所蔵の裁判記録、議会議事録等の調査に基づいて明らかにする。

初年度に、都市ルッカにおける外国人、高利貸し、追放者の存在を各種のリストから把握したうえで、2年目以降、裁判記録から各周縁者の諸権利の享受の実態を解明し、議会議事録から都市政府による対応を検討することで、周縁者の実践と都市指導層の政策によって市民概念が再定義される実相を解明する。5年目にはこのイタリア中世都市の市民概念を比較史の視座の下で総括する。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

イタリア学会・事務局長, 2018年4月～現在に至る

関西比較中世都市研究会・幹事, 2009年4月～現在に至る

7. 見瀬 悠 講師

1985年生。2016年、東京大学大学院人文社会系研究科（西洋史学専攻）単位取得満期退学。博士（歴史学）（パリ＝エスト大学、2021年）。日本学術振興会特別研究員、パリ＝エスト大学博士課程契約研究員を経て、2020年4月より現職。専攻：近世フランス史

7-1. 論文

見瀬悠 「Mobilités, institutions et idéologies. Les étrangers face au droit d'aubaine dans la France du Grand Siècle et des Lumières, 1648-1789(移動、制度、イデオロギー：17・18世紀フランスにおける外国人と外国人遺産取得権)」パリ＝エスト大学博士論文, p. 1-650, 2021/1

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

見瀬悠 「近世フランス王国の外国人と社会」国際基督教大学歴史学ゲストレクチャー、オンライン、2022/1

見瀬悠 「近世フランスにおける外国人の処遇をめぐる言説—外国人遺産取得権を中心に—」フランス革命研究会、フランス革命研究会、オンライン、2021/9

見瀬悠 (招待講演)「文書史料からみる近世フランス」第6回高大連携歴史教育研究会大会全体会「〈阪大史学の挑戦〉一次史料からみる最新の研究成果」、大阪大学高大連携歴史教育研究会、大阪大学、2020/7

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2020年度～2022年度、研究活動スタート支援、代表者：見瀬 悠

課題番号：20K22020

研究題目：18世紀フランスにおける外国人と外交官—イギリスの事例を中心に—

研究経費：2020年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2021年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的：

本研究の目的は、18世紀フランスにおける外国人と国家の関係を、ヨーロッパ国際社会の秩序形成との連関から明らかにすることである。具体的には、外国人の身体と財産の安全確保において在フランス外交官が果たした役割に着目し、国際法上の規範、同郷者コミュニティにおける外交官の位置、同郷者のかかわる係争への外交官の介入の3点から分析する。それによって、従来支配

的だった一国的枠組みを克服し、国際的に移動する人びとの主体的な観点から近世主権国家体制の形成と機能を明らかにすることを旨とする。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

日仏歴史学会・幹事, 2020年10月～現在に至る

西洋史学・編集幹事, 2020年4月～現在に至る

8. 石田 真衣 助教

1984年生。2017年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（西洋史学専門分野）単位取得退学。博士（文学）（大阪大学、2018年）。日本学術振興会特別研究員、神戸学院大学ほか非常勤講師を経て2019年4月より現職（2021年3月退職）。専攻：西洋史学／ヘレニズム史

8-1. 論文

石田真衣「ヘレニズム期エジプトにおける嘆願と社会関係—ファイユームの事例から」『待兼山論叢』54, 大阪大学文学会, pp. 27-50, 2020/12

8-2. 著書

石田真衣(共著)『論点・西洋史学』ミネルヴァ書房, pp. 22-23 (担当:分担執筆, 範囲:「I-11 コイネー」), 2020/4

8-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

8-4. 口頭発表

石田真衣「公開される嘆願書—フィラエ・オベリスクの事例から」第70回日本西洋史学会大会 小シンポジウム I: 古代地中海世界におけるメディア・コミュニケーション・間テクスト性, 日本西洋史学会, 大阪大学 (オンライン), 2020/12

8-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

8-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

8-6-1. 2019年度～2021年度、若手研究、代表者:石田真衣

課題番号: 19K13385

研究題目:ヘレニズム期エジプトにおける社会規範の形成と変容—書簡研究を通じて

研究経費:2020年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2021年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究は、古代の多文化・多言語社会であるヘレニズム期エジプトにおける書簡を介したコミュニケーションの分析を通じ、これまで看過されてきた社会規範の形成と変化の過程を解明するものである。

8-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

8-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

9. 高垣 里衣 助教

2021年4月より大阪大学大学院 文学研究科文化形態論専攻 世界史講座(西洋史学)助教。(2022年3月退職) 専攻:経済史・貿易史、海域史

9-1. 論文

高垣里衣 「近世近代転換期におけるスペインの太平洋貿易に関する研究動向」『アジア太平洋論叢』24, pp. 149-171, 2022/3

9-2. 著書

高垣里衣, Shigeru Akita, Hong Liu 他(共著) 『Changing Dynamics and Mechanisms of Maritime Asia in Comparative Perspectives (Palgrave Studies in Comparative Global History)』Palgrave Macmillan, pp. 131-161, 2021/9

9-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

9-4. 口頭発表

なし

9-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

9-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

9-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

9-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西洋史学会 『西洋史学』・編集委員, 2021年4月～2022年3月

大阪大学西洋史学会 ・『パブリック・ヒストリー』編集委員/会計事務, 2021年4月～2022年月

2-10 考古学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 2 准教授 0 講師 0 助教 1

教授：福永 伸哉、高橋 照彦

助教：上田 直弥

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
26	6	1	0	0	1	0	0

*うち留学生1名、社会人学生0名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	4	3	0	0
2021	7	4	0	0
計	11	7	0	0

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、考古学研究に必要な発掘調査や出土資料分析などにかかわる方法論や技術などといった基礎力について、確実に習得することを重視している。そのために1988年の講座開設以来、フィールド調査を行い、成果を学術報告書にまとめる取り組みの継続を第一の目標にしている。そして、フィールド調査をカリキュラムに取り入れた実践的かつ課題追求型の教育を行うとともに、遺跡や博物館を訪ねる臨地研修を実施し、授業の不足を補うようにつとめることも、全般的な教育目標としている。

また、大学院においては、①授業としての修士・博士論文作成演習に加え、投稿論文作成のための個別指導を強化すること、②研究室のプロジェクトにかかわる共同研究への参加を通じて、資料分析の方法を実践的に習得させること、③専門機関の採用情報の入手につとめ、専門職への就職を支援すること、などを目標とした。学部においては、①学部生向けの講義を継続して開講し、専門基礎学力の充実をはかること、②出土資料の整理分析作業を通じて、考古資料の特性や扱

い方を実践的に習得させること、③考古学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知して学習意欲を向上させること、などを目標とした。

2. 研究

研究面では、世界の考古学の研究動向に目を配りながら比較研究を積極的に進め、広い視野で日本考古学の研究に取り組むことを目指している。そして、一人平均で教員が2本、博士後期課程在籍生が1本以上の論文または研究ノート等を公表または投稿すること、さらに博士前期課程在籍生全員が発掘調査報告書などの分担執筆あるいは編集に携わること、に具体的な数値目標を置いている。また、①これまでに調査を行った遺跡の出土遺物を整理して、発掘調査報告書の刊行に向けた準備をすること、②継続のフィールド活動として、発掘調査や測量調査を行うこと、③科学研究費などの外部資金を導入して研究活動を推進すること、なども目標とした。

3. 社会連携

社会連携としては、教育・研究活動を通じた社会との積極的なかかわりを重視しており、地域社会に入って地域の学校・生涯教育活動などにもかかわり、学問と社会とのあるべき関係の追求を目指している。特に、①フィールド調査の成果に関して、発掘成果報告会の開催やHPでの情報発信などを通じて社会への還元を行うこと、②大阪大学埋蔵文化財調査室が行う大学構内の発掘調査および文化財活用業務に協力すること、③考古学研究室所蔵あるいは保管の資料の社会的活用をはかるために、各地の博物館などからの貸出や写真提供、資料熟覧といった依頼に積極的に応じること、④教育委員会などの発掘調査や遺跡整備などで指導ならびに協力を行うこと、⑤地方自治体の出土品整理あるいは自治体史編纂への学術協力を通じて地域の文化行政を支援すること、などを目標にした。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

まず、新型コロナウイルスによる感染の拡大に伴って、2020年度にはフィールド調査を行うことができなかったが、来校のできる範囲で、カリキュラムに取り入れた演習などにおいて、以前の調査で出土した資料の整理作業を実施することにした。また2021年度については、感染症に十二分に留意しながらもフィールド調査を実施でき、その中で実践的な教育を推進できた。学内での授業を補うために、例年であれば臨地研修も実施しているが、この2020年度～2021年度については実施がかなわなかった。そのため、インターネットなどの媒体での情報により代替することとした。大学院生については、授業以外にも個別の論文指導を行っており、そのほかにもプロジェクトにかかわる共同研究の中で実践的な専門技術の教育などを行うことができた。学部生向けには、基礎的な講義を開講しており、授業などを通して、適宜展覧会やインターネットのコンテンツなどの情報提供も行った。就職支援については、随時指導を行いつつ、大学院修了生や学部卒業生などが文化財行政や埋蔵文化財調査にかかわる職員などとして就職することができた。

2. 研究

研究では、海外での調査・研究を行いつつも、広い視野で日本考古学の研究を行ってきており、教員・大学院生ともに、論文や報告書の執筆に取り組んだ。院生の投稿論文については、博士課程の在籍者では論文への投稿や掲載、学会発表などを1人1回程度は行っているため、概ね成果を挙げることができた。また、フィールドにかかわる研究として兵庫県宝塚市の八州嶺古墳の調査を企画し、残念ながら2020年度は実施ができなかったものの、2021年度には発掘調査を実施し、新たな成果を上げることができた。さらには、上記のような各種の遺跡からの出土品について整理・研究作業につとめて調査成果を得た。この他にも、教員はそれぞれに科学研究費の助成を受けて、種々の研究を推進した。

3. 社会連携

兵庫県宝塚市の八州嶺古墳の現地調査はできなかったが、宝塚市教育委員会と連携しつつ、事業を推進している。また、

このほかにも阪大埋蔵文化財調査室の発掘調査や整理の業務にも引き続きの協力を行った。

その一方で、国の重要文化財指定を受けた野中古墳出土品については、堺市博物館をはじめ大阪大学総合学術博物館などへの貸し出しに対応した。また、大阪大学でかつて調査した高槻市の弁天山 D4 号墳出土品については、地元教育委員会と連携を取りながら、その出土品の展示や報告書作成に協力した。他にも各機関あるいは研究者からの資料の閲覧や写真提供にも積極的に応じている。

さらに、地方自治体に対する学術協力も行っており、考古学研究室として三木市史の編纂業務などにも携わっており、三木市内出土品の整理・活用事業などを行っている。

IV. 自己点検・自己評価(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

前記の活動などの結果、学部生・大学院生とも実践的な技術の習得に効果をあげている。また、大学院修了生や学部卒業生では、専門機関での採用において、正規職員を含む就職の実績を残している。また、学部生に対しても、考古学の基礎知識の充実に向けた講義などにより、一定の成果を得た。このように、所期の目標はほぼ達成することができた。

2. 研究

教員・大学院生ともに、論文などの執筆においておおむね数値目標を達成できた。コロナ禍ということもあって研究会なども減少し、博士課程の学生の論文数や口頭発表などの総数はやや少なくなったものの、着実に成果を上げている。また、2020 年度にフィールド調査は実施できなかったものの、2021 年度にはコロナ感染に留意しつつ発掘調査を短期間ながら実施することができた。また、既往発掘調査の出土遺物の整理なども、来校できる期間や密にはならない状況を見極めて、予定に近い形で行うことができた。このほか、科研費による研究活動も推進した。当該年度の目標はおおむね達成できたものと評価できる。

3. 社会連携

前記のような諸活動を行っており、とりわけこれまで取り組んできた宝塚市内の万籟山古墳の発掘調査を引き継ぐ形で、新たなフィールド対象として隣接する八州嶺古墳を設定し、地元教育委員会と連携をしながら測量や発掘などの調査を実施することができた。その他も、大阪大学でかつて調査した高槻市の弁天山 D4 号墳について地元教育委員会と連携を取りながら、その出土品の展示を行うことに協力するとともに、新たに行った再整理作業の成果を図録や報告書として刊行するなど、社会連携の面において非常に充実した成果を出すことができた。

V. 基本情報(2020 年度～2021 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	0	0	0
2021	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【2020 年度】

なし

【2021 年度】

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	0(0)	1(0)	5(0)	0(0)	0(0)	6(0)
2021	0(0)	8(0)	1(0)	0(0)	0(0)	9(0)
計	0(0)	9(0)	6(0)	0(0)	0(0)	15(0)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	0	0	3	0	0	3
2021	0	0	5	2	0	7
計	0	0	8	2	0	10

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2020 年度】

〔博士前期〕

岩崎郁実「大阪府交野市森遺跡出土製塩土器の検討」『交野市文化財便り』第 32 号, pp.10-15, 査読無, 2021/3/31

岩崎郁実(飯塚信幸と共著)「弁天山 D 4 号墳の築造時期」『弁天山 D 4 号墳整理成果報告書—埴輪・須恵器編—』, pp.14-16, 査読無, 2021/3/1

岩崎郁実「三島地域における古墳時代中期の古墳築造動向」『弁天山 D 4 号墳整理成果報告書—埴輪・須恵器編—』, pp.25-30, 査読無, 2021/3/1

山口等悟「形象埴輪」『弁天山 D 4 号墳整理成果報告書—埴輪・須恵器編—』, pp.9-13, 査読無, 2021/3/1

上村緑(岡田大雄と共著)「京田辺市堀切古墳群の再検討(2)—古墳群出土石棺の調査—」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第 7 号, pp.67-82, 査読無, 2021/3/31

岩崎郁実「古墳時代中期後半における大阪湾岸系製塩技術の地方波及」『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学 4 大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム 成果報告書』, pp.40-45, 査読無, 2021/3/31

【2021 年度】

〔博士前期〕

陣内高志・我妻佑哉(共著)「岡町南遺跡第 5 次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 令和 3 年度(2021 年度)』, pp.21-26, 査読無, 2022/3/31

我妻佑哉「待兼山 2 号墳採集須恵器甕の基礎的検討」『大阪大学埋蔵文化財調査室年報』第 6 号, pp.34-37, 査読無, 2022/3/31

- 上村緑「古墳時代後期における畿内首長墳の埋葬原理とその展開」『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』, pp.36-41, 査読無, 2022/3/31
- 岩崎郁実「奈良盆地における製塩土器—布留遺跡、十六面・薬王寺遺跡、南郷九山遺跡を対象に一」『国家形成期の近畿地方における馬と塩の関係に関する基礎的研究』, pp.15-40, 査読無, 2022/3/31
- 山口等悟「菅原東遺跡における盾形埴輪の特質」『由良大和古代文化研究協会研究紀要』第25巻, pp.64-67, 査読無, 2021/6/28
- 山口等悟・村瀬陸(共著)「ベンシヨ塚古墳出土砥石の評価」『ベンシヨ塚古墳発掘調査報告書』, pp.94-95, 査読無, 2022/2/10
- 山口等悟「第7項 砥石」『ベンシヨ塚古墳発掘調査報告書』, pp.35-35, 査読無, 2022/2/10
〔博士後期〕
- 唐麗薇「唐代塔式罐における細部形態とその意味—長安の紀年墓を中心に—」『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』, pp.42-47, 査読無, 2022/3/31
- 唐麗薇「唐代塔式罐の型式学的研究—罐座を中心に—」『待兼山論叢』史学篇第55号, pp.29-52, 査読無, 2021/12/25

(2)口頭発表

【2020年度】

〔博士前期〕

- 樋口太地「弥生・古墳移行期における鉄斧の保有とその「管理」」, 考古学若手研究会2020第1回研究発表会, オンライン, 2020/8/23
- 岩崎郁実「古墳時代中期における大阪湾岸系製塩技術の移植」, 大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, オンライン, 2021/1/9
- 岩崎郁実「大阪湾岸地域における古墳時代中期土器製塩」, 紀伊考古学研究会第164回例会, オンライン, 2021/2/28

【2021年度】

〔博士前期〕

- 上村緑「古墳時代後期における畿内首長墳の埋葬原理とその展開」, 大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, オンライン, 2022/1/9
- 我妻佑哉「豊中市・桜井谷窯跡群における須恵器生産の展開とその特質」, 若き考古学徒、論壇デビュー!第8回, 大阪府立弥生文化博物館, 対面, 2022/2/12
- 蓮井寛子「周溝墓出土土器からみた葬送儀礼の地域性と造墓集団—弥生時代中期の大阪湾沿岸地域を中心に—」, 若き考古学徒、論壇デビュー!第8回, 大阪府立弥生文化博物館, 対面, 2022/3/5
- 蓮井寛子「弥生時代中期の大阪湾沿岸における葬送儀礼の地域性と造墓集団—周溝墓出土土器による分析—」, 考古学若手研究会2020第4回研究発表, オンライン, 2021/10/3
- 蓮井寛子「周溝墓出土土器からみた造墓集団—弥生時代中期の中河内地域を中心に—」, 大阪歴史学会考古部会10月例会, オンライン, 2021/10/22
- 岩崎郁実「古墳時代中期における製塩土器の流通にかんする一検討」, 大阪歴史学会考古部会2月例会, オンライン, 2022/2/25
- 〔博士後期〕
- 唐麗薇「唐代塔式罐における細部形態とその意味—長安の紀年墓を中心に—」, 大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, オンライン, 2022/1/9

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕なし

【2021年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

唐麗薇（翻訳）「关于奈良三彩的若干问题（著・丹羽崇史）」『唐三彩窑研究』, pp.386-394, 査読無, 2021/11/30

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

（受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。）

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2021年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名)

2021年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

（大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020年度～2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について）

【2020年度】

木村 理 博士課程後期，独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部（飛鳥藤原地区）考古第二研究室アソシエイトフェロー，2020/4

飯塚 信幸 博士課程前期，大阪府教育庁文化財保護課保存管理グループ（技師），2020/4

谷本 峻也 博士課程前期，香川県埋蔵文化財センター調査課（技師），2020/4

西浦 熙 博士課程前期，奈良県立橿原考古学研究所調査部調査課第一係（技師），2020/4

樋口 太地 博士課程前期，三重県埋蔵文化財センター調査研究1課（技師），2020/4

【2021年度】

野島 悠之 博士課程前期，公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター調査課（調査員），2021/4

渡邊 都季哉 博士課程前期，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所調査課（調査研究員），2021/4

岩朝 美賀 学部，徳島県未来創生文化部文化資源活用課（埋蔵文化財担当 主事），2021/4

7. 専門分野出身の高度職業人

（2020年度～2021年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 0名

2020年度: 0名 2021年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度：0名 2021年度：0名

9. 刊行物

【2020年度】

大阪大学考古学研究室・高槻市街にぎわい部文化財課『弁天山 D4号墳整理成果報告書—埴輪・須恵器編—』、2021/3/1

【2021年度】

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

【2020年度】

「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」の実施、2021/1/9
考古学研究会関西例会事務局、2020/4/1～2021/3/31

【2021年度】

「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」の実施、2022/1/9
考古学研究会関西例会事務局、2021/4/1～2022/3/31

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

【2020年度】

考古学研究会関西例会第222回研究会（和歌山例会）、2020/11/28

「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」、2021/1/9

考古学研究会関西例会第223回研究会（滋賀例会）、2021/2/6

考古学研究会関西例会第224回研究会（兵庫例会）、2021/3/20

【2021年度】

考古学研究会関西例会第225回研究会（大阪例会）、2020/5/29

考古学研究会関西例会第226回研究会（京都例会）、2020/7/31

考古学研究会関西例会第227回研究会（奈良例会）、2020/9/25

考古学研究会関西例会第228回研究会（和歌山例会）、2021/12/4

「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」、2022/1/9

考古学研究会関西例会第229回研究会（滋賀例会）、2022/2/5

考古学研究会関西例会第230回研究会（兵庫例会）、2022/3/26

12. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 福永 伸哉 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学博士（大阪大学、2005年）。大阪大学埋蔵文化財調査室助手、大阪大学文学部助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授をへて、2005年より現職。専攻：日本考古学、比較考古学

1-1. 論文

福永伸哉「ヤマト政権の誕生と三角縁神獣鏡」『大分県立歴史博物館紀要』42, 大分県教育委員会, pp. 1-18, 2022/3

福永伸哉 「日本考古学と埋蔵文化財行政」『季刊考古学』158, 雄山閣, pp. 27-28, 2022/2

福永伸哉 「武寧王陵出土鏡の系譜と年代」『百済研究』74, 忠南大学校百済研究所, pp. 24-41, 2021/8

福永伸哉 「近畿地区文化財専門職説明会のオンライン開催と後継者育成」『考古学研究』68-1, 考古学研究会, pp. 22-25, 2021/6

福永伸哉 「大垣市東町田墳墓群からの着想」『昼飯の丘に集うー中井正幸さん還暦記念論集ー』(中井正幸さんの還暦をお祝いする会), pp. 161-170, 2021/3

福永伸哉 「近畿中部における弥生時代木棺の型式と展開」『柳本照男さん古稀記念論集ー忘年之交の考古学ー』(柳本照男さん古稀記念論集刊行会), pp. 23-32, 2020/12

福永伸哉 「世界遺産に登録された百舌鳥・古市古墳群」『古代文化』(古代学協会), 72-2, pp. 96-103, 2020/9

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

福永伸哉 「百舌鳥・古市古墳群ーその実像と歴史に迫るー」土木学会関西支部 2020FCC フォーラム, 土木学会関西支部, オンライン, 2020/12

福永伸哉 「王陵交流の考古学」公開講座王陵の比較研究, 忠南大学校百済研究所, 忠南大学校, オンライン, 2020/11

福永伸哉 「大学における人材育成と埋蔵文化財行政」令和2年度埋蔵文化財担当職員等講習会, 文化庁, オンライン, 2020/8

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

福永伸哉 大阪大学総長顕彰(2015年度), 大阪大学, 2015/6

福永伸哉 第19回濱田青陵賞, 岸和田市, 朝日新聞社, 2006/9

福永伸哉 大阪大学共通教育賞(2003年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2003/12

福永伸哉 第6回雄山閣考古学特別賞(編著書に対して), 雄山閣出版, 1997/9

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2019年度～2021年度、基盤研究(B) 一般、代表者:福永伸哉

課題番号:19H01339

研究題目:畿内の地域間関係の解明に基づくヤマト政権成立史の新理解

研究経費:2020年度 直接経費 3,800,000円 間接経費 1,140,000円

2021年度 直接経費 2,700,000円 間接経費 900,000円

研究の目的:

本研究の目的は以下の二つ。第一は、弥生後期～古墳前期の畿内内部の地域間関係を解明し、諸地域間の親疎関係の変動を見据えたダイナミックなヤマト政権成立過程と政権構造の新理解を提起すること。第二は、該期の畿内の墳丘墓・古墳・集落のネットワークを、地形及び三次元位置情報の観点から分析し、ネットワーク変動とヤマト政権成立史の相関関係を解明するとともに、これを近年世界的に活発になっている「景観考古学」の日本における研究成果として国際的に発信すること。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

鹿児島県鹿屋市岡崎古墳群検討委員会・委員, 2021年9月～現在に至る
独立行政法人日本学術振興会・第一段審査担当専門委員, 2021年7月～2022年3月
日本学術会議・連携委員, 2020年10月～現在に至る
北海道大学埋蔵文化財センター外部評価委員会・委員, 2020年11月～2021年3月
文部科学省科学研究費助成事業・審査意見書作成者, 2020年8月～2020年9月
独立行政法人日本学術振興会書面審査担当専門委員会・委員, 2020年7月～2021年3月
愛知県史跡断夫山古墳調査検討委員会・委員, 2020年7月～現在に至る
一般財団法人大阪市文化財協会・理事, 2020年6月～現在に至る
考古学研究会常任委員, 2020年4月～現在に至る
公益財団法人三菱財団人文科学選考委員会・委員, 2019年10月～現在に至る
文化庁技術審査会・委員, 2019年7月～2021年7月
百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産学術委員会・委員, 2019年4月～現在に至る
鹿児島県肝付町塚崎古墳群発掘調査指導委員会・委員, 2017年3月～現在に至る
三木市史通史編専門委員会・委員, 2016年12月～現在に至る
藤井寺市史跡古市古墳群整備検討委員会・委員, 2016年8月～現在に至る
羽曳野市史跡古市古墳群整備検討委員会・委員, 2016年8月～現在に至る
鹿児島県東串良町唐仁古墳群保存活用検討委員会・委員, 2016年6月～現在に至る
南あわじ市松帆銅鐸調査研究委員会・委員, 2016年5月～現在に至る
文化庁文化審議会文化財分科会第1専門調査会・委員, 2015年3月～現在に至る
文化庁文化審議会文化財分科会第3専門調査会・委員, 2015年3月～現在に至る
日本学術会議・会員, 2014年10月～2020年9月
高槻市史跡整備検討会・委員, 2014年4月～現在に至る
大阪大学接合科学研究所・共同研究員, 2013年7月～現在に至る
兵庫県立考古博物館運営委員会・委員, 2013年3月～現在に至る
桜井市纏向学研究センター・共同研究員, 2012年11月～現在に至る
百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議・委員, 2012年7月～現在に至る
桜井市纏向遺跡調査委員会・委員, 2011年10月～現在に至る
豊中市文化財審議委員会・委員, 2010年4月～現在に至る
考古調査士資格認定機構・資格審査専門委員, 2007年12月～現在に至る
川西市文化財審議委員会・委員, 2006年6月～現在に至る
大阪府立近つ飛鳥博物館運営協議会・委員, 2006年6月～現在に至る
考古学研究会関西例会・世話人, 1980年4月～現在に至る

2. 高橋 照彦 教授

1966年生。1992年京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。博士（文学）（京都大学、2014年）。国立歴史民俗博物館考古研究部助手、奈良国立博物館学芸課研究員を経て、2002年大阪大学大学院文学研究科助教授、2007年同准教授、2015年より現職。専攻：日本考古学、東アジア考古学

2-1. 論文

高橋照彦 「日本古代における国産施釉陶器と舶載陶磁器」『第48回古代城柵官衙遺跡検討会—資料集—』, 古代城跡官衙遺跡検討会, pp. 99-110, 2022/2

高橋照彦 「古代の編年研究と実年代をめぐる諸問題」『古代東国における年代定点資料の検討』, 東国古代遺跡研究会, pp. 57-70, 2022/2

高橋照彦 「平安時代における施釉陶器・須恵器の生産と流通—篠窯を中心に—」『考古学ジャーナル』761, ニューサイエンス社, pp. 35-39, 2021/11

高橋照彦 「尾張・美濃の平安期施釉陶器生産をめぐる2、3の問題」『京都府埋蔵文化財論集』8, 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター, pp. 317-326, 2021/8

高橋照彦 「史跡周防鋳銭司跡隣接地出土の緑釉陶器—東禅寺・黒山遺跡を対象に—」『山口大学山口学研究センター研究プロジェクト 古代テクノポリス山口 —その解明と地域資産創出を目指して— 研究報告書』, 山口大学山口学研究センター, pp. 120-140, 2021/3

高橋照彦 「摂津の古代寺院をめぐる—猪名川流域の寺院造営氏族—」『つどい』390, 豊中歴史同好会, pp. 1-8, 2020/12

高橋照彦 「近江における緑釉陶器生産の再検討」『待兼山論叢』54, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-26, 2020/12

2-2. 著書

石井清司, 市川創, 高橋照彦(共著) 『石作窯・小塩窯発掘調査報告—平安期緑釉陶器・緑釉瓦生産の多分野協働型研究—』, 古代学協会, pp. 97-114, 2020/6

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高橋照彦 「(書評)古尾谷知浩著『日本古代の手工業生産と建築生産』」『史學雑誌』130-12, 公益財団法人史学会, pp. 34-42, 2021/12

飯村均, 鈴木琢也, 関根達人, 高橋照彦ほか 「総合討論—(七月二〇日)—2019年度第47回大会—」『東洋陶磁』50, pp. 39-48, 2021/3

高橋照彦 「(書評と紹介)吉田恵二著『日本古代の窯業と社会』」『日本歴史』2020-12, 吉川弘文館, pp. 96-98, 2020/12

高橋照彦 「全国初 環状瓶に鳥の足」『新潟日報』, 新潟日報, p. 28, 2020/10

2-4. 口頭発表

高橋照彦 「古代の編年研究と実年代をめぐる諸問題」東国古代遺跡研究会第11回研究大会, 東国古代遺跡研究会, 国土館大学, オンライン, 2022/2

高橋照彦 「沖ノ島の奈良三彩」令和3年度世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群公開講座, 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会(福岡県九州国立博物館・世界遺産室), オンライン, 2021/8

高橋照彦 「大阪周辺の古代遺跡」大阪・京都文化講座「大阪・京都考古学最前線 2021」, 大阪大学大学院文学研究科・共創機構社会学共創部門, 立命館大学文学部, オンライン, 2021/2

2-5. 受賞歴 (年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況 (研究代表者となったもの)

2-6-1. 2019年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:高橋照彦

課題番号:19K01095

研究題目:平安時代の物資流通に関する多角的基礎研究—須恵器・施釉陶器・中国陶磁を中心に—

研究経費:2020年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2021年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

本研究は、日本の古代から中世への変容過程の解明を目指し、平安時代の考古学の側面から追究する。とりわけ物資流通の解

明に重点目標を置き、考古資料として残りやすい国産の須恵器や施釉陶器、中国産の陶磁器といった焼物を中心としつつも、焼物以外の物資も視野に納めて基礎研究を深める。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

豊中市今西氏屋敷史跡整備委員会・委員, 2016年4月～2022年3月

猪名川町多田銀銅山遺跡史跡整備委員会・委員, 2016年4月～2021年3月

奈良国立博物館買取協議会・委員, 2020年9月

九州国立博物館文化財買取評価会・委員, 2021年8月

京都国立博物館修理請負者選定委員会・委員, 2020年6月

京都府埋蔵文化財調査研究センター・理事, 2019年7月～現在に至る

東洋陶磁学会・常任委員, 2009年5月～現在に至る

史学研究会・評議員, 2005年11月～現在に至る

3. 上田 直弥 助教

1990年生。2018年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（考古学専攻）修了。博士（文学）（大阪大学、2018年）。

2018年4月より現職。専攻：考古学

3-1. 論文

上田直弥 「待兼山1号墳出土腕輪形石製品と待兼山周辺の前期古墳」『大阪大学埋蔵文化財調査室年報』6, pp. 28-33, 2022/3

上田直弥 「竪穴式石室における隅部処理様相の基礎的検討」『古代吉備』32, pp. 26-45, 2021/6

上田直弥 「総括」『弁天山 D4号墳整理成果報告書—埴輪・須恵器編—』高槻市, pp. 45-46, 2021/3

上田直弥 「墳墓構造からみた摂津前期古墳の特質」『つどい』387, 豊中歴史同好会, pp. 1-8, 2020/4

3-2. 著書

上田直弥 『大阪大学埋蔵文化財調査室年報6(上田直弥編集)』大阪大学埋蔵文化財調査委員会, pp.1-33, 38-40, 2022/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

上田直弥 「前期古墳における排水施設構造の基礎的検討—近畿・東北の比較を中心に—」科研基盤(B)「国家形成期におけるヤマト政権と地域権力の相互関係の再定義—東北地方を中心に—」第3回研究集会(zoom 会議), 一般、基盤研究(B)、20H01342、研究代表者:菊地 芳朗、2020s-2022s, オンライン, 2021/6

上田直弥 「考古学で“権力”はどこまで掘れるか—古墳時代石製品を中心に—」第2回「考古学」大勉強会—行為と構造—, 「考古学」大勉強会事務局, オンライン, 2020/10

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2021年度～2023年度、若手研究、代表者:上田直弥

課題番号:21K13135

研究題目:中期古墳における埋葬施設構造の多様性と規範性の推移とその歴史背景

研究経費:2021年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

古墳時代中期についての研究は、甲冑の精緻な型式学的検討や埴輪の系統分析などが近年特に盛んになっているが、一方で前期に比して埋葬施設が全国的に多様化する、その歴史背景については、規範の弛緩・消失期として大掴みにしか捉えられてこなかった。

そこで本研究では中期古墳をテーマとして、①政権中枢域における中期埋葬儀礼の実態解明、②畿内の埋葬施設の広域波及とその背景の分析、③葬制秩序において非畿内の埋葬施設が持つ意義の解明、の三つを柱とする分析を、埋葬施設の構築過程や細部構造の検討を通じて実施する。そして古墳時代後期における横穴式石室の全国展開を導いた要因とその歴史背景の解明を目指す。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

考古学研究会・常任委員, 2018年4月～現在に至る

2-11 人文地理学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 2 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：堤 研二、佐藤 廉也

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
29	6	2	0	0	0	1	0

*うち留学生1名、社会人学生0名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	8	0	1	0
2021	10	3	0	0
計	18	3	1	0

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、広い視野の中に自己の学習や研究を位置付けられるよう、講義・演習を構成することとし、卒業・修了時までには実社会で要請される基礎的スキルを習得できるよう講義・演習・論文発表などを配置することを目標とした。大学院においては、①能率的な研究の進行にむけて、研究計画の立案から指導すること、②GISなどデジタル処理手法の習得につとめさせ、その応用を推進すること、③TA・RAなどの機会を積極的に利用し、コミュニケーションや指導の能力を養成することなどを目標とした。学部においては、①人文地理学の基礎を、その応用を意識させつつ身につけさせること、②地図学、統計解析などの実習を通じて基礎的手法を習得させること、③卒業論文作成を機会に、企画からプレゼンテーションまで、総合的な能力の養成をはかる、ということなどを目標とした。

2. 研究

教員・大学院生は学会発表において研究成果の公表をおこなうとともに、国内・国外の審査つき学術誌・学術書等への投稿に努力し、あわせて紀要・報告書の執筆も推進することとし、教員全員が代表者として科学研究費補助金の申請をおこなうだけでなく、他の競争的外部資金の獲得にも努めるようにすることを目標とした。大学院生には、日本学術振興会の特別研究員への応募をすすめるほか、機会があれば、他の研究資金の獲得にも努めさせることとした。また、不断に研究室の設備・備品を点検し、研究環境の維持・改善に努力し、学内外の共同研究に積極的に参加し、研究の視野と可能性を拡大することなども目標とした。

3. 社会連携

研究成果に関する報道機関の取材、執筆依頼等には積極的に協力することとし、教室ならびに個人のHPを充実させ、研究成果や資料の公開に努めることを目標とした。また、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることとし、学会の研究グループ・研究ワークショップでの活動や博物館などの展示企画には積極的に参加し、研究成果の普及を図るよう努力することとした。さらに、放送大学教科書や文部科学省検定教科書を含め、研究成果を社会に還元する書物の刊行を、出版助成金などを得ながら積極的に推進することも目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

講義・演習では、基礎から先端、応用までの手法・スキルの習得を意識した教育をおこなった。大学院生の研究計画・研究報告については、通常の授業時間ではスケジュールや研究テーマの絞込みをはじめ、研究テーマに即した事項を中心にディスカッションを行い、年度の初めと終わりに演習で発表させ、指導するほか、学会発表や論文の執筆に際しても綿密な指導をおこなってきた。また、地域調査のスキルについては実地での経験を重視する教育をおこなった。

2. 研究

教員は、科学研究費での助成研究を続けつつ、研究を継続して実施し、国際学会・国際研究集会での発表をおこない、国内外での地域調査を実施した。また、院生は国内外の学会等における発表を実現した。教員による外部資金による獲得研究費の有効活用のほか、大学院生の日本学術振興会特別研究員への応募も積極的におこなっている。このほか、研究室の設備・備品は定期的に点検し、メンテナンスを実施するとともに、旧式化したものは更新している。学内外の共同研究にも積極的に参加してきている。目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

教室ならびに個人のHPでその公開に努めている。さらに日本地理学会、人文地理学会の代議員・理事など学外の職務にも積極的に応じた。放送大学における新規科目の開講や、文部科学省検定教科書(中学社会科・高校地理)の執筆など、学外の職務にも積極的に応じている。社会連携の目標についても十分に達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。卒業学生・修了大学院生以外の学生たちに関しても、種々の地理学的スキルや思考の基礎に関する授業その他の教育実践を行うことができた。掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・大学院生が学会発表をおこなうという目標はほぼ達成され、論文による成果発表も活発に行うことができた。前

記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	0	0	0
2021	1	0	1
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	1(1)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)
2021	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
計	2(2)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	3(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	0	3	0	0	0	3
2021	1	6	0	0	0	7
計	1	9	0	0	0	10

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2020年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

島田広之「和室と畳イメージの時代変化」『待兼山論叢』文化動態論篇第 54 号, pp.79-97, 2020/12/25

島田広之・田尾俊輔・小島晋一郎・中野将・岩泉達也「住民と大学院生の協働によるまちづくり活動の展開：島根県隠岐の島町での活動報告」『Co*Design』第 8 号, pp.49-74, 2020/8/31

【2021 年度】

〔博士前期〕

鈴木美佳「日本の都市部におけるシェアサイクル運営の課題」『地理学評論』第 94 巻第 3 号, pp.152-169, 査読有, 2020/05/
佐々木敏光「和歌山県椿山ダム建設にともなう水没移転者の人口移動研究」『地理学評論』第 94 巻第 3 号, pp.131-151,
査読有, 2020/05/

〔博士後期〕なし

(2)口頭発表

【2020 年度】

〔博士前期〕

鈴木美佳「高齢者の外出状況における地域間格差」, 日本地理学会 2021 年春季学術大会, オンライン開催 (ホスト校 : 東洋大学) , 2021/3/27

曹奕「地域格差からみた都市郊外地域の持続性について：近畿大都市圏を事例に」, 日本地理学会 2021 年春季学術大会, オンライン開催 (ホスト校 : 東洋大学) , 2021/3/28

〔博士後期〕

島田広之「大阪府における中古戸建て住宅の立地とその多様性」, 日本地理学会 2021 年春季学術大会, オンライン開催 (ホスト校 : 東洋大学) , 2021/3/28

【2021 年度】

〔学部生〕

松本健佑「地方選挙との同日選挙が国政選挙の投票率に与える影響の分析」, 日本地理学会 2023 年春季学術大会, 東京大学, オンライン, 2022/3/19

岩井祐太「医療機関の状況を考慮した医療アクセシビリティの分析」, 日本地理学会 2024 年春季学術大会, 東京大学, オンライン, 2022/3/19

横地夏海「Giving Bicycles and Educational Opportunities to Children in Cambodia」, International Seminar on “An International Seminar for Young Scholars for the Promotion of International Exchange” , 大阪大学, オンライン, 2022/2/18

〔博士前期〕

任 凌云「中国・陝北地方における 20 世紀中期以降の農牧業・土地利用の変化」, 日本地理学会 2022 年春季学術大会, 東京大学, オンライン, 2022/3/19

森田泰史「高等学校地理教育における地理情報の位置づけーその変遷と展望ー」, 日本地理学会春季学術大会, 東京大学, オンライン, 2022/3/20

曹奕「大都市圏郊外地域の類型の変遷とその要因ー関西大都市圏を事例としてー」, 日本地理学会春季学術大会, 東京大学, オンライン, 2022/3/21

〔博士後期〕

島田広之「大阪府における中古戸建て住宅の活用とその課題」, 日本地理学会春季学術大会, 東京大学, オンライン, 2022/3/21

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

【2021年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2021年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2021年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020年度～2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

小林基、博士後期課程修了、摂南大学外国語学部、特任講師(常勤)、2020/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020年度～2021年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2020年度: 0名 2021年度: 1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名

その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度: 0名 2021年度: 0名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 堤研二教授

1960年生。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士（九州大学、1986）・博士（文学）（九州大学、2009）。佐世保工業高等専門学校助手・講師、島根大学法文学部講師・助教授、大阪大学文学研究科助教授・准教授を経て、2009年11月より現職。地域地理科学学会賞（1997）、昭和シェル石油環境研究助成財団環境研究課題賞（2005）、大阪大学教育・研究功績賞（2006）、大阪大学 総長顕彰（研究部門）（2015）、大阪府スポーツ少年団功労者表彰（2016）。専攻：人文地理学、とくに社会経済地理学

1-1. 論文

堤研二 「日本の過疎地域と国土(人口×国土)」『土木学会誌』106-8, pp. 32-33, 2021/8

堤研二 「プラネタリー・アーバナイゼーション研究が拓く新地平—ルフェーブルの再降臨—(書評:平田周・仙波希望編:『惑星都市理論』、2021年、以文社)』『読書人』3398, pp. 4-4, 2021/7

堤研二 「人文地理学から見た計量分析と考古学の分析科学性:「考古学方法論研究会」と神庭荒神谷遺跡出土銅剣をめぐって」『持続する志:岩永省三先生退職記念論文集』(岩永省三先生退職記念事業会), 下, 中国書店, pp. 855-872, 2021/3

Tsutsumi, Kenji, "Posturbanity" *The International Encyclopedia of Geography: People, the Earth, Environment, and Technology*, (The American Association of Geographers), Wiley Blackwell, pp. 1-6, 2021/3

堤研二 「基礎生存諸機能思想とその応用:ドイツ社会地理学ミュンヘン学派の遺産」『待兼山論叢 日本学篇』(大阪大学文学会), 54, 大阪大学文学研究科, pp. 31-46, 2020/12

Tsutsumi, Kenji, "Introduction—The Trajectory of the Mountainous Area Research and the Book's Perspective" *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 1-12, 2020/11

Tsutsumi, Kenji, "Depopulation as a Regional Problem and Reality of Depopulation" *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 17-58, 2020/11

Tsutsumi, Kenji, "Analysis of Population Migration from the Depopulated Mountain Village—A Case of Kamitsue Village in Oita Prefecture" *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 59-104, 2020/11

Tsutsumi, Kenji, "Regional Living Functions in Depopulated Settlements in Shimane Prefecture" *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 107-152, 2020/11

Tsutsumi, Kenji, "Regional Living Functions and IT Support" *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 153-181, 2020/11

Tsutsumi, Kenji, "Social Capital and Living Environment of Rural Villages" *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 187-208, 2020/11

Tsutsumi, Kenji, "Reformation of a Settlement Forced to Move for the Construction of a Dam—The Case of Tsukinoya, a Settlement in Kisuki Town, Un'nan City, Shimane Prefecture" *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 209-222, 2020/11

Tsutsumi, Kenji, "Formation of a Community by Hometown Organizations that Promote Interactions among Residents in Urban and Rural Areas—Activities by Furusato Chikara, a NPO Created by Residents in the Kinki Region and the Case of the Miyoshi Region in Tokushima Prefecture" *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 223-235, 2020/11

Tsutsumi, Kenji, "Social Movements and Social Capital in Senri New Town" *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 237-251, 2020/11

Tsutsumi, Kenji, "Peripheral Regions in the Era of Regional Crisis, Society 5.0, the Postpandemic and the Posturban—A Concluding and Additional Chapter for the English Edition" *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 253-268, 2020/11

1-2. 著書

堤研二, 伊藤勝久, 井上憲一他(共著)『農山村のオルタナティブ』日本林業調査協会, pp. 247-267, 2021/9

Tsutsumi, Kenji, *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, 290p., 2020/11

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

堤研二 「ネオソサエティ時代の地域生活機能と防災—人文地理学の視点から—」第2回大阪大学社会ソリューションイニシアティブ地域・まちづくりフォーラム—「新たな防災」から命を大切にす未来社会を考える—, 大阪大学社会ソリューションイニシアティブ, 大阪大学, オンライン, 2022/2

堤研二 「エネルギー産業がもたらした地域社会の形成と変動—三池炭鉱・高島炭鉱の事例—」大阪大学大学院工学研究科 テクノアリーナ フォーラム「エネルギーバリューチェーンと社会のしくみ」, 大阪大学工学研究科, 大阪大学, 吹田キャンパス大阪大学大学院工学研究科センテラスサロン(ハイブリッド), 2022/1

堤研二 "Neo-society, planetary urbanization and regional sustainability: An ideal examination thinking of "smartness" in rural Japan" The 1st Conference on Asian Inclusive Smart Cities in the Post Covid 19 Arena, AISC, ERIA, Kyoto University, Online, 2021/11

堤研二 「地域アイデンティティ論 木津川市編」タウン・アセット・マネジメント講座, 日本アセットマネジメント協会, 京都大学, オンライン, 2021/7

堤研二 「地域アイデンティティについて」スマートシティ研究会, AISC, 京都大学, オンライン, 2021/6

堤研二 「地域アイデンティティ論 基礎(前編・後編)」タウン・アセット・マネジメント講座, 日本アセットマネジメント協会, 京都大学, オンライン, 2021/6

堤研二 (招待講演)「北大阪:新時代における千里・梅田・新大阪の諸相」大阪・京都文化講座オンライン(2021年度後期 立命館プロムナードセミナー):「大阪・京都<名所図会>」(第8回), 大阪大学文学研究科・立命館大学文学部, 大阪大学・オンライン, 2020/11

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 大阪大学総長顕彰(研究部門), 国立大学法人大阪大学, 2015/7

堤研二 市民スポーツ・レクリエーション指導者表彰, 豊中市民体育振興協議会, 2012/10

堤研二 国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 国立大学法人大阪大学, 2006/2

堤研二 昭和シェル石油環境研究課題賞, 昭和シェル石油環境研究助成財団, 2005/9

堤研二 地域地理学会賞, 地域地理学会, 1997/7

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2020年度~2022年度、挑戦的(開拓・萌芽)研究、代表者:堤研二
課題番号:20K20725

研究題目:日本における空間秩序・基礎生存諸機能概念の地域計画への影響とその実践的応用

研究経費:2020年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円
2021年度 直接経費 1,900,000円 間接経費 570,000円

研究の目的:

20世紀のドイツの国土計画・地域計画において重視された「空間秩序」の概念は、戦中期日本の企画院等の国土再編成案に影響を与えたと推測される。また、空間秩序の考えを基本にしつつ、ミュンヘン学派ドイツ社会地理学が創案した「基礎生存諸機能」の概念は、ドイツにおける地域計画や地理教育の中で活かされてきた。これらについては日本における研究が進んでいない。本研究では、①空間秩序と基礎生存諸機能の概念を整理し、②それらが如何に日本の企画院等に影響を与えたのかを明らかにする。また、③ケルン貨物駅跡再開発などを対象として、日本の事例との比較を通じて、国土計画・地域計画に関する思想・手法の日欧での異同を検討する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・理事, 2020年11月～現在に至る

日本地理学会・代議員, 2020年4月～2022年3月

Marginal Areas Research Group・代表, 2019年6月～現在に至る

2. 佐藤 廉也 教授

1967年東京都生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程(地理学専修)中退。博士(文学)(京都大学、1999年)。京都大学総合博物館助手、九州大学大学院比較社会文化研究院助教授(准教授)を経て、2015年4月より現職。専攻:人文地理学

2-1. 論文

佐藤廉也「人に密着し、人を結ぶ栗本さんのフィールドワーク」『サバンナの彼方—栗本英世教授退職記念文集』能登印刷出版部, pp. 356-361, 2022/3

佐藤廉也「英語圏における焼畑研究の動向に関するノート—2014-2021年の論文を中心に—」『待兼山論叢日本学篇』55, 大阪大学文学研究科, pp. 1-18, 2021/12

佐藤廉也「森と人の100年—エチオピアにおける森と焼畑の持続と変容—」『季刊民族学』177, 公益財団法人千里文化財団, pp. 58-63, 2021/7

佐藤廉也「森の知識の獲得プロセス—エスノサイエンスと文化進化—」『岩永省三先生退職記念論文集 持続する志(下)』中国書店, pp. 833-853, 2021/3

佐藤廉也「森の知識は生涯を通じていかに獲得されるのか—エチオピア南西部の焼畑民における植物知識の性・年齢差—」『地理学評論』(日本地理学会), 93-5, pp. 351-371, 2020/9

2-2. 著書

佐藤廉也, 宮澤仁(共編著)『人文地理学からみる世界』放送大学教育振興会, pp. 3-4, 9-24; 41-72; 235-249, 2022/3

佐藤廉也, 松原宏, 泉貴久他『地理総合(文部科学省検定済教科書)』東京書籍, pp.58-67, 108-109; 114-115; 150-153; 166-167, 2022/2

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

佐藤廉也 「高校地理教科書の焼畑に関する誤記述—改善に向けて—」日本学術会議地理教育分科会, 日本学術会議, オンライン, 2021/9

佐藤廉也 「Aerial Photographic Films Archived at US National Archives, Records and Administration at College Park (NARA Archives II): Where, When and How Many Were They Photographed?」International Geographical Congress, International Geographical Union, Online, 2021/8

佐藤廉也 「焼畑民は生涯どれだけ移住するのか?」2021年人口学会大会, 日本人口学会, 東京大学(オンライン), 2021/6

佐藤廉也 「文化地理学は学問の総合性を取り戻せるか?」2020年日本地理学会秋季学術大会, 日本地理学会, オンライン, 2020/11

佐藤廉也 「ラオス南部における焼畑民の食料獲得戦略—食事日誌の副食材料データ分析から—」2020年人文地理学会大会, 人文地理学会, 京都大学(オンライン), 2020/11

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

佐藤廉也 日本地理学会賞(優秀論文部門), 日本地理学会, 2022/3

佐藤廉也 日本ナイル・エチオピア学会高島賞, 日本ナイル・エチオピア学会, 2000/4

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2018年度～2021年度、挑戦的(開拓・萌芽)研究、代表者:佐藤廉也

課題番号:18K18539

研究題目:系統解析手法を用いた知識の伝達・継承・変容・拡散に関する実証的研究

研究経費:2020年度 直接経費 1,700,000円 間接経費 510,000円

2021年度 直接経費 0円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究の目的は、小規模な生業社会に生きる人びとを対象として、人びとの生きる糧である文化(知識・技術)の伝達・継承・変容・拡散のパターンを、生物遺伝学の系統解析で用いられる統計学的方法を応用することによって実証的に明らかにすることである。知識・技術の拡散やイノベーションの実態は、その複雑性やデータ収集の困難さの故に、そのメカニズムを定量的に捉えることが難しい研究課題であった。本研究は、文化を人から人へと伝達・継承される情報ととらえ、個人および集団の持つ知識のバリエーションをデータとして、生物学における系統解析の手法を応用することによって、個々の文化要素の伝達・変容・拡散に「親から子への垂直的伝達」「地理的近接性に基づく水平的伝達」「生態学的要因による適応的選択」という、異なる伝達経路がそれぞれの程度寄与しているのかを具体的に明らかにする。本研究は、生物学における系統解析と検定的手法(近隣結合法、最大節約法、最尤法を主とする)を文化(知識・技術の拡散)研究に応用しようとするものであり、文化動態の研究においてより計量的かつ汎用的な手法を確立するための突破口と位置づけ得る挑戦的課題である。(2021年度末まで期間延長)

2-6-2. 2020年度～2024年度、基盤研究(A) 一般、代表者:佐藤廉也

課題番号:20H00046

研究題目:20世紀中期以降における焼畑と熱帯林の変容メカニズムの地域間比較研究

研究経費:2020年度 直接経費 6,600,000円 間接経費 1,980,000円

2021年度 直接経費 5,200,000円 間接経費 1,560,000円

研究の目的:

本研究は、様々な要因によって変容しながらも現在まで熱帯各地で行われている焼畑農耕を、「熱帯林への人為的インパクト」のフロンティアとしてとらえ、熱帯林の減少が人類史上最も顕著に進んだとされる20世紀中期から現在に至る時期の、アフリカ、

東南アジアおよび中南米の各地域における、焼畑と熱帯林の変化と持続の動態を把握し、地域ごとに異なる焼畑と熱帯林の変容とその生態的・社会経済的インパクトを解明することによって、熱帯環境史研究および将来の有効な熱帯林の保全・管理指針の形成に貢献しようとするものである。熱帯林の減少が地球環境問題として注目されるに至った 1980 年代から現在までに、熱帯の焼畑に関する事例研究論文は少なくとも 400 報を超える。本研究は(1)これらの論文を地域別に集成して焼畑の変容と持続に関するメタ分析を行い(2)1940-60年代の空中写真を用いた土地被覆復原によって現在に至るまでの変容を定量的に把握し(3)熱帯各地で研究を継続してきた研究代表者・分担者がフィールド研究を通じて焼畑と熱帯林の変容・持続を解明する各作業を通して、グローバルな熱帯林と人間活動との長期的関係を実証的に明らかにするものである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・選挙管理委員長, 2020年3月～2020年11月

人文地理学会・代議員, 2018年11月～現在に至る

日本地理学会・編集委員, 2018年3月～2022年3月

人文地理学会・理事, 2016年4月～2020年11月

日本ナイル・エチオピア学会・評議員, 2015年4月～現在に至る

2-12 日本文学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 3 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：飯倉 洋一、滝川 幸司、斎藤 理生

准教授：勢田 道生、渡邊 英理

助教：尹 芷汐

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
64	20	15	0	0	1	2	1

*うち留学生7名、社会人学生0名

**日本文学・国語学専修として

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	30	7	0	2
2021	22	9	0	5
計	52	16	0	7

*日本文学・国語学専修として

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、学問的な連携体制を形成するために、学部・大学院共通の講義を設定し、また学部演習への大学院生の参加を促している。日本文学には留学生も多数在籍しており、TA・RAの機会を与えることで、コミュニケーションや教育指導の能力を高めることにも努めている。大学院においては、①修士・博士論文作成演習の授業に連動して、学会発表、投稿論文作成等のための個別指導を行い、院生が研究進捗状況を報告・発表しあう研究発表会を開催する、②専門機関の採用情報等の入手につとめ、専門職への就職を積極的に支援する、また日本学術振興会特別研究員(PD/DC2/DC1)に関する学生への情報提供とともに、積極的な応募を促す、③『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』など、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促す。また研究分野に関連する学会での口頭発表や学会誌への投稿を促す、などを目標とした。学部においては、①卒業論文作成演習の授業に連動して、個別指導

を行うほか、卒業論文中間発表会を開き、学生の卒業論文完成に導く、②日本文学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知するとともに参加を促す、③『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』など、学内・研究室で発行している雑誌への投稿を促す。また研究分野に関連する学会での口頭発表や学会誌への投稿を促す、などを目標とした。

2. 研究

教員は科学研究費補助金を中心とした競争的外部資金の獲得に努め、継続中の科学研究費および諸プロジェクトに関わる研究を行う。また学生・卒業生・修了生とともに研究活動を促進するために、「大阪大学国語国文学会」を開催し、学会機関誌『語文』を刊行する。教員および大学院生を中心とした研究会活動として、「大阪大学古代中世文学研究会」「大阪大学近代文学研究会」「上方読本を読む会」ほかの研究会活動を行い、合わせて研究誌『詞林』『阪大近代文学研究』を刊行し、国内外の関係者・機関に送付することなどを目標とした。

3. 社会連携

所蔵保管資料の社会的活用を図るため、各方面からの閲覧複写依頼に応じ、資料の一部を年 1 回解題を付して展示公開し、またウェブ上で画像データベースとして公開することを目標とした。そのほかにも、懐徳堂記念会による「懐徳堂古典講座」など、一般の方を対象とする講座から派遣依頼のあった場合、あるいは高校教員の国語研究会や高校生を対象とする講座からの講師派遣依頼などにも積極的に対応する、などを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

【2020 年度】

授業形態においては、学部・大学院共通の講義を設定し、学部演習への大学院生の参加を促した。論文作成のための演習授業に加え、7 月、11 月に院生発表会を、10 月に修士論文・卒業論文中間発表会を行い、卒業・修士・博士論文執筆に向けての指導を行った。また学会発表・投稿論文作成のための個別指導も発表会とは別に行った。

『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』などの、学内・研究室で発行している雑誌への投稿を促した結果、学会誌等も含めて 17 本の論文が掲載され、学会・研究会での研究発表も 23 本を数えるという状況にある。

【2021 年度】

授業形態においては、学部・大学院共通の講義を設定し、学部演習への大学院生の参加を促した。論文作成のための演習授業に加え、7 月、11 月に院生発表会を、10 月に修士論文・卒業論文中間発表会を行い、卒業・修士・博士論文執筆に向けての指導を行った。また学会発表・投稿論文作成のための個別指導も発表会とは別に行った。

『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』などの、学内・研究室で発行している雑誌への投稿を促した結果、学会誌等も含めて 13 本の論文が掲載され、学会・研究会での研究発表も 29 本を数えるという状況にある。

2. 研究

【2020 年度】

科研費による研究プロジェクトとしては「近世中期の有職家・神道家をめぐる学芸ネットワークの研究—神村正鄰を中心に—」(2016～)、「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉」(2017～)、「1940 年代の新聞における文芸欄の基礎的研究」(2017～)等を行った。

2021 年 1 月に「大阪大学国語国文学会」を開催し、機関誌『語文』114 輯(2020 年 6 月)、115 輯(2020 年 12 月)を刊行した。また詳細は 10 の研究会開催の状況を参照していただきたいが、各研究会も活発に開催され、研究誌である『詞

林』67号(2020年4月)・67号(2020年10月)、『阪大近代文学研究』19号(2021年3月)を刊行した。

【2021年度】

科研費による研究プロジェクトとしては「近世中期の有職家・神道家をめぐる学芸ネットワークの研究—神村正鄰を中心に—」(2016～)、「1940年代の新聞における文芸欄の基礎的研究」(2017～)、「日本古代の大学の学問に関する基礎的研究—9、10世紀の大学寮紀伝道を中心に—」(2021～)等を行った。

2021年1月に「大阪大学国語国文学会」を開催し、機関誌『語文』116、117合併輯(2022年3月)を刊行した。また詳細は10の研究会開催の状況を参照していただきたいが、各研究会も活発に開催され、研究誌である『詞林』69号(2021年4月)・70号(2021年11月)、『阪大近代文学研究』20号(2022年3月)を刊行した。

3. 社会連携

【2020年度】

NPO 法人高齢者大学校「もっと知りたい大阪の歴史科」(9月：斎藤)、大阪府北部コミュニティカレッジ「太宰治『人間失格』を読み直す—大庭葉蔵の手記のくふう」(9月：斎藤)、「織田作之助～『木の都』」(11月：斎藤)、奈良県国語文化会「漢詩文を読むということ」(12月：滝川)、毎日文化センター「織田作之助の文学」(1月：斎藤)、「太宰治と織田作之助—「無頼派」の作家たち」(3月：斎藤)

【2021年度】

毎日文化センター「桜桃忌に『桜桃』を読む」(6月：斎藤)、京都アスニーセミナー「菅原道真が描く女性—かぼそき舞姫—」(8月：滝川)、「府民講座「小説家、織田作之助」(9月：斎藤)、織田作まつり「オダサク、太宰、それぞれの西鶴」(10月：斎藤)、京都女子大学国文学科公開講座「漢文を読むということ—申文の文体を中心に—」(滝川：10月)、群馬県立土屋文明記念文学館「太宰治の笑いの方法」(11月：斎藤)、大阪北部コミュニティカレッジ「織田作之助の作品と将棋」織田作之助～『夫婦善哉』(12月：斎藤)、毎日文化センター「善哉忌に『夫婦善哉』を読む」(1月：斎藤)、茨木市立川端康成文学館「新聞小説小史—戦中・戦後を中心に」(3月：斎藤)

IV. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

活動の概要の項、前掲の「修了生・卒業生」の実績および後掲の「大学院生等による論文発表等」の項にまとめたところからすれば、当初の目標を概ね達成できていると思われる。

2. 研究

科研費を中心とした各種の研究プロジェクトは順調に遂行され、また教員および大学院生による研究成果も着実に積み上げられており、目標は充分達成できていると判断してよいと思われる。

3. 社会連携

活動の概要の項にその実績をまとめたが、社会連携の目標についても十分に達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	2	0	2

2021	5	1	6
計	7	1	8

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

川崎剛志「修験の縁起の研究—正統な起源と歴史の創出と受容—」(2021.10)

主査：飯倉洋一 副査：滝川幸司・荒木浩

蒲姣艶「古今集時代における新歌材の形成」(2022.2)

主査：滝川幸司 副査：飯倉洋一・斎藤理生

金香花「芥川龍之介と精神医学—後期の作品における〈怪異〉の表現をめぐる—」(2022.2)

主査：飯倉洋一 副査：滝川幸司・鈴木暁世・渡邊英理

小林理正「『狭衣物語』本文の研究」(2022.2)

主査：滝川幸司 副査：飯倉洋一・岡島昭浩

岡部祐佳「近世艶書文芸の研究—女子教育との関わりを中心に—」(2022.2)

主査：飯倉洋一 副査：滝川幸司・岡島昭浩

金智慧「明治期歌舞伎の研究—懐古・改造・古典化をめぐる—」(2022.2)

主査：飯倉洋一 副査：滝川幸司・中尾薫

アブラル・バスィル「永井荷風の創作手法—登場人物による〈物語〉の創造を中心に—」(2021.3)

主査：斎藤理生 副査：飯倉洋一・滝川幸司

小田桐 ジェイク「太宰治の作品像及び作家像の研究—序跋文と自作再提示を中心に—」(2021.3)

主査：斎藤理生 副査：飯倉洋一・滝川幸司

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	6(6)	10(2)	0(0)	0(0)	1(1)	17(9)
2021	4(3)	7(2)	1(0)	1(0)	0(0)	13(5)
計	10(9)	17(4)	1(0)	1(0)	1(1)	30(14)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	2	8	9	0	4	23
2021	1	11	14	0	3	29
計	3	19	23	0	7	52

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020 年度】

〔博士前期〕

飯田実花『『源氏物語』若菜下巻不審本文について—人物呼称「大宮」の観点から—』『第 68 号, pp.21-31, 査読無, 2020/10/20

〔博士後期〕

岡部祐佳「瀬川采女説話の受容と展開—妻・菊の貞女性を中心に—」『近世文藝』第 112 号, pp.1-12, 査読有, 2020/7/15

岡部祐佳「享保期艶書小説の当代性—『当流雲のかけはし』とその周辺—」『上智大学国文学論集』第 54 号, pp.37-54, 査読有, 2021/1/18

武久真士「詩の語りについての試論—中原中也の詩を中心に—」『論潮』第 13 号, pp.14-27, 査読無, 2020/7/1

武久真士「中原中也の「旋回」する詩—「個」と「全」の一致に注目して—」『中原中也研究』第 25 号, pp.121-132, 査読有, 2020/8/30

レッキー・リチャード・ウィリアム「平林初之輔の探偵小説と〈社会性〉—「犠牲者」を中心に—」『比較文学』第 63 号, pp.38-51, 査読有, 2021/3/31

小林理正「大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』巻四・翻刻と解題（下）」『詞林』第 67 号, pp.1-39, 査読無, 2020/4/20

アブラル・バスィル「永井荷風『瀧東綺譚』論—大江の「瀧東綺譚」を手がかりに—」『待兼山論叢 文学篇』第 54 号, pp.1-18, 査読無, 2020/12/25

アブラル・バスィル「永井荷風『浮沈』論—「町の女」の造型と役割—」『阪大近代文学研究』第 19 号, pp.53-67, 査読無, 2021/3/30

小田桐ジェイク「無題序文における自己宣伝の機能——太宰治の作品集『思ひ出』を中心に—」『阪大近代文学研究』第 19 号, pp.37-52, 査読無, 2021/3/30

尹美羅「志賀直哉「或る男、其姉の死」の表現構造—芳三の語りを中心に—」『阪大近代文学研究』第 19 号, pp.1-16, 査読無, 2021/3/30

小田桐ジェイク「太宰治の初期作品『思ひ出』のリパッケージ—自作引用・言及の方法—」『Future Japanology』第 1 号, pp.45-49, 査読無, 2020/5/1

アブラル・バスィル「永井荷風「新橋夜話」における〈花柳界〉の二重性—「不正暗黒の巷」と「幸福」の甘受—」『語文』第 114 号, pp.43-55, 査読有, 2020/8/31

金智慧「「夢物語盧生容画」考—明治歌舞伎の〈改良〉と〈懐古〉—」『演劇学論集 日本演劇学会紀要』第 70 号, pp.91-108, 査読有, 2020/06/15

金智慧「福地桜痴作「十二時會稽曾我」考—演劇改良への実践的試み—」『語文』第 114 号, pp.27-41, 査読有, 2020/8/31

黄鶯「柏木如亭の拗体詩—韻律重視と自己表出—」『語文』第 115 号, pp.35-48, 査読有, 2020/12/10

小田桐ジェイク「太宰治の作品集『愛と美について』の道程—作品集の変形と序文を中心に—」『越境文化研究イニシアティブ論集』第 4 号, pp.33-46, 査読有, 2021/3/31

【2021 年度】

〔博士前期〕

川渕紗佳『『雨夜談抄』考—宗祇の『源氏物語』注釈態度を中心に—』『詞林』第 69 号, pp.49-64, 査読無, 2021/4/20

飯田実花「光源氏所有邸第における「院」呼称—『源氏物語』の邸第呼称法則—」『詞林』第 70 号, pp.27-42, 査読無, 2021/11/20

〔博士後期〕

黄夢鶴「定家『文集百首』における句題の取捨態度」『詞林』第 70 号, pp.43-54, 査読無, 2021/11/20

岡部祐佳「書簡体小説の魅力と「読み」の可能性」『読まなければならぬ—いまから古典を〈読む〉ために—』, pp.155-168, 査読無, 2021/11/1

岡部祐佳『『当流雲のかけはし』の教訓性と娯楽性—おそなと腰元に着目して—』『上智大学国文学論集』第 55 号, pp.19-35, 査読有, 2022/1/1

- 岡部祐佳「赤木文庫蔵『阿弥陀胸割』の柳亭種彦識語に関する一考察」『上方文藝研究』第18・19合併号, pp.58-63, 査読無, 2022/2/1
- 岡部祐佳「宝暦期艶書小説の展開—『新にしき木物語』の再検討をとおして—」『語文』第116・117号, pp.28-40, 査読無, 2022年3月
- 小林理正「『狭衣物語』出典未詳表現覚書—「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」を取りあげて—」『詞林』第69巻, pp.39-48, 査読無, 2021/4/20
- 小林理正「「水のしら浪なる御有さま」考—『狭衣物語』(巻四)の本文分析—」『待兼山論叢』第55号, pp.43-58, 査読無, 2021/12/25
- 武久真士「中原中也詩における運動性—定型性と〈ずれ〉に注目して」『阪大近代文学研究』第20号, pp.17-33, 査読有, 2022/3/31
- 黄鶯「江戸時代における漢詩の失律に関する認識」『上方文藝研究』第18・19合併号, pp.134-148, 査読有, 2022/2/1
- 小西洋子「追善願文の書式と願主—『本朝文粹』所収「花山院卅九日御願文」と「為二品長公主卅九日願文」を巡って—」『和漢比較文学』第68号, pp.2頁-18頁, 査読有, 2022/03 (見込み)
- レッキー・リチャード・ウィリアム「葉山嘉樹「死屍を食ふ男」論—豊津、怪談、乱歩」『阪大近代文学研究』第20号, pp.1-16, 査読有, 2022/3/31

(2)口頭発表

【2020年度】

〔博士前期〕

- 李 俊甫「上方絵本『絵本太平広記』の創作方法」, 大阪大学文学研究科若手研究者フォーラム, 大阪大学文学研究科, ハイブリッド, 2020/9/28
- 李 俊甫「武者絵本の版下本—蘭徳齋画『大中記』について—」, 絵入本ワークショップXII, 大阪大学文学研究科, オンライン, 2020/9/19
- 李 俊甫「On the Bibliography Information and the Reference to Akahon in Kurohon “Zentaiheiki” by Torii Kiyonobu」, 11th Research Showcase in Japanese Literature and History, 大阪大学文学研究科, オンライン, 2020/7/11
- 川渕紗佳「古注釈から見る『源氏物語』の創られ方—注釈姿勢の変化との関連—」, 第306回古代中世文学研究会, オンライン, 2020/10/10
- 川渕紗佳「『雨夜談抄』の位置づけ—注釈姿勢は何故変化したのか—」, 中古文学会関西部会第57回例会, オンライン, 2020/11/7
- 川渕紗佳「『源氏物語』帯木巻の享受—鎌倉・室町期の源氏学—」, 第3回若手研究者フォーラム, 大阪大学, オンライン, 2021/3/13
- 飯田実花「『源氏物語』の「三条宮」—高位な皇女の邸第として—」, 第309回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, オンライン, 2021/2/13
- 飯田実花「『源氏物語』における邸宅呼称「院」「宮」「殿」」, 第3回若手研究者フォーラム, 大阪大学, オンライン, 2021/3/13
- 大西萌木「谷崎潤一郎『細雪』論—「家」の視点から—」, 第3回若手研究者フォーラム, 大阪大学, オンライン, 2021/3/13
- 〔博士後期〕
- 金智慧 (KIM JIHYE)「追善公演の歴史とその意味」, 2020年度歌舞伎学会秋季大会, オンライン, 2020/12/12
- 金智慧 (KIM JIHYE)「名所の形成と名所イメージの構築—『平家物語』の築島伝説を手掛かりに—」, 国際研究集会「名所」の形成とデジタル文学地図, オンライン, 2020/12/12
- 金智慧 (KIM JIHYE)「Ichikawa Danjūrō IX and Canonization in Meiji Kabuki」, 11th 日本文学・日本史 Research

Showcase, オンライン, 2020/7/11

岡部祐佳『『当流雲のかけはし』の和歌について—典拠と利用法を中心に—』, 京都近世小説研究会九月例会, オンライン, 2020/9/26

岡部祐佳『『撰津名所図会』における名所形成と近世演劇—「逆櫓松」「朝日神明宮」を例として—』, 2020年度文学研究科国際共同研究力向上推進プログラム「デジタル文学地図の構築と日本文化研究・教育への貢献」主催 国際研究集会「名所」の形成とデジタル文学地図, オンライン, 2020/12/12

黄 夢鶴「『Poetic Friendship in Kudai-waka: Comparing the Worlds of Chinese Poetry and Waka』」, 11th Research Showcase—Historians' Workshop, オンライン, 2020/7/11

黄 夢鶴『『内裏詩歌合』における漢詩の詠法—句題詩の詠法をふまえて—』, 第308回大阪大学古代中世文学研究会, オンライン, 2021/1/23

武久真士「Nakahara Chuya: A Short History of Japanese Fixed Verse in the 1930s」, 11th Research Showcase in Japanese Literature and History, オンライン, 2020/7/11

後藤京「大江千里作『句題和歌』の位置づけ—日本と中国の「序」と「表」を手がかりに—」, 大阪大学古代中世文学研究会3月例会, 大阪大学(とzoom), オンライン, 2021/3/6

レッキー・リチャード・ウィリアム「村山知義「巴里」論—アヴァンギャルドと「変態性欲」」, 令和3年度大阪大学国語国文学会総会, 大阪大学, オンライン, 2021/1/9

蒲こう艶「『くれなみの涙』をめぐる—考察—古今集時代を中心に—」, 第309回大阪大学古代中世文学研究会, オンライン, 2021/2/13

蒲こう艶「『くはなすすきと袖』の構図形成を巡る—考察—」, 2021年度大阪大学国語国文学会, オンライン, 2021/1/9

小田桐ジェイク「オンラインによる演劇的手法を用いた異文化コミュニケーション国際共修授業の実践報告」, 大阪大学第5回豊中知育研究交流会, 大阪大学, オンライン, 2020/12/17

小田桐ジェイク「点を繋いで、星座のような形をつくる—出版史研究とグローバル日本研究を考える」, 大阪大学大学院文学研究科 グローバル・ジャパン・スタディーズ リサーチ・ワークショップ, 大阪大学文学研究科 本館、大会議室, ハイブリッド, 2021/3/5

【2021年度】

〔博士前期〕

飯田実花『『源氏物語』の邸第呼称と本文享受—鈴虫巻「かの三条の宮」を例として—』, 大阪大学古代中世文学研究会第314回例会, 大阪大学, オンライン, 2021/7/10

飯田実花『『源氏物語』鈴虫巻の不審本文「かの三条の宮」』, 中古文学会関西部会第59回例会, 立命館大学, オンライン, 2021/9/4

川渕紗佳『『雨夜談抄』人物比定の再検討』, 第311回古代中世文学研究会, オンライン, 2021/4/10

川渕紗佳『『種玉編次抄』の注釈態度—呼称不審問題を中心に—』, 第316回古代中世文学研究会, 大阪大学大会議室, ハイブリッド(両方), 2021/10/30

楊櫓『『扶桑集』における隠逸についての考察—「山無隠」を中心に—』, 大阪大学古代中世文学研究会第317回例会, 大阪大学, オンライン, 2022/3/26

柴田悠帆『『未来記』との比較による『天狗の内裏』の位置づけ—「鞍馬天狗伝説」を軸として—』, 第312回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, オンライン, 2021/5/8

松本成葉「式子内親王歌の同時代的視点—「正治初度百首」を中心に—」, 第4回若手研究者フォーラム, 大阪大学豊中キャンパス, ハイブリッド(両方), 2021/9/15

〔博士後期〕

北島紬「俊頼朝臣女子達歌合の意義—忠通家歌合への展開—」, 第313回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, オンライン, 2021/6/19

- 黄夢鶴『和漢名所詩歌合』について」, 第 315 回大阪大学古代中世文学研究会, オンライン, 2021/9/11
- 黄夢鶴『和漢名所詩歌合』における名所」, デジタル文学地図国際研究集会, オンライン, 2021/9/25
- 黄夢鶴「Two Poetries Facing Each Other: Communication between Japanese Poetry and Chinese Poetry in Premodern Japanese Literature」, 第 4 回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studies, 大阪大学・豊中キャンパス, 対面, 2022/1/8
- 岡部祐佳「享保期艶書小説の教訓性とその背景—『当流雲のかけはし』を中心に—」, 上智大学国文学会 2021 年度夏季大会, オンライン, 2021/7/10
- 岡部祐佳『新にしき木物語』の再検討—結末部分と挿絵に着目して—」, 京都近世小説研究会 9 月例会, オンライン, 2021/9/18
- 服部峰大「『ざしき童子のはなし』に描かれた「郷土」—都会への眼差し—」, 日本近代文学会二〇二一年度春季大会, オンライン, 2021/5/23
- 服部峰大「宮沢賢治『雪渡り』の力学—人と狐の位相—」, 令和四年度大阪大学国語国文学会, オンライン, 2022/1/8
- 小林理正「深川本狭衣物語（巻一）の本文と「同系他本」」, 第 314 回大阪大学古代中世文学研究会, オンライン, 2021/7/10
- 小林理正『狭衣物語』本文と『源氏物語』の散佚本文」, 第 315 回大阪大学古代中世文学研究会, オンライン, 2021/9/11
- 小林理正「安住院蔵『古今集』・『拾遺集』・『和漢朗詠集』・『原中最秘抄』断簡から見えてくるもの」, 大阪大学古代中世文学研究会・寺院調査研究報告会 合同特別例会, 大阪大学, ハイブリッド(両方), 2021/11/6
- 武久真士「中原中也詩の形式とずれ—西田幾多郎・ベルグソンを補助線に—」, 中原中也の会 第 24 回研究集会, オンライン, 2021/5/16
- 武久真士「三好達治の四行詩—同時代俳論の影響に注目して—」, 日本近代文学会関西支部秋季大会, オンライン, 2021/11/14
- 黄鶯「江戸時代における漢詩の失律に関する認識」, 上方文藝研究合評会, 大阪大学豊中キャンパス文学部本館 2F 大会議室, ハイブリッド(両方), 2022/3/23
- 小西洋子「追善願文における願主の考察—「花山院四十九日御願文」と「為二品長公主四十九日願文」を巡って—」, 第 311 回大阪大学古代中世文学研究会, オンライン, 2021/4/10
- 小西洋子「追善願文における願主の考察—上皇、三后、春宮、親王・内親王のための願文」, 第 148 回和漢比較文学会 2021 年西部例会, オンライン, 2021/4/24
- 後藤京「奈良・平安時代の「表」の文体について」, 大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学, オンライン, 2021/9/11
- 後藤京「中国の「表」の文体—ヴァリエーションに注目して—」, 大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学, オンライン, 2022/3/26
- 後藤京「中国の「表」の文体—ヴァリエーションに注目して—」, 大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学, オンライン, 2022/3/26
- レッキー・リチャード・ウィリアム「現実に見立てた労働劇—羽志主水「監獄部屋」の〈時事性〉をめぐって」, 東アジアと同時代日本語文学フォーラム第九回大会, オンライン, 2021/10/17
- レッキー・リチャード・ウィリアム「岩藤雪夫の挑戦—「人を喰った機関車」と「赤い灯」を中心に」, 昭和文学会第六十九回研究集会, オンライン, 2021/12/11
- 蒲妓艶「古今集時代における〈もみぢ〉の色彩が歌材として詠まれる経緯と展開」, 日本文芸研究会第 72 回研究発表大会, 東北大学, オンライン, 2021/6/12
- 尹美羅「志賀直哉『邦子』の方法—同時代言説を視座として」, 第 44 回国際日本文学研究集会, オンライン, 2021/5/9

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020 年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

【2021 年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕 なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

岡部祐佳 第 17 回日本近世文学学会賞 日本近世文学学会

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3 年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

2021 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2021 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020 年度～2021 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

福田 涼 博士後期課程, 呉工業専門学校, 助教, 2021/4

小田桐 ジェイク 博士後期課程, 筑波学院大学, 助教, 2021/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020 年度～2021 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4 名

2020 年度 : 3 名 2021 年度 : 1 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 4 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2020 年度 : 0 名 2021 年度 : 0 名

9. 刊行物

2020 年度 『語文』(大阪大学国語国文学会)第 114 輯・第 115 輯

『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会)第 67 号・第 68 号

『上方文藝研究』(上方文藝研究会)第 17 号

『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会)第 19 号

2021 年度 『語文』(大阪大学国語国文学会)第 116・117 合併輯
『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会)第 69 号・第 70 号
『上方文藝研究』(上方文藝研究の会)第 18 号
『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会) 第 20 号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

【2020 年度】

[国内学会の開催]

大阪大学国語国文学会総会

2021 年 1 月 9 日

[研究会の開催]

大阪大学古代中世文学研究会

2020 年度： 第 306 回 10 月 10 日	第 307 回 11 月 21 日	第 308 回 1 月 23 日
第 309 回 2 月 13 日	第 310 回 3 月 6 日	

【2021 年度】

[国内学会の開催]

大阪大学国語国文学会総会

2022 年 1 月 8 日

[研究会の開催]

大阪大学古代中世文学研究会

2020 年度： 第 311 回 4 月 10 日	第 312 回 5 月 8 日	第 313 回 6 月 19 日
第 314 回 7 月 10 日	第 315 回 9 月 11 日	第 316 回 10 月 30 日
第 317 回 3 月 26 日		

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

* (国語学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会 (1 月 1 日間)

研究誌「語文」の編集・発行 2020 年度 2 回・2021 年度 1 回

* (国語学, 比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会 ((2020・2021 年度 10 月 4 日間)

大学院研究発表会 (2020・2021 年度 7 月・11 月 各 2 日間)

専門分野主催の研究会等の活動については、10. に詳述した。

12. 教員の研究活動(2020 年度～2021 年度の過去 2 年間)

1. 飯倉 洋一 教授

1956 年生。1985 年九州大学大学院文学研究科博士課程中退。博士 (文学) (九州大学、1998 年)。九州大学助手・山口大学専任講師・同助教授・同教授・大阪大学助教授を経て、2004 年 4 月より現職 (2022 年 3 月定年退職)。専攻：日本近世文学

1-1. 論文

飯倉洋一 「妙法院日次記人的交流年表稿から見えてくること―地下との交流を中心に」『近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉』, pp. 31-33, 2022/3

飯倉洋一 「『撰津名所図会』は何を描いたか」『上方文藝研究』, 18・19, pp. 97-109, 2022/2

飯倉洋一 「近世中期における「テキスト遺産」と「作者」」『古典は遺産か？ 日本文学におけるテキスト遺産と作者』pp. 91-103, 2021/10

飯倉洋一 「未来に活かす古典―「古典は本当に必要なのか」論争の総括と展望」『古典の未来学』文学通信, pp. 341-361, 2020/10

飯倉洋一 「『絵本太閤記』『淀君行状』と『唐土の吉野』」『語文』(大阪大学国語国文学会), 114, 大阪大学国語国文学会, pp. 1-12, 2020/8

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

飯倉洋一 「なぜ「くずし字教育」が必要なのか」同志社大学古典教材開発研究センター設立記念研究集会: 古典教材開発の課題と可能性, 2021/3

飯倉洋一 「近世中期の読物に見える古典談義―『垣根草』と『ぬば玉の巻』を例に」早稲田大学オンラインワークショップ : テキスト遺産の利用と再創造, 早稲田大学, 早稲田大学, 2020/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

飯倉洋一, 大谷俊太, 加藤弓枝他 第6回ゲスナー賞 目録・索引部門 銀賞, 雄松堂書店, 2010/10

飯倉洋一 柿衛賞(第3回), 財団法人柿衛文庫, 1993/6

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2017年度～2020年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 飯倉洋一

課題番号: 17H02310

研究題目: 近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉

研究経費: 2020年度 直接経費 1,800,000円 間接経費 540,000円

研究の目的:

近世中後期の上方文壇における文芸は、ある〈場〉に人々が集まり、共に学び、時に戯れることで、豊かな稔りとなって結実した。それらは現代の「共同研究」「共同制作」のあり方と、共通する部分もあり、異なる部分もある。その人的交流の〈場〉や共有する知的基盤の具体的なありようを明らかにすることで、現代における人文学の再構築へのヒントを得られよう。とりわけ上方は伝統的な書物文化と学芸の〈場〉を有するとともに、志学の人々が往来し、新たな文芸を生み出してきた地域であった。本研究では、特に漢詩文や和歌和文という雅文芸を中心に、その文芸の生成を、人々の繋がり〈場〉に注目して、総合的に考察し、近世中後期の文学史・思想史に新たな視角を提供することを目的とする。

1-6-2. 2021年度～2025年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 飯倉洋一

課題番号: 21H00506

研究題目: デジタル文学地図の構築と日本古典文学研究・古典教育への展開

研究経費: 2021年度 直接経費 2,200,000円 間接経費 660,000円

研究の目的:

本研究は、WEBサイト上に多言語のデジタル文学地図を構築し、世界の日本文学・日本文化の研究者および学生の研究・教育の発展を促進し、国際的な社会貢献を果たそうとする。デジタル文学地図とは、WEB 日本地図に歌枕や名所の地点を示し、そこ

に歌枕や名所の地理的・歴史的な概説と文学テキストを挙げ、テキストの原典画像にリンクを張って古典籍本文も確認できるツールである。デジタル文学地図を活用し、歌枕などの名所のイメージの生成と変容を研究するのみならず、日本の名所(歌枕)を入口として、日本の古典テキスト・名所画像にアクセスする仕組みを作り、日本古典文学・文化を学習する教育システムを開発する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

人間文化研究機構国文学研究資料館運営会議・委員, 2017年4月～現在に至る

一般財団法人柿衛文庫・理事, 2012年3月～現在に至る

財団法人関西・大阪21世紀協会上方文化芸能運営委員会・運営委員, 2007年4月～現在に至る

日本近世文学会・常任委員, 2002年6月～現在に至る

日本近世文学会・委員, 2000年6月～現在に至る

2. 滝川 幸司 教授

1969年生。1998年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士(文学)(大阪大学)。1998年奈良大学文学部専任講師、2003年同助教授、2007年同准教授、2013年同教授、2015年京都女子大学文学部教授。2019年10月より現職。専攻:平安文学

2-1. 論文

滝川幸司「申文の文体ひとつ―「望請」するのは何か―」『女子大國文』170, pp. 1-22, 2022/1

滝川幸司「阿衡の勅答について」『国語国文』90-10, pp. 1-22, 2021/10

滝川幸司「渡唐の心情は詠まれたのか―寛平の遣唐使と漢詩文―」『語文』(大阪大学国語国文学会), 115, pp. 16-34, 2020/12

2-2. 著書

滝川幸司, 青木亮人他(共著)『日本文学の見取り図 宮崎駿から古事記まで』ミネルヴァ書房, pp. 230-231, 2022/2

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

滝川幸司(テレビ(NHK))「菅原道真の漢詩について」『歴史秘話ヒストリア』, 2021/1

2-4. 口頭発表

滝川幸司「詔勅の文章について―阿衡の詔勅・勅答をめぐって―」第65回国際東方学会議, 東方学会, オンライン, 2021/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

滝川幸司 第4回池田亀鑑賞, 池田亀鑑文学碑を守る会, 2015/6

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2021年度～2024年度、基盤研究(C) 一般、代表者:滝川幸司

課題番号:21K00305

研究題目:日本古代の大学の学問に関する基礎的研究―9、10世紀の大学寮紀伝道を中心に―

研究経費:2021年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

平安時代の大学である大学寮の中でも、文学・歴史を学ぶ紀伝道が、貴族社会にどのような人物(官僚)を輩出したか、またその人物(官僚)たちが紀伝道で獲得した学問とはどのようなものであったかを、紀伝道出身者の官歴、及び紀伝道出身者が作成した文章から考察するものである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

中古文学会・常任委員, 2019年6月～現在に至る

中古文学会・編集委員, 2019年6月～現在に至る

和歌文学会・編集委員, 2018年11月～現在に至る

和漢比較文学会・例会委員長(西部), 2013年9月～現在に至る

和漢比較文学会・編集委員, 2007年10月～現在に至る

和漢比較文学会・常任理事, 2003年10月～現在に至る

3. 齋藤 理生 教授

1975年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)(大阪大学、2004年)。群馬大学教育学部講師、同准教授を経て、2014年4月より大阪大学大学院文学研究科准教授、2021年4月より現職。専攻：日本近現代文学

3-1. 論文

齋藤理生 「「藝術新聞」目録：自第六三三号至第六七四号(不揃)」『阪大近代文学研究』20, pp. 68-81, 2022/3

齋藤理生 「「朝日新聞」西部版学芸記事細目(一九四六年三月～一九四九年一二月)」『大学院文学研究科紀要』62, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 67-92, 2022/3

齋藤理生 「織田作之助『木の都』の〈大阪〉—歴史・記憶・架空—」『文学・語学』233, pp. 76-86, 2021/12

齋藤理生 「太宰治の小説における饒舌体の変容」『昭和文学研究』83, pp. 45-59, 2021/9

齋藤理生 「「藝術新聞」目録—自第五九九号至第六三二号(不揃)」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 19, pp. 68-86, 2021/3

齋藤理生 「資料紹介「青山京子の良さ」」『三島由紀夫研究』20, 鼎書房, pp. 117-119, 2020/5

3-2. 著書

安藤宏, 齋藤理生, 小澤純他(共著) 『太宰治 単行本にたどる検閲の影』秀明大学出版会, pp. 2-23, 54-69, 90-103, 140-149, 2020/10

齋藤理生, 早由美, 後藤隆基他(共著) 『新聞小説を考える—昭和戦前・戦中期を中心に—』パブリック・ブレイン, pp. 3-7, 92-109, 110-114, 2020/9

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

齋藤理生 「埋没の三島作品見つかる 専門家「若き作家の力量示す」」『日本経済新聞』日本経済新聞, pp. 42-42, 2021/4

齋藤理生 「24歳三島「400字小説」発掘 占領下日本描く「恋文」朝日新聞に掲載」『朝日新聞』朝日新聞, pp. 30-30, 2021/4

齋藤理生 「三島由紀夫の小説、発掘 米占領下の日本社会暗示 1949年発表「恋文」、文芸誌掲載」『毎日新聞』毎日新聞, pp. 22-22, 2021/4

齋藤理生 「「太宰治と二つの検閲 揺さぶられた本心、資料に探る」という、共編著『太宰治 単行本にたどる検閲の影』を取り上げた記事でコメントした。」『朝日新聞 be on Saturday』朝日新聞, pp. 4-4, 2020/11

3-4. 口頭発表

齋藤理生 「一九四〇年代の新聞文芸欄から見えるもの—新発掘資料を中心に」2021 年度春季共同研究会, 新聞小説を考える会, オンライン, 2022/3

齋藤理生 「藤澤桓夫と大阪の新聞小説」2021 年度夏季共同研究会, 新聞小説を考える会, オンライン, 2021/9

齋藤理生 「昭和期大阪の新聞小説—藤澤桓夫と織田作之助」二〇世紀大阪の芸術文化研究会, 二〇世紀大阪の芸術文化研究会, 大阪大学, 2021/9

齋藤理生 「「朝日新聞」地方版の文芸欄の問題—1940 年代を中心に」1930 年・1940 年前後の新聞小説, 新聞小説を考える会, オンライン, 2021/3

齋藤理生 「織田作之助「木の都」の〈大阪〉」第 122 回 全国大学国語国文学会 冬季大会, 全国大学国語国文学会, オンライン, 2020/12

齋藤理生 「藤澤桓夫『翼』論—「朝日新聞」を手がかりに」新聞小説の戦前／战中, 新聞小説を考える会, オンライン, 2020/9

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

齋藤理生 群馬大学ベストティーチャー賞 優秀賞(平成 24 年度), 群馬大学, 2013/5

齋藤理生 群馬大学ベストティーチャー賞 優秀賞(平成 22 年度), 群馬大学, 2011/5

齋藤理生 群馬大学ベストティーチャー賞(平成 19 年度), 群馬大学, 2008/5

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2017 年度～2021 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:齋藤理生

課題番号:17K02450

研究題目:1940 年代の新聞における文芸欄の基礎的研究

研究経費:2020 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

2021 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

本研究では 1940 年代の新聞における文芸欄の実態を調査・分析する。研究の主な目的は、戦中戦後の新聞における文学者の創作・随想・論説などが、混乱期の日本の何をどのように表現していたのか、それらの特徴と社会的役割を明らかにすることである。その際、中央の大手新聞社が東京で発行したものだけでなく、その地方版や地方紙、夕刊紙、専門紙、機関紙など、多様な種類の新聞を取り扱い、多角的にアプローチする。このような研究は、個別の新聞・作家・作品の理解を深め、埋もれていた資料を発掘し、近代の文芸・文化とメディアと読者との関係を再検討する歴史的な視座をもたらすはずである。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

国文学研究資料館・国際連携委員, 2020 年 4 月～現在に至る

日本近代文学会・評議員, 2018 年 4 月～現在に至る

昭和文学会・幹事, 2016 年 5 月～現在に至る

4. 渡邊 英理 准教授

東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得後満期退学。博士(学術)(東京大学、2012年)。宮崎公立大学人文学部准教授、静岡大学人文社会科学部准教授などを経て、2021年4月より現職。専攻:近現代日本語文学

4-1. 論文

渡邊英理 「批判としての小説——瀬戸内寂聴『夏の終わり』』『ユリイカ』2022年3月特別号、特集瀬戸内寂聴』18322-786, 青土社, pp. 251-261, 2022/2

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

渡邊英理 「中上健次と石牟礼道子」大阪大学国語国文学会 2022年大会, 大阪大学国語国文学会, 大阪大学(オンライン), 2022/1

渡邊英理 「中上健次とメロドラマ的想像力」日本近代文学会 2022年秋季大会, 日本近代文学会, オンライン, 2021/10

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2021年度～2025年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渡邊英理

課題番号:21K00263

研究題目:戦後日本の「(再)開発文学」研究:ジェンダー・脱人間主義・世界化の視座を中心に

研究経費:2021年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

時代の記憶と思索の言葉として読み解かれる「戦後文学」を「(再)開発」という出来事を視座にして再検討することが、本研究の目的である。ジェンダー(社会的文化的性差)や生の管理をめぐる生権力=生政治の観点から考察を深め、自然を人間の対象や背景としない脱人間主義(「ポストヒューマン/ニズム」)の哲学などの破局を内包した「人新世」時代の思想潮流を参照項とし、「(再)開発文学」が開く思想的な地平を考察する。「戦後日本文学」(史)を「(再)開発文学」研究で再考する本研究は、さらに、それを「世界化」の観点=「冷戦文化」(史)と世界文学(史)との関係性から再文脈化することも目指す。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

5. 勢田 道生 准教授

1980年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(文学)(大阪大学、2011年)。大阪大学大学院文学研究科助教、日本学術振興会特別研究員(PD)、大阪大学大学院文学研究科特任講師(常勤)を経て、2017年10月より現職。専攻:日本中近世文学

5-1. 論文

なし

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

勢田道生 第十回日本近世文学学会賞, 日本近世文学学会, 2014/5

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2016年度～2021年度、若手研究、代表者:勢田道生

課題番号:16K16773

研究題目:研究分類は若手研究(B)近世中期の有職家・神道家をめぐる学芸ネットワークの研究—神村正鄰を中心に—

研究経費:2020年度 直接経費 179,963円 間接経費 0円

2021年度 直接経費 139,821円 間接経費 0円

研究の目的:

神村正鄰を中心的対象として、有職家・神道家の学芸の特徴とその社会的意義を明らかにする。これにより、従来の国学中心主義的近世学芸史を相対化し、近世和学の総体を把握する手がかりとする。また、神村正鄰旧蔵書を手がかりとして、有職家・神道家をめぐる人的・文献的ネットワークの実態を明らかにする。これにより、有職家・神道家をめぐる学問的影響関係のみならず、近世における知的資源の流通構造や、知的資源の媒介者としての近世有職家の役割を明らかにする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 尹 芷汐 助教

2020年4月より大阪大学大学院文学研究科(日本文学)助教。(2022年3月退職)専攻:日本近現代文学、日中比較文学

6-1. 論文

尹芷汐「二〇〇〇年以降の中国における松本清張の受容 : Douban の読者レビューをめぐる計量分析」『松本清張研究』23, pp.26-45, 2022/3

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

Yin, Zhixi, “⑩Dynamic Positionality of Japanese Literature –Translation and Interpretation of Mishima Yukio in China”, The 3rd EU-Japan Young Scholars Workshop/ 2020 International New Generation Workshop, 法政大学国際日本学研究所・「国際日本研究」コンソーシアム・C.E.E.J.A. , ZOOM, 2020/11

Yin, Zhixi, “Representing “Cultural Exchange”: Haguruma Za’s (Cogwheel Troupe, はぐるま座) Visit to China during the Cultural Revolution”, AAS-in-Asia 2020, Association for Asian Studies, Live-Stream, 2020/9

尹芷汐 「1977～1989 年日本における中国文学の研究・翻訳」東アジア文学研究:新聞雑誌と流通」フォーラム, 中国北京師範大学東アジア比較文化研究センター, オンライン, 2020/7

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2018 年度～2021 年度、若手研究、代表者:尹芷汐

課題番号: 18K12283

研究題目: 中国の「内部発行」制度による日本文学の流通と受容

研究経費: 2020 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

2021 年度 直接経費 448,895 円 間接経費 0 円

研究の目的:

1950～1980 年代の中国において、「内部発行」つまり書籍を通常の商業的手段で出版するのではなく、限られた読者に提供するために、「内部的」に書籍を発行するという出版の形式があった。本研究はそうした「内部発行」によって翻訳、出版された日本文学を網羅的に調査し、資料作成の上で、同時代日中文化関係においてその意義を考察するものである。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学国語国文学会・運営委員, 2020 年 4 月～現在に至る

大阪大学文学会・助教委員, 2020 年 4 月～現在に至る

日本近代文学会東海支部・幹事, 2017 年 6 月～2020 年 5 月

東アジアと同時代日本語文学フォーラム・運営委員, 2017 年 4 月～現在に至る

2-13 比較文学

I 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：橋本 順光

准教授：鈴木 暁世

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
13	4	3	0	0	0	2	0

*うち留学生3名、社会人学生0名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	3	1	0	1
2021	4	1	0	1
計	7	2	0	2

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、講義・演習で、比較文学の基礎的概念および文学批評の主要な分析方法が吸収できることを目標とする。その際に、とりわけ英語文献を中心にして、文学史・歴史の流れを押さえたうえで、小説を精読し、関連の外国語文献を参照しながら、レポート、レビュー、論文が執筆できるよう心がける。関連して、学術的な口頭発表と質疑応答の習得も視野に入れ、論文執筆に必要な先行研究の整理、問題の発見、調査、執筆にかかわる総合的な能力を涵養する。

大学院においては、上記に加えて、研究計画の立案と実行をできるかぎり院生同士で議論しながら確認を行い、TA・RAなどの機会も積極的に利用することで、コミュニケーションや指導にかかわる総合的な能力の養成を目標とする。研究室においては、比較文学の入門や教育に資する文献を広く収集・紹介し、講読を奨励する。

2. 研究

教員は毎年最低2本の論文を執筆、大学院生は毎年最低1回の学会発表をおこなうとともに、教員・大学院生は、国内・国外での研究発表および論文投稿に努力し、あわせて紀要・報告書などの執筆も推進することを目標とする。大学院生には、機会に応じて学内・学外の研究資金への応募を奨励するとともに、教員も適宜、共同プロジェクトの企画応募を努力するよう心がける。また、研究室の設備と備品の点検に留意するとともに、とりわけ図書について研究に支障のないよう収集に心がけ、研究環境の維持・改善に努力し、研究の視野と可能性を拡大することを目標とする。

3. 社会連携

研究成果や資料を広く一般に公開するよう努力し、研究成果を社会に還元する書物の刊行も積極的に推進するよう心がける。学会や各種団体の委員などの依頼や、学会・研究会などの開催校としての受け入れ依頼にも、できるかぎり応じ、研究成果の普及を図るよう、一般向けの公開講座や研究会などにおいても積極的に発表に努力することを目標とする。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

講義・演習では、主として英語圏と近代日本の資料を使用し、適宜、現代の大衆文化の事例に言及しながら、比較文学の基礎から応用までの教育を行った。その際には、文学批評の基本概念と応用の習得を徹底した。学部生向けの授業でも英書を中心に外書講読の演習を必ず受講するよう奨励した。学部・大学院ともに口頭発表と論文をできるかぎり各受講生同士で論評するよう徹底させ、質疑応答の練習を行った。また博士論文作成演習の一部を延長して、その後半部分で卒業論文作成演習を合同で行い、基礎的な技術や知識の共有とともに、院生の指導能力の涵養に努めた。

2. 研究

院生は、ほぼ全員が1本以上の論文を執筆し、学会発表や研究会での発表を行い、積極的に学会に参加した。この2年で教員は、目標以上の多数の論文を執筆した。科学研究費や外部資金を利用して研究を行い、共同研究を組織したほか、研究分担者として複数の海外を含む研究機関での共同研究に参加した。大学院生も学内外の助成やプログラムなどに申請した。その結果、多くの海外調査および外国語による研究発表が可能となった。研究室の設備備品は定期的に点検した。メーリングリストや授業などで、比較文学に関係する内外の書籍を幅広く推薦・紹介しあい、収集と講読とともに、最新の研究動向をふまえるよう心がけた。

3. 社会連携

外部から講師を招き、共同研究の成果発表として一般に開かれた複数のワークショップやシンポジウムを行った。その際には院生、学部生、教員が積極的に協力し、発表を行った。この2年間で教員は、非会員にも開かれた学会や一般向けの会合で多数発表し、一般向けの論考を寄稿したほか、積極的に研究成果の還元を図った。さらに日本比較文学会、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、ジャポニスム学会、日本近代文学会、日本アイルランド協会、国際芥川龍之介学会などで、運営と社会還元に努力した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

前記の活動の結果、所期の目標は十分に達成できたと考えられる。

2. 研究

前述の活動の結果、初期の目標は十分に達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前述の活動の結果、初期の目標は十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	1	0	1
2021	1	0	1
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【2020年度】〔課程博士〕

PACHCIAREK Pawel Lukasz 「草間彌生の美術と文学の間—美術の「かげ」に隠れた社会関与の文筆家—」

主査：橋本順光教授

副査：建畠哲教授・学長（多摩美術大学）

圀府寺司教授（大阪大学）

田邊欧教授（大阪大学）

鈴木暁世准教授（大阪大学）

【2021年度】〔課程博士〕

ESCANDE Jessy Yvon 「現代日本ポップカルチャーにおけるデータベースファンタジー —文化移転のネットワーク化に基づくジャンルの成立と機能—」

主査：橋本順光教授

副査：田邊欧教授（大阪大学）

下楠昌哉教授（同志社大学）

鈴木暁世准教授（大阪大学）

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
2021	8(8)	1(1)	0(0)	1(0)	0(0)	10(9)
計	9(9)	1(1)	0(0)	1(0)	0(0)	11(10)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	1	9	0	0	0	10
2021	5	3	2	0	0	10
計	6	12	2	0	0	20

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2020年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

西元まり「超越するサーカス—サーカス学へのアプローチ」『サーカス学』第1号, pp.15-28, 査読有, 2020/10/10

【2021年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

PACHCIAREK Pawel Lukasz「ポーランドのグラフィック・アート」『東欧文化事典』丸善、2021年9月

ESCANDE Jessy「現代日本ファンタジー文芸作品におけるモチーフの文化移転：テーブルトップ・ロールプレイング・ゲーム(TRPG)の媒体としての役割を中心に」『社会文化研究』第23号, pp.73-95, 査読有, 2021/6/10

ESCANDE Jessy「カトブレパスの変貌：日本ポップカルチャーにおける文化移転的変容の事例研究として」『比較文化』第145号, pp.1-13, 査読有, 2021/10/31

ESCANDE Jessy「ゲールの放浪：古代アラビアから現代日本への文化移転を追跡して」『比較文化』第146号, pp.1-14, 査読有, 2022/1/31

ESCANDE Jessy「Foreign Yet Familiar: J. L. Borges' Book of Imaginary Beings and Other Cultural Ferryman in Japanese Fantasy Games」『Games and Culture』, 査読有, 2022/3/4

西元まり「コロナ禍におけるシルク・ドゥ・ソレイユ経営破綻分析」『大阪大学文学研究科アートメディア論研究室『Arts and Media』』第11号, pp.180-195, 査読有, 2021/7/31

西元まり「シルク・ドゥ・ソレイユを中心とするケベック発現代サーカスの現況と課題」『日本ケベック学会『ケベック研究』』第13号, pp.71-89, 査読有, 2021/9/15

内藤貴夫「ヘンリー・メイヒュー『ロンドンの労働とロンドンの貧民』(1851)再考——イギリスにおける反響と日本への影響——」『近畿大学文芸学部論集『文学・芸術・文化』』第33巻第2号, pp.11-26, 査読有, 2022/2/1

(2)口頭発表

【2020年度】

〔博士前期〕

胡恒穎「大正浪漫化された植民地博覧会：台湾博覧会と『北城百画帖』」, 阪大比較文学学会シンポジウム 越境する美術 変容する文化, 阪大文学研究科, オンライン, 2020/1/21

富永梨紗子「翻訳としてのジョン・ラファージ『観音の瞑想』

—涅槃と永遠の女性—」, 阪大比較文学学会シンポジウム 越境する美術 変容する文化, 阪大文学研究科, オンライン, 2020/1/21"

〔博士後期〕

- PACHCIAREK Pawel Lukasz 「現代日本における人外女性像——国境を超えるジェンダー表象を巡って——」, カルチュラル・タイムズ 2020, 長崎県立大学シーボルト校, 対面, コロナ対応により学会中止
- PACHCIAREK Pawel Lukasz 「草間彌生の文学と美術における「ナルシス」のモチーフ」, 阪大比較文学学会シンポジウム 越境する美術 変容する文化, 阪大文学研究科, オンライン, 2020/1/21
- PACHCIAREK Pawel Lukasz 「現代日本における人外女性像——国境とメディアを越境するジェンダー表象を巡って——」パネル(草間彌生と泉鏡花 ——「かげ」の文学——)カルチュラル・タイムズ in 金沢, オンライン, 2021/6/26
- ESCANDE Jessy 「ゲールの放浪——古代アラビアから現代日本への文化移転を追跡して ——」, 日本比較文化学会関西支部 10 月例会, 同志社大学今出川キャンパス, オンライン, 2020/10/3
- ESCANDE Jessy 「現代日本ファンタジーにおけるボルヘス『幻獣辞典』の影響に関して——動物寓意譚(ベスチアリ)の文化移転を巡る事例研究——」, 日本比較文学学会第 56 回関西大会, 同志社大学今出川キャンパス, オンライン, 2020/11/28
- ESCANDE Jessy 「日本のデータベースファンタジーにおけるカトブレパスの文化移転」, 阪大比較文学学会シンポジウム 越境する美術 変容する文化, 阪大文学研究科, オンライン, 2020/1/21
- 西元まり「基調講演「シルク・ドゥ・ソレイユを中心とするケベック発現代サーカスの現況」, 第 12 回日本ケベック学会全国大会 2020, 早稲田大学・立教大学他, オンライン, 2020/10/3
- 西元まり「シンポジウム「ケベック現代アートのこれまでとこれから」, 第 12 回日本ケベック学会全国大会 2020, 早稲田大学・立教大学他, オンライン, 2020/10/4

【2021 年度】

〔博士前期〕

- 富永梨紗子「音を観る—ジョン・ラファージの観音画とその後—」, 阪大比較文学学会シンポジウム『故郷と異郷をめぐる比較文学』, オンライン, 2022/1/20
- 富永梨紗子「John La Farge's Letters from Japan and Its References: Eastern Thoughts through Translations and Images」, An International Seminar for Young Scholars for the Promotion of International Exchange, 大阪大学豊中キャンパス文法経講義棟 1F リサーチ・コモンズ, オンライン, 2022/2/18

〔博士後期〕

- PACHCIAREK Pawel Lukasz 「現代日本における人外女性像——国境とメディアを越境するジェンダー表象を巡って——」パネル(草間彌生と泉鏡花 ——「かげ」の文学——)カルチュラル・タイムズ in 金沢, オンライン, 2021/6/26
- PACHCIAREK Pawel Lukasz 『東を新たに想像する—パラダイスエアのロシアへの道』, PARADISE AIR (松戸、アーティスト・イン・レジデンス) × Vostok (京都西陣のアーティスト・ラン・スペース) × ZARYA Center for Contemporary Art (ロシア・クラスノダール), オンライン発表において国際美術プロジェクトをキュレーターとしての紹介, 2021 年 3 月 30 日
- ESCANDE Jessy 「日本ファンタジー文芸作品における ユダヤ神秘主義的モチーフとその順化 : ゴーレム表象を中心に」, 第 83 回全国大会, オンライン, 2021/6/13
- ESCANDE Jessy 「現代日本における人外女性像 : 国境とメディアを越境するジェンダー表象を巡って」, カルチュラル・タイムズ in 金沢, 金沢 21 世紀美術館 シアター21 しいのき迎賓館セミナールーム A, B, ハイブリッド(両方), 2021/6/26
- ESCANDE Jessy 「現代日本ポップカルチャーにおけるデュラハン像の多型性に関して」, 阪大比較文学学会シンポジウム『故郷と異郷をめぐる比較文学』, オンライン, 2022/1/20
- ESCANDE Jessy 「Jingai Characters in Japanese Popular Culture and Their Function as Proxies for Representing and Questioning Otherness」, An International Seminar for Young Scholars for the Promotion of International Exchange, 大阪大学豊中キャンパス文法経講義棟 1F リサーチ・コモンズ, ハイブリッド(両方), 2022/2/18

ESCANDE Jessie 「ファンタジーを変えたゲームたち：日本におけるゲームの文化的影響に関して」, 2021 年度 第 3 回
定例研究会：, オンライン, 2022/3/11

西元まり 「ソーシャルサーカスと東京パラ五輪開幕式 —SLOW LABEL 活動からの一考察—」, シンポジウム「帝国を
掘り崩す知 女性と教育をめぐるトランスナショナルなネットワーク」, 大阪大学, オンライン, 2021/10/2

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020 年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

西元まり 『快男児！日本エンタメの黎明期を支えた男』（高橋銀次郎著, 単行本発行のための資料発掘、現地調査、イン
タビュー協力）, 日経 BP マーケティング, 2020/12/21 出版

PACHCIAREK Pawel Lukasz 2020 年 12 月 咲くやこの花賞受賞記念「笹岡由梨子の大阪ワンダーランド—RAINBOW
ADVENTURE—」ライブパフォーマンス:社会的被排除集団（障害者や LGBTQ の人々）を含むインクルーシブな場所と
して大阪を質的に変化させる可能性を問うた。

【2021 年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

PACHCIAREK Pawel Lukasz 2021 年 9 月 「Lost in Translation」展、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA:「災害ユート
ピア」という言葉にまつわる問題を問う。資本主義の秩序の終焉とコミュニケーションの齟齬から生まれる新しい意味

PACHCIAREK Pawel Lukasz 『笹岡由梨子—地球から消える』展、Trafo Center for Contemporary Art, Szczecin, 2021
年 10 月 2021 年 1 月 16 日 ; Manggha Museum of Japanese Art and Technology 2022 年 3 月（予定）

ESCANDE Jessie 「変容するグール：アラビア伝承、『ガラン版千一夜物語』とクトゥルフ神話『ナイトランド・クオー
タリー・タイムス』 2021 年 10 月号

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3 年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2021 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2021 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020 年度～2021 年度に大学・短大・高専の常
勤職員として就職が決まった者について)

パヴェウ・パフチャレク 博士後期課程修了 2021 年度 9 月採用日本学術振興会外国人特別研究員

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020年度～2021年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2020年度：0名 2021年度：0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度：0名 2021年度：0名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2021年1月21日 阪大比較文学会シンポジウム「越境する美術、変容する文化」オンライン開催

2021年10月2日 阪大比較文学会シンポジウム「帝国を掘り崩す知—女性と教育をめぐるトランスナショナルなネットワーク—」オンライン開催

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

2021年2月15日 学位論文発表会

12. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 橋本 順光 教授

1970年生。大阪大学文学部英文学専攻卒業(1994)、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究修士課程修了(1997)、ランカスター大学大学院歴史研究科博士課程修了 Ph.D., (2008)。2000年4月より日本学術振興会特別研究員(DC2)。2001年4月より横浜国立大学教育人間科学部講師、2009年4月より大阪大学文学研究科准教授を経て、2019年4月より現職。専攻：比較文学・英国地域研究

1-1. 論文

橋本順光 「明治日本を描いた水彩画の展覧会の余白に」、『ジャポニスム研究』, 41, pp. 80-87, 2022/3

橋本順光 “On the Margins of Exhibitions Catalogs of Watercolors of Transitional Japan in the 19th Century”, *Studies in Japonisme*, 41, pp. 87-94, 2022/3

橋本順光 「露営の夢の行方—故郷を夢見る兵士の表象と近代日本におけるその転用—」、『大阪大学文学研究科紀要』62, pp.19-40, 大阪大学大学院文学研究科, 2022/3

橋本順光 「コロポ港のハシム商会—洋行客とブラジル移民のアジア主義幻想を映した宝石商」、『2021年度アジア歴史研究報告書』, pp.153-175, JFE21世紀財団, 2022/3

橋本順光 「世界を股にかけての旅稼ぎ—小早川秋聲にみる旅と西洋絵画の転用」、『小早川秋聲 旅する画家の鎮魂歌』, 求龍

堂, pp.146-151, 2021/8

Hashimoto, Yorimitsu, “The Mongolian Alexander’s Tomb as a Heartland: Theosophy, the Naros Cycle, and Resurrection of Genghis Khan”, *Discovering Different Cultures, Nationalities and Languages Through Comparative-Typological Studies*, Tashkent State University of Oriental Studies, pp.74-81, 2020/12

Hashimoto, Yorimitsu, “An Irish Theosophist’s Pan-Asianism or Fant-asia? James Cousins and Gurcharan Singh”, Hans Martin Krämer, Julian Strube (eds.), *Theosophy across Boundaries*, State University of New York Press, pp.345-371, 2020/11

Hashimoto, Yorimitsu, “Spectacular Tentacular: Transmedial Tentacles and Their Hegemonic Struggles in Cthulhu and Godzilla”, *Between: Journal of the Italian Association for the Theory and Comparative History of Literature*, 20, the Italian Association for the Theory and Comparative History of Literature, pp.38-68, 2020/11

Hashimoto, Yorimitsu, “End of the Review of the Reviews? Editing Political Cartoons to Outwit Propaganda in the Age of Fascism”, Yorimitsu Hashimoto (ed.), *Caricatures and Cartoons, 1931-1940*, vol.1, Edition Synapse, pp.5-27, 2020/10

橋本順光 『評論の評論』の終焉—プロパガンダ戦争と風刺漫画編集の困難, 橋本順光(編)『万国風刺漫画大全第四期 第二次大戦へ向かう世界日本語版別冊』, エディション・シナプス, pp. 3-30, 2020/10/1

橋本順光 「和辻哲郎の「江戸城」発見—「城」(一九三五)における壕と高層建築の対比, 法政大学江戸東京研究センター(編)『風土(Fudo)から江戸東京へ』, 法政大学出版局, pp.61-107, 2020/4

1-2. 著書

Hashimoto, Yorimitsu (ed.), *Caricatures and Cartoons, 1931-1940*, 3 volumes, Edition Synapse, 1660p., 2020/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

橋本順光 「神智学とジャポニスム—三酸図・柔術・能」, 『ジャポニスム研究』, 41, ジャポニスム学会, pp. 124-125, 2022/3

橋本順光 「朝顔をめぐる英語圏のジャポニスム—ガーデニングから禅まで」, 『ジャポニスム研究』, 41, ジャポニスム学会, pp. 101, 2022/3

橋本順光 「ヨーロッパ19世紀以前」, 武田雅哉, 加部勇一郎, 田村容子編著『中国文学をつまみ食い—『詩経』から『三体』まで—』, ミネルヴァ書房, pp. 212-213, 2022/2

橋本順光 「ヨーロッパ19世紀以後」, 武田雅哉, 加部勇一郎, 田村容子編著『中国文学をつまみ食い—『詩経』から『三体』まで—』, ミネルヴァ書房, pp. 214-215, 2022/2

橋本順光 「アメリカ」, 武田雅哉, 加部勇一郎, 田村容子編著『中国文学をつまみ食い—『詩経』から『三体』まで—』, ミネルヴァ書房, pp. 216-217, 2022/2

橋本順光 書評・範麗雅『中国芸術というユートピア』, 『西洋史学』, 272, 日本西洋史学会, pp. 79-81, 2021/12

Hashimoto, Yorimitsu, “Review, Mayuko Sano, *Bakumatsu Gaiko Girei no Kenkyu: Obei Gaikokan tachino Shogun Haietsu* [Diplomatic Etiquette and Protocol at the End of the Tokugawa Period: Western Diplomat’s Audiences with Shoguns, 2016] 英文書評・佐野真由子『幕末外交儀礼の研究』, 『比較文学』, 63, 日本比較文学会, pp. 230-237, 2021/3

橋本順光 「日本は脅威か興味の対象か—19世紀イギリスの小説や旅行記の中の日本」, 『みらいぶっく 学問・大学なび』(ウェブサイト: <https://miraibook.jp/researcher/715>), 河合塾, 2021/1

橋本順光 (インタビュー記事) 「風刺漫画から見る、メディアとの「距離感」」, 『待兼山文學』, 2020年度下半期号, 待兼山文學会, pp. 22-53, 2020/11

橋本順光 「ヴィクトリア朝のパンデミックと細菌兵器の物語」, 『日本ヴィクトリア朝文化研究学会 Newsletter』, 19, 日本ヴィクトリア朝文化研究学会, pp. 3-7, 2020/5

橋本順光 『見えない敵—“新型コロナウイルス”との闘い— (映像'20)』, MBS テレビ, 2020/4/26への資料協力 (エンドクレジットは大阪大学文学部比較文学教室・神戸における伝染病と検疫の歴史を知る格好の資料として、神戸市役所

1-4. 口頭発表

- 橋本順光 「子供をおんぶすると外人は猿だと言って笑う」のかーブラジル移民の排日論議とその余波」, 基盤(B)「近代日本人のグローバル移動と動植物交換をめぐる文明史的研究」(代表根川幸男)2021 年度報告会, オンライン, 2022/3/28
- 橋本順光 「日本におけるダンピア航海記の受容と変容ー海賊から博物学者まで」, 学位論文発表会, 阪大比較文学会, オンライン, 2022/2/14
- 橋本順光 「露宮の夢の行方ー故郷を夢見る兵士の表象と近代日本におけるその転用ー」, 阪大比較文学会シンポジウム「故郷と異郷をめぐる比較文学 第一部 近代日本における異郷と故郷の相克」, 阪大比較文学会, オンライン, 2022/1/20
- 橋本順光 「明治期の英国に柔道を根づかせた上西貞一」, 大阪府北部コミュニティカレッジ(ONCC), 豊中市地域共生センター, 2022/1/13
- 橋本順光 「SF パニック映画にみる科学者と政治家の綱引きー『妖星ゴラス』から『シン・ゴジラ』まで」, 船場生涯学習講座「神々(しぜん)と人の綱引き」, 箕面市立船場生涯学習センター, 2021/12/22
- 橋本順光 「物語としての黄禍論? 廣部泉著『人種戦争という寓話』と『黄禍論』の余白に」, 第 52 回例会, 日本アメリカ史学会, オンライン, 2021/12/18
- 橋本順光 「神智学とジャポニスムー三酸図・柔術・能」(Tasting the Vinegar of Japonisme: Theosophy, Jujitsu and Noh), 国際シンポジウム「ジャポニスムと東洋思想(宗教・哲学・美学):19-20 世紀」, ジャポニスム学会, オンライン, 2021/12/4
- 橋本順光 「アッサム茶のブラジル移植をめぐる神話の形成ー英領インドと日本のアジア主義」, 第 5 回国際学術大会パネル「航路からみた近代ー日本・東アジア・アメリカ大陸間の人・モノ・動植物の交換」, 東アジア日本研究者協議会(EACJS), オンライン, 2021/11/27
- 橋本順光 「昭和天皇の修学旅行ー1921 年のヨーロッパ外遊」, 大阪府北部コミュニティカレッジ(ONCC), 人権平和センター豊中, 2021/11/16
- 橋本順光 「アジア主義と新しい女性ーバハイ教徒ドロシー・ホジソンの来日(1916-20)とその余波」, 阪大比較文学会シンポジウム「帝国を掘り崩す知ー女性と教育をめぐるトランスナショナルなネットワーク」, 阪大比較文学会, オンライン, 2021/10/2
- 橋本順光 「『水晶宮物語』(1986)の余白にー交通網の整備とバナナ共和国の誕生」, 関西支部例会, 「比較文学研究の拡張と刷新ー松村昌家先生追悼記念シンポジウム」, 日本比較文学会, オンライン, 2021/9/25
- 橋本順光 “Suspended or Suspenseful Torture? A History of Rat Torture and Its Transmedial Representations”, Transcodification:Literatures - Arts - Media, University of L’Aquila, Italy, オンライン, 2021/7/3
- 橋本順光 「海上の道ー近代日本の海洋文化振興と英国」, シンポジウム「近代日本人のグローバル移動と動植物交換をめぐる文明史的研究」, 基盤(B)「近代日本人のグローバル移動と動植物交換をめぐる文明史的研究」(代表根川幸男), オンライン, 2021/5/1
- 橋本順光 「ブラジル紅茶王神話の検証ーハシム商会は岡本寅蔵のアッサム種持ち出しに協力したのか」, 基盤(B)「近代日本人のグローバル移動と動植物交換をめぐる文明史的研究」(代表根川幸男)2020 年度報告会, オンライン, 2021/3/20
- Hashimoto, Yorimitsu, “Morning Glories in Anglophone Japonisme: From Gardening to Zen”, The Society for the Study of Japonisme 40th Anniversary Forum: Past, Present, and Possibilities of Japonisme Studies, ジャポニスム学会, オンライン, 2021/2/21
- 橋本順光 「高坂正堯が読んだポエニ戦記ー海洋国家カルタゴ像の戦後日本への継承」, 学位論文発表会, 阪大比較文学会, オンライン, 2021/2/15
- 橋本順光 「霊媒画は能の如くーイェイツ・降霊会・久米民十郎」, 阪大比較文学会シンポジウム「越境する美術、変容する文化」, 共催 基盤研究(C)「戦中戦後期農民文学の展開と変容の研究ーアイルランド文学と東アジアとの関係を軸に」(代表鈴木暁世), オンライン, 2021/1/21
- 橋本順光 「英国のエージェント H・P・シャストリーーアジア主義者の監視と『大亜雑誌』」, ICU アジア文化研究所・JFE21 世紀財団共催シンポジウム「いま問われるアジア共生の道: アジア歴史研究の視点から」, オンライン, 2020/11/21
- 橋本順光 「昭和天皇も行かれた欧州航路の旅」, NPO 法人大阪府北部コミュニティカレッジ, 豊中市立国際交流センター,

2020/10/8

橋本順光「義経ジンギスカン説はどのように広まったか」、NPO法人大阪府北部コミュニティカレッジ，豊中市立文化芸術センター，2020/9/8

橋本順光「透明人間現る—娯楽としての疎外と転覆の物語」，2020年度6月例会，怪異怪談研究会，オンライン，2020/6/14

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2021年度～2023年度、基盤研究(C) 一般、代表者:橋本順光

課題番号:21K00455

研究題目:近代日本の海洋文化振興における英国モデル転用についての比較文学的研究

研究経費:2021年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

開国以来、日本では海洋文化が振興され、特に1890年代の海軍拡大以降、南進論と共に官民一体で海国日本が強調された。その主張は、江戸時代に海洋文学が欠落したことを嘆き、英国をモデルとする点で共通している。倭寇を、17世紀英国の私掠船よろしく、通商拡大を支えた先駆者として再評価が始まるのも20世紀初頭のことであり、その一つの結実がスティーブンスンの『宝島』を村上水軍に置きかえた高垣眸の『龍神丸』(1925)である。こうした再評価は、倭寇に注目して日本は元来海洋帝国であったことを強調する英国での日本脅威論、なかでも元海軍中将バラードの『日本政治史における海の影響』(1921)と軌を一にしている。本研究では、これら日英の相関を調査し、倭寇小説との関連について解明を試みる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2019年度～2020年度、6：研究助成、助成金獲得者:橋本順光

助成金名:2019年度アジア歴史研究助成

研究題目:諜報記録にみるインド独立運動家とアジア主義者の交流とその表象

助成団体名:公益財団法人JFE21世紀財団

助成金額:1,500,000円 研究の目的:

英国政府に依頼され、日本及び中国のアジア主義者などの動向について膨大な報告書を送ったH・P・シャストリ(Hari Prasad Shastri)は、これまで十分に調査されてこなかった。Popplewell(1995)がこの「エージェントP」の正体を初めて指摘したが、R・B・ボース、サバルワル、ポール・リシャル、大川周明らの言動を報告した記録は等閑視されたままである。シャストリについて書かれた先行研究では、彼の証言がそのまま踏襲されているが、シャストリが孫文に招かれて上海に渡ったという説明を始め、その信憑性は極めて低い。日本の外交文書だけみても、アジア主義的な諸団体を隠れ蓑にして、諜報活動を続けたことは裏付けられるからである。したがって、シャストリが神智学協会上海支部長の際に発展したベサント・スクールは、アニー・ベサントからインド自治運動という反英的要素を抜き取り、女子教育に特化することで神智学協会を友愛の共同体として脱色した可能性が高い。シャストリが英国へ移住できたのも、日中で英国政府のために諜報活動を行った結果ととらえるべきだろう。こうしたシャストリの活動をふまえることで、シャストリが関与した事象を調査し、その再考を試みる。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

ジャポニズム学会・理事，2021年5月～現在に至る

日本ヴィクトリア朝文化研究学会・副会長，2020年4月～現在に至る

日本比較文学会・国際活動委員，2013年5月～現在に至る

ジャポニズム学会・奨励賞推薦委員，2017年3月～2020年5月

日本比較文学会・関西支部幹事，2009年4月～2020年6月

2. 鈴木 暁世 准教授

1977年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。大阪大学文学研究科助教、V&A（ロンドン）客員研究員、福岡女子大学専任講師、金沢大学准教授を経て、2020年4月より現職。専攻：日本近代文学、比較文学

2-1. 論文

鈴木暁世「戦間・戦時期日本におけるアイルランド文学の受容とナショナリズム—農民文学運動と W. B. イェイツ表象の変容—」『待兼山論叢』54, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 33-63, 2021/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

鈴木暁世(書評)「中田睦美著『芥川龍之介の文学と〈噂〉の女たち 秀しげ子を中心に』」中田睦美著『日本近代文学』(日本近代文学会), 102, pp. 130-133, 2020/5

2-4. 口頭発表

鈴木暁世「近代日本における「ケルト」表象の問題—ラフカディオ・ハーンと「国民性」をめぐる—」日本比較文学会関西支部例会, 日本比較文学会, オンライン開催, 2021/4

鈴木暁世「英国怪奇幻想ミステリと近代日本文学 — A. ブラックウッドと芥川龍之介、西條八十を中心に —」第17回第二次怪異怪談研究会, 怪異怪談研究会, オンライン開催, 2021/3

鈴木暁世「戦時下日本の国策とアイルランド文学—「英学史」の再検討に向けて—」シンポジウム「越境する美術、変容する文化」, 阪大比較文学会, JSPS 科研費(18K00314), 大阪大学(オンライン), 2021/1

鈴木暁世“Women’s Suffrage Movement or Japanese Propaganda?: Performance of Japanese Drama in Early 20th Century Britain” GLOBAL JAPANESE STUDIES RESEARCH WORKSHOP, 大阪大学「グローバル・ジャパン・スタディーズ」プログラム, 大阪大学(ハイブリッド), 2021/1

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2018年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:鈴木暁世

課題番号: 18K00314

研究題目:戦中戦後期農民文学の展開と変容の研究—アイルランド文学と東アジアとの関係を軸に

研究経費:2020年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

2021年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究課題の目的は、昭和戦中戦後期における農民文学の特色と問題点、同時代の状況と関わり合っていく文学者及び文学の様態を、アイルランド文学の東アジアにおける受容とその意味付けの変容に着目し、比較する事によって明らかにすることである。土地、国家、民族を問題とする際に、戦中戦後を通して重要な参照項であったアイルランド文学の受容と変容を手がかりに、近代日本の農民文学の特色を明らかにしたい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本文学協会・委員, 2021年1月～現在に至る

日本アイランド協会・理事、編集委員長, 2020年4月～現在に至る

日本近代文学会・運営委員、評議員, 2020年2月～現在に至る

日本比較文学会関西支部・幹事, 2020年1月～現在に至る

金沢大学国語国文学会・理事, 2014年4月～現在に至る

2-14 中国文学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：浅見 洋二

准教授：林 暁光

助教：陳 竺慧

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
6	7	2	1	0	0	0	0

*うち留学生1名、社会人学生0名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	2	4	0	0
2021	1	3	1	0
計	3	7	1	0

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

本専門分野は、主に清朝時代以前の漢語文献について、文言体と白話体の別なく、文献学的手法を用いて正確な訓詁を与える点に教育の主眼が置かれている。また、研究室内の教育・研究活動をより活性化するために、カリキュラムとは別に、教員スタッフを中心に研究会も組織されている。

こうした体制の成果として、近年、大学院生の学力はかなり向上し、学外からも一定の評価を受けるに至っている。たとえば、大学院生の論文は学会誌にも掲載されるようになってきている。

だが、一方で、学部・MC・DCの学力に合わせた、段階的なカリキュラム編成は必ずしも十分には整備されていない。これは主にスタッフの不足による。

今後は、大学院生、学部生ともに学生数を増やし、学年別に近いカリキュラム編成を取れるよう、努力したい。

2. 研究

教室構成員はそれぞれの分野で研究をすすめ、大学院生の論文の学会誌への掲載も見られる。ただし、大学院生に関しては在籍者の減少により、論文掲載の数は減少している。

海外、学外の研究者との連携も維持しており、教員の海外出張も行われている。

また、科学研究費の取得にもつとめ、教員スタッフは「基盤研究(B)」、「基盤研究(C)」等を取得している。

研究活動という面においては、本教室の教員は十分活性化されていると言えよう。今後もこの方向を維持できるよう努力し、学生獲得にも努力したい。

3. 社会連携

研究成果に関する報道機関の取材、執筆依頼等には積極的に協力することとし、研究室のHPを充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とした。また、研究室編著の学術的一般書等を刊行し、教員等が公開講座や講演会等に積極的に対応することによって、研究成果や専門知識の社会への還元を図りたい。その他、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼にも、積極的に対応したい。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

演習においては、基礎的な語学力の習得を意識した教育をおこない、講義においては、専門的知識の習得とその応用に主眼を置いた教育を行った。大学院生の研究計画・研究報告については、通常の授業時間ではスケジュールや研究テーマの絞込みをはじめ、研究テーマに即した事項を中心にディスカッションを行い、年度の初めと終わりに演習で発表させ、指導するほか、学会発表や論文の執筆に際しても綿密な指導をおこなってきた。

2. 研究

教員は科学研究費を取得して国内外の学会で研究発表を行ったほか、国内外の学術誌に論文を発表した。また、教員は日本中国学会や東方学会で専門委員等をつとめるなど、各学会において主導的活動を行った。

3. 社会連携

教員が年間で5回程度の公開講座・講演会を実現した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標はおおむね達成できたと考えている。卒業学生・修了大学院生以外の学生たちに関しても、中国学にかかわる基礎的知識、思考法について、教育実践によって一定の成果を獲得していると判断し得る。掲げた目標はおおむね達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・博士後期課程の大学院生については、目標はほぼ達成された。特に教員の研究活動については、この十年、一貫して高い水準を保っている。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についてもおおむね達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	0	0	0
2021	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	3(2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(2)
2021	2(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(1)
計	5(3)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	5(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	0	0	3	0	0	3
2021	0	3	0	0	0	3
計	0	3	3	0	0	6

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020年度】

〔博士前期〕

小川主税「反響する「中国青年」という声—張愛玲「茉莉香片」における理想の破綻」『日本中国学会報』72, pp.148-161, 査読有, 2020/10/10

小川主税「愛国舞台から飛び降りて——張愛玲「色、戒」における女学生の自己決定」、『第2回若手研究者フォーラム要旨集』,大阪大学文学研究科研究推進室,査読有, pp54-57,2020/9/28

〔博士後期〕

ファンダム・トム「日本漢詩壇がとらえた丁汝昌の降伏と自害—森槐南・勝海舟を中心に」『待兼山論叢・文学篇』第54号, pp.19-31,査読無, 2020/12/25

【2021年度】

〔博士前期〕

村田真由「文天における「孤臣」と「楚囚」」『待兼山論叢』第55号, pp.25-41,査読無, 2021/12/25

〔博士後期〕

小川主税「中国青年のアポリア——張愛玲「年青的時候」における男子学生表象」『野草』第106・107合併号, pp.185-206, 査読有, 2021/9/30

(2)口頭発表

【2020年度】

〔博士前期〕

小川主税「愛国舞台から飛び降りて——張愛玲「色、戒」における女学生の自己決定」,第2回若手研究者フォーラム,大阪大学豊中キャンパス,2020/9/28

小川主税「張愛玲の描く男子学生——「年青的時候」(1944)を例にして——」第5回大阪大学豊中地区研究交流会「知の共創」,大阪大学豊中キャンパス,2020/12/17

村田真由「「溝壑を填む」ということ—文天祥を中心に」,第3回若手研究フォーラム,大阪大学,ハイブリッド(両方), 2021/3/13

〔博士後期〕なし

【2021年度】

〔博士前期〕

村田真由「「溝壑を填む」ということ—文天祥を中心に」,日本中国学会第73回大会,愛知教育大学,オンライン, 2021/10/9

藍莫雅「「後死」について——白居易・陸游を中心に」,日本宋代文学学会第8回大会,大阪大学,オンライン, 2021/11/27

〔博士後期〕

小川主税「北京の愛、上海の愛—胡也頻とその初期小説」,日本中国学会第73回大会,愛知教育大学,オンライン, 2021/10/9

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

【2021年度】

[博士前期]

(翻訳) 村田真由「南宋總集における文章選擇の〈越境〉と文體の〈變成〉について—史部テキストの總集編入に関する一考察」(原著蔣旅佳)『日本宋代文學學會報』第8集, pp.24-44, 査読あり, 2021/12/25

[博士後期]

(書評) 小川主税「張愛玲生誕100周年を言祝ぐ 許子東『許子東細読張愛玲』」『中国文芸研究会会報』第478号, pp.1-3, 査読なし, 2021/8/26

(書評) 小川主税「中国が愛を知ったあと——濱田麻矢『少女中国——書かれた女学生と書く女学生の百年』」『中国文芸研究会会報』第484・485号, pp.11-16, 査読なし, 2021/3/26

(翻訳) 小川主税「茉莉香片(ジャスミン茶)」(著者張愛玲)『翻訳文学紀行Ⅲ』, ことばのたび社, pp.149-203, 2021/9/30

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2021年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2021年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2020年度～2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020年度～2021年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2020年度: 0名 2021年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度: 0名 2021年度: 0名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日本宋代文学学会事務局

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 浅見 洋二 教授

1960年生。東北大学大学院文学研究科博士課程中途退学。文学博士（京都大学、2009年）。東北大学助手、山口大学講師、同助教授、大阪大学助教授、同准教授を経て、2009年4月、現職。専攻：中国古典詩学

1-1. 論文

浅見洋二 「盲者のシンボリズム—韓愈「拘幽操」、孟郊「寄張籍」、そして『論語』微子を結ぶもの」東英寿編『唐宋八大家研究』中国書店, pp. 70-83, 2022/3

浅見洋二 「罪人の笑い—柳宗元と蘇軾」東英寿編『唐宋八大家研究』中国書店, pp. 160-166, 2022/3

浅見洋二 「さまざまな自責—蘇洵「自尤」詩をめぐる」東英寿編『唐宋八大家研究』中国書店, pp. 219-226, 2022/3

浅見洋二 「罪と田園、あるいは颯風について—蘇軾・陸游ノート」『大阪大学文学研究科紀要』(大阪大学文学研究科), 61, 大阪大学文学研究科, pp. 47-134, 2021/3

浅見洋二 「罪与田園—蘇軾、陸游研究的一个視点」『文学論衡』(香港中国語文学会), 36, 香港中国語文学会, pp. 12-29, 2020/6

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

浅見洋二 「光明与黑暗—中国“罪人”文学史初探」シンガポール国立大学中文系古典文学与思想研究群学術講座, シンガポール国立大学中文系, シンガポール国立大学(オンライン), 2022/3

浅見洋二 「罪人与盲者—中国文学中光明与黑暗的象徴体系」感受、類推与寄託—「興」的国際学術研討会, 台湾科技部人文司文學一學門、清華大學文論研究中心, 国立清華大学(ハイブリッド), 2021/12

浅見洋二 「陸游における田園と国家—「耕織図詩」「諭俗文」を手がかりに」日本中国学会第73回大会, 日本中国学会, 愛知教育大学(オンライン), 2021/10

浅見洋二 「陸游的郷村世界与耕織図詩」2021 台湾与東亜の文本・図像・視聴文化国際学術論壇 Text, Image and Audiovisual Culture of Taiwan and East Asia International Conference, シンガポール南洋理工大学・台湾文化光点計画主催, シンガポール南洋理工大学(オンライン), 2021/6

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2019年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:浅見洋二

課題番号:19K00369

研究題目:テキストの公と私—蘇軾の詩詞・書簡と文集編纂に関する研究—

研究経費:2020年度 直接経費 800,000円 間接経費 0円

2021年度 直接経費 800,000円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究は、北宋・蘇軾の詩詞・書簡テキストと文集編纂について、当時の文人社会の圏域・ネットワークと関連づけながら考察することを目的とし、(1)蘇軾の書簡と文集に関する文献学的研究、(2)蘇軾の詩詞と書簡の相互連関に関する研究、(3)蘇軾の書簡と奏議・詔勅・策論との比較研究の三つを基軸として実施する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本中国学会・副理事長, 2021年4月～現在に至る

日本中国学会・理事, 2017年4月～現在に至る

文部科学省・大学設置・学校法人審議会大学設置分科会 文学専門委員会委員, 2016年4月～2020年10月

日本宋代文学学会・会長, 2014年4月～2020年4月

日本中国学会・評議員, 2011年4月～現在に至る

中国社会文化学会・評議員, 2006年4月～現在に至る

2. 林 暁光 准教授

1981年生。復旦大学博士課程卒業。文学博士(復旦大学、2011年)。浙江大学講師、同副教授を経て、2021年4月より現職。専攻:中国文学

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

林暁光(訳)『『魏晉南北朝』(訳著、著者:川勝義雄)』九州出版社, 456p., 2022/1

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

林暁光 「漢魏六朝賦における「駢」について」日本中国学会第七十三回大会, 日本中国学会, 愛知大学(オンライン), 2021/10

林暁光 「松桂堂帖刻米芾手跡「浄名齋記」復原」台湾与東亜の文本・図像・視聴文化国際學術論壇, シンガポール図文学会, 南洋理工大学(オンライン), 2021/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

林晓光 第18回中国留日同学会会長賞(人文社科領域), 中国留日同学会, 2022/3

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 陳竺慧 助教

1988年生。2018年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程(中国語中国文学コース)研究指導終了退学。博士(文学)(早稲田大学、2019年)。2020年4月より大阪大学大学院文学研究科(中国文学)助教。(2022年3月退職)専攻:中国古典文学、日本填詞史。

3-1. 論文

陳竺慧 「昌平坂学問所における舶来詞籍の受容」『待兼山論叢 文学篇』55, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-23, 2021/12

陳竺慧 「「領字」から見る野村篁園の詞風—「清空」か「質実」か—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』61, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 135-150, 2021/3

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

陳竺慧 「龍榆生編選『唐宋名家詞選』訳注稿(十六)○吳文英・88-02 浣溪沙一首(門隔花深夢旧遊)」『風絮』18, 日本詞曲学会, pp. 309-312, 2021/12

陳竺慧 「日本宋代文学学会第八回大会報告」『日本宋代文学学会報』8, 日本宋代文学学会, pp. 161-164, 2021/12

陳竺慧 「日本宋代文学学会第七回大会報告」『日本宋代文学学会報』7, 日本宋代文学学会, pp. 77-80, 2020/12

3-4. 口頭発表

陳竺慧 「題画詞から見た日本近世における填詞の受容について—野村篁園と田能村竹田を中心に—」日本中国学会第73回大会, 日本中国学会, 愛知大学・オンライン, 2021/10

陳竺慧 「浅析江戸時代題畫詞的出現與發展」2021 台灣與東亞的文本・圖像・視聽文化國際學術論壇, 新加坡南洋理工大學人文學院, 台灣文化光點計劃文圖學會, 南洋理工大学・オンライン, 2021/6

陳竺慧 「「儒者」はなぜ「詞」を作るのか—昌平夔の填詞趣味について」日本中国学会第72回大会, 日本中国学会, 慶應義塾大学・オンライン, 2020/10

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2021年度～2024年度、若手研究、代表者:陳竺慧

課題番号:21K12916

研究題目:江戸後期における明清詞論の受容に関する研究—野村篁園とその門人たちを中心に—

研究経費:2021年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

本研究は、江戸後期の詞人である野村篁園とその門人たちが明清詞論をいかに受容し、創作に反映したのかを明らかにするものである。具体的な課題としては、大きく以下の三つが挙げられる。

①野村篁園とその門人たちの関連文献の収集と整理。

②野村篁園とその門人たちの詞の訳注。

③昌平齋に所蔵されていた詞籍の調査。

江戸詞人と明清詞論の関わりを明確に指摘することによって、日本の詞を日本漢文学史および東アジアの文化交流史の中で正しく位置づけたい。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-15 国語学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：金水 敏、岡島 昭浩

准教授：岸本 恵実

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
64	3	8	0	0	1	0	0

*うち留学生0名、社会人学生0名

**日本文学・国語学専修として

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	30	1	0	1
2021	22	1	1	2
計	52	2	1	3

*日本文学・国語学専修として

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

修士・博士論文作成演習の授業に連動して、学会発表、投稿論文作成等のための個別指導を行う。また院生が研究進捗状況を報告・発表しあう研究発表会を開催する。卒業論文作成演習の授業に連動して、個別指導を行うほか、卒業論文中間発表会を開き、学生の卒業論文完成に導く。専門機関の採用情報の入手につとめ、専門職への就職を積極的に支援する。国語学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知する。学部生と大学院生の学問的な連携体制を形成するために、授業形態等に工夫を行う。『待兼山論叢』『語文』等の学内雑誌及び学会誌への投稿を促す。

2. 研究

継続中の科学研究費に関わる研究を行うとともに、新たに科学研究費を申請する。研究を促進するために「大阪大学国

語国文学会」を開催し、学会機関誌『語文』を刊行する。研究を促進し、近隣大学の研究者と連携を深めるために、「国語彙史研究会」「国語文字史研究会」「土曜ことばの会」を開催する。

3. 社会連携

「Handai-Asahi 中之島塾」「懷徳堂古典講座」その他の社会連携講座に講師として参加する。

Ⅲ. 活動の概要(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

【2020 年度】

■学部：卒業論文発表会を 2020 年 10 月に実施した。日本文学・国語学専修のうち国語学 7 名の学生が卒論を提出した。ポスター掲示、メーリングリストその他の手段を通じて、展示会・学外研究会等の情報を広く周知した。

■大学院・共通：研究発表会を 2020 年 7 月および 11 月に実施した。1 名が博士前期課程を修了、1 名が博士学位申請論文を提出し、その 1 名に博士の学位を授与した。学部・大学院合同の講義を半期 4 コマ実施した。大学院生の論文が、学会誌等にのべ 11 本掲載され、研究発表が 7 本行われた、という状況である。

【2021 年度】

■学部：卒業論文発表会を 2021 年 10 月に実施した。日本文学・国語学専修のうち国語学 4 名の学生が卒論を提出した。ポスター掲示、メーリングリストその他の手段を通じて、展示会・学外研究会等の情報を広く周知した。

■大学院・共通：研究発表会を 2021 年 7 月および 11 月に実施した。1 名が博士前期課程を修了、2 名が博士学位申請論文を提出し、その 2 名に博士の学位を授与した。学部・大学院合同の講義を半期 4 コマ実施した。大学院生の論文が、学会誌等にのべ 3 本掲載され、研究発表が 3 本行われた、という状況である。

2. 研究

【2020 年度】

科学研究費に関わる研究では、「役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究」「知識受容の面からみたキリシタン対訳辞書の研究」「過去の速記原本を可読化するための日本語速記史の研究」が行われ、そのほか分担金によるものが複数行われた。「大阪大学国語国文学会」を 2021 年 1 月に実施、学会機関誌『語文』の第 114 輯(6 月)・115 輯(12 月)を刊行した。「国語彙史研究会」を 1 回(3 回の予定が、コロナ禍のため 2 回中止)、「土曜ことばの会」を 3 回(4 回の予定が、コロナ禍のため 1 回中止)開催した。

【2021 年度】

科学研究費に関わる研究では、「役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究」「知識受容の面からみたキリシタン対訳辞書の研究」「過去の速記原本を可読化するための日本語速記史の研究」が行われ、そのほか分担金によるものが複数行われた。「大阪大学国語国文学会」を 2022 年 1 月に実施、学会機関誌『語文』の第 116・117 輯金水敏教授・飯倉洋一教授退休記念特輯(3 月)を刊行した。「国語彙史研究会」を 3 回、「土曜ことばの会」を 4 回開催した。

3. 社会連携

【2020 年度】

金水教授が、

- ・ナカノシマ大学 2020 年 9 月講座(2020 年 9 月 5 日)
- ・「大阪(上方)落語と大阪弁」アクティブシニアをめざす科(認定 NPO 法人 大阪府北部コミュニティカレッジ)(2020 年 9 月 10 日)
- ・東京六稜倶楽部【第 213 回】東京六稜会(2020 年 9 月 19 日)

- ・「はちげんめっ！ 第6講（ゲスト：日本語学者 金水 敏先生）」YouTubeLive（2020年12月28日）
- ・2020年度3月フォーラム（公益財団法人 千里ライフサイエンス振興財団）（2021年3月25日）

に、岡島教授が

- ・NPO 法人大阪府北部コミュニティカレッジ（ONCC）の総合文化を学ぶ科（2020年9月29日）
「江戸時代の言葉について」

に、それぞれ出講した。

【2021年度】

金水教授が、

- ・「大阪弁の秘密 オノマトペ・「知らんけど」を中心に」知らなかったあんな話こんな話（認定 NPO 法人大阪府北部コミュニティカレッジ）（2021年4月22日）
- ・「漫画で使われる「役割語」の謎」知らなかったあんな話こんな話（認定 NPO 法人大阪府北部コミュニティカレッジ）（2021年10月14日）
- ・「上方落語と大阪弁」大阪狭山市熟年大学一般教養科目第6回（大阪狭山市）（2021年11月18日）
- ・サイエンスカフェ「マンガカフェ30「今年のマンガ界とマンガカフェをふり返るぞ！」」（京都精華大学国際マンガ研究センター、アートエリア B1）（2021年12月5日）

に、岡島教授が

- ・「江戸時代の言葉2」NPO 法人大阪府北部コミュニティカレッジの総合文化を学ぶ科（2022年3月29日）

に、岸本准教授が

- ・大阪・京都文化講座オンライン「東往西来―旅する人びとと文化」（本学文学研究科・立命館大学文学部共催）第2回「キリシタン宣教師が出会った日本各地のことばと文化」（2021年11月15日）

に、それぞれ出講した。

IV. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

学生は、多くの口頭発表を行い、学術誌に載った論文も多かった。論文のうち査読付き雑誌に掲載されたものも少なくなく、目標通りの達成と言える。

2. 研究

科学研究費では「知識受容の面からみたキリシタン対訳辞書の研究」「役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究」「過去の速記原本を可読化するための日本語速記史の研究」のほか、分担金による複数の研究が行われ、そのほか国立国語研究所の通時コーパスプロジェクトにおける研究などを行った。コロナ禍のため、文庫訪問調査などが行えない状況ではあったが、目標通りの達成と言える。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	1	0	1
2021	2	0	2
計	3	0	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

姜 盛文「楯取魚彦の『古言梯』とそれ以降の古典仮名遣い系統の仮名遣書についての研究」

主査：岡島昭浩 副査：金水敏 岸本恵実

李宰錫「カタカナ表記の〈機能〉に関する一考察」

主査：金水敏 副査：岡島昭浩 岸本恵実

Sven Sebastian Lindskog「スウェーデン語と日本語における役割語の対照研究－〈時代の言葉〉を中心に－」

主査：金水敏 副査：岡島昭浩 岸本恵実

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	5(5)	0(0)	1(1)	0(0)	3(2)	9(8)
2021	2(2)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(2)
計	7(7)	1(0)	1(1)	0(0)	3(2)	12(10)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	1	5	1	0	0	7
2021	0	3	0	0	0	3
計	1	8	1	0	0	10

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

伊藤智弘「『字鏡集』の字音掲載方針について」『訓点語と訓点資料』第145号, pp.67(左37)-40(左59), 査読有, 2020/9/30

伊藤智弘「合点を手がかりとする『字鏡集』の検討」『訓点語と訓点資料』第146号, pp.-, 査読有, 2021/03

Sven Sebastian Lindskog「『1Q84』のふかえりによる日瑞訳の話し方について」『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告

書』第号, pp.49-62, 査読無, 2021/3/25

李宰錫「<内容><表記><文体>の関係に関する一考察 - 戦前の雑誌資料を中心に -」『日本研究』第 86 号, pp.185-205, 査読有, 2020/12/

姜盛文『古言梯』以降の古典仮名遣い系統の仮名遣書について—漢語に注目して—『日語日文学研究』第号, pp.111-136, 査読有, 2020/8/31

姜盛文『古言梯』以降の古典仮名遣い系統の仮名遣書における非古典仮名遣い表記について—一家仮名遣い系統の仮名遣書と比較して—『待兼山論叢』第 54 号, pp.41-66, 査読有, 2020/12/25

姜盛文「楫取魚彦の『古言梯』の編集意識について—収録語の配列に注目して—」『日本研究』第 87 号, pp.229-259, 査読有, 2021/2/28

姜盛文『和字便覧』における『和字正濫鈔』と『古言梯』の影響について『日本学報』第号, pp.103-120, 査読有, 2021/2/28

藤本能史「近世前半期版本医学書における引用・卓立を示す補助符号について」『語文』第 115 号, pp.49-63, 査読有, 2020/12/10

【2021 年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

藤本能史「近世期蘭学資料における引用・卓立を示す補助符号の使用実態について—鉤括弧・傍線を中心に—」『待兼山論叢文学篇』第 55 号, pp.59-79, 査読有, 2021/12/25

伊藤智弘「合点を手がかりとする「字鏡集」の検討」『訓点語と訓点資料』第 146 巻, pp.162-135, 査読有, 2022/3/31

伊藤智弘「合点を手がかりとする「字鏡集」の検討・統一朱筆合点について」『訓点語と訓点資料』第 147 巻, pp.105-81, 査読有, 2021/9/30

(2) 口頭発表

【2020 年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

伊藤智弘「「字鏡集」の字音掲載方針について」, 第 122 回訓点語学会研究発表会, 京都大学, 対面, 2020/05/24 (コロナ対応により中止)

伊藤智弘「合点を手がかりとする「字鏡集」の検討」, 第 123 回訓点語学会研究発表会, オンライン, 2020/10/18

伊藤智弘「「字鏡集」所載「四声綱目」について」, 令和 3 年度大阪大学国語国文学会, オンライン, 2021/1/9

西谷龍二「中世末期上方～近代大阪における「ーオル」・「ーヨル」の運用—一人称の変化に着目して—」, 2020 年第 3 回土曜こたばの会, オンライン, 2020/7/4

西谷龍二「中世末期～近代における上方語・大阪方言の「ーオル」・「ーヨル」—一人称に着目して—」, 日本語学会 2020 年度秋季大会, オンライン, 2020/10/24

李宰錫「漫画における発話の片仮名表記—役割語要素として機能する時期についての—考察—」, 韓国日本語文化学会 2020 年度 秋季国際シンポジウム, オンライン, 2020/11/14

姜盛文『古言梯』以降の古典仮名遣い系統の仮名遣書について—漢語に注目して—」, 日本語学会 2020 年度春季大会, 東京外国語大学, その他, 2020/05/16 (コロナ対応により中止であるが発表認定)

【2021 年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

黒星淑子「助詞「へ」の受ける語についての—考察—場所から人物への拡張—」, 日本語学会, オンライン, 2021/10/30

伊藤智弘「合点を手がかりとする「字鏡集」の検討・統一朱筆合点について」, 訓点語学会研究発表会, オンライン, 2021/5/23

西谷龍二「卑罵語の歴史的変化について—前接動詞を中心に—」, 令和4年(2022年)度 大阪大学国語国文学会総会, 大阪大学, オンライン, 2022/1/8

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

黒星淑子「紹介 竹内史郎・下地理則編『日本語の格表示と分裂自動詞性』『語文』第114号, pp.63-63, 査読無, 2020/8/31

【2021年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2021年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2021年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2020年度～2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

久田 行雄、博士後期課程修了、北海道教育大学釧路校、専任講師、2020/4

蜂矢 真弓、博士後期課程修了、京都ノートルダム女子大学、専任講師、2021/4

河野 光将、博士後期課程修了、東京都立産業技術高等専門学校、助教、2021/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020年度～2021年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業等で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2020年度: 1名 2021年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2020年度：0名 2021年度：1名

9. 刊行物

2020年度 『語文』(大阪大学国語国文学会)第114輯・115輯

2021年度 『語文』(大阪大学国語国文学会)第116・117輯

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

事務局	国語語彙史研究会	2002年度以前から現在に至る
	国語文字史研究会	2002年度以前から現在に至る
	土曜ことばの会	2002年度以前から現在に至る
研究会	土曜ことばの会開催 4回	
	国語語彙史研究会開催 7回	

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

*(日本文学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会 (1月 1日間)

研究誌「語文」を年2回編集・発行

*(日本文学, 比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会 (10月 4日間)

大学院研究発表会 (7月・11月 各2日間)

専門分野主催の研究会等の活動については、10.に詳述した。

12. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 金水 敏 教授

1956年生。1982年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学。博士(文学)(大阪大学、2006年)。東京大学助手、神戸大学教養部講師、大阪女子大学助教授、神戸大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。(2022年3月定年退職)
専攻：国語学／言語学

1-1. 論文

金水敏 「ポライトネスとキャラクター」『敬語の文法と語用論』開拓社, pp. 342-358, 2022/3

金水敏 「村上春樹と関西方言について ―遠心的／求心的な移動とポリフォニー―」『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書』5, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 79-90, 2022/3

金水敏 「《キャラクター》と《人格》の観点からフィクションを読む―『海辺のカフカ』を例として―」『国語と国文学』99-1, 明治書院, pp. 3-19, 2022/1

金水敏 「《キャラクター》と《人格》について」『《キャラクター》の大衆文化 伝承・芸能・世界』KADOKAWA, pp. 31-54, 2021/11

金水敏 「ポピュラーカルチャーのことば」『日本語学』40-1, 明治書院, pp. 4-13, 2021/3

金水敏 「近・現代小説の片仮名の用法一斑―村上春樹『海辺のカフカ』を中心に―」『日本語文字論の挑戦―表記・文字・文献を考えるための17章―』勉誠出版, pp. 26-58, 2021/3

金水敏 「第15章 事態把握と受動文」岸本英樹・于康(編)『日語語法研究(上)』外語教学与研究出版社, pp. 546-558, 2021/1

金水敏, 劉 翔(共著)「中国・抗日作品のメディアミックスと日本人表象—『鶏毛信』を例に—」秦かおり・佐藤彰・岡本能里子(編)『メディアとことば』(メディアとことば研究会), ひつじ書房, pp. 98-116, 2020/11

金水敏「村上春樹と関西方言について—遠心的／求心的な移動とポリフォニー—」中村三春(監修)・曾秋桂(編集)『村上春樹における移動』(村上春樹研究センター), 淡江大学出版中心, pp. 23-40, 2020/7

1-2. 著書

金水敏(編)『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(5)』科学研究費助成事業「役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究」, 86p., 2022/3

金水敏(編)『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(4)』科学研究費助成事業「役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究」, 95p., pp. 79-90, 2021/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

金水敏「役割語で読み解く CM キャラクター「第 13 回 “今”を映す時代劇 CM」」『宣伝会議』966, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2022/3

金水敏「巻頭言 No. 166「新入社員のみなさんへ／言葉の“資産”を増やそう」」『TOYRO BUSINESS』196, 自然総研, pp. 1-1, 2022/3

金水敏「疑問水解」『毎日小学生新聞』毎日新聞, pp. 2-2, 2022/2

金水敏「役割語で読み解く CM キャラクター「第 12 回 日本語の関節をはずす「カップヌードル」の CM」」『宣伝会議』965, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2022/2

金水敏「役割語で読み解く CM キャラクター「第 10 回 「はまい」「レモい」形容詞を作り出す広告」」『宣伝会議』963, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/12

金水敏「役割語で読み解く CM キャラクター「第 11 回 CMに見る動物のことば」」『宣伝会議』964, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/12

金水敏「役割語で読み解く CM キャラクター「第 9 回 権力者語としての〈男ことば〉」」『宣伝会議』962, 宣伝会議オンライン, pp. 167-167, 2021/11

金水敏「とことん調査隊」『日本経済新聞』日本経済新聞, pp. 9-9, 2021/10

金水敏「役割語で読み解く CM キャラクター「第 8 回 ビジネス界を覆う雲」」『宣伝会議』961, 宣伝会議オンライン, pp. 199-199, 2021/10

金水敏「明日への LESSON」『朝日新聞』朝日新聞, pp. 23-23, 2021/9

金水敏「役割語で読み解く CM キャラクター「第 7 回 「UQ モバイル」三姉妹「だぞっ」の研究」」『宣伝会議』960, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/9

金水敏「役割語で読み解く CM キャラクター「第 6 回 キムタクの「現場感」を生むことば」」『宣伝会議』959, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/8

金水敏「ジブリを語る」『中日新聞』中日新聞, pp. 25-25, 2021/7

金水敏「役割語で読み解く CM キャラクター「第 5 回 CM における宇宙人と宇宙人語」」『宣伝会議』958, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/7

金水敏「役割語で読み解く CM キャラクター「第 4 回 関西弁 CM のメリットとリスク」」『宣伝会議』957, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/6

金水敏「現代に生きる文語」『AJALT』44, 公益社団法人国際日本語普及協会, pp. 17-21, 2021/6

金水敏「役割語で読み解く CM キャラクター「第 3 回 三太郎の言語は“子ども”語」」『宣伝会議』956, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/5

金水敏「関西弁とオノマトペ」『TOYRO CULTURE』171, 自然総研, pp. 9-19, 2021/5

金水敏(インタビューを構成)「先生教えて 研究っておもしろい!」第 26 回「役割語」って知ってる?」『関塾タイムス』45-4, 関塾,

pp. 20-21, 2021/4

金水敏 「役割語で読み解く CM キャラクター」第 2 回 アルムおんじの“チャライ”キャラ』『宣伝会議』955, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/4

1-4. 口頭発表

金水敏 「言語行為と日本語のモダリティ、構文の間の関連性について」大阪大学国語国文学会総会, 大阪大学国語国文学会, オンライン, 2022/1

金水敏 「翻訳におけるジェンダー・バイアスを克服することは可能か」日本通訳翻訳学会関東支部例会, 日本通訳翻訳学会関東支部, オンライン, 2022/1

金水敏 「フィクションにおけるキャラクターと言語について」駿河台大学総合研究所シンポジウム, 駿河台大学総合研究所, 駿河台大学, ハイブリッド, 2021/11

金水敏 「《人格》、《キャラクター》と“霊的事象” -『千と千尋の神隠し』『海辺のカフカ』を例に -」役割語研究会, 科学研究費助成事業「役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究」(研究代表者: 金水 敏), オンライン, 2021/9

金水敏 「キャラクターを翻訳する-村上春樹作品を中心に-」日本通訳翻訳フォーラム 2021, 日本会議通訳者協会 (JACI), オンライン, 2021/8

金水敏 「村上春樹の小説における《人格》と《キャラクター》の逸脱-『騎士団長殺し』とその翻訳を中心に-」第 10 回村上春樹国際シンポジウム「村上春樹文学における「逸脱」」, 村上春樹研究センター, 淡江大学, ハイブリッド, 2021/6

金水敏 「日本語「ノダ文」の情報構造」関西言語学会 第 46 回大会, 関西言語学会, オンライン, 2021/6

金水敏 「Speech Style of the Commendatore in Haruki Murakami's Killing Commendatore and its English Translation」Japanese Language in Fiction, Japanese Studies Centre seminar, Monash University, Monash University, オンライン, 2021/5

劉 翔, 金水敏 「中国・抗日作品のメディアミックスと日本人表象-『鶏毛信』のさらなる発展もふまえて-」メディアとことば研究会, メディアとことば研究会, オンライン, 2021/3

金水敏 「キャラクターと「人格」について-主にテキストにおける-」役割語研究会: 役割語研究会, 科学研究費助成事業「役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究」(研究代表者: 金水 敏), オンライン, 2020/9

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

金水敏 第25回新村出賞, 新村出版記念財団, 2006/11

原口裕, 南出康世, 金水敏 豊田賞, 日本英学史学会, 1992/10

金水敏, 田窪行則 日本認知科学会論文賞, 日本認知科学会, 1991/7

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2019 年度～2021 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 金水敏

課題番号: 19K00574

研究題目: 役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究

研究経費: 2020 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

2021 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

研究の目的:

本研究では、フィクションの登場人物の発話が表現する人物像に着目し、これを「役割語・キャラクター言語」の観点から分析するとともに、その翻訳の(不)可能性や代替手段について研究し、人物像の描写の観点から見た翻訳の評価について探求を進める。具体的な方法としては、村上春樹の小説作品の各国語訳と原典との対照、またさまざまな外国語作品の日本語訳の分析を語彙・文法等言語学的な観点から進めるとともに、発話以外の部分や非言語的な側面、また物語の構造とアーキタイプ等にも着目して進めていく。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学士院・会員, 2020年12月～現在に至る
地方裁判所委員会・委員, 2019年7月～現在に至る
日本語学会・会長, 2018年6月～2021年5月
訓点語学会・委員, 2015年4月～現在に至る
日本言語学会・評議員, 2015年4月～現在に至る
日本学術会議・連携会員, 2014年10月～現在に至る
日本語学会・評議員, 2014年4月～現在に至る
関西言語学会・委員, 1996年4月～現在に至る

2. 岡島 昭浩 教授

1961年生。1987年、九州大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士（九州大学、1986年）。九州大学文学部助手、京都府立大学女子短期大学部講師・助教授、福井大学教育学部（教育地域科学部）助教授、文学研究科助教授・准教授を経て2010年より現職。専攻：国語史・日本語学史

2-1. 論文

岡島昭浩 「近代語資料としての『史談会速記録』」『コーパスによる日本語史研究 近代編』ひつじ書房, pp. 251-268, 2021/11

岡島昭浩 「昭和初期、福岡県直方の方言矯正書二種」『筑紫語学論叢Ⅲ』風間書房, pp. 224-235, 2021/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

岡島昭浩 「索引や語集の集成について——『国語語彙史の研究』語彙累積索引の作成を契機として——」第126回国語語彙史研究会, 国語語彙史研究会, オンライン, 2021/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2020年度～2022年度、挑戦的(開拓・萌芽)研究、代表者:岡島昭浩

課題番号:20K20698

研究題目:過去の速記原本を可読化するための日本語速記史の研究

研究経費:2020年度 直接経費 1,600,000円 間接経費 480,000円

2021年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

研究の目的:

従来、速記原本の解読は、速記を行った本人によってのみ行われることであった。速記原本を目にしても、どの速記方式によるかの認定法などは考えられてこなかった。それを認定する方法を確立し、解読に繋げようというのが本研究である。

歴史的価値のある速記原本が存在しても、速記から年月が経過し、さらに速記者本人が亡くなると解読は困難となるが、不可能ではないことが示せれば、貴重な資料である速記原本の死蔵・廃棄を抑止する効果がある。

また、速記原本や速記教本類を系統的に収集整理することは、いわば速記のロゼッタストーンを残すことになるものであり、しかも、それ自体に解読の鍵を含ませたものともなるのである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

訓点語学会・委員, 2017年8月～現在に至る

日本語学会・評議員, 2009年6月～現在に至る

国語文字史研究会・委員, 2008年4月～現在に至る

国語語彙史研究会・委員, 2003年4月～現在に至る

3. 岸本 恵実 准教授

1972年生。2000年、京都大学大学院文学研究科国語学国文学専修博士後期課程研究指導認定退学。博士（文学）（京都大学、2003年）。大阪外国語大学助手・講師・助教授、国際基督教大学准教授、京都府立大学准教授を経て、2017年4月より現職。専攻：国語学

3-1. 論文

岸本恵実 “*Vocabulario da lingua de Iapam and Portuguese dictionaries in the seventeenth century.*” *Múltiplas faces de pesquisa japonesa internacional: integralização e convergência.*, pp. 45-57, 2021/12

岸本恵実 “Some remarks on Alexandre de Rhodes’s linguistic works on Vietnamese: the influence of João Rodrigues’s Japanese grammars.” *Missionary Linguistics VI. Missionary Linguistics in Asia.*, pp. 189-200, 2021/11

岸本恵実 『日葡辞書』における動物に関する記述—馬を中心に— 『国語語彙史の研究』40, 和泉書院, pp. 45-61, 2021/8

岸本恵実 「芥川龍之介「切支丹物」にみられる外来語・外国語」 『近世日本のキリシタンと異文化交流 中間成果報告集』 (2017～2020年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(一般)17H02392)), pp. 74-90, 2021/2

Yoshimi Orii, Zamora Calvo, María Jesús, Kishimoto, Emi et al., (共著), “LEXICOGRAFÍA LATINA EN JAPÓN: *DICTIONARIUM LATINO LUSITANICUM, AC IAPONICUM*(1595)” *Cruces y áncoras. La influencia de Japón y España en un Siglo de Oro global*, Abada Editores, pp. 179-199, 2020/11

岸本恵実 「2018年・2019年における日本語学界の展望 研究資料」 『日本語の研究』(日本語学会), 16-2, 日本語学会, pp. 13-20, 2020/8

3-2. 著書

岸本恵実, 白井純, 岩澤克他(共著) 『キリシタン語学入門』八木書店, pp. 2-11, 36-38, 67-72, 126-140, 2022/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岸本恵実他(共著) 『明解日本語学辞典』三省堂, pp. 45-45, 94, 96-97, 124, 158, 2020/5

3-4. 口頭発表

岸本恵実 「コルディエ『日本書誌』(*Bibliotheca Japonica*)について」第4回コルディエ文庫研究会, コルディエ文庫研究会, オンライン, 2022/3

岸本恵実 『『羅葡日辞書』対訳にみえる単位換算のゆれ』第14回キリシタン語学研究会, キリシタン語学研究会, オンライン, 2021/9

岸本恵実 「芥川龍之介南蛮物の「上人」」第12回京都府立大学国語学研究会, 京都府立大学国語学研究会, オンライン, 2021/9

岸本恵実 「伊曾保物語の「ばすとる」(羊飼い) —キリシタン版と国字本をつなぐことば」よみがえったイソップ絵巻『絵入卷子本「伊曾保物語」』刊行記念トークイベント, イタリア東方学研究所・フランス国立極東学院 京都支部・京都大学人文科学研究所, オンライン, 2021/5

岸本恵実 「「奉教人の死」「きりしとほろ上人伝」の外来語表記」国際芥川龍之介学会 ISAS 第2回研究集会, 国際芥川龍之介学会, オンライン, 2021/3

岸本恵実 『『日葡辞書』と17世紀のポルトガル語辞書』第13回ブラジル日本研究国際学会・第26回全伯日本語・日本文学・日本文化大学教師学会, ブラジル日本研究協会, ブラジリア大学(オンライン), 2021/3

岸本恵実 「『日葡辞書』における動物に関する記述—馬を中心に—」第12回キリシタン語学研究会, キリシタン語学研究会, オンライン, 2020/9

Kishimoto, Emi, “Description of Japanese Animals in the *Vocabulario da lingua de Iapam* (1603-1604)”, International Symposium on Jesuit Studies. Engaging the World: The Jesuits and Their Presence in Global History, Institute for Advanced Jesuit Studies at Boston College and Brotéria in Lisbon, Universidade Católica Portuguesa (コロナ対応により学会中止), 2020/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2019年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岸本恵実

課題番号: 19K00626

研究題目: 知識受容の面からみたキリシタン対訳辞書の研究

研究経費: 2020年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

2021年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

キリシタン版『羅葡日対訳辞書』(1595年刊)は、ヨーロッパで版を重ねたラテン語辞書『カレピヌス』諸版のうち、1580年リヨン版を主要な典拠にしたとみられる。本研究では知識受容に着目し、(A)『カレピヌス』との比較、(B)『日葡辞書』との比較という二つの柱を立て、『羅葡日辞書』の翻訳の特徴を明らかにする。(A)では、『カレピヌス』にみられる西欧の古典・知識受容のあり方と、それらの『羅葡日』における翻訳方法を調査する。(B)では、(A)の様相と比較しつつ、日本語文献を多数参照している『日葡辞書』(1603・1604年刊)を調査し、知識受容の面での二辞書の共通点および相違点を浮き彫りにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

国語語彙史研究会・編集主任, 2019年5月～現在に至る

2-16 英米文学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 3 准教授 1 外国人教師 1 助教 1

教授：片渕 悦久、石割 隆喜、山田 雄三

准教授：森本 道孝

外国人教師：ポール・ハーヴィ

助教：好井 千代

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
22	4	3	0	0	0	0	0

*うち留学生2名、社会人学生0名

**英米文学・英語学専修として

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	10	1	1	1
2021	7	2	0	0
計	17	3	1	1

*英米文学・英語学専修として

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

大学院・学部の教育においては、広い視野で学生が自己の学習や研究を位置づけられるよう、講義・演習を構成し、卒業・修了時まで社会で要請される基礎的能力を習得できるよう講義・演習・論文指導などを配置することを目標とした。大学院生については、①修士論文作成演習、博士論文作成演習の授業をより活性化し、論文執筆能力をつけさせる。②文学テキストを読解し、分析する力の増進をはかり、プレゼンテーション能力の涵養をはかる。③各種学会での口頭発表の申し込み、各種学術誌への投稿を積極的に勧めることを目標とした。また学部学生については、①英米文学全般についての幅広い知識と教養を身につけさせる。②卒業論文の作成に向けて積極的な指導を行う。③英語の総合的力をつけ自己表

現技術を身につけさせることを目標とした。さらに、大学院生と学部生の交流を図り、教育の面で相互に協力し刺激しあう態勢をつくることも、大学院・学部双方にわたる目標とした。

2. 研究

教員・大学院生は毎年最低 1 回の研究成果を、各種学会で口頭および論文の形で行うよう積極的に研究活動を継続する。また、教員全員が代表者として科学研究費補助金を中心とした競争的外部資金の獲得に努めるようにすることを目標とした。教員は大学院生、学部学生の研究意欲を高めるために学外研究者と協力して、院生執筆者を含む共同の研究書・書物の刊行を心がける。また、同窓の研究者と連携して、阪大英文学会、阪大英文学会刊行物のいっそうの充実をめざすことも目標とした。

3. 社会連携

卒業生との連携を密にして、その多彩な才能を多方面に活用するためのシステムの立ち上げを考える。また、出版社と共同企画をし、英米文学を専攻する大学院生および学部学生のための教科書やガイドブック等の編集・刊行を実現する。さらに、大学院生に国際的感覚を付けさせるために英米の大学に派遣するプログラムを継続的に実施することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

講義・演習では基礎から応用までのスキルの習得がなされ、ほぼ当初の計画どおりの成果があがっている。大学院・学部ともにテキストの読解力は向上してきている。また、論文作成に関する指導が細やかに行われた結果、研究発表も活発で、大学院生の学会での口頭発表や学会誌への論文発表などが活発に行われていることがそのことを実証している。研究室の物理的整備などを工夫したこともあり、院生・学部生間の交流も進み、研究室の雰囲気はきわめて良好な状態を保っていると言える。基本的な書籍のさらなる充実および勉学をサポートする設備の充実を目指す計画を進行中である。

2. 研究

【2021 年度】

当該年度中は教員のほぼ全員が科学研究費補助金を獲得し、著書・論文を刊行するなど目覚ましい活躍を続けている。また執筆者に大学院生を含む阪大英文学会叢書はすでに第 8 巻まで出版を終えているが、2018 年度からの阪大英文学会の中堅・若手を中心とした新たな叢書刊行計画が進行中で、原稿の査読などを経て、出版に向けて着々と準備が継続されている。院生の研究発表については 1. においてもふれたように、口頭・論文ともに堅調を維持しており、目標は十分に達成されたとと言える。

3. 社会連携

【2021 年度】

卒業生を研究会等に継続的に招聘するなど、大きな教育的成果を挙げた。大学院生を活用した教科書・ガイドブックはすでに刊行され好評を得ているが、さらなる出版計画を考慮中である。また海外派遣については、現在のコロナ禍により引き続き厳しい状況であるが、状況が落ち着いた後の再開を目指し、今後も長期継続が望めるようにプログラム（ペンシルベニア大学派遣）を整えているところである。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

学部学生については日頃のクラス内での取組や卒業論文の出来から判断して比較的水準の高い成果が出ている。また、このところ学部学生から多くの海外留学生が出ているのは教育指導面での成果の表れであると自負している。大学院生については、すでに述べた学会活動などで外部から高い評価を得ており、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・大学院生の全員が口頭・論文・著書等で成果を世に問うという目標は達成できた。その他の学会関連の各種委員への就任など活動も含め、外部から高い評価を得ている点を考慮しても目標は達成されたと考えられる。

3. 社会連携

同窓生との連携、海外との連携などに代表されるように、この面でも社会連携の責任はほぼ達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	1	0	1
2021	0	0	0
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

宮原 駿 Shit in the Works of James Joyce: The Representation of the Inexpressible within the Waste Images in *Finnegans Wake*, 2021/03

主査：山田雄三 副査：服部典之、片渕悦久、石割隆善、森本道孝

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
2021	0(0)	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)
計	0(0)	3(3)	0(0)	0(0)	0(0)	3(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	0	2	0	0	0	2
2021	0	1	0	0	0	1
計	0	3	0	0	0	3

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020 年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕

西口 暖乃 "The Rebellious Imagination of Frankenstein's Monster: The Different Ways to Save Female Monsters between Shelly and Wollstonecraft" 『待兼山論叢』(文学篇) 第 54 号, pp.67-80, 査読有, 2020/12/1

【2021 年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕

永田優衣 「Representation of Inner Thoughts in Eugene O' Neill' s Later Plays」『待兼山論叢 文学篇』第 55 号, pp.19-33, 査読有, 2021/12

篠直樹「消費する都市、消費される自己——『宙ぶらりんの男』における物語形式と自意識の臨界」『ソール・ベロー 都市空間と文学』, pp.85-106, 査読有, 2022/2/15

(2)口頭発表

【2020 年度】

〔博士後期〕

篠 直樹「『日記』としてのシティ・ナラティブ——Dangling Man における形式と自意識の開域」, 第 32 回 日本ソール・ベロー協会大会, オンライン, 2020/9/6

篠 直樹「語りの戦略と第三世代のユダヤ・アメリカ・アイデンティティ——Foer の Extremely Loud & Incrdeibly Close における時空間的ディアスポラ」, 日本アメリカ文学会第 59 回 全国大会 代替措置(発表原稿ウェブ掲載), オンライン開催, その他, 2020/10/3

【2021 年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕

篠直樹「ユダヤ性、空白、そして幽霊——Nicole Krauss の The History of Love における Ghostly Un-Braided Narrative」, 第 33 回ソール・ベロー協会大会, オンライン, 2021/9/4

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020 年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕 なし

【2021 年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕 なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3 年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2021 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2021 年度 学部 : 1 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020 年度～2021 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

宮原 駿、博士後期課程修了、関西外国語大学外国語学部、助教(常勤)、2021/04

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020 年度～2021 年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業等で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2020 年度 : 0 名 2021 年度 : 0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名

その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2020 年度 : 0 名 2021 年度 : 0 名

9. 刊行物

2020 年度 *Osaka Literary Review (OLR)* No. 59, 2021/1

2021 年度 *Osaka Literary Review (OLR)* No. 60, 2022/1

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 服部 典之 教授

1958年生。1981年、大阪大学文学部(英文学専攻)卒業。1983年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。同博士課程中途退学。文学博士(大阪大学、2003年)。和歌山大学教育学部助手、大阪大学言語文化学部講師、同准教授を経て、2000年10月文学研究科助教授、2008年4月より現職。(2021年3月退職) 専攻:英文学

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

Hattori, Noriyuki, 小川公代, 鈴木実佳他(共著), *Johnson in Japan*, Bucknell University Press, 191p., pp. 105-115, 2021/1

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

服部典之 大阪大学共通教育賞(2003年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2004/1

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2018年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:服部典之
課題番号:18K00371

研究題目:移動と地政学—「イギリス/英語」小説に見る地理学的想像力

研究経費:2020年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

小説の物語展開に登場人物の地理学的移動が伴わないものはないが、殊にイギリス小説では、移動、特に海外への出立および母国と相手国間の地政学的葛藤を伴うのが大きな特徴だ。従来研究で「旅行文学」という簡便なジャンルに分類された作品群は、交易を伴ったグローバルネットワークの絶え間ない変化と更新に伴う流動的物語として地政学的見地から包括的に捉えなおす必要がある。イギリス国内においても、1707年にイングランドと合同しながら今日まで緊張関係を持つスコットランドの作家が、海外移動をよくテーマとしている意味を探ることは、連合王国のEU離脱問題の根本を考えると文学からの現状分析提示へと繋がることになる。本研究は昔の文学を美学的に読解するだけのものではなく、今日的な困難なグローバルネットワークを視野に入れ、現代社会の不安定化をもたらす地政学的闘争に対する文学的提言を行おうとする、野心的研究である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部理事会・理事, 2011年4月～現在に至る

2. 片瀨 悦久 教授

1965年生。1995年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士（大阪大学、1991年）。博士（文学）（大阪大学、2007年）。北陸大学講師、同志社女子大学講師、助教授を経て、2003年4月文学研究科助教授、2013年4月現職。専攻：アメリカ文学

2-1. 論文

片瀨悦久 “Boundaries of Narrative Renewal: Storyworld (Re)conceptualization in the Transfictional Processes of Reception and Creation” *Kwansai Review*, 39, pp. 1-12, 2022/3

2-2. 著書

片瀨悦久『新版 物語更新理論入門』学術研究出版／ブックウェイ, 166p., 2021/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本ソール・バロー協会・理事, 2009年4月～現在に至る

関西英語英米文学会・理事, 2008年4月～現在に至る

3. 石割 隆喜 教授

1970年生まれ。大阪外国語大学外国語学部（英語学科）卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程（英文学専攻）修了。博士（文学）（大阪大学、1999）。大阪外国語大学助手、講師、助教授、准教授、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2019年4月より現職。日本英文学会第22回新人賞(1999)。専攻：アメリカ文学

3-1. 論文

なし

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

石割隆喜「神を見る “Star-Gazer”——*Mason and Dixon* における科学と宗教」日本英文学会関西支部第 16 回大会, 日本英文学会関西支部, オンライン, 2021/12

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

石割隆喜 日本英文学会第22回新人賞, 日本英文学会, 1999/12

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2020 年度～2022 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:石割隆喜

課題番号:20K00415

研究題目:ピンチオン文学における科学と人文学との接点について——「見ること」という観点から

研究経費:2020 年度 直接経費 400,000 円 間接経費 120,000 円

2021 年度 直接経費 400,000 円 間接経費 120,000 円

研究の目的:

本研究は、トマス・ピンチオンの作品全体を内容と形式の両面において貫くテーマが「見ること」という観点からピンチオン文学を捉え直そうという研究の一環として、特に小説『メイスン&ディクスン』とエッセイ「ラッドライトをやってもいいのか?」を取り上げ、両作品における科学と人文学との接点に注目し、そこから、モダニズム小説の特徴とされる認識論とポストモダニズム小説の特徴とされる存在論がピンチオンにおいていかに混在し、せめぎ合っているかを明らかにしようとするものである。『メイスン&ディクスン』では観測する星の運行の背後に神を見る 18 世紀の科学者、「ラッドライトをやってもいいのか?」では産業革命を苦難として主観的に経験する側の視点からの「二つの文化」論への応答という形で、両作品において「見ること」を通じて科学(天文学と産業革命)と人文学(宗教と心の哲学)が接点をもっていると考えられ、この点を検証してゆく。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会関西支部・大会準備委員, 2021 年 6 月～2021 年 10 月

日本アメリカ文学会関西支部・大会運営委員, 2019 年 4 月～現在に至る

日本アメリカ文学会関西支部・評議員, 2011 年 4 月～現在に至る

4. 山田 雄三 教授

1968 年生。1990 年大阪大学文学部卒業。1995 年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。1995-2013 年、大阪大学言語文化部、同大学院言語文化研究科講師、助教授、准教授を経て、2013 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2020 年 4 月より現職。専攻: 英文学/文化理論研究

4-1. 論文

山田雄三 “The Lasting Legacy of Richard Tarlton: On English Popular Entertainment in the Late 1590s and the Early 1600s”『大阪大学大学院文学研究科紀要』62, 大阪大学文学研究科, pp. 41-58, 2022/3

山田雄三 「歴史のなかに “something” を求めて——1980 年代の歴史主義をふりかえる」*Shakespeare Journal*, 8-61, pp. 1-9,

2022/3

山田雄三 「Poor Tom を嗤う—悪魔憑き／祓いの娯楽性についての一考察」『関西シェイクスピア研究会会報』43, 2022/3

山田雄三 「可動式プライベート時代のコメディ・オヴ・マナーズ—ノーエル・カワードからハロルド・ピンターへ」『コメディ・オヴ・マナーズの系譜—王政復古期から現代イギリス文学まで』2022/3

山田雄三 「杖持つ語り部、「悶ゆる」語り部」『木綿葉』(木綿葉の会), 15, 木綿葉の会, pp. 77-84, 2021/3

山田雄三 「アーツカウンシルの挑戦—田舎と都会の文化政策」『高知人文社会科学研究所』(高知人文社会科学会), 7, 高知人文社会科学会, pp. 11-29, 2020/5

4-2. 著書

山田雄三, 玉井暲, 末廣幹他(共著) 『コメディ・オヴ・マナーズの系譜—王政復古期から現代イギリス文学まで』, 2022/3

河野真太郎, 川端康雄, 山田雄三他(共著) 『暗い世界—ウエルズ短編集』堀之内出版, pp. 39-102, 2020/7

木村茂雄, 山田雄三(共訳) 『レイモンド・ウィリアムズ著 テレビジョン—テクノロジーと文化の形成』ミネルヴァ書房, pp. 109-268, i-ii, 109-226, 251-268, 268, 2020/7

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

山田雄三(評論) 「杖持つ語り部、「悶ゆる」語り部」『文芸同人誌 木綿葉』15, pp. 77-84, 2021/3

山田雄三(書評) 「中井亜佐子著『くわたしたち』の到来—英語圏モダニズムにおける歴史叙述とマニフェスト」『図書新聞』2469, 図書新聞, pp. 4-4, 2020/10

山田雄三(Web エッセイ) 「原因と結果を混同しないウィズ・コロナ社会のために—レイモンド・ウィリアムズ『テレビジョン』から学ぶこと」『松柏社 web マガジン』松柏社, 2020/8

4-4. 口頭発表

山田雄三 「Poor Tom を嗤う—悪魔憑き／祓いの娯楽性についての一考察」関西シェイクスピア研究会4月例会, 関西シェイクスピア研究会, オンライン, 2021/4

山田雄三 「Poor Tom を嗤う—悪魔憑き／祓いの娯楽性についての一考察」『娯楽文化史からとらえるエリザベス朝演劇』第3回研究会, 「娯楽文化史からとらえるエリザベス朝演劇」研究会, 学習院大学(リモート), 2021/3

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

山田雄三, 森祐司, 小口一郎 大阪大学共通教育賞(2011 年度後期), 大阪大学共通教育機構, 2012/5

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2018 年度～2021 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:山田雄三

課題番号:18K00415

研究題目:近現代英語圏における「二つの文化」論争の系譜をたどる

研究経費:2020 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

2021 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

本研究は 19 世紀なかばから現代まで英語圏でさまざまなかたちをとって起きた各「ふたつの文化論争」の論点を明らかにするとともに、その系譜を歴史的にあとづける試みである。19 世紀なかばに Matthew Arnold が Culture and Anarchy (1869)を著し、価値を帯びた文化観の普及に努めて以来、価値付けから外れた文物や慣習に価値を再発見する反応および活動は、たえず生まれてきた。本研究では、このような反応や活動を「もうひとつの文化」普及活動とみなし、支配的な文化との論争が、時と場所を変えて 20 世紀末までふたつの文化論争の形態をとってきたことを広汎な資料調査をもとに明らかにする。ひいては、このふたつの文化論争の歴史的な変化のなかに、近代の成熟および衰微を探りたい。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部・理事, 2019年4月～現在に至る

5. 森本 道孝 准教授

1978年生。2001年大阪大学文学部卒業。2009年大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士（大阪大学、2003年）。博士（文学）（大阪大学、2009年）。近畿大学経済学部講師、同准教授を経て、2018年4月より、現職。専攻：アメリカ文学

5-1. 論文

森本道孝「Ayad Akhtar 演劇における視線——Disgraced と The Who & The What を中心に——」『大学院文学研究科紀要』（大阪大学文学研究科）, 61, 大阪大学文学研究科, pp. 49-72, 2021/3

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部副事務局長, 2021年4月～現在に至る

日本アメリカ文学会関西支部編集委員, 2021年4月～現在に至る

日本英文学会関西支部・大会準備委員, 2019年4月～2021年3月

阪大英文学会・幹事, 2018年10月～現在に至る

日本アメリカ演劇学会・幹事, 2018年8月～現在に至る

6. ポール・ハーヴィ 外国人教師

1961年生。1980年9月、Oriel College, Oxford University 入学。1986年6月 Oriel College, Oxford University 卒業退学 (MA, MPhil 取得)。1986年10月、京都大学教養部招聘研究員 (1年間)。1988年4月、大阪大学言語文化学部講師。1990年4月、カナダ商工会議所専務理事(1年間)。1991年4月、大阪大学言語文化学部講師。1999年10月、大阪大学文学部・大阪大学大学院文学研究科外国人教師に着任し現在に至る。専攻:シェイクスピア/イギリスルネッサンス/英文学

6-1. 論文

なし

6-2. 著書

Steane Anthony (HARVEY, A. S. Paul), *Monday Songs 078-082*, pdf, 51p., 2022/3

Steane Anthony (HARVEY, A. S. Paul), *Tsukinowaguma no Ko*, Yamaguchi Shoten, 68p., 2022/2

Steane Anthony (HARVEY, A. S. Paul), *Saint Mary 365 Book 8*, Yamaguchi Shoten, 184p., 2021/11

Steane Anthony (HARVEY, A. S. Paul), *Enarchae*, Yamaguchi Shoten., 388p., 2021/3

※Steane Anthony is the penname of HARVEY, A. S. Paul.

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

7. 好井 千代 助教

1959年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。1987年大阪大学文学部助手を経て、2007年4月より現職。専攻:アメリカ文学。

7-1. 論文

Yoshii, Chiyo, "Humanity as Matter: Nathaniel Hawthorne's Vivacious Materialism in "The Birth-mark" and "Rappaccini's Daughter"" *Literary Imagination*, 22-3, pp. 225-237, 2020/12

Yoshii, Chiyo, "Anti-Capitalist Plasticity: The Ambassadors and the Biology of Rejuvenation" *The Henry James Review*, 41-2, pp. 152-173, 2020/5

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

Yoshii, Chiyo, "The Other, Narrative, Resilience", TWO CULTURES: TWO SENSES, 大阪大学、University College London 共催、大阪大学、University College London 共催(オンライン), 2021/3

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

好井千代他 第1回福原賞, 福原記念英米文学助成基金, 1993/2

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2021年度～2024年度、基盤研究(C) 一般、代表者:好井千代

課題番号:21K00457

研究題目:文学と生命科学のインターフェースー「生政治」を超えて

研究経費:2021年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

文学研究と生命科学の共通性を考察する本研究は以下の内容で実施される。まず、生命科学の主要な3領域、即ち、幹細胞研究(様々な細胞になりうる未分化の幹細胞を研究)、エピジェネティクス(周囲の環境で発現方法を変える遺伝子を研究)、脳科学(脳の働きを研究)における「生命の可塑性」の基本的概念を明らかにして、それらの概念が19世紀の科学界に既に存在したことを明らかにする。次に、この時代の小説家ヘンリー・ジェイムズが自らの作品でそれらの生命科学の知見に極めて近い可塑的な生のあり方を描いたことを明らかにする。この考察によって、文学が生命科学と同種の生命観を共有し、生命科学と緊密に繋がることを提示する。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-17 ドイツ文学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 1 准教授 1 特任講師 1 助教 0

教授：三谷 研爾

准教授：吉田耕太郎

特任講師：ヨハネス・ヴァスマー

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
5	5	2	0	0	0	0	0

*うち留学生0名、社会人学生0名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	2	0	0	0
2021	4	1	1	0
計	6	1	1	0

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

本専門分野は、テキストの精密な読解という文学研究の基本姿勢を堅持しつつ、国内外の新しい研究状況をにらんで、中東欧を対象とした文化史的なアプローチによる教育プログラムを提供する。また、卒業論文・修士論文・博士論文の作成プロセスを重視し、課題発見から論文執筆までの工程をできるかぎり丁寧にフォローする、所属の学生全員参加の演習 Forschungskolloquium を開講するとともに、オフィスアワーを利用した個別指導を充実させる。

ドイツ語の実際の運用能力の涵養にあたっては、ネイティブ・スピーカー教員による授業を提供するとともに、現教員では十分にカバーできない研究テーマや研究方法に関して、学外非常勤講師の来講を得て、学生の知的関心の拡大に努める。

2. 研究

教員は、個人研究の維持発展に努めるとともに、学内外のプロジェクト研究や共同研究に積極的に参加して、コンスタントに成果発表をおこない、またレベルの高い学術専門誌などに論文を公刊する。同じく大学院学生も、プロジェクト研究や共同研究に参加して研究交流と成果発表に努めるとともに、積極的に留学や海外調査をおこない、海外の研究者との連携も構築する。これらの活動により、従来の研究の枠組に拘束されない、新たなテーマ設定やアプローチの開拓に取り組む。

3. 社会連携

教員は、本専門分野修了者を主体として組織された大阪大学ドイツ文学会をはじめ、関係する学会・研究会などにおいて各自の研究活動の公開に努めるとともにその運営に積極的に参画し、また本専門分野にかかわる公共団体あるいは NGO などにたいして、積極的な専門知識の提供をおこなう。また、専門家以外を対象とした公開講座をはじめ、一般読者をも想定した著書・翻訳書の刊行に努め、研究成果の社会還元を図る。

Ⅲ. 活動の概要(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

学部においては、大半の学生にとってドイツ語が初修外国語であることを考慮し、グレードの異なる演習を開講、また講義においては本分野にかかわる基礎的な知識および研究方法論を習得させるとともに、新しい研究動向の紹介にも努めた。ヨハネス・ヴァスマー特任講師は、実践的なドイツ語運用力の向上につとめ、ドイツ語会話ならびにドイツ語によるアカデミックライティングの授業を実施した。大学院では、より高度な内容の文献演習を開設するとともに、個別的な論文指導をおこなった。また、研究室所属の学生全員が参加する演習 *Forschungskolloquium* を開講し、プレゼンテーションとディスカッションを重ねることで知識と問題意識の共有化を図った。学外からは、赤尾光春 (2020、2021 年度) を講師として招き、多彩かつ充実した授業を提供した。

2. 研究

三谷教授は科研費基盤研究(C)「(プラハのドイツ語文学) 受容の社会文化史的研究」(2019 年度終了)の交付を受けた研究成果を論文または口頭にて発表した。吉田准教授は、科研費基盤研究(C)「18 世紀ドイツの印刷メディアのなかの自死-自死を受容する社会と読者の文化史研究」(2020 年度)の交付を受けて研究活動をおこなった。ヴァスマー特任講師は、ドゥッセルドルフ大学との共同研究ならびに日本大学主催の研究プロジェクトに参加し、研究成果を公表した。大学院博士後期課程学生は、それぞれ博士論文の完成を目指して、口頭発表と論文発表を重ねた。

3. 社会連携

三谷教授、吉田准教授は、日本独文学会、日本 18 世紀学会、日本ゲーテ協会、阪神ドイツ文学会、大阪大学ドイツ文学会などの学術団体、神戸ユダヤ文化研究会、日本チェコ協会、関西チェコ/スロバキア協会などの国際文化交流 NGO の運営に役員として積極的に参画し、研究成果の社会への発信および還元を図った。ヴァスマー特任講師は、マルティン・ブーバー学会 (ドイツ) の運営委員として活動し、国際学会を企画した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

授業をとおしてできるだけバラエティに富んだ、幅広いトピックについて知見を提供したことで、新しい意欲的なテーマに取り組む卒業論文や修士論文が作成されるなど、所期の教育目標はおおむね達成された。*Forschungskolloquium* の開講は、学生のあいだで問題意識や研究方法の共有だけでなく、プレゼンテーション技術の向上という点で、効果を挙げている。論文作成の工程管理についても、全ての学生に共通の問題として指導をおこなった。

大学院博士後期課程修了者の研究者としての就職状況の悪化を背景に、同前期課程学生の進路は多様化しつつあり、そ

れに対応して教育プログラムを漸進的に改編するという状況が続いている。結果として、前期課程では恒常的に入学者を確保できているが、後期課程への進学者の確保とそのキャリア形成について、今後さらなる工夫と努力が欠かせないと考える。

2. 研究

三谷教授、吉田准教授は、それぞれ研究代表者として科研費を獲得するとともに、学内外のプロジェクト研究や共同研究にも参画し、積極的な研究活動を展開して論文を発表した。国内外のシンポジウムや研究会に定期的に参加し国際的な視野で研究活動をすすめている。大学院学生は、学会発表や論文投稿・公刊を着実に重ねるとともに、学内外の各種の資金援助制度・交換留学制度を活用して、海外での研究活動を展開、今後とも、国内外のさらにレベルの高い学術誌への投稿・執筆が望まれる。

3. 社会連携

阪神地区を代表するドイツ語・ドイツ文学研究の拠点として、本専門分野に期待されている学会や研究会等の運営支援はけっして小さなものではなく、そうした責務に関して従来と変わらない水準を維持することができた。また、研究成果の社会への還元については、著書・翻訳書の出版のみならず、市民向けの講座・講演などをとおして、目標レベルが達成されたといえる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	0	0	0
2021	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2021	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	0	1	0	0	0	1
2021	0	1	0	0	0	1
計	0	2	0	0	0	2

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕 なし

【2021年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕 なし

(2)口頭発表

【2020年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕

山本鉄兵「ポピュラーサイエンス研究の射程—世紀転換期ベルリンにおける科学劇場をめぐって—」, 大阪大学ドイツ文学会, オンライン, 2020/12/5

【2021年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕

山本鉄平「ロマン主義的自然観の再来」, 大阪大学ドイツ文学会, 大阪大学, オンライン, 2021/11/27

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕 なし

【2021年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕 なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2021年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部: 2名 大学院: 1名 (計3名)

2021年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020年度～2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020年度～2021年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2020年度: 0名 2021年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度: 0名 2021年度: 0名

9. 刊行物

2021年度 『独文学報』36、37合併号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

阪神ドイツ文学会事務局	2021年4月～
阪神ドイツ文学会研究会	2021年7月、12月(オンライン)
ドイツ文学における家庭の表象研究会	2020年6月(オンライン)
大阪大学ドイツ文学会研究発表会	2020年12月、2021年12月(オンライン)

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

院生研究発表会	2020年6月、7月、10月、11月
院生研究発表会	2021年6月、7月、10月、11月

12. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 三谷 研爾 教授

1961年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士（文学、大阪大学）。大阪府立大学助手、講師、大阪大学准教授をへて2008年4月から現職。専攻：ドイツ、オーストリア文学および文化研究

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

三谷研爾 「床の間からテーブルへ」『懐徳』90, pp. 2-4, 2022/1

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本オーストリア文学会・学会賞選考委員, 2017年5月～2020年4月

日本オーストリア文学会・阪神地区幹事, 2015年5月～現在に至る

関西チェコ/スロバキア協会・会長, 2009年4月～現在に至る

大阪大学ドイツ文学会・会長, 2008年1月～現在に至る

2. 吉田 耕太郎 准教授

1970年生まれ。東京外国語大学外国語学部（ドイツ語学科）卒。2007年、東京外国語大学地域文化研究科博士後期課程単位取得退学。学術修士（東京外国語大学）。京都外国語大学、立命館大学、京都大学人文科学研究所等での非常勤講師を経て、2009年4月より現職。専攻：ドイツ文化史・思想史

2-1. 論文

吉田耕太郎 「心への関心 知覚と表象の言説を通覧する」『大阪大学大学院文学研究科紀要』62, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 59-72, 2022/3

吉田耕太郎 「野生児をめぐる言説の確認 I」『ドイツ啓蒙主義研究』19, 大阪大学大学院言語文化研究科, pp. 31-37, 2022/3

吉田耕太郎 「優しい父—親子関係から啓蒙を再考する」『ドイツ啓蒙主義研究』18, 大阪大学大学院言語文化研究科, pp. 51-65, 2021/6

吉田耕太郎 「「あなた」か「おまえ」か 18 世紀ドイツ夫婦の呼称についての言説を例に」『待兼山論叢』54, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-20, 2020/12

吉田耕太郎 「神童と天才 -18世紀における心的能力をめぐる議論をたどる」『ドイツ啓蒙主義研究』17, 大阪大学大学院言語文化研究科, pp. 25-40, 2020/6

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

吉田耕太郎 「Description of Japan by Engelbert Kämpfer」Cultures of Travel: Tourism, Pilgrimage, Migration, TACMR2021, 台湾師範学校, 2021/10

吉田耕太郎 「感情と家庭 - そのバリエーションと社会的背景の再考」日本独文学会秋季研究大会, 日本独文学会, 2020/11

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2017 年度～2020 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:吉田耕太郎

課題番号:17K02616

研究題目:18 世紀ドイツの印刷メディアのなかの自死 自死を受容する社会と読者の社会史研究

研究経費:2020 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

本研究は、18 世紀ヨーロッパとりわけドイツにおける自死の意味について、印刷メディアという視点からアプローチするものである。この時代、自死をモチーフとする文芸作品が出版されていた。こうした作品が創作され受容されるための背景を、神学、哲学、医学といった言説、多数出版されていた自死報告、書評誌を手がかりに、とりわけ当時の若い読者層がフィクションとしての自死をどのように受容したのかという側面から解明することで、自死をとりまく社会状況ならびに自死の持っていた文化史意味を明らかにする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本独文学会・学会誌編集委員, 2021 年 5 月～現在に至る

阪神ドイツ文学会・庶務幹事, 2021 年 4 月～現在に至る

日本独文学会・学会賞選考委員, 2020 年 4 月～2020 年 4 月

阪神ドイツ文学会・渉外幹事, 2018 年 4 月～2021 年 4 月

3. Wassmer Johannes 特任講師 (常勤)

2020 年 4 月より大阪大学大学院文学研究科 特任講師(常勤)。専攻:ドイツ文学/思想史

3-1. 論文

WASSMER JOHANNES “Kampf um ein philosophisches Erbe. Die Werkpolitik des Nietzsche-Archivs, in: Ulrike Lorenz/Thorsten Valk” *Kult - Kunst - Kapital. Das Nietzsche-Archiv und die Moderne um 1900*, pp. 171-191, 2020/9

WASSMER JOHANNES “Einleitung” *Zeitschrift für Ästhetik und allgemeine Kunstwissenschaft*, 65-1, pp. 11-15, 2020/6

WASSMER JOHANNES “Im Werkraum der Geisteswissenschaften. Friedrich Nietzsches Der Wille zur Macht zwischen epistemischem Ding und boundary objec” *Zeitschrift für Ästhetik und allgemeine Kunstwissenschaft*, 65-1, pp. 169-187, 2020/6

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

WASSMER JOHANNES “(K)ein Erzählen nach dem Ende des Geschichtlichen. Der Krieg von 1870/71 und eine Vergangenheit ohne Zukunft in Gustav Freytags Die Ahnen. Vortrag am 10. November 2020 im Rahmen einer Ringvorlesung anlässlich des 150”Ringvorlesung anlässlich des 150. Jahrestags des deutsch-französischen Kriegs von 1870/71 an der Universität Bonn, ボン大学, 2020/11

WASSMER JOHANNES “Authentizität als Textstrategie. Von Empfindsamkeit zu Straßenrap: Zur Stabilität eines literarischen Phänomens.”Zur Authentizität und Inauthentizität von (medialen) Artefakten. Ein interdisziplinärer Dialog, トリア大学, 2020/10

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-18 フランス文学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 1 准教授 0 特任准教授 1 助教 1

教授：山上 浩嗣

特任准教授：エリック・アヴォカ

助教：平光 文乃

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
9	8	4	0	0	1	0	0

*うち留学生0名、社会人学生1名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	3	2	1	0
2021	3	4	1	0
計	6	6	2	0

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

(大学院)

- ・フランス文学作品の高度な読解力および分析力を養うとともに、フランス語による論文作成力を身につける。
- ・修士論文・博士論文作成演習を開講し、学生による研究発表をもとに論文作成の指導を行う。
- ・学会、研究会での口頭発表、論文投稿を支援し、特に研究成果を海外に発信すべく、フランス語による執筆を指導する。

(学部)

- ・講義・演習を通じてフランス文学の基礎知識やフランス語読解の基礎的方法を習得させるとともに、フランス語作文および会話の基礎的能力を養う。
- ・卒業論文作成に向けて、研究発表、個人面談など段階的に指導を行う。

- ・交換留学生制度を積極的に活用するよう支援し、フランス語運用能力を高めるとともに、国際的感覚を学ばせる。

(共通)

- ・フランスより学者、作家、詩人等を招聘し、日仏学術交流を通して、国際的視野を獲得するとともに、実作者との直接的交流により文学研究へのさらなる興味を持たせる。
- ・研究会、卒論中間発表などには大学院生、学部生ともに参加し、質疑応答、討論を通して、研究のテーマ設定、分析法を学べるようにする。

2. 研究

- ・教員、大学院生ともに研究会、学会等で積極的に口頭発表、論文執筆に努める。またフランス語による執筆を奨励・支援する。
- ・学術誌『ガリア』を刊行する。これまで同様、フランス語による執筆を推進し、国内のみでなく、国外へも発送し、研究成果をより広く知らせよう努力する。バックナンバーのデータを OUKA (大阪大学学術情報庫) 上で公開し、「大阪大学フランス文学研究室」サイトからも閲覧できるようにする。
- ・大阪大学フランス語フランス文学会研究会を年 2 回開催し、研究成果の発表の場とするとともに、討論を通して研究を促進する。
- ・日仏の学術交流を積極的に推進し、国際的レベルの研究を促進する。
- ・フランス文学研究室のホームページ (<http://www.gallia.jp/wordpress/>) を充実させ、研究・教育活動ならびに研究成果をより広く公開する。

3. 社会連携

- ・学内外の一般向け学術講座・文化セミナーの講師を担当し、フランス語・フランス文化の普及に貢献する。

Ⅲ. 活動の概要(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

- ・講義・演習では、16 世紀から現代にかけての幅広い文学テキストを教材としながら、基礎知識および作品分析方法の習得をめざした教育を行った。
- ・卒業論文作成のために、卒論ガイダンス、個人面談、中間発表と段階を追った指導を行った。2020 年度には 3 本のきわめて優れた卒業論文が提出された。2021 年度には同じく 3 本のきわめて優れた卒業論文が提出された。
- ・大学院生の研究指導においては、各 Semester に 1 回の研究成果の発表を行い、修士論文・博士論文および学会発表を目標とした教育を実施した。2020 年度の博士前期課程修了者は 2 名であり、1 名は博士後期課程に進学し、1 名は一般企業に就職した。2021 年度の博士前期課程修了者は 4 名であり、1 名は博士後期課程に進学し、1 名は一般企業に就職した。
- ・2020 年度、2021 年度には、コロナ感染拡大のため、講演会は開催できなかった。
- ・2020 年度、2021 年度は留学生 0 名 (コロナ禍のため)。

2. 研究

- ・2020 年度は、10 月に開催予定であった大阪大学フランス語フランス文学会第 86 回研究会をコロナ感染拡大のため延期し、3 月に開催した。その 3 月の研究会では、2020 年 3 月に開催予定であった和田章男教授・岩根久教授の退職記念講演を行う予定であったが、それを再度延期し、通常の研究会として開催した。会誌『ガリア』60 号を刊行、7 本の学術論文、1 本の講演原稿とその翻訳稿、ならびに、大高順雄大阪大学名誉教授、高岡幸一大阪大学名誉教授の追悼エッセー合計 5 本を収めた。
- ・2021 年度は、大阪大学フランス語フランス文学会第 87 回研究会を 9 月 18 日に、第 88 回研究会を 3 月 5 日にそれぞれ

れ開催した（いずれも対面とオンライン併用）。和田・岩根両教授の退職記念講演会ならびに懇親会は本年度も開催を見送った。会誌『ガリア』61号を刊行、学術論文10本、大高順雄大阪大学名誉教授追悼エッセー1本などを収録。

- ・毎年、関西の大学でフランス文学を研究する大学院生が合同の研究発表会として、「関西学生フランス文学研究会」を開催しているが、2020年度はコロナ感染拡大のため中止した。2021年度はオンラインにて開催した（主催は京都大学文学研究科フランス文学研究室）。
- ・大学院文学研究科（フランス文学専門分野）博士後期課程退学の山本健二氏（現・龍谷大学ほか非常勤講師）が、2020年12月にレンヌ第2大学から博士号を授与された。

3. 社会連携

・山上教授が、次の講演を行った。

- ①「カミュ『ペスト』を読む」、令和2年度大阪府立三国丘高校「三丘(さんきゅう)セミナー」、オンライン、2020年7月28日
- ②「カミュ『ペスト』を読む」、2020年度大阪大学文学部オープンキャンパス模擬授業、オンライン、2020年8月3日録画公開
- ③「現代社会を描くフランス映画3選—格差、ジェンダー、多文化共生」、2020阪大三丘会新入生歓迎会、オンライン、2020年10月16日
- ④「フランス17世紀の詩人ラ・フォンテーヌの寓話—動植物が演じる人間喜劇」、2020年度ラスタ教養大学言葉文化コース（東リ いたみホール）、2020年10月26日
- ⑤「モンテーニュのパイディア—旅と書物による人間形成」、2021年度ラスタ教養大学言葉文化コース、伊丹ラスタホール（伊丹市立生涯学習センター）2021年11月15日
- ⑥『GRIHLII』刊行記念シンポジウム「文学に働く力、文学が発する力 権威・検閲・文学場」コメンテーター、人文研アカデミー2021（京都大学人文科学研究所）、対面オンライン併用、2021年12月11日

IV. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

卒業論文・修士論文はいずれも優秀な論文であり、段階を踏まえた教育・指導の成果であると思われる。博士課程在学中の学生たちも、留学先のフランスまたは日本で、それぞれ順調に執筆を進めている。

例年、学外の研究者、詩人による講演会を開催し、研究・教育の推進を図っているが、残念ながら2020年度、2021年度はコロナ感染拡大により一度も開催できなかった。

2020年度の卒業論文中間発表会（10月27日）では、卒業論文提出予定者3名がそれぞれ優れた発表を行い、質疑応答も活発に行われた。

2021年度の卒業論文中間発表会（10月26日）では、卒業論文提出予定者3名がそれぞれ、前年度に劣らぬ優れた発表を行い、質疑応答も活発に行われた。

なお、2020年度、2021年度にそれぞれ1名ずつ博士予備論文を提出し、いずれも審査に合格した。

2. 研究

教員・大学院生はともに活発に学会発表を行った。研究成果を積極的に公表するという点で目標は達成できたと思われる。

3. 社会連携

山上教授は、積極的に一般向けの講演を行うことで、社会連携活動の発展に尽力している。また研究室のホームページおよびOUKA（大阪大学学術情報庫）上で公開している『ガリア』誌掲載論文へのアクセス数は着実に伸びており、研

研究成果の公開という面においても成果を挙げている。

V. 基本情報(2020 年度～2021 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	0	0	0
2021	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	4(3)	0(0)	1(1)	0(0)	1(1)	6(5)
2021	3(3)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	4(4)
計	7(6)	0(0)	1(1)	0(0)	2(2)	10(9)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	0	5	2	0	0	7
2021	0	5	5	0	0	10
計	0	10	7	0	0	17

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020 年度】

〔博士前期〕

涌井萌子『『生きる力』を育む『教育的情報インフラ』』『第 39 回昭和池田賞受賞作品集』第 39 号, pp.18-33,査読有, 2020/10/12

〔博士後期〕

安達孝信「初期ゾラ作品におけるロクス・アモエヌス(心地よき場)ーアルク川からセーヌ川へ」『Gallia』第 60 号, pp.33-42,査読有, 2021/3/6

- 安達孝信「ゴンクール兄弟『ジェルミニー・ラセルトゥー』における場末と郊外」『関西フランス語フランス文学』第27号, pp. 51-62, 査読有, 2021年3月刊行予定
- 川上紘史「《翻訳・解題》ピエール・ニコル「プリズム、またはさまざまな態度が他の対象を違った仕方で判断せしめること」」『待兼山論叢』文学篇』第54号, pp.21-40, 査読有, 2020/12/25
- 川上紘史「Voir dans les Pensées」『Quaderni leif』第19号, pp.59-71, 査読無, 2020/12/25
- 堤崎暁「ジョルジュ・サンド『フランス巡歴職人』における自己犠牲と自己愛」『関西フランス語フランス文学』第27号, pp. 39-49, 査読有, 2021年3月刊行予定

【2021年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

- 涌井萌子「マザリナードと公衆—レ枢機卿のマザリナードを例に—」『待兼山論叢』第55号, pp.55-68, 査読有, 2021/12/25
- 涌井萌子「Les mazarinades de Cardinal de Retz dans l'espace public au XVIIe siècle」『Gallia』第61号, pp.3-11, 査読有, 2022/3/5
- 川上紘史「ピエール・ニコルにおける神の存在の自然の証拠—「神の存在と魂の不死の自然の証拠についての簡略な議論」に基づいて—」『GALLIA』第61号, pp.13-24, 査読有, 2022/3/5
- 植村実江「スタール夫人『コリンヌあるいはイタリア』におけるオシアン—「lyre」から「harpe」へ」『ガリア』第61号, pp.25-36, 査読有, 2022/3/5

(2)口頭発表

【2020年度】

〔博士前期〕

- 涌井萌子「17世紀テキスト周辺とパンフレ受容—レ枢機卿のマザリナードにおける「public」, 第二回若手研究者フォーラム, 大阪大学, ハイブリッド(両方), 2020/9/28
- 涌井萌子「公衆とプロパガンダ—レ枢機卿のマザリナードを例に—, 第五回豊中地区研究交流会, 大阪大学, オンライン, 2020/12/17
- 涌井萌子「マザリナードと「公衆」—レ枢機卿によるマザリナードを例に—, 文芸事象の歴史研究会, 岡山大学, オンライン, 2021/3/19

〔博士後期〕

- 安達孝信「ゴンクール兄弟『ジェルミニー・ラセルトゥー』における場末と郊外」, 日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 奈良女子大学, オンライン, 2020/11/28
- 植村実江「スタール夫人『コリンヌあるいはイタリア』におけるオシアン—「lyre」から「harpe」へ—, 大阪大学フランス語フランス文学会第86回研究会, 大阪大学, ハイブリッド(両方), 2021/3/6
- 堤崎暁「ジョルジュ・サンド『フランス巡歴職人』における異身分融和への障害」, 日本ジョルジュ・サンド学会秋季研究会, zoom, オンライン, 2020/11/8
- 堤崎暁「ジョルジュ・サンド『フランス巡歴職人』における理想と現実」, 日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 奈良女子大学, オンライン, 2020/11/28

【2021年度】

〔博士前期〕

- 戸田千晶「『カルメン』におけるホセの人物像」, 日本フランス語フランス文学会春季大会, 上智大学, オンライン, 2021/5/22
- 三原大輝「『パンセ』断章70と断章287(セリエ版)の生成過程について」, 関西学生フランス文学研究会, オンライン,

2021/9/4

丸山智大「ボリス・ヴィアン『日々の泡』における「死」—ヒロインとその周辺に注目して」, 関西学生フランス文学研究会, オンライン, 2021/9/4

[博士後期]

涌井萌子「計量文体学を用いた匿名文書の帰属問題への挑戦—レ枢機卿のマザリナードを例に」, デジタルヒューマニティーズ研究会, オンライン, 2021/5/14

涌井萌子「レ枢機卿のマザリナードにおける «public»」, 日本フランス語フランス文学会春季大会, 上智大学, オンライン, 2021/5/22

涌井萌子「レ枢機卿における「もっともらしさ la vraisemblance」—「真実の表象 apparence de la vérité」としてのもっともらしさについて」, 第8回フランス近世の〈知脈〉研究会, 大阪大学, オンライン, 2021/9/11

涌井萌子「レ枢機卿におけるもっともらしさ la vraisemblance—マザリナードにおける自己表象」, 日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 大阪市立大学, オンライン, 2021/12/4

涌井萌子「レ枢機卿の英雄観—寛容 magnanimité をめぐって」, 第88回大阪大学フランス語フランス文学会, 大阪大学, ハイブリッド(両方), 2022/3/5

川上紘史「パスカルの主題としての現象の認識—『真空論序言』を通じて」, 「フランス近世の〈知脈〉」第8回研究会, 大阪大学, オンライン, 2021/9/10

川上紘史「パスカルにおける認識の多様性と視覚イメージの結びつき—『真空論序言』を通じて」, 日本フランス語フランス文学会秋季大会, 岡山大学, オンライン, 2021/10/30

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020年度】

[博士前期] なし

[博士後期] なし

【2021年度】

[博士前期] なし

[博士後期] なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計0名)

2021年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2021年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020年度~2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020 年度～2021 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 5 名

2020 年度：5 名 2021 年度：0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 5 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2020 年度：0 名 2021 年度：0 名

9. 刊行物

2020 年度 *GALLIA*(機関誌：大阪大学フランス語フランス文学会) n°60

2021 年度 *GALLIA*(機関誌：大阪大学フランス語フランス文学会) n°61

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

①「フランス近世の〈知脈〉」第6回研究会(オンラインにて)2020年9月5日(土)・6日(日)

山上浩嗣(大阪大学)「パスカルとモンテーニュの政治論」

久保田静香(日本女子大学)「デカルトと記憶術-ラムス主義を經由して」

小柳公代(愛知県立大学)「パスカルの巨大サイフォン実験連続〈復元〉—2012~2017:パリ南大学グループによる」

山口信夫(岡山大学)「思想の都パリとエラスムス-モンテギュー学寮校長・パリ大学神学部理事ベダ・ノエルを中心に」

鈴木真太郎(東北大学博士課程)「パスカルにおける人間の条件的不可能性と可能性」

川野恵子(日本学術振興会)「カユザックのデュボス批判—新旧舞踊論争」

武田裕紀(追手門学院大学)「イエズス会の数学とデカルト」

永瀬春男(岡山大学)「パスカル物理学論文の論理とレトリック」

②「フランス近世の〈知脈〉」第7回研究会(オンラインにて)2021年2月27日

川上紘史(大阪大学博士後期課程)「パスカルにおける神の証拠としての自然の認識」

中田浩司(宝塚医療大学)「コンディヤックにおける修辞学教育」

谷川雅子(松山大学)「ベールとニコルにおける教育と無知の問題」

③大阪大学フランス語フランス文学研究会(第86回)(国内学会)、2021年3月6日

④「フランス近世の〈知脈〉」第8回研究会(オンラインにて)2021年9月10日・11日

川上紘史(大阪大学博士後期課程)「パスカルの主題としての現象の認識」

川野恵子(日本学術振興会)「コンディヤック『人間認識起源論』(1746年)における言語としての芸術」

中田浩司(宝塚医療大学)「コンディヤック『文法』における教育の問題」

渡辺 優(東京大学)「近世神秘主義と「経験」の問題—ジャン=ジョゼフ・スラン『経験の学知』(1663年)を中心に」

涌井萌子(大阪大学博士後期課程)「レ枢機卿における「もっともらしさ」」

鈴木真太郎(東北大学博士課程)「「護教論」と方法の問題—パスカル『パンセ』における悲劇性をめぐる諸考察」

久保田静香(日本女子大学)「デカルト主義者ベルナル・ラミのレトリック理論」

武田裕紀（追手門学院大学）「クラヴィウスと学問的論証」

⑤大阪大学フランス語フランス文学研究会(第 87 回)(国内学会)、2021 年 9 月 18 日

⑥大阪大学フランス語フランス文学研究会(第 88 回)(国内学会)、2022 年 3 月 5 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

①大阪大学フランス語フランス文学研究会(第 86 回)(国内学会)、2021 年 3 月 6 日

②大阪大学フランス語フランス文学研究会(第 87 回)(国内学会)、2021 年 9 月 18 日

③大阪大学フランス語フランス文学研究会(第 88 回)(国内学会)、2022 年 3 月 5 日

12. 教員の研究活動(2020 年度～2021 年度の過去 2 年間)

1. 山上 浩嗣 教授

1966 年生。京都大学文学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。パリ・ソルボンヌ大学にて文学博士号取得（2010 年）。東京大学大学院総合文化研究科助手、関西学院大学社会学部専任講師、同准教授、同教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2015 年より現職。専攻：フランス文学・思想

1-1. 論文

Yamajo, Hirotsugu, “La critique de l’apparence chez Pascal”, *Littera, Revue de Langue et Littérature Françaises*, (日本フランス語フランス文学会), 6, pp. 61-72, 2021/3

Yamajo, Hirotsugu, “La critique de l’apparence chez Montaigne : un parallèle avec Pascal”, *Gallia*, (大阪大学フランス語フランス文学会), 60, pp. 23-32, 2021/3

1-2. 著書

山上浩嗣 『モンテーニュ入門講義』ちくま学芸文庫, 448p., 2022/3

永井敦子, 畠山達, 山上浩嗣他(共著) 『フランス文学の楽しみかた ウェルギリウスからル・クレジオまで』ミネルヴァ書房, pp. 26-27, 32-33, 36-37, 151-154, 2021/3

武田裕紀, 三宅岳史, 山上浩嗣他(共著) 『フランス語で読む哲学 22 選 モンテーニュからデリダまで』朝日出版社, pp. 22-23, 2021/1

津崎良典, 山上浩嗣, 久保田静香他(共訳) 『ジャンニ・パガニーニ『懐疑主義と信仰 ボダンからヒュームまで』』知泉書館, pp. 29-45, 2020/12

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

山上浩嗣, 堤崎暁(共訳) 「オード・フォーヴェル「運命の女、魔性の女、倒錯の女:フランス医学文学史(1810～1960 年代)」」(共訳), 『ガリア』(大阪大学フランス語フランス文学会), 60, pp. 89-103, 2021/3

1-4. 口頭発表

山上浩嗣 『GRIHL II』刊行記念シンポジウム「文学に働く力、文学が発する力 権威・検閲・文学場」コメンテーター」人文研アカデミー2021, 京都大学人文科学研究所, 京都大学人文科学研究所(ハイブリッド), 2021/12

山上浩嗣 「モンテーニュのパイディア—旅と書物による人間形成(ポスター発表)」第 6 回大阪大学豊中地区研究交流会, 大阪大学, 大阪大学豊中キャンパス(オンライン), 2021/12

山上浩嗣 「モンテーニュのパイディア—旅と書物による人間形成」2021 年度 ラスタ教養大学 言葉文化コース, 伊丹市立生涯学習センター, 伊丹ラスタホール, 2021/11

山上浩嗣「現代社会を描くフランス映画3選—格差、ジェンダー、多文化共生」2020 阪大三丘会新入生歓迎会, 阪大三丘会, オンライン, 2020/10

山上浩嗣「フランス17世紀の詩人ラ・フォンテーヌの寓話—動植物が演じる人間喜劇」2020 年度 ラスタ教養大学 言葉文化コース, 公益財団法人いたみ文化・スポーツ財団, 東リ いたみホール, 2020/10

山上浩嗣「モンテーニュとパスカルの政治思想 第1部:正義の不在」「フランス近世の〈知脈〉」第6回研究会, 「フランス近世の〈知脈〉」研究会, 大阪大学フランス文学研究室(オンライン), 2020/9

山上浩嗣「カミュ『ペスト』を読む」2020 年度 大阪大学文学部オープンキャンパス 模擬授業, 大阪大学文学部, 大阪大学文学部(オンライン), 2020/8

山上浩嗣「カミュ『ペスト』を読む」令和 2 年度大阪府立三国丘高校「三丘(さんきゅう)セミナー」, 大阪府立三国丘高校, 大阪府立三国丘高校(オンライン), 2020/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

山上浩嗣 平成 25 年度「科研費」審査委員表彰者, 日本学術振興会, 2013/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2017 年度～2020 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:山上浩嗣

課題番号:17K02594

研究題目:パスカル『パンセ』の人間学—文献学的研究ならびにモンテーニュ思想との比較研究

研究経費:2020 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

本研究課題は、1)『パンセ』の全断章を、草稿資料も用いて正確に解釈すること、2)モンテーニュ『エッセー』がパスカル『パンセ』に及ぼした影響について、前者から後者への「継承」の側面のみならず「反発」の側面も明らかにし、パスカルの独自の思想形成の過程を精緻にたどること、を主たる目的とする。

1-6-2. 2021 年度～2024 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:山上浩嗣

課題番号:21K00416

研究題目:パスカルとモンテーニュ—『パンセ』の人間学とその起源

研究経費:2021 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

本研究課題「パスカルとモンテーニュ—『パンセ』の人間学とその起源」の主たる目的は、1)パスカルの人間学を、『パンセ』の草稿資料も用いて、彼自身のテキストに即して総合的に考究すること、2)パスカルの人間学の「起源」の局面を、とりわけモンテーニュからの影響を通じて検討すること、である。そのため第一に、すべての断章を草稿資料および最近の知見を参照しながら再読し、『パンセ』全体の新たな日本語訳を刊行する。第二に、モンテーニュとパスカルの思想の①政治論、②認識論、③修辞論、④学問・知識論、⑤死生観(宗教観)における影響関係について、とくにパスカルの批判・抵抗の側面に着目しながら体系的に考察を進める。最終的に、両者の思想全体の傾向と、パスカルがモンテーニュの影響のもとにいかにかに独自の思想を形成したかを明らかにする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フランス語フランス文学会・副会長, 2021 年 5 月～現在に至る

日本フランス語フランス文学会・学会のあり方検討委員, 2019 年 6 月～2021 年 11 月

2. AVOCAT ERIC MARC 特任准教授（常勤）

1972 年生まれ。高等師範学校エコール・ノルマル・シュペリウール卒業。ギリシア・ラテン古典文学大学教授資格取得。フランス文学博士。イエール大学（1995-1996 年）、京都大学（2005-2015 年）で教員を務める。フランスのリセでの教員経験もある。2016 年 4 月より現職。専攻：フランス文学

2-1. 論文

AVOCAT ERIC MARC “La représentation politique et ses mystères, dans le théâtre de la Révolution française : entre rôle dramatique traditionnel et rôle politique nouveau”, *Gallia*, 61, 大阪大学フランス語フランス文学会, pp. 37-49, 2022/3

2-2. 著書

Tadako Ichimaru, Patrick Rebollar, AVOCAT ERIC MARC, (共著)『L’exploration des Mazarinades マザリナード探求』RIM (Recherches internationales sur les Mazarinades), pp. 165-174, 2022/2

Julie Brock, AVOCAT ERIC MARC(共著), *Les chaînes trajectives de la réception et de la création*, Éditions Peter Lang, pp. 399-408, 2021/10

Kaori Oku, AVOCAT ERIC MARC(共著), “Parole représentée, parole des représentants. L’institution parlementaire, objet de spectacle ?”, *Actes du colloque Révolution française et spectacles*, Faculté des lettres de l’Université Meiji, pp. 51-64, 2020/12

AVOCAT ERIC MARC(共著)『フランス革命とスペクタクル』明治大学文学部, pp. 65-78, 2020/12

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

AVOCAT ERIC MARC “Et tout le reste est littérature. Le travail de la langue, entre ce qu’elle doit être et ce qu’elle peut dire” 日本フランス語フランス文学会秋季大会, 日本フランス語フランス文学会, 岡山大学(オンライン), 2021/10

AVOCAT ERIC MARC “La Révolution française, source inépuisable pour l’imaginaire et la fiction - Le Théâtre de la Révolution de Romain Rolland”, Conférence, IFRJ-MFJ, Maison franco-japonaise, Tokyo (オンライン), 2021/9

AVOCAT ERIC MARC “Les armes de la parole. L’éloquence révolutionnaire au défi et au miroir de la violence”, Colloque international *Éloquences révolutionnaires et traditions rhétoriques*, Université Paris 8, Université Paris Nanterre, Patrick Brasart, Hélène Parent, Stéphan Pujol, Université Paris 8, Université Paris Nanterre (オンライン), 2021/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2019 年度～2022 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:AVOCAT ERIC MARC

課題番号:19K00473

研究題目:Rethinking political representation in the light of dramatic art under the French Revolution

研究経費:2020 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

2021 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

研究の目的:

The notion of theatricality is a key to the political modernity originated in the French Revolution. What is at stake is the concept of representation, in its double meaning: the process endowing an assembly of elected delegates with a political legitimacy, and the

theatrical performance.

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フランス語フランス文学会・学会誌編集委員, 2011年6月～現在に至る

3. 平光 文乃 助教

1976年生。2012年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程（フランス語学フランス文学専攻）修了。博士（文学）（京都大学、2012年）。2021年4月より、大阪大学大学院文学研究科助教。専攻：フランス文学。

3-1. 論文

なし

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

平光文乃「プルーストの作品における創造の部屋」大阪大学フランス語フランス文学会 第87回研究会, 大阪大学フランス語フランス文学会, 大阪大学(ハイブリッド), 2021/9

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2021年度～2022年度、研究活動スタート支援、代表者:平光文乃

課題番号:21K19984

研究題目:『失われた時を求めて』タンソンヴィルの部屋の生成と最終篇冒頭の校訂に関する研究

研究経費:2021年度 直接経費 400,000円 間接経費 120,000円

研究の目的:

本研究は、プルーストの『失われた時を求めて』の冒頭や各篇、部、章などの初めに現れる部屋(寝室)の描写のなかでも、「新ブレイヤード版」最終篇『見出された時』冒頭に配置されたタンソンヴィルの部屋の描写の草稿調査を行う。それにより、作者の死後刊行された第六篇とこの最終篇とをどこで区切るか(従来のタンソンヴィルの部屋の描写か、2018年吉川訳が改めて提起したタンソンヴィル滞在の描写か)、という重要な校訂作業を決定づけるものである。またこうした部屋の描写に託されたと考えられる、小説の構造の有効性やその変遷を明らかにするべく、問題の部屋の描写の草稿調査を小説全体において行う。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-19 英語学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：岡田 禎之、神山 孝夫

准教授：田中 英理

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
22	4	4	0	0	1	0	0

*うち留学生0名、社会人学生1名

**英米文学・英語学専修として

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	10	2	0	1
2021	7	1	0	1
計	17	3	0	2

*英米文学・英語学専修として

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

大学院に関する目標は、(1) 機能文法、(形式)意味論、語用論、認知言語学、言語変化論、生成文法、比較言語学などに関わる研究論文を読み、内容理解と高度な分析方法を教育・指導すること、(2) 修士論文作成演習と博士論文作成演習の授業を開講し、年数回の研究発表と本の書評を課し、これらの論文が書けるよう教育・指導すること、(3) 国内学会あるいは国際学会での口頭発表と論文投稿のための教育・指導を行うことである。学部に関しては、(1) 機能文法、(形式)意味論、語用論、認知言語学、音声学、言語変化論、生成文法、比較言語学などの領域において、基本的な知識が習得できるよう教育・指導すること、(2) 卒業論文作成演習の授業を開講し、年間予定をたてそれに沿って卒業論文が書けるよう教育・指導すること、(3) 中学校、高等学校の英語教員や英語に関わる職業に携わる学部生もいるので、英語の基礎学力を高めるよう教育・指導をすることである。また学部生と大学院生の学問的な連携体制を形成するために、研究室や

授業形態等に工夫を行うことや、研究室の活動報告書を兼ねている HLC News を編纂してホームページに掲載することで、卒業論文と修士論文の題目と要旨、授業計画、院生の研究活動、就職状況等の情報を学部卒業生、大学院修了生に連絡することも目標としている。

2. 研究

教員は、各自の予定・計画に合わせて論文を発表し、科学研究費の研究を年次計画に沿って行い、研究成果をあげるよう努める。大学院生には、国内学会あるいは国際学会においてできるだけ多くの口頭発表と論文発表等ができるように指導する。学術雑誌 *Osaka University Papers in English Linguistics* を研究室 HP 上で公開する形で刊行する。大学院生の研究を促進するために、「待兼山ことばの会」と「阪大英文学会」を開催する。

3. 社会連携

研究成果に関する執筆依頼等には積極的に協力することとし、教室の HP を充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とする。また、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることとし、学会活動などにも積極的に参加し、研究成果の普及を図るよう努力する。

Ⅲ. 活動の概要(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

学部では、学校文法、機能文法、(形式)意味論、語用論、音声学、生成文法、歴史言語学関係の講義と演習のほか卒業論文作成演習を行い、一定の成果がえられた。大学院では、理論言語学、機能文法理論、(形式)意味論、語用論関係の講義と演習、論文書評の演習、博士論文作成演習、修士論文作成演習などを行なった。また、HLC News を編纂し、英語学研究室や院生の研究活動、就職状況等を同窓生の方々に報告した。

2. 研究

教員は各自の計画に合わせて論文を発表し、科学研究費の研究も各自の年次計画に沿って実行している。大学院学生の研究活動は、論文が 13 本(2020 年度に 7 本、2021 年度に 6 本)、口頭発表が 11 本(2020 年度に 7 本、2021 年度に 4 本)と活発に行われた。OUPEL についても 2021 年度に予定通り 20 号を刊行し、研究室の HP 上で公開した。「待兼山ことばの会」と「阪大英文学会」については、コロナ禍で中止を余儀なくされた。

3. 社会連携

教室の HP は逐次更新し、常に最新の情報が提供できるように努めている。また教員は、日本英語学会、日本英文学会(関西支部)、関西言語学会などの各種学会の理事、評議員、編集委員、運営委員、Japanese/Korean Linguistics や各種大会の論文審査員の職務を遂行しており、学会活動にも積極的に対応している。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。

2. 研究

教員・大学院生の研究活動は予定通り行われたが、研究会や学会の開催については予定通りの開催はできなかった。

3. 社会連携

前記の通り、教員は、日本英語学会、日本英文学会、関西言語学会などの各種学会の理事、評議員、編集委員、運営委員等の職務を遂行しており、学会活動にも積極的に対応している。また、教室のHPでは、教員・大学院生の研究活動や講演会開催等の最新情報を逐次更新しており、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	1	0	1
2021	1	0	1
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

山口麻衣子 “Head Movements and Their Consequences in Japanese, Korean and English” 2021/3

主査：岡田禎之 副査：田中英理、神山孝夫、大庭幸男

徳永和博 “The Functional Differences of Subject Auxiliary Inversion Constructions” 2022/3

主査：岡田禎之 副査：田中英理、神山孝夫

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	2(2)	3(2)	2(2)	0(0)	0(0)	7(6)
2021	0(0)	1(1)	4(0)	0(0)	1(0)	6(1)
計	2(2)	4(3)	6(2)	0(0)	1(0)	13(7)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	3	3	1	0	0	7
2021	1	3	0	0	0	4
計	4	6	1	0	0	11

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020 年度】

〔博士前期〕

槇原尚紀「The Restriction on Epistemic Must」『Osaka Literary Review』第号, pp.21-37,査読有, 2020/1/8

〔博士後期〕

菊池由記「An Analysis of N-free X and N-less X Based on Construction Morphology」『JELS』第号, pp.59-65,査読有, 2020/2/28

森藤庄平「完了を表す-ed 形容詞の形成について」『待兼山論叢 (文学篇)』第 54 号, pp.103-120,査読有, 2020/12/25

岩宮努「複合動詞 overeat とその代替表現 eat too much に生じる目的語と生起率に関する一考察」『Osaka Literary Review』第号, pp.1-19,査読有, 2020/1/8

岩宮努「out-V に生じる比較表現の考察」『RANDOM』第 40 号, pp.1-19,査読有, 2020/3/1

徳永和博「随意的な主語助動詞倒置が適用された as 節の文脈的機能とその特徴一倒置現象と文脈的機能のインターフェイス」『語用論研究』第 21 号, pp.139-160,査読有, 2020/3/20

徳永和博「自動翻訳機が訳出困難な学習英文法の項目に関する一考察」『立命館言語文化研究』第 32 (2)号, pp.45-63, 査読無, 2020/9/1

【2021 年度】

〔博士前期〕

美馬末歩「Verb-descriptivity of lexical verbs and complexity of constructions」『OUPEL (Osaka University papers in English Linguistics)』第 20 巻, pp.24-46,査読無, 2021/12/1

須磨千尋「Verbal complement selection following aspectual verbs」『OUPEL』第 20 巻, pp.47-85,査読無, 2021/12/1

余明珠「Meaning extension of 'head' in English and Chinese」『OUPEL』第 20 巻, pp.86-117,査読無, 2021/12/1

〔博士後期〕

徳永和博「So-inversion construction が有する 3 つの機能」『立命館言語文化研究』第 33 巻第 2 号, pp.255-270,査読無, 2021/11/1

岩宮努「Transitive alternation with over-Vs」『OUPEL(Osaka University Papers in English Linguistics)』第 20 巻, pp.1-23,査読無,2021/12/1

徳永和博「On the discourse functions of inversion constructions introduced by as, than, neither, and so」『待兼山論叢 文学篇』第 55 巻, pp.35-53,査読有, 2021/12/25

(2)口頭発表

【2020 年度】

〔博士前期〕

槇原尚紀「The Future Reference with Must: from the Viewpoints of Futurates and Veridicality」, ELSJ International Spring Forum, 関西大学, その他, 2020/5/10 (コロナ対応のため学会中止であるが、アブストラクト掲載で発表と見做す)

森本佳晃「Clausal and Phrasal Readings of English 'Phrasal' Comparatives」, ELSJ International Spring Forum, 関西大学, その他, 2020/5/11 (コロナ対応のため学会中止であるが、アブストラクト掲載で発表と見做す)

〔博士後期〕

岩宮努「under-V-ed に生じる主格補語構文」, 日本認知言語学会, オンライン, 2020/9/5

岩宮努「over-V に生じる非対格自動詞構文」, 英語語法文法学会, オンライン, 2020/10/17-23

徳永和博「On the Functional Differences in Optional Subject Auxiliary Inversions」, ELSJ International Spring Forum,

関西大学, その他, 2020/5/9 (コロナ対応のため学会中止であるが、アブストラクト掲載で発表と見做す)

徳永和博「The Categorization of SAI in As-clauses in Manner Use from the Viewpoint of Discourse-Modality」, 日本認知言語学会, オンライン, オンライン, 2020/9/5

徳永和博「随意的な主語助動詞倒置が適用された様態用法の as 節と so-inversion の比較: topic persistence と情報性の観点から」, 大阪認知言語学研究会, オンライン, 2020/12/19

【2021 年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

岩宮努「The gap use of by with compound verbs」, 日本英語学会国際春期フォーラム, オンライン, 2021/4/15

徳永和博「So-inversion construction の談話機能: 倒置が適用された as 節との共通点」, 日本言語学会 162 回大会, オンライン, 2021/6/26

菊池由記「N-proof X の意味規定に関する構文分析」, 日本認知言語学会 22 回大会, オンライン, 2021/9/4

岩宮努「連結動詞 remain の意味と否定辞 un- を伴う主格補語構文」, 英語語法文法学会 29 回大会, オンライン, 2021/10/16

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020 年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

【2021 年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3 年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2021 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2021 年度 学部 : 2 名 大学院 : 0 名 (計 2 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020 年度～2021 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

徳永和博 博士後期課程 三重大学人文学部 講師 2022/4

山口麻衣子 博士後期課程 ノートルダム清心女子大学 講師 2020/4

水谷謙太 博士後期課程 名古屋外国語大学 講師 2020/4
平山裕人 博士後期課程 関西外国語大学 助教 2020/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020 年度～2021 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2020 年度 : 0 名 2021 年度 : 0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2020 年度 : 0 名 2021 年度 : 0 名

9. 刊行物

2020 年度 *OLR (Osaka Literary Review)* No. 59 2020/12

2021 年度 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* Vol. 20 2021/12

OLR (Osaka Literary Review) No. 60 2021/12

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会 53 回大会(中止)

2020 年 10 月 24 日

阪大英文学会 54 回大会(中止)

2021 年 10 月 23 日

12. 教員の研究活動(2020 年度～2021 年度の過去 2 年間)

1. 岡田 禎之 教授

1965 年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程(英語学専攻)中途退学。文学博士(大阪大学、2001 年)。第 37 回市河賞(2003 年)。大阪大学助手、岡山大学講師、金沢大学助教授、神戸市外国語大学助教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2010 年 4 月より現職。専攻: 英語学

1-1. 論文

岡田禎之「因果関係を表す接続詞に見られる等位構造」『大阪大学大学院文学研究科紀要』62, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 73-95, 2022/3

Okada, Sadayuki 「Category-free Complement Selection in Causal Adjunct Phrases」*English Language and Linguistics*, 25-4, Cambridge University Press, pp. 719-741, 2021/12

岡田禎之「Because X 構文の歴史的変遷について」『大阪大学大学院文学研究科紀要』61, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 23-47, 2021/3

1-2. 著書

岸本秀樹, 岡田禎之(共著)『構文間の交替現象』朝倉書店, pp. 85-177, 2020/12

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

岡田禎之 10 papers selection, Annual Report of Osaka University Academic Achievement 2009-2010, Osaka University, 2010/12

岡田禎之 第37回市河賞, 財団法人語学教育研究所, 2003/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2018年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田禎之

課題番号:18K00646

研究題目:テキストの結束関係と語彙概念拡張

研究経費:2020年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

2021年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

語彙概念拡張が、叙述関係や修飾関係において、中心的参加者から周辺の参加者に浸透していくという意味拡張の一般的な特徴が認められるが、その一方で、このような一般化と合致しない独自の語彙概念拡張を見せる場合もある。テキスト形成レベルにおける結束関係、という捉え方を導入することによって、この例外的な事象について解決していくことができると考えられる。本研究では、様々な結束関係に認められる語彙概念拡張現象について検討していく。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英語学会・編集委員長, 2021年11月～現在に至る

日本英語学会・副編集委員長, 2019年11月～2021年10月

日本英語学会・編集委員, 2019年7月～現在に至る

日本認知言語学会・大会発表査読委員, 2019年4月～2021年3月

阪大英文学会・会長, 2018年10月～現在に至る

日本英語学会・理事, 2018年4月～2022年3月

日本英語学会・評議員, 2013年4月～現在に至る

2. 神山 孝夫 教授

1958年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。博士(文学)(東北大学)。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:歴史言語学、音声学、ヨーロッパ文化史

2-1. 論文

神山孝夫 「英語におけるHの歴史」『英語学論説資料』52, 第1分冊 言語学英語学一般・意味論・音韻論・諸論, pp. 450-463, 2020/6/30

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

神山孝夫 「スズダリ年代記 訳注[VI]」『古代ロシア研究』(日本古代ロシア研究会), 25, pp. 33-43, 2021/3

神山孝夫 「Συμπόσια の思い出 — 山口 巖先生を送る —」『古代ロシア研究』(日本古代ロシア研究会), 25, pp. 17-22, 2021/3

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

神山孝夫 大阪大学共通教育賞(2008 年前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本古代ロシア研究会・理事, 2015 年 4 月～現在に至る

3. 田中 英理 准教授

1975 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。2007 年博士(文学)。日本学術振興会特別研究員(PD)、愛媛大学教育学生支援機構英語教育センター講師、大阪医科大学総合教育講座講師を経て 2015 年 10 月より現職。専攻：英語学

3-1. 論文

田中英理 「Amazing-Hodo」*Measurements, Numerals and Scales*, pp. 289-306, 2022/2

田中英理 「Amazing degrees」*Proceedings of LENLS*, 17, pp. 14-14, 2020/11

田中英理 「Equative hodo and the Polarity Effects of Existential Semantics.」*New Frontiers in Artificial Intelligence: JSAI-isAI International Workshops, JURISIN, AI-Biz, LENLS, Kansei-AI, Yokohama, Japan, November 10-12, 2019, Revised Selected Papers*, pp. 341-353, 2020/10

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

田中英理(項目執筆) 「森山卓郎・渋谷勝己編『明解日本語学辞典』, 三省堂, 2020/4

3-4. 口頭発表

田中英理 「The semantics/pragmatics of adjunct Nani-o」EWFL 6, EWFL, オンライン, 2022/3

田中英理 「Presuppositions and Comparison Classes in Japanese hodo-equatives」LENLS 18, JSAI International Symposia on AI, オンライン, 2021/11

田中英理 「「より」比較文再考」163 会大会 日本言語学会, 日本言語学会, オンライン, 2021/11

田中英理 「同等比較のほどと極性」実践的理論言語学研究会, 実践的理論言語学研究会, オンライン, 2020/12

田中英理 「Amazing degrees」LENLS17, LENLS, オンライン, 2020/11

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2017 年度～2021 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:田中英理

課題番号:17K02810

研究題目:程度が存在論:統語論・意味論・語用論からの多角的アプローチ

研究経費:2020 年度 直接経費 0 円 間接経費 0 円

2021 年度 直接経費 0 円 間接経費 0 円

研究の目的:

本研究は、比較という人間の認知発達に重要な役割を果たしている概念の自然言語での表れと考えられる比較構文を対象として、この構文の意味解釈が日英語において共通のメカニズムに基づいているのかどうかを明らかにする。本研究は、比較構文の意味解釈に関わるとされる程度という概念について、(i)程度は個体と同じ振る舞いをするか、(ii)どの言語にも程度を導入すべきか、を問題とし、これまで多くの研究で取られてきたような統語論、意味論的観点だけでなく、比較構文における焦点 や前提といった語用論的な振る舞いを分析することによって明らかにすることを目的とする。

3-6-2. 2021 年度～2024 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:田中英理

課題番号:21K00525

研究題目:言語の意味理解におけるスケール・比較概念の汎用性:語用論、談話構造への発展

研究経費:2021 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

事物を比較することは人間にとって必要不可欠な認知能力のうちの一つである。比較は、事物のある次元におけるスケールの概念を前提としている。本研究は、スケールと 比較という概念が自然言語のコミュニケーションにおいてどのような役割を果たしているかを明らかにすることを目的とする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英語学会・編集委員, 2021 年 7 月～現在に至る

関西言語学会・編集委員, 2012 年 10 月～現在に至る

2-20 日本語学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 5 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：石井 正彦、田野村忠温、渋谷 勝己、マシュー・バーデルスキー、三宅 知宏

准教授：高木 千恵

助教：東条 佳奈

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
50	14	12	0	0	0	1	3

*うち留学生6名、社会人学生5名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	13	6	2	0
2021	12	8	0	2
計	25	14	2	2

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

1. 大学院、学部ともに、論文作成演習を開講するとともに、専門分野全体の中間発表会を開いて、分野内での議論の活性化をはかる。
2. 大学院については、各種学会で口頭発表を行ったり学術雑誌に論文を投稿したりするための個別指導を充実させる。
3. 学部については、日本語学や日本語教育学をめぐる基本的な知識や技能を幅広く習得できるよう、授業を組織する。あわせて、日本語や日本語教育をめぐるさまざまな言語的・社会的問題を自発的に発見し、的確に把握しつつ、初歩的な分析を行える能力を養成する。
4. また、大学院、学部ともに、フィールド調査やコーパスの作成、言語データの分析、教育実習等を取り入れた実践的な課題追求型の演習科目を開講し、指導を行う。

5. 大学院生と学部生との共通演習を開講し、両者の学問的連携体制を維持する。

2. 研究

1. 1人平均で、教員は2本の研究論文を執筆し、博士後期学生は1本の研究論文の執筆と1件の口頭発表を行う。教員はまた、個人で行う研究のほか、外部の研究者や学生との、科学研究費その他による共同研究プロジェクトに従事する。
2. 博士前期学生は、今後、学会での口頭発表・研究論文の執筆を行うことを視野に入れた研究を推進する。
3. 研究室全体で研究雑誌『阪大日本語研究』を刊行し、学界に専門分野の研究成果を発信する。

3. 社会連携

1. フィールド調査、言語分析、教育実践研究等の結果を速やかにまとめ、資料を現地等に還元する。また印刷物やHPによって、一般に公開する。
2. 高校生等の自主研究や公開講演会に積極的に協力することなどを通して、研究成果を社会に還元することにつとめる。
3. 地域の外国人の日本語学習支援活動、各種日本語教育機関の企画などに、積極的に協力する。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

設定した目標を達成するべく、活動を行った。具体的には、

1. 大学院、学部ともに、論文作成演習や専門分野全体の論文中間発表会をとおして、専門分野内での議論を活性化した。
2. 引き続き、学部開講科目について、配当年次を明示した資料をガイダンス時に配布する等により、科目間の有機的なつながりが学生の目に明らかになるように配慮した。
3. 大学院については、各種学会の口頭発表や査読雑誌への論文投稿にあたって、個別指導を行った。
4. 学部については、日本語学の基本的な知識や技能を幅広く習得できる講義を開講した。また、演習において、日本語や日本語教育をめぐるさまざまな言語的・社会的問題を自発的に発見し、初歩的な調査と分析を行ったり、参加型の授業で協働的学習を行ったりする機会を提供した。
5. 大学院、学部ともに、コーパスの作成、言語データの分析、日本語教育実習等を取り入れた実践的な課題追求型の演習科目を開講し、指導を行った。フィールド調査は、コロナ禍の影響もあり実施できなかった。
6. 大学院生と学部生との共通演習を開講し、研究室内において調査・研究の手法等の教育が効果的に行われるようにした。

2. 研究

1. 教員、大学院生ともに、目標とした数の研究論文をほぼ執筆した。各教員はまた、科学研究費その他による共同研究プロジェクトに従事した。
2. 博士前期学生は、演習で研究成果の発表を行いつつ、学会での口頭発表・研究論文の執筆を行うことのトレーニングを重ねた。
3. 『阪大日本語研究』を刊行し、研究成果を学界に発信した。

3. 社会連携

1. ローカルテレビ局制作番組に出演して地域方言の解説を行うなど、研究成果を社会に広めることに務めた。
2. その他、学会の委員等を積極的に引き受けた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

個人差はあるものの、演習等での活発な議論をとおして、比較的水準の高い博士論文、修士論文、卒業論文が提出されている。

また講義や低学年配当の演習をとおして、学生の基礎体力を築くことができている。

以上、所期の目標はおおむね達成できたと思われる。

2. 研究

目標はおおむね達成できたと思われる。

3. 社会連携

学会での活動状況は良好である。

その他の社会連携については、積極的に取り組む用意を整えていたが、コロナ禍の影響もあり、その機会が十分に得られなかった。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	0	0	0
2021	2	1	3
計	2	1	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

【2020年度】なし

【2021年度】

近藤 優美子「補助動詞“しまう”の研究—本動詞との連続性に着目して—」

主査：三宅知宏 副査：石井正彦、高木千恵

李 頌雅「チューター・チューティー活動における言語社会化の過程—会話分析の観点から—」

主査：マシュー・バーデルスキー 副査：渋谷勝己、高木千恵

【論文博士】

【2020年度】なし

【2021年度】

村中 淑子「関西方言における待遇表現の諸相」

主査：渋谷勝己 副査：石井正彦・高木千恵

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	1(1)	1(0)	4(4)	0(0)	0(0)	6(5)
2021	0(0)	3(1)	3(3)	0(0)	0(0)	6(4)
計	1(1)	4(1)	7(7)	0(0)	0(0)	12(9)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	2	0	1	0	0	3
2021	0	4	3	0	0	7
計	2	4	4	0	0	10

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

金 道瑛「他者開始におけるポライトネス・ストラテジーの場面間切り換え—韓国語母語話者の日本語談話と韓国語談話の対照分析—」『阪大日本語研究』第33号, pp.93-121, 査読有, 2021/2/28

沙 広聡「中国における日本製「～性」の受容—20世紀初頭の中国資料を中心に—」『東アジア国際言語研究』第2号, pp.34-44, 査読有, 2021/1/18

沙 広聡「接尾辞「性」の発生と歴史的展開」『第3回若手研究者フォーラム要旨集』, pp.50-53, 査読有, 2021/2/22

新谷 知佳「非母語話者教師の日本語学習における学習動機尺度を用いた調査と分析—中等教育で指導するフィリピン人教師を対象に—」*The 26th Princeton Japanese Pedagogy Forum PROCEEDINGS2020*. pp.185-198, 査読無, 2021/1/28

李 頌雅「ことばの説明実践—留学生チューターと日本人大学生チューターの学習活動を中心に—」『阪大日本語研究』第33号, pp.61-91, 査読有, 2021/2/28

HENNESSY Christopher. “The perceptions of Japanese language varieties by foreign workers in regional Japan: A pilot qualitative approach to language regard.”『阪大日本語研究』第33号, pp.123-155, 査読有, 2021/2/28

【2021年度】

〔学部〕

田中 穂乃香「「要請」とは何か：新型コロナウイルス感染拡大時の使用例を中心に」『令和2（2020）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書』, pp.1-6, 査読無, 2021/4/1

〔博士前期〕

林 剣鴻「補助動詞「V-てしまう」の動画教材の提案」『阪大日本語教育学研究』第12号, pp.41-66, 査読無, 2021/5/10
(李 秀珍・篠田 百合・ソング サンジャヤ・リスマ リスマラティとの共著)

〔博士後期〕

近藤 優美子「補助動詞“しまう”の用法と意味的構造」『阪大日本語研究』第34号, pp.47-64, 査読有, 2022/2/28

沙 広聡「明治期における接尾辞「化」の展開—学術誌における用法を中心に—」『阪大日本語研究』第 34 号, pp.95-115, 査読有, 2022/2/28

新谷 知佳「「体験的な学び」を教師が体験的に学ぶ研修のデザイン—オンラインにほんご人フォーラム 2020 の実践—」『国際交流基金日本語教育紀要』第 18 号, pp.89-100, 査読有, 2022/3

西野 由起江「生活情報番組“あさイチ”の談話行動に組み込まれるジェンダー・イデオロギー—批判的談話研究の視点から—」『阪大日本語研究』第 34 号, pp.65-93, 査読有, 2022/2/28

(2)口頭発表

【2020 年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

沙 広聡「中国語における接尾辞「性」の歴史」, 第 12 回東アジア文化交渉学会, 鄭州大学, 2020/11/8

沙 広聡「接尾辞「性」の発生と歴史的展開」, 第 3 回若手研究者フォーラム, 大阪大学大学院文学研究科, オンライン, 2021/3/13

新谷 知佳「非母語話者教師の日本語学習における学習動機尺度を用いた調査と分析—中等教育で指導するフィリピン人教師を対象に—」, 第 26 回プリンストン日本語教育フォーラム, プリンストン大学, その他, 2020/5/9 (コロナ対応により学会中止)

【2021 年度】

〔博士前期〕

相川 大知「山梨県西部方言の命令形について」, 日本方言研究会第 113 回研究発表会, オンライン, 2021/10/24

乾 友紀「養育者と子どもの会話における『てもらう』の使用と言語社会化」, 第 5 回若手研究者フォーラム, 大阪大学大学院文学研究科, 2022/3/26

〔博士後期〕

沙 広聡「接尾辞『化』の成立—日中両語間の相互影響—」, 第 13 回東アジア文化交渉学会, 東京 (オンライン), 2021/5/9

沙 広聡「近现代后綴“化”的历史—汉日两种语言的相互影响—」, 大阪産業大学孔子学院 2021 年度日中大学院生学術フォーラム, 大阪 (オンライン), 2022/1/16

新谷 知佳「BCCWJ における対応する自動詞と他動詞の使用頻度に基づく分析—動詞対に着目して—」, 関西言語学会第 46 回大会, オンライン, 2021/6/13

新谷 知佳「オンライン環境を生かした体験的な学びの創出—オンラインにほんご人フォーラムの事例から—」, 第 30 回小出記念日本語教育研究会, オンライン, 2021/6/27

冷 羽涵「中国語を母語とする教室習得者と自然習得者の日本語運用—終助詞「ヨ」「ネ」「ヨネ」に注目して—」, 中国語話者のための日本語教育研究会第 50 回記念大会, オンライン, 2021/9/11

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

乾 友紀「優秀若手研究者奨励賞」, 大阪大学大学院文学研究科, 2022/3/26

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3 年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)
2021年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)
2021年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020年度～2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

酒井 雅史 甲南女子大学文学部 講師 2020/4
張 希西 大阪大学国際教育交流センター 特任助教 2020/4
上林 葵 志學館大学人間関係学部 講師 2021/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020年度～2021年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名
2020年度:0名 2021年度:1名
<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計1名
2020年度:1名 2021年度:0名

9. 刊行物

『阪大日本語研究』(機関誌・年1回) 定期刊行物 1989年度～現在に至る
『阪大社会言語学研究ノート』(機関誌・年1回) 逐次刊行物 1999年度～現在に至る
『現代日本語研究』(機関誌・年1回) 逐次刊行物 1993年度～2000年度, 2016年度復刊～現在に至る

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 石井 正彦 教授

1958年生。東北大学文学部卒、東北大学大学院文学研究科修了。博士(文学)(東北大学)。国立国語研究所研究員、同室長、大阪大学准教授を経て、2009年4月より現職。専攻:現代日本語学

1-1. 論文

石井正彦 「語結合の“慣用化”に関する事例的検討:現代新聞における時事的な動詞句の調査から」斎藤倫明・修徳健編『語彙論と文法論をつなぐ:言語研究の拡がりを見据えて』ひつじ書房, pp. 103-128, 2022/3

石井正彦 「新聞社説の叙述系基本語彙」『現代日本語研究』13, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室, pp. 65-84, 2021/12

石井正彦 「語彙調査における高頻度語の分離に関する計量的検討」『現代日本語研究』12, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室, pp. 54-73, 2020/12

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

石井正彦 「探索的データ解析による日本語研究」第6回大阪大学豊中地区研究交流会, 大阪大学, 大阪大学(オンライン), 2021/12

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・評議員, 2009年6月～現在に至る

2. 田野村 忠温 教授

1958年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学(言語学専攻)。文学修士(京都大学、1984)。奈良大学文学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:言語学・日本語学

2-1. 論文

田野村忠温 「日本語の漢語の文法的特異性とその中国語への影響—「設計」の近現代語史—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』62, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 127-172, 2022/3

田野村忠温 「「接種」の語史—一種痘関連用語の生成と消長—」『阪大日本語研究』34, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 27-45, 2022/2

田野村忠温 「音訳語における口偏の機能について—一口偏蔑視表示説の検討—」『或問』40, pp. 13-26, 2021/12

田野村忠温 「「化石」の成立と展開」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 四十』, 和泉書院, pp. 63-80, 2021/8

- 田野村忠温 「『啖咭喇国訳語』の編纂者と編纂過程—中国最初の英語辞典の分析—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』61, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 125-174, 2021/3
- 田野村忠温 「「啤酒」の謎の解—この不可解な名称の成立過程—」沈国威・奥村佳代子編『内田慶市教授退職記念論文集 文化交渉と言語接触』, 東方書店, pp. 165-178, 2021/2
- 田野村忠温 「音訳語「珈琲」の歴史」『阪大日本語研究』33, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 33-60, 2021/2
- 田野村忠温 「漢語複合名詞の形成と再分析—動詞-名詞型複合名詞の二義性—」『現代日本語研究』12, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室, pp. 18-37, 2020/12
- 田野村忠温 「カレーを表す中国語名称の変遷」『或問』38, pp. 15-25, 2020/12
- 田野村忠温 「北京故宫博物院蔵『華夷訳語』丁種本第1類の分析—西洋館訳語の編纂とドイツ語の名称の問題を中心に—」『待兼山論叢 文化動態論篇』54, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-32, 2020/12
- 田野村忠温 「コーヒーを表す中国語名称の変遷」『或問』37, pp. 41-60, 2020/6

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

- 田野村忠温 「意識と音訳—概念の再考と歴史—」関西大学東西学術研究所研究例会(言語交渉研究班)「荒川清秀氏追悼 近代言語接触研究シンポジウム」, 関西大学東西学術研究所(ハイブリッド), 2022/3
- 田野村忠温 「咖喱の中文名称小史」“近代以来的西餐、洋饭书与大餐馆”工作坊, 复旦大学+关西大学(ハイブリッド), 2021/11
- 田野村忠温 「「化石」の語史—動詞—名詞型 漢語複合名詞の形成と再分析—」東アジア文化交渉学会第 14 回国際学術大会, 東アジア文化交渉学会, 二松学舎大学(ハイブリッド), 2021/5
- 田野村忠温 「「啤酒」の謎の解—この不可解な名称の成立過程—」関西大学東西学術研究所研究例会(言語交渉研究班)・国際シンポジウム「文化交渉と言語接触」, 関西大学東西学術研究所(ハイブリッド), 2021/2
- 田野村忠温 「コーヒーを表す中国語名称の変遷—音訳語研究の新視点—」関西大学東西学術研究所研究例会(言語交渉研究班), 関西大学東西学術研究所(ハイブリッド), 2020/7
- 田野村忠温 「日本語における音訳と意識の特異性」東アジア文化交渉学会国際学術大会, 東アジア文化交渉学会・鄭州大学, 鄭州大学(2020/5/9~10 ウイルスのために延期・中止), 2020/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2018年度~2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:田野村忠温
課題番号:18K00535

研究題目:コーパス日本語研究の高度化と多面化のための総合的研究—語史研究への応用を中心に—

研究経費:2020年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円
2021年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

応募者の従来の研究を踏まえ、日本語研究の学界におけるより高度かつ多面的なコーパス利用の基盤の形成に寄与することを目的として総合的なコーパス日本語研究に取り組む。

特に大規模な近現代語コーパスの構築とそれによる近現代語史研究の高度化を重点的な課題とする。近年利用可能になってきた各種の歴史的資料や手段をうまく組み合わせて利用することによって近現代語史の記述の水準を飛躍的に高められることを、最近いくつかの事例研究を通じて明らかにした。その方向の可能性をさらに追求し、事例研究を重ねるとともに方法論の一般化、洗練を図る。

また、従来に引き続き、上記以外の新たな研究手法・領域の開拓についても模索を重ねるとともに、日本語研究の学界に対する啓発・支援活動として、コーパスに関する一般的な考察・提言や、各種コーパス関連ソフトウェアの開発・公開などにも積極的に取り組む。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 渋谷 勝己 教授

1959年生。東京外国語大学大学院外国語学研究所日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士（大阪大学）。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授、大阪大学准教授等を経て、2009年4月より現職。専攻：日本語学

3-1. 論文

渋谷勝己「山形市方言における動詞述語の分析性と統合性」『待兼山論叢 文化動態論篇』55, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-19, 2021/12

渋谷勝己「言語の複雑性研究の現状」『阪大社会言語学研究ノート』18, pp. 119-144, 2021/11

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渋谷勝己「文体」「位相語」「スタイル」「母語」森山卓郎・渋谷勝己(共編著)『明解日本語学辞典』三省堂, 2020/5

3-4. 口頭発表

渋谷勝己「言語変化と社会」第119回 NINJAL コロキウム, 国立国語研究所, 国立国語研究所(オンライン), 2022/1

渋谷勝己「言語の形成過程をめぐる社会的類型化は可能か」歴史社会言語学・歴史語用論研究会第4回研究会, 歴史社会言語学・歴史語用論研究会, オンライン, 2021/3

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2019年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渋谷勝己

課題番号:19K00627

研究題目:複雑性を指標とする日本語諸方言の類型論的研究

研究経費:2020年度 直接経費 200,000円 間接経費 60,000円
2021年度 直接経費 100,000円 間接経費 30,000円

研究の目的:

複雑性という指標によって、日本語の諸方言を類型化することを試みる。各地方言記述の蓄積や接触言語学、文法化研究の進展をうけて、伝統方言・都市方言・新興方言それぞれの複雑度を算出するとともに、その複雑度の度合いに、その方言が使用される社会的状況との因果関係を見出せるかどうかを、異なった言語を対象とするよりも精緻なかたちで分析する。同時に、方言類型論の新たな研究領域を開拓するとともに、既存の言語観、とくに標準語を基準とみなす言語観に変更を迫ることをめざす。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語文法学会・会長, 2019年4月～2022年3月
日本語学会評議員, 2015年5月～現在に至る
日本語文法学会・評議員, 2015年4月～2021年3月
日本学術会議・連携会員, 2014年10月～2020年9月

4. マシュー・パーデルスキー 教授

1967年生。2006年カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) 大学院東アジア言語文化科 PhD 修了。カリフォルニア州立大学ロングビーチ校非常勤講師、スワスモア大学 (米ペンシルバニア州) 客員助教授・メロン財団ポストドックフェロー、同准教授を経て、2011年10月より現職。専攻：日本語学

4-1. 論文

- BURDELSKI, Matthew, Cekaite Asta(共著) “Pragmatics of crying in adult-child interactions: Introduction to special issue” *Journal of Pragmatics*, 186, Elsevier BV, pp. 358-363, 2021/12
- Cekaite Asta, BURDELSKI, Matthew(共著) “Crying and crying responses: A comparative exploration of pragmatic socialization in a Swedish and Japanese preschool” *Journal of Pragmatics*, 178, Elsevier BV, pp. 329-348, 2021/6
- BURDELSKI, Matthew 「博物館内ツアーにおいて観客にガイドの物語への参与を促す実践」『阪大日本語研究』33, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 1-32, 2021/3
- BURDELSKI, Matthew “Classroom socialisation: repair and correction in Japanese as a heritage language” *Classroom Discourse*, 12-3, pp. 255-279, 2021/3
- BURDELSKI, Matthew “Terima kasih ‘thank you’: Learning to express appreciation with a formulaic expression in Indonesian” *Proceedings of the 4th CAN-Asia Symposium on L2 Interaction*, pp. 1-10, 2021/3
- Moore Ekaterina, BURDELSKI, Matthew (共著) “Peer conflict and language socialization: Introduction to special issue” Kate T. Anderson *Linguistics and Education*, 59, Elsevier, pp. 1-6, 2020/10
- BURDELSKI, Matthew “Teachers and children managing peer conflict in a Japanese preschool” Kate T. Anderson *Linguistics and Education*, 59, Elsevier, pp. 1-11, 2020/10
- BURDELSKI, Matthew “Teacher compassionate touch in a Japanese preschool” Brian Due & Kristian Mortensen *Social Interaction: Video-based Studies of Human Sociality*, 3-1, Royal Danish Library, pp. 1-8, 2020/5
- BURDELSKI, Matthew, Tainio Liisa Tainio, Routarinne Sara (共著) “Human-to-human touch in institutional settings: Introduction to the special issue” Brian Due & Kristian Mortensen *Social Interaction: Video-based studies of human sociality*, 3-1, Royal Danish Library, pp. 1-4, 2020/5

4-2. 著書

青木直子, マシュー・バーデルスキー(共編)『日本語教育の新しい地図—専門知識を書き換える』ひつじ書房, 340p., 2021/3

BURDELSKI, Matthew, Cekaite, Asta (共著) “Control touch in caregiver-child interaction: Embodied organization in triadic mediation of peer conflict” Asta Cekaite & Lorenza Mondada (Eds.) *Touch in social interaction: Touch, language and body*, Routledge, pp. 103-123, 2020/7

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

BURDELSKI, Matthew “Interactional highlighting in children’s language socialization: Repair and correction in a heritage language classroom”, American Anthropological Association (AAA) Annual Meeting, American Anthropological Association (AAA), Baltimore and on-line, 2021/11

Cekaite Asta, BURDELSKI, Matthew “Crying and crying responses: A comparative exploration in Swedish and Japanese preschools”, Language, Interaction, and Social Interaction (LISO) speaker series, University of California, Santa Barbara (UCSB), on line, 2021/10

Cekaite Asta, BURDELSKI, Matthew “Children’s linguistic and embodied practices of inclusion and exclusion in preschool”, 17th International Pragmatics Association (IPrA) Conference, International Pragmatics Association (IPrA), zoom (on line), 2021/6

BURDELSKI, Matthew, Cekaite Asta “Crying and crying responses: A comparative exploration in a Swedish and Japanese preschool”, 17th International Pragmatics Conference, International Pragmatics Association (IPrA), zoom (on line), 2021/6

BURDELSKI, Matthew “Terimah kasih: Learning to express gratitude with a formulaic expression in Indonesian”, 4th Symposium on L2 interaction, CAN-Asia, オンライン, 2021/3

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

マシュー・バーデルスキー 大阪大学賞 教育貢献部門, 大阪大学, 2019/11

マシュー・バーデルスキー 大阪大学総長顕彰 2015(教育学部), 大阪大学, 2015/7

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

5. 三宅 知宏 教授

1965年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程退学。博士(文学)(大阪大学)。鶴見大学専任講師, 同准教授, 同教授を経て, 2016年4月より大阪大学文学研究科准教授。2019年1月より現職。専攻: 日本語学・言語学

5-1. 論文

- 三宅知宏 「「可能性判断」と「構文」」天野みどり・早瀬尚子(編)『構文と主観性』くろしお出版, pp.261-276, 2021/10
- 三宅知宏 「第3章 日本語の移動動詞の対格標示について」岸本秀樹・于康(編)『日語語法研究(上)』外語教学与研究出版社, pp. 62-84, 2021/1
- 三宅知宏 「第14章 日本語の受益構文について」岸本秀樹・于康(編)『日語語法研究(下)』外語教学与研究出版社, pp. 528-545, 2021/1
- 三宅知宏 「いわゆる「措定文」をめぐって」『現代日本語研究』12, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室, pp. 38-53, 2020/12

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

関西言語学会・編集委員, 2020年6月～現在に至る
日本語文法学会・学会誌委員長, 2019年4月～現在に至る
日本語文法学会・運営委員, 2019年4月～現在に至る
日本語学会・編集委員, 2018年6月～2021年5月
関西言語学会・運営委員, 2017年4月～現在に至る
関西言語学会・大会委員, 2017年4月～2021年6月
日本語学会・評議員, 2015年4月～現在に至る
日本語文法学会・評議員, 2013年4月～現在に至る

6. 高木 千恵 准教授

1974年生まれ、大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻修了、博士(文学)。神戸松蔭女子学院大学非常勤講師、京都光華女子大学非常勤講師、関西大学専任講師、同准教授を経て、2010年10月より現職。専攻：社会言語学・方言学

6-1. 論文

Nakane, Ikuko, Kaori Okano, Claire Maree, Chie Takagi, Lidia Tanaka, and Shimako Iwasaki. "Varying orientations to sharing life

stories: A diachronic study of Japanese women's discourse." *Language in Society*, First View, pp. 1-26, 2021/6

Tanaka, Lidia, Kaori Okano, Ikuko Nakane, Claire Maree, Shimako Iwasaki, and Chie Takagi. "Japanese Women's Speech through Life-Transitions (1989-2000): An Analysis of Youth Language Features." *Journal of Linguistic Anthropology*, 31-1, pp. 119-143, 2021/5

高木千恵「大阪方言における禁止形の二つのアクセントとその用法」『阪大社会言語学研究ノート』17, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座社会言語学研究室, pp. 39-51, 2021/3

高木千恵「日本語諸方言を対象にした「性差」研究の展望」『待兼山論叢 日本学篇』54, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-17, 2020/12

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高木千恵「大阪府下の方言の地域差」『テレビ大阪開局 40 周年 大阪 43 市町村を大調査! 「誰も知らんキング」』テレビ大阪, 2021/12

6-4. 口頭発表

二階堂整, 大橋純一, 高木千恵「コロナ禍の方言研究」(ワークショップ「コロナ禍における方言研究—「方言研究支援プロジェクト」から—) 日本方言研究会 第 113 回研究発表会, 日本方言研究会, オンライン, 2021/10

高木千恵「話し手の「社会的な立場」の変化とバリエーション選択—神戸出身女性話者の約 30 年にわたるインタビューデータから—」Japanese Studies Association of Australia (JSAA) 2021 Conference, Japanese Studies Association of Australia (JSAA), オンライン, 2021/9

高木千恵「大阪方言における条件表現のバリエーション」シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言の対照研究を中心に—」, 国立国語研究所, オンライン, 2021/3

高木千恵「地域方言の「性差」を探る—関西方言話者の談話資料から—」日本語学会 2020 年度秋季大会シンポジウム「データから見る日本語と「性差」」, 日本語学会, オンライン, 2020/10

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

日本方言研究会・世話人, 2021 年 5 月～現在に至る

日本語文法学会・学会誌委員, 2019 年 4 月～現在に至る

日本語学会・常任査読委員, 2018 年 6 月～2021 年 5 月

7. 東条 佳奈 助教

1984年生。2016年、大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士後期課程修了。博士（文学）。大阪大学大学院文学研究科日本語学講座助教、目白大学社会学部講師を経て、2020年4月より現職（2022年3月退職）。専攻：現代日本語学。

7-1. 論文

東条佳奈 「文章における「名詞の助数詞的用法」の指示機能—「-条件」と「-容疑者」を例に—」斎藤倫明・修徳健編『語彙論と文法論をつなぐ—言語研究の拡がりを見据えて—』ひつじ書房 pp. 129-152, 2022/3

東条佳奈 「新聞報道における「明るい話題」について」『待兼山論叢 日本学篇』55, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 19-36, 2021/12

東条佳奈 「『報告』BCCWJにおける「名詞の助数詞的用法」について—雑誌資料を例に—」『待兼山論叢 日本学篇』54, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 65-79, 2020/12

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

東条佳奈 「対義語」,「類義語・同義語」,「多義語」,森山卓郎・渋谷勝己編『明解日本語学辞典』三省堂, 2020/5

7-4. 口頭発表

東条佳奈 「医療用語に含まれる「序数詞」について」人文科学とコンピュータシンポジウム, 情報処理学会, 関西大学(オンライン), 2021/12(『じんもんこん 2021 論文集』pp. 194-199, 2021/12)

東条佳奈, 麻子軒, 相良かおる他 「意味ラベルを用いた「-性」を含む病名の言い換え」じんもんこん 2020, 情報処理学会・人文科学とコンピュータ研究会, 筑波大学 筑波キャンパス春日エリア(オンライン), 2020/12(『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 オープンデータからオープンナレッジへ—新時代の研究様式が導く学術情報基盤』pp. 283-288,)

東条佳奈, 相良かおる, 小野正子他 「実践医療用語の語構成と意味—語構成要素語彙表試案表の作成にむけて—」じんもんこん 2020, 情報処理学会・人文科学とコンピュータ研究会, 筑波大学 筑波キャンパス春日エリア(オンライン), 2020/12(『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 オープンデータからオープンナレッジへ—新時代の研究様式が導く学術情報基盤』pp. 289-296,)

相良かおる, 高崎智子, 東条佳奈他 「病名を表す合成語の語末調査」言語資源活用ワークショップ 2020, 国立国語研究所, 国語研究所(オンライン), 2020/9(『言語資源活用ワークショップ 2020 発表論文集』pp. 151-156, 2020/9)

東条佳奈, 麻子軒, 相良かおる他 「病名における「-性」の分析—一般書籍との比較から—」言語資源活用ワークショップ 2020, 国立国語研究所, 国語研究所(オンライン), 2020/9(『言語資源活用ワークショップ 2020 発表論文集』pp. 357-364, 2020/9)

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2019年度～2022年度、若手研究、代表者：東条佳奈

課題番号:19K13184

研究題目:現代日本語における「名詞の助数詞的用法」の実態解明を目指した雑誌コーパスの構築

研究経費:2020年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

2021年度 直接経費 100,000円 間接経費 30,000円

研究の目的:

本研究の目的は、名詞でありながら助数詞のように用いられる数量表現である「名詞の助数詞的用法」を複数のコーパスより収集し、その成立・拡大過程を明らかにすることである。

特に本研究では「名詞の助数詞的用法」のうち、例えば「4 閣僚を更迭」の「-閣僚」のように、ものを数え上げるためには用いられない「擬似助数詞」の用法に着目する。「擬似助数詞」とは、文脈に依存して臨時的に数と結びついた名詞であり、助数詞研究と名詞研究、いずれの立場からも言及されなかった新たな数量表現である。これらは新聞で使用されているが、新聞以外の資料でどのような様相を示すかは未だ詳らかではない。

そこで本研究は、新聞と異なる記事資料である雑誌コーパスを独自に作成し、既存のコーパスとの共時的・通時的比較を通して、「擬似助数詞」を含む「名詞の助数詞的用法」の実態解明をめざす。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-21 美学・文芸学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 1 准教授 3 講師 1 助教 1

教授：高安 啓介

准教授：渡辺 浩司、田中 均、東 志保

講師：西井 奨

助教：横道 仁志

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
45	9	12	0	0	0	1	0

*うち留学生3名、社会人学生1名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	8	6	0	0
2021	14	1	1	0
計	22	7	1	0

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

学部の教育においては、基礎的な講義、重要な個別の主題について探究する講義、原典講読の能力を養う演習を開講することによって、基礎的な知識の定着を図るとともに、自ら問題を探究する能力を育成する。卒業論文作成のための演習では、研究経過のプレゼンテーションとそれについての議論を通じて、卒業論文執筆へ向けて個々の学生の問題関心を深める。

大学院の教育においては、最新の研究動向を踏まえた講義・演習を開講し、美学・文芸学研究の視野を広げることを目指す。また、修士論文作成演習、博士論文作成演習を開講し、学会での口頭発表にも耐える専門的な研究報告を行い、それについて、教員と大学院生が互いの観点を尊重し討論を行う。

学部・大学院を通じて、オフィスアワーその他の機会において、指導教員による個別指導を充実させる。

加えて、芸術学講座の他の専門分野、芸術史講座、および文化動態論専攻アート・メディア論講座との連携をはかるとともに、ティーチング・アシスタント制度を通じて、大学院生に対する教育指導能力についてのトレーニングの場を提供し、学部教育や博士前期課程教育を充実させる。

2. 研究

本学では美学と文芸学が一つの専修・専門分野を構成しており、これは全国的に見ても特色のあることだが、古代以来の修辞学の伝統から美学が生まれた歴史的経緯に即したものである。

美学分野は哲学の一分野として、美や崇高などのカテゴリー、芸術の概念、感性の働きなどを原理的に考察するが、美術、デザイン、映画などの個別領域を専門とする芸術学とも密接な関係を保ち、理論的な深みと実証的な堅実さのどちらも重視して、多様化する美的・芸術的諸現象を探究する。

文芸学分野は、芸術としての文学を扱う。研究の関心は広く古今東西の文芸に及ぶが、特に西洋古典の理解を重視し、その上で文芸の一般原理の研究の対象とする。

上記の専修・専門分野の特質を踏まえて、各教員は、期間中に2点以上の著書または論文を執筆すること、また翻訳、書評を積極的に執筆することを目標とする。博士後期課程の各大学院生は、積極的に国内外の学会で研究成果を発表し、期間中に1点以上の査読付き論文を執筆することを目標とする。また研究推進のため、科学研究費補助金その他の競争的外部資金、および日本学術振興会特別研究員に積極的に応募する。

研究に関してはさらに以下の目標を設定する。紀要『文芸学研究』、『美学研究』を継続的に刊行すること。美学会、意匠学会、民族芸術学会、映像学会など関係学会、および学内の文学会、待兼山芸術学会の運営に協力するほか、文芸学研究会、ギリシア・ローマ神話学研究会を開催し、学内外の共同研究に積極的に参画すること。また海外から研究者を招聘する、国際的な研究集会に参加するなど、国際的な学術交流を推進すること、以上である。

3. 社会連携

国・地方公共団体の文化行政、博物館・美術館の運営、芸術祭の開催などに、専門的な知見を生かして協力する。各種学会の運営に参画する。

研究会を広く公開して研究成果の普及を図るほか、ウェブサイト等を通じて研究室の活動内容を外部に発信するなどの活動を通じて、美学・文芸学という学問分野の社会的認知度の向上に努める。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

「Ⅱ. 掲げた目標」に対応する授業を開講した。ティーチング・アシスタント制度も積極的に活用し、教育の充実に努めた。

美学分野では、卒業論文に向けた演習において、個人発表にたいしてグループ討議の時間を設けたり、テーマの決めかたや論文の書き方についての学びの機会をつくったり、テキストを作成して使用したり、学習を深める様々な工夫を取り入れた。大学院では、書いてきた短い文章を相互にチェックしあうことに重点をおき、アカデミックな文章を書く力を伸ばそうとした。

文芸学研究室では、古代ギリシア語ならびにラテン語の教育に力を入れた。文学部の外国語科目にギリシア語とラテン語がなく、文学部において西洋の古典語を学ぶ機会が少なくなっている現状を考えると、当研究室が提供する古典語の教育はますます重要になると思われる。非常勤講師として勝又泰洋氏が授業を担当した。また、論文作成演習では、学部生・大学院生ともに研究発表の力を高めさせた。

2. 研究

各教員の著書、論文等の刊行の実績、および科学研究費補助金の採択状況は、「Ⅴ. 基本情報」の「12. 教員の研究活

動」のとおりである。また大学院生の研究業績は、「2. 大学院生等による論文発表等」のとおりである。

美学研究室では、美学思想をめぐる多様な視点からの研究を進めている。高安教授は、デザイン評価の問題を歴史的・理論的に考察しており、2021年8月に4th Asian Conference of Design History and Theoryにて成果の発表を行い、*The Journal of the Asian Conference of Design History and Theory* 第4号に論考を発表した。田中准教授は、対話的・協働的な芸術実践の理論の研究を継続し、日本シェリング協会第31回学術大会で成果の発表をし、また『Co*Design』第10号に論考を発表した。東准教授は映画を対象とした表象研究を行い、ジョルジュ・メリエス生誕160年企画・ラボカフェスペシャル feat. 鉄道芸術祭で講演を行い、森元齋科研研究会・待兼山芸術学会で成果の発表を行った。

文芸学研究室はギリシアとローマの文学・レトリックや神話を中心とする研究を行った。渡辺准教授はローマの弁論術を研究し、昨年度のキケロー『トピカ』の翻訳に引き続き、キケロー『弁論家』の翻訳を『大阪大学大学院文学研究科紀要』第62号に発表した。西井講師は、ギリシア・ローマ神話の研究を進め、ルキアノス『海神たちの対話』の翻訳を京都大学学術出版会から発表し、また伝記文学としても重要なウァレリウス・マクシムス『ギリシア・ローマ著名人言行録』の翻訳を進めた。文芸学研究会では、機関誌として『文芸学研究』が順調に定期刊行されてきている。この研究会は本研究室を事務局兼活動母体としながらも、広く西日本の他大学の多くの研究者、学生とも連携したものであり、研究発表会を定期的に開催すると共に、機関誌を年1冊発行し、そのたびごとに合評会を催すなど、活発な活動を継続した。

教員の国際学会での発表は下記「教員の研究活動」のとおりである。

3. 社会連携

外部役員等の引き受け状況および芸術評論の活動については、下記「教員の研究活動」および「大学院生等の業績」に挙げたとおりである。

また文化庁補助金「大学を活用した文化芸術推進事業」の助成を受け、文学研究科を中心として運営された「アート・フェスティバル人材育成プログラム」に、渡辺准教授は事務局として参画した。

IV. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

教育については、目標を上回る成果を上げたと自己評価する。

2. 研究

研究については、目標を上回る成果を上げたと自己評価する。大学院生については、国内外の学会における口頭発表および学会誌への論文の投稿に向けた研究指導を今後も充実させる。

3. 社会連携

社会連携活動は全体として目標を達成したと自己評価する。専門的知見に基づく社会連携活動を今後も継続する。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	0	0	0
2021	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	5(5)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	5(5)
2021	3(3)	3(3)	2(1)	0(0)	0(0)	8(7)
計	8(8)	3(3)	2(1)	0(0)	0(0)	13(12)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	0	7	0	0	0	7
2021	4	2	1	0	0	7
計	4	9	1	0	0	14

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020年度】

〔博士前期〕

松尾和花菜「叙事詩『カレワラ』における天地創造とナショナリズム—リヨンロートによる編集状況を中心に—」『文芸学研究』第24号, pp.34-56, 査読有, 2021/3/31

三浦円佳「明治20年代の小説文体における「雅俗」」『文芸学研究』第24号, pp.57-77, 査読有, 2021/3/31

三浦円佳「尾崎紅葉の文体意識—その特徴と変遷—」『フィロカリア』第38号, pp.1-17, 査読有, 2021/3/1

〔博士後期〕

折居耕拓「マイケル・フリードの初期美術批評—絵画芸術の生存とその論理」『フィロカリア』第38号, pp.1-19, 査読有, 2021/3/1

矢島由佳「近現代日本における水引に関する記憶の系譜」『デザイン理論』第77号, pp.37-51, 査読有, 2021/1/1

【2021年度】

〔博士前期〕

武澤里映「アラン・カブロー《6つのパートからなる18のハプニング》はどのように記録できるか—マイケル・カービーとサミュエル・R・ディレイニーの記述の比較分析を通じて—」『ART RESEARCH ONLINE JOURNAL』第2021年7月号, オンラインのためページ数記載なし, 査読無, 2021/7/18

小川みなみ「マッフェオ・ヴェージョ Supplementum における『アエネイス』との接続」『待兼山論叢 芸術編』第55巻, pp.81-103, 査読有, 2022/3/1

〔博士後期〕

"BON WOO KOO 「Visualization of the imagined landscape through poster: Focusing on the figurative elements of Mindan posters」 『The Culture of Design and Design in Culture The Journal of the Asian Conference of Design History and Theory』 第 4 号, pp.90-99, 査読有, 2022/3/4"

矢島由佳 「Paper Wrapping Practice in Modern and Contemporary Japan: Between Discipline and Commerce」 『フィロカリア』 第 39 号, pp.1-18, 査読有, 2022/3/17

奥野晶子 「詩集『0 音』はコンクリート・ポエトリーか」 『Arts and Media』 第 11 巻, pp.196-211, 査読有, 2021/7/31

奥野晶子 「新国誠一のコンクリート・ポエトリーと ASA(芸術研究協会)の活動」 『待兼山論叢 文化動態論篇』 第 55 号, pp.21-41, 査読有, 2021/12/25

王婷儀 「「日本民俗學對文化財保護政策制定的影響：以民俗資料為例」 Impact of Cultural Traditionology on Policy-making of Cultural Property: A Case Study of Taxonomy for Folk Data」 『思與言』 第 59 卷第 2 号, pp.46-86, 査読有, 2021/6/1

岡田弥生 「Transformation of Gandhi's Khadi: From a National Simbol to an Iconic Sustainable Product」 『The Journal of the Asian Conference of Design Hisrory and Theory』 No.4, 2022, pp.80-88, 査読有, 2022/3/4

(2)口頭発表

【2020 年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕

折居耕拓 「マイケル・フリードの初期美術批評における芸術の存続の論理：グリーンバーグに対する批判を中心に」, 美学会西部会 第 330 回研究発表会, 大阪大学, オンライン, 2020/9/19

出村民 「描写の再認説再考—カテゴリ化能力に基づく考察—」, 第 71 回美学会全国大会, 広島大学, オンライン, 2020/10/4

坂東晴妃 「自然環境モデルを用いたサウンドスケープの美的評価」, 日本サウンドスケープ協会 2020 年度春季研究発表会, オンライン, 2020/6/20

坂東晴妃 「環境美学とサウンドスケープ論—身の周りの音をどう聴くか—」, 待兼山芸術学会 第 30 回研究発表会, 大阪大学, オンライン, 2020/8/8

坂東晴妃 「サウンドスケープにおける五感の再統合—想像力の働きに注目して—」, 美学会西部会 第 332 回研究発表会, 九州大学, オンライン, 2021/3/6

カリン・ペトコフ 「書の美的性質—非漢字文化圏の学習者を対象にした書教育を踏まえて—」, 特定非営利活動法人 アート知っとく会 第 21 回アート知っとくミーティング, オンライン, 2020/11/23

カリン・ペトコフ 「日本の前衛書におけるオートマティズムの一考察—西洋的「オートマティズム」と東洋的「率意」の比較を通して—」, 待兼山芸術学会 第 3 1 回研究発表会, 大阪大学, オンライン, 2021/3/27

【2021 年度】

〔博士前期〕

武澤里映 「バーチャル展覧会作成ソフトウェア Virtualion の特徴と可能性 —2020 年度の実践事例を通じて—」, アート・ドキュメンテーション学会 第 14 回秋季研究集会, オンライン, 2021/10/23

〔博士後期〕

BON WOO KOO 「Visualization of the imagined landscape through poster: Focusing on the figurative elements of Mindan posters」, ACDHT 2021 OSAKA, オンライン, 2021/8/30

折居耕拓 「マイケル・フリードの美術史と写真論における「タブロー」の概念について」, 美学会第 72 回大会, 東京大学, オンライン, 2021/10/9

矢島由佳「What Makes Flower Knot Function as a Language? - In Tea and Incense Ceremonial Use During the Edo Period -」, ICAS12, オンライン, 2021/8/25

矢島由佳「Unfolding the Culture of Hanamusubi: In Tea and Incense Ceremonial Use during the Edo Period in Japan」, ACDHT 2021 OSAKA, オンライン, 2021/8/29

王婷儀「『風俗画報』発行前夜一吾妻健三郎と野口勝一の経歴に見る「風俗画報発行主意書」一」, 日本民俗学会第73回年会, 神奈川大学, オンライン, 2021/10/10

岡田弥生「Transformation of Gandhi's Khadi: From a National Symbol to an Iconic Sustainable Product」, ACDHT 2021 OSAKA, オンライン, 2021/8/29

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕 なし

【2021年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕 なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2021年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2021年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020年度～2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020年度～2021年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2020年度: 0名 2021年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度：0名 2021年度：0名

9. 刊行物

2020年度 『フィロカリア』38号

2020年度 『文芸学研究』24号

2021年度 『フィロカリア』39号

2021年度 『文芸学研究』25号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

【学会等の開催】

美学会西部会第330回研究発表会

2020年9月19日

【事務局等の引き受け】

日本シェリング協会事務局

2016年7月～2020年7月

芸術学関連学会連合事務局

2018年度以降

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 高安 啓介 教授

1971年生。一橋大学社会学部卒業。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了(芸術学)。博士(文学)。愛媛大学法文学部准教授、2016年4月より大阪大学文学研究科准教授を経て、2019年4月より現職。専攻：美学／芸術学

1-1. 論文

高安啓介 “MUJI and the Aesthetics of Simplicity: A Comparative Study on Minimalist Product Images” *The Journal of the Asian Conference of Design History and Theory*, 4, pp. 154-163, 2022/3

Takayasu, Keisuke, “Digital Communication and Global Visual Image Standards of Emojis as a Challenge for an Intercultural Comparison Between Japan and Germany” *Proceedings of the ICDHS 12th International Conference on Design History and Design Studie*, (ICDHS), ICDHS, pp. 721-733, 2020/10

高安啓介 「良いデザインと評価の問題」『デザイン理論』(意匠学会), 76, 意匠学会, pp. 115-129, 2020/8

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

高安啓介 “MUJI and the Aesthetics of Simplicity: A Comparative Study on Minimalist Product Images”, 4th Asian Conference of

Design History and Theory, Organizing Committee/ Graduate School of Letters, Osaka University, Osaka University,online, 2021/8

Takayasu, Keisuke, "Digital Communication and Global Visual Image Standards of Emojis as a Challenge for an Intercultural Comparison Between Japan and Germany", ICDHS 12th International Conference on Design History and Design Studies, International Conference on Design History and Design Studies, Institute for the Research of the Avant-garde,online (オンライン), 2020/10

高安啓介 「製品デザインにおける徳の美学」美学会西部会, 美学会, 大阪大学(オンライン), 2020/9

高安啓介 「思弁デザインはいかなる未来を描くのか」日本デザイン学会 第 67 回春季研究発表大会, 日本デザイン学会, 岡山県立大学, 2020/6

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2020 年度～2022 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:高安啓介

課題番号:20K12530

研究題目:社会デザインと批判デザインとの相互関係をめぐる歴史的展望

研究経費:2020 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

2021 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

非商業系デザインのうちには2系列の取り組みがあった。社会デザイン social design が、人々がいま直面する問題の解決を目指すのなら、批判デザイン critical design は、差し迫った 問題解決をいったん保留して、何が本当に問題なのかを問うたり、思っても見なかった可能性を示唆したりと、アートに近い試みとして知られる。両者ともに関心をもたれているが、各々の歴史はあまり省みられることはなく、両者は一対をなす仕事であるにもかかわらず、両者の関係は深く問われなかった。本研究は、歴史資料にもとづき、非商業系デザインの二 系列の歴史について比較をおこない、デザインに要求される問題解決のありかたを考察する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

藝術学関連学会連合・事務局長, 2018 年 6 月～現在に至る

意匠学会・役員, 2017 年 4 月～現在に至る

美学会・委員, 2016 年 11 月～現在に至る

2. 田中 均 准教授

1974 年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了(美学芸術学、2007 年)。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員(PD、2005 年から 2008 年)、山口大学人文学部講師(2008 年から 2011 年)、同准教授(2011 年から 2012 年)を経て、2012 年 4 月から現職。2016 年 4 月から 2020 年 3 月まで大阪大学 CO デザインセンターに派遣。日本シェリング協会第 7 回研究奨励賞(2011 年)。専攻:美学

2-1. 論文

田中均 「ニック・リグルにおける「ストリートアート」と「社会的開放」の理論:「アートプロジェクト」の美的評価—その理論的モデルを

求めて』『Co Design』10, pp. 53-71, 2021/7

田中均 「ドミニク・ロペス『美に向かう存在』における「美的ネットワーク理論」：「アートプロジェクト」の美的評価—その理論的モデルを求めて④』『Co Design』8, pp. 75-97, 2020/8

2-2. 著書

田中均, 高安啓介, 土田耕督他(共著) 『美学の事典』丸善出版, pp. 56-57, 2020/12

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

田中均 日本シェリング協会第7回研究奨励賞, 日本シェリング協会, 2011/7

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2019年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:田中均

課題番号:19K00154

研究題目:芸術の美的体制と対話・協働の美学の比較研究—芸術の自律性と社会関与の関係の解明

研究経費:2020年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

2021年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究では、芸術の自律性をめぐる現代の論争的状況を代表する重要な議論として、ジャック・ランシエールによる「芸術の美的体制」の理論と、グラント・ケスターの「対話」と「協働」の美学を分析する。この分析を通じて、芸術の自律性と社会への関与とは、表面上は対立するが、実際には密接な関係にあること、また、ランシエールとケスターの理論は、論争関係にあるにもかかわらず共通点が見いだされることを示す。それに基づいて本研究は芸術の自律性の概念の新たなモデルを呈示し、美学史に位置づける。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本シェリング協会・事務局代表, 2016年12月～2020年7月

日本シェリング協会・理事, 2008年10月～現在に至る

3. 渡辺 浩司 准教授

1962年生。大阪大学文学部卒業。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。大阪大学助手、助教を経て2017年4月より現職。専攻:文芸学/西洋古典学

3-1. 論文

渡辺浩司 「キケロー『弁論家』(1)」『文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 62, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 97-125, 2022/3

渡辺浩司「キケロー『トピカ』訳註『文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 61, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 73-102, 2021/3

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渡辺浩司(書評)「「Robert Mayhew, Aristotle's Lost Homeric Problems」『西洋古典学研究』69, pp. 128-131, 2022/3

3-4. 口頭発表

渡辺浩司「キケローにおける *varietas*」初期近代の芸術・文芸における *varietas* と *inventio*, 桑木野幸司 科研(B), 大阪大学(オンライン), 2021/9

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学生生活共同組合・監事, 2019年5月～現在に至る

民族芸術学会・理事, 2018年4月～現在に至る

4. 東志保 准教授

1979年生。国際基督教大学比較文化研究科博士前期課程修了(比較文化論)。パリ第三大学映画視聴覚研究博士(Docteur en Cinéma et Audiovisuel)。国際基督教大学平和研究所助手、同大学非常勤講師、岩手大学非常勤講師、2017年より大阪大学大学院文学研究科助教を経て2021年4月より現職。専攻：映像研究／比較文化論

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

東志保, 大寺眞輔, 原田麻衣他(共著)『アニエス・ヴァルダ:愛と記憶のシネアスト』neoneo 編集室, pp. 80-96, 2021/8

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

東志保(訳)「フリップ・デュボワ著『ビデオー状態:思考する形式』、『Arts and Media』, vol.11, pp.12-31, 大阪大学文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室, 2021/7

4-4. 口頭発表

東志保 「連帯と贈与、そして抵抗としてのシネマトグラフ:クリス・マルケル、ジャン・ルーシュ、アニエス・ヴァルダを例に」、長崎大学多文化社会学部, 長崎大学(オンライン), 2022/3

東志保 「アニエス・ヴァルダの映画における周縁性の表象:『冬の旅』を中心に」待兼山芸術学会, 大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座, 大阪大学(オンライン), 2022/3

東志保 「連帯と贈与としてのシネマトグラフ」ラボカフェ/鉄道芸術祭 vol.10 「映画と鉄道の軌跡をたどる ―記録と創作の可能性」, アートエリア B1, アートエリア B1(ハイブリッド), 2022/1

東志保 「ジョルジュ・メリエスのアクチュアリティ―:幻想と現実」「おもちゃ映画ミュージアム ジョルジュ・メリエス生誕 160 年企画」講演と参考上映, おもちゃ映画ミュージアム, おもちゃ映画ミュージアム, 2021/12

東志保, 菅野優香, 松房子他 「「芸術家 アニエス・ヴァルダの全貌」(菅野優香, 松房子, 若林良との共同の発表)」『アニエス・ヴァルダ 愛と記憶のシネアスト』(neoneo 編集室) 『シモーヌ VOL.4 アニエス・ヴァルダ特集』(現代書館)W 刊行記念, neoneo 編集室, 本屋 B&B(ハイブリッド), 2021/10

東志保 「「ファシズムの道具にならない芸術の概念」と映画:クリス・マルケル、アレクサンダー・クルーゲ、パトリシオ・グスマンを例に」第 15 回形象論研究会, 形象論研究会, オンライン, 2020/9

東志保 「エッセイ映画作家としてのヨリス・イヴェンス:1950 年代叙情的エッセイ映画時代の作品にみられる主観性」表象文化論学会オンライン研究フォーラム, 表象文化論学会, オンライン, 2020/8

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本映像学会関西支部・幹事, 2018 年 6 月～現在に至る

5. 西井 奨 講師

1982 年生。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員 PD を経て、2015 年 11 月より大阪大学文学研究科特任講師を経て、2018 年 4 月より現職。専攻: 文芸学/西洋古典学

5-1. 論文

西井奨 「高橋宏幸先生のラテン文学研究から学んだこと」『西洋古典論集』26, pp. 8-10, 2022/2

5-2. 著書

西井奨(共著) 『ルキアノス 遊女たちの対話 全集 8』京都大学学術出版, pp. 3-39, 225-230, 2021/12

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

西井奨(WEB 記事) 「訳者からのメッセージ:ルキアノス『遊女たちの対話』」『日本西洋古典学会 HP』, 2022/1

西井奨 映画 『グリード ファストファッション帝国の真実』日本語字幕監修, 2021/6

5-4. 口頭発表

西井奨「オウィディウス『変身物語』における「奪われた声」—— イオとピロメラの事例を中心に」文芸学研究会第67回研究発表会，文芸学研究会，大阪大学(オンライン)，2021/12

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

懐徳堂記念会・企画ワーキング委員，2019年6月～2021年6月
ギリシア・ローマ神話学研究会・編集代表，2017年4月～現在に至る

6. 横道 仁志 助教

2021年4月より大阪大学大学院文学研究科 美学研究室 助教。専攻:美学、西洋中世思想、芸術批評

6-1. 論文

なし

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

横道仁志(新聞記事)「美術いま関西で 特別展「ボイス+パレルモ」」『大阪日日新聞』大阪日日新聞，pp. 8-8，2021/12

6-4. 口頭発表

横道仁志「エチケットの修辞学—小津安二郎『麦秋』における黙説法の使用について—」待兼山芸術学会，待兼山芸術学会，大阪大学(オンライン)，2022/3

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-22 音楽学・演劇学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 3 准教授 2(兼任1) 講師 0 助教 2(兼任1)

教授：永田 靖、伊東 信宏、輪島 裕介

准教授：中尾 薫、古後奈緒子(兼任)

助教：鈴木 聖子、横田 洋(兼任)

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
48	8	27	1	0	2	7	0

*うち留学生8名、社会人学生4名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	18	8	2	0
2021	13	4	1	2
計	31	12	3	2

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

教育の中心となるのは学部レベル、大学院レベルそれぞれで開講されている各種演習である。ここでは、卒業論文、修士論文、博士論文の主題、研究手法、論文構成などについて真剣な討議を行う。これに加えて、合宿や特別演習の形で行われている場で、学位論文についての中間報告を行う。さらにオフィスアワーその他の個人指導の機会を通じて、よりきめ細かい指導を行う。また、複数の音楽ホールや劇場における音楽実務や演劇制作に関するインターンシップを実施し、文学研究科のインターンシップ報告書に掲載される報告集を作成する。

2. 研究

音楽学研究室・演劇学研究室ともに、開設から半世紀近くを経たが、今も我が国の総合大学における専攻分野としては極めて稀な存在でありつづけている。そのことも意識しながら、音楽学研究室は、芸術大学や教育大学音楽科における音楽学研究とは異なる問題を志向しており、いわゆる歴史学的美学的探究、作曲学的分析法、民族学的なフィールドワーク、カルチュラルスタディーズ的アプローチなど、様々な方法を組み合わせながら音楽が文化の中でどのような意味を持っているか、ということについて取り組み続けてきた。また演劇学研究室も、西欧演劇史や日本演劇史一般の基礎教育や演劇学一般理論に加えて、文化研究やパフォーマンス・スタディーズなどの接触領域との学際性をも意識しつつ、演劇の現代世界の中での役割を解明し続けている。こういった特色を堅持しながら、教員は、学術的報告2本以上の発表を目標とする。院生においては、博士予備論文提出時に論文2本以上を発表していることを目標とする。また研究室が主催する『阪大音楽学報』『演劇学論叢』の刊行を継続する。さらに科学研究費補助金、および他の競争的外部資金の獲得、日本学術振興会の特別研究員への応募を積極的に推し進める。また、各種大型プロジェクト研究、学内外の共同研究に積極的に参加し、研究の視野と可能性を拡大することなども目標とした。

3. 社会連携

音楽学研究室主催の「コレギウム・ムジクム」を年に1~2回程度開催し、本研究室で行われている多様な研究活動をレクチャー・コンサートという形で広く一般に還元する。また、演劇学研究室では博物館での企画展や、共催する関連講演会などを積極的に開催する。近隣の自治体の劇場や音楽堂とも連携して授業などを展開することで社会貢献にも参加する。さらに、各種学会には委員等として積極的に参加し、研究会、研究グループなどの活動にも参加して、研究成果の普及を図るよう努力することとした。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度~2021年度)

1. 教育

2020年度にはコロナ禍の大きな影響を受け、前期の授業のほとんどはオンラインで行われ、後期も一部の授業が対面で行われたほかはオンライン、またはオンライン併用のハイブリッド型の授業が主たる形態となった。教育の中心となるのは各種演習の授業は、次第にオンラインによる発表、議論といったやり方が確立し、ある程度の成果をあげることができた。卒業論文、修士論文、博士論文の主題、研究手法、論文構成などについての指導、討論はこれまで通り行われたが、各種フィールドワークなどができなかった分、ネット上での調査や、考察に十分な時間が使えて、かえって例年より充実した論文も多かった。学位論文の中間報告などもオンラインで開催され、それなりの成果をあげたと思われる。インターシップに関しても、音楽学で大学院生1件のみ実施できた。新型コロナウイルスをめぐる社会的混乱は、とりわけパフォーマンス・アーツの分野には大きな影響を残したが、その研究に関しても同様のことがいえる。

2. 研究

音楽学研究室では、2020年4月から鈴木聖子助教が着任し教員3名となった(2021年10月よりアートメディア論講座に移籍)。コロナ禍で活動しにくい時期ではあったが、それぞれに著書、論文、訳書などを刊行しており、順調に成果を挙げている。国内外の学会での発表、基調講演、報告なども活発に行なっている。演劇学研究室では教員4名による著書、論文、博物館展覧会図録などが刊行され、学界で高く評価された。また両研究室教員の多くは、科学研究費での助成研究を続けている。さらに院生は国内外の多くの学会での発表、および学会誌ないし研究書への掲載を実現した。演劇学研究室では、2020年11月7日~8日にThe 8th International Asian Theatre Studies Online Conferenceを主催してオンラインで開催し、研究室院生ら5名が英語の口頭発表を行った。2021年11月6日~7日には、The 9th iATS conference 2021, Theatricality and Audience in Contemporary Theatreに大学院生4名が口頭発表を行った。

また音楽学研究室の教員は、民族芸術学会、日本ポピュラー音楽学会の委員、理事などとしての活動を続けており、学会活動の拠点としての存在感を示している。演劇学研究室の教員も、日本演劇学会、日本演劇学会分科会近現代演劇研究

会、IFTR 国際演劇学会、民族藝術学会、能楽学会、藝能史研究会などの会長、事務局、WG 代表、理事、常任幹事、委員を務めるなど、積極的な活動を行っている。2021 年 1 月 9 日には IFTR Asian Theatre Working Group Colloquium を会場校としてオンラインで開催した。教員、招へい研究員、大学院生による科学研究費、民間の財団への研究費の申請も毎年おこなっており、とりわけ院生の日本学術振興会特別研究員採択については、近年着実に成果があがっている。文化庁「大学における文化芸術推進事業」など、文学研究科がかかわる大型資金においても各教員は事業推進者として中心的な役割を果たし、学内外でさまざまな公演やイベントを開催した。さらに演劇学研究室が刊行する『演劇学論叢』20 号（2020 年度）、21 号（2021 年度）は予定通り出版された。音楽学研究室刊行の『阪大音楽学報』は第 16・17 合併号として 2020 年 9 月に出版された。また第 18 号は 2021 年 10 月に刊行された。

3. 社会連携

教員の多くが新聞、雑誌などへの批評寄稿、放送での解説などを定期的に行っており、研究成果の社会還元を果たしている。また院生も、音楽学、演劇学のそれぞれについて、新聞の大きい誌面を割いて月 1 回の寄稿の場が与えられ、自らの関心を幅広い読者に向けて発信する訓練ともなっている。また教員は、民族藝術学会、日本ポピュラー音楽学会などの委員、理事、日本演劇学会における会長、幹事などを務め、さらに各種財団の専門委員、選考委員などを務めて学外の職務にも応じている。京都コンサートホールでのレクチャー・コンサート立案・実施（2021 年 10 月 2 日「ラヴェルが幻視したワルツ」）を始めとしてやシンポジウムなどを学内外で企画立案運営また協力し、研究室を発信源とする社会連携に努めた。

IV. 自己点検・自己評価(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

卒業論文、修士論文とも、コロナ禍により現地に赴けない、あるいはフィールド調査ができないなどの大きな障害が生じたが、結果的には充実した論考が提出された。博士論文についても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員、大学院生による研究成果の発表、刊行は極めて盛んであり、大きな成果を挙げたと評価できる。『阪大音楽学報』は、刊行が遅れた時期があったが、2020 年度に第 16・17 合併号が刊行され、充実した内容を継続している。掲載論文の反響がきわめて大きく、国内外からの要望に応じて PDF 版を公開することになった。また、2021 年度には第 18 号が刊行されている。研究室を中心とした学会活動、大会開催などは 2019 年度から急激に増えているが、2020 年度もその傾向は変わらず、2020 年度には民族芸術学会の全国大会を開催した。これは 4 月開催の予定だったが、感染症の影響で 7 月にオンラインで開催された。内容的にも大会の主たるシンポジウムの一つは「東欧演歌」に関するもので、伊東が基調講演を行い、研究室の修了生、あるいはかつて研究室で招いた海外の研究者などが参加して討議を行った。この成果は同学会機関誌『arts/』第 37 号（2021 年 3 月刊行）の巻頭特集としてまとめられている。2021 年 3 月 24 日と 31 日には、音楽学研究室の麻場友姫胡招へい研究員が企画して、英国ハダスフィールド大学音楽学部との交流シンポジウム”Rethinking Borders Through Music”が開催され、鈴木助教が基調講演を行い、大学院生 3 人が発表した。また、『演劇学論叢』第 20 号を刊行し、院生の論文を含む多くの論文が掲載された。2020 年 11 月 7 日～8 日に The 8th International Asian Theatre Studies Online Conference をオンラインで共催した。ここで、国立韓国藝術総合学校演劇院、国立台北台湾芸術大学、上海戯劇学院の大学院生らとともに演劇学研究室の教員と大学院生が参加し、国際的な場での研究活動に積極的に参加するにより、東アジア域内の演劇研究の水準向上と若手研究者を含むネットワーク構築に大きく貢献した。2021 年 1 月 9 日には IFTR Asian Theatre Working Group のコロキウムを大阪大学がホストとなりオンラインで開催し、アジア域内の主として戦後冷戦期の演劇と戦争の不即不離の関係について活発な議論を展開した。また日本演劇学会近現代演劇研究会の例会を 2020 年 7 月と 2021 年 3 月にともにオンライン開催した。韓国からの研究者の

発表を含み、活発な議論を展開した。

3. 社会連携

上記のとおり、新聞雑誌への寄稿、演奏会や企画展の企画などの活動を通じての社会還元、民間財団委員や公立劇場企画運営委員としての専門知識の提供、学会活動への寄与など、多方面に渡って社会連携を達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	2	0	2
2021	2	0	2
計	4	0	4

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

[2020年]

松本俊樹「劇作家・演出家堀正旗の宝塚における作品研究」

主査：永田靖、副査：伊東信宏、中尾薫、古後奈緒子

須田悦夫「幸若舞の展開—芸能伝承の諸相」

主査：永田靖、副査：天野文雄、阪口弘之、伊東信宏、中尾薫

[2021年]

垣沼絢子「宝塚・東宝レビュー史にみる近代化と身体統制のイデオロギー」

主査：永田靖、副査：輪島祐介、中尾薫、古後奈緒子

松井拓史「ハンガリー国立民俗アンサンブルの複層的ダイナミクス - 冷戦、イデオロギー、エージェント -」

主査：伊東信宏、副査：輪島裕介、永田靖

【論文博士】

[2021年]

木下耕介「視聴覚の物語叙述における登場人物」

主査：永田靖、副査：片淵悦久、東志保、中尾薫

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	4(3)	1(1)	8(5)	0(0)	0(0)	13(9)
2021	2(1)	7(1)	2(2)	0(0)	1(0)	12(4)
計	6(4)	8(2)	10(7)	0(0)	1(0)	25(13)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	7	12	8	1	2	30
2021	6	10	8	0	1	25
計	13	22	16	1	3	55

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020 年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕

(音楽学)

杉山恵梨「リチャード・タラスキンのオーセンティシティー論を再考する」『阪大音楽学報』第16・17合併号, pp.1-14, 査読有, 2020/9/30

加藤賢〈書評論文〉「『シティ』たらしめるものは何か? : シティ・ポップ研究の現状と展望」『阪大音楽学報』第16・17合併号, pp.45-62, 査読有, 2020/9/30

加藤賢「渋谷へ召還される〈渋谷系〉ポピュラー音楽におけるローカリティの構築と変容」『ポピュラー音楽研究』第24号, pp.17-34, 査読有, 2020/12/31

平尾佳子「教科書から見た満洲の唱歌教育—「外地」における新教育の理想と現実—」『阪大音楽学報』第16・17合併号, pp.85-143, 査読有, 2020/9/30

張佳能「誰かリルを知らないか?」—「上海リル」をめぐる音楽史的考察『ポピュラー音楽研究』第24号, pp.85-100, 査読有, 2020/12/1

(演劇学)

温彬「「世阿弥「物まね」論における「心」の性格—中国伝統演劇論「曲学」との関連から」『演劇学論叢』第20号, pp.68-90, 査読無, 2021/3/17

瀧尻浩士"The Critical Point of Kamigata Comedy: How It Became a New Comedy in the TV Era"『演劇学論叢』第20号, pp.104-92, 査読無, 2021/3/17

柏木純子「メロドラマ『微笑みを売る女』に見る革新」『演劇学論叢』第20号, pp.46-7, 査読無, 2021/3/17

金潤貞「時間としての沈黙—『水の駅』をめぐる—」『近現代演劇研究』第9号, pp.36-45, 査読有, 2020/8/31

金潤貞「如何接近眞實: 太田省吾早期劇本的『不言之言』」『戯劇學刊』第32号, pp.-, 査読有, 2020/10/13

金潤貞「小劇場運動としての劇団『エジョト』の活動—一九七〇年代を中心に—」『演劇学論叢』第20号, pp.24-45, 査読無, 2021/3/17

Iryna Kastylianchanka"Crossing Boundaries: Translation and Adaptation of Dostoevsky's Crime and Punishment in Contemporary Japanese Theatre"『フィロカリア』第38号, pp.19-40, 査読有, 2021/3/17

垣沼絢子「An Ideology of Body Control and Liberation: Japanese Revue Censorship」『Forum of Theatre and Drama』第16号, pp.280-290, 査読有, 2020/12/15

【2021 年度】

〔学部〕

(演劇学)

- 安川奈那「ギリシャ劇における女性蔑視表現と現代上演におけるその解決」『演劇学論叢』第 21 号, pp.76-89, 査読無, 2022/3/18
 [博士前期]
 (音楽学)
 (演劇学)
 [博士後期]
 (音楽学)
- 佐藤馨「シャルル・ケ克蘭のモノディー」『阪大音楽学報』第 18 号, pp.65-88, 査読有, 2021/10/12
- 吉村汐七「同期演奏の文化史に向けて—MIDI 規格以前のデジタル・シーケンサー—」『フィロカリア』第 39 号, pp.1-22, 査読有, 2022/3/18
- 張佳能「さすらう大陸歌謡：《北帰行》をめぐる音楽文化史」『阪大音楽学報』第 18 巻, pp.1-41, 査読有, 2021/10/1
- 張佳能「大陸歌謡の貫戦的再考：〈花売娘〉シリーズを手がかりに」『待兼山論叢・芸術篇』第 55 巻, pp.29-59, 査読無, 2021/12/1
- 張佳能「「歌は世にもつれ」への誘い——細川周平『近代日本の音楽百年』書評」『人文×社会』第 5 巻, pp.37-42, 査読無, 2022/3/15
- 加藤賢 (Kato Ken and Morits Sommet) 「Japanese City Pop abroad : findings from an online music community survey」『Institut de plurilinguism』, pp.1-16, 査読無, 2022/3/1
 (演劇学)
- 垣沼絢子「踊る音楽／踊られる音楽：アーティストックスポーツにおける音楽と身体の影響合い」『Arts and media』第 11 号, pp.254-263, 査読, 2021/7/24
- 岡田登貴「下間少進仲之の家系再考：下間丹後光頼との姻戚関係をめぐって」『演劇学論叢』第 21 号, pp.19-40, 査読無, 2022/3/18
- 馮縁「大正期宝塚少女歌劇における「中国」—久松一声の初期作品と「支那趣味」—」『近現代演劇研究』第 10 号, pp.42-57, 査読有, 2022/1/31
- 馮縁「大正期宝塚少女歌劇における「中国」—久松一声の歌劇『邯鄲』を中心に—」『演劇学論叢』第 21 号, pp.41-56, 査読無, 2022/3/18
- 新井静「肉/体：唐戯曲と音楽における「当て書き」の多重性」『Arts and media』第 11 号, pp.248-253, 査読, 2021/7/21

(2) 口頭発表

【2020 年度】

[博士前期]

(音楽学)

小松啓子 “Dame e Musica alla corte estense nel Cinquecento”, La cultura astrologica e musicale nella corte rinascimentale, 大阪大学, オンライン, 2020/4/23

佐藤馨「シャルル・ケ克蘭の「モノディー期」研究」, 第 2 回若手研究者フォーラム, 大阪大学豊中キャンパス, ハイブリッド(両方), 2020/9/28

(演劇学) なし

[博士後期]

(音楽学)

杉山恵梨「後期バロック音楽に関する理論書と研究書の邦訳書にみる古楽受容——1970-80 年代を中心に」, 第 71 回美学学会全国大会, 広島大学, オンライン, 2020/10/4

杉山恵梨「Reception of Early Music in Japanese Performance Practice after 1960」, Symposium: Rethinking Borders through Music, ハダスフィールド大学、大阪大学, オンライン, 2021/3/31

- 加藤賢「メジャー・レコード会社と大阪の音楽文化 Amemura O-town Record 設立から現在にいたるビーイング・グループの活動実践」, 第8回都市文化研究フォーラム, 大阪市立大学杉本キャンパス, ハイブリッド(両方), 2020/11/22
- 加藤賢「Sweet Home Osaka: Americanization and Localization in Postwar Japan」, the 7th Inter-Asia Popular Music Studies Conference, Sunway University, オンライン, 2020/12/5
- 加藤賢「新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 流行下におけるポピュラー音楽の公的助成: 行政、および産業構造の視点から」, オンラインワークショップ: ポピュラー音楽と文化助成〜COVID-19による影響, オンライン, 2020/12/20
- 加藤賢「海外からの『再発見』: WEBプラットフォームとシティ・ポップ」, 美学校基礎教養シリーズ〜ゼロから聴きたいシティポップ, オンライン, 2021/1/30
- 加藤賢「Relocalizing Shibuya-kei Music in Shibuya: The Construction and Transformation of Locality in Popular Music」, Symposium: Rethinking Borders through Music, オンライン, 2021/3/24
- 張佳能「Rethinking Tairiku Songs in the Transwar Japan: From a Viewpoint of History of 20th-century Japanese Popular Music」, 7TH INTER-ASIA POPULAR MUSIC STUDIES CONFERENCE (IAPMS), Department of Film & Performing Arts Sunway University, オンライン, 2020/12/5
- 張佳能「Rethinking Tairiku Songs in Transwar Japan: A Study on Hokkiko」, Rethinking Borders through Music, University of Huddersfield and Osaka University, オンライン, 2021/3/31
- 近祥伍「デイヴ・ブルーベックのジャズにおける拍子の実験—その発想と展開」, 第2回若手研究者フォーラム, 大阪大学豊中キャンパス, ハイブリッド(両方), 2020/9/28
- 近祥伍「デイヴ・ブルーベック《ポイント・オン・ジャズ》分析—ジャズに内在する音楽ジャンルの混血性とその拡張—」, 第51回定例研究会, オンライン, 2021/2/13
- 松井拓史「ハンガリー国立民俗アンサンブルの東西ツアー: 彼らは旅するプロパガンダ集団なのか?」待兼山芸術学会第30回総会・研究発表会, オンライン (2020年8月8日)
- 松井拓史「ハンガリー国立民俗アンサンブルの1959・1960年の政治的プログラム: 共産党による歴史的ナラティブのスペクタクル化」2020年度東欧史研究会・ハブスブルク史研究会 合同個別研究報告会, オンライン (2020年10月11日)
- (演劇学)
- 新井静「肉/体——音楽により二重化される特権的肉体」, 日本ポピュラー音楽学会第32回年次大会, オンライン, 2020/12/27
- 瀧尻浩士「The Critical Point of Kamigata Comedy: How It Became a New Comedy in the TV Era」, The 8th International Asian Theatre Studies Online Conference, 大阪大学, オンライン, 2020/11/8
- 馮縁「Takarazuka Revue's Performances Set in China: Issei Hisamatsu's Kageki "Journey to the West"」, The 8th International Asian Theatre Studies Online Conference, 大阪大学, オンライン, 2020/11/7
- 岡田登貴「下間少進能伝書『童舞抄』相伝の諸相 I 豊臣秀次・秋田城介」, 六麓会2020年8月例会, オンライン, 2020/8/9
- 岡田登貴「観世小次郎信光と応仁の乱 —能《胡蝶》の舞台「一条大宮の古宮」をめぐる—」, 第2回若手研究者フォーラム, 大阪大学, オンライン, 2020/9/28
- 岡田登貴「下間少進能伝書にみる「余情」—序論—」, 六麓会2020年12月例会, オンライン, 2020/12/28
- 岡田登貴「下間少進能伝書・能型付相伝の諸相—「余情」をキーワードとして—」, 能楽学会第19回大会, オンライン, 2021/3/13
- 柏木純子「『微笑みを売る女』のメロドラマ性とポール・ポレルの演出」, 近現代演劇研究会5月7月合同オンライン例会, 大阪大学, オンライン, 2020/7/21
- 金潤貞「李潤澤 (イ・ユンテク) 演出による太田省吾の『小町風伝』」, 日本演劇学会2020年度研究集会, 京都芸術大学, オンライン, 2020/11/15

- 垣沼絢子「An Ideology of Body Control and Liberation: Japanese Revue Censorship」, The 8th International Asian Theatre Studies Online Conference, 大阪大学, オンライン, 2020/11/7
- 垣沼絢子「1950年代の東宝のヌードレビュー: 劇場と武智鉄二の交錯」, 日本演劇学会 2020年度研究集会, 京都芸術大学, オンライン, 2020/11/15
- 垣沼絢子「占領期における舞踊の検閲: レビューにおける国家表象と検閲の実態」, 舞踊学会 2020年度第72回大会, オンライン, 2020/12/15
- 垣沼絢子「踊る音楽/踊られる音楽」, 日本ポピュラー音楽学会第32回年次大会, オンライン, 2020/12/27
- 垣沼絢子「アーニー・パイル劇場と Federal Theatre Project: GHQ/SCAP 資料の会議録を中心に」, 待兼山芸術学会, 大阪大学, オンライン, 2021/3/27
- Iryna Kastylianchanka「Chekhov in the Transcultural perspective: on the example of Sung Kiwoong Three sisters Abroad」, 近現代演劇研究会 5月7月合同オンライン例会, 大阪大学, オンライン, 2020/7/21
- Iryna Kastylianchanka「The Transformation of the Cultural Identities, or Korean Drama in Contemporary Japanese Theatre」, 14th Annual Conference on Asian Studies (ACAS), Department of Asian Studies of Palacký University Olomouc, オンライン, 2020/11/21

【2021年度】

[学部]

(演劇学)

- 安川奈那「古代ギリシャ劇の翻案作品とその上演におけるジェンダー・人種の問題—キャリル・チャーチル作 “A Mouthful of Birds” を例に一」, 学部学生による自主研究奨励事業研究成果発表会, 大阪大学, オンライン, 2022/2/18

[博士前期]

(音楽学)

- 木村颯「アルメニアのポップフォークにおける政治性: ユーロヴィジョン・ソング・コンテストを中心に」, 第五回若手研究者セミナー, オンライン, 2022/3/26

- 木村颯「アルメニアのポップフォークにおける両義性: 音楽を介して交錯する「自己」と「他者」」, 日本ポピュラー音楽学会 2022年度第1回オンライン例会 卒論・修論発表会, オンライン, 2022/3/29

- 孫長熙(ソン・ジャンヒ)「1960年代後半の日本のフォーク・ソングの「民衆」をめぐる対立と模索(仮)」, 2021年度第4回オンライン例会 卒業論文・修士論文構想発表会, オンライン, 2021/10/16

- 孫長熙(ソン・ジャンヒ)「1968年前後の日本におけるフォーク・ソングの民衆をめぐる対立と模索—竹中労の「流砂革命論」と大島渚の韓国/朝鮮表象を中心に—」, 2022年度第1回オンライン例会 卒論・修論発表会, オンライン, 2022/3/29

(演劇学)

[博士後期]

(音楽学)

- 小松啓子「フェラーラ公アルフォンソ二世の宮廷における演劇的騎馬試合の発想」, 待兼山芸術学会 第32回総会・研究発表会, オンライン, 2022/3/20

- 張佳能「もう一つの「昭和歌謡」ブーム: 一九六〇年代の〈歌謡リバイバル〉をめぐる考察」, 日本ポピュラー音楽学会 第33回年次大会, オンライン, 2021/12/4

- 杉山恵梨「バッハ《マタイ受難曲》演奏分析——1970-2000年の古楽の録音を比較して」, 第72回美学学会全国大会, 東京大学, オンライン, 2021/10/9

- 加藤賢, (共著: 後藤隆基, 平石貴士, 宮入恭平)「COVID-19と文化研究—その可能性と限界」, 日本ポピュラー音楽学会 第33回大会, 関西国際大学, オンライン, 2021/12/5

(演劇学)

- 垣沼絢子「レビューの舞踊と作家性：貫戦期日本のレビュー台本分析から」, 2021 年東アジア大衆演劇若手研究者フォーラム, 国立台北芸術大学, オンライン, 2021/7/10
- Iryna KASTYLIANCHANKA 「Gorky’ s The Lower Depths in Japanese theatre: the motif of homeless and waste」, IFTR 2021, National University of Ireland, Galway, オンライン, 2021/7/13
- 杉本亘「明治十年代の外国貴賓響応能と芝能楽堂建設——歌舞伎の貴賓響応芸能の展開も踏まえて——」, 近現代演劇研究会 7 月例会, 大阪大学, オンライン, 2021/7/17
- 杉本亘「能の中の逢坂」, 国際研究集会「デジタル文学地図の構築と日本古典文学研究・古典教育への展開」, 大阪大学, オンライン, 2021/9/25
- 柏木純子「ジャポニズムの終焉—アンドレ・アントワーヌ演出『日本の名誉』」, 2021 年度日本演劇学会全国大会, 名城大学, オンライン, 2021/6/27
- 柏木純子「‘Looking at Japan Through Covered Eyes: Changes and Issues in the Stage Adaptation of Félix Régamey’ s Closed Eyes’」, The 9th international Asian Theatre Studies conference, 国立韓国芸術総合学校, オンライン, 2021/11/6
- 岡田登貴「『下間系図』に見る下間光頼と下間少進」, 藝能史研究会第 58 回大会, オンライン, 2021/6/6
- 岡田登貴「慶長期の能型付相伝—下間少進『童舞抄』相伝の影響を中心に—」, 2021 年度日本演劇学会全国大会, 名城大学, オンライン, 2021/6/26
- 岡田登貴「下間少進家系関係史料紹介—大阪城天守閣蔵『大坂三番村定専坊家系写』ならびに『下間少進家家譜』」, 六麓会二〇二一年一〇月例会, オンライン, 2021/10/3
- 岡田登貴「『駒井日記』にみる下間少進への下され物「八木式百石」」, 六麓会二〇二一年一二月例会, オンライン, 2021/12/28
- 瀧尻浩士「‘The Characteristics and Limitations of Neil Simon’ s Early Comedy The Odd Couple through Its Attitude Toward Marriage and Divorce’」, The 9th international Asian Theatre Studies conference, 国立韓国芸術総合学校, オンライン, 2021/11/7
- 馬縁「大正期宝塚少女歌劇における『中国』—久松一声の初期作品と「支那趣味」—」, 近現代演劇研究会 7 月例会, 大阪大学, オンライン, 2021/7/17
- 馬縁「Takarazuka Revue’ s Performances Set in China in the Taisho Era: Issei Hisamatsu’ s Kageki Kantan」, The 9th international Asian Theatre Studies conference, 国立韓国芸術総合学校, オンライン, 2021/11/6
- 新井静「「綾波レイ」と贈与——「仮称」と第 3 村」, 表象文化論学会第 15 回大会, オンライン, 2021/7/3
- 新井静「“Audience” in the Words of Juro Kara -Changes in Kara’ s Theory of Audience in the Context of Changing Theatre Space」, The 9th international Asian Theatre Studies conference, 国立韓国芸術総合学校, 2021/11/6
- 湯書華「江戸期における中国戯曲の翻訳—嵐翠子『填詞胡蝶夢』について—」, 日本中国学会第 73 回大会, 愛知大学, オンライン, 2021/10/9

(3)その他(書評・翻訳など)

【2020 年度】

[博士前期]

(音楽学)

(演劇学)

小國真奈「新陳代謝の中で受け継ぐ伝統—宝塚歌劇月組公演「WELCOME TO TAKARAZUKA～雪と月と花と～」
「ピガール狂騒曲～シェイクスピア原作『十二夜』より～」」, 大阪日日新聞, 2020/11/3

[博士後期]

(音楽学)

(演劇学)

- 新井静「素晴らしき日英アーティスト競演 『FORTUNE』」, 大阪日日新聞, 2020/5/5
- 瀧尻浩士「奇跡的顔ぶれ、世界から結集 ミュージカル『チェス』」, 大阪日日新聞, 2020/8/4
- 瀧尻浩士「若者への共感と声援込め ピッコロ劇団第 68 回公演「ホクロのある左足」」, 大阪日日新聞, 2020/12/1
- 瀧尻浩士「地点：# ミュラーの肩上で、2020 年代に向けてアジってみた——地点『ハムレット・マシーン』」, 『Act27』, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, 2020/6/30
- 瀧尻浩士「不自由さを楽しむ——災禍から生まれた祭り～劇場の灯を消すな！シアターコクーン編 松尾スズキプレゼンツ アクリル演劇祭」, 『Act28』, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, 2020/12/3
- 瀧尻浩士「瀬戸内海のヘテロトピア—文学座『五十四の瞳』」, 『Act29』, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, 2021/3/31
- 馮縁「大胆で革新的な意欲作 宝塚歌劇団雪組公演 ミュージカル・シンフォニア『fff フォルティッシッシモ—歡喜に歌え！—』」, 大阪日日新聞, 2021/2/2
- 岡田登貴「多彩なジャンル、融和と深化 有斐斎弘道館再興 10 周年記念 勸進『新(淇)劇』」, 大阪日日新聞, 2020/10/6
- 柏木純子「映像保存に耐えうる小林の好演 新国立劇場「巣ごもりシアター『蝶々夫人』」」, 大阪日日新聞, 2020/7/7
- 柏木純子「観客の理解求めぬ新感覚 U35 創造支援プログラム”KIPPU”シラカン「ぞう騒々」」, 大阪日日新聞, 2021/1/5
- 柏木純子「観客側に起こる演劇的“感情” ロームシアター京都開館 5 周年記念事業 レポートリーの創造 松田正隆作・演出『シーサイドタウン』」, 大阪日日新聞, 2021/3/2
- Iryna Kastylianchanka「百変化—幻惑的美しさ 壽初春大歌舞伎「大津絵道成寺の愛之助」」, 大阪日日新聞, 2020/4/7
- Iryna Kastylianchanka「人間の運命の継続な動き 劇団「地点」公演「罪と罰」」, 大阪日日新聞, 2020/6/2
- 矢野郁「面白い“不都合な”舞台 オンライン観劇『大地 (Social Distancing Version)』」, 大阪日日新聞, 2020/9/1
- 金潤貞「AICT 関西演劇講座報告「批評とは何か——2020 年代に向けて」」, 『Act27』, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, 2020/6/30

【2021 年度】

[博士前期]

(音楽学)

(演劇学)

- 馬照旋「狂気のマシーンに潜んでいる人間愛」, 大阪日日新聞, 2021/4/6
- 馬照旋「幸か不幸か? ある「真実」を探る旅」, 大阪日日新聞, 2021/10/5
- 波多野珠喜「ダンスで魅せる闘う少年たち “ニュージーズ”」, 大阪日日新聞, 2021/12/3

[博士後期]

(音楽学)

(演劇学)

- 柏木純子「リアルとフィクションの間で—NODA・MAP 第 24 回公演『フェイクスペア』大阪公演」, 大阪日日新聞, 2021/9/7
- 岡田登貴「一瞬に集約されるドラマ 『河村定期追善別会』」, 大阪日日新聞, 2021/6/1
- 瀧尻浩士「安定した名作喜劇に拍手—初笑い! 松竹新喜劇 新春お年玉公演『二階の奥さん』」, 大阪日日新聞, 2021/5/4
- 瀧尻浩士「日常空間の裂け目から聞こえる劇の声 —父の歌から、母の歌あるいは自分たちの歌へ— (批評プロジェクト 2021 SPRING 選出)『KYOTO EXPERIMENT Web Magazine』、京都国際舞台芸術祭、2021/5/19
- 瀧尻浩士「わかぎゑふ流 大阪近代史としての『人間喜劇』—玉造小劇店配給芝居 vol.28『長い長い恋の物語』』『ACT』30 号、国際演劇評論家 (AICT) 日本センター関西支部、2021/9/10
- 瀧尻浩士「「思想なき笑い・京都死闘編～全力で無意味(ナンセンス)であり続けること～ 鉄割アルバトロケット『鉄都

割京です』『KYOTO EXPERIMENT Web Magazine』、京都国際舞台芸術祭、2021/12/3

馮縁「東宝ミュージカル『モーツァルト！』—誰もが抱える二面性、見事に」、大阪日日新聞、2021/7/6

新井静「コロナ禍の下、皮膜の外と内から」、大阪日日新聞、2021/8/3

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

【2020年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

(演劇学)

瀧尻浩士, Best Paper Award, The 8th International Asian Theatre Studies Online Conference, 2020/11/8

【2021年度】

〔博士前期〕なし

〔博士後期〕

(演劇学)

馮縁, Best Paper Award, The 9th International Asian Theatre Studies Conference (Online), 2021/11/7

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD: 0名 DC2: 3名 DC1: 1名 (計4名)

2021年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2021年度 学部: 2名 大学院: 0名 (計2名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020年度～2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

上畑 史、博士後期課程修了、国立民族学博物館、機関研究員、2021/4

岡田蒔子、博士後期課程修了、京都芸術大学、専任講師、2021/4

マハバル・サウガゲレル、博士前期課程修了、モンゴル国立音楽院、専任講師

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020年度～2021年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2020年度: 0名 2021年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度：0名 2021年度：0名

9. 刊行物

2020年度 『演劇学論叢』第20号
2020年度 『阪大音楽学報』第16-17号
2021年度 『演劇学論叢』第21号
『阪大音楽学報』第18号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

(音楽学)

第36回民族芸術学会大会「創造と摩擦：グローバルアート再考」オンライン開催、2020年7月25・26日。

Online Symposium, “Rethinking Borders Through Music: Bringing together postgraduate researchers from the University of Huddersfield and Osaka University,” オンライン、2021/3/24, 31

(演劇学)

近現代演劇研究会5月7月合同例会、オンライン、2020/7/18

The 8th International Asian Theatre Studies Online Conference, オンライン、2020/11/7-8

近現代演劇研究会12月3月合同例会、オンライン、2021/3/13

The 9th International Asian Theatre Studies Conference ; Theatricality and Audience in Contemporary Theatre, オンライン、2021/11/6-7

近現代演劇研究会7月合同例会、オンライン、2021/7/17

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

(音楽学)

伊東信宏教授、輪島裕介准教授、そして2020年4月着任の鈴木聖子助教は、いずれも活発な研究活動を展開した。伊東教授の科学研究費国際共同研究強化B「東欧の音楽文化に関する民俗学的調査と編曲作品」による研究は引き続き進められたが、コロナ禍の影響により予定していた調査などが行えなくなったところがあり、研究期間延長なども模索している。一方で日本病跡学会総会（2020年8月22日、自治医科大学）や民族芸術学会大会（2020年7月、大阪大学、オンライン）などにおける基調講演が相次ぎ、近年の仕事の総括的な発表を行うことになった。輪島准教授は、科研費基盤C「環太平洋・間アジア視点から近代日本大衆音楽史を読み直す」による研究を進めた。2020年12月には、気鋭のインドネシア研究者・金悠進氏をゲストに迎えて講演会「異国趣味からの脱却：”インドネシアらしい音楽”とはなにか」を開催した。また、輪島准教授が受け入れ教員となっている麻場友姫胡招へい研究員が、英国での所属先であるハダスフィールド大学音楽学部との交流シンポジウム”Rethinking Borders Through Music”を企画し、鈴木助教が基調講演を行い、大学院生3人が発表した。鈴木助教は、科学研究費研究活動スタート支援「小沢昭一における音楽芸能の正統性の概念の研究：LP作品集『日本の放浪芸』を中心に」が10月に採択され、これまで通り組んできた雅楽研究を「古代」概念を通して戦後の民衆芸能研究に結びつける研究を進めた。2020年11月に「古代」の楽器を用いるサウンドアーティスト鈴木昭男氏に関する公開講演会（鈴木聖子、上村博（京都芸術大学教授））をオンライン+音声による一般公開（録音）で実施した。2021年1月にサウンドアーティスト鈴木昭男氏を豊中キャンパスに招聘して特別講演会と「古代」楽器・創作楽器の実演（輪島准教授科研、鈴木助教科研、研究室の共催）を待兼山会館会議室で実施する予定であったが、直前に緊急

事態宣言が発令されて延期となった。また学会活動として、民族芸術学会第36回総会が伊東教授を大会実行委員長として、大阪大学を主催校として開催されたが、当初4月の予定が7月に延期され、しかもオンライン開催となった。内容的には上記の通り、シンポジウムの一つで「東欧演歌が取り上げられ、研究室周辺の多くのメンバーが議論に寄与した。そのほか研究室主催の研究会としては2021年6月29日に兵藤裕巳氏（学習院大学名誉教授）をオンラインゲストとして迎え「座頭と瞽女と説経（節）の語り：物語芸能のパフォーマンス」という講演を実施した。これは同10月9日に第七芸術劇場で行われた映画『琵琶法師 山鹿良之』のアフタートーク（兵藤裕巳氏と伊東）とも関連する講演会である。また2021年12月21日には浅井佑太氏（お茶の水大学助教）による講演会「スケッチ・未完成資料は何を語るか？：ウェーベルンの12音技法受容過程を例にして」を開催した。

（演劇学）

永田靖教授、中尾薫准教授、古後奈緒子准教授、横田洋助教とも、いずれも多くの論文や著書、また学会等への出席、会議運営などきわめて活発に研究活動を行っている。本研究室には、永田教授が会長を務める日本演劇学会の分科会である近現代演劇研究会を永田教授が主宰して、毎年5回ほどの研究会を行い、関西圏における数少ない演劇研究者の定期的な研究発表の機会を提供して関西での演劇研究の拠点となっている。永田教授は引き続き、科学研究費基盤研究(B)を獲得し、日本を含むアジア演劇の近現代演劇史の再考を進めているが、国際会議への出席が頻繁となっており、主催する国際研究会「IFTR Asian Theatre Working Group」を毎年2回世界諸都市で開催し、アジア諸国における演劇研究との連携を図っている。2020年度はコロナ禍により、7月のアイルランド大会は中止となったが、2021年1月にコロキウムを大阪大学がホストとなってオンライン開催した。演劇学研究室では、東アジアの主要演劇大学（国立韓国芸術総合学校演劇院、上海戲劇學院、台北藝術大学）との国際会議を毎年1回開催しているが、2020年度には大阪大学がホストとなり、11月7日～8日にThe 8th International Asian Theatre Studies Online Conferenceをオンライン開催した。中尾准教授は、一般向け講座の講師を依頼される事例が多く、研究成果を積極的に公開するほか、能楽学会の関西例会・能楽フォーラムの世話人、能楽学会常務委員、民族芸術学会理事、芸能史研究会委員のひとりとして、学会での存在感を高めしている。永田教授、中尾准教授はそれぞれ、複数の科研グループの代表者や分担者、研究協力者として、成城大学、羽衣国際大学など他大学の研究会に参画し、これらの成果は科研費成果報告書ばかりではなく、個別の論文や学会発表に反映されている。このことは大学院学生の研究活動の活発化につながっており、その評価は上記「教育活動」において触れた。これらのことを通して、日本伝統演劇と西欧近代演劇とを相互に参照しつつ多様で活発な研究を展開し、日本のみならず国際的にも評価されている演劇研究拠点として評価されている。

【研究会等実施状況】

科研費講演会「芸術活動の作る場所という関心からのサウンド・アーティスト鈴木昭男氏の活動の意味」（研究代表者：鈴木聖子）（研究室共催）講師：上村博氏（京都芸術大学教授）、2020年11月17日（オンライン+音声による一般公開）。

科研費特別講演会「楽器と「古代」アジア：鈴木昭男の「陶埴（けん）」を聞く」（研究代表者：輪島裕介、鈴木聖子）（研究室共催）講師・パフォーマー：鈴木昭男氏（サウンド・アーティスト）、豊中キャンパス待兼山会館会議室、2021年1月12日より延期。

特別講演：鈴木昭男「創作楽器 De Koolmees（デ・コールメス）、サウンドアート作品〈点音（おとだて）〉」

科研費講演会「異国趣味からの脱却—“インドネシア（らしい）音楽”とは何か—」（研究代表者：輪島裕介）（研究室共催）講師・金悠進（国立民族学博物館機関研究員）、オンライン、2020/12/8

オンライン講演会「座頭と瞽女と説経（節）の語り：物語芸能のパフォーマンス」（研究室主催）講師：兵藤裕巳（学習院大学名誉教授）、オンライン、2021/6/29

オンライン講演会「スケッチ・未完成資料は何を語るか？——ウェーベルンの12音技法受容過程を例にして」（研究室主催）講師：浅井佑太氏（お茶の水大学助教）、オンライン、2021/12/21

近現代演劇研究会5月7月合同例会、オンライン、2020/7/18

The 8th International Asian Theatre Studies Online Conference, オンライン, 2020/11/7-8

近現代演劇研究会 12月3月合同例会, オンライン, 2021/3/13

The 9th International Asian Theatre Studies Conference ; Theatricality and Audience in Contemporary Theatre, オンライン, 2021/11/8-9

近現代演劇研究会 7月合同例会, オンライン, 2021/7/17

12. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 永田 靖 教授

1957年生。1981年上智大学外国語学部ロシア語学科年卒業、1988年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位取得退学。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究科客員研究員、ロシア国立映画大学研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：演劇学

1-1. 論文

永田靖 「パンデミックの演劇ーアントナン・アルトーを忘れよう」『演劇学論集 紀要』71, 日本演劇学会, pp. 27-34, 2020/12

永田靖 「シンガポールの潮州歌劇」『Arts&Media』10, 大阪大学文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論コース, pp. 253-259, 2020/7

1-2. 著書

永田靖, 橋爪節也他(共著) 『EXPO70 大阪万博の記憶とアート』大阪大学出版会 2021/10

永田靖, 井上理恵, 五十殿利治他(共著) 『島村抱月の世界ヨーロッパ文芸協会芸術座』社会評論社, pp. 255-284, 2021/11

永田靖(編) 『漂流の演劇 維新派のパースペクティブ』大阪大学出版会, pp. 4-18, 22-49, 2020/8

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

永田靖 「外地の『三人姉妹』」『Arts&Media』Vol.11, 大阪大学文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論コース, pp.267-270, 2021/7

永田靖 「コロナ禍での／からの演劇」『日本映像学会会報』190, 日本映像学会, pp. 4-4, 2021/2

永田靖 「サハリンに向き合うー『チェーホフも鳥の名前』」関西えんげきサイト「劇評アーカイブス」, 2022/1/24
<https://k-engeki.net/>

永田靖 「不易流行」『日本演劇学会会報』97, 日本演劇学会, pp. 2-2, 2021/2

永田靖 「コロナ禍での全国大会中止」『演劇学論集 紀要』71, 日本演劇学会, pp. 117-118, 2020/12

永田靖 「コロナ禍での演劇研究」『日本演劇学会会報』96, 日本演劇学会, pp. 2-3, 2020/7

1-4. 口頭発表

Nagata, Yasushi “Message from Asian Theatre Working Group Post-Covid 19 Asian Theatre” the14 Asian Theatre WG Conference, Asian Theatre Working Group, IFTR, University of Philippines, Diliman (オンライン), 2022/3

Nagata, Yasushi “Performing Rusticity-on some Japanese ‘multilingual’ plays” Practicing Japan - 35 years of Japanese Studies in Poznań and Kraków, Adam Mickiewicz University, Poznań / Jagiellonian University in Kraków, Adam Mickiewicz University, Poznań / Jagiellonian University in Kraków (オンライン), 2022/3

永田靖 「定住とはなにか」金森マユ写真展セミナー, 「微しの上を鳥が飛ぶー文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム」, 2022/1/26

永田靖 「人形浄瑠璃 文楽と鹿角」シンポジウム, 能勢浄るりシアター, 2021/12/22

永田靖 「『12人の怒れる男』について」 「『12人の怒れる男』劇評ワークショップ」吹田メイシアター, 2021/12/11

Nagata Yasushi “Theatre and Ecology” Closing, Asian Theatre WG Galway Meeting, IFTR Annual Conference, On Line, 2021/7/12

永田靖 「いま、臨界点にある演劇：「現代版組踊」から、演劇と地域、教育、産業を考える」コメンテーター，2021年 度日本演劇学会全国大会「臨界点の演劇」シンポジウム，2021/6/26

永田靖 「大阪大学の社会学共創と大阪の未来」シンポジウム懐徳堂・適塾から中之島、そして未来への温故知新，日本ヨーロッパ 芸術文化交流財団，オンライン，2021/3

永田靖 「オーストラリア日系移民と私たち/イントロダクション」レクチャー&ワークショップ、「作品制作とセッション」，徴しの上を鳥 が飛ぶ-文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム，大阪大学(オンライン)，2021/2

Nagata, Yasushi, “Asian Theatre and War” Closing address”, IFTR Asian Theatre Working Group Online Meeting, Asian Theatre Working Group, Oaska University (オンライン), 2021/1

永田靖 「いま、臨界点にある演劇：「現代版組踊」から、演劇と地域、教育、産業を考える/コメンテーター」日本演劇学会全国大 会，日本演劇学会，名城大学(オンライン)，2021/6

永田靖 “Theatre and Ecology” Asian Theatre WG Galway Meeting, IFTR Annual Conference, On Line, International Federation for Theatre Research, Galway, National University of Ireland (オンライン) , 2021/7

Nagata, Yasushi, “Theatre at a Critical Point”, Openning address”, the 8th international Asian Theatre Studies conference, international Asian Theatre Studies conference, Oaska University (オンライン), 2020/11

永田靖 「チェーホフからソン・ギウンへ」『外地の三人姉妹』シンポジウム，徴しの上を鳥が飛ぶ-文学研究科におけるアート・プラ クシス人材育成プログラム，大阪大学(オンライン)，2020/11

永田靖 「維新派の舞台美術と野外演劇」上映会&トークイベント，大阪大学出版会，スタンダードブックストア(オンライン)， 2020/10

永田靖 「維新派の、ことば・空間・身体」『漂流の演劇』刊行記念イベント，大阪大学出版会，スタンダードブックストア(オンライ ン)，2020/9

Nagata, Yasushi, “Urban-development and Burial in “JUNCTION” by the Dojo-Taikutsu”, IFTR Galway Conference, Environments, Sustainability, and Politics, International Federation for Theatre Reseaerch, National University of Ireland (コロナ禍により大会 中止), 2020/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2018年度～2022年度、基盤研究(B) 一般、代表者:永田靖

課題番号:18H00624

研究題目:アジア近現代演劇の超域性の研究—クラスター構築と次世代研究者育成の国際共同研究

研究経費:2020年度 直接経費 3,000,000円 間接経費 900,000円

2021年度 直接経費 3,600,000円 間接経費 1,080,000円

研究の目的:

ポスト植民地主義的、またポスト・グローバリゼーション時代を迎える現代において、多様な実践が試みられているアジア近現代演劇の多様性を総合的に理解し、広い世界の演劇学・演劇史的観点から捉え返すことが求められている。この共同研究では、アジア間の相互影響やその共通する芸術的特徴を西欧演劇との比較のもとで明らかにすること、20世紀後半以後のグローバリゼーション時代の今日的課題を検討すること、人種や言語を越えて接触し合ってきたアジアの近現代演劇を総合的に研究することを目的とする。またアジア諸都市間、西欧のアジア演劇研究者とのネットワークを生かして、クラスター構築を進めて行く。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2020年度～2021年度、5：その他補助金、助成金獲得者：永田靖

助成金名：大学を活用した文化芸術推進事業

研究題目：文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム

助成団体名：文化庁

助成金額：2020年度 直接経費 15,400,000円

2021年度 直接経費 20,000,000円

研究の目的：

文学研究科の人文学研究とアート・マネジメント講座を噛み合わせることで、現代社会において求められている諸課題に対して人文学的なアプローチを行うアート・ファンリテーターの人材育成を行う。担当教員が芸術諸ジャンルのアート経験を人文学の側からの解釈を行いつつ、人間や共同体のアイデンティティに関する諸問題について考察を深め、アートの社会での実的な展開能力を身につけることを目的としている。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪府市文化振興会議・委員, 2020年月～現在に至る

兵庫県立尼崎ピッコロ劇団企画運営委員会・委員長, 2019年月～現在に至る

稲盛財団京都賞選考専門委員会・委員, 2017年5月～現在に至る

公益財団法人吹田市文化振興事業団・理事, 2015年5月～現在に至る

日本演劇学会・会長, 2014年6月～2022年6月

豊中市文化審議会・委員, 2014年6月～現在に至る

兵庫県立ピッコロ劇場企画運営委員会・運営委員, 2011年3月～現在に至る

Asian Theatre Working Group, International Federation for Theatre Research・Convener, 2009年7月～2022年6月

芸術学関連学会連合・委員, 2005年6月～2022年6月

日本演劇学会・理事, 2002年6月～現在に至る

日本演劇学会近現代分科会・主宰, 2000年11月～現在に至る

2. 伊東 信宏 教授

1960年、京都市生まれ。大阪大学文学部美学科（音楽学）卒業。同大学院修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、リスト音楽院（ハンガリー）客員研究員などを経て、1993年、大阪教育大学助教授。2004年、大阪大学助教授、准教授を経て、2010年4月より現職。専攻：音楽学

2-1. 論文

伊東信宏「特集「想像と摩擦：グローバルアート再考」、伊東信宏による趣旨説明「2010年代のポップフォーク（東欧演歌）」(p.8-15)、イヴァ・ネニッチ(伊東訳)「音楽における地域主義」(p.16-25)、岩谷彩子「表面的音楽：ルーマニアのマネレがっなく世界」(p.26-37)、上畑史「音楽と民族的アイデンティティ」(p.38-49)、ステラ・ジヴコヴァ(伊東信宏訳)「15年後の補足：ブルガリアのポップフォークがひらいた新しいページ」(p.50-60)『民族芸術学会機関誌 arts/』37, pp. 8-60, 2021/4

伊東信宏「グレン・グールドと物としてのピアノの関係」『病跡学会誌』100, pp. 10-18, 2021/1

伊東信宏「『美しき水車小屋の娘』とは誰か？：サイコロジカル・ホラーとして聴く」『アリーナ』23, pp. 310-320, 2020/12

2-2. 著書

坂本龍一、伊東信宏、上尾信也(共著)『ピアノへの旅』アルテス・パブリッシング, pp. 11-175, 2021/7

伊東信宏『東欧音楽夜話—越えられない国境／未完の防衛線』音楽之友社, 256p., 2021/2

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 伊東信宏 「ロシア人音楽家排斥に関するコメント」『毎日新聞』毎日新聞, 2022/3
- 伊東信宏 「伊東信宏×片山杜秀 往復書簡2「最後の琵琶法師」」『レコード芸術』2022年2月号, pp. 204-205, 2022/2
- 伊東信宏 「特集「ワルツの謎」に関するインタビュー記事」『家庭画報』2022年1月号, pp. 116-116, 2022/1
- 伊東信宏 「CD、イザベル・ファウストほか「兵士の物語」」『レコード芸術』2021年9月号, p.94, 2021/9
- 伊東信宏 「CD、ダニー・ドライヴァー「リゲティ」ピアノ・エチュード」評『レコード芸術』2021年5月号, p. 193, 2021/5
- 伊東信宏 「CD、クルレンツィス「ベートーヴェン:交響曲第7番」評」『レコード芸術』2021年4月号, p. 82, 2021/4
- 伊東信宏(演奏会評)「宮田大チェロ・リサイタル」『朝日新聞』朝日新聞, 2021/1
- 伊東信宏 「ながらの座・座 藤原道山・吉田誠 演奏会」『朝日新聞』朝日新聞, 2020/10
- 伊東信宏 「コパチンスカヤ、イル・ジャルディーノ・アルモニコ「ヴィヴァルディ、その先に」」『レコード芸術』2020年10月号, 音楽之友社, p. 92, 2020/9
- 伊東信宏 「ロト+ギョルツェニヒ管弦楽団「シューマン交響曲第1、第4番」レビュー」『レコード芸術』2020年9月号, 音楽之友社, p. 84, 2020/8
- 伊東信宏 「「ウィーン 1900」レビュー」『レコード芸術』2020年8月号, 音楽之友社, p. 85, 2020/7
- 伊東信宏 「ロト、ル・シエクル「展覧会の絵」レビュー」『レコード芸術』2020年5月号, 音楽之友社, p. 92, 2020/4

2-4. 口頭発表

- 伊東信宏 「パネル企画「批判校訂全集からみるバルトーク研究の現在:『ミクロコスモス』合評を中心に」(岡本佳子、太田峰夫、中原佑介、子安ゆかり、伊東信宏、浅井祐太)」日本音楽学会第72回全国大会, 日本音楽学会, 信州大学(ハイブリッド), 2021/11
- 伊東信宏 (基調講演)「グールドと物としてのピアノ」第67回日本病跡学会総会, 日本病跡学会, 自治医科大学, 2020/8
- 伊東信宏 (基調講演)「2010年代のポップフォーク(東欧演歌)」民族藝術学会大会シンポジウム, 民族藝術学会, オンライン, 2020/7

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 伊東信宏 木村重信民族藝術学会賞, 民族藝術学会, 2010/5
- 伊東信宏 大阪大学教育研究功績賞, 大阪大学, 2010/2
- 伊東信宏 サントリー学芸賞, サントリー文化財団, 2009/12
- 伊東信宏 吉田秀和賞, 吉田秀和芸術振興財団, 1997/11
- 伊東信宏 アリオン賞奨励賞(音楽評論部門), アリオン音楽財団, 1990/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2018年度～2022年度、国際共同研究加速基金(B)、代表者:伊東信宏

課題番号:18KK0002

研究題目:東欧の音楽文化に関する民俗学的調査と編曲作品研究

研究経費:2020年度 直接経費 2,500,000円 間接経費 750,000円

2021年度 直接経費 2,600,000円 間接経費 780,000円

研究の目的:

本研究は、東欧の音楽文化を対象に、ブルガリア、セルビア、スロヴェニアといった各地域相互の比較、およびそれらと日本との比較を通じて、東欧および日本の文化の理解を深めることを目的としている。注目するのは、音楽の二つの階層である。A) まず民衆文化のレベルで、東欧と日本の民俗的風習について、とりわけ日本の来訪神行事(2018年にユネスコの無形文化遺産に登録された)と東欧の「コレダ」「コリンダ」のような外形的に類似する現象を調査する。この民衆文化の共通性の基盤のうえに、B) 第二のレベルとして、その現代的表現形態(音楽における「ポップフォーク」、あるいは民俗音楽の編曲作品など)についても比較検討を

行う。このような調査研究を通じて、東欧各国にこれまで築いてきたネットワークを利用しながら、音楽学と民俗学の両面にまたがる研究組織を構築し、国際的発信のための研究拠点を形成することを目指す。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

文化庁、次代の文化を創造する新進芸術家育成事業・音楽分野 協力者会議委員, 2019年4月～現在に至る

日本芸術文化振興会の評価等に関する有識者会議・委員, 2018年4月～現在に至る

日本音楽学会・支部監事, 2017年4月～現在に至る

日本万国博覧会記念基金事業審査会・委員, 2017年4月～現在に至る

日本芸術文化振興会・音楽専門委員, 2013年4月～現在に至る

京都府文化力チャレンジ意見聴取会議・委員, 2012年4月～現在に至る

民族芸術学会・理事, 2008年4月～現在に至る

サントリー芸術財団、サントリー音楽賞、佐治敬三賞・選考委員, 2000年6月～現在に至る

朝日新聞音楽懇話会・委員, 2000年4月～現在に至る

3. 輪島 裕介 教授

1974年生。東京大学大学院人文社会系研究科（美学芸術学）博士課程単位修得退学。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、国立音楽大学ほか非常勤講師、2011年4月大阪大学文学研究科准教授を経て、2021年4月より現職。専攻：音楽学

3-1. 論文

輪島裕介 「踊るアジア、きらめくシティ」『東京人』36-6, pp. 62-63, 2021/3

輪島裕介 「美空ひばりにおける「歌う時代劇スター」から「座長」への転身とその文化産業史的意義」立教大学アジア地域研究所 主催 国際シンポジウム「東アジア文化圏の芸能にみる『大衆』～観念・実 体・空間～」論文集, 2020

3-2. 著書

輪島裕介(共著),野澤豊一,瀬慈,『音楽の未明からの思考:ミュージッキングを超えて』アルテスパブリッシング, 担当範囲:ダンスと振付の間, 2021/12

輪島裕介(共著),安井眞奈美,エルナンデス・アルバロ,『身体の大衆文化―描く・着る・歌う』株式会社 KADOKAWA, 担当範囲:第9章 音盤と身体―近代日本の音楽と歌舞音曲, 2021/11

輪島裕介(共著),細川周平,『音と耳から考える:歴史・身体・テクノロジー』アルテスパブリッシング, 担当範囲:「洋楽」をつくる―1970年代後半国産ディスコの産業と文化, 2021/10

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

輪島裕介 〈書評〉阿部万里江『チンドン屋の響き:現代日本における音の空間と社会的つながり』, 日本研究, Vol. 62, p. 189-192, 2021/3

輪島裕介(共訳),倉橋耕平,趙 相宇(他),レオ・チン『反日:東アジアにおける感情の政治』, 人文書院, 2021/8

3-4. 口頭発表

輪島裕介 「声とからだの泣き別れ、そしてめぐりあい:音盤と(で)踊る身体」名古屋大学大学院人文学研究科附属超域文化社会センター国際シンポジウム「音／声の文化史」, 2022/1

輪島裕介 「道頓堀ジャズからドドンパへ:近代大阪の歌と踊り」台湾・国立台北芸術大学戯劇学院主催シンポジウム「移轉的大衆戯劇:民衆記憶的顯影與體制的重建」, 2021

輪島裕介 「レオ・チン『反日』から考える戦後東アジア大衆音楽の諸相」日本ポピュラー音楽学会全国大会, 2021

輪島裕介 「「明日はどっちだ?」:1960~70年代テレビアニメ主題歌のメディア、産業、思想」表象文化論学会大会シンポジウム「シンポジウム:オーディオヴィジュアルの歴史における「アニソン(1960/1990)」:テレビまんが・音盤・ノスタルジー」, 2021

WAJIMA, Yusuke “Made in Japan”, Inspired by Filipino Performers: The Rise and Fall of Latin Dance-Music, Dodonpa, Latin American Studies Association Annual Conference, 2021

輪島裕介 「はっぴいえんど史観とシティポップ:大衆音楽史研究の可能性と陥穽」リベラルアーツ学科学際研究会, 玉川大学リベラルアーツ学科, 玉川大学(オンライン), 2021/1

WAJIMA, Yusuke, 「Against “City Pop”: In Search for a Genealogy of “Country Pop” in Japan」The 7th Inter-Asia Popular Music Studies (IAPMS) Conference, inter-asia popular music studies group, Sunway University, Kuala Lumpur, (オンライン), 2020/12

輪島裕介 「宝塚・松竹・「道頓堀ジャズ」:近代大阪の歌と踊り」国際論壇「娯楽市場と芸能 娯楽市場与表演」, 立教大学アジア地域研究所, 立教大学(オンライン開催), 2020/12

輪島裕介 「「はっぴいえんど史観」と「シティポップ」:日本の大衆音楽における真正性とカノン形成」国際シンポジウム「日本研究の新展開:グローバル化時代の研究・教育を見据えて」, 大阪大学グローバル日本学教育研究拠点/「国際日本研究」コンソーシアム, 大阪大学(ハイブリッド), 2020/12

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

輪島裕介 大阪大学賞, 大阪大学, 2017/10

輪島裕介 第33回サントリー学芸賞 芸術・文学部門, サントリー文化財団, 2011/11

輪島裕介 The 2011 IASPM Book Prize for a book written in a language other than English, International Association for the Study of Popular Music, 2011/8

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2019年度~2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:輪島裕介

課題番号:19K00220

研究題目:環太平洋・間アジア視点から近代日本大衆音楽史を読み直す

研究経費:2020年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2021年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

概ね1920年代から現代までの日本の大衆音楽史を、太平洋圏という観点から、特にアジア諸地域内部の相互関連に注目して再検討する。それによって、従来もっぱら「洋楽」の受容という観点から語られてきた日本の近代音楽史(必ずしも大衆音楽に限定されない)を相対化し、近隣諸国・諸地域との比較が可能となるような歴史記述を行うための諸前提を探求する。具体的には、レコード、ラジオ、トーキー映画といった

複製技術に依拠する大衆音楽スタイルの形成と変容過程を、圏域内での「西洋」経験の同時性・近似性と、日本が(20世紀前半は「帝国」として、後半は「経済大国」として)比較的長期間にわたって他地域に一定の影響を及ぼしてきた経緯の双方に留意しながら検討する。以て、「戦前/戦後」や「演歌・歌謡曲/ポップ・ロック」といった、やや恣意的な分断に依拠しがちだった従来の大衆音楽史記述を、包括的に捉える視点の獲得も目指す。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本ポピュラー音楽学会・理事、研究活動委員長、2018年12月～現在に至る

4. 中尾 薫 准教授

1978年生。2001年、奈良女子大学文学部言語文化学科日本アジア言語文化学卒業、2008年、大阪大学大学院文学研究科(演劇学)博士後期課程修了。博士(文学)。2009年、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館助手。2011年、大阪大学大学院文学研究科専任講師を経て、2014年4月より現職。専攻：演劇学、能楽研究。

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

大谷節子、宮崎修多、中尾薫他(共著)『謡の家の軌跡—浅野太左衛門家基礎資料集成』和泉書院、2022/3

松岡心平、横山太郎、高橋悠介、中尾薫他(共編)『観世文庫所蔵能楽資料解題目録』檜書店、766p. , pp. 17-764, 2021/1

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中尾薫 『元禄本ニヨル「高野物狂」について』『能』京都観世会館会報誌, pp. 7-7, 2022/3

中尾薫 「十五世観世元章と先祖世阿弥の伝書」『能と狂言』19, pp. 87-99, 2021/11

中尾薫(巻頭)「大坂の知、町人の道」『記念会だより』119, 懐徳堂記念会, 2021/9

中尾薫(書評)「須田悦生著『幸若舞の展開—芸能伝承の諸相—』」『演劇学論集 紀要』72, pp. 136-143, 2021/6

中尾薫(書評)「玉村恭著『おのずから出で来る能 世阿弥の能楽論 または〈成就〉の詩学』」『図書新聞』3492, pp. 6-6, 2021/4

中尾薫 「朝日会館における能楽民衆化への支援」『大阪春秋』181-令和3年冬号, 新風書房, pp. 90-91, 2021/1

中尾薫 「「京都観世会浅野文庫資料紹介(四)—浅野本『四座役者目録』上・下—」」『能』745, 京都観世会, pp. 6-7, 2020/4

4-4. 口頭発表

中尾薫 「浅野文庫の能楽資料」第33回能楽フォーラム「謡の家の軌跡—京都観世会浅野文庫紹介—」, 2022/3

中尾薫 「能狂言と感染症」日本演劇学会二〇二一年度全国大会:パネル・ディスカッション「日本演劇と感染症—演劇を襲った病と演劇に描かれた病—」, 2021/6

中尾薫 「謡曲と名所」国際シンポジウム「古典のジャンルと名所—デジタル文学地図の活用」, 2020年度文学研究科国際共同研究力向上推進プログラム「デジタル文学地図の構築と日本文化研究・教育への貢献」, オンライン, 2021/3

中尾薫 「日本統治下台湾における演劇興行の研究と課題」民族芸術学会第159回研究例会:日本統治下台湾の能・歌舞伎・浄瑠璃興行をひもとく, 民族芸術学会, オンライン, 2021/3

中尾薫 「十五世観世元章と先祖世阿弥の伝書」2020年度世阿弥忌セミナー:世阿弥伝書を読む能役者—世阿弥伝書の受容・変容—, 能楽学会, オンライン, 2020/9

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2018年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:中尾薫

課題番号:18K00234

研究題目:日本統治下の台湾における歌舞伎・浄瑠璃史の構築—現地資料に基づく基礎研究と考察—

研究経費:2020年度 直接経費 400,000円 間接経費 120,000円
2021年度 直接経費 0円 間接経費 0円

研究の目的:

1895年から1945年まで50年におよぶ日本統治時代台湾における歌舞伎興行、浄瑠璃興行の実態を明らかにし、台湾における歌舞伎・浄瑠璃史を構築する。そのために、『台湾日日新報』を中心とした資料調査に基づき、「内地」での興行といかなる関連を持っているのかという視点を軸に、台湾での歌舞伎・浄瑠璃興行の展開の実態、組織の成立過程、興行の場所、興行の関係者などを、明らかにする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

若狭倉座の神事能調査準備委員会・委員, 2020年8月～2021年3月

日本演劇学会・理事, 2020年7月～現在に至る

芸能史研究会・委員, 2017年6月～現在に至る

能楽学会・常任委員, 2016年6月～現在に至る

民族芸術学会・理事, 2015年5月～現在に至る

5. 古後 奈緒子 准教授

1972年生。2004年大阪大学 文学研究科文化表現論(美学)修了、修士(文学)。京都造形芸術大学、大阪外国語大学、龍谷大学、神戸市外国語大学、奈良大学、神戸女学院大学等の非常勤講師、2014年より大阪大学文学研究科助教を経て、2017年4月より現職。2001年日本演劇批評家協会主催第5回「シアターアーツ賞」受賞。2001年舞踊学会研究奨励賞。専攻:舞踊学

5-1. 論文

古後奈緒子「人間の輪郭を書き換えるダンス—万博を控えた大阪のパースペクティブ—」『シアターアーツ』66, pp. 100-109, 2022/3

古後奈緒子「エレクトラとダイナモの結婚—ウィーン国際電気博覧会における電気劇場のパレエ」『近現代演劇』10, pp. 2-18, 2021/5

古後奈緒子「世紀転換期のパレエにおける人形と電気の主題—ヨーゼフ・ハスライター『人形の精』を中心に—」『大学院文学研究科紀要』61, 大阪大学文学会, pp. 103-123, 2021/3

古後奈緒子「記録メディアとしてのパフォーマンス台本に関する試論」『漂流の演劇』大阪大学出版会, pp. 192-222, 2020/8

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

古後奈緒子「誰も皆(everyman/Jederman)の関心であるコモンの話」『ACT』30, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, 2021/9

古後奈緒子「映像アーカイヴに探る未来—コロナ禍の中で見た『レミング』『SHARE』『緑のテーブル 2017』」『Act』28, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, 2020/12

古後奈緒子 「モダンダンス」『ドイツ文化事典』丸善, pp. 544-545, 2020/10

古後奈緒子 「『モノガタルカラダ/物語る声』が立ち上げる場—なぜ今、メタモルホールへ行くのか?」『イメージ』76, 劇団態変, pp. 56-60, 2020/5

5-4. 口頭発表

Kogo, Naoko, “Reenactment and documentation of performers liveness of Ishinha in Osaka as Performing Arts Museum”, 33 rd SIBMAS Conference, the International Association of Libraries, Museums, Archives and Documentation Centres of the Performing Arts., ワルシャワ(コロナのため延期), 2020/8

Kogo, Naoko, “Travel and Transformation of Ishinha”, EAJS2020, the European Association of Japanese Studies Conference, ブリュッセル(コロナのため延期), 2020/5

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪アーツカウンシル・委員, 2018年5月～2022年3月

大阪市芸術文化活動助成・審査委員, 2018年5月～2022年3月

日本芸術文化振興会・文化芸術活動調査員, 2018年5月～現在に至る

6. 横田 洋 助教

1976年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。2008年、大阪大学総合学術博物館研究支援推進員。2011年より、大阪大学総合学術博物館助教。

6-1. 論文

なし

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

横田 洋 (展示企画・運営・解説)「大阪大学総合学術博物館第15回特別展「乙女文楽—開花から現在まで」」, 2021/9

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

7. 鈴木 聖子 助教

1971年生。2012年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程（文化資源学）単位取得退学。博士（文学）（東京大学、2014年）。パリ大学東アジア言語文化学部・助教、大阪大学大学院文学研究科音楽学研究室・助教を経て、2021年より現職。専攻：音楽芸能史・文化資源学

7-1. 論文

鈴木聖子 「民間の雅楽団体における「わざ」の正統性 ―菌廣教と雅楽道友会の音響空間―」『待兼山論叢:芸術篇』55, pp. 1-28, 2022/2

鈴木聖子 「声と音の芸能史 : 「小沢昭一的小三治」」『ユリイカ』784-544, pp. 211-218, 2022/1

鈴木聖子 「「古代」の音」(細川周平編著)『音と耳から考える——歴史・身体・テクノロジー』, アルテスパブリッシング, pp.107-109, 2021/10

鈴木聖子 「1970年代聴覚文化における大道音楽や物売りの声の録音収集の意義:LPレコード集『ドキュメント 日本の放浪芸』の文化資源学」『サウンドスケープ』21, 日本サウンドスケープ協会, pp. 74-85, 2021/7

Suzuki, Seiko, “Between Narrative and Melody : Meaning of Musical Preaching (fushidan sekkyō) on Shōichi Ozawa’s LP collection Document / Itinerant Arts of Japan” *MÉMOIRE SONORE DU JAPON:LE DISQUE, LA MUSIQUE ET LA LANGUE*, (共著論文集), pp. 53-65, 2021/3

7-2. 著書

Suzuki, Seiko, Pascal Cordereix et, Gabriel Bergounioux(共同監修), *MÉMOIRE SONORE DU JAPON:LE DISQUE, LA MUSIQUE ET LA LANGUE*, (共著論文集), 2021/3

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

鈴木聖子 (仏語より翻訳) (パスカル・コルドレクス著)「バリ植民地博覧会における音声博物館の録音資料:学術とプロパガンダと商業のあいだで」『阪大音楽学報』18, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 117-138, 2021/10

鈴木聖子(インタビュー)「若い世代の「新作」が希望」『東京大学新聞』新年号, 東京大学新聞, pp. 4-4, 2021/1

鈴木聖子 「田辺尚雄の『東亜の音楽』を聴く」『(日本)国立国会図書館『歴史的音源』』, (https://rekion.dl.ndl.go.jp/ja/ongen_shoukai_17.html), 2020/11

PASCAL CORDEREIX, Suzuki, Seiko(共著) (フランス国立図書館デジタル図書館「ガリカ」公式ブログ), “Nouvel érotisme au Japon dans les années 1970”, 『Le Blog Gallica La Bibliothèque numérique de la BnF et de ses partenaires フランス国立図書館オンライン公式ブログ』フランス国立図書館 (<https://gallica.bnf.fr/blog/09092020/nouvel-erotisme-au-japon-dans-les-annees-1970?mode=desktop>) (ウェブ掲載のみ) (フランス語), 2020/9

鈴木聖子 「フランスにおける日本関連の録音資料」公益財団法人サントリー文化財団・アステイオン編集委員会『アステイオン』92, CCC メディアハウス, pp. 130-137, 2020/6

鈴木聖子 (Web 雑誌、インタビュー) 「革新を続けて“伝統”を守る、雅楽の研究者」『アネモトリ』89, 京都芸術大学 (<https://magazine.air-u.kyoto-art.ac.jp/kaze/8182/> (ウェブ掲載のみ)), 2020/4

7-4. 口頭発表

Suzuki, Seiko, “La représentation du gagaku des années 1970 au XXIe siècle »(1970年代から21世紀までの雅楽の表象)”, 14e Colloque de la SFEJ, SFEJ (フランス日本学会), オルレアン大学 (フランス)、ハイブリッド, 2021/12

鈴木聖子 「《Réflexion ethnographique sur l’authenticité du gagaku traditionnel hors de l’Agence impériale : à travers la mesure pour le shō dans l’Ensemble Gagaku gōyū-kai 》(宮内庁楽部の外部における伝統的な雅楽のオーセンティシティについての民族誌的考察: 雅楽道友会の笙の拍子を通して)」国際研究プロジェクト Sheng ! l’orgue à bouche (笙! マウスオルガン), フランス国立音楽音響研究所 IRCAM (イルカム), フランス国立音楽音響研究所 IRCAM (イルカム) ハイブリッド, 2021/6

鈴木聖子 「ラジオ番組と映画音声ガイドの制作を通じた日本語学習～普遍性と多様性をつなぐ授業デザイン～」フランス日本語教師会 AEJF 第 17 回国際シンポジウム, フランス日本語教師会 AEJF, パリ大学 (オンライン), 2021/6

Suzuki, Seiko, “Marginality and Performing Arts: Listening to Striptease on the Record”, Rethinking Borders through Music: Online Symposium, EU マリーキュリー研究資金、ハダスフィールド大学、大阪大学大学院音楽学研究室, ハダスフィールド大学 (英国) オンライン, 2021/3

鈴木聖子 「「ベートーヴェン人生劇場残侠篇」(1970)の歴史的意義—『題名のない音楽会』における日本の伝統的な音楽・芸能の役割—」第 71 回全国大会, 日本音楽学会, 武蔵野音楽大学, 2020/11

鈴木聖子 「レコード上のサウンドスケープ: 小沢昭一『日本の放浪芸』における音の記憶の再現とその意義」2020 年度秋季研究発表会, 日本サウンドスケープ協会, オンライン, 2020/11

鈴木聖子 「ラジオ番組と映画音声ガイドの制作を通じた日本語学習」第 17 回フランス日本語教育シンポジウム, AEJF (フランス日本語教師会), パリ大学 (フランス), 2020/6

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

鈴木聖子 大阪大学賞若手教員部門, 大阪大学, 2020/11

鈴木聖子 第 41 回サントリー学芸賞 (芸術・文学部門), 公益財団法人サントリー文化財団, 2019/12

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2020 年度～2021 年度、研究活動スタート支援、代表者: 鈴木聖子

課題番号: 20K21931

研究題目: 小沢昭一における音楽芸能の正統性の概念の研究: LP 作品集『日本の放浪芸』を中心に

研究経費: 2020 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

2021 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

研究の目的:

現行の無形文化財保護制度は、音楽芸能の指定の際に正統な「わざ」の担い手を認定するため、その認定から外れた担い手に配慮が行われにくいという問題がある。申請者はこれまで、こうした保護制度の正統性の概念に影響を与えた、20 世紀前半の日本音楽研究の知の形成過程を明らかにしてきた。

本研究では座標軸を戦後に置き、こうした保護制度に異を唱えた小沢昭一の LP レコード集『ドキュメント 日本の放浪芸』(1971-1977)を分析する。約 90 種にのぼる稀少な音楽芸能を収集したこの LP 作品における音楽芸能の正統性の概念を明らかにすることで、当時の保護制度の受容・限界・可能性を理解し、今後の保護制度の在り方を再考する。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学文学会・助教委員(芸術編), 2020年4月～2022年3月

フランス日本研究学会・評議委員, 2017年12月～2020年12月

2-23 美術史学

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 5 (兼任 1) 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：園府寺 司、橋爪 節也 (兼任)、藤岡 穰、岡田 裕成、桑木野幸司
准教授：門脇むつみ

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
39	16	19	0	0	0	2	0

*うち留学生2名、社会人学生3名

3. 修了生・卒業生(2020年度～2021年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2020	18	4	3	1
2021	14	4	1	1
計	32	8	4	2

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

学部の教育においては、初歩的な講義・演習により専門基礎学力の充実をはかるとともに、美術作品を観察し、記述する能力を養う演習、専門分野の論文を批判的に読む能力、美術史に関わる史料講読の能力を養う演習を開講し、基礎能力の育成に努める。また、卒業論文作成のための演習では、研究経過の発表を通じてプレゼンテーション能力の向上をはかり、かつ相互に批判する能力を培う。

大学院の教育においては、最新の研究動向を踏まえた講義・演習を開講し、専門学力の充実をはかるとともに、美術作品の調査を指導あるいは奨励し、実証的な作品研究能力を養い、隣接領域への関心を喚起し、美術史研究の新たな視点をひらくことを目指す。また、修士論文作成演習、博士論文作成演習を開講し、さらに個別に論文指導を行う。加えて、文化動態論専攻アート・メディア論との連携をはかり、日本学術振興会特別研究員制度、TA や RA、美術館や博物館での

インターンシップなどの積極的利用を促進する。

2. 研究

教員は、一人平均で年間1本以上の論文を執筆し、他に作品解説、書評、調査報告書等を執筆することを目標とする。かつ、科学研究費などの外部資金の獲得につとめ、研究を遂行する。博士後期課程の大学院生は、積極的に国内外の学会で口頭発表し、1人平均で年間1本以上の論文、作品解説等を執筆することを目標とする。この他、研究を促進するため、学外においては美術史学会をはじめとする関係学会等の運営に協力し、学内においては待兼山芸術学会の運営、開催に協力する。また、外国人研究者の招聘、受け入れ等を通じて、研究室の国際性を高める。

3. 社会連携

国、地方公共団体、博物館・美術館等の美術作品に関わる学術調査およびその成果報告に協力するとともに、国、地方公共団体の文化行政、博物館・美術館の運営等に協力する。また、国、地方公共団体、博物館・美術館等が必要とする美術作品の評価に協力する。研究室のホームページを運営し、活動内容を外部に発信する。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

目標に定めた通りの美術史の講義、演習を開講し、十分な教育効果をあげた。また、全学教育推進機構における教育に協力し、2020年度には4セメ分、2021年度には4セメ分の授業を担当した。

日本・東洋美術史においては、伝統の授業である見学演習を継続し、美術史学の基礎となる作品の観察、記述能力の育成に効果をあげた。大学院生には、科研に関わる、あるいは博物館、地方自治体が実施する作品調査、種々の研究会への参加を促すとともに、教員が監修・編集を担当する研究書において論文投稿の機会を提供するなど所期の目標を達成した。西洋美術史においては、学部レベルでは論文を読むための授業が定着し、ゼミにおける研究発表、質疑応答を通じて、大学院、学部ともに論文作成にいたる過程を着実に定着させた。この間3名(前回データ)が欧米に留学し、高度な語学力を養いつつ、本格的な実地調査、研究を行うとともに、大学院授業を受けている。

なお、非常勤講師については、2020年度は中国絵画(宮崎法子・実践女子大学教授)、西洋近代建築(杉本俊多・広島大学名誉教授)、西洋近代絵画(山上紀子)、2021年度は仏教絵画(谷口耕生・奈良国立博物館教育室長)、西洋近代絵画(島本浣・京都精華大学名誉教授)、西洋近代絵画(山上紀子・継続)の専門家をお招きし、専任教員ではカバーができない範囲の、そして最も先進的な研究についての講義を提供し、大きな教育効果をあげた。

2. 研究

各教員とも、著書、論文、作品解説等をおよそ目標通り、あるいは目標以上に発表することができた。また、5人の専任教員が科学研究費の助成を受け、当該の研究を推進した(2人が基盤研究(A)、2人が基盤研究(B)、1人が基盤研究(C)の研究代表者)。なお、この間、美術史学会常任委員、美術史学会西支部事務局長、民族芸術学会理事(副会長)、仏教芸術学会会長などの役職をつとめ、学会の運営にも協力した。

博士後期課程の学生は論文等6件、口頭発表10件、加えて博士前期課程の学生も口頭発表5件と、美術史学の専門分野の大学院として、めざましい研究成果を挙げることができた。

3. 社会連携

国、地方公共団体および私立の博物館、美術館の研究員、評議員などをつとめ、さらに地方史の編纂事業、文化財審議委員会などにも参画し、それぞれの事業に協力した。

IV. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

前記の活動の結果、学部生、大学院生ともに水準以上の成績を残すことができた。博士後期院生1名が第二回文学研究科・優秀若手研究者奨励賞を受賞。なお、学内からの大学院進学者が2020年度は1（東美は1名、西美2名）名、2021年度は4名（各2名）あり、教育について着実な成果を挙げている。

2. 研究

前記の活動の通り、著書、論文等の執筆や学会発表については、教員・大学院生ともに目標をほぼ達成した。加えて、5人の専任教員が科学研究費の助成を受けるなど、研究については十分に目標が達成できたと自己評価できる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2020	1	0	1
2021	1	0	1
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

浜野真由美「近世初期の宮廷における書画制作の諸相：近衛信尹の書作を中心に」 2021/3

主査：藤岡穰 副査：橋爪節也、門脇むつみ

濱住真有「池大雅研究—中国山水画の受容と中国憧憬を中心に—」 2022/3

主査：橋爪節也 副査：藤岡穰、門脇むつみ

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	1(1)	1(0)	1(1)	0(0)	0(0)	3(2)
2021	0(0)	0(0)	1(1)	1(0)	1(0)	3(1)
計	1(1)	1(0)	2(2)	1(0)	1(0)	6(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	2	2	2	0	0	6
2021	1	2	2	0	4	9
計	3	4	4	0	4	15

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕

バンミナ「在朝鮮日本人画家・加藤松林人の戦後作品とその制作背景」『民族藝術学会誌 arts/』第号, pp.210-219, 査読有, 2021/3/31

中澤 菜見子「《観桜・観楓図屏風》(石川県立美術館蔵)について」『石川県立美術館紀要』第25号, pp.1-13, 査読無, 2021/3/31

谷岡 彩「矢野橋村の基礎研究—大正期の画業を中心に—」『フィロカリア』第38号, pp.45-106, 査読有, 2021/3/26

【2021年度】

〔博士前期〕 なし

〔博士後期〕

安積 柊「フランツ・フォン・シュトゥック《罪》の評価の変遷について」『フィロカリア』第39号, pp.37-79, 査読有, 2022/3/1

乾健一「ハンパクー反戦のための万国博」『大阪大学総合学術博物館叢書 18 EXPO'70 大阪万博の記憶とアート』, pp.97-105, 査読無, 2021/10/25

乾健一「上田薫とリアルな絵画」『上田薫とリアルな絵画』図録(茨城県近代美術館 発行), pp.7-15, 査読無, 2021/10/26

(2)口頭発表

【2020年度】

〔博士前期〕

佐藤優「金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図中における風神雷神の機能について—本図制作年代にも触れて—」, 第2回若手研究者フォーラム, 大阪大学豊中キャンパス大会議室, ハイブリッド(両方), 2020/9/28

池田泉「土佐光起の鶉図—近世初期の飼鳥ブームを背景として—」, 第31回待兼山芸術学会, 大阪大学豊中キャンパス, オンライン, 2021/3/27

〔博士後期〕

バンミナ「在朝鮮日本人画家・加藤松林人の戦後作品—詩人・金素雲との関係を中心に—」, 民族藝術学会, オンライン, 2020/7/25

バンミナ「The Korea Images represented by Kato Shorinjin who settled in Korea during colonial era」, 2020年度国際新世代ワークショップ, 「国際日本研究」コンソーシアム・法政大学国際日本学研究所・アルザス欧州日本学研究所共催事業, オンライン, 2020/11/7

バンミナ「Interpretation of “Local color” in Kato Shorinjin’s Images of Korea」, Graduation Conference in Japanese Studies 2020, Osaka University / Consortium for Global Japanese Studies, 対面, 2020/12/20

安積柊二「フランツ・フォン・シュトゥックの作品における同時代の楽壇からの影響 ―ベートーヴェン・ワーグナー受容を手掛かりに―」, 待兼山芸術学会 第30回研究発表会, オンライン, 2020/8/8

【2021年度】

〔博士前期〕

西田創「19世紀フランス絵画における、アンシャン＝レジーム期のイメージ」, 第6回豊中地区研究交流会, 大阪大学, オンライン, 2021/12/21

小野真司「バウハウスとチェコスロヴァキア ―ハンネス・マイヤーとカレル・タイゲの交友関係を中心に―」, 第6回豊中地区研究交流会, 大阪大学, オンライン, 2021/12/21

都築茉莉「フリーア美術館所蔵「聖徳太子・二童子像」について」, 第五回若手研究者フォーラム, 大阪大学, オンライン, 2022/3/26

〔博士後期〕

佐藤優「金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図の再検討」, 第74回美術史学会全国大会, 神戸大学, オンライン, 2021/5/14

房叡娥「해방후 재조선일본인화가 가토 쇼린진(加藤松林人)의 작품에서 드러나는 한국성(解放後、在朝鮮日本人画家・加藤松林人の作品で表れる「韓国性」)」, The 6th RIKS (Research Institute of Korean Studies) Academy for Young Korean Studies Scholars, 高麗大学, オンライン, 2021/8/2

安積柊二「フランツ・フォン・シュトゥック《罪》の評価の変遷について」, 待兼山芸術学会 第32回総会・研究発表会, 大阪大学, オンライン, 2022/3/20

山本遊「占領期日本の文化政策-関西古美術同好会による展覧会について」, 第6回豊中地区研究交流会, 大阪大学, オンライン, 2021/12/21

山本遊「占領期日本の文化政策」, 日本文化政策学会 第15回年次研究大会, オンライン, 2022/3/20-21

波瀬山祥子「大岡春卜研究-「鯛屋貞柳像」を中心に-」, 大阪大学総合学術博物館 研究発表会, 大阪大学総合学術博物館, 対面, 2021/12/14

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

佐藤優、第二回文学研究科・優秀若手研究者奨励賞、大阪大学文学研究科、2021/9/28

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

注) 3年間など長期で採択した場合、毎年カウントしてください。

2020年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)

2021年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2020年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2021年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2020年度～2021年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

中村真菜美 博士後期課程修了 石川県立歴史博物館 学芸員 2020/4
谷岡彩 博士後期課程 石川県立美術館 2020/4
國井星太 博士前期課程修了 藤田美術館 2021/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2020 年度～2021 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2020 年度：0 名 2021 年度：1 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2020 年度：0 名 2021 年度：0 名

9. 刊行物

2020 年度 『フィロカリア』第 38 号

2021 年度 『フィロカリア』第 39 号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

美術史学会西支部 事務局 (2020 年 5 月まで)

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2020 年度～2021 年度の過去 2 年間)

1. 園府寺司 教授

1957 年生。大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren(文学博士・アムステルダム大学)。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。2004 年にワルシャワ・ユダヤ歴史博物館研究員。専攻：西洋美術史／アート・メディア論

1-1. 論文

園府寺司「画商ジークフリート・ビンゲ 1838-1905」『フィロカリア』38, pp. 41-64, 2021/3

1-2. 著書

園府寺司(訳)『(訳書+あとがき) ファン・ゴッホの手紙 I & II 全二巻』新潮社, 1120p., 2020/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

園府寺司(新聞・online)「ファン・ゴッホ書簡選集刊行」『朝日新聞』

(https://www.asahi.com/articles/ASNBN66MPNBMPTFC00R.html?iref=pc_ss_date), 2020/10

1-4. 口頭発表

圀府寺司 「画商ジークフリート・ビング 1838-1905」待兼山町芸術学会, 待兼山町芸術学会, 大阪大学(オンライン), 2021/3

圀府寺司 “The Activities in Japan of Siegfried Bing, global art dealer and promoter of Japonisme and Art Nouveau”, The International Art Market Studies Association (TIAMSA) Conference 2021-7 May 2021; 3 June 2021; 15-16 July 2021 / University of Edinburgh / National Galleries of Scotland

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

圀府寺司 大阪大学総長顕彰 2015 研究部門, 大阪大学, 2015/7

圀府寺司 大阪大学共通教育賞(2009 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2009/11

圀府寺司 Praemium Erasmunianum(エラスムス研究賞), Stichting Erasmusprijs エラスムス財団, 1989/2

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2019 年度～2022 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:圀府寺司

課題番号:19H00519

研究題目:美術市場とその国際化に関する制度論的、交流史的研究。西洋から日本・アジアへの展開

研究経費:2020 年度 直接経費 5,600,000 円 間接経費 1,680,000 円

2021 年度 直接経費 6,800,000 円 間接経費 2,040,000 円

研究の目的:

西洋近世から現代、ならびに日本、東アジア、東南アジアの近現代を対象に、美術市場の生成と発達、国際化に関する調査・研究を行う。本研究の助走的研究に当たる「西洋近世・近代美術における市場・流通・画商の地政経済史的研究」においては、研究が最も進んでいる西洋近世・近代の特定地域・時代を対象に美術市場研究を進め、この種の研究が著しく遅れている日本でその研究史や方法を吸収しつつ本格的な研究への道筋をつけることを目標とした。この目標をある程度達成した上で、その成果を速やかに引き継ぎ、本研究では研究の視野を以下のように地理的、領域的に拡大して本格的に国際先端研究に参入する。1. 地理的には近代以降の日本ならびにアジアを視野に入れ、西洋圏との美術市場の関わりを調査研究する。2. 美術市場と様々な美術制度との関わりをより重点的に研究する。美術作品の価値付与システムに深く関わる諸制度(美術家組合、美術政策、美術館、批評、美術史学など)と美術市場との関わりについてさらに調査・研究を進める。3. 美術作品の売買だけでなく貸借の市場(展覧会市場)や複製・写真・建築市場など未開拓な研究領域も研究対象に加える。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

独立行政法人国立美術館 外部評価委員会・外部評価委員会・副委員長, 2010 年 4 月～2020 年 3 月

国際美術史学会 CIHA・国内委員, 2009 年 4 月～現在に至る

文化庁・独法国立美術館評価に係る有識者会合委員 2021 年 4 月～現在に至る

大阪中之島美術館アドバイザリーボード 2021 年 4 月～現在に至る

2. 橋爪 節也 教授

1958 年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。東京芸術大学美術学部附属古美術研究施設助手、大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室主任学芸員。専攻:日本美術史/近世近代絵画史

2-1. 論文

橋爪節也 『『白い巨塔』と戦後復興から高度成長期の大阪の都市イメージ(2)』『大阪商業大学商業史博物館紀要』18, 大阪商業大学商業史博物館, pp. 47-92, 2021/2

橋爪節也 「大大阪モダニズムと分離派—街に浸透する美意識」田路貴浩『分離派建築会 日本のモダニズム建築誕生』京都大学出版会, 2020/10

橋爪節也 「『瞳は精神よりも欺かれることが少ない』—大阪と美術家／松本雄吉の周辺をめぐる—」永田靖『漂流の演劇 維新派のパースペクティブ』大阪大学出版会, 2020/8

橋爪節也 「『大阪心齋橋専門商店案内』付記』『大阪春秋』178, 新風書房, p. 104, 2020/4

2-2. 著書

橋爪節也, 曾田めぐみ他(監修) 『原寸復刻「浪花百景」集成』創元社, 189p., 2020/11

橋爪節也 『大正昭和レトロチラシ 商業デザインにみる大大阪』青幻舎, 255p., 2020/6

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

橋爪節也 「万博遺産 第3回 「白い巨塔」と船場センタービル」大阪ガス エネルギー・文化研究所『CEL』128, 大阪ガス エネルギー・文化研究所, 2021/3

橋爪節也 「大大阪と画家たち 第五回 鍋井克之の「大阪ざらい物語」と「風流座」 “大阪魂”と葛藤する洋画家の深層」関西・大阪 21世紀協会、上方文化芸能運営委員会『やそしま』14, 関西・大阪 21世紀協会、上方文化芸能運営委員会, pp. 69-144, 2020/12

橋爪節也(大阪大学総合学術博物館ホームページ) 「中村貞夫の藝術 四大文明から大阪風景への回帰」2020/11

橋爪節也 「万博遺産 第2回 “記憶”は調教できるか—第五回国内博から EXPO'70 へ」大阪ガス エネルギー・文化研究所『CEL』127, 大阪ガス エネルギー・文化研究所, 2020/11

橋爪節也(ホームページ) 「絵を飾る人のキモチ 最終回 大阪チラシ学 事始め～生き馬の目を抜く商魂のたくましさ』『住ムフムラボ』2020/11

橋爪節也 「電気大博覧会会場全景図絵(大正15年)」新風書房『大阪春秋』180, 新風書房, 2020/10

橋爪節也, 成瀬國晴, 成瀬國晴他 「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く 34」新風書房『大阪春秋』新風書房, pp. 93-95, 2020/10

橋爪節也 「ペーパースクリーンの光芒 志野和男の現在』『版画芸術』阿部出版, pp. 96-103, 2020/9

橋爪節也 「新おおさか KEY わーど第6回 買い物にでもいきまへんか これも大阪、あれも大阪、大大阪時代のチラシ」大阪市生涯学習センター『いちょう並木』409, 大阪市生涯学習センター, p. 3, 2020/9

橋爪節也 「新おおさか KEY わーど第5回 シルエットで記憶する大阪の山々 プラネタリウムの思い出—三方が山で一方が海— ランドマークは生駒山」大阪市生涯学習センター『いちょう並木』408, 大阪市生涯学習センター, p. 3, 2020/8

橋爪節也 「万博遺産 第1回 日本初の万博の記憶はライオン橋につながる」大阪ガス エネルギー・文化研究所『CEL』126, 大阪ガス エネルギー・文化研究所, 2020/7

橋爪節也, 成瀬國晴, 成瀬國晴他 「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く 33」新風書房『大阪春秋』新風書房, pp. 93-95, 2020/7

橋爪節也 「新おおさか KEY わーど第4回 いつの時代もシンプラ気分 浮世絵や写真にタイムトラベルしてみると」大阪市生涯学習センター『いちょう並木』407, 大阪市生涯学習センター, p. 3, 2020/7

橋爪節也 「河内洋画材料店は、大阪の洋画の歴史だった』『心齋橋 KAWACHI100年』株式会社カワチ, pp. 4-18, 2020/6

橋爪節也(ホームページ) 「絵を飾る人のキモチ 第24回 少年時代の記憶がよみがえると—オンライン授業と「死の舞踏」、バンクシー、スペイン風邪のこと—』『住ムフムラボ』2020/6

橋爪節也 「新おおさか KEY わーど第3回 スペイン風邪の記憶 100年前のパンデミック」大阪市生涯学習センター『いちょう並木』406, 大阪市生涯学習センター, p. 3, 2020/6

橋爪節也 「新おおさか KEY わーど第2回 歴史に学び、社会を再考する機会かもしれない」大阪市生涯学習センター『いちょう並木』405, 大阪市生涯学習センター, p. 3, 2020/5

橋爪節也 「玉堂 ミーツ 文晁—「蒹葭堂日記」から」浦上家史編纂委員会『玉堂清韻社報』10, 浦上家史編纂委員会, p. 2, 2020/4

橋爪節也, 成瀬國晴, 成瀬國晴他 「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く 32 阪神タイガースを描く」新風書房『大阪春秋』新風書房, pp. 95-97, 2020/4

橋爪節也 「新おおさか KEY わーど第 1 回大阪市を見守って—世紀 西欧に倣っても気持ちは聖なる守護神」大阪市生涯学習センター『いちよう並木』404, 大阪市生涯学習センター, p. 3, 2020/4

2-4. 口頭発表

橋爪節也 「大阪の将来ビジョン～大坂の町人氣質から考える」, 日本ヨーロッパ・芸術文化交流財団, 日本ヨーロッパ・芸術文化交流財団, 2021/3

橋爪節也 「雑誌『道頓堀』に描かれた大正時代の宗右衛門町」科学研究費助成事業:「戦前期大阪花街の社会的機能に関する基礎的研究」(2018～2020), 科学研究費助成事業:「戦前期大阪花街の社会的機能に関する基礎的研究」(2018～2020), オンライン開催, 2021/3

橋爪節也 「遙かなる EXPO'70—大阪万博の時代と記憶、アート—」, 吹田市立中央図書館, 吹田市立中央図書館, 2021/2

橋爪節也 「記憶と創造「大阪百景⇄未来景」」フォーラム 扇町マナビバ 大公園からネットワークする新しい時代のまちづくりピア :フォーラム 扇町マナビバ 大公園からネットワークする新しい時代のまちづくりピア , 主催:NPO 法人もうひとつの旅クラブ(旅クラブ)、共催:都市環境デザイン会議(JUDI)、後援・運営協力:一財大阪市コミュニティ協会・北区民センター, 北区民センター, 2020/11

橋爪節也 「博覧会の記憶と大阪——第五回内国博から EXPO'70 まで」吹田市立博物館秋季特別展「万国博覧会“人類の進歩と調和”に至るまで」, 吹田市立博物館, 吹田市立博物館, 2020/10

橋爪節也 「文人・十時梅屋」オンライン講座 一茶庵で学ぶ!, 一般社団法人 文人会 一茶庵, 一般社団法人 文人会 一茶庵, 2020/7

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

橋爪節也 2018 年 関西元氣文化圏賞 ニューパワー賞, 関西元氣文化圏推進協議会, 2019/1

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪市文化財保護審議委員・委員, 2020 年月～現在に至る

財団法人・天門美術館評議委員会・評議委員, 2017 年 4 月～現在に至る

田辺市立美術館協議会・協議会委員, 2017 年月～現在に至る

吹田市立博物館協議会・協議会委員, 2016 年月～現在に至る

NPO 大阪美術市民会議・理事, 2015 年月～現在に至る

八尾市 今東光資料館・企画展示アドバイザー, 2014 年 4 月～現在に至る

大阪市中央公会堂・文化財保護アドバイザー, 2014 年 4 月～現在に至る

大阪市民表彰審査会・臨時委員, 2012 年 4 月～現在に至る

大正イマジュリ学会・常任委員, 2012 年 3 月～現在に至る

3. 藤岡 穰 教授

1962年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。大阪市立美術館学芸員、大阪大学大学院文学研究科助教授、同准教授を経て、2009年4月より現職。1991年に第3回国華賞、2014年に大阪大学総長顕彰受賞。専攻：東洋美術史

3-1. 論文

藤岡穰「四天王寺金堂本尊の姿をもとめて―史料と模刻像の再検討―」和宗総本山四天王寺編・石川知彦監『聖徳太子と四天王寺』法蔵館, pp. 49-52, 2021/11

藤岡穰「永観堂禅林寺本尊「みかえり阿弥陀」瞥見」『國華』1151, pp. 31-42, 2021/9

Fujioka, Yutaka (共著), Yiming Qian, Cheikh Brahim El Vaigh, Yuta Nakashima, Benjamin Renoust, Hajime Nagahara, “Built Year Prediction from Buddha Face with Heterogeneous Labels Modeled as Probabilistic Distribution” *JOURNAL OF LATEX CLASS FILES*, VOL. 14, NO. 8, 2021/8

藤岡穰「古代金銅仏の制作技法」『季刊考古学』別冊, 雄山閣出版, pp. 73-80, 2021/3

藤岡穰「西湖周辺における呉越～南宋の仏教石刻」『アジア仏教美術論集東アジアIV(南宋・大理・金)』中央公論美術出版, pp. 119-155, 2020/12

藤岡穰「様式・技法・金属組成からみた興福寺と薬師寺の古代金銅仏―薬師寺金堂本尊像の移坐・非移坐問題への一視点―」『待兼山論叢 芸術篇』(大阪大学文学研究科・文学部), 54, pp. 1-36, 2020/12

Fujioka, Yutaka, “The Cult and Statuary of Zaō Gongen” *Defining Shugendō: Critical Studies on Japanese Mountain Religion*, Bloomsbury Academic, pp. 167-186, 2020/11

3-2. 著書

藤岡穰(編)『新版八尾市史 美術工芸編』八尾市, 2022/3

藤岡穰『東アジア仏像史論』中央公論美術出版, 772p., 2021/7

藤岡穰(共著)『アジア仏教美術論集東アジアIV(南宋・大理・金)』中央公論美術出版, 2020/12

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤岡穰 大阪大学総長顕彰 研究部門, 大阪大学総長顕彰 研究部門, 2014/7

藤岡穰 第3回国華賞, 国華社, 1991/10

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2018年度～2021年度、基盤研究(A) 一般、代表者:藤岡穰

課題番号:18H03571

研究題目:3次元データに基づく人工知能による仏顔の様式研究

研究経費:2020年度 直接経費 7,700,000円 間接経費 2,310,000円

2021年度 直接経費 6,100,000円 間接経費 1,830,000円

研究の目的:

本研究はアジア全域で制作された仏顔の顔(仏顔)について、3次元デジタルデータ(3Dデータ)に基づきながら、人工知能(AI)によってその様式を分析し、美術史学における様式研究の新たな可能性を探るものである。従来、様式研究は視覚経験に基づき、

地域、時代、作者等による特徴的、類型的表現を抽出し、判断することによって行われてきた。しかし、本研究においては 3D データにより仏顔の形状を解析し、AI で統計的に分析することによって、客観的な様式研究の方法の確立をめざす。また、仏顔の様式を判断し、その系譜を明らかにするシステムの構築をめざすものである。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

藤井寺市文化財審議会・審議員, 2021 年 9 月～現在に至る
美術史学会・西支部代表, 2021 年 6 月～2022 年 5 月
吹田市文化財保護審議会・委員, 2019 年 12 月～現在に至る
仏教芸術学会・会長, 2019 年 1 月～現在に至る
美術史学会・西支部事務局長, 2018 年 6 月～2020 年 5 月
枚方市文化財保護審議会・委員, 2018 年 4 月～現在に至る
茨木市文化財審議会・文化財審議委員, 2017 年 3 月～現在に至る
摂津市史・執筆委員, 2015 年 4 月～現在に至る
神戸市立博物館外部評価委員会・外部評価委員, 2012 年 9 月～2022 年 3 月
和歌山県文化財保護審議会・委員, 2012 年 4 月～現在に至る
八尾市史編集委員会・編集委員, 2011 年 4 月～現在に至る
八尾市文化財保護審議会・委員, 2009 年 9 月～現在に至る
奈良国立博物館・調査員, 2006 年 4 月～2022 年 3 月

4. 岡田 裕成 教授

1963 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。大阪大学文学部助手、福井大学教育地域科学部准教授、大阪大学文学研究科准教授を経て現職。専攻：西洋美術史

4-1. 論文

岡田裕成 「ハプスブルク・スペインの東アジア外交と美術の地政学」『美術フォーラム 21』(一般社団法人 美術フォーラム 21), 43, 第五書房, pp. 32-39, 2021/6

岡田裕成 「フェリペ2世のコレクション： スペイン世界帝国を表象するイメージと「もの」」『美術フォーラム 21』(一般社団法人 美術フォーラム 21), 42, 第五書房, pp. 15-21, 2020/12

4-2. 著書

関雄二, 齊藤晃, 岡田裕成他(共編著) 『ラテンアメリカ文化辞典』丸善出版, pp. 396-407, 2021/1

岡田裕成, 美学会(共著) 『美学の事典』丸善出版, pp. 232-235, 2020/12

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

岡田裕成 第32回国華賞, 朝日新聞社、國華社, 2020/10

岡田裕成 第12回木村重信民族藝術学会賞, 民族藝術学会, 2015/4

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2017年度～2020年度、基盤研究(B) 一般、代表者:岡田裕成

課題番号:17H02294

研究題目:16世紀イスパニア世界における帝國的交通空間と「境界的」美術の形成

研究経費:2020年度 直接経費 2,400,000円 間接経費 720,000円

研究の目的:

1492年に達成された国土再征服と、新大陸航路の発見という二つの重大事を象徴的な契機として、ヨーロッパの周縁に位置したスペインは、16世紀を通して広大な帝国を構築する。その帝国は、アイデンティティを異にする様々な人々を統合する文化の交通空間であり、そこでは、多様な図像文化や造形様式、技法・素材が時に起源の差異を超えて組み合わせられ、あるいは、本来とは異なる意味のもとに解釈・転用された。本研究は、スペインを中心とするイスパニア世界に成立した、その「境界的」な美術の諸相を、歴史的な経緯と地理的広がり両面から体系的に明らかにする。

4-6-2. 2019年度～2021年度、挑戦的(開拓・萌芽)研究、代表者:岡田裕成

課題番号:

研究題目:領域横断的な「グローバル・アート学」の構築

研究経費:2020年度 直接経費 2,400,000円 間接経費 720,000円

2021年度 直接経費 0円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究は、グローバリズムと文化の相互作用を具体的に解明するとともに、そこに産出される個別的な作品・事象を精密に考証する、領域横断的な「グローバル・アート学」を提唱する。研究チームは、専門領域・フィールドを異にする美術史家2名と音楽学研究者1名の計3名で構成し、芸術作品における「グローバルなもの」と「ローカルなもの」の交渉の過程や、起源を異にする文化的要素の「節合」のメカニズムといった、共通の問題軸に沿って課題に取り組む。

4-6-3. 2021年度～2024年度、基盤研究(B) 一般、代表者:岡田裕成

課題番号:21H00488

研究題目:光学的科学調査を軸とした初期洋風画とアジア太平洋海域美術交通に関する基盤的研究

研究経費:2021年度 直接経費 4,000,000円 間接経費 1,200,000円

研究の目的:

16世紀は半ば以降の日本やアジアの各地をとりまく美術作品の交通は、従来考えられていたより遥かにグローバルなものであった。その認識は、近年とりわけ海外の研究において広く共有されつつある。本研究はそうした動向も踏まえつつ、従来の南蛮美術論において強調されがちであった西洋からの影響の問題にとどまらず、多元化した交通網において生じた日本由来の美術のグローバルな移動と、各地の美術とのダイナミックな節合の過程に焦点を当て、光学的な科学調査を軸とした基盤的な研究を行う。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

Mirai. Estudios Japoneses 誌(マドリッド・コンプルテンセ大学)・編集顧問, 2017年2月～現在に至る

美術史学会・常任委員, 2016年6月～現在に至る

民族藝術学会・理事、副会長, 2007年5月～現在に至る

5. 桑木野 幸司 教授

1975年生。東京大学大学院工学系研究科修士課程修了(西洋建築史)。ピサ大学大学院博士課程修了。Dottore di Ricerca in Storia delle arti visive e dello spettacolo(文学博士(美術史)・ピサ大学)。Kunsthistorisches Institut in Florenz 研究生、2011年4月より大阪大学文学研究科准教授を経て、2020年4月より現職。専攻：西洋美術・建築・庭園史

5-1. 論文

桑木野幸司 “Tra inventio e imitatio: il giardino ideale di Agostino Del Riccio come materializzazione della machina memorialis” *Reimmaginare la Grande Galleria. Forme del sapere tra età moderna e culture digitali. Atti del convegno internazionale, Torino, 1-9 dicembre 2020*, pp. 17-34, 2022/3

桑木野幸司 「叡智の工房(officina sapientiae)」『Arts and Media』11, 大阪大学アート・メディア論研究室, pp. 270-271, 2021/7

桑木野幸司 「アゴスティーノ・デル・リッチョ『王の庭園について』」『池上俊一監修『原典イタリア・ルネサンス芸術論』(上巻)』名古屋大学出版会, pp. 169-240, 2021/6

桑木野幸司 「第41回関西茶話会 イタリア・ルネサンス庭園: 知を創造する空間」『NU7 国立七大学の総合情報誌』学会, pp. 10-16, 2021/5

桑木野幸司 「博物館: 世界のマイクロコスモスから近代科学の基幹施設へ」『科学史事典』丸善出版, pp. 208-209, 2021/5

桑木野幸司 「イタリアが造った英国の風景」『中島俊郎『英国流 旅の作法: グランド・ツアーから庭園文化まで』』講談社学術文庫, pp. 280-293, 2020/7

桑木野幸司 「『多様性は愉しませる』: 初期近代の芸術・文芸における varietas 礼賛」『Arts and Media』10, 大阪大学アート・メディア論研究室, pp. 12-26, 2020/7

桑木野幸司 「メディチ家の叡智の地図: 初期近代イタリアの世界地図ギャラリーと地誌表象としての庭園」『ユリイカ』青土社, pp. 164-172, 2020/6

桑木野幸司 「イタリアルネサンス庭園: 知を創造する緑陰を訪ねて」『アステイオン』92, サントリー文化財団, pp. 4-11, 2020/6

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

桑木野幸司 「『ポリフィロの夢』の庭」『白水社の本棚』白水社, pp. 10-11, 2022/1

桑木野幸司 「メランコリーを癒す庭」『白水社の本棚』白水社, pp. 10-11, 2021/10

桑木野幸司 「ミケランジェロを育てた月桂樹の庭」『白水社の本棚』白水社, pp. 10-11, 2021/7

桑木野幸司 「老コジモの剪定鋏」『白水社の本棚』白水社, pp. 10-11, 2021/4

桑木野幸司 「健康の苑: ピエロ・デ・クレシェンツィの農業論」『パブリッシャーズレビュー』白水社, pp. 7-7, 2021/1

桑木野幸司 「普遍博士が愛した芝」『パブリッシャーズレビュー』白水社, pp. 7-7, 2020/10

桑木野幸司 「不死の庭: 『デカメロン』に語られた悦ばしき緑陰」『パブリッシャーズレビュー』白水社, pp. 7-7, 2020/7

桑木野幸司 「修道院の庭: 身体と魂を浄化する緑地」『パブリッシャーズレビュー』白水社, pp. 7-7, 2020/4

5-4. 口頭発表

桑木野幸司 「庭園と果物」セミナーと研究報告「庭園・植物・公園」, 山梨大学教育学部芸術身体教育コース平野研究室, へちま STUDIO、ハイブリッド, 2022/3

桑木野幸司 「多様性(varietas)礼賛: 初期近代西欧の視覚芸術と修辞学」シンポジウム「初期近代の芸術・文芸における varietas

と inventio」, 科学研究費・基盤 B「初期近代西欧の視覚芸術における多様性と発想:美術と修辞学の創造的共同」, オンライン, 2021/9

桑木野幸司 『『大』大阪の近代建築探訪:華麗なる水都の記憶をもとめて』阪大リーブル『20世紀大阪の芸術文化』(仮)出版準備研究会, 大阪大学出版会, 大阪大学文学研究科・大会議室, 2021/9

桑木野幸司 「魅惑のイタリア・ルネサンス庭園:『閉ざされた庭』から『風景の発見』まで」朝日カルチャー・新宿教室, 朝日カルチャー, 朝日カルチャー・新宿教室, 2021/3

Kuwakino, Koji, “Tra inventio e imitatio: il giardino ideale di Agostino Del Riccio come materializzazione della machina memorialis”, Reimmaginare la Grande Galleria. Forme del sapere tra età moderna e culture digitali, Università di Torino, Torino, 2020/12

桑木野幸司 「イタリア・ルネサンス庭園:知を創造する空間」第41回学士会関西茶話会, 学士会, 京都大学学友会館, 2020/10

桑木野幸司 「アゴスティーノ・デル・リッチョの理想庭園論における建築エクフラシスと inventio:創造と模倣のはざままで」オンラインシンポジウム「テキストを建てる、イメージを歩く」, 2018-20年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究課題「啓蒙主義時代から19世紀前半までのフランスにおける建築図面・図表の思想的意義」(研究代表者:小澤京子), 和洋女子大学, 2020/9

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

桑木野幸司 大阪大学総長賞, 大阪大学, 2013/5

桑木野幸司 大阪大学総長奨励賞, 大阪大学, 2012/8

桑木野幸司 地中海学会「ヘレンド賞」, 地中海学会「ヘレンド賞」, 2012/6

桑木野幸司 日本学術振興会賞, 日本学術振興会, 2012/2

桑木野幸司 第五回美術に関する研究奨励賞, 公益財団法人 花王芸術・科学財団, 2011/3

桑木野幸司 大阪大学栄誉教授, 大阪大学, 2020/11

桑木野幸司 第41回 サントリー学芸賞, サントリー文化財団, 2019/12

桑木野幸司 大阪大学賞, 大阪大学賞, 2017/11

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2016年度～2020年度、基盤研究(B) 一般、代表者:桑木野幸司

課題番号:16H03373

研究題目:創造的思考の基盤としての建築術:初期近代イタリアの美術・文芸における空間の観念

研究経費:2020年度 直接経費 5,000,000円 間接経費 1,500,000円

2021年度 直接経費 2,900,000円 間接経費 870,000円

研究の目的:

西欧では古来、建築空間を情報整理の際に分類フレームないしは創造的思考の基盤として活用する伝統があった。こうした精神内面の空間構造については、これまで建築史や美術史、思想史などではほとんど明らかにされてこなかった。本研究は、初期近代の記憶術に着目し、精神内に建築的な仮想の情報フレームを組み上げる同術が、同時代の文芸や視覚芸術にいかなる影響を与えていたのかを、領域横断的視点から解明する。

5-6-2. 2020年度～2023年度、基盤研究(B) 一般、代表者:桑木野幸司

課題番号:20H01208

研究題目:初期近代西欧の視覚芸術における多様性と発想:美術と修辞学の創造的共同

研究経費:2020年度 直接経費 5,000,000円 間接経費 1,500,000円

2021年度 直接経費 2,900,000円 間接経費 870,000円

研究の目的:

「多様性は愉しませる *varietas delectat*」この古代ギリシア以来の文芸上の観念は、当時の世界観にも反響しつつ、古代世界における一種の常套主題となり、後世の文化・思想にも大きな影響を与えた。それがもっとも興味深いかたちで見られるのが、西欧の初

期近代という時代である。古代復興ばかりでなく、視覚芸術が高度に発展し、都市文化が成熟したこの時代は一方で、情報爆発を経験した時代でもあった。その知的革新の時に、varietas が創造的な仕方に応用されていった初層を、文理融合的に明らかにする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

民族芸術学会・理事, 2020年4月～現在に至る

地中海学会・事務局員, 2012年4月～現在に至る

6. 門脇 むつみ 准教授

1970年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了・博士(文学)。日本学術振興会特別研究員(PD)、城西国際大学研究員・助教・准教授を経て、2019年4月より現職。第14回国華奨励賞。専攻：日本美術史／中近世絵画史

6-1. 論文

門脇むつみ, 國井星太, 池田泉(共著)「若冲画賛の研究—竹図・海老図・鯉図」『大阪大学大学院文学研究科紀要』62, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 93-144, 2022/3

門脇むつみ「武田恒夫氏の訃」『日本歴史』2022年-1, pp. 152-153, 2021/12

門脇むつみ「根津美術館所蔵「邸内遊楽図屏風」について—土佐派系町絵師が描く若衆宿での遊興」『根津美術館紀要 此君』12, 根津美術館, pp. 37-61, 2021/3

門脇むつみ「講演録 江月宗玩と龍光院の宝物」『秀明』27, MIHO MUSEUM, pp. 34-64, 2021/3

門脇むつみ「二点の「池田恒興像」—狩野探幽・尚信の肖像画制作」板倉聖哲・高岸輝『日本美術のつくり方—佐藤康宏先生の退職によせて』羽鳥書店, pp. 369-389, 2020/12

6-2. 著書

奥平俊六, 門脇むつみ, 森道彦(共著)『公益財団法人渡辺美術館所蔵品調査報告書(第八回)中近世絵画(三)』公益財団法人渡辺美術館, pp. 25-30, 2022/3

奥平俊六, 門脇むつみ, 森道彦(共著)『公益財団法人 渡辺美術館所蔵品調査報告書(第七回)土佐 絵画』渡辺美術館 複数: 15, pp. 7-8, 2021/3

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

門脇むつみ「「アート」の扉 邸内遊楽図屏風」門脇紹介作品について論文内容の一部に言及『毎日新聞』毎日新聞, 2022/1

6-4. 口頭発表

門脇むつみ「名所絵の作り方」国際シンポジウム「名所の図像学」, 2021年度大阪大学文学研究科国際共同研究力向上推進プログラム「デジタル文学地図の構築と日本文化研究・教育への貢献」(代表者:飯倉洋一)、科研基盤研究費(B)「デジタル文学地図の構築と日本古典文学研究・古典教育への展開」(代表者:飯倉洋一), 大阪大学文学研究科(オンライン), 2022/2

門脇むつみ「江國衍春賛「伏見人形図」」第17回研究会, 科学研究費基盤研究(C)伊藤若冲作品の画と賛—禅僧賛の読解・禅僧との交流を踏まえた作品と伝記の研究—(研究代表者:門脇), オンライン, 2022/1

門脇むつみ「戯画図巻の制作・鑑賞環境を考える」第五回研究会, 科学研究費基盤研究(B)中近世日本の画題生成における明代出版文化の受容と展開に関する総合的研究(研究代表者:齋藤真麻理), 国文学研究資料館, 2021/9

門脇むつみ「無染浄善賛「鯉図」2点」第11回研究会, 科学研究費基盤研究(C)伊藤若冲作品の画と賛—禅僧賛の読解・禅僧との交流を踏まえた作品と伝記の研究—(研究代表者:門脇), オンライン, 2021/7

門脇むつみ「江戸時代の女性画家 Femmes peintres de l'époque Edo」フランス 日本美術フェスティバル Festival de l'histoire de l'art (FHA), フランス文化省、フランス国立美術史研究所(INHA)、フォンテーヌブロー宮殿, フォンテーヌブロー宮殿(ハイブリッド), 2021/6

門脇むつみ「狩野探幽の肖像画制作」待兼山芸術学会, 待兼山芸術学会, 大阪大学(オンライン), 2020/8

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

門脇むつみ 第14回国華奨励賞, 國華社, 2002/10

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2020年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:門脇むつみ

課題番号:20K00189

研究題目:伊藤若冲作品の画と賛—禅僧賛の読解・禅僧との交流を踏まえた作品と伝記の研究—

研究経費:2020年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円

2021年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

18世紀の上方で活躍した画家・伊藤若冲作品に認められる禅僧賛(現時点でおおよそ80点を確認)の読解を集積し、それを踏まえたつづ画像を検討し、個々の作品を読み解くとともに、直接交際があったとみなせる禅僧との関係やその詩文集の考察を徹底し若冲と禅宗との関わりをより鮮明に把握することを目指す。それによって、若冲の人生、絵画世界の魅力について新たな見解の展示を目的とする。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

豊中市文化財審議会・委員, 2021年4月～現在に至る

美術史学会・常任委員, 2020年5月～現在に至る

八幡市立松花堂庭園・美術館・学芸顧問, 2017年4月～現在に至る

倉吉市文化財審議委員会・文化財審議委員, 2015年4月～現在に至る

鳥取県文化財審議委員会・文化財審議委員(美術工芸部会長), 2014年3月～2022年2月

7. 本多 康子 助教

2020年4月より大阪大学大学院文学研究科助教。(2021年3月退職) 専攻:日本中世美術史

7-1. 論文

本多康子「遊行上人縁起絵における熊野権現神託場面(熊野成道)について」『佐野みどり先生古稀記念論集:造形のポエティカー—日本美術史をめぐる新たな地平—』pp. 121-148, 2021/3

本多康子「清浄光寺所蔵「遊行上人縁起絵(乙本)」についての一考察」『待兼山論叢』54, pp. 39-62, 2021/2

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

なし

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2020年度～2021年度、研究活動スタート支援、代表者:本多康子

課題番号:20K21930

研究題目:「遊行上人縁起絵」諸本の基礎的研究:転写系統の分類と祖本の復元的考察

研究経費:2020年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

中近世にかけて制作された時宗の祖師絵伝「遊行上人縁起絵」を主な研究対象とする。この「遊行縁起」は14世紀初頭に成立し、時宗の教線拡大に伴い全国の寺院に流布・伝世された。しかしながら転写本が多数現存するにも関わらず、その全体像は明らかになっていない。

本研究では、諸本の調査分析を通して一連の絵巻群の体系化を行い、失われた祖本の復元的考察を通して美術史上の位置づけを明らかにするとともに、従来の「一遍聖絵」研究を中心に語られてきた時宗における祖師絵伝制作の意義を再考する。さらに、制作環境とその背景にある人的・文化的・宗派間ネットワークで形成された時宗文化圏の諸相を明らかにする。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-24 共生文明論

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：藤川 隆男、堤 研二、堤 一昭

准教授：井本 恭子

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
7	0	0	1	0	0

※うち留学生0名、社会人学生3名

3. 修了生(2020年度～2021年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2020	2
2021	2
計	4

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

教育においては、①本コースの教育・研究内容の特色を理解させるための「歴史的地域社会論講義」「地域文化構造論講義」などの講義科目を、また②高度専門職業人に向けた企画・調査・分析・プレゼンテーションなどの能力を養成するための「歴史的地域社会論演習」「地域文化構造論演習」などの演習科目を配置することを目標とした。さらに、③本コース所属以外の教員とも協力して、専攻がカバーする分野についての全般的な知識を得る「人文学と社会」、教育に関わる高度専門職業人に向けた能力を養成するため「歴史教育論」といった共同授業科目を設けることを目標とした。

2. 研究

教員全員により、合計3本の単著論文あるいは共著であれば第一著者となっている論文を執筆すること、加えて教員がメンバーである研究プロジェクト(科学研究費補助金等の研究)による研究集会の開催に協力することを目標とした。

3. 社会連携

高等学校教員等の研修の場としての月例研究会「大阪大学歴史教育研究会」の開催に協力することなどによって、研究

成果を社会に還元することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

各種の講義・演習により、コースの教育・研究内容の特色の理解をはじめとする目的はほぼ果たすことができた。高度職業人に向けた能力の育成を目指す演習のうち、歴史教育論では高等学校教員のリカレント教育にも協力するとともに、受講者が共同で口頭報告および論文作成を行うグループ研究に参加してプレゼンテーション能力向上をはかった。

2. 研究

教員の研究活動の欄にあるように、論文執筆の目標は達成され、科学研究費ほかによる研究が複数行われた。

教員がメンバーである研究プロジェクト(科学研究費補助金等の研究)による研究集会の開催に協力するという目標については、国内での学会大会において開催協力や発表をおこない、国内集会(大阪大学歴史教育研究会月例会など)も頻繁に開催した。

3. 社会連携

本コースの教員が世話役の一員として大阪大学歴史教育研究会月例研究会の開催に協力し、高等学校教員等の研修の場を提供することができた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

所属の大学院学生は、授業以外にも研究会および学会大会での口頭発表を通じて、目標とする能力を伸ばし得たといえる。したがって、掲げた目標はおおよそ達成できたと考えられる。なお春夏学期には、修士論文作成指導のための演習を各教員が開講し、加えて修士論文作成への中間報告の場をコース全体で設けて、入学時からの修士論文作成および進路についての指導・助言体制を強化している。

2. 研究

前記の活動をふまえると、全体的な目標は達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえると、社会連携の項に掲げられた目標は達成されたといえる。

Ⅴ. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2021	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(0)	2(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(0)	2(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等講演会	その他	計
2020	0	1	0	0	1	2
2021	0	0	2	0	0	2
計	0	1	2	0	1	4

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020年度】

なし

【2021年度】

小野遼樹・栗山恵輔・真木康彦・松本捷「岩波新書『中国の歴史』を踏まえた教科書記述への提言－古典国制と都城制を題材に－」, 大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ 19, ISSN2186-9308, pp.1-32 (真木担当部分 pp.3-12, 26-28), 2022年3月

井上健太郎・小祿隆司・川西寿弥・下野航太・平尾悠「近代世界における清朝の「あがき」と変容－軍制比較の視点から－」, 大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ 19, ISSN2186-9308, pp.33-71 (川西担当部分 pp.35-41), 2022年3月

(2)口頭発表

【2020年度】

Studer, Raphael Albert Robert 「„5 deutsche Herren, darunter ich“ - Der Schweizer Diplomat Paul Ritter als Beispiel für die Symbiose zwischen (Deutsch-)Schweizern und Deutschen in Japan vor dem 1. Weltkrieg」, Vorträge, Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (OAG) OAG Haus Minato-ku Akasaka 7-5-56 107-0052 Tokyo-to, 対面, 2020/10/12

Studer, Raphael Albert Robert 「Playing cards and drinking German beer? The social life of the Swiss in Meiji period Yokohama」, 日本西洋史学会第70回大会, 大阪大学, オンライン, 2020/12/12

【2021年度】

真木康彦ほか4名「岩波新書『中国の歴史』の内容を踏まえた教科書記述への提言－古典国制と都城制を題材に－」, 大阪大学歴史教育研究会第139回例会 大学院生グループ報告「岩波新書『中国の歴史』と世界史・日本史」, 大阪大学文学研究科, オンライン, 2021/12/18

川西寿弥ほか5名「近代世界における清朝の「あがき」と変容－軍制比較の視点から－」, 大阪大学歴史教育研究会第139回例会 大学院生グループ報告「岩波新書『中国の歴史』と世界史・日本史」, 大阪大学文学研究科, オンライン, 2021/12/18

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

【2020年度】

Studer, Raphael Albert Robert 令和2年度文学研究科賞

【2021年度】

なし

3. 大学院生等の留学

2020年度 0名

2021年度 0名

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2020年度～2021年度の大学院修士課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2020年度：1名 2021年度：0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度：0名 2021年度：0名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

なし

7. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 藤川 隆男 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(大阪大学)、MA(ANU)。帝塚山大学教養学部講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋史、とくにオーストラリアの歴史

1-1. 論文

藤川隆男「オーストラリアン・ルールズ・フットボール:グローバルな世界戦略とローカル・スポーツ」『スポーツ史学会第34回大会発表抄集』(スポーツ史学会), 1, スポーツ史学会, pp. 33-35, 2020/11

藤川隆男「公共圏の歴史的構造」*Clio*, 34, 東大クリオの会, pp. 126-132, 2020/7

藤川隆男「Digital History Insights」『西洋史学』(日本西洋史学会), 269, 日本西洋史学会, pp. 76-77, 2020/6

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

藤川隆男(書評)「関根政美・塩原良和・栗田梨津子・藤田智子編著『オーストラリア多文化社会論』」『オーストラリア研究』34, pp. 89-91, 2021/3

1-4. 口頭発表

藤川隆男「オーストラリアン・ルールズ・フットボール:グローバルな世界戦略とローカル・スポーツ」スポーツ史学会第 34 回大会:
スポーツ史学会, スポーツ史学会, 龍谷大学(オンライン), 2020/12

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2019 年度～2022 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:藤川隆男

課題番号:19H01330

研究題目:オーストラリアの世論形成の歴史的解明:自然言語処理による公開集会データの分析

研究経費:2020 年度 直接経費 4,800,000 円 間接経費 1,440,000 円

2021 年度 直接経費 3,300,000 円 間接経費 990,000 円

研究の目的:

公開集会は、19 世紀西欧の世論形成の支柱であるとされたが、歴史的構造としての分析は十分になされてこなかった。本研究はこのテーマを、オーストラリアの新聞データベースに掲載されるすべての公開集会の資料を用いて追及する。情報系研究者との連携により、情報技術を駆使してデータを集積・分類・分析し、19 世紀前半から 20 世紀半ばまでの公開集会による世論形成の構造を、オーストラリア全国に関して長期的に解明する研究である。本研究はデジタル・ヒストリーの最先端に立ち、この研究手法を応用すれば、検証できる資料の量(ビッグデータ)を幾何級数的に増大できる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西洋史学会・代表, 2016 年 3 月～現在に至る

日本歴史学協会・委員, 2015 年 9 月～現在に至る

日本西洋史学会・理事, 2015 年 5 月～現在に至る

大阪大学西洋史学会・理事, 2003 年 6 月～現在に至る

パブリック・ヒストリー・編集委員, 2003 年 6 月～現在に至る

西洋史学・編集委員, 1996 年 4 月～現在に至る

2. 堤研二教授

1960 年生。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士 (九州大学、1986)・博士 (文学) (九州大学、2009)。佐世保工業高等専門学校助手・講師、島根大学法文学部講師・助教授、大阪大学文学研究科助教授・准教授を経て、2009 年 11 月より現職。地域地理科学学会賞 (1997)、昭和シェル石油環境研究助成財団環境研究課題賞 (2005)、大阪大学 教育・研究功績賞 (2006)、大阪大学 総長顕彰 (研究部門) (2015)、大阪府スポーツ少年団功労者表彰 (2016)。専攻:人文地理学、とくに社会経済地理学

2-1. 論文

堤研二「日本の過疎地域と国土(人口×国土)」『土木学会誌』106-8, pp. 32-33, 2021/8

堤研二「プラネタリー・アーバナイズーション研究が拓く新地平ールフェーブルの再降臨-(書評:平田周・仙波希望編:『惑星都市理論』, 2021 年、以文社)』『読書人』3398, pp. 4-4, 2021/7

堤研二「人文地理学から見た計量分析と考古学の分析科学性:「考古学方法論研究会」と神庭荒神谷遺跡出土銅剣をめぐって」

- 『持続する志:岩永省三先生退職記念論文集』(岩永省三先生退職記念事業会), 下, 中国書店, pp. 855-872, 2021/3
- Tsutsumi, Kenji, “Posturbanity” *The International Encyclopedia of Geography: People, the Earth, Environment, and Technology*, (The American Association of Geographers), Wiley Blackwell, pp. 1-6, 2021/3
- 堤研二 「基礎生存諸機能思想とその応用:ドイツ社会地理学ミュンヘン学派の遺産」『待兼山論叢 日本学篇』(大阪大学文学会), 54, 大阪大学文学研究科, pp. 31-46, 2020/12
- Tsutsumi, Kenji, “Introduction—The Trajectory of the Mountainous Area Research and the Book’s Perspective” *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 1-12, 2020/11
- Tsutsumi, Kenji, “Depopulation as a Regional Problem and Reality of Depopulation” *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 17-58, 2020/11
- Tsutsumi, Kenji, “Analysis of Population Migration from the Depopulated Mountain Village—A Case of Kamitsue Village in Oita Prefecture” *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 59-104, 2020/11
- Tsutsumi, Kenji, “Regional Living Functions in Depopulated Settlements in Shimane Prefecture” *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 107-152, 2020/11
- Tsutsumi, Kenji, “Regional Living Functions and IT Support” *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 153-181, 2020/11
- Tsutsumi, Kenji, “Social Capital and Living Environment of Rural Villages” *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 187-208, 2020/11
- Tsutsumi, Kenji, “Reformation of a Settlement Forced to Move for the Construction of a Dam—The Case of Tsukinoya, a Settlement in Kisuki Town, Un’nan City, Shimane Prefecture” *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 209-222, 2020/11
- Tsutsumi, Kenji, “Formation of a Community by Hometown Organizations that Promote Interactions among Residents in Urban and Rural Areas—Activities by Furusato Chikara, a NPO Created by Residents in the Kinki Region and the Case of the Miyoshi Region in Tokushima Prefecture” *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 223-235, 2020/11
- Tsutsumi, Kenji, “Social Movements and Social Capital in Senri New Town” *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 237-251, 2020/11
- Tsutsumi, Kenji, “Peripheral Regions in the Era of Regional Crisis, Society 5.0, the Postpandemic and the Posturban—A Concluding and Additional Chapter for the English Edition” *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, pp. 253-268, 2020/11

2-2. 著書

-
- 堤研二, 伊藤勝久, 井上憲一他(共著) 『農山村のオルタナティブ』日本林業調査協会, pp. 247-267, 2021/9
- Tsutsumi, Kenji, *Depopulation, Aging and Living Environments: Learning from Cases of Mountainous Areas and Social Capital*, Springer, 290p., 2020/11

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

-
- 堤研二 「ネオソサエティ時代の地域生活機能と防災—人文地理学の視点から—」第2回大阪大学社会ソリューションイニシアティブ地域・まちづくりフォーラム—「新たな防災」から命を大切にす未来社会を考える—, 大阪大学社会ソリューションイニシアティブ, 大阪大学、オンライン, 2022/2

堤研二 「エネルギー産業がもたらした地域社会の形成と変動－三池炭鉱・高島炭鉱の事例－」大阪大学大学院工学研究科 テクノアリーナ フォーラム「エネルギーバリューチェーンと社会のしくみ」, 大阪大学工学研究科, 大阪大学、吹田キャンパス大阪大学大学院工学研究科センテラスサロン(ハイブリッド), 2022/1

堤研二 “Neo-society, planetary urbanization and regional sustainability: An ideal examination thinking of “smartness” in rural Japan” The 1st Conference on Asian Inclusive Smart Cities in the Post Covid 19 Arena, AISC、ERIA, Kyoto University, Online, 2021/11

堤研二 「地域アイデンティティ論 木津川市編」タウン・アセット・マネジメント講座, 日本アセットマネジメント協会, 京都大学、オンライン, 2021/7

堤研二 「地域アイデンティティについて」スマートシティ研究会, AISC, 京都大学、オンライン, 2021/6

堤研二 「地域アイデンティティ論 基礎(前編・後編)」タウン・アセット・マネジメント講座, 日本アセットマネジメント協会, 京都大学、オンライン, 2021/6

堤研二 (招待講演)「北大阪:新時代における千里・梅田・新大阪の諸相」大阪・京都文化講座オンライン(2021 年度後期 立命館プロムナードセミナー):「大阪・京都く名所図会」(第8回), 大阪大学文学研究科・立命館大学文学部, 大阪大学・オンライン, 2020/11

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 大阪大学総長顕彰(研究部門), 国立大学法人大阪大学, 2015/7

堤研二 市民スポーツ・レクリエーション指導者表彰, 豊中市民体育振興協議会, 2012/10

堤研二 国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 国立大学法人大阪大学, 2006/2

堤研二 昭和シェル石油環境研究課題賞, 昭和シェル石油環境研究助成財団, 2005/9

堤研二 地域地理科学会賞, 地域地理科学会, 1997/7

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2020 年度～2022 年度、挑戦的(開拓・萌芽)研究、代表者:堤研二

課題番号:20K20725

研究題目:日本における空間秩序・基礎生存諸機能概念の地域計画への影響とその実践的応用

研究経費:2020 年度 直接経費 1,300,000 円 間接経費 390,000 円

2021 年度 直接経費 1,900,000 円 間接経費 570,000 円

研究の目的:

20 世紀のドイツの国土計画・地域計画において重視された「空間秩序」の概念は、戦中期日本の企画院等の国土再編成案に影響を与えたと推測される。また、空間秩序の考えを基本にしつつ、ミュンヘン学派ドイツ社会地理学が創案した「基礎生存諸機能」の概念は、ドイツにおける地域計画や地理教育の中で活かされてきた。これらについては日本における研究が進んでいない。本研究では、①空間秩序と基礎生存諸機能の概念を整理し、②それらが如何に日本の企画院等に影響を与えたのかを明らかにする。また、③ケルン貨物駅跡再開発などを対象として、日本の事例との比較を通じて、国土計画・地域計画に関する思想・手法の日欧での異同を検討する。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・理事, 2020 年 11 月～現在に至る

日本地理学会・代議員, 2020 年 4 月～2022 年 3 月

Marginal Areas Research Group・代表, 2019 年 6 月～現在に至る

3. 堤 一昭 教授

1960 年生。京都大学文学部卒業、京都大学大学院文学研究科博士後期課程(東洋史学専攻)学修退学。文学修士(京都大学、1988)。大阪外国語大学外国語学部国際文化学科比較文化講座専任講師、同助教授、同准教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2013 年 6 月より現職。専攻：東洋史学

3-1. 論文

なし

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

堤一昭 「[新刊紹介]櫻井智美、飯山知保、森田憲司、渡辺健哉編『元朝の歴史 モンゴル帝国期の東ユーラシア』』『内陸アジア史研究』37, 勉誠出版, pp. 47-49, 2022/3

3-4. 口頭発表

堤一昭 「石濱文庫所蔵 石濱純太郎の講義・講演ノート」国際シンポジウム 内藤湖南と石濱純太郎——近代東洋学の射程, 関西大学東西学術研究所, 関西大学以文館ほか(ハイブリッド), 2021/11

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本モンゴル学会・理事, 2008 年 5 月～現在に至る

4. 井本 恭子 准教授

1963 年生。大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程(イタリア語学専攻)修了。文学修士(大阪外国語大学、1990)。大阪外国語大学外国語学部地域文化学科ヨーロッパ III 講座助手、講師、同助教授、同准教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻：人類学

4-1. 論文

井本恭子 「都市の公共空間に発生する「一時的自律ゾーン」—ローマの Baobab Experience の活動から考える—」『待兼山論叢』54, 大阪大学文学研究科, pp. 65-78, 2020/12

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

井本恭子 「サルデーニャの羊飼いたちの適応の手法」経営人類学研究会，経営人類学研究会，オンライン 2021/12

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-25 アート・メディア論

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 3 准教授 2 講師 0 助教 1 特任助教 1

教授：永田 靖、園府寺 司、桑木野幸司

准教授：古後奈緒子、東 志保

助教：鈴木 聖子

特任助教：山崎 達哉

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
26	0	0	0	0	0

※うち留学生0名、社会人学生4名

3. 修了生(2020年度～2021年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2020	5
2021	11
計	16

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

1. アート・メディア論に関する基礎的教育のシステムを構築するとともに、学生にそのような基礎的素養を身につけてもらうこと。
2. さまざまな〈現場〉で活動する専門職の人々と接触する機会をつくり、フィールド的な知のありかたを教育すること。
3. 学生各自が自身のフィールドを見つけ、選択し、そこでの活動を進めていけるような環境を作り出すこと。
4. サイバーメディアを中心としたメディアリテラシーを高めること。

2. 研究

従来の芸術、文化研究にはなかった新領域での研究を行う。萌芽的な研究の成果を徐々に出していければよいと考える。新領域の研究者との接点を増やしつつ、また、〈現場〉との接点も重視した研究を推進する。

3. 社会連携

劇場や博物館、美術館での芸術活動に積極的に参加し、芸術の実践を行い、また作家の創作活動を背後から支えることで、芸術の社会的意義を明確にし、社会に伝えていく。

Ⅲ. 活動の概要(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

授業においては全体演習において、各院生の研究テーマへの個別的、集中的な指導を行った。また学外での実践的活動も推奨したので、院生の多くは学外のさまざまなフィールドで活動、研修を重ねている。具体的には美術館等における展覧会企画やその補助、芸術雑誌への寄稿、上演活動への参加等である。メディア実習は前後期に実施し、授業を通じて各自のメディア運用能力は着実に高まっている。

2. 研究

著書、論文、国内外での研究発表、上演活動、シンポジウムの企画など、「書物」「実践」ともに研究はまずまず順調に遂行されている。なおコース紀要『Arts&Media』については、2021 年 7 月に第 11 号を、2022 年 7 月に発刊した。

3. 社会連携

美術館における講演、演劇企画・展覧会企画への参加等、さまざまな社会連携活動を進めてきている。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020 年度～2021 年度)

1. 教育

上記 1～3 の諸項目についてはいずれもほぼ計画通りに遂行できている。各院生の個人研究はもちろん、研究室の HP の作成、運営など、院生は学内外で積極的に活動を進めており、基本方針の指導は浸透しているといえる。

2. 研究

成果の質・量にある程度の個人差はあるものの、教員、院生ともに各自の研究は着実に遂行している。紀要『Arts&Media』の第 12 号を刊行した。第 11 号については、「イメージを横断する思考」という企画を行った。学内外からの反響は大きく、特に第 10 号は、第 54 回造本装幀コンクールにて産業大臣賞を受賞した。今後も内容を充実させてゆきたい。

3. 社会連携

これも上記同様研究テーマによってある程度の個人差はあるが、社会との連携は教員、院生ともに十分に意識し、遂行できているといえる。

Ⅴ. 基本情報(2020 年度～2021 年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	0(0)	4(4)	0(0)	0(0)	0(0)	4(4)
2021	1(1)	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	3(3)
計	1(1)	6(6)	0(0)	0(0)	0(0)	7(7)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	1	1	1	0	0	3
2021	0	0	2	1	0	3
計	1	1	3	1	0	6

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020年度】

城直子 「カトマンズ・クマリの館：王権と女神崇拜の器」『Arts and Media』第10号, pp.175-188,査読有, 2020/7/31

稲垣智子 「コラボレイティヴ・インスタレーション・アートの可能性」『Arts and Media』第10号, pp.162-174,査読有,
2020/7/31

奥野晶子 「新国誠一とASA（芸術研究協会 the Association for Study of Arts）」『Arts and Media』第10号, pp.189-199,
査読有, 2020/7/31

山本結菜 「イタリアのデザイン精神を求めてーポローニャ大学イタリアン・デザイン・サマースクールにおける考察」
『Arts and Media』第10号, pp.200-216,査読有, 2020/7/31

【2021年度】

城直子 「カトマンズ・ゲストハウスの庭より」『Arts and Media』第11号, pp.224-236,査読有, 2021/7/31

山本結菜 「ファシズム体制下におけるミラノ・トリエンナーレとイタリアの建築様式」『Arts and media』第11号, pp.66-
101,査読有, 2021/7/31

加藤隆司 「市所蔵作品を相乗的に活かす試みー領域を横断する美術鑑賞をめぐるー」『アートマネジメント研究』第22
号, pp.37-42,査読有, 2022/3/31

(2)口頭発表

【2020年度】

城直子 「カトマンズ・クマリの館についての一考察」, 第36回民族芸術学会, 大阪大学, オンライン, 2020/7/25

城直子 「王権とクマリ女神：インドラジャトラ祭りにおけるクマリ崇拝について」, 第2回若手研究者フォーラム, 大阪
大学, ハイブリッド(両方), 2020/9/28

永山宗史 「Fieldwork on Artworks Before and After the COVID-19 Pandemic」, “With Corona or Post Corona: The
Opportunities and Challenges for the Virtual Learning and International Exchange” , 大阪大学, ハイブリッド(両
方), 2021/3/15

【2021年度】

山本結菜「ローマ大学都市数学研究棟におけるジオ・ポンティのデザイン」, 第6回大阪大学豊中地区研究交流会, 大阪大学, オンライン, 2021/12/21

加藤隆司「魯山人にししのぶ田園郊外と音楽風景」, 市制施行 85 周年記念 とよなかクリエイティブ・ガーデン, 絃の間 Son de Sone, 対面, 2022/3/12

加藤隆司「赤ちゃんのための美術鑑賞—初めてのママやパパもくつろぐひととき—」, ヘルスケアアート・オンライン全国サミット, 名古屋市立大学大学院芸術工学研究科, オンライン, 2022/2/20

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

3. 大学院生等の留学

2020年度 1名

2021年度 0名

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2020年度～2021年度の大学院修士課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4名

2020年度：2名 2021年度：学芸員2名

<内訳> 美術館学芸員2名 技術職 0名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名 その他 0名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度：0名 2021年度：0名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

- ・紀要『Arts and Media』第11号、2021年7月発行
- ・紀要『Arts and Media』第12号、2022年7月発行

7. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 永田 靖 教授

1957年生。1981年上智大学外国語学部ロシア語学科年卒業、1988年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位取得退学。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究科客員研究員、ロシア国立映画大学研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：演劇学

1-1. 論文

永田靖 「パンデミックの演劇ーアントナン・アルトーを忘れよう」『演劇学論集 紀要』71, 日本演劇学会, pp. 27-34, 2020/12

永田靖 「シンガポールの潮州歌劇」『Arts&Media』10, 大阪大学文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論コース, pp. 253-259, 2020/7

1-2. 著書

永田靖, 橋爪節也他(共著) 『EXPO70 大阪万博の記憶とアート』大阪大学出版会 2021/10

永田靖, 井上理恵, 五十殿利治他(共著) 『島村抱月の世界ヨーロッパ文芸協会芸術座』社会評論社, pp. 255-284, 2021/11

永田靖(編) 『漂流の演劇 維新派のパースペクティブ』大阪大学出版会, pp. 4-18, 22-49, 2020/8

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

永田靖 「外地の『三人姉妹』」『Arts&Media』Vol.11, 大阪大学文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論コース, pp.267-270, 2021/7

永田靖 「コロナ禍での／からの演劇」『日本映像学会会報』190, 日本映像学会, pp. 4-4, 2021/2

永田靖 「サハリンに向き合うー『チェーホフも鳥の名前』」関西えんげきサイト「劇評アーカイブス」, 2022/1/24
<https://k-engeki.net/>

永田靖 「不易流行」『日本演劇学会会報』97, 日本演劇学会, pp. 2-2, 2021/2

永田靖 「コロナ禍での全国大会中止」『演劇学論集 紀要』71, 日本演劇学会, pp. 117-118, 2020/12

永田靖 「コロナ禍での演劇研究」『日本演劇学会会報』96, 日本演劇学会, pp. 2-3, 2020/7

1-4. 口頭発表

Nagata, Yasushi “Message from Asian Theatre Working Group Post-Covid 19 Asian Theatre” the14 Asian Theatre WG Conference, Asian Theatre Working Group, IFTR, University of Philippines, Diliman (オンライン), 2022/3

Nagata, Yasushi “Performing Rusticity-on some Japanese ‘multilingual’ plays” Practicing Japan - 35 years of Japanese Studies in Poznań and Kraków, Adam Mickiewicz University, Poznań / Jagiellonian University in Kraków, Adam Mickiewicz University, Poznań / Jagiellonian University in Kraków(オンライン), 2022/3

永田靖 「定住とはなにか」金森マユ写真展セミナー, 「徴しの上を鳥が飛ぶ-文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム」, 2022/1/26

永田靖 「人形浄瑠璃 文楽と鹿角」シンポジウム, 能勢浄るりシアター, 2021/12/22

永田靖 「『12人の怒れる男』について」 「『12人の怒れる男』劇評ワークショップ」吹田メイシアター, 2021/12/11

Nagata Yasushi “Theatre and Ecology” Closing, Asian Theatre WG Galway Meeting, IFTR Annual Conference, On Line, 2021/7/12

永田靖 「いま、臨界点にある演劇: 「現代版組踊」から、演劇と地域、教育、産業を考える」コメンテーター, 2021年度日本演劇学会全国大会「臨界点の演劇」シンポジウム, 2021/6/26

永田靖 「大阪大学の社会学共創と大阪の未来」シンポジウム懐徳堂・適塾から中之島、そして未来への温故知新, 日本ヨーロッパ芸術文化交流財団, オンライン, 2021/3

永田靖 「オーストラリア日系移民と私たち/イントロダクション」レクチャー&ワークショップ、「作品制作とセッション」, 徴しの上を鳥が飛ぶ-文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム, 大阪大学(オンライン), 2021/2

Nagata, Yasushi, ““Asian Theatre and War” Closing address”, IFTR Asian Theatre Working Group Online Meeting, Asian Theatre Working Group, Osaka University (オンライン), 2021/1

永田靖 「いま、臨界点にある演劇: 「現代版組踊」から、演劇と地域、教育、産業を考える/コメンテーター」日本演劇学会全国大会, 日本演劇学会, 名城大学(オンライン), 2021/6

永田靖 “Theatre and Ecology” Asian Theatre WG Galway Meeting, IFTR Annual Conference, On Line, International Federation

for Theatre Research, Galway, National University of Ireland(オンライン) , 2021/7

Nagata, Yasushi, “Theatre at a Critical Point”, Opening address”, the 8th international Asian Theatre Studies conference, international Asian Theatre Studies conference, Osaka University(オンライン), 2020/11

永田靖 「チェーホフからソン・ギウンへ」『外地の三人姉妹』シンポジウム, 徴しの上を鳥が飛ぶ—文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム, 大阪大学(オンライン), 2020/11

永田靖 「維新派の舞台美術と野外演劇」上映会&トークイベント, 大阪大学出版会, スタンダードブックストア(オンライン), 2020/10

永田靖 「維新派の、ことば・空間・身体」『漂流の演劇』刊行記念イベント, 大阪大学出版会, スタンダードブックストア(オンライン), 2020/9

Nagata, Yasushi, “Urban-development and Burial in “JUNCTION” by the Dojo-Taikutsu”, IFTR Galway Conference, Environments, Sustainability, and Politics, International Federation for Theatre Research, National University of Ireland(コロナ禍により大会中止), 2020/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2018年度～2022年度、基盤研究(B) 一般、代表者:永田靖

課題番号:18H00624

研究題目:アジア近現代演劇の超域性の研究—クラスター構築と次世代研究者育成の国際共同研究

研究経費:2020年度 直接経費 3,000,000円 間接経費 900,000円

2021年度 直接経費 3,600,000円 間接経費 1,080,000円

研究の目的:

ポスト植民地主義的、またポスト・グローバリゼーション時代を迎える現代において、多様な実践が試みられているアジア近現代演劇の多様性を総合的に理解し、広い世界の演劇学・演劇史的観点から捉え返すことが求められている。この共同研究では、アジア間の相互影響やその共通する芸術的特徴を西欧演劇との比較のもとで明らかにすること、20世紀後半以後のグローバリゼーション時代の今日的課題を検討すること、人種や言語を越えて接触し合ってきたアジアの近現代演劇を総合的に研究することを目的とする。またアジア諸都市間、西欧のアジア演劇研究者とのネットワークを生かして、クラスター構築を進めて行く。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2020年度～2021年度、5：その他補助金、助成金獲得者:永田靖

助成金名:大学を活用した文化芸術推進事業

研究題目:文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム

助成団体名:文化庁

助成金額:2020年度 直接経費 15,400,000円

2021年度 直接経費 20,000,000円

研究の目的:

文学研究科の人文科学研究とアート・マネジメント講座を噛み合わせることで、現代社会において求められている諸課題に対して人文学的なアプローチを行うアート・ファシリテーターの人材育成を行う。担当教員が芸術諸ジャンルのアート経験を人文学の側からの解釈を行いつつ、人間や共同体のアイデンティティに関する諸問題について考察を深め、アートの社会での実際的な展開能力を身につけることを目的としている。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪府市文化振興会議・委員, 2020 年月～現在に至る
兵庫県立尼崎ピッコロ劇団企画運営委員会・委員長, 2019 年月～現在に至る
稲盛財団京都賞選考専門委員会・委員, 2017 年 5 月～現在に至る
公益財団法人吹田市文化振興事業団・理事, 2015 年 5 月～現在に至る
日本演劇学会・会長, 2014 年 6 月～2022 年 6 月
豊中市文化審議会・委員, 2014 年 6 月～現在に至る
兵庫県立ピッコロ劇場企画運営委員会・運営委員, 2011 年 3 月～現在に至る
Asian Theatre Working Group, International Federation for Theatre Research・Convener, 2009 年 7 月～2022 年 6 月
芸術学関連学会連合・委員, 2005 年 6 月～2022 年 6 月
日本演劇学会・理事, 2002 年 6 月～現在に至る
日本演劇学会近現代分科会・主宰, 2000 年 11 月～現在に至る

2. 圀府寺 司 教授

1957 年生。大阪大学文学部美学科（西洋美術史）卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren（文学博士・アムステルダム大学）。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。2004 年にワルシャワ・ユダヤ歴史博物館研究員。専攻：西洋美術史／アート・メディア論

2-1. 論文

圀府寺司 「画商ジークフリート・ビング 1838-1905」『フィロカリア』38, pp. 41-64, 2021/3

2-2. 著書

圀府寺司(訳) 『(訳書+あとがき) ファン・ゴッホの手紙 I & II 全二巻』新潮社, 1120p. , 2020/10

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

圀府寺司(新聞・online) 「ファン・ゴッホ書簡選集刊行」『朝日新聞』

(https://www.asahi.com/articles/ASNB66MPNBMPTFC00R.html?iref=pc_ss_date), 2020/10

2-4. 口頭発表

圀府寺司 「画商ジークフリート・ビング 1838-1905」待兼山町芸術学会, 待兼山町芸術学会, 大阪大学(オンライン), 2021/3

圀府寺司 “The Activities in Japan of Siegfried Bing, global art dealer and promoter of Japonisme and Art Nouveau”, The International Art Market Studies Association (TIAMSA) Conference 2021-7 May 2021; 3 June 2021; 15-16 July 2021 / University of Edinburgh / National Galleries of Scotland

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

圀府寺司 大阪大学総長顕彰 2015 研究部門, 大阪大学, 2015/7

圀府寺司 大阪大学共通教育賞(2009 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2009/11

圀府寺司 Praemium Erasmunianum(エラスムス研究賞), Stichting Erasmusprijs エラスムス財団, 1989/2

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2019 年度～2022 年度、基盤研究(A) 一般、代表者: 圀府寺司

課題番号: 19H00519

研究題目: 美術市場とその国際化に関する制度論的、交流史的研究。西洋から日本・アジアへの展開

研究経費:2020年度 直接経費 5,600,000円 間接経費 1,680,000円
2021年度 直接経費 6,800,000円 間接経費 2,040,000円

研究の目的:

西洋近世から現代、ならびに日本、東アジア、東南アジアの近現代を対象に、美術市場の生成と発達、国際化に関する調査・研究を行う。本研究の助走的研究に当たる「西洋近世・近代美術における市場・流通・画商の地政経済史的研究」においては、研究が最も進んでいる西洋近世・近代の特定地域・時代を対象に美術市場研究を進め、この種の研究が著しく遅れている日本でその研究史や方法を吸収しつつ本格的な研究への道筋をつけることを目標とした。この目標をある程度達成した上で、その成果を速やかに引き継ぎ、本研究では研究の視野を以下のように地理的、領域的に拡大して本格的に国際先端研究に参入する。1. 地理的には近代以降の日本ならびにアジアを視野に入れ、西洋圏との美術市場の関わりを調査研究する。2. 美術市場と様々な美術制度との関わりをより重点的に研究する。美術作品の価値付与システムに深く関わる諸制度(美術家組合、美術政策、美術館、批評、美術史学など)と美術市場との関わりについてさらに調査・研究を進める。3. 美術作品の売買だけでなく貸借の市場(展覧会市場)や複製・写真・建築市場など未開拓な研究領域も研究対象に加える。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

独立行政法人国立美術館 外部評価委員会・外部評価委員会・副委員長, 2010年4月～2020年3月
国際美術史学会 CIHA・国内委員, 2009年4月～現在に至る
文化庁・独法国立美術館評価に係る有識者会合委員 2021年4月～現在に至る
大阪中之島美術館アドバイザーボード 2021年4月～現在に至る

3. 桑木野 幸司 教授

1975年生。東京大学大学院工学系研究科修士課程修了(西洋建築史)。ピサ大学大学院博士課程修了。Dottore di Ricerca in Storia delle arti visive e dello spettacolo(文学博士(美術史)・ピサ大学)。Kunsthistorisches Institut in Florenz 研究生、2011年4月より大阪大学文学研究科准教授を経て、2020年4月より現職。専攻:西洋美術・建築・庭園史

3-1. 論文

桑木野幸司 “Tra inventio e imitatio: il giardino ideale di Agostino Del Riccio come materializzazione della machina memorialis” *Reimmaginare la Grande Galleria. Forme del sapere tra età moderna e culture digitali. Atti del convegno internazionale, Torino, 1-9 dicembre 2020*, pp. 17-34, 2022/3

桑木野幸司 「叡智の工房(officina sapientiae)」『Arts and Media』11, 大阪大学アート・メディア論研究室, pp. 270-271, 2021/7

桑木野幸司 「アゴスティーノ・デル・リッチョ『王の庭園について』」『池上俊一監修『原典イタリア・ルネサンス芸術論』(上巻)』名古屋大学出版会, pp. 169-240, 2021/6

桑木野幸司 「第41回関西茶話会 イタリア・ルネサンス庭園: 知を創造する空間」『NU7 国立七大学の総合情報誌』学会, pp. 10-16, 2021/5

桑木野幸司 「博物館: 世界のマイクロコスモスから近代科学の基幹施設へ」『科学史事典』丸善出版, pp. 208-209, 2021/5

桑木野幸司 「イタリアが造った英国の風景」『中島俊郎『英国流 旅の作法: グランド・ツアーから庭園文化まで』』講談社学術文庫, pp. 280-293, 2020/7

桑木野幸司 「『多様性は愉しませる』: 初期近代の芸術・文芸における varietas 礼賛」『Arts and Media』10, 大阪大学アート・メディア論研究室, pp. 12-26, 2020/7

桑木野幸司 「メディチ家の叡智の地図: 初期近代イタリアの世界地図ギャラリーと地誌表象としての庭園」『ユリイカ』青土社, pp.

164-172, 2020/6

桑木野幸司 「イタリアルネサンス庭園:知を創造する緑陰を訪ねて」『アステイオン』92, サントリー文化財団, pp. 4-11, 2020/6

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

桑木野幸司 「『ポリフィロの夢』の庭」『白水社の本棚』白水社, pp. 10-11, 2022/1

桑木野幸司 「メランコリーを癒す庭」『白水社の本棚』白水社, pp. 10-11, 2021/10

桑木野幸司 「ミケランジェロを育てた月桂樹の庭」『白水社の本棚』白水社, pp. 10-11, 2021/7

桑木野幸司 「老コジモの剪定鋏」『白水社の本棚』白水社, pp. 10-11, 2021/4

桑木野幸司 「健康の苑:ピエロ・デ・クレシェンツィの農業論」『パブリッシャーズレビュー』白水社, pp. 7-7, 2021/1

桑木野幸司 「普遍博士が愛した芝」『パブリッシャーズレビュー』白水社, pp. 7-7, 2020/10

桑木野幸司 「不死の庭:『デカメロン』に語られた悦ばしき緑陰」『パブリッシャーズレビュー』白水社, pp. 7-7, 2020/7

桑木野幸司 「修道院の庭:身体と魂を浄化する緑地」『パブリッシャーズレビュー』白水社, pp. 7-7, 2020/4

3-4. 口頭発表

桑木野幸司 「庭園と果物」セミナーと研究報告「庭園・植物・公園」, 山梨大学教育学部芸術身体教育コース平野研究室, へちま STUDIO、ハイブリッド, 2022/3

桑木野幸司 「多様性(varietas)礼賛:初期近代西欧の視覚芸術と修辞学」シンポジウム「初期近代の芸術・文芸における varietas と inventio」, 科学研究費・基盤 B「初期近代西欧の視覚芸術における多様性と発想:美術と修辞学の創造的共同」, オンライン, 2021/9

桑木野幸司 「『大』大阪の近代建築探訪:華麗なる水都の記憶をもとめて」阪大リーブル『20世紀大阪の芸術文化』(仮)出版準備研究会, 大阪大学出版会, 大阪大学文学研究科・大会議室, 2021/9

桑木野幸司 「魅惑のイタリア・ルネサンス庭園:『閉ざされた庭』から『風景の発見』まで」朝日カルチャー・新宿教室, 朝日カルチャー, 朝日カルチャー・新宿教室, 2021/3

Kuwakino, Koji, "Tra inventio e imitatio: il giardino ideale di Agostino Del Riccio come materializzazione della machina memorialis", Reimmaginare la Grande Galleria. Forme del sapere tra età moderna e culture digitali, Università di Torino, Torino, 2020/12

桑木野幸司 「イタリア・ルネサンス庭園:知を創造する空間」第41回学士会関西茶話会, 学士会, 京都大学学友会館, 2020/10

桑木野幸司 「アゴスティーノ・デル・リッチョの理想庭園論における建築エクフラシスと inventio:創造と模倣のはざままで」オンラインシンポジウム「テキストを建てる、イメージを歩く」, 2018-20年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究課題「啓蒙主義時代から19世紀前半までのフランスにおける建築図面・図表の思想的意義」(研究代表者:小澤京子), 和洋女子大学, 2020/9

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

桑木野幸司 大阪大学総長賞, 大阪大学, 2013/5

桑木野幸司 大阪大学総長奨励賞, 大阪大学, 2012/8

桑木野幸司 地中海学会「ヘレンド賞」, 地中海学会「ヘレンド賞」, 2012/6

桑木野幸司 日本学術振興会賞, 日本学術振興会, 2012/2

桑木野幸司 第五回美術に関する研究奨励賞, 公益財団法人 花王芸術・科学財団, 2011/3

桑木野幸司 大阪大学栄誉教授, 大阪大学, 2020/11

桑木野幸司 第41回 サントリー学芸賞, サントリー文化財団, 2019/12

桑木野幸司 大阪大学賞, 大阪大学賞, 2017/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2016年度～2020年度、基盤研究(B) 一般、代表者:桑木野幸司

課題番号:16H03373

研究題目:創造的思考の基盤としての建築術:初期近代イタリアの美術・文芸における空間の観念

研究経費:2020年度 直接経費 5,000,000円 間接経費 1,500,000円

2021年度 直接経費 2,900,000円 間接経費 870,000円

研究の目的:

西欧では古来、建築空間を情報整理の際に分類フレームないしは創造的思考の基盤として活用する伝統があった。こうした精神内面の空間構造については、これまで建築史や美術史、思想史などではほとんど明らかにされてこなかった。本研究は、初期近代の記憶術に着目し、精神内に建築的な仮想の情報フレームを組み上げる同術が、同時代の文芸や視覚芸術にいかなる影響を与えていたのかを、領域横断的視点から解明する。

3-6-2. 2020年度～2023年度、基盤研究(B) 一般、代表者:桑木野幸司

課題番号:20H01208

研究題目:初期近代西欧の視覚芸術における多様性と発想:美術と修辞学の創造的共同

研究経費:2020年度 直接経費 5,000,000円 間接経費 1,500,000円

2021年度 直接経費 2,900,000円 間接経費 870,000円

研究の目的:

「多様性は愉しませる *varietas delectat*」この古代ギリシア以来の文芸上の観念は、当時の世界観にも反響しつつ、古代世界における一種の常套主題となり、後世の文化・思想にも大きな影響を与えた。それがもっとも興味深いかたちで見られるのが、西欧の初期近代という時代である。古代復興ばかりでなく、視覚芸術が高度に発展し、都市文化が成熟したこの時代は一方で、情報爆発を経験した時代でもあった。その知的革新の時に、*varietas* が創造的な仕方に応用されていった初層を、文理融合的に明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

民族芸術学会・理事, 2020年4月～現在に至る

地中海学会・事務局員, 2012年4月～現在に至る

4. 古後 奈緒子 准教授

1972年生。2004年大阪大学 文学研究科文化表現論(美学)修了、修士(文学)。京都造形芸術大学、大阪外国語大学、龍谷大学、神戸市外国語大学、奈良大学、神戸女学院大学等の非常勤講師、2014年より大阪大学文学研究科助教を経て、2017年4月より現職。2001年日本演劇批評家協会主催第5回「シアターアーツ賞」受賞。2001年舞踊学会研究奨励賞。専攻:舞踊学

4-1. 論文

古後奈緒子「人間の輪郭を書き換えるダンスー万博を控えた大阪のパースペクティブー」『シアターアーツ』66, pp. 100-109, 2022/3

古後奈緒子「エレクトラとダイナモの結婚ーウィーン国際電気博覧会における電気劇場のパレエ」『近現代演劇』10, pp. 2-18, 2021/5

古後奈緒子 「世紀転換期のバレエにおける人形と電気の主題 ―ヨーゼフ・ハスライター『人形の精』を中心に―」『大学院文学研究科紀要』61, 大阪大学文学部, pp. 103-123, 2021/3

古後奈緒子 「記録メディアとしてのパフォーマンス台本に関する試論」『漂流の演劇』大阪大学出版会, pp. 192-222, 2020/8

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

古後奈緒子 「誰も皆(everyman/Jederman)の関心であるコモンの話」『ACT』30, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, 2021/9

古後奈緒子 「映像アーカイブに探る未来 ～コロナ禍の中で見た『レミング』『SHARE』『緑のテーブル 2017』』『Act』28, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, 2020/12

古後奈緒子 「モダンダンス」『ドイツ文化事典』丸善, pp. 544-545, 2020/10

古後奈緒子 「「モノガタルカラダ/物語る声」が立ち上げる場 ―なぜ今、メタモルホールへ行くのか』『イメージ』76, 劇団態変, pp. 56-60, 2020/5

4-4. 口頭発表

Kogo, Naoko, “Reenactment and documentation of performers liveness of Ishinha in Osaka as Performing Arts Museum”, 33 rd SIBMAS Conference, the International Association of Libraries, Museums, Archives and Documentation Centres of the Performing Arts., ワルシャワ(コロナのため延期), 2020/8

Kogo, Naoko, “Travel and Transformation of Ishinha”, EAJS2020, the European Association of Japanese Studies Conference, ブリュッセル(コロナのため延期), 2020/5

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪アーツカウンシル・委員, 2018年5月～2022年3月

大阪市芸術文化活動助成・審査委員, 2018年5月～2022年3月

日本芸術文化振興会・文化芸術活動調査員, 2018年5月～現在に至る

5. 東 志保 准教授

1979年生。国際基督教大学比較文化研究科博士前期課程修了(比較文化論)。パリ第三大学映画視聴覚研究博士(Docteur en Cinéma et Audiovisuel)。国際基督教大学平和研究所助手、同大学非常勤講師、岩手大学非常勤講師、2017年より大阪大学大学院文学研究科助教を経て2021年4月より現職。専攻：映像研究／比較文化論

5-1. 論文

なし

5-2. 著書

東志保, 大寺眞輔, 原田麻衣他(共著)『アニエス・ヴァルダ:愛と記憶のシネアスト』neoneo 編集室, pp. 80-96, 2021/8

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

東志保(訳)「フィリップ・デュボワ著『ビデオー状態:思考する形式』、『Arts and Media』, vol.11, pp.12-31,大阪大学文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室, 2021/7

5-4. 口頭発表

東志保「連帯と贈与、そして抵抗としてのシネマトグラフ:クリス・マルケル、ジャン・ルーシュ、アニエス・ヴァルダを例に」、長崎大学多文化社会学部, 長崎大学(オンライン), 2022/3

東志保「アニエス・ヴァルダの映画における周縁性の表象:『冬の旅』を中心に」待兼山芸術学会, 大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座, 大阪大学(オンライン), 2022/3

東志保「連帯と贈与としてのシネマトグラフ」ラボカフェ/鉄道芸術祭 vol.10「映画と鉄道の軌跡をたどる ―記録と創作の可能性」, アートエリア B1, アートエリア B1(ハイブリッド), 2022/1

東志保「ジョルジュ・メリエスのアクチュアリティ―:幻想と現実」「おもちゃ映画ミュージアム ジョルジュ・メリエス生誕 160 年企画」講演と参考上映, おもちゃ映画ミュージアム, おもちゃ映画ミュージアム, 2021/12

東志保, 菅野優香, 松房子他「「芸術家 アニエス・ヴァルダの全貌」(菅野優香, 松房子, 若林良との共同の発表)」『アニエス・ヴァルダ 愛と記憶のシネアスト』(neoneo 編集室)『シモーヌ VOL.4 アニエス・ヴァルダ特集』(現代書館)W 刊行記念, neoneo 編集室, 本屋 B&B(ハイブリッド), 2021/10

東志保「「ファシズムの道具にならない芸術の概念」と映画:クリス・マルケル、アレクサンダー・クルーゲ、パトリシオ・グスマンを例に」第 15 回形象論研究会, 形象論研究会, オンライン, 2020/9

東志保「エッセイ映画作家としてのヨリス・イヴェンス:1950 年代叙情的エッセイ映画時代の作品にみられる主観性」表象文化論学会オンライン研究フォーラム, 表象文化論学会, オンライン, 2020/8

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本映像学会関西支部・幹事, 2018 年 6 月～現在に至る

6. 鈴木 聖子 助教

1971 年生。2012 年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程(文化資源学)単位取得退学。博士(文学)(東京大学、2014 年)。パリ大学東アジア言語文化学部・助教、大阪大学大学院文学研究科音楽学研究室・助教を経て、2021 年より

現職。専攻：音楽芸能史・文化資源学

6-1. 論文

- 鈴木聖子 「民間の雅楽団体における「わざ」の正統性 — 菌廣教と雅楽道友会の音響空間—」『待兼山論叢：芸術篇』55, pp. 1-28, 2022/2
- 鈴木聖子 「声と音の芸能史：「小沢昭一的小三治」」『ユリイカ』784-544, pp. 211-218, 2022/1
- 鈴木聖子 「「古代」の音」(細川周平編著)『音と耳から考える——歴史・身体・テクノロジー』, アルテスパブリッシング, pp.107-109, 2021/10
- 鈴木聖子 「1970年代聴覚文化における大道音楽や物売りの声の録音収集の意義：LPレコード集『ドキュメント 日本の放浪芸』の文化資源学」『サウンドスケープ』21, 日本サウンドスケープ協会, pp. 74-85, 2021/7
- Suzuki, Seiko, “Between Narrative and Melody : Meaning of Musical Preaching (fushidan sekkyō) on Shōichi Ozawa’s LP collection Document / Itinerant Arts of Japan” *MÉMOIRE SONORE DU JAPON:LE DISQUE, LA MUSIQUE ET LA LANGUE*, (共著論文集), pp. 53-65, 2021/3

6-2. 著書

Suzuki, Seiko, Pascal Cordereix et, Gabriel Bergounioux(共同監修), *MÉMOIRE SONORE DU JAPON:LE DISQUE, LA MUSIQUE ET LA LANGUE*, (共著論文集), 2021/3

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 鈴木聖子(仏語より翻訳)(パスカル・コルドレクス著)「パリ植民地博覧会における音声博物館の録音資料：学術とプロパガンダと商業のあいだで」『阪大音楽学報』18, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 117-138, 2021/10
- 鈴木聖子(インタビュー)「若い世代の「新作」が希望」『東京大学新聞』新年号, 東京大学新聞, pp. 4-4, 2021/1
- 鈴木聖子 「田辺尚雄の『東垂の音楽』を聴く」『(日本)国立国会図書館『歴史的音源』』, (<https://rekiion.dl.ndl.go.jp/ja/ongen-shoukai/17.html>), 2020/11
- PASCAL CORDEREIX, Suzuki, Seiko(共著)(フランス国立図書館デジタル図書館「ガリカ」公式ブログ), “Nouvel érotisme au Japon dans les années 1970”, 『Le Blog Gallica La Bibliothèque numérique de la BnF et de ses partenaires フランス国立図書館オンライン公式ブログ』フランス国立図書館(<https://gallica.bnf.fr/blog/09092020/nouvel-erotisme-au-japon-dans-les-annees-1970?mode=desktop> (ウェブ掲載のみ)(フランス語)), 2020/9
- 鈴木聖子 「フランスにおける日本関連の録音資料」公益財団法人サントリー文化財団・アステイオン編集委員会『アステイオン』92, CCC メディアハウス, pp. 130-137, 2020/6
- 鈴木聖子(Web 雑誌、インタビュー)「革新を続けて“伝統”を守る、雅楽の研究者」『アネモメトリ』89, 京都芸術大学(<https://magazine.air-u.kyoto-art.ac.jp/kaze/8182/> (ウェブ掲載のみ)), 2020/4

6-4. 口頭発表

- Suzuki, Seiko, “« La représentation du gagaku des années 1970 au XXIe siècle »(1970年代から21世紀までの雅楽の表象)”, 14e Colloque de la SFEJ, SFEJ(フランス日本学会), オルレアン大学(フランス)、ハイブリッド, 2021/12
- 鈴木聖子 「« Réflexion ethnographique sur l’authenticité du gagaku traditionnel hors de l’Agence impériale : à travers la mesure pour le shō dans l’Ensemble Gagaku gōyū-kai »(宮内庁楽部の外部における伝統的な雅楽のオーセンティシティについての民族誌的考察：雅楽道友会の笙の拍子を通して)」国際研究プロジェクト Sheng ! l’orgue à bouche(笙！マウスオルガン), フランス国立音楽音響研究所 IRCAM(イルカム), フランス国立音楽音響研究所 IRCAM(イルカム)ハイブリッド, 2021/6
- 鈴木聖子 「ラジオ番組と映画音声ガイドの制作を通じた日本語学習～普遍性と多様性をつなぐ授業デザイン～」フランス日本語教師会 AEJF 第17回国際シンポジウム, フランス日本語教師会 AEJF, パリ大学(オンライン), 2021/6
- Suzuki, Seiko, “Marginality and Performing Arts: Listening to Striptease on the Record”, Rethinking Borders through Music:Online

Symposium, EU マリーキュリー研究資金、ハダスフィールド大学、大阪大学大学院音楽学研究室, ハダスフィールド大学(英国) オンライン, 2021/3

鈴木聖子 「「ベートーヴェン人生劇場残侠篇」(1970)の歴史的意義—『題名のない音楽会』における日本の伝統的な音楽・芸能の役割—」第 71 回全国大会, 日本音楽学会, 武蔵野音楽大学, 2020/11

鈴木聖子 「レコード上のサウンドスケープ:小沢昭一『日本の放浪芸』における音の記憶の再現とその意義」2020 年度秋季研究発表会, 日本サウンドスケープ協会, オンライン, 2020/11

鈴木聖子 「ラジオ番組と映画音声ガイドの制作を通じた日本語学習」第 17 回フランス日本語教育シンポジウム, AEJF(フランス日本語教師会), パリ大学(フランス), 2020/6

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

鈴木聖子 大阪大学賞若手教員部門, 大阪大学, 2020/11

鈴木聖子 第 41 回サントリー学芸賞(芸術・文学部門), 公益財団法人サントリー文化財団, 2019/12

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2020 年度～2021 年度、研究活動スタート支援、代表者:鈴木聖子

課題番号: 20K21931

研究題目:小沢昭一における音楽芸能の正統性の概念の研究:LP 作品集『日本の放浪芸』を中心に

研究経費:2020 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

2021 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

研究の目的:

現行の無形文化財保護制度は、音楽芸能の指定の際に正統な「わざ」の担い手を認定するため、その認定から外れた担い手に配慮が行われにくいという問題がある。申請者はこれまで、こうした保護制度の正統性の概念に影響を与えた、20 世紀前半の日本音楽研究の知の形成過程を明らかにしてきた。

本研究では座標軸を戦後に置き、こうした保護制度に異を唱えた小沢昭一の LP レコード集『ドキュメント 日本の放浪芸』(1971-1977)を分析する。約 90 種にのぼる稀少な音楽芸能を収集したこの LP 作品における音楽芸能の正統性の概念を明らかにすることで、当時の保護制度の受容・限界・可能性を理解し、今後の保護制度の在り方を再考する。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学文学会・助教委員(芸術編), 2020 年 4 月～2022 年 3 月

フランス日本研究学会・評議委員, 2017 年 12 月～2020 年 12 月

7. 山崎 達哉 特任助教

1980 年生。2015 年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。2015 年、大阪大学大学院文学研究科特任研究員。2019 年、同特任助教。専攻:芸能史/アートマネジメント。

7-1. 論文

なし

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

なし

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

7-7-1. 2020年度～2021年度、5：その他補助金、助成金獲得者：山崎達哉

助成金名：大学における文化芸術推進事業

研究題目：「微しの上を鳥が飛ぶ II—文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム」

助成団体名：文化庁

助成金額：2020年度 直接経費 1,540,000円

2021年度 直接経費 2,000,000円

研究の目的：

演劇、音楽、美術など多岐にわたる芸術や文化の諸理論、また諸相に具体的に触れることで、アートを展開する場や共同体の特性に応じて臨機応変に対応する実践的な「アート・プラクシス」能力を養う。今日のアート・マネジメント人材に求められる、様々な課題への注意深いまなざし、その課題に向けたアートによる探求の試みを実践していける人を育成する。

2021年度には3年目の最終年度であり、受講生自ら企画し、実施する事業をプログラムの核に据えて実施した。

7-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-26 文学環境論

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：金水 敏、三谷 研爾、石割 隆喜

准教授：鈴木 暁世

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
5	0	0	0	1	0

※うち留学生1名、社会人学生0名

3. 修了生(2020年度～2021年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2020	2
2021	2
計	4

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

文学環境論コースでは、広い視野を持った研究を求めて、日本文学・東洋文学から欧米文学にわたる文学世界を広く研究領域とし、作品とそれを取り巻く外界（環境）との関わりを多角的に捉え、文学に対する根源的な問いを試みていくことをめざしている。そのために、教育においては、文学テキストの読解力、文学環境論にかかわる研究理論についての理解力、研究分野における基本的文献の分析力の増進を目標とした。同時にまた、高度専門職業人の養成のための基礎教育を充実させることを目標とした。

2. 研究

本コースの研究は、多岐にわたる。一つの時代・地域のあり方や社会通念と文学作品との関係、異文化交流や他言語との接触、サブカルチャーの研究など、テーマが多く、領域横断的なアプローチや新しい研究理論も必要となり、翻訳も研究の一方法となる。そのような文学環境論のディシプリンの確立をめざして、各方面で研究活動を積極的に進めていくことを目標とした。また、科研費等の外部資金の獲得をめざし、努力すること、大学院生については個々の研究課題に

かりと取り組み、着実に進めていくこと、研究室態勢としても、設備・備品の充実と、研究環境の維持・改善に努めること、などを目標とした。

3. 社会連携

本コースは、今日的知見と広範な素養を修得し、ジャーナリズム・マスコミ・教職関係等での活動をはじめ、国際的環境において活躍できる高度な専門的職業人の養成をめざしている。国際化し、情報化していく現代社会について、またさまざまな問題を孕んで多様化していく現代文化について、視野の拡大や知識の拡充に努め、具体的には、翻訳や出版についての実際に触れ、実践を試みて、専門的な知識や知見を増強することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

日本語・英語・ドイツ語文献を中心に読解力と分析力の基礎学力を鍛えるトレーニングを行い、それらの諸力を増進させることになりの進歩が見られた。修士論文の作成についても、主指導教員のみならず全教員による集団指導体制で充実した指導と助言を行うことができた。その結果、2020年度は2名、2021年度も2名が修士論文を提出した。在籍中の院生に対しても、今後の修士論文の作成に向けて同様の体制で指導を行なった。2020年度は韓国からの留学生が院生として在籍し、2021年度は中国からの留学生2名が研究生として在籍するなど、研究活動の活性化に貢献し、広く日本と海外の文学を研究領域とすることの実が挙げた。両年度末ともに修士論文を発表する会をハイブリッド形式により公開で催し、成果を国境を超えて共有するとともに、在籍中の院生ならびに進学予定の学部生や留学生に経験に基づくアドバイスを与える貴重な場となった。2020年度には鈴木暁世准教授が新たに着任し、コースの指導体制がより充実したものとなった。同年度末で平田由美教授が定年退職となった。2021年度末には金水敏教授が定年退職となった。

2. 研究

教員は、活発な研究活動を行い、著作、論文、翻訳などの刊行・出版等の点数は多数にのぼる。また、学会や各種研究会への参加等にも積極的に取り組んだ。院生は、2020年度には2名の修了生を出し、M1の2名を含めて、それぞれの研究テーマについての研鑽に努めた。2021年度には2名の修了生を出し、M1の3名と研究生2名も含め、やはりそれぞれの研究テーマについての研鑽に努めた。研究室の設備・備品についても、着実に充実してきており、研究環境もコース全体の活気も高い。

3. 社会連携

教育においては、所属院生が2021年3月開催の第3回大阪大学大学院文学研究科若手研究者フォーラムで発表し、要旨集に要旨が掲載されるなど、専門的な知識を社会に対して主体的に活用するための力の涵養が進んだ。教員による国内外の学術講演や一般に向けた講演会等への参加も積極的に行われた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

成果としては、それぞれの研究能力の向上があり、研究自体にも高い評価が得られている。2020年度に提出された修士論文は、日本人学生1名と留学生1名、2021年度に提出された修士論文は日本人学生2名によるもの。いずれも充実した個性的な研究である。2020年度に修士論文を提出した日本人学生は、修士論文をもとに第3回大阪大学大学院文学研究科若手研究者フォーラムで口頭発表したばかりでなく(要旨集に要旨も掲載)、修了後社会人となってからそれを『待兼山論叢 文化動態論篇』第55号(2021)に論文として発表した。留学生は入学後の日本語能力の著しい向上のみならず、研究にも高い評価が得られた。在学中の院生は授業等での熱心な取り組みだけではなく、学外の研究活動にも参加し、

着実に力を伸ばした。2021年度の研究生2名は留学生で、日本の近代文学を研究対象とし、日本語能力を向上させ、将来の研究に向かう準備を整え、専門的研究の基礎となる読解力・理解力・分析力などが着実に向上し、日本人院生とオンラインで交流するとともに机を並べながら本格的な日本近現代文学の研究に着手した。同時に、日本人院生も日本文学を研究する留学生から大いに刺激を受け、伝統的に国際色豊かな研究室の雰囲気は新型コロナウイルス感染症拡大という困難な状況にありながらも引き続き院生に好影響を与えていると言える。2020年度末および2021年度末ともに、修士論文執筆のノウハウを含めた成果ならびに就職活動情報を進学予定の学部生をも含め共有するための修士論文発表会を公開で開催することができた。2019年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった同会をハイブリッド形式で開催できたことは、新たな時代に適応した教育のあり方を実践できたという点で、大きな意味を持つものとなった。総じて目標の達成は実現できたと評価する。

2. 研究

教員の論文発表や学術書の刊行、国内外における学会、シンポジウム、ワークショップへの参加などを通じた研究成果が目標どおりに上がっている。大学院生も、第3回大阪大学大学院文学研究科若手研究者フォーラムで発表し、要旨集に要旨が掲載されるばかりでなく、修了後に『待兼山論叢 文化動態論篇』第55号(2021)に論文が掲載されるなど、研究の成果が上がっている。目標の達成は実現できたと評価する。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	1(1)
2021	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
計	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	1(1)	2(2)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	0	0	0	0	1	1
2021	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	1	1

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2020年度】

片井優花「砂漠と内面—カーリン・ボイエ『カロカイン』における「有機的なもの」の萌芽—」『大阪大学大学院文学研究科若手研究者フォーラム要旨集』第3号, pp. 54–57, 査読有, 2021/2/22

【2021年度】

片井優花(修了生)「砂漠と内面—カーリン・ボイエ『カロカイン』における「有機的なもの」の萌芽—」『待兼山論叢 文化動態論篇』第55号, pp. 43–64, 査読有, 2021/12/25

(2)口頭発表

【2020年度】

片井優花「砂漠と内面—カーリン・ボイエ『カロカイン』における「有機的なもの」の萌芽—」, 第3回大阪大学大学院文学研究科若手研究者フォーラム, オンライン, 2021/3/13

【2021年度】

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

3. 大学院生等の留学

2020年度 0名

2021年度 0名

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2020年度～2021年度の大学院修士課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3名

2020年度: 1名 2021年度: 2名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 3名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度: 0名 2021年度: 0名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

なし

7. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 平田 由美 教授

1956年生。大阪外国語大学外国語学研究科修士課程日本語学専攻修了。博士(文学)(京都大学)。京都大学人文科学研究所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授(2021年3月定年

退職)。専攻：日本文学・文化研究／ジェンダー研究

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平田由美 女性史青山なを賞, 東京女子大学女性学研究所, 2000/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 三谷 研爾 教授

1961年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士（文学、大阪大学）。大阪府立大学助手、講師、大阪大学准教授をへて2008年4月から現職。専攻：ドイツ、オーストリア文学および文化研究

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

三谷研爾 「床の間からテーブルへ」『懐徳』90, pp. 2-4, 2022/1

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本オーストリア文学会・学会賞選考委員, 2017年5月～2020年4月

日本オーストリア文学会・阪神地区幹事, 2015年5月～現在に至る

関西チェコ/スロバキア協会・会長, 2009年4月～現在に至る

大阪大学ドイツ文学会・会長, 2008年1月～現在に至る

3. 金水 敏 教授

1956年生。1982年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学。博士(文学)(大阪大学、2006年)。東京大学助手、神戸大学教養部講師、大阪女子大学助教授、神戸大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。(2022年3月定年退職)
専攻：国語学／言語学

3-1. 論文

金水敏 「ボライトネスとキャラクター」『敬語の文法と語用論』開拓社, pp. 342-358, 2022/3

金水敏 「村上春樹と関西方言について ―遠心的／求心的な移動とポリフォニー―」『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書』5, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 79-90, 2022/3

金水敏 「《キャラクター》と《人格》の観点からフィクションを読む―『海辺のカフカ』を例として―」『国語と国文学』99-1, 明治書院, pp. 3-19, 2022/1

金水敏 「《キャラクター》と《人格》について」『キャラクターの大衆文化 伝承・芸能・世界』KADOKAWA, pp. 31-54, 2021/11

金水敏 「ポピュラーカルチャーのことば」『日本語学』40-1, 明治書院, pp. 4-13, 2021/3

金水敏 「近・現代小説の片仮名の用法一斑―村上春樹『海辺のカフカ』を中心に―」『日本語文字論の挑戦―表記・文字・文献を考えるための17章―』勉誠出版, pp. 26-58, 2021/3

金水敏 「第15章 事態把握と受動文」岸本英樹・于康(編)『日語語法研究(上)』外語教学与研究出版社, pp. 546-558, 2021/1

金水敏, 劉 翔(共著)「中国・抗日作品のメディアミックスと日本人表象―『鶏毛信』を例に―」秦かおり・佐藤彰・岡本能里子(編)『メディアとことば』(メディアとことば研究会), ひつじ書房, pp. 98-116, 2020/11

金水敏 「村上春樹と関西方言について―遠心的／求心的な移動とポリフォニー―」中村三春(監修)・曾秋桂(編集)『村上春樹における移動』(村上春樹研究センター), 淡江大学出版中心, pp. 23-40, 2020/7

3-2. 著書

金水敏(編)『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(5)』科学研究費助成事業「役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究」, 86p., 2022/3

金水敏(編)『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(4)』科学研究費助成事業「役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究」, 95p., pp. 79-90, 2021/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 金水敏 「役割語で読み解く CM キャラクター」第 13 回 “今”を映す時代劇 CM』『宣伝会議』966, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2022/3
- 金水敏 「巻頭言 No. 166「新入社員のみなさんへ／言葉の“資産”を増やそう」』『TOYRO BUSINESS』196, 自然総研, pp. 1-1, 2022/3
- 金水敏 「疑問氷解」『毎日小学生新聞』毎日新聞, pp. 2-2, 2022/2
- 金水敏 「役割語で読み解く CM キャラクター」第 12 回 日本語の関節をはずす「カップヌードル」の CM』『宣伝会議』965, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2022/2
- 金水敏 「役割語で読み解く CM キャラクター」第 10 回 「はまい」「レモい」形容詞を作り出す広告』『宣伝会議』963, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/12
- 金水敏 「役割語で読み解く CM キャラクター」第 11 回 CMに見る動物のこことば』『宣伝会議』964, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/12
- 金水敏 「役割語で読み解く CM キャラクター」第 9 回 権力者語としての〈男ことば〉』『宣伝会議』962, 宣伝会議オンライン, pp. 167-167, 2021/11
- 金水敏 「とことん調査隊」『日本経済新聞』日本経済新聞, pp. 9-9, 2021/10
- 金水敏 「役割語で読み解く CM キャラクター」第 8 回 ビジネス界を覆う雲』『宣伝会議』961, 宣伝会議オンライン, pp. 199-199, 2021/10
- 金水敏 「明日への LESSON」『朝日新聞』朝日新聞, pp. 23-23, 2021/9
- 金水敏 「役割語で読み解く CM キャラクター」第 7 回 「UQ モバイル」三姉妹「だぞっ」の研究』『宣伝会議』960, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/9
- 金水敏 「役割語で読み解く CM キャラクター」第 6 回 キムタクの「現場感」を生むことば』『宣伝会議』959, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/8
- 金水敏 「ジブリを語る」『中日新聞』中日新聞, pp. 25-25, 2021/7
- 金水敏 「役割語で読み解く CM キャラクター」第 5 回 CM における宇宙人と宇宙人語』『宣伝会議』958, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/7
- 金水敏 「役割語で読み解く CM キャラクター」第 4 回 関西弁 CM のメリットとリスク』『宣伝会議』957, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/6
- 金水敏 「現代に生きる文語」『AJALT』44, 公益社団法人国際日本語普及協会, pp. 17-21, 2021/6
- 金水敏 「役割語で読み解く CM キャラクター」第 3 回 三太郎の言語は“子ども”語』『宣伝会議』956, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/5
- 金水敏 「関西弁とオノマトペ」『TOYRO CULTURE』171, 自然総研, pp. 9-19, 2021/5
- 金水敏(インタビューを構成) 「先生教えて 研究っておもしろい!」第 26 回「役割語」って知ってる?』『関塾タイムス』45-4, 関塾, pp. 20-21, 2021/4
- 金水敏 「役割語で読み解く CM キャラクター」第 2 回 アルムおんじの“チャライ”キャラ』『宣伝会議』955, 宣伝会議オンライン, pp. 159-159, 2021/4

3-4. 口頭発表

- 金水敏 「言語行為と日本語のモダリティ、構文の間の関連性について」大阪大学国語国文学会総会, 大阪大学国語国文学会, オンライン, 2022/1
- 金水敏 「翻訳におけるジェンダー・バイアスを克服することは可能か」日本通訳翻訳学会関東支部例会, 日本通訳翻訳学会関東支部, オンライン, 2022/1
- 金水敏 「フィクションにおけるキャラクターと言語について」駿河台大学総合研究所シンポジウム, 駿河台大学総合研究所, 駿河台大学、ハイブリッド, 2021/11

- 金水敏 「《人格》、《キャラクター》と“靈的事象” —『千と千尋の神隠し』『海辺のカフカ』を例に —」役割語研究会, 科学研究費助成事業「役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究」(研究代表者:金水 敏), オンライン, 2021/9
- 金水敏 「キャラクターを翻訳する—村上春樹作品を中心に—」日本通訳翻訳フォーラム 2021, 日本会議通訳者協会 (JACI), オンライン, 2021/8
- 金水敏 「村上春樹の小説における《人格》と《キャラクター》の逸脱—『騎士団長殺し』とその翻訳を中心に—」第 10 回村上春樹国際シンポジウム「村上春樹文学における「逸脱」」, 村上春樹研究センター, 淡江大学、ハイブリッド, 2021/6
- 金水敏 「日本語「ノダ文」の情報構造」関西言語学会 第 46 回大会, 関西言語学会, オンライン, 2021/6
- 金水敏 「Speech Style of the Commendatore in Haruki Murakami's Killing Commendatore and its English Translation」Japanese Language in Fiction, Japanese Studies Centre seminar, Monash University, Monash University, オンライン, 2021/5
- 劉 翔, 金水敏 「中国・抗日作品のメディアミックスと日本人表象—『鶏毛信』のさらなる発展もふまえて—」メディアとことば研究会, メディアとことば研究会, オンライン, 2021/3
- 金水敏 「キャラクターと「人格」について—主にテキストにおける—」役割語研究会:役割語研究会, 科学研究費助成事業「役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究」(研究代表者:金水 敏), オンライン, 2020/9

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 金水敏 第25回新村出賞, 新村出版記念財団, 2006/11
- 原口裕, 南出康世, 金水敏 豊田賞, 日本英学史学会, 1992/10
- 金水敏, 田窪行則 日本認知科学会論文賞, 日本認知科学会, 1991/7

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2019 年度～2021 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:金水敏

課題番号:19K00574

研究題目:役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究

研究経費:2020 年度	直接経費	600,000 円	間接経費	180,000 円
2021 年度	直接経費	600,000 円	間接経費	180,000 円

研究の目的:

本研究では、フィクションの登場人物の発話が表現する人物像に着目し、これを「役割語・キャラクター言語」の観点から分析するとともに、その翻訳の(不)可能性や代替手段について研究し、人物像の描写の観点から見た翻訳の評価について探求を進める。具体的な方法としては、村上春樹の小説作品の各国語訳と原典との対照、またさまざまな外国語作品の日本語訳の分析を語彙・文法等言語学的な観点から進めるとともに、発話以外の部分や非言語的な側面、また物語の構造とアーキタイプ等にも着目して進めていく。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

- 日本学士院・会員, 2020 年 12 月～現在に至る
- 地方裁判所委員会・委員, 2019 年 7 月～現在に至る
- 日本語学会・会長, 2018 年 6 月～2021 年 5 月
- 訓点語学会・委員, 2015 年 4 月～現在に至る
- 日本言語学会・評議員, 2015 年 4 月～現在に至る
- 日本学術会議・連携会員, 2014 年 10 月～現在に至る
- 日本語学会・評議員, 2014 年 4 月～現在に至る

関西言語学会・委員, 1996年4月～現在に至る

4. 石割 隆喜 教授

1970年生まれ。大阪外国語大学外国語学部（英語学科）卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程（英文学専攻）修了。博士（文学）（大阪大学、1999）。大阪外国語大学助手、講師、助教授、准教授、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2019年4月より現職。日本英文学会第22回新人賞(1999)。専攻：アメリカ文学

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

石割隆喜「神を見る“Star-Gazer”——*Mason and Dixon*における科学と宗教」日本英文学会関西支部第16回大会，日本英文学会関西支部，オンライン，2021/12

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

石割隆喜 日本英文学会第22回新人賞，日本英文学会，1999/12

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2020年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者：石割隆喜

課題番号：20K00415

研究題目：ピンチョン文学における科学と人文学との接点について——「見ること」という観点から

研究経費：2020年度 直接経費 400,000円 間接経費 120,000円

2021年度 直接経費 400,000円 間接経費 120,000円

研究の目的：

本研究は、トマス・ピンチョンの作品全体を内容と形式の両面において貫くテーマが「見ること」であるという観点からピンチョン文学を捉え直そうという研究の一環として、特に小説『メイスン&ディクスン』とエッセイ「ラッドライトをやってもいいのか？」を取り上げ、両作品における科学と人文学との接点に注目し、そこから、モダニズム小説の特徴とされる認識論とポストモダニズム小説の特徴とされる存在論がピンチョンにおいていかに混在し、せめぎ合っているかを明らかにしようとするものである。『メイスン&ディクスン』では観測する星の運行の背後に神を見る18世紀の科学者、「ラッドライトをやってもいいのか？」では産業革命を苦難として主観的に経験する側の視点からの「二つの文化」論への応答という形で、両作品において「見ること」を通じて科学(天文学と産業革命)と人文学(宗教と心の哲学)が接点をもっていると考えられ、この点を検証してゆく。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会関西支部・大会準備委員, 2021年6月～2021年10月
日本アメリカ文学会関西支部・大会運営委員, 2019年4月～現在に至る
日本アメリカ文学会関西支部・評議員, 2011年4月～現在に至る

5. 鈴木 暁世 准教授

1977年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。大阪大学文学研究科助教、V&A(ロンドン)客員研究員、福岡女子大学専任講師、金沢大学准教授を経て、2020年4月より現職。専攻：日本近代文学、比較文学

5-1. 論文

鈴木暁世「戦間・戦時期日本におけるアイルランド文学の受容とナショナリズム—農民文学運動と W. B. イェイツ表象の変容—」『待兼山論叢』54, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 33-63, 2021/3

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

鈴木暁世(書評)「中田睦美著『芥川龍之介の文学と〈噂〉の女たち 秀しげ子を中心に』」中田睦美著『日本近代文学』(日本近代文学会), 102, pp. 130-133, 2020/5

5-4. 口頭発表

鈴木暁世「近代日本における「ケルト」表象の問題—ラフカディオ・ハーンと「国民性」をめぐって—」日本比較文学会関西支部例会, 日本比較文学会, オンライン開催, 2021/4

鈴木暁世「英国怪奇幻想ミステリと近代日本文学 — A. ブラックウッドと芥川龍之介、西條八十を中心に —」第17回第二次怪異怪談研究会, 怪異怪談研究会, オンライン開催, 2021/3

鈴木暁世「戦時下日本の国策とアイルランド文学—「英学史」の再検討に向けて—」シンポジウム「越境する美術、変容する文化」, 阪大比較文学会, JSPS 科研費(18K00314), 大阪大学(オンライン), 2021/1

鈴木暁世“Women’s Suffrage Movement or Japanese Propaganda?: Performance of Japanese Drama in Early 20th Century Britain” GLOBAL JAPANESE STUDIES RESEARCH WORKSHOP, 大阪大学「グローバル・ジャパン・スタディーズ」プログラム, 大阪大学(ハイブリッド), 2021/1

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2018年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:鈴木暁世
課題番号: 18K00314

研究題目:戦中戦後期農民文学の展開と変容の研究—アイルランド文学と東アジアとの関係を軸に

研究経費:2020年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円
2021年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究課題の目的は、昭和戦中戦後期における農民文学の特色と問題点、同時代の状況と関わり合っていく文学者及び文学の様態を、アイルランド文学の東アジアにおける受容とその意味付けの変容に着目し、比較する事によって明らかにすることである。

土地、国家、民族を問題とする際に、戦中戦後を通して重要な参照項であったアイルランド文学の受容と変容を手がかりに、近代日本の農民文学の特色を明らかにしたい。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本文学協会・委員, 2021年1月～現在に至る

日本アイルランド協会・理事、編集委員長, 2020年4月～現在に至る

日本近代文学会・運営委員、評議員, 2020年2月～現在に至る

日本比較文学会関西支部・幹事, 2020年1月～現在に至る

金沢大学国語国文学会・理事, 2014年4月～現在に至る

2-27 言語生態論

I. 組織

1. 教員(2022年3月末)

教授 4 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：田野村忠温、神山 孝夫、渋谷 勝己、岡田 禎之

2. 在学生(2021年5月)

2021年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
2	0	0	0	0	0

※うち留学生0名、社会人学生0名

3. 修了生(2020年度～2021年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2020	1
2021	1
計	2

II. 掲げた目標(2020年度～2021年度)

1. 教育

従来の方法にとらわれない柔軟な姿勢で、より広い総合的な見地から言語を見る素地を養うべく、4名の教員が個々に担当する講義および演習等をおとして、言語や言語が伝える情報の実態を言語生成や変化、言語の比較対照、言語データの数量的把握などのさまざまな観点から総合的に分析するための基礎的な知識を身につけさせることを目標とした。

2. 研究

院生各自が既存の枠組みにこだわらず独自に研究課題を設定して、4名の教員とコースに在籍する院生の全員が出席する演習において研究発表を行い、さまざまな議論を交わすなかで、従来の言語研究の成果に立脚しつつ、新たな分析方法を模索して言語を分析するための実践的な研究能力を身につけることを目標とした。

3. 社会連携

研究者を養成するばかりでなく、実際に言語教育に携わっている学校教員、新聞・雑誌、出版・宣伝広告等に関わっている社会人を高度専門職業人として養成し、その結果を社会に還元することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2020年度～2021年度)

1. 教育

院生は各自の関心に従い、教員が担当する言語生成論、言語接触論、言語変化論、言語分析論、比較言語学の講義および演習を選択履修し、各自の研究のための基礎を養った。

2. 研究

院生は各自の関心に従い、課題を独自に設定し、必ずしも既存の枠組みにとらわれない独自の方法で研究を進めた。その成果を教員と院生の全員が出席する演習において順次発表し、さまざまな議論を交わすなかで修士論文作成の準備を進めた。

3. 社会連携

特筆すべき活動はなかった。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2020年度～2021年度)

1. 教育

学生は各自の関心に従い、4名の教員が個々に担当する講義および演習を履修して、言語や言語が伝える情報の実態を言語生成や変化、言語の比較対照、言語データの数量的把握などのさまざまな観点から総合的に分析するための基礎的な知識を身につけた。よって掲げた目標はほぼ達成されたと考える。

2. 研究

院生各自は既存の枠組みにとらわれずに、自由に実践的な課題を設定し、4名の教員とコースに在籍する院生の全員が出席する演習において研究発表を行い、さまざまな議論を交わすなかで、従来の言語研究の考え方に立脚しつつ、新たな分析方法を模索した。よって掲げた目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

特筆すべき活動はなかった。

Ⅴ. 基本情報(2020年度～2021年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2020	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2021	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2020	0	0	0	0	0	0
2021	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

なし

(2)口頭発表

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

(受賞者の氏名、賞の名前、授賞団体名、年度等を記入してください。)

なし

3. 大学院生等の留学

2020年度 0名

2021年度 0名

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2020年度～2021年度の大学院修士課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2020年度：1名 2021年度：0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 1名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2020年度：0名 2021年度：0名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

なし

7. 教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 田野村 忠温 教授

1958年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学（言語学専攻）。文学修士（京都大学、1984）。奈良大学文学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、助教教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：言語学・日本語学

1-1. 論文

- 田野村忠温 「日本語の漢語の文法的特異性とその中国語への影響—「設計」の近現代語史—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』62, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 127-172, 2022/3
- 田野村忠温 「「接種」の語史—一種痘関連用語の生成と消長—」『阪大日本語研究』34, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 27-45, 2022/2
- 田野村忠温 「音訳語における口偏の機能について—口偏蔑視表示説の検討—」『或問』40, pp. 13-26, 2021/12
- 田野村忠温 「「化石」の成立と展開」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 四十』, 和泉書院, pp. 63-80, 2021/8
- 田野村忠温 「『啖咭喇国訳語』の編纂者と編纂過程—中国最初の英語辞典の分析—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』61, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 125-174, 2021/3
- 田野村忠温 「「啤酒」の謎の解—この不可解な名称の成立過程—」沈国威・奥村佳代子編『内田慶市教授退職記念論文集 文化交渉と言語接触』, 東方書店, pp. 165-178, 2021/2
- 田野村忠温 「音訳語「珈琲」の歴史」『阪大日本語研究』33, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 33-60, 2021/2
- 田野村忠温 「漢語複合名詞の形成と再分析—動詞-名詞型複合名詞の二義性—」『現代日本語研究』12, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室, pp. 18-37, 2020/12
- 田野村忠温 「カレーを表す中国語名称の変遷」『或問』38, pp. 15-25, 2020/12
- 田野村忠温 「北京故宫博物院蔵『華夷訳語』丁種本第1類の分析—西洋館訳語の編纂とドイツ語の名称の問題を中心に—」『待兼山論叢 文化動態論篇』54, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-32, 2020/12
- 田野村忠温 「コーヒーを表す中国語名称の変遷」『或問』37, pp. 41-60, 2020/6

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

- 田野村忠温 「意識と音訳—概念の再考と歴史—」関西大学東西学術研究所研究例会（言語交渉研究班）「荒川清秀氏追悼 近代言語接触研究シンポジウム」, 関西大学東西学術研究所（ハイブリッド）, 2022/3
- 田野村忠温 「咖喱の中文名称小史」“近代以来的西餐、洋饭书与大餐馆”工作坊, 复旦大学+关西大学（ハイブリッド）, 2021/11
- 田野村忠温 「「化石」の語史—動詞—名詞型 漢語複合名詞の形成と再分析—」東アジア文化交渉学会第14回国際学術大会, 東アジア文化交渉学会, 二松学舎大学（ハイブリッド）, 2021/5
- 田野村忠温 「「啤酒」の謎の解—この不可解な名称の成立過程—」関西大学東西学術研究所研究例会（言語交渉研究班）・国際シンポジウム「文化交渉と言語接触」, 関西大学東西学術研究所（ハイブリッド）, 2021/2
- 田野村忠温 「コーヒーを表す中国語名称の変遷—音訳語研究の新視点—」関西大学東西学術研究所研究例会（言語交渉研究班）, 関西大学東西学術研究所（ハイブリッド）, 2020/7
- 田野村忠温 「日本語における音訳と意識の特異性」東アジア文化交渉学会国際学術大会, 東アジア文化交渉学会・鄭州大学, 鄭州大学（2020/5/9~10 ウイルスのために延期・中止）, 2020/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2018年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 田野村忠温

課題番号: 18K00535

研究題目: コーパス日本語研究の高度化と多面化のための総合的研究—語史研究への応用を中心に—

研究経費: 2020年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2021年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

応募者の従来の研究を踏まえ、日本語研究の学界におけるより高度かつ多面的なコーパス利用の基盤の形成に寄与することを目的として総合的なコーパス日本語研究に取り組む。

特に大規模な近現代語コーパスの構築とそれによる近現代語史研究の高度化を重点的な課題とする。近年利用可能になってきた各種の歴史的資料や手段をうまく組み合わせて利用することによって近現代語史の記述の水準を飛躍的に高められることを、最近いくつかの事例研究を通じて明らかにした。その方向の可能性をさらに追求し、事例研究を重ねるとともに方法論の一般化、洗練を図る。

また、従来に引き続き、上記以外の新たな研究手法・領域の開拓についても模索を重ねるとともに、日本語研究の学界に対する啓発・支援活動として、コーパスに関する一般的な考察・提言や、各種コーパス関連ソフトウェアの開発・公開などにも積極的に取り組む。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 神山 孝夫 教授

1958年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。博士(文学)(東北大学)。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻: 歴史言語学、音声学、ヨーロッパ文化史

2-1. 論文

神山孝夫「英語におけるHの歴史」『英語学論説資料』52, 第1分冊 言語学英語学一般・意味論・音韻論・諸論, pp. 450-463, 2020/6/30

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

神山孝夫「スズダリ年代記 訳注[VI]」『古代ロシア研究』(日本古代ロシア研究会), 25, pp. 33-43, 2021/3

神山孝夫「Συμπόσια の思い出 — 山口 巖先生を送る —」『古代ロシア研究』(日本古代ロシア研究会), 25, pp. 17-22, 2021/3

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

神山孝夫 大阪大学共通教育賞(2008 年前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本古代ロシア研究会・理事, 2015 年 4 月～現在に至る

3. 渋谷 勝己 教授

1959 年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士(大阪大学)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授、大阪大学准教授等を経て、2009 年 4 月より現職。専攻：日本語学

3-1. 論文

渋谷勝己 「山形市方言における動詞述語の分析性と統合性」『待兼山論叢 文化動態論篇』55, 大阪大学文学研究科, pp. 1-19, 2021/12

渋谷勝己 「言語の複雑性研究の現状」『阪大社会言語学研究ノート』18, pp. 119-144, 2021/11

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渋谷勝己 「文体」「位相語」「スタイル」「母語」森山卓郎・渋谷勝己(共編著)『明解日本語学辞典』三省堂, 2020/5

3-4. 口頭発表

渋谷勝己 「言語変化と社会」第 119 回 NINJAL コロキウム, 国立国語研究所, 国立国語研究所(オンライン), 2022/1

渋谷勝己 「言語の形成過程をめぐる社会的類型化は可能か」歴史社会言語学・歴史語用論研究会第4回研究会, 歴史社会言語学・歴史語用論研究会, オンライン, 2021/3

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2019 年度～2021 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渋谷勝己

課題番号:19K00627

研究題目:複雑性を指標とする日本語諸方言の類型論的研究

研究経費:2020年度 直接経費 200,000円 間接経費 60,000円
2021年度 直接経費 100,000円 間接経費 30,000円

研究の目的:

複雑性という指標によって、日本語の諸方言を類型化することを試みる。各地方言記述の蓄積や接触言語学、文法化研究の進展をうけて、伝統方言・都市方言・新興方言それぞれの複雑度を算出するとともに、その複雑度の度合いに、その方言が使用される社会的状況との因果関係を見出せるかどうかを、異なった言語を対象とするよりも精緻なかたちで分析する。同時に、方言類型論の新たな研究領域を開拓するとともに、既存の言語観、とくに標準語を基準とみなす言語観に変更を迫ることをめざす。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語文法学会・会長, 2019年4月～2022年3月

日本語学会評議員, 2015年5月～現在に至る

日本語文法学会・評議員, 2015年4月～2021年3月

日本学術会議・連携会員, 2014年10月～2020年9月

4. 岡田 禎之 教授

1965年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程（英語学専攻）中途退学。文学博士（大阪大学、2001年）。第37回市河賞（2003年）。大阪大学助手、岡山大学講師、金沢大学助教授、神戸市外国語大学助教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2010年4月より現職。専攻：英語学

4-1. 論文

岡田禎之 「因果関係を表す接続詞に見られる等位構造」『大阪大学大学院文学研究科紀要』62, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 73-95, 2022/3

Okada, Sadayuki “Category-free Complement Selection in Causal Adjunct Phrases” *English Language and Linguistics*, 25-4, Cambridge University Press, pp. 719-741, 2021/12

岡田禎之 「Because X 構文の歴史的変遷について」『大阪大学大学院文学研究科紀要』61, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 23-47, 2021/3

4-2. 著書

岸本秀樹, 岡田禎之(共著) 『構文間の交替現象』朝倉書店, pp. 85-177, 2020/12

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

岡田禎之 10 papers selection, Annual Report of Osaka University Academic Achievement 2009-2010, Osaka University, 2010/12

岡田禎之 第37回市河賞, 財団法人語学教育研究所, 2003/10

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2018年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田禎之

課題番号:18K00646

研究題目:テキストの結束関係と語彙概念拡張

研究経費:2020年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

2021年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

語彙概念拡張が、叙述関係や修飾関係において、中心的参加者から周辺の参加者に浸透していくという意味拡張の一般的な特徴が認められるが、その一方で、このような一般化と合致しない独自の語彙概念拡張を見せる場合もある。テキスト形成レベルにおける結束関係、という捉え方を導入することによって、この例外的な事象について解決していくことができると考えられる。本研究では、様々な結束関係に認められる語彙概念拡張現象について検討していく。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英語学会・編集委員長, 2021年11月～現在に至る

日本英語学会・副編集委員長, 2019年11月～2021年10月

日本英語学会・編集委員, 2019年7月～現在に至る

日本認知言語学会・大会発表査読委員, 2019年4月～2021年3月

阪大英文学会・会長, 2018年10月～現在に至る

日本英語学会・理事, 2018年4月～2022年3月

日本英語学会・評議員, 2013年4月～現在に至る

2-28 留学生専門教育

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

留学生専門教育では、留学生の勉学・研究をサポートするために、日本語の授業やオフィスアワーを設けている。日本語の授業では、論文作成法、発表や議論の仕方などを学ぶ。とくに論理的思考の訓練に重点をおき、質を落とさずにわかりやすく文章(論文)を書けるようにすることを目指している。

教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. 鄭聖汝 講師

1957年生。神戸大学大学院文化科学研究科博士後期課程修了。博士(学術)。日本学術振興会外国人特別研究員を経て現職(2022年3月定年退職)。専攻：日韓対照言語学／類型論

1-1. 論文

鄭聖汝 「体言化と名詞句用法標識の関係—韓国語 kes の歴史的展開を中心に—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』61, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 175-209, 2021/3

鄭聖汝 「体言化と名詞句用法標識の関係—歴史的発達の観点から見た日本語の「の」と韓国語 kes の比較を通して—」『体言化理論と言語分析』大阪大学出版会, pp. 195-244, 2021/2

鄭聖汝 「韓国語の体言基盤体言化—いわゆる属格 -s の修飾用法と名詞句用法について—」『体言化理論と言語分析』大阪大学出版会, pp. 245-293, 2021/2

鄭聖汝 「韓国語における疑問文の形成と体言化—慶南方言・濟州方言の名詞述語疑問文と動詞述語疑問文を手掛かりに—」『言語研究』(日本言語学会), 157, 日本言語学会, pp. 1-36, 2020/9

1-2. 著書

Chung Sung-Yeo, 柴谷方良他(共編著),『体言化理論と言語分析』, 大阪大学出版会, pp. 1-563, 2021/2

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2017年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:鄭聖汝

課題番号:17K02681

研究題目:他動性と言語類型—実証的他動性理論の構築を目指して—

研究経費:2020年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

2021年度 直接経費 0円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究は、Hopper & Thompson (意味論的普遍仮説)ならびに池上 (認知論的類型仮説)による他動性についての二つのアプローチを融合し、他動性パラメータの適用優先順位が最適理論の手法で決められることによって、自他構文の選択が予測できる、実証的他動性理論の構築を目的とする。方法論的には、日本語・韓国語・ヒンディー語などの SOV 型と、英語・中国語・マレー語などの SVO 型言語を取り上げ、自他構文選択に関与する意図性・受影性などのパラメータについて、それぞれの優位性を測りうる実証的調査を実施して、各言語における他動性パラメータの適用優先順位を見極め、理論の構築につなげる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西言語学会・学会誌編集委員, 2014年10月～2020年4月

関西言語学会・運営委員, 2011年4月～現在に至る

2-29 国際交流センター

教員の研究活動(2020年度～2021年度の過去2年間)

1. LAMBRECHT, Nicholas Mahood 助教

1982年生。ダートマス大学人類学部卒、シカゴ大学大学院人文学部東アジア言語文化研究科博士課程修了。2015年、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科客員研究員(フルブライト)。文学博士(シカゴ大学、2019年)。2019年より現職。専攻：近現代日本文学

1-1. 論文

Nicholas M. Lambrecht, “Missing Keystones: Echoes of Empire in Kobayashi Masaru’s ‘Bridge Building’”, *International Journal of Korean History*, 27-1, pp. 75-98, 2022/2

LAMBRECHT, Nicholas Mahood 「Repatriation Literature and Decolonization in Postwar Japan」『沖縄とポスト植民地主義文学—一崎山多美と〈シマコトバ〉というバクダン』1, pp. 61-76, 2021/8

Nicholas M. Lambrecht, “Overcoming Barriers to Global Humanities Research in an Age of Immobility” 『越境文化研究イニシアティブ論集』4-1, 大阪大学文学研究科, pp. 47-50, 2021/3

1-2. 著書

LAMBRECHT, Nicholas Mahood, 蘭信三, 李洪章他 『帝国のはざまを生きる—交錯する国境、人の移動、アイデンティティ』みづき書林, pp. 331-354, 2022/3

市川遥, 葉暁瑤, LAMBRECHT, Nicholas Mahood 他 『戦後日本の傷跡』臨川書店, pp. 36-51, 2022/2

LAMBRECHT, Nicholas Mahood, 宇野田尚哉, キアラ・コマストリ他 『対抗文化史—冷戦期日本の表現と運動』大阪大学出版会, pp. 159-181, 2021/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

Nicholas M. Lambrecht, “The Curse of Letters”, English translation of 中島敦「文字禍」, *Review of Japanese Culture and Society* 32-1, pp. 251-259, 2020/12

1-4. 口頭発表

Nicholas M. Lambrecht, “Recovering the Ex-Repatriate Voice: Rethinking the Contextualizations of Muraoka Koumiko”, Association for Asian Studies Annual Conference, Association for Asian Studies, ハワイコンベンションセンター, 2022/3

Nicholas M. Lambrecht, “Contrapuntal Writing: Kobayashi Masaru’s “Bridge Building” and Japan’s Korean War”, *Cultures of Crossing: Transpacific and Inter-Asian Diaspora*, ヌタ大学, ヌタ大学(ハイブリッド), 2021/12

Nicholas M. Lambrecht, “Incubating ‘Global Japanese Studies’: Beyond the Inside/Outside Binary”, *Studying Japan: Perspectives from “Inside” and “Outside”*, ドイツ日本研究所, オンライン, 2021/9

LAMBRECHT, Nicholas Mahood 「宮尾登美子の引揚げ小説：記憶を思い起こす苦しみ」国際日本文化研究センター共同研究会：「戦後日本の傷跡」, 国際日本文化研究センター, 国際日本文化研究センター(ハイブリッド), 2021/4

Nicholas M. Lambrecht, “The Country after the Colony: Rural Japan as a Site of Return in Postwar Repatriation Literature”, Association for Asian Studies Annual Conference, Association for Asian Studies, オンライン, 2021/3

LAMBRECHT, Nicholas Mahood 「引揚げ文学と戦後日本の脱植民地化」, 沖縄とポスト植民地主義文学：一崎山多美と〈シマコトバ〉というバクダン, 東京外国語大学国際日本研究センター, 東京外国語大学(オンライン), 2021/1

LAMBRECHT, Nicholas Mahood 「COVID-19 パンデミック時代のグローバル日本学教育:GJS-ERI 設置に至るまでの取り組みから」日本研究の新展開:グローバル化時代の研究・教育を見据えて, 大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・国際日本研究コンソーシアム, 大阪大学基礎工学国際棟シグマホール, 2020/12

LAMBRECHT, Nicholas Mahood 「李恢成の初期作品を通して引揚げ文学を再考する」第54回国際研究集会:帝国のはざまを生きる—交錯する国境、人の移動、アイデンティティ, 国際日本文化研究センター, 国際日本文化研究センター, 2020/11

Nicholas M. Lambrecht, “Legacies of Resettlement in Japanese Repatriation Literature”, AAS-in-Asia Annual Conference, Association for Asian Studies, オンライン, 2020/9

LAMBRECHT, Nicholas Mahood 「李恢成と戦後引揚げ」共同研究会「帝国のはざまを生きる—帝国日本と東アジアにおける移民・旅行と文化表象」, 国際日本文化研究センター, 国際日本文化研究センター, 2020/8

Nicholas M. Lambrecht, “Stimulating Global Japanese Research Communities”, Osaka University Global Japanese Studies Research Workshop, 大阪大学大学院文学研究科, 大阪大学大学院文学研究科, 2020/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2019年度～2021年度、研究活動スタート支援、代表者:LAMBRECHT, Nicholas Mahood

課題番号:19K23041

研究題目:Research on the Memory of Repatriation in Postwar Japanese Literature: With Special Emphasis on New Developments in English-Language Studies

研究経費:2020年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2021年度 直接経費 0円 間接経費 0円

研究の目的:

Millions of repatriates (*hikiagesha*) returned to Japan after the Second World War, and many wrote about their experiences in repatriation literature (*hikiage bungaku*). As research on this literature progresses, it has become necessary to integrate the work being done in Japanese and in English. This project engages in critical analysis of repatriation literature texts in Japanese, with a focus on insights provided by English-language material not yet widely disseminated in Japan. It seeks to examine repatriation literature from a variety of regions and time periods as part of a unified whole.

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. Felipe Motta 特任助教

2020年4月より大阪大学大学院文学研究科 国際交流センター特任助教、2021年4月から大阪大学グローバルの本学拠点兼任教員。(2022年3月退職) 専攻:日本学、海外日本移民研究

2-1. 論文

MOTTA FELIPE “Japanese Studies in Brazil: History, Present, and Prospects” 『大阪大学大学院文学研究科 越境文化研究イニシアティブ論集 Anthology of Transborder Cultural Studies』4, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 17-32, 2021/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

MOTTA FELIPE 「〈日の丸の下で働きたい〉:戦前・終戦直後のブラジル日系社会の言論界における「大東亜共栄圏再移住論」の言説と南米永住論を中心に」東アジア日本研究者協議会第 5 回国際学術大会, 東アジア日本研究者協議会, 高麗大学(オンライン), 2021/11

MOTTA FELIPE 「戦前期ブラジル日系社会のエスニックメディアと聖戦の論説」京都外国語大学ラテンアメリカ研究所 第 18 回研究会, 京都外国語大学ラテンアメリカ研究所, 京都外国語大学(オンライン), 2021/10

MOTTA FELIPE “Incubating “Global Japanese Studies”: Beyond the Inside/ Outside Binary” *Studying Japan: Perspectives from “Inside” and “Outside”*, ドイツ日本研究所・大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・復旦大学, 復旦大学(オンライン), 2021/9

MOTTA FELIPE 「異境から戦争経験を語る—M. B. デ・ミランダと岸本昂一におけるナショナリズム・国家・他者—」第 42 回日本ラテンアメリカ学会定期大会, 日本ラテンアメリカ学会, オンライン開催, 2021/6

MOTTA FELIPE 「日系移民の戦争経験を勝負抗争の「脱コロナ史観」から考える (ラウンドテーブル B 「日系移民研究の拡がりの可能性—対象と枠組みの再考から)」」日本移民学会第 30/31 回年次大会, 日本移民学会, オンライン開催, 2021/6

MOTTA FELIPE 「戦争を見つめて: 日本とブラジルからの供述におけるナショナリズム・プライド・恨み」Global Japanese Research Workshop 5 月例会, 大阪大学グローバル日本学教育研究拠点, 大阪大学(オンライン), 2021/5

MOTTA FELIPE (パネリスト)「正典的テキストからポピュラーカルチャーへ—近年の日本研究における研究関心の移動からその将来を考える—」国際シンポジウム「日本研究の新展開: グローバル化時代の研究・教育を見据えて」, 大阪大学グローバル日本学教育研究拠点/大学院文学研究科・「国際日本研究」コンソーシアム共催, 大阪大学 シグマホール, 2020/12

MOTTA FELIPE 「ブラジル日系社会における歴史, 記憶, そして移民知識人」Seminário de Pesquisas em Estudos Nipo-brasileiros 日本・ブラジル研究ゼミナール, サンパウロ大学日本語学科/日本文化研究所, サンパウロ人文科学研究所共催, サンパウロ大学日本文化研究所, 2020/12

MOTTA FELIPE “Historicizing oppression: Japanese immigrant intellectuals and the memory of nationalism in 1930–1945 Brazil”, 2020 年度 国際新世代ワークショップ, 「国際日本研究」コンソーシアム・法政大学国際日本学研究所・アルザス欧州日本学研究所共催事業, アルザス欧州日本学研究所, 2020/11

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

MOTTA FELIPE 第二回 JICA 海外移住「論文」および「エッセイ・評論」懸賞論文部門【最優秀賞】「異境での戦時体験を記録して—マリオ・ポテーリョ・デ・ミランダと岸本昂一を事例に—」, 海外移住資料館, 2021/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2020 年度～2022 年度、若手研究、代表者: MOTTA FELIPE

課題番号: 30867198

研究題目: ブラジル日系社会知識人層の知的実践および言論活動の研究

研究経費: 2020 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

2021 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

研究の目的:

本研究は、1920年代から1980年代までに、ブラジル日系社会の知識実践及び言論活動を支えた日系知識人をめぐる体系的及び質的研究である。日本語を使用し、エスニック・メディアを拠点にした日系知識人がどのような問題領域を、どの媒体において、どのような思想系統の下で論じたかを究明することが本研究の目標である。なお、国際的な日本研究を目指す本研究は、単なる「日系移民の歴史」を試みるのではなく、「移民知識人」という存在を浮かび上がらせることにより、「越境」と「思想」をめぐる理論的な議論にも貢献したい。本研究では、移民の知識実践及びその言論活動の形態を取り上げ、移民の主体行為性に注目する。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. MOHAMMAD MOINUDDIN 助教

1979年生。2010年、デリー大学(インド) M.philの学位を取得。同論文の加筆修正版2012年に単著として出版。2013年、博士(文学、大阪大学)を取得。2015年、ジャワハルラル・ネルー大学(インド)、ゲスト・レクチャー。2015年12月から2018年3月、大阪大学大学院文学研究科特任助教。2019年より現職。専攻：近現代日本文学、原爆文学、ポストコロナ国際交流および国際理解。

3-1. 論文

MOHAMMAD MOINUDDIN “The Changing Dynamics in International Exchange During the Time of Halted Physical Mobility” *With Corona or Post Corona : The Opportunities and The Challenges for Virtual Learning and International Exchange*, pp. 7-13, 2021/9

3-2. 著書

MOHAMMAD MOINUDDIN, TARO MOCHIZUKI, (eds.) 『Proceedings of International Seminar 2020 With Corona or Post Corona: The Opportunities and Challenges for Virtual Learning and International Exchange』International Affairs Office, School of Letters / Graduate School of Letters, Osaka University, 2021/9 (ISBN 978-4-908326-09-7)

MOHAMMAD MOINUDDIN, TARO MOCHIZUKI (eds.), 『Coping with the “New Normal” and the Promotion of International Exchange』 International Affairs Office, School of Letters / Graduate School of Letters, Osaka University, 2021/7 (ISBN 978-4-908326-10-3)

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

MOHAMMAD MOINUDDIN 「日本文学作品のヒンディー語訳の歴史と現状と挑戦について」世界ヒンディー語の日、大阪大学外国語学部ヒンディー語専攻、大阪大学、箕面船場キャンパス, 2022/1

MOHAMMAD MOINUDDIN 「戦前の日本女性像のインドへの伝播—ムハンマド・バドルル・イスラム・ファズリーを中心に—」阪大比較文学会シンポジウム、大阪大学大学院文学研究科 比較文学研究室、大阪大学大学院文学研究科よりオンライン発信, 2021/10

MOHAMMAD MOINUDDIN, “Reimagining Transnational Student Mobility in the Post-COVID-19 Era”, AAS-in-Asia 2020, The Association for Asian Studies (AAS), 神戸(オンライン実施), 2020/9

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

Mohammad Moinuddin 平成 23 年度 人権作品賞, 作文・詩の部 茨木市人権啓発推進協議会, 2011/12

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

編集後記

本巻『年報 2022』は、大阪大学大学院文学研究科および大阪大学文学部の2年間（2020・2021年度）の教育・研究活動を記録したものである。構成は基本的に従前どおりで、前半が研究科・学部の基礎データと教育研究プログラムの紹介、後半では専門分野・コースごとの活動報告となっている。

前半の第1部では、個別の専門分野を超えた教育・研究活動を記録しており、とりわけ大学院・学部学生の受入状況などの基礎的なデータ、研究推進室、評価・広報室、教育支援室、国際連携室という4室の活動報告のほか、国際連携・分野横断的な教育・研究を促進するために実施されているプログラムの概要や活動状況などについて記している。継続プログラムとしては、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）、大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」、国際共同研究「グローバルヒストリー」、アート・プラクシス人材育成プログラム「傲の上を鳥が飛ぶ」、国際共同研究力向上推進プログラムなどがある。これらから、専門分野を超えた様々な教育・研究の試みが活発におこなわれている状況が確認できるだろう。

一方、後半の第2部では、これも従前どおり、専門分野・コースごとの概要報告のほか、所属の大学院生などの業績も網羅し、教員に個別に入力いただいた教員基礎データに基づいて個人別の業績も集成している。

本巻収録のデータ収集に当たっては、関係の教職員にはご多忙の中で多くのご協力をいただいた。データの統合・整理から刊行に至るまでの膨大な作業は、評価・広報室の諸氏、とりわけ事務補佐員の多大な尽力による。末筆ながら、皆様にあらためて心より感謝したい。

なお、文学研究科は2022年度から新たな人文学研究科に改組されたことから、この体裁の年報は2021年度までを扱う本巻にて最終となる。今後は、人文学研究科としての年報などに取りまとめられていくことになる。新たな年報は、いまだ詳細を検討中ではあるが、教員業績のデータについては科学技術振興機構による [researchmap](#) によりデータを参照していただくことも模索する予定であり、中期計画の法人評価の基礎となる現況調査表などにあわせた情報の収集と提示なども考慮することとしている。新研究科の年報は従前とは異なるコンテンツになるかもしれないが、今後はそれらを活用いただくとともに、新たな人文学研究科の活動に対しても今後とも変わらぬご理解とご支援を賜りたい。

2023年3月

高橋照彦、河上麻由子、西井 奨

大阪大学大学院文学研究科
年報 2022
教育・研究(2020-2021年度)

2023年3月発行

編集 大阪大学大学院文学研究科／評価・広報室
発行 大阪大学大学院文学研究科
〒560-8532 豊中市待兼山町 1-5
TEL:FAX 06-6850-5107(評価・広報室)
